

京田遺跡 4 区

一般国道 9 号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

出雲市教育委員会

序

現在、一般国道9号の出雲市知井宮町から湖陵町三部間は、通過交通と生活交通が混在し、幹線道路として支障をきたしているうえに代替路線がなく、日常生活や地域経済に多大な影響を及ぼしています。そのため、中国地方整備局松江国道事務所では、緊急時の代替路線の確保、地域経済の振興、救急医療の向上および生活圏域の連携を促進することを目的として、出雲・湖陵道路を2008年度から事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ、関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、道路建設地内にある遺跡について島根県教育委員会および出雲市の協力のもとに発掘調査を実施しました。

本報告書は、2016年度に実施した出雲市湖陵町地内に所在する京田遺跡4区の調査成果をまとめたものです。今回の調査では縄文時代後期中葉の集落跡や、遠隔地との交流を示す遺物などが見つかり、当時の人々の生活を考えるうえで貴重な成果となりました。

本報告書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術ならびに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後に、当所の道路整備事業にご理解をいただき、本埋蔵文化財発掘調査および調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係機関の皆様に深く感謝いたします。

2019年3月

国土交通省中国地方整備局
松江国道事務所長 鈴木 祥弘

序

本書は、出雲市が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて2016年度に実施した、一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果を取りまとめたものです。

本報告書で報告する京田遺跡4区では、縄文時代後期中葉の竪穴建物跡や配石土坑など、当時の集落の一端を示す遺構が確認できました。また土器や石器などの遺物も多く出土し、京田遺跡が所在する出雲平野の南西部には当時大きな集落が営まれていたことが分かりました。出土した遺物の特徴の一つに、東日本や九州地方など他の地域から持ち込まれた、あるいは影響を受けた土器がまとまって存在することがあげられます。当時の人々が遠く離れた地域との交流を盛んに行っていたことを具体的に示す重要な発見となりました。

本報告書がこの地域の歴史を解明するための基礎資料として寄与するものとなることを願います。

また、出雲市としては、この貴重な文化財を後世に伝えるために調査・保護・活用に尽力してまいります。

最後になりましたが、発掘調査および本書の作成にあたり、多大なるご理解とご協力をいただきました地元住民の皆様、調査指導者・助言者および関係機関をはじめ、各方面の方々に心からお礼申しあげます。

2019年3月

出雲市教育委員会
教育長 横野 信幸

例　言

1. 本書は、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所の委託を受けて、出雲市が2016（平成28）年度に実施した、一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う京田遺跡4区（島根県出雲市湖陵町常楽寺464-2ほか）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査面積は255m²（4-1区：220m²、4-2区：35m²）である。

2. 本書で報告する事業年度は下記のとおりである。

2016（平成28）年度　発掘調査

2017（平成29）年度　整理作業

2018（平成30）年度　整理作業・報告書作成

3. 発掘調査および整理作業・報告書作成は以下の体制で実施した。

〈2016（平成28）年度〉発掘調査

事務局　花谷　浩（出雲市市民文化部　学芸調整官）

佐藤隆夫（　同　　文化財課　課長）

穴道年弘（　同　　課長補佐）

原　俊二（　同　　係長）

江角　健（　同　　主任）

調査員　幡中光輔（　同　　主事）

臨時職員　今若豊実、小松原智明、山岡洋介

室内整理作業員　鶴口令子、前島浩子、吉村香織

〈2017（平成29）年度〉整理作業

事務局　佐藤隆夫（出雲市市民文化部　文化財課　課長）

穴道年弘（　同　　課長補佐）

原　俊二（　同　　係長）

調査員　幡中光輔（　同　　主事）

臨時職員　小松原智明、吉村香織

室内整理作業員　荒木恵理子、妹尾順子、中島和恵、吹野初子、前島浩子

〈2018（平成30）年度〉整理作業・報告書作成

事務局　木村　亨（出雲市市民文化部　次長兼文化財課課長）

景山真二（　同　　文化財課　課長補佐）

原　俊二（　同　　係長）

調査員　幡中光輔（　同　　主事）

臨時職員　長岡伸幸、吉村香織

室内整理作業員　荒木恵理子、妹尾順子、中島和恵、吹野初子、前島浩子

4. 発掘調査および報告書作成にあたって、次の方々および機関からご指導、ご協力をいただいた。ご芳名を列記し、謝意を捧げる（敬称略、所属は当時）。
- 島根県教育文化財課、島根県教育庁古代文化センター、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
石丸恵利子（広島大学総合博物館）、稻田陽介（島根県立古代出雲歴史博物館）、大塚達朗（南山大学人文学部）、岡田憲一（奈良県立橿原考古学研究所）、長田友也（中部大学）、小泉翔太（京都大学大学院文学研究科）、鯉淵義紀（相模原市教育委員会）、高野紗奈江（京都大学大学院文学研究科）、千葉 豊（京都大学文化財総合研究センター）、中村耕作（國學院大學桜木短期大学）、中村唯史（島根県立三瓶自然館）、西尾克己（大田市教育委員会）、濱田竜彦（鳥取県埋蔵文化財センター）、福永将大（九州大学大学院社会統合科学府）、守岡正司（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）、守岡利栄（島根県教育文化財課）、柳浦俊一（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）、渡邊貞幸（出雲弥生の森博物館）
5. 報告書作成にあたって、下記の方から玉稿を賜った（敬称略、順不同）。
- 大塚達朗（南山大学人文学部）、南 武志（近畿大学理工学部）、高橋和也（理化学研究所）、
石丸恵利子（広島大学総合博物館）、濱田竜彦（鳥取県埋蔵文化財センター）、
上山晶子（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）、渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）
6. 本書の編集は、職員の協力を得て幡中が行った。各章の執筆者については、文末及び下記に記す。
第1～4章・第6章第1～3節・第7章（幡中）、第5章第1節（石丸）、第5章第2節・第3節（渡辺）、第5章第4節（上山）、第5章第5節（南・高橋）、第5章第6節（濱田）、第6章第4節（大塚）
7. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については、株式会社トーワエンジニアリングに委託した。
8. 本調査で実施した写真測量とオルソ画像作成は、コンピュータ・システム株式会社に委託した。
9. 調査区全体の俯瞰写真の撮影は、株式会社トーワエンジニアリングおよび株式会社テクノシステムに委託して実施した。
10. 本調査の自然科学分析において、動物遺存体の同定は石丸恵利子氏に依頼した。赤色顔料の蛍光X線分析は上山晶子氏、硫黄同位体分析については南武志氏および高橋和也氏に分析を依頼した。また種実圧痕調査は濱田竜彦氏に依頼して実施した。年代測定、花粉分析および樹種同定・種実同定については、文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した。
11. 本書に掲載した遺構・遺物の実測図は、調査員および臨時職員が作成した。
12. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は、職員の協力を得て幡中が撮影した。なお、自然科学分析に係る炭化物付着土器・種実・樹種写真（第5章第2節）および土器胎土の鉱物写真（第5章第3節）は渡辺正巳氏、種実圧痕調査写真（第5章第6節）は濱田竜彦氏がそれぞれ撮影した。
13. 本書で用いた測地系は世界測地系第Ⅲ系であり、方位は座標北、レベルは海拔高を示す。
14. 本書に掲載した遺物、実測図及び写真は、出雲市教育委員会で保管している。
15. 本書で用いた遺構の略号は以下のとおりである。

SI- 竪穴建物跡 ST- 配石土坑 SK- 土坑 SP- 柱穴 SS- 集石遺構 NR- 自然流路

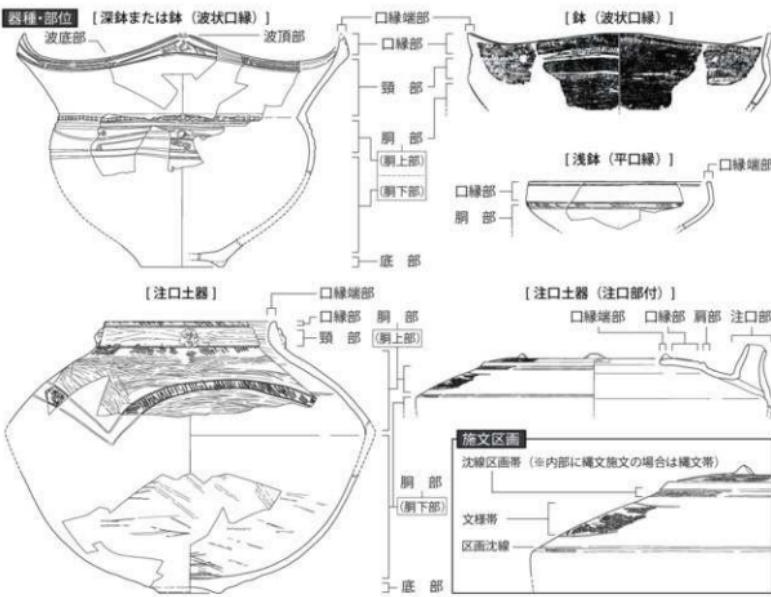
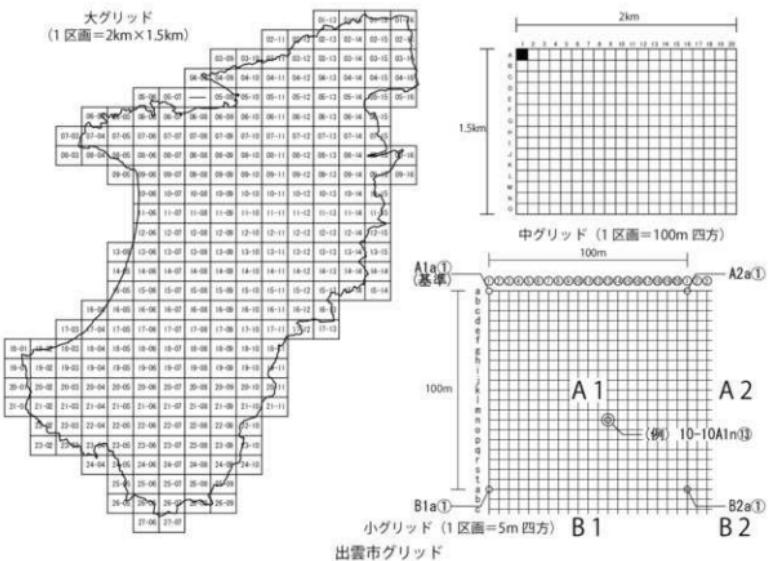
凡 例

1. 本書では、世界測地系第Ⅲ系および出雲市都市計画図に基づいて作成された出雲市グリッド（大グリッド・中グリッド・小グリッド）を参照し（iv頁上図）、調査グリッドを設定して調査区（4-1区）の遺物取り上げを行った。
2. 本書における土器・石器の型式および器種認定は、下記の書籍・論考・報告書を参照した。
 - (1) 繩文土器

岡田憲一・深井明比古 1998「佃遺跡出土繩文土器の編年—特に元住吉山式土器について—」『佃遺跡 第2分冊(自然科学・総括編)』兵庫県文化財調査報告書第176冊 兵庫県教育委員会 139～163頁
小泉翔太 2014「北部地区、南部地区出土土器の位置づけ」「一乗寺向畠町遺跡出土 繩文時代資料—考察編一』京都大学大学院文学研究科考古学研究室 33～50頁
小林達雄編 2008『總覽繩文土器』アム・プロモーション
千葉 豊 2001「沖合遺跡出土繩文後期土器の編年的意義—崎ヶ鼻式と「椎現山式」のあいだ—」『沖合遺跡』主要地方道川本波多線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 舞鶴町教育委員会 306～318頁
千葉 豊編 2010『西日本の繩文土器 後期』真陽社
千葉 豊 2014「比叡山西南麓遺跡群における繩文後期土器の様相」「一乗寺向畠町遺跡出土 繩文時代資料—考察編一』京都大学大学院文学研究科考古学研究室 23～32頁
柳浦俊一 2017『山陰地方における繩文文化の研究』雄山閣
 - (2) 繩文石器

上峯篤史 2013「石器」「一乗寺向畠町遺跡出土 繩文時代資料—資料編一』京都大学大学院文学研究科考古学研究室 92～113頁
上峯篤史 2018『繩文石器 その視角と方法』京都大学学術出版会
 - (3) 弥生土器・土師器・須恵器など

赤澤秀則編 1992「南講武草田遺跡」講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 鹿島町教育委員会
池淵俊一編 2008「九景川遺跡」一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 島根県教育委員会
廣江耕史 2003「出雲における中世須恵器について」「中世須恵器の生産と流通—山陰地方を中心にして—」第3回山陰中世土器検討会資料集 山陰中世土器検討会 114～134頁
松本岩雄・正岡睦大編 1994「弥生土器の様式と編年」山陽・山陰編』木耳社
3. 本書における繩文土器の器種は概ね、深鉢（器高≥口径）、鉢（口径>器高>口径1/2）、浅鉢（口径1/2≥器高）の基準で分類した。器種・部位および施文区画の名称は、iv頁下図に沿って記述した。



目 次

第1章 調査に至る経緯と経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の経過.....	2
第2章 遺跡の位置と環境.....	7
第1節 地理的環境.....	7
第2節 歴史的環境.....	10
第3章 4-1区の調査成果.....	19
第1節 4-1区の調査の概要.....	19
第2節 4-1区の土層堆積状況.....	21
第3節 4-1区の遺構と遺構内出土遺物.....	25
第4節 4-1区の遺構外出土遺物.....	47
第5節 小結.....	96
第4章 4-2区の調査成果.....	111
第1節 4-2区の調査の概要・土層堆積状況・出土遺物.....	111
第2節 小結.....	113
第5章 自然科学分析.....	115
第1節 京田遺跡4区の動物遺存体と縄文時代後晩期の動物資源利用.....	115
第2節 京田遺跡4区のAMS年代測定、花粉分析、樹種・種実同定.....	131
第3節 京田遺跡4区出土土器の胎土分析.....	149
第4節 京田遺跡3・4区出土赤色顔料付着遺物の蛍光X線分析.....	153
第5節 京田遺跡4区出土遺物付着水銀朱の硫黄同位体分析.....	165
第6節 京田遺跡4区出土縄文土器の種実圧痕調査.....	169
第6章 総 括.....	173
第1節 京田遺跡4区の遺物包含層の空間的・定量的分析.....	173
第2節 京田遺跡からみた縄文時代後期中葉の集落構造.....	178
第3節 山陰中央部における縄文時代後期中葉の土器編年の再検討.....	191
第4節 京田遺跡4区出土の異形土器および京田遺跡の評価について.....	213
第7章 結 語.....	223

図 版

報告書抄録

挿図目次

第1図	出雲湖陵道路改築工事に係る遺跡位置図	2	第42図	12層出土有文土器(5)	59
第2図	京田遺跡の範囲と調査区配置図	3	第43図	12層出土有文土器(6)	60
第3図	京田遺跡3・4区全体図・遺構配置図	4	第44図	12層出土有文土器(7)	64
第4図	発掘調査と現地調査指導・視察の様子	5	第45図	12層出土有文土器(8)	65
第5図	遺物調査指導の様子	6	第46図	12層出土有文土器(9)	66
第6図	縄文時代の島根半島の古地形変遷	8	第47図	21層上面(遺構面)および 21・22層出土有文土器	67
第7図	京田遺跡と出雲平野周辺的主要遺跡	11	第48図	包含層以外の出土有文土器	68
第8図	京田遺跡と周辺的主要遺跡	16	第49図	5・6・11・12層出土無文土器	70
第9図	4-1区グリッド配置図	19	第50図	12層出土無文土器	71
第10図	4-1区遺構全体図	20	第51図	12層・21層上面(遺構面)および 21・22層と包含層以外の出土無文土器	72
第11図	4-1区土層図	22	第52図	6・11・12層出土底部	74
第12図	4-1区土層オルソ画像	23	第53図	12・21・22層出土底部	75
第13図	豎穴建物跡SI1601および 柱穴SP1601～1605	26	第54図	3～5層出土石器	78
第14図	豎穴建物跡SI1601・柱穴SP1601 出土遺物(1)	27	第55図	5層出土石器	79
第15図	豎穴建物跡SI1601・柱穴SP1605 出土遺物(2)	28	第56図	6層出土石器	80
第16図	豎穴建物跡SI1602	29	第57図	11層出土石器(1)	82
第17図	豎穴建物跡SI1602出土遺物	30	第58図	11層出土石器(2)	83
第18図	配石土坑ST1601・異形土器出土状況	31	第59図	12層出土石器(1)	85
第19図	配石土坑ST1601出土遺物(1)	32	第60図	12層出土石器(2)	86
第20図	配石土坑ST1601出土遺物(2)	33	第61図	12層出土石器(3)	87
第21図	土坑SK1601・1602	34	第62図	12層出土石器(4)	89
第22図	土坑SK1601出土遺物	35	第63図	12層出土石器(5)	90
第23図	土坑SK1602出土遺物	36	第64図	12層出土石器(6)	91
第24図	土坑SK1603	37	第65図	12層出土石器(7)	92
第25図	土坑SK1603出土遺物	38	第66図	12層出土石器(8)	93
第26図	土坑SK1604・1605および 柱穴SP1606・1607	40	第67図	13・21・22層出土石器	94
第27図	土坑土坑SK1604・1605出土遺物	40	第68図	3区のSK05・SK06および 3区と4-1区の遺構時期・土層図	97
第28図	集石遺構SS1601～1603	41	第69図	無文土器の口縁部・口縁端部形態分類	102
第29図	集石遺構SS1601～1603出土遺物	42	第70図	底部形態分類	104
第30図	自然流路NR1601	43	第71図	4-2区全体図・土層図・ 土層オルソ画像	112
第31図	自然流路NR1601出土遺物(1)	44	第72図	4-2区出土遺物	113
第32図	自然流路NR1601出土遺物(2)	45	第73図	奥ノ谷遺跡・御領田遺跡の 土層堆積状況	114
第33図	縄文時代以外の出土遺物	47	第74図	4-1区平面図(試料採取地点)	131
第34図	5層出土有文土器	48	第75図	北壁土層No.1地点(試料採取層準)	131
第35図	6層出土有文土器	49	第76図	北壁土層No.2地点(試料採取層準)	132
第36図	11層出土有文土器(1)	52	第77図	No.3地点(自然流路NR1601拡大図)	132
第37図	11層出土有文土器(2)	53	第78図	No.4地点(豎穴建物跡SI1601土層図)	132
第38図	12層出土有文土器(1)	54	第79図	炭化物付着土器	132
第39図	12層出土有文土器(2)	55	第80図	暦年較正結果(1)	134
第40図	12層出土有文土器(3)	57	第81図	暦年較正結果(2)	135
第41図	12層出土有文土器(4)	58			

第 82 図	暦年較値の分布	136	第 103 図	御領田遺跡と京田遺跡の位置関係と 居住関連遺構	179
第 83 図	「Contiguous：各試料連続」モデル による暦年較正値	136	第 104 図	出雲市域および志津見・尾原地区的 縄文時代遺跡分布	181
第 84 図	「Overlapping：各試料オーバーラップ」 モデルによる暦年較正値	137	第 105 図	志津見・尾原地区と京田遺跡の中後葉 から後・晚期の遺跡消長と遺構一覧	183
第 85 図	No.1 地点の花粉ダイアグラム	138	第 86 図	No.2 地点の花粉ダイアグラム	139
第 87 図	樹種写真	147	第 88 図	種実写真	148
第 89 図	穀物写真	152	第 90 図	4-1 区蛍光 X 線分析スペクトル (1) - 157	157
第 91 図	4-1 区蛍光 X 線分析スペクトル (2) - 158	158	第 92 図	4-1 区蛍光 X 線分析スペクトル (3) - 159	159
第 93 図	4-1 区蛍光 X 線分析スペクトル (4) - 160	160	第 94 図	4-1 区蛍光 X 線分析スペクトル (5) - 161	161
第 95 図	4-1 区蛍光 X 線分析スペクトル (6) - 162	162	第 96 図	3 区蛍光 X 線分析スペクトル	163
第 97 図	測定 No. 6・7・17・20・21 の 分析箇所	164	第 98 図	出土遺物の朱採取部分 (分析 No. 1 ~ 4) - 166	166
第 99 図	4-1 区出土縄文土器と圧痕	170	第 100 図	4-1 区グリッド別の出土土器の 空間分布	174
第 101 図	4-1 区土壤ブロックサンプル別の 動物遺存体の出土量	176	第 102 図	湖陵町周辺の縄文時代遺跡と 遺跡消長	178
			第 103 図	御領田遺跡と京田遺跡の位置関係と 居住関連遺構	179
			第 104 図	出雲市域および志津見・尾原地区的 縄文時代遺跡分布	181
			第 105 図	志津見・尾原地区と京田遺跡の中後葉 から後・晚期の遺跡消長と遺構一覧	183
			第 106 図	志津見・尾原地区的後期中葉から 後葉の居住関連遺構	184
			第 107 図	志津見・尾原地区的後期中葉の 葬送・祭祀関連遺構	184
			第 108 図	下山遺跡にみる墓域形成の 時期的変遷	185
			第 109 図	原田遺跡における長期間継続する 墓域の展開	186
			第 110 図	3 区と 4-1 区の遺構出土土器および 4-1 区 21 層・21 層上面出土土器	193
			第 111 図	京田遺跡周辺の主な後期中葉の遺跡	198
			第 112 図	古屋敷遺跡 B 区・沖丈遺跡・茶屋谷遺跡 原田遺跡 2 区出土土器	199
			第 113 図	万場 II 遺跡・森遺跡出土土器	201
			第 114 図	京田 I ~ 7 期の土器編年試案	204
			第 115 図	権現山洞窟遺跡出土土器	208
			第 116 図	山内清男の縄紋土器の意味するもの	215
			第 117 図	特定の仕組みの中での手本一写し	215
			第 118 図	京田遺跡 4 区配石土坑出土の異形土器	218
			第 119 図	安行 2 式土器の例	219
			第 120 図	体部ソロバン玉状の例	219

挿表目次

第 1 表	歴史的環境の参考文献一覧	17・18	第 17 表	試料間の相関係数	150
第 2 表	3 区と 4-1 区の土層対応関係	24	第 18 表	クラスター分析結果	151
第 3 表	4-1 区出土土器一覧	98	第 19 表	4-1 区赤色顔料付着遺物の 蛍光 X 線分析結果	154 ~ 156
第 4 表	3 区と 4-1 区の無文土器の 口縁部・口縁端部形態・器面調整一覧	102	第 20 表	3 区赤色顔料付着遺物の 蛍光 X 線分析結果	163
第 5 表	3 区と 4-1 区の底部形態と底径一覧	104	第 21 表	分析対象の出土遺物付着一覧	166
第 6 表	4-1 区出土石器一覧	106	第 22 表	硫黄同位体分析結果一覧	167
第 7 表	4-1 区出土動物遺存体種名一覧	116	第 23 表	レプリカ法調査対象試料と同定結果	169
第 8 表	4-1 区出土の地点別動物遺存体	119	第 24 表	3 区と 4-1 区における有文土器の 施文手法の時期的変遷	196
第 9 表	出雲地域周辺における 縄文遺跡出土動物遺存体	120	第 25 表	京田 I ~ 7 期と各地の土器型式の 併行関係	209
第 10 表	4-1 区出土動物遺存体観察表	122 ~ 130	第 26 表	各地の土器型式の併行関係	224
第 11 表	年代測定結果	133	第 27 表	4-1 区出土土器観察表	229 ~ 238
第 12 表	微化石概査結果	137	第 28 表	4-2 区出土土器観察表	238
第 13 表	花粉化石組成表	140	第 29 表	4-1 区出土土器観察表	239 ~ 242
第 14 表	樹種同定結果	141			
第 15 表	種実同定結果	141			
第 16 表	胎生分析結果一覧	150			

図版目次

- | | |
|---------------------|-------------------------------|
| 図版 1 遺跡遠景 | 図版 26 遺構外出土土器 (4) |
| 図版 2 調査区全景 | 図版 27 遺構外出土土器 (5) |
| 図版 3 4-1 区 | 図版 28 遺構外出土土器 (6) |
| 図版 4 主な遺構 (1) | 図版 29 遺構外出土土器 (7) |
| 図版 5 主な遺構 (2) | 図版 30 遺構外出土土器 (8) |
| 図版 6 主な出土遺物 | 図版 31 遺構外出土土器 (9) |
| 図版 7 外来系土器・赤色顔料付着遺物 | 図版 32 遺構外出土土器 (10) |
| 図版 8 異形土器 | 図版 33 遺構外出土土器 (11) |
| 図版 9 壓穴建物跡 (1) | 図版 34 遺構外出土土器 (12) |
| 図版 10 壓穴建物跡 (2) | 図版 35 遺構外出土土器 (13) |
| 図版 11 配石土坑 | 図版 36 遺構外出土土器 (14) |
| 図版 12 土坑 | 図版 37 遺構外出土土器 (15) |
| 図版 13 土坑・集石遺構 | 図版 38 遺構外出土土器 (16) |
| 図版 14 柱穴 | 図版 39 遺構外出土石器 (1) |
| 図版 15 自然流路 | 図版 40 遺構外出土石器 (2) |
| 図版 16 4-2 区 | 図版 41 遺構外出土石器 (3) |
| 図版 17 遺構内出土土器 (1) | 図版 42 遺構外出土石器 (4) |
| 図版 18 遺構内出土土器 (2) | 図版 43 遺構外出土石器 (5) |
| 図版 19 遺構内出土土器 (3) | 図版 44 遺構外出土石器 (6) |
| 図版 20 遺構内出土土器 (4) | 図版 45 遺構外出土石器 (7) |
| 図版 21 遺構内出土石器 (1) | 図版 46 遺構外出土石器 (8) |
| 図版 22 遺構内出土石器 (2) | 図版 47 遺構外出土石器 (9) |
| 図版 23 遺構外出土土器 (1) | 図版 48 遺構外出土石器 (10)・縄文土器文様 (1) |
| 図版 24 遺構外出土土器 (2) | 図版 49 縄文土器文様 (2) |
| 図版 25 遺構外出土土器 (3) | 図版 50 動物遺存体 |

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本報告書は 2016（平成 28）年度一般国道 9 号（出雲湖陵道路）の改築工事の予定地内に所在する京田遺跡（4 区）の発掘調査報告書である。京田遺跡は過去に発掘調査が実施されたことはないが、弥生土器や土師器、須恵器などの遺物が知られていた（野坂編 2000）。

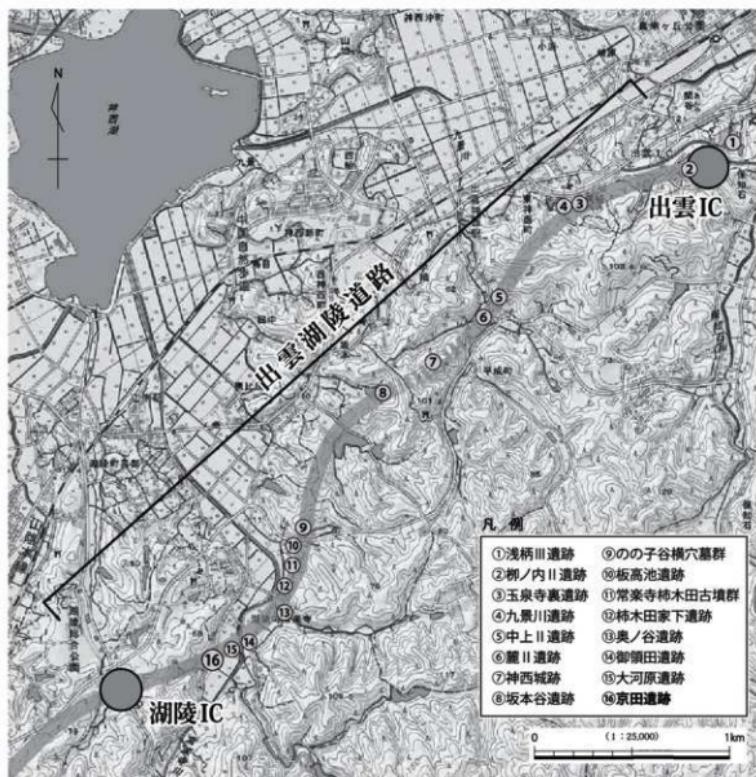
出雲湖陵道路の工事に伴う発掘調査は国土交通省中国地方整備局松江国道事務所（以下、国土交通省）の依頼を受けて 2014（平成 26）年度から本線部分を島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文センター）が実施しているが（第 1 図）⁽¹⁾、国土交通省、島根県教育庁文化財課、県埋文センターと出雲市文化財課（以下、市文化財課）の協議で、当工事予定地内で市に移管予定の側道部分については市文化財課が調査対応をする方向で進めることになった。京田遺跡の工事予定地内には、県埋文センターが担当する本線部分の調査区（1～3 区）および市文化財課が発掘調査を実施して本書で報告する調査区（4 区）が設定された（第 2 図）。

2014（平成 26）年 6 月に常楽寺川以西から湖陵 IC までの本線部分およびその周辺に位置する丘陵の分布調査が県埋文センターと市文化財課によって実施され、試掘調査が必要な箇所（要注意箇所）を 3 箇所確認している。その後に県埋文センターと市文化財課が協議し、市文化財課が要注意箇所 3 箇所の試掘調査を行うことになった。市文化財課では 10 月から 12 月にかけて本線の要注意箇所 3 箇所の試掘調査を実施したが、遺構・遺物は確認できなかった。

2015（平成 27）年 5 月には県埋文センターが 1 区周辺の試掘調査を行い、10 月から 12 月にかけて 1 区の本調査を実施しており、弥生時代から中・近世までの遺構や遺物が確認されている。また同時に 10 月から 12 月に県埋文センターによって 3・4 区周辺の試掘調査が行われており、そのうち 5・6 トレンチから縄文時代後期の遺物を含む包含層が確認されたため、本線部分のほか市文化財課が対応する側道部分の本調査についても実施する必要性が生じた。なお、工事に伴い個人の農業用倉庫が京田遺跡の包蔵地内に移転するため、市文化財課では 12 月に移転先の試掘調査を実施した。調査の結果、農業用倉庫予定地からは遺構や遺物は確認できなかったが、隣接する育苗ハウス予定地で地表から 50cm 程度下で柱穴 2 基や土師器の細片を確認した。

2016（平成 28）年 6 月に京田遺跡の西側に位置する丘陵斜面と谷部の試掘調査が県埋文センターによって行われたが、遺構・遺物の存在は認められていない。一方で 3 区については、県埋文センターが 5 月から 7 月まで本調査を実施し、縄文時代の後期中葉の遺構が確認され、同時期の遺物も多数出土した。本線の側道部分の 4 区は、市文化財課が 12 月から翌年の 3 月まで発掘調査を実施した。

京田遺跡に関する文化財保護法上の手続きは、2015（平成 27）年 9 月 18 日付け国中松調設第 65 号にて文化財保護法第 94 条第 1 項に基づく通知が国土交通省から島根県教育委員会教育長宛てに提出され、試掘調査の結果を踏まえて発掘調査の実施を島根県教育委員会が 2015（平成 27）年 9 月



第1図 出雲湖陵道路改築工事に係る遺跡位置図

18日付け島教文財第120号で勧告した。4区は、2016(平成28)年9月20日に国土交通省から発掘調査の委託を受け、2016(平成28)年12月1日付け文財第681号にて出雲市教育委員会教育長から島根県教育委員会教育長宛てに第99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、市文化財課が調査を実施した。調査終了後の遺跡の取り扱いは記録保存に留めることになり、2017(平成29)年3月31日付け文財第1001号にて松江国道事務所長宛てに完了報告を提出した。

第2節 調査の経過

1 発掘調査

市文化財課が調査を実施した京田遺跡4区は出雲湖陵道路本線の側道部分であり、3区(調査面積126m²)と近接する位置にある。発掘調査の実施に先立ち、県埋文センターが実施した3・4区周辺



第2図 京田遺跡の範囲と調査区配置図

の試掘調査結果および3区の発掘調査の成果⁽²⁾を参照し、調査区の位置や調査方針を決定した。4区は水田の用水路を挟んで東側（4-1区）と西側（4-2区）に分かれる。調査面積は4-1区が220m²、4-2区が35m²で合計255m²である。

4-1区の現況は水田で、3区に隣接している。そのため当初から4-1区でも遺構が確認される可能性や、多量の縄文時代遺物の出土が予想された。一方で、4-2区は水田から一段高い畠地であった。試掘調査では縄文時代の遺物は確認されなかったが、下層から近世・近代の陶器がわずかに出土し、遺構が存在する可能性があるため、今回の調査対象地となっている。これらの状況を勘案して縄文時代の遺構や遺物が確認される可能性が高い4-1区を優先的に調査し、その後に4-2区で遺構・遺物の有無を確認する方針で進めることとした。

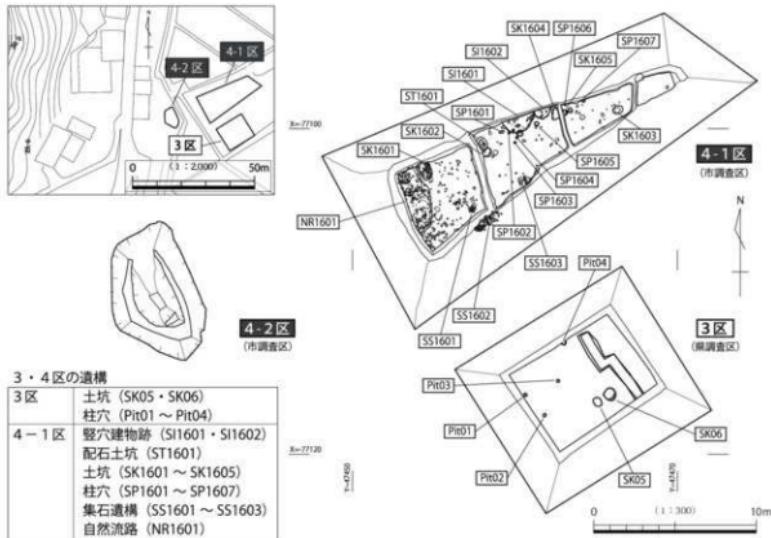
4-1区の調査は2016（平成28）年12月12日から本格的に開始したが、調査前写真の撮影や調査区の設定、現場事務所やベルトコンベアおよび発掘調査用具の資材搬入などの作業を事前に進めた。14日からバックホーによる掘削を開始し、表土などの掘削のほか、安全勾配を保った法面整形を進めた。19日からは作業員による掘削を始め、人力による法面整形を行っている。また現地が水田で掘削に伴って周辺からの用水が多量に流れ込むため、水中ポンプを用いて常時排水するとともに、人力掘削で調査区内の四方の壁面沿いに排水用の溝を設け、調査面への水の進入を最小限に抑えた。20日には県埋文センターの守岡正司氏が来られ、3区の土堆堆積状況との比較検討を実施した。

翌年1月5日からは人力による包含層の掘削を開始した。第3章第1節で詳述するが、4-1区は

世界測地系第III系の座標に基づき、1区画2.5m四方の調査グリッド（1～50グリッド）を設定して包含層出土の遺物を取り上げている。また、13日から遺構面の直上に堆積する縄文時代の遺物包含層（12層）の内容物を詳しく分析するため、別々の3箇所の調査グリッドをさらに25cmメッシュで小区画に細分し、包含層を1辺25cmの立方体の土壌ブロックサンプルとして採取した⁽³⁾。また調査区の南側の一部で遺構面に到達したが、當時用水の流れ込みがあり、順次排水をしながら包含層の掘削を行い、排水状況が整った場所から徐々に遺構面の精査を進めることとした。その後、1月下旬から包含層の掘削とともに、確認した遺構の掘り下げや精査、および記録作業を進めた。

2月上旬に包含層の掘削が終了し、その後の現場作業は4-1区で確認した遺構（第3図）の精査が中心となった（第4図上）。2月13日に土層の堆積状況などについて、島根県立三瓶自然館の中村唯史氏の調査指導を受け（第4図左下）、16日には視察に来られた守岡正司氏と土層の堆積状況や遺構の残存状況を検討した。2月中旬に4-1区の遺構検出がほぼ完了し、2月20日から4-2区の調査を開始した。20日に調査前写真を撮影し、21日からバックホーで掘り下げを行い、適宜人力による精査を実施したが、遺構は確認できなかったため、土層の堆積状況の記録作業を中心と調査を進めた。21日には文化財調査コンサルタント株式会社の渡辺正巳氏の協力を得て、4-1区で年代測定試料の現地採取を実施した。24日に県埋文センターの柳浦俊一氏が現地視察に来られ、検出した遺構や出土遺物について指導・助言をいただいた（第4図右下）。

3月上旬には遺構の掘削がほぼ終了し、2日に島根県教育庁文化財課の守岡利栄氏に遺跡の取り扱いを中心とする調査指導を受けた。3日および6日に遺構の完堀写真や調査区の全体を撮影し、7日



第3図 京田遺跡3・4区全体図・遺構配置図



第4図 発掘調査と現地調査指導・視察の様子

にラジコンヘリおよびドローンによる調査区全景の空中撮影を行った。また8日には調査区全体の3次元測量、9日に写真測量を実施している。写真測量終了後に重機による4-2区の埋め戻しを開始し、翌10日に完了した。13日に4-1区の遺構や土層の記録作業を行い、渡辺氏の協力を得て花粉分析の試料採取を実施した。14日には記録作業を進め、調査が終了した4-1区の一部の埋め戻しを開始した。15日に全ての現地記録作業が完了し、15日から17日にかけて全体の埋め戻しを行った。21日からは現場の片付け、撤去作業を進め、24日に発掘調査の現場作業が終了した。

2 整理作業および普及・公開活動

2017（平成29）年4月から出土遺物の整理作業を開始した。遺物の水洗や注記、土器の接合や復元作業を実施し、図化作業を進めた。また現地で記録した資料の整理や検討も同時に行っている。

出土遺物の性格を明らかにするため、各方面の研究者による専門的見地からの調査指導を実施した。5月15日には広島大学総合博物館の石丸恵利子氏から出土した動物遺存体について指導を受けた。7月18日には島根県古代出雲歴史博物館の稲田陽介氏に石器の器種分類や整理方法などの指導・助言を受けた。8月8日に京都大学文化財総合研究センターの千葉豊氏、京都大学大学院文学研究科の高野紗奈江氏から出土した縄文土器の土器型式やその特徴について指導・助言を受け、守岡正司氏、柳浦氏とともに3区出土土器との比較検討を実施した。縄文土器の器面に残る種子圧痕については、12月12日に鳥取県埋蔵文化財センターの濱田竜彦氏から調査指導を受けた。12月14日には奈良県立橿原考古学研究所の岡田憲一氏に縄文土器の近畿地方との比較を中心に調査指導を受け、3区・

4-1区から出土した縄文土器全体の地域的・年代的位置付けについて教示を得た（第5図左）。

整理作業と同時に、多くの方々に調査成果を広く周知するため、2017（平成29）年9月30日に「出雲に生きた縄文人の足跡一出雲市湖陵町京田遺跡の発掘調査成果から広がる縄文世界一」と題した市民向け講座を出雲弥生の森博物館で開催し、調査成果を具体的に解説した。また、12月6日から翌年の5月14日にかけて京田遺跡発掘調査の速報展示「出雲平野に眠る縄文時代の大集落 京田遺跡発掘調査速報展」を出雲弥生の森博物館にて開催した。その他、湖陵コミュニティセンターや常楽寺地区の文化祭への出展、小学校での歴史学習などを実施し、普及・公開活動に努めた。

2018（平成30）年度は引き続き整理作業を実施し、図面のトレース作業や図版作成・割付作業などを主に実施した。また京田遺跡を特徴づける外来系土器の評価のために5月11日から13日かけて調査指導会を開催し、2017（平成29）年度に指導を受けた千葉氏、岡田氏のほか、南山大学の大塚達朗氏をはじめ、中部大学の長田友也氏、國學院大學桟木短期大学の中村耕作氏、相模原市教育委員会の鯉渕義紀氏、京都大学大学院文学研究科の小泉翔太氏や高野氏、九州大学大学院地球社会統合科学府の福永将大氏といった方々に指導や助言をいただきながら、具体的に議論を深めた（第5図右）。なお、石器の石材について7月19日に中村唯史氏から調査指導を受けた。11月2日・3日には大塚氏と千葉氏に外来系土器を含めた縄文土器全体の総合的な評価についての調査指導を受けた。その後、引き続き遺物の整理・記録や写真撮影などの作業を進めた。

（輔中光輔）

註

（1）第1～3図の一部は、県埋文センターの守岡正司氏から提供を受けた京田遺跡3区の報告書（守岡編2017）

掲載図データをもとに作成した。

（2）守岡正司氏から3区の土層の堆積状況や造構の検出状況などをご教示いただいた。

（3）採取した包含層の土壤サンプルは、出雲弥生の森博物館で水洗フライ選別法を実施し、内容物を確認して分類

した。詳細は第6章第1節で報告する。

参考文献

野坂俊之編 2000『湖陵町遺跡地図』湖陵町教育委員会

守岡正司編 2017『の子谷横穴墓群 京田遺跡3区』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財

発掘調査報告書3 島根県教育委員会



第5図 遺物調査指導の様子

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

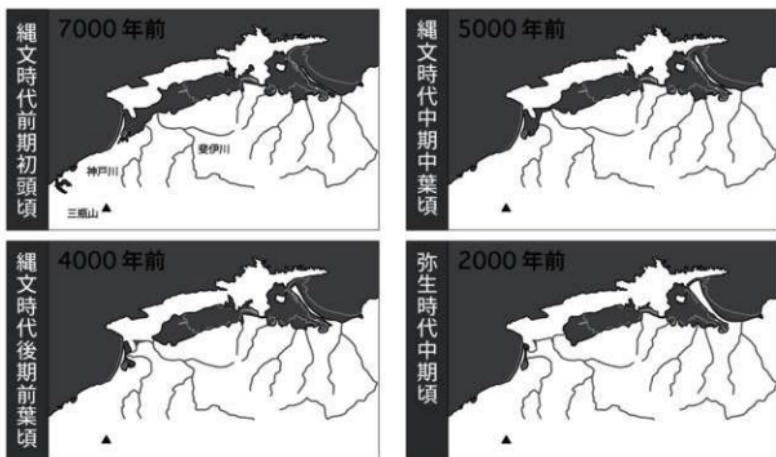
京田遺跡は島根県出雲市湖陵町常楽寺に所在し、南から神西湖に注ぐ常楽寺川により開析された谷部にあって常楽寺川西岸の丘陵縁辺部に位置する。神西湖は出雲平野の西部にある潟湖で、奈良時代の733年に奏上された『出雲国風土記』には「神門水海」として記され、当時の斐伊川や神戸川が注ぎ込む水域の残存部にあたる。この水域は河川による堆積作用や気候変動に伴う環境変化、差海川の開削などの人工的な改変の影響を受けて多様な変遷をたどり、今日に至る。ここでは、京田遺跡が所在する湖陵町周辺の地理的環境について、出雲平野や神西湖の変遷を踏まえてまとめてみたい⁽¹⁾。

中国地方山陰側は、新生代の古第三紀頃(6,000万年～4,000万年前頃)、日本海が形成される以前には大陸の一部であった。この頃、花崗岩マグマの発生によって生成・噴出した花崗岩や流紋岩・デイサイトが地盤となっている。その後、新第三紀中新世の初期(2,500万年前頃)から始まる大陸からの分離と日本海形成のなかで、激しい火山活動が発生し、それに起因する堆積岩類や火山岩類がその上を覆うようになった。湖陵町周辺もその影響を大きく受けしており、南部の山地や丘陵地はこの時代に形成された安山岩や火山碎屑岩、疊岩などの波多累層や大森累層で構成され、北部の低地部は砂岩や泥岩系の布志名累層からなる(三浦2000)。

その後、第四紀の更新世(約250万年～1万年前)には氷期と間氷期を繰り返し、湖陵町の海岸沿いなどには海水面の上昇に伴う礫層や、風成作用による砂丘堆積物がみられる。最終氷期(ヴュルム氷期)の最寒冷期(2万年～1万6千年前頃)になると、100m以上に及ぶ海面低下によって大幅な海退現象が生じ、島根半島と隠岐諸島が陸続きになったと考えられている(中村2009・2014)。

完新世(約1万年前以降)になると最終氷期の終焉とともに気候が急速に温暖化し、それに伴って海進が進んだ。海進は7,000年から6,000年前頃の縄文時代に極大に達した。いわゆる「縄文海進」である。島根半島でも出雲平野から現在の宍道湖周辺にかけて内湾(古宍道湖)が形成され、現在の神西湖と周辺の低地部はその一部であった。海面が最高潮に達した後は次第に低下し、斐伊川や神戸川など河川の河口部で三角州の形成が進んで徐々に沖積平野が広がる。これは島根半島が日本海の波浪と沿岸流を遮ったことにより、三角州の発達が促されたという地形的特質が大きい(中村2009)。

このような出雲平野の発達に最も大きく影響したのは三瓶山の火山活動であった。三瓶山は縄文時代に3回噴火しており、縄文時代草創期から早期における1回目の噴火(約1万2千年から1万年前頃)は大きな影響を与えたなかったが、それ以後に起きた2回の火山活動で三瓶山の麓にある神戸川に多量の火碎物が流れ込み、洪水となって下流に膨大な量の土砂をもたらした。その土砂は扇状地を急速に発達させて三角州が肥大し、現在の出雲平野の原形を生み出したと考えられる(中村2006a・2006b)。その2回の噴火時期は年代測定の結果から、縄文時代の前期後葉頃(約5,500年前)と後期前葉頃(約4,000年前)に比定できる(小林・角田2006)。この三瓶山の火山活動で出雲平野は急速に発達する(第



第6図 縄文時代の島根半島の古地形変遷（中村 2014 に加筆）

6図)。これ以降の斐伊川・神戸川における三角州の発達などの影響で内湾環境であった出雲平野の形成が進み、東側は現在の宍道湖、西側には神西湖の原形となる水域が形成されていく(林 1991)。また、両水域は火山活動による洪水堆積物に関連して海との連絡口が閉鎖され、この時期(約4,000年前)以降に淡水環境に移行したことが分かっている(山田ほか 2004, 山田・高安 2006a・2006b・2007, 中村・野坂 2006, 濑戸ほか 2012, 濑戸・岡崎 2013)。

それ以降も三角州が発達して出雲平野が拡大するなかで人々の生活は盛んになる。湖陵町周辺でも縄文時代晚期から弥生時代以降に遺跡が多く確認されるようになる。この頃(約2,000年前)には神西湖の原形となる水域は海とつながり、汽水環境が続く(山田ほか 2004, 山田・高安 2006a・2006b・2007, 濑戸・岡崎 2013)。奈良時代の『出雲国風土記』に「神門水海」として登場するが、汽水環境であった当時の様子が生息する魚類などの記述から読み取れる。

神戸川の堆積作用に伴う潮流口の閉鎖によって約1,000年前に再び淡水環境となる。中世から近世にかけては出雲地方の山間部でたら製鉄が盛んになり、砂鉄採取のための鉄穴流しが各地で行われる。鉄穴流しひには多量の土砂が伴い、それが斐伊川や神戸川に流れ込んで下流まで運ばれ、出雲平野の地形発達に影響を与えた(林 1989)。また同時に河川の氾濫や周辺の冠水状態を引き起こしていたが、神西湖では差海川が人工的に開削され(野津 1930, 池橋 2000), その結果として海とつながって汽水環境に戻り(瀬戸・岡崎 2013), 神戸川の埋積作用で水域が縮小して約300年前まではほぼ現在の神西湖の形となった(大西ほか 1990, 石原ほか 2000)。

(幡中光輔)

註

(1) 地理的環境の記述については、中村唯史氏から助言を得た。

参考文献

池橋達雄 2000 「差海川の開削」『湖陵町誌』湖陵町 466 ~ 493 頁

- 石原廣和・亀井健史・中村唯史 2000 「CNS 元素分析による出雲平野神西湖周辺の完新世堆積物の堆積環境評価とその地盤工学への応用」『応用地質』第 41 卷第 1 号 日本応用地質学会 12 ~ 23 頁
- 大西郁夫・徳岡隆夫・高安克己・石原 清・梶田秀児・日下智博・熊井克己 1990 「出雲平野西部の自然史」『山陰地域研究』第 6 号 島根大学山陰地域研究総合センター 21 ~ 34 頁
- 小林謙一・角田徳幸 2006 「三瓶火山の噴出物と縄文時代の AMS 炭素 14 年代測定」『島根考古学会誌』第 23 集 島根考古学会 43 ~ 55 頁
- 瀬戸浩二・岡崎裕子・酒井哲弥・高田裕行・山田和芳・渡辺正巳 2012 「出雲平野南西部の形成過程—神戸川河口域の古環境変遷史—」『出雲国風土記の研究Ⅳ 神門水海南辺の研究(資料編)』島根県古代文化センター調査研究報告書 46 島根県古代文化センター 45 ~ 59 頁
- 瀬戸浩二・岡崎裕子 2013 「神門水海の古地理の復元に向けて」『出雲国風土記の研究Ⅳ 神門水海南辺の研究(論考編)』島根県古代文化センター調査研究報告書 47 島根県古代文化センター 3 ~ 14 頁
- 中村唯史 2006a 「神戸川デルタの地形発達」『島根県立三瓶自然館研究報告』第 4 号 島根県立三瓶自然館 25 ~ 29 頁
- 中村唯史 2006b 「山陰中部地域における完新世の海面変化と古地理変遷」『第四紀研究』第 45 卷第 5 号 日本第四紀学会 407 ~ 420 頁
- 中村唯史 2009 「塩冶の自然環境」『出雲塩冶誌』出雲塩冶誌刊行委員会 3 ~ 39 頁
- 中村唯史 2014 「縄文時代の島根県の古地形と三瓶火山の活動の影響」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第 13 集 島根県古代文化センター 87 ~ 92 頁
- 中村唯史・野坂俊之 2006 「神西湖西岸低地の完新世環境変遷」『島根県立三瓶自然館研究報告』第 4 号 島根県立三瓶自然館 17 ~ 23 頁
- 野津左馬之助 1930 「神西湖の排水」『島根県史』第 9 卷 島根県 299 ~ 300 頁
- 林 正久 1989 「斐伊川流域における鉄穴流しと出雲平野の形成」『古代出雲文化の展開に関する総合的研究 一斐伊川下流域を中心として』島根大学山陰地域研究総合センター 17 ~ 44 頁
- 林 正久 1991 「出雲平野の地形発達」『地理学評論 Ser.A』Vol.64 日本地理学会 26 ~ 46 頁
- 三浦 清 2000 「湖陵町の地学的自然」『湖陵町誌』湖陵町 1 ~ 58 頁
- 山田和芳・高田裕行・高安克己 2004 「島根県神西湖堆積物の層序と完新世環境変遷史」『LAGUNA(汽水域研究)』No.11 島根大学汽水域研究センター 135 ~ 145 頁
- 山田和芳・高安克己 2006a 「『神門水海』の湖岸線復元—地形・地質コアによる検討—」『出雲国風土記の研究Ⅲ 神門水海北辺の研究(資料編)』島根県古代文化センター調査研究報告書 34 島根県古代文化センター 41 ~ 52 頁
- 山田和芳・高安克己 2006b 「出雲平野一宍道湖地域における完新世の古環境変動—ボーリングコア解析による検討—」『第四紀研究』第 45 卷第 5 号 日本第四紀学会 391 ~ 405 頁
- 山田和芳・高安克己 2007 「地質コア解析に基づいた出雲平野の形成史」『出雲国風土記の研究Ⅲ 神門水海北辺の研究(論考編)』島根県古代文化センター調査研究報告書 38 島根県古代文化センター 1 ~ 13 頁

第2節 歴史的環境

京田遺跡の発掘調査の成果については第3章で詳しく述べるが、縄文時代後期中葉の遺構群や縄文土器・石器などの遺物が多数確認され、この時期に展開した集落の一端を捉えることができた。ここでは、京田遺跡が所在する湖陵町周辺を含む出雲平野の西部域（斐伊川以西）の歴史的環境について遺跡分布（第7・8図）をもとに概観し、京田遺跡の通史的な位置づけについて、前節で確認した地理的環境の変遷を踏まえて検討したい。なお、本文中の番号は第7図の遺跡番号に対応する。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は湖陵町内では確認されていないが、隣接する多伎町内の日本海沿岸付近にある砂原遺跡（多伎町、29）で約11～12万年前の石器の発見が報告されている（松藤編2013）。

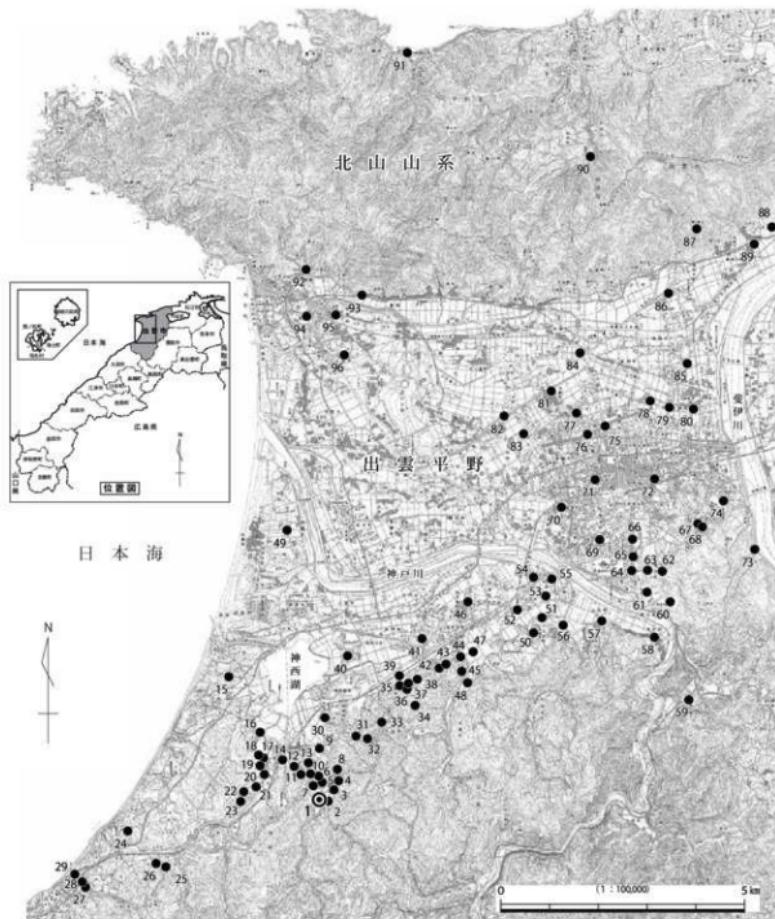
縄文時代

出雲平野の縄文時代遺跡のなかで現在確認できる最も古い土器が出土したのは、島根半島の北山東南麓に位置する山持遺跡（西林木町、86）であり、早期の押型文土器が出土している（原田編2009）。早期末頃から前期にかけては「縄文海進」で広がった広大な内湾（古穴道瀬）の近くで人々の生活が確認でき、湖陵町内の板津焼山遺跡（15）のほか、菱根遺跡（大社町、93）や上長浜貝塚（西園町、49）などいくつかの遺跡が知られている（同志社大学出雲古文化調査団1959、川上・湯村編1996、石原編2013）。

中期の遺跡は総じて少なく、前半期は山持遺跡などわずかな遺跡しか知られていない。しかし、中期後半から後期初頭になると遺跡が多く確認されるようになり、三田谷I・III遺跡（上塩治町、61）や築山遺跡（上塩治町、65）で土器がまとまって出土した（今岡・勝田編1999、伊藤編2000、米田・三原編2005）。なお、後期以降は精神文化に関連した遺物が出土するようになり、三田谷I遺跡では後期初頭から前葉頃の板状土偶や、晩期に比定できる石棒が確認されている。湖陵町内では奥ノ谷遺跡（3）、その周辺では麓II遺跡（東神西町、33）で比較的多くの縄文土器が出土している（野坂編1995a、勝部編2017）。

後期前葉以降の遺跡には集落跡が確認できるようになる。湖陵町内において常楽寺川を挟んで京田遺跡（1）の対岸に位置する御領田遺跡（2）では後期前葉の竪穴住居跡が確認され（角田・野坂編1994）、この地に集落が存在したことを具体的に示している。この頃（約4,000年前）の三瓶山の噴火により、神戸川の下流に大量の土砂が運ばれて出雲平野が発達したが、本報告の市文化財課の調査や、県埋文センターの調査（守岡主編2017a）で確認した京田遺跡の後期中葉の集落は、この噴火後に営まれたものとして位置づけられる。

晩期には出雲平野の発達がさらに進み、平野部を中心に多くの遺跡が認められる。築山遺跡や三田谷I・III遺跡、山持遺跡など以前から継続的に確認できる遺跡に加え、新たな場所にも遺跡が認められる。三田谷I遺跡では「三田谷文様」と称される、北陸地方の影響がみられる文様の土器が出土しており（鳥谷編2000）、当時の幅広い地域間交流の姿を物語る。湖陵町内では三部竹崎遺跡（9）や三部八幡下遺跡（17）、周辺地域では九景川遺跡（東神西町、35）、御崎谷遺跡（東神西町、37）や保知



1 京田遺跡	17 三郎八幡下道跡	33 麗II遺跡	49 上長浜貝塚	65 菊山遺跡	81 矢野道路
2 鶴原田遺跡	18 八幡宮櫻穴墓群	34 北光寺古墳	50 地藏堂櫻穴墓群	66 上地治御山古墳	82 井原道路
3 美ノ谷遺跡	19 保坂石谷遺跡	35 九原川遺跡	51 妙蓮寺山古墳	67 普沢古墓	83 白稜荒神遺跡
4 常来寺柿木田古墳群	20 柿谷恵比須遺跡	36 玉京寺裏遺跡	52 宝塚古墳	68 長者原廟寺	84 高浜I遺跡
5 常来寺道跡	21 只谷I・II遺跡	37 御崎谷遺跡	53 田畠道跡	69 神門寺境内舟寺	85 萩野古墓
6 疎反I・II遺跡	22 只谷II遺跡	38 浜坂場II号墳	54 下古志道跡	70 天神遺跡	86 山道道路
7 安子神社櫻穴墓群	23 同上・新花前遺跡	39 丁之内古墳	55 吉志本郷遺跡	71 海上遺跡	87 真ヶ里城跡
8 の子谷櫻穴墓群	24 正南櫻穴墓群	40 山地古墳	56 放レ山古墳	72 今市大念寺古墳	88 大寺古墳
9 三部竹崎遺跡	25 久村鶴山古墳	41 神門櫻穴墓群	57 井上櫻穴墓群	73 植出山古墳	89 青木遺跡
10 霊部I・II遺跡	26 矢谷遺跡	42 開谷東古墳	58 小坂古墳	74 西谷堀墓群	90 鯨淵寺
11 霊部古墳群	27 後谷櫻穴墓群	43 開谷東遺跡	59 朝山古墓	75 鈴原西遺跡	91 猪目洞窟遺跡
12 善通古墳群	28 砂原小山櫻穴墓群	44 深柄北古墳	60 光元寺J号墓	76 織小路西遺跡	92 出雲大社境内道路
13 竹崎遺跡	29 砂原遺跡	45 深柄II・III遺跡	61 三田谷I・III遺跡	77 小山遺跡	93 稲根道路
14 中島遺跡	30 田中谷貝塚	46 知井宮多聞院遺跡	62 上塙治櫻穴墓群	78 中野西遺跡	94 鹿藏山遺跡
15 桧津鏡山遺跡	31 板本谷遺跡	47 清柄遺跡	63 泊田古墳	79 中野美保道路	95 原山道路
16 西安原遺跡	32 神西城跡	48 保知石遺跡	64 上塙治櫻穴墓群	80 中野清水道路	96 中分貝塚

第7図 京田遺跡と出雲平野周辺の主要遺跡

石遺跡（芦渡町、48）、浅柄遺跡（知井宮町・芦渡町、47）などで晩期の土器や石器が確認されている（角田・野坂編 1994、野坂編 1995b、岡山編 2000、川原編 2005、池澤編 2008、今岡編 2009）。

弥生時代

弥生時代には水稻農耕を生活基盤とする社会へと徐々に移行するが、前期には稻の圧痕が確認できる土器が見つかった矢谷遺跡（多伎町、26）や稻の圧痕が残る土器と配石墓が確認された原山遺跡（大社町、95）など（村上ほか編 1986、松尾編 2004）、新たな遺跡が見つかる一方で、縄文時代の晩期頃から存続する遺跡が目立つ。湖陵町内では三部竹崎遺跡や三部八幡下遺跡、縄文時代後晩期の粗製土器と弥生時代前期の土器が確認された姫谷恵比寿遺跡（20）などが知られ（杉原ほか編 1987、野坂編 1995b）、出雲平野中央部では矢野遺跡（矢野町、81）、姫原西遺跡（姫原町、75）、蔵小路西遺跡（渡橋町・小山町、76）などで縄文時代晩期後半から連続的に集落が存続したと考えられる（足立編 1999、間野編 1999、坂本編 2010）。狩猟採集を生業とした縄文時代から水稻農耕を基盤とする弥生時代へと比較的スムーズに移行した様子がうかがえよう。

中期になると湖陵町内で確認できる遺跡数が減少し、中島遺跡（14）などで土器が見つかっている程度である（杉原ほか編 1987）。一方で、神戸川の沿岸部では古くに貝塚の存在が確認された知井宮多聞院遺跡（知井宮町、46）のほか（勝部・西尾編 1980）、古志本郷遺跡（古志町、55）や下古志遺跡（下古志町、54）、田畠遺跡（下古志町、53）、天神遺跡（天神町、70）などの環濠を持つ集落が中期中葉頃に出現し（岸編 1997、松山編 1998、三原編 2000、米田・三原編 2001）、後期以降も存続する集落が多い。また、出雲平野中央部でも海上遺跡（塩治町、71）や中野清水遺跡（中野町、80）、小山遺跡（小山町、77）、白枝荒神遺跡（白枝町、83）などでこの時期の遺物がまとまって出土し（米田・三原編 1997、藤永編 2002、岡山編 2002、角田編 2006）、集落が存在していたことを示唆する。この頃には出雲平野中央部の中野美保遺跡（中野町、79）で方形貼石墓が築かれ（仁木編 2004）、中期後葉に青木遺跡（東林木町、89）で萌芽的な四隅突出型墳丘墓が認められるなど（今岡ほか編 2006）、墳墓の形成が徐々に目立つようになる。

後期には各地で人々の活動が活発になり、確認される遺跡が急増する。湖陵町内では神西湖南の平野部から谷の丘陵裾部付近において京田遺跡のほか、只谷Ⅰ・Ⅱ遺跡（21）、西安原遺跡（16）、三部八幡下遺跡、雲部Ⅰ・Ⅱ遺跡（10）、庭反Ⅰ・Ⅱ遺跡（6）、竹崎遺跡（13）などが確認できる（野坂編 1995b、西尾・野坂 1995・2000、勝部編 2017）。湖陵町周辺においても竪穴住居跡や竪穴建物跡が見つかった上長浜貝塚や玉泉寺裏遺跡（東神西町、36）、貝塚が形成された田中谷貝塚（西神西町、30）が認められる（西尾・野坂 1995・2000、人見編 2017）。出雲平野中央部でもこの時期から盛行する集落が多く、井原遺跡（白枝町、82）で環濠の可能性のある溝が確認できる（岸編 2002）。これら後期の集落は古墳時代以降まで存続する場合が多い。墳墓に関しては、湖陵町周辺では玉泉寺裏遺跡で終末期から古墳時代初頭の木棺墓が確認される程度である（景山・曾田編 2008）。出雲平野中央部では中野美保遺跡、青木遺跡で四隅突出型墳丘墓が造営されるほか、丘陵部にある西谷墳墓群（大津町、74）では西谷3号墓に代表される国内有数の巨大な四隅突出型墳丘墓が連続的に造営され（坂本編 2006、渡邊・坂本編 2015）、王墓が連綿と繼承される様子をうかがい知ることができる。

古墳時代

古墳時代になると各地で古墳が造営される。前期の古墳は、湖陵町内では常楽寺柿木田1号墳(4)、出雲平野中央部とその周辺では前期頃の西谷7号墳、前期末の前方後円墳である大寺古墳(東林木町、88)、詳細時期が不明な方墳の権現山古墳(大津町、73)などが知られる(萩編2003、仁木編2005、坂本編2006など)。一方で、湖陵町周辺で2基の箱形木棺と1基の箱形石棺を備えて筒形銅器や銅鏡などが副葬された前期末頃の円墳である山地古墳(神西沖町、40)が著名であり(川上編1986)、それに先行する古墳も確認されている。例えば、粘土櫛と礫櫛を備える埋葬施設が確認された浅柄II古墳(浅柄II遺跡)(知井宮町、45)や埋葬施設に土器棺2基を持つ浅柄北古墳(知井宮町、44)が挙げられ(川上編2005、今岡編2009)、これらは前期中葉から後葉頃に造られたと考えられる。出雲平野において、湖陵町周辺は前期に古墳の造営が盛んであった地域であることが分かる。

集落は弥生時代中期以降から継続することが多いが、古志本郷遺跡や下古志遺跡では集落を巡る溝に大量の土器が廃棄されるなど(米田・三原編2001、守岡正編2003)、大規模な集落が衰退する様子がうかがえる。また、湖陵町周辺において御崎谷遺跡や玉泉寺裏遺跡、間谷東遺跡(知井宮町、43)などで前期の遺物が一定量出土し(景山・曾田編2008、今岡編2009)、集落が存在したことを示唆する。

中期初頭には、奥才型木棺と呼ばれる棺内縹敷組合式木棺を持つ間谷東古墳(知井宮町、42)が出現する(景山・曾田編2008)。この埋葬施設は北部九州から北近畿にかけて広く展開しており、日本海沿岸にまたがる当時の地域間交流の一端を示している。また中期中葉に前方後円墳の北光寺古墳(東神西町、34)が築かれており(仁木編2007)、この時期の出雲地方において最大級の規模を誇る。その他、湖陵町内においては、舟形石棺が出土した雲部古墳群(11)の雲部3号墳が知られ(西尾・野坂2000、野坂編2000)、その周辺では浜井場2号墳(東神西町、38)や丁之内古墳(東神西町、39)が存在するなど(川上1981、岸編2005)、この時期において、出雲平野西部は古墳が集中する地域となっている。一方、出雲平野中央部では弥生時代後期の西谷墳墓群から連続と続く西谷古墳群や池田古墳(上塩治町、63)が知られるにとどまる(川上・湯村編1993、米田編2001)。

集落に関連する遺跡としては、湖陵町内では前期後葉から中期の土器がまとめて出土した只谷Ⅲ遺跡(22)、周辺地域においては前期後半から中期前葉の住居跡が見つかった浅柄遺跡、土器を作う水辺の祭祀が行われた九景川遺跡などが確認されている(西尾・野坂1995、岡山編2000、池淵編2008)。出雲平野中央部でも弥生時代から断続的に継続する中野西遺跡(中野町、78)や中野美保遺跡でまとめた遺物が出土したほか(坂本編2002、仁木編2004)、中野清水遺跡や三田谷Ⅰ遺跡においては複数の竪穴住居跡などが見つかり、集落での活動が盛んであった様子が見て取れる(今岡・梶田編1999、久保田・渡邊編2005)。なお、三田谷Ⅰ遺跡では九景川遺跡と同様に水辺の祭祀を行った遺構が確認されている。

後期の集落は、中期から継続する中野美保遺跡や中野清水遺跡、三田谷Ⅰ遺跡など出雲平野中央部で引き続き確認できる。湖陵町内では、竪穴建物跡が確認された板津焼山遺跡、庭反Ⅰ・Ⅱ遺跡や只谷Ⅰ～Ⅲ遺跡、三部竹崎遺跡などで集落が存続しており(西尾・野坂1995、石原編2013)、湖陵町周辺でも浅柄Ⅲ遺跡(知井宮町、45)で掘立柱建物跡が確認されている(守岡正編2017b)。

後期の古墳は湖陵町内で倉道古墳群（12）などが知られるにとどまるが（西尾・野坂2000），出雲平野中央部では大規模な首長墳が相次いで築かれる。神戸川右岸に出雲地方最大規模の前方後円墳である今市大念寺古墳（今市町，72）をはじめ，切石造りの整美な横穴式石室を持つ上塩治築山古墳（上塩治町，66）や上塩治地蔵山古墳（上塩治町，64）が出現する（勝部・西尾編1980，川上編1988，松本編1999，三原・高橋編2004，坂本編2018）。神戸川左岸には首長墳に次ぐ規模の妙蓮寺山古墳（下古志町，51）や放レ山古墳（古志町，56），宝塚古墳（下古志町，52）などが造営される（山本1964，勝部・西尾編1980）。こうした首長墳を中心とした古墳群の造営が終息に向かう終末期には，出雲平野で大規模な横穴墓群の構築が顕著になる。首長墳が展開した神戸川右岸において，現在235基が確認される上塩治横穴墓群（上塩治町，62）は全国でも屈指の規模を持つ横穴墓群であり，22支群からは金糸や金製の輪などの豊富な副葬品が出土した（守岡正編1998）。神戸川左岸には神門横穴墓群（神門町・知井宮町，41）が構築され，現在までにおよそ123基が確認されている（米田編1995）。横穴墓群は出雲平野全域に波及し，神戸川左岸以西では井上横穴墓群（古志町，57），地蔵堂横穴墓群（下古志町，50），湖陵町内では八幡宮横穴墓群（18），安子神社横穴墓群（7），のの子谷横穴墓群（8）などが築かれる（松山編1994，野坂編2000，守岡正編2017a）。多伎町内でも正南横穴墓群（24）や砂原小山横穴墓群（28），後谷横穴墓群（27）などが知られる（松尾編2004）。

奈良・平安時代

奈良時代は律令国家の成立に伴って各地に国・郡制が整備される。『出雲国風土記』によると，出雲国には9つの郡と61の郷があり，現在の出雲市域はそのうち櫛縫郡，出雲郡，神門郡，飯石郡の4つの郡に属していた。出雲平野は出雲郡の一部と神門郡で構成され，出雲郡の官衙関連施設には礎石建物跡や神社施設と思われる総柱建物跡，墨書き土器や神像，絵馬などが発見された青木遺跡や（今岡ほか編2006），三彩多口瓶や墨書き土器が出土した鹿嶋山遺跡（大社町，94）があげられる（石原編2005）。神門郡の郡家は古志郷にあり，古志本郷遺跡で見つかったL字の長舎建物跡や正方位の区画溝を持つ規則的な建物跡群がその関連施設であったと推定されている（松尾編2003）。神門郡におけるその他の官衙関連施設の痕跡は，天神遺跡や三田谷I遺跡などで見つかっており，天神遺跡では倉庫とみられる大型の総柱建物跡のほか墨書き土器や縁軸陶器が確認され（横山ほか編1977），三田谷I遺跡では墨書き土器や木簡が出土した（熱田編2000）。

古代寺院跡については，長者原廃寺（上塩治町，68）や新造院と推定される神門寺境内廃寺（塩治町，69）が古くから知られる（勝部・西尾編1980）。湖陵町を含めた神西湖周辺は神門郡の古志郷と多伎郷に挟まれた滑狭郷にあたり，湖陵町内では掘立柱建物跡などが確認された京田遺跡，庭反II遺跡や常楽寺遺跡（5），周辺地域においては多数の建物跡や掘立柱建物跡が確認された九景川遺跡や浅柄遺跡は集落跡であると考えられる（杉原ほか編1987，岡山編2000，池淵編2008，勝部編2017）。なお，神西湖は「神門水海」として『出雲国風土記』に登場し，「出雲大川」と呼ばれた当時の斐伊川と神戸川が神門水海に注ぎ込み，現在の神西湖よりも水域が広く汽水環境であったことが記されている。この神門水海の周辺には古代から中世にかけて貝塚が形成されており，湖陵町内の常楽寺遺跡や御領田遺跡のほか，上長浜貝塚や大社町の中分貝塚（大社町，96）などが知られる（石井編1981，杉原ほか

か編 1987, 角田・野坂編 1994, 川上・湯村編 1996)。特に、上長浜貝塚は古代の貝塚としては全国でも最大級の面積であり、奈良・平安時代以降にかけて神門水海の資源を積極的に利用していたことを示している。

神戸川沿岸部では火葬墓が見つかっており、石櫃が確認された小坂古墳(馬木町, 58)や光明寺3号墓(上塩治町, 60), 石製蔵骨器が出土した菅沢古墓(上塩治町, 67)や朝山古墓(朝山町, 59)などが知られている(勝部・西尾編 1980, 高橋・片倉編 2000)。その他、出雲郡宇賀郷に属する猪目洞窟遺跡(大社町, 91)は『出雲國風土記』に記された「黄泉の穴」として知られ、弥生・古墳時代の人骨が出土し、なかには貝輪を装着した人骨も確認される一方で、土器や石器なども出土しており、ある時期には生活の場として利用されていたことが分かっている(松本・松尾 2002)。

中世

鎌倉時代に出雲国の守護となった佐々木氏は、塩治郷を拠点として塩治氏を称し、領国支配を行った。出雲平野中央部の築山遺跡における礎石建物跡や区画溝、貿易陶磁器などはこの時期の塩治氏に関連するとみられる(原編 2009)。藏小路西遺跡では掘立柱建物跡が確認されて大量の貿易陶磁器が出土しており、有力な国衙在庁官人である朝山氏の居館跡と考えられている(間野編 1999)。貿易陶磁器は荻杵古墓(荻杵町, 85)で青磁の優品が出土している(勝部・西尾 1980)。その他、大型建物跡や最古級の将棋盤が確認された高浜1遺跡(高岡町, 84)も居館跡の可能性がある(今岡編 2011)。

出雲大社境内遺跡(大社町, 92)で発見された、3本の柱を結束して1本の巨大な柱とした社殿跡は13世紀後半頃のものに比定され、当時の出雲大社(杵築大社)の本殿はかなり大きな掘立柱の構造であったことが分かる(景山ほか編 2004, 穴道編 2018)。また当時の出雲大社と双壁をなしたのが島根半島の北山山系に立地する鰐淵寺(別所町, 90)であり、境内において複数時期に大規模な造成工事が行われたことが分かっている(石原ほか編 2015)。湖陵町内で中世以降の集落跡と考えられるのは、建物跡や青磁などが見つかった庭反II遺跡や常楽寺遺跡のほか(杉原ほか編 1986・1987)、掘立柱建物跡や柵列跡が確認された三部八幡下遺跡や岡屋・新花前遺跡(湖陵町, 23)があげられる(野坂編 1995b, 西尾・野坂 2000)。また、湖陵町周辺でも麓II遺跡や坂本谷遺跡(西神西町, 31)で建物跡が確認されており(勝部編 2017)、この時期に多くの集落が存在していた様子がうかがえる。

室町時代から戦国時代には出雲平野周辺で多くの山城が築かれる。毛利氏が尼子氏復興戦の際に攻略の拠点とした島根半島の北山山系に立地する鳶ヶ巣城跡(西林木町, 87)や、鎌倉時代から続く神西氏代々の居城で出雲十旗に数えられる神西城跡(東神西町, 32)が知られ(勝部・西尾編 1980)、神西城跡に近接する麓II遺跡や坂本谷遺跡では防衛施設と推定できる柵列が確認された(勝部編 2017)。

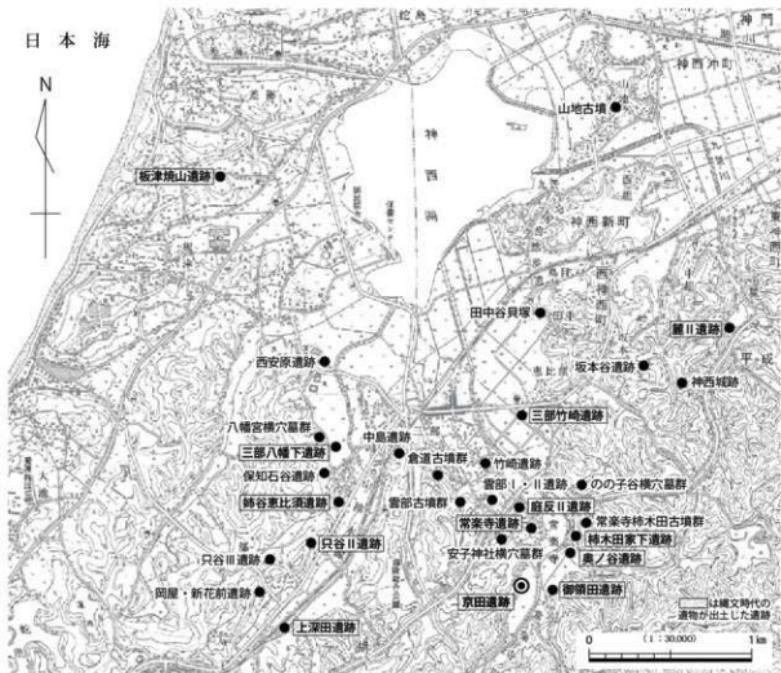
近世・近代

近世の集落について、湖陵町では保知石谷遺跡(19)や三部八幡下遺跡で墓や建物跡などが見つかっているが(野坂編 1995b)、集落全体の様相は不明瞭である。また中世から近世にかけて、出雲地方の山間部でたら製鉄が盛んに行われ、砂鉄採取ための鉄穴流しによる大量の土砂が斐伊川や神戸川によって下流に運ばれるとともに、近世の前半期に差海川が開削されて水域が縮小し、ほぼ現在の神西湖の形になっている。出雲西部においてもたら製鉄が盛行し、近世初期には、奥出雲町の仁多櫻井

家から分家した田儀櫻井家がたら製鉄業を営み、多伎町奥田儀を拠点として出雲国屈指の鉄山師(たら製鉄の経営者)にまで成長する。詳細な位置は不明であるが、湖陵町内の姫谷鉱山や多伎町の赤松鉄穴で鉄穴流しを行っていたことが文献史料に記されており(『久村の歴史』編集委員会編 2011), 田儀櫻井家のたら場である多伎町の越堂たらへの砂鉄供給地となっていた。なお、この地域は近代でも重要な砂鉄の供給地であり、昭和初期に国内で鉄鉱資源の需要が高まり、1940(昭和 15)年から近代的な設備を整えた久村鉱山(多伎町, 25)が操業されて多くの砂鉄を採取したが、戦後まもなくして操業を停止している(『久村の歴史』編集委員会編 2011)。

このように出雲平野の西部域は時代ごとに多様な変遷をたどるが、約 5,500 年前(縄文時代前期後葉)と約 4,000 年前(縄文時代後期前葉頃)の三瓶山の噴火に起因する出雲平野の急速な発達によって、それ以降の時代に出雲平野で多くの集落が形成され、様々な活動が活発に展開してこの出雲平野の西部域が発展していくことが分かる。京田遺跡で確認した縄文時代後期中葉の集落は三瓶山の噴火後の時期に形成されており、いわばこの地域の発展の嚆矢ともいえる存在である。京田遺跡の集落の様相を詳細に検討することは、縄文時代後期中葉の集落様相を理解する糸口となるだけでなく、出雲平野を舞台とする地域史の端緒を明らかにするうえでも重要な意味を持つ。

(輔中光輔)



第8図 京田遺跡と周辺の主要遺跡

第1表 歴史的環境の参考文献一覧

編者	発行年	文献名・論文名	シリーズ名・馬鹿文獻・掲載頁	発行機関
足立吉巳編	1999	越后西道跡	一枚区画9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財 発掘調査報告書 I	鳥取県教育委員会
熱田貴保編	2000	三田谷 I 墓群 (Vol. 2)	愛伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告 書 II	鳥取県教育委員会
瀬川俊一編	2008	山陰川遺跡	一般社団法人出雲インター・海陸段事業に伴う埋蔵文化財 発掘調査報告書 I	鳥取県教育委員会
石井 勉編	1991	鳥取埋蔵文化財調査報告書図	-	鳥取県教育委員会
石井 勉編	2005	若狭山遺跡	大社町立大社小学校改築事業に伴う発掘調査報告書	大社町教育委員会
石井 勉編	2013	飯石山遺跡	出雲市文化財報告書 II	出雲市教育委員会
石原 啓・古道年弘・ 野坂俊之・二原一編	2015	山陰勝跡埋蔵文化財調査報告書	出雲市文化財報告書 III	出雲市教育委員会
伊藤 習編	2000	三田谷Ⅱ遺跡	愛伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告 書 X	鳥取県教育委員会
今岡一三編	2009	御崎谷遺跡・開谷東塗跡・浜羽北心塙・開谷西II遺跡・ 墳群	一般社団法人出雲インター・海陸段事業に伴う埋蔵文化財 発掘調査報告書 V	鳥取県教育委員会
今岡一三編	2011	高見 I 遺跡	一般社団法人出雲インター・海陸段事業に伴う埋蔵文化財 発掘調査報告書 VI	鳥取県教育委員会
今岡一三・辰田雅造編	1999	三田谷 I 遺跡 (Vol. 1)	愛伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告 書 V	鳥取県教育委員会
今岡一三・平石 実・ 佐伯英志編	2006	青木遺跡 (佐生～平石時代編)	因田川III号道路改築事業 (東林木バイパス) に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	鳥取県教育委員会
角田徹也編	2006	中野町水道跡 (3)・白坂本塚跡	一般社団法人出雲インター・海陸段予定地内埋蔵文化財 発掘調査報告書 7	鳥取県教育委員会
角田徹也・野坂之編	1991	神河町区画整備施設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 I・ 浜竹塚遺跡	-	綾南町教育委員会
豊山泰二・石谷 啓・ 松尾洋基編	2004	出雲大社境内遺跡	-	大社町教育委員会
豊山泰二・青田良雄編	2006	五重山遺跡・浜井番 4 号塙・開谷東古墳	一般社団法人出雲インター・海陸段事業に伴う埋蔵文化財 発掘調査報告書 II	出雲市教育委員会
鶴源 順・西尾亮二編	1990	出雲・上坂道地域を中心とする埋蔵文化財発掘調査報告書	-	鳥取県教育委員会
鶴源智明編	2017	震日 震跡 池本通跡 京田遺跡 (110)	一枚区画9号 (出雲御藏遺跡) 古墳工事に伴う埋蔵 文化財発掘調査報告書 I	鳥取県教育委員会
川上 伸	1981	T・内古塙の葉巻調査	出雲市古墳墓保護工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 書 I・II・III	出雲市教育委員会
川上 伸編	1996	山地古墳発掘調査報告書	-	出雲市教育委員会
川上 伸・史跡今市立今古墳保存修復事業報告書	1998	-	出雲市教育委員会	
川上 伸・湯村 充編	1993	西谷15・16号墓発掘調査報告書	-	出雲市教育委員会
川上 伸・湯村 充編	1996	上長浜貝塚	-	出雲市教育委員会
川原和人編	2005	猪ノ前道路・音習 I 遺跡・猪ノ前 II 遺跡・音習 III 遺跡 猪ノ前道路・保原古墳跡・西谷 III 遺跡・河内 I 遺跡	山陰自動車道鳥取山古墳 (宍道～山陰間) 建設に 伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2	鳥取県教育委員会
岸 通三編	1997	大庭遺跡 7 号古墳発掘調査報告書	-	出雲市教育委員会
岸 通三編	2007	井原通跡葉巻調査報告書	-	出雲市教育委員会
岸 通三編	2005	井原通跡葉巻調査報告書	-	出雲市教育委員会
久保田一郎・渡邊義美子 編	2005	中野清水遺跡 (2)	一般社団法人出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財 発掘調査報告書 6	鳥取県教育委員会
『久村の歴史』編集委員 会編	2011	久村の歴史	-	久村地区連合自治会
坂本豊吉編	2002	中野西道跡	出雲市北第二土地区画整理事業に伴う発掘調査報 告書	出雲市教育委員会
坂本豊吉編	2006	西谷塙基壘一平成14～16年度発掘調査報告書 I	-	出雲市教育委員会
坂本豊吉編	2010	矢野通跡	出雲市文化財報告書 10	出雲市教育委員会
坂本豊吉編	2018	上坂道山古墳の再検討	出雲市生の森博物館研究記要第 6 集	出雲市生の森博物館
岡道牛弘編	2018	山陰大社境内遺跡 (日本籠跡) 出土品保存修理報告書	-	出雲大社
松原浩一・藤原友子・ 柳谷英武編	1996	鶴反Ⅱ遺跡・昭和60年度緊急発掘調査報告書	-	綾南町教育委員会
松原浩一・藤原友子・ 柳谷英武編	1997	鶴反Ⅲ遺跡・地・昭和61年度調査報告書	-	綾南町教育委員会
園山 黑編	2000	浅所遺跡	西山御用邸土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発 掘調査報告書	出雲市教育委員会
園山 黒編	2002	小山遺跡第 3 地点発掘調査報告書 (第 4 次発掘調査)	-	出雲市教育委員会
高橋曾也・片倉英美編	2000	光明寺 3 号墓・4 号墓	愛伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告 書 II	出雲市教育委員会

編番	発行年	文献名・論文名	シリーズ名・冊数文献・頁数	実行機関
同志社大学山呂古文化調査団	1959	山呂古文化調査報告	同志社大学人文科学研究所紀要第2号 1~106頁	同志社大学人文科学研究所
鳥谷万寿編	2000	二井谷 I 盛綱Vol. 3	鳥伊川放水路建設工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV	鳥根県教育委員会
仁木 聰編	2004	中野原保跡	一般国道9号山呂古バイパス建設工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書4	鳥根県教育委員会
仁木 聰編	2005	大寺1号墳発掘調査報告書	鳥根県古代文化センター調査研究報告書29	鳥根県古代文化センター
仁木 聰編	2007	北光寺古墳発掘調査報告書	鳥根県古代文化センター調査研究報告書36	鳥根県古代文化センター
西尾有己・野坂俊之	1993	神吉湖周辺の高瀬遺跡	湖田町調査研究4 12~30頁	湖田町教育委員会
西尾有己・野坂俊之	2009	原始古代の湖田町	湖田町誌 147~240頁	湖田町
野坂俊之編	1995a	一般国道9号山呂古バイパス建設工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書一(山呂古)	-	湖田町教育委員会
野坂俊之編	1995b	神吉湖区域へ一千年前高瀬遺跡事業に伴う埋蔵文化財調査報告書(第3回T.K) 只見1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・31・32・33・34・35・36	-	湖田町教育委員会
野坂俊之編	2009	湖田町農耕地図	-	湖田町教育委員会
鳥 稲人編	2003	長瀬遺跡Vol. 2 権現山古墳	鳥伊川放水路建設工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書XII	鳥根県教育委員会
原 俊二編	2009	荒山遺跡調査	出雲市文化財報告5	出雲市教育委員会
原田敏郎編	2009	山呂古遺跡Vol. 5 (6回)	国道431号山呂古古墳事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財調査報告書7	鳥根県教育委員会
人見共生編	2017	玉泉寺古墳調査(VII・VIII) 九重川遺跡(VIC)	一般国道9号(山呂古調査跡)改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2	鳥根県教育委員会
藤木利隆編	2002	南上遺跡	出雲市民伝承移転地工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
柳原克晶編	2003	古志本郡遺跡V 出雲宮丹門村家間遺跡の調査	鳥伊川放水路建設工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書XII	鳥根県教育委員会
柳原克晶編	2004	多伎郡の考古学	-	多伎町ライオンズクラブ
松藤人編	2012	砂原羽石器遺跡の研究-鳥居島多伎町広原所在砂原跡古墳調査報告書-	-	砂原跡学術調査団
松本豊雄編	1999	上塙池廻古墳の研究	鳥根県古代文化センター調査研究報告4	鳥根県古代文化センター
松本豊雄・松尾光晶	2002	猪目廻古墳物包覆層について	大社町史安土史料(民家・考古資料) 493~505頁	大社町
松山哲弘編	1994	松山堂横穴式石室調査報告書	下吉方地区一般既存施設事業埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
松山哲弘編	1998	古志本郡遺跡第6次発掘調査報告書	市立本郷新宮遺跡改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
岡野大彌編	1999	小路古跡遺跡	一般国道9号山呂古バイパス建設工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書2	鳥根県教育委員会
三原一特編	2000	田畠遺跡	市道改修古志兩歩道設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
三原一特・高橋智也編	2004	上塙治原山古墳	-	出雲市教育委員会
村上 勝・山口博志・鶴見光世編	1998	山呂古遺跡発掘調査報告-鳥居島町川太町-	-	大社町教育委員会
岡田正司編	1998	上士町遺跡 低地古墳 大沢谷城跡 上塙治原山古墳群第7、8	鳥伊川放水路建設工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV	鳥根県教育委員会
岡田正司編	2017a	のり子谷古墓群	一般国道9号(山呂古調査跡)改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3	鳥根県教育委員会
岡田正司編	2017b	先削頂遺跡	一般国道9号(山呂古調査跡)改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4	鳥根県教育委員会
岡田利充編	2003	古志本郡遺跡VI-4(3)(4)調査-	鳥伊川放水路建設工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書XII	鳥根県教育委員会
山本 順	1964	妙蓮寺山古墳調査報告	-	鳥根県教育委員会
鷹巣吉光・ト朝吉博・松本豊雄編	1977	天神遺跡	立花農科医大学附属田宿合宿工事に伴う急傾斜地調査報告書	出雲市教育委員会
米田亮江子編	1995	小源山横穴墓群	-	出雲市教育委員会
米田亮江子編	2001	南山古墳	一部バス営業用地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
米田亮江子・三原一特編	1997	日枝荒神遺跡	市道改修下小山改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
米田亮江子・三原一特編	2001	下吉古墳群	一般既存多伎町南出雲線改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
米田亮江子・三原一特編	2005	斯波遺跡II	斯波山第二刀削繩改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
西澤貞吉・坂本豊治編	2015	西谷2号墓発掘調査報告書	鳥取大学考古学研究会報告第5集	鳥取大学考古学研究会

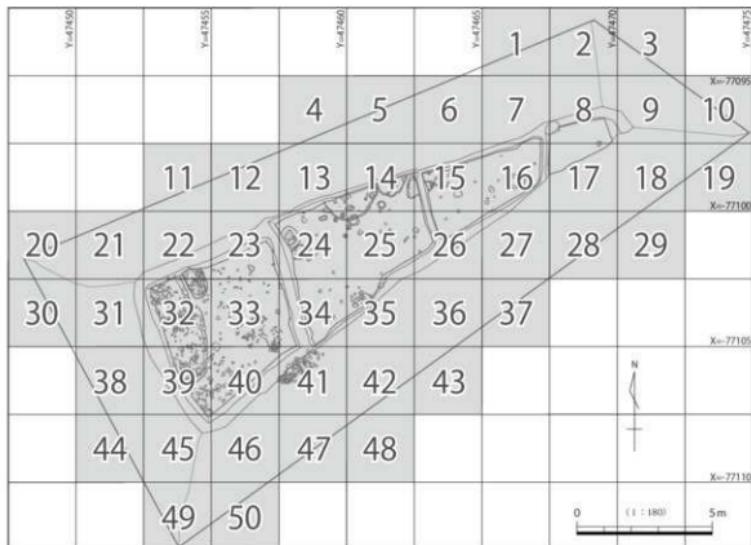
第3章 4-1区の調査成果

第1節 4-1区の調査の概要

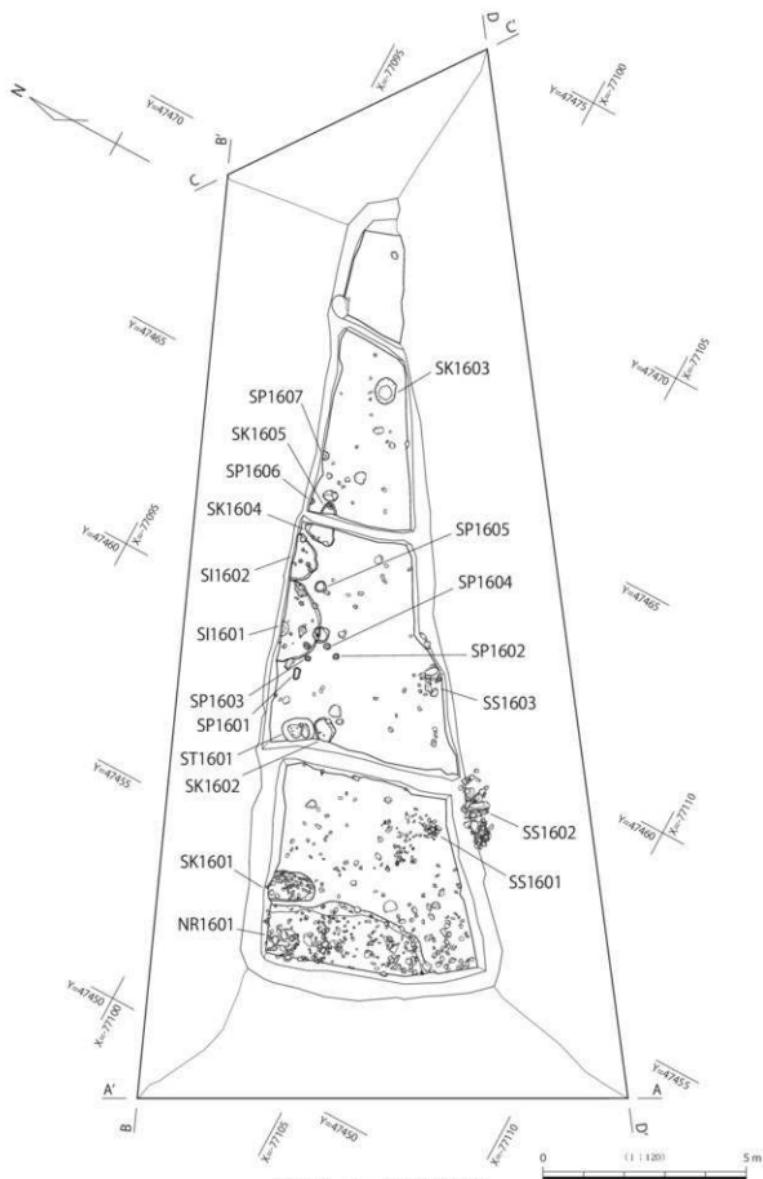
市文化財課が調査を実施した4区は出雲湖陵道路本線の側道部分にあたり、県埋文センターが調査を実施した本線部分の3区と接続している。4区のうち、東側を4-1区(220m)、用水路を挟んで一段高い西側の畠地を4-2区(35m)として調査を実施した。このうち第3章では、現在水田となっている4-1区の調査成果を報告する。

4-1区は3区と隣接する位置にあり、3区で確認された縄文時代後期中葉の遺構面が確認できる可能性があった。また3区は縄文時代の遺物を多量に含んだ包含層が存在し、4区でも同様に多数の遺物の出土が予想された。そのため、表土などは重機で掘削し、遺物包含層は人力によって掘削を進めた。調査区内における遺物の出土地点や出土量の空間的な偏りを把握するため、世界測地系第III系の座標に基づき、4-1区において1から50までの調査グリッド(1区画2.5m四方)を設定した(第9図)。遺物包含層から出土した土器については調査グリッドに沿って取り上げを行い、必要に応じてトータルステーションで個別の遺物に出土地点の位置情報(座標と標高)を持たせた。

調査の結果、4-1区では3区と同様に縄文時代後期中葉の遺構面を確認した(第10図)。遺構は竪穴建物跡2棟(SI1601・SI1602)、配石土坑1基(ST1601)、土坑5基(SK1601～SK1605)、柱穴7



第9図 4-1区グリッド配置図



第10図 4-1区遺構全体図

基 (SP1601～SP1607), 集石遺構3基 (SS1601～SS1603) が確認でき, 後期中葉の集落の一部であると考えられる。その他, 晩期後葉から弥生時代前期頃の自然流路 (NR1601) が見つかっている。竪穴建物跡を確認した調査区中央部の遺構面の標高が約 11.8m 程度と最も高く, そこから東西に向かって徐々に低くなる。出土した遺物は縄文土器が総計で 20,365 点 (150.762kg), 石器が 1,139 点 (151.457kg) と, それほど広くない調査面積に対して膨大であり,隣接する3区でも同程度の遺物が出土した状況を勘案すると, 山陰地方で屈指の出土量を誇る縄文時代後期中葉の集落遺跡である。

第2節 4-1区の土層堆積状況

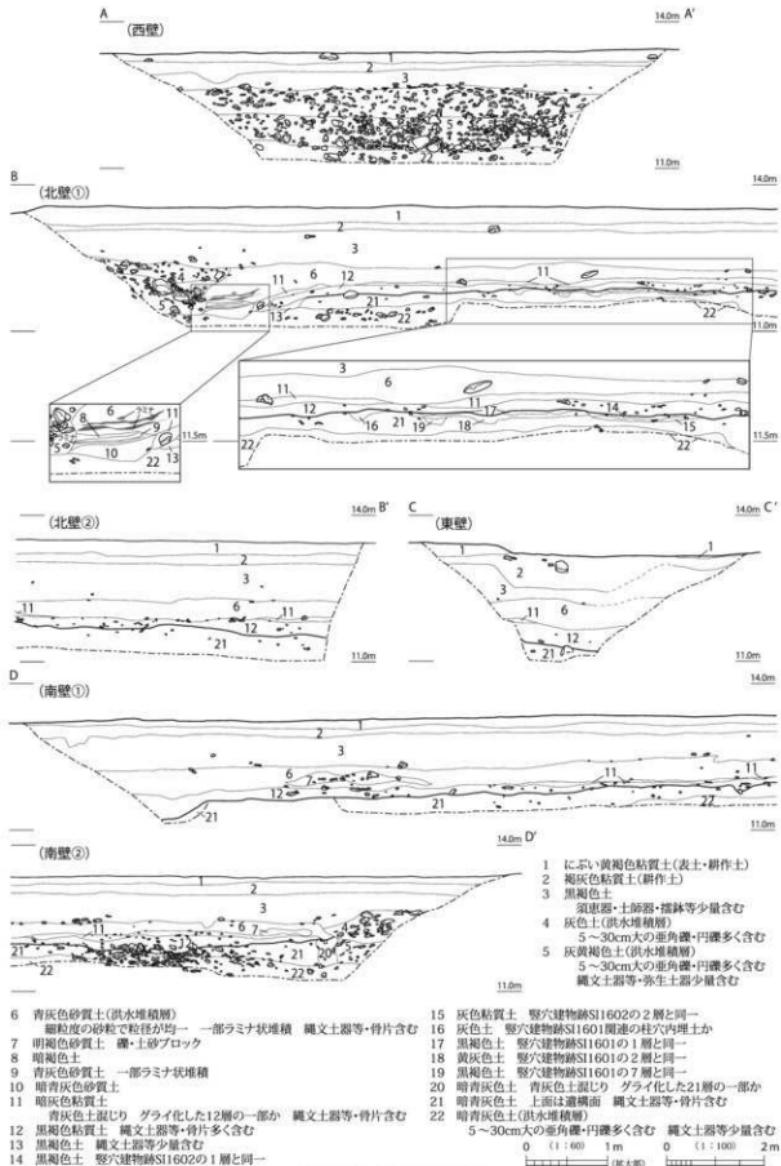
4-1区の土層の堆積状況については第11・12図に示した。第12図は写真測量から作成した土層のオルソ画像である。なお, 各層に含まれる炭化物等の年代測定を実施しており(第5章第2節), その結果を踏まえて堆積状況について検討する⁽¹⁾。なお, 第2表にて土層の性格や推定堆積時期, 3区土層との対応関係をまとめている。

地表から遺構面までの深さは約 1.7m 前後で, その間に複数の層が堆積する。遺構面は 21 層上面で確認した。次節で詳述するが, 遺構の時期は出土土器から後期中葉に比定できる。自然流路はやや新しく, 年代測定の結果(第5章第2節), 晩期後葉から弥生時代前期頃と考えられる。

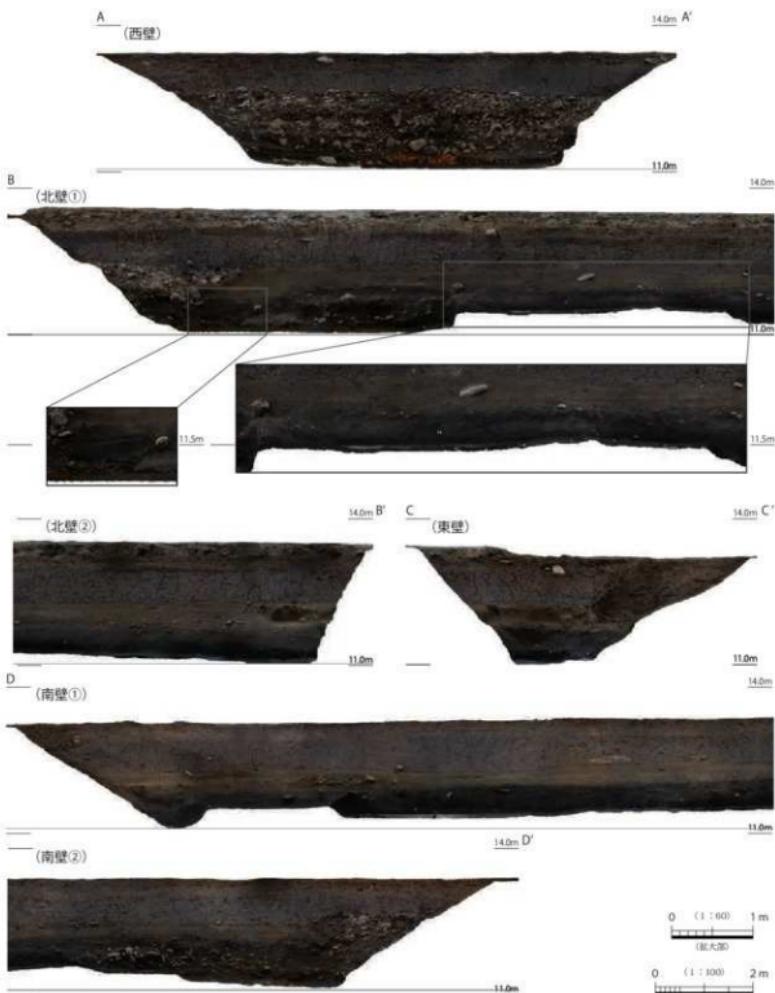
遺構面の下層については, 調査区内の壁沿いに設けた排水用の溝を可能な限り掘り下げて確認した。遺構面を形成する 21 層の下に堆積する 22 層は, 拳大前後の円碟・亜角碟などで構成されており, 洪水によって堆積した層であると考えられる。なお, 14～19 層は竪穴建物跡の埋土と同一であり, 次節で詳しく報告する。

遺構面上には縄文土器を中心に遺物を最も多く含む 12 層が堆積する。出土土器は後期中葉頃のものが大半を占め, 年代測定結果(第5章第2節)を考慮すると, 後期後葉頃に堆積したと考えられる。11・12 層の上面に堆積する 6 層と, それを削るように堆積する 4・5 層は, 当時発生した洪水の痕跡を示している。この 2 つの洪水堆積層については 4-2 区の報告(第4章)で詳しく検討する。6 層はシルトに近い砂質で粒径がほぼ均一に揃っており, 部分的にラミナ状堆積や礫・土砂ブロック(7 層)もみられる。層厚が 30～50cm 前後で堆積状況は概ね水平近く, この洪水は当時の神西湖の排水不良によって引き起こされ, 辺り一帯が一時的に冠水状態であったことが推測される。なお 11 層は 12 層と同一の層であったが, 6 層の洪水に伴う影響でグライ化した部分であると考えられる。6 層から出土する土器は 12 層とほぼ同じ時期であり, 洪水が発生した同時に 12 層の一部が遊離し, 再堆積したものと思われる。土層中の炭化物の年代測定結果(第5章第2節)によると, 晩期後葉から弥生前期頃に発生した洪水である可能性が高い。

4・5 層は調査区の南西側で 6 層を削るように堆積しており, 不揃いな亜角碟・円碟を多量に含んでいる。これらの碟は拳大のほか, 人頭大やそれ以上のものが多く含まれており, 近くの丘陵部周辺から激しい流れの洪水によってここまで運ばれてきた様子がうかがえる。4・5 層からの出土量は少ないものの, 6・12 層と同じ時期の遺物のほか, 晩期後葉の突帯文土器や弥生時代後期の土器も少量ながら見つかっている。そのため 4・5 層の堆積を引き起こした洪水は, 6 層における洪水発生後



第11図 4-1区土層図



第12図 4-1区土層オルソ画像

の晩期後葉頃から弥生後期頃にかけて発生したと考えられる。

3層は50~70cm程度と比較的厚く堆積する。須恵器や古代の土師器のほか、中・近世の擂鉢などがわずかに出土しており、また年代測定や花粉分析の結果（第5章第2節）を踏まえると、中世以降に堆積したと思われる。1・2層は表土および近年の耕作土である。

これまで見てきたように、京田遺跡では縄文時代後期中葉の遺構面のほかに、複数の洪水痕跡を確認した。ここで遺構面と洪水堆積層、および縄文時代の包含層との関係を改めて整理したい。3区の遺構面は洪水によって堆積した22層の上で認められ、後期中葉の前半期の遺構が確認されている（守岡編2017）。よって、22層を形成した洪水はそれ以前に発生したと考えられよう。次節で詳しく報告するが、4-1区の遺構面は後期中葉でも中頃から後半期にあたり、21層の上面で確認されている。そのため、21層は3区で後期中葉の前半期に生活が営まれた後、4-1区で後期中葉の中頃から後半期にかけて活動が展開するまでに堆積した層であり、堆積時期が限定できる。また3区と4-1区の遺構面の上には、縄文時代の包含層（11・12層）を挟んで辺り一面が冠水状態になった洪水の堆積層（6層）が確認でき、4-1区ではさらにその後に発生した激しい流れの洪水による堆積層（4・5層）が認められた。このように、京田遺跡では遺構面と洪水堆積層、そして縄文時代の包含層の層位的な関係性が明確に把握できることが重要な成果の一つである。

(幡中光輔)

註

(1) 土層の堆積状況については、洪水堆積層を中心に中村唯史氏からご教示を得た。

参考文献

守岡正司編 2017 『のの子谷横穴墓群 京田遺跡3区』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 島根県教育委員会

第2表 3区と4-1区の土層対応関係

4-1区 土層	土層の性格	出土 遺 物	出土遺物・年代測定等 による推定堆積時期	対応する 3区土層
1層	表土・耕作土	—	現代	1層
2層	耕作土	—	—	—
3層	遺物包含層 (古墳～中世)	須恵器・土師器・擂鉢等 少量含む	中世以降	2層
4層	洪水堆積層	弥生土器・縄文土器等 少量含む	縄文晚期後葉～弥生後期頃	—
5層				—
6層	洪水堆積層	縄文土器等・骨片含む	縄文晚期後葉～弥生前期頃	3-1層
11層	遺物包含層 (縄文)	縄文土器等・骨片含む	縄文後期後葉頃	3-2層
12層		縄文土器等・骨片 多く含む		4層
4-1区 遺構面				
21層	4-1区遺構面形成層	縄文土器等・骨片含む	縄文後期中葉頃	—
3区 遺構面				
22層	3区遺構面形成層 (洪水堆積層)	縄文土器等 少量含む	縄文後期中葉以前	5層

第3節 4-1区の遺構と遺構内出土遺物

ここでは4-1区で確認した遺構と遺物について報告する。中心となる山陰地方の後期中葉の土器については、近年徐々に土器編年研究が進み（千葉2001、柳浦2010・2017aなど）、概ね瀬戸内地域や近畿地方と同じ方向性で変化することが分かってきたが、具体的な事例に乏しく、実態が明らかにされていない（柳浦2017b）。一方、近畿地方では京都府桑飼下遺跡（渡辺編1975）や兵庫県佃遺跡（深井編1998）、大阪府三宅西遺跡（中村編2009）など、これまでに各地で後期中葉の良好な資料の蓄積があり、また、近年では京都府一乗寺向畠町遺跡の正式報告がなされ（上峰ほか編2013）、各時期の土器の詳細な様相と土器編年研究が進展している（岡田・深井1998、千葉編2010、小泉2014、千葉2014・2015など）。よって、第3・4節の遺構・遺物の時期および土器の特徴は、特に後期中葉について近畿地方の土器編年研究の型式内容を参照して報告し⁽¹⁾、第5節や第6章第3節で改めて京田遺跡を含めた当該地域の後期中葉の土器編年を整理して検討・評価することにしたい。

また、石器については器種と石材を中心に報告する⁽²⁾。器種の判別については、近年の一乗寺向畠町遺跡の報告など（図版参照）で各器種の分類基準が示されており、第3・4節で出土した石器の器種同定の参考にした。また第4節第3項（77頁）で詳しく述べるが、主に打製石器で使用される安山岩は4種類（青灰色・灰色・灰白色・暗灰色）が確認されており、判別可能なものは記述している。

1 穫穴建物跡SI1601と柱穴SP1601～1605（第13図、図版4・9・10・14）

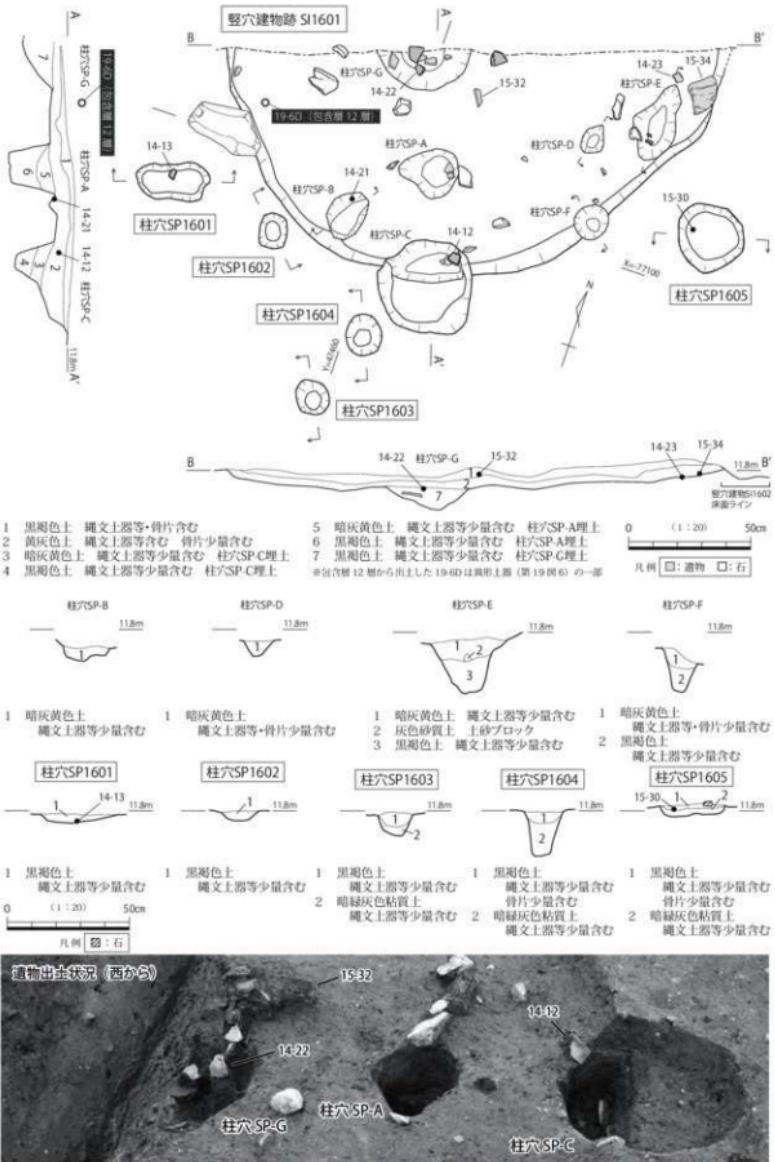
4-1区中央部の調査区北壁土層の21層が不自然に落ち込んでいたことから、その高さで21層上面を精査したところ、複数の柱穴を持つ落ち込み状の遺構を確認した。遺構内には明確な炉跡が確認できなかったため住居跡と確定できず、竪穴建物跡とした。

竪穴建物跡SI1601の検出面の標高は約11.8mであり、床面は21層を8cm程度掘り込んで形成されている。平面形は円形もしくは楕円形になる。今回の調査では遺構全体の3分の1程度を確認したもの、残りの部分は調査区外の北側に向かって伸びているため、全体の正確な規模は不明であるが、現行での長軸は2.08mを測る。平面形を円形と想定して復元すると、概ね長軸2.32m、短軸2.06m程度になると推測され、楕円形の場合はさらに長軸が伸びて大きくなる。

SI1601では柱穴SP-AからSP-Gを確認しており、SP-A・C・E・Fはある程度深く掘り込まれているが、SP-B・Dはそれほど深く掘込まれておらず、補助柱穴の可能性がある。主柱穴はしっかりと掘り込みのあるSP-A・C・E・F・Gであろう。SP-Gからは遺物がまとまって出土した。SP-Cは二段の掘り込みを持ち、やや広いが柱抜き取り穴の可能性もある。その場合、SP-Cの主柱の抜き取り後、近接するSP-Aに主柱を設けたとも考えられよう。なお、柱痕跡は確認できなかった。

柱穴SP1601～1605はSI1601の周辺に広がっており、竪穴建物跡に関連した柱穴であったと考えられる。SP1603・1604は比較的掘り込まれているため柱の痕跡と思われるが、SP1601・1602・1605は非常に浅く、建物を支える柱穴とは考えにくい。

SI1601の床面とその埋土1・2層からの出土遺物には時期差はほとんど認められず、建物跡廃絶

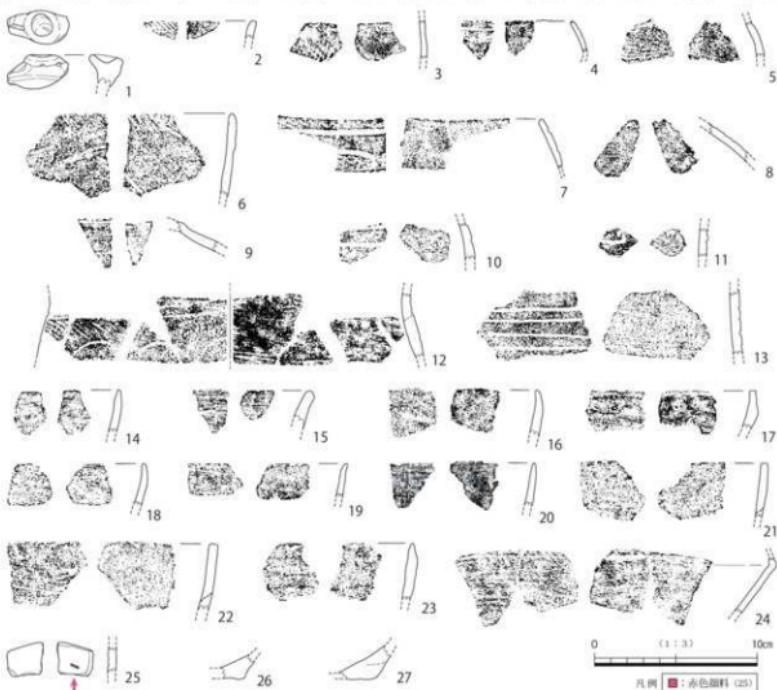


第13図 竪穴建物跡 SI1601 および柱穴 SP1601～1605

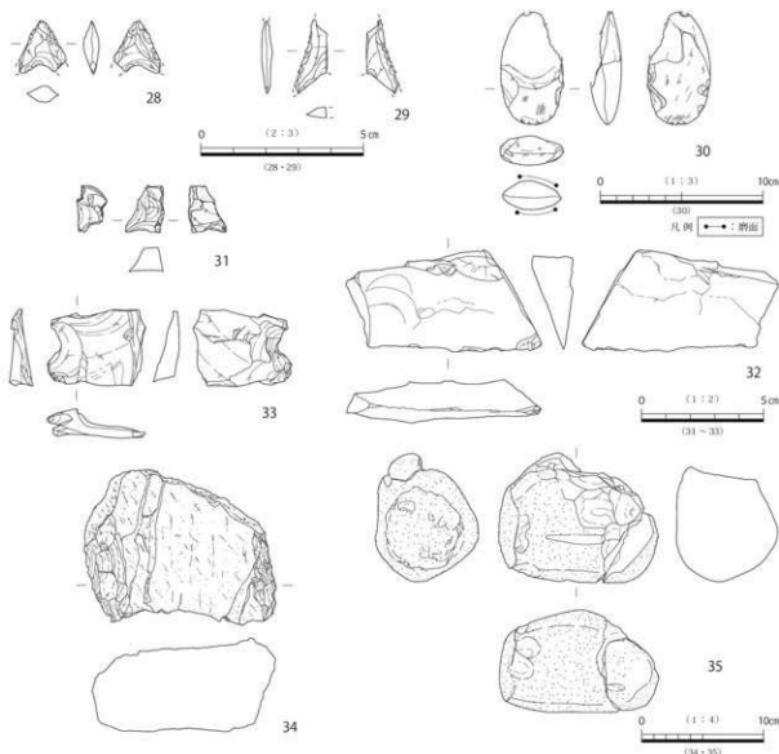
後にほどなくして埋まったと予想される。なお、SP-A から出土した土器（第14図1）は床面出土土器よりも古い後期前葉に比定できるが、土器に隣接していた疊付着の炭化物塊の年代測定を行ったところ、後期前葉を示す年代値が示された（第5章第2節）。よって、これらは柱穴掘削時や柱抜き取り後などに遺構面下の21層中の土器や炭化物などが混入したものと判断した。出土遺物から考えると、これらの遺構が営まれた時期は後期中葉の一乗寺K式期頃であろう。

2 穴建物跡 SI1601 と柱穴 SP1601・1605 出土遺物（第14・15図、図版18・21）

第14図1～27は縄文土器で、1～13は有文土器である。1～5は穴建物跡SI1601内の柱穴から出土した。柱穴は21層を掘り込んでおり、埋土には21層中の土器が混在する。柱穴SP-Aから出土した1は円環状の突起を持ち、後期前葉の成立期縁帶文土器に比定できる。RL縄文（撚りが2段RLの縄文）を口縁部内面に施す2はSP-C、胴部にRL縄文を持つ3と口縁端部を刻む鉢の4はSP-F、RLによる擬似羽状縄文を施した可能性がある5はSP-Gの底面から出土した。これらは概ね後期中葉に収まる。SI1601の1層中からは6～11が出土している。そのうち6は12層（包含層）出土の土器と接合した。6は深鉢の口縁部で上面の内外面に細かく不定形な斜め刻みがあり、一乗寺



第14図 穴建物跡 SI1601・柱穴 SP1601出土遺物（1）



第15図 積穴建物跡 SI1601・柱穴 SP1605 出土遺物 (2)

K式期と考えられる。7はLRによるZ字状の結節縄文が施された鉢または浅鉢の口縁部で、一乗寺K式期のものであろう。8・9は注口土器の胴上部で、8は刺突のある多条沈線が施され、9は沈線区画帶内に巻貝回転による擬縄文や細かい刻みを充填する。8・9は概ね一乗寺K式と思われるが、9は後期中葉の元住吉山I式まで下る可能性がある。10・11は比較的細い沈線が施され、後期中葉頃と思われる。12は遺構の床面上から出土した深鉢の胴部で、12層出土の土器と接合した。連弧文と燃り戻しのある直前段多条のRRL(燃りが3段RRL)縄文が施文され、連弧文内は縄文が磨り消されている。一乗寺K式期と考えられる。13は柱穴SP1601から出土した有文土器の深鉢の胴部で、摩滅が激しく不明瞭だが、沈線区画帶内に細かい斜め刻みがめぐると思われる。一乗寺K式から元住吉山I式的時期であろう。1層中から九州系の西平式(第42図93)の破片が出土したが、12層の土器が混入したものと思われる。なお、遺構上面の12層からは異形土器片(第19図6D)が出土した。

14～23は無文土器の深鉢の口縁部で、床面や1～2層、SP-G内から出土した。口縁端部は尖るものや平たく面取りされたものが多い。器面調整は有文土器を含めほとんどがナデ調整で、そのなか

に巻貝条痕後にナデ調整を施すものが確認できる。17は口縁部外面にミガキ調整を施して、丁寧に仕上げられている。24は注口土器の胴下部と思われ、1層と包含層の12層出土破片が接合した。25は深鉢もしくは鉢の胴部で、内面に付着する赤色顔料は水銀朱である（第5章第4節）。26・27は2層出土の底部片で、26は底部外面の外縁部のみが接地する緩やかな凹底、27は底部外面が平坦で全面接地する平底である。

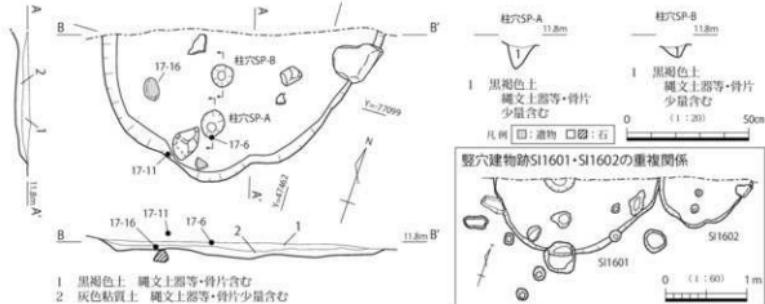
第15図28～35は石器である。28・29は石鏃で一部が欠損する。28の側縁は緩やかに外湾し、脚端部は尖る。29はやや内湾するか、S字状の側縁に仕上げられたと思われる。石材は28が安山岩（灰）、29は安山岩（青灰）である。30は柱穴SP1605から出土した小形の磨製石斧で、丁寧に研磨された刃部は残存しているが、基部付近は剥落して欠損している。石材は安山岩である。31は瑪瑙製で側縁に微細剝離痕のある剥片である。32も微細剝離痕がある剥片で、刃器として使用されたと考えられ、石材は安山岩（灰）である。33は剥片で、石材は安山岩（暗灰）であろう。以上は1層中から出土した。34は2層から出土した安山岩（灰）の板状石核素材と考えられ、一部に剥離痕が残る。35は1層上面から出土したもので、明確な使用痕は確認できないものの、平坦面は意図的に作り出された可能性があり、特殊な石製品と考えた。石材は他に見受けられない热水変質安山岩である。

3 竪穴建物跡SI1602（第16図、図版4・10）

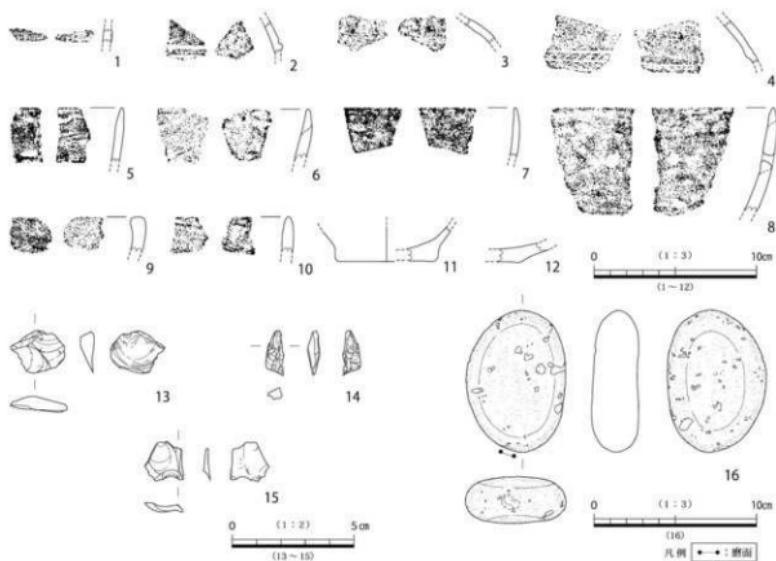
竪穴建物跡SI1601の東端部を一部削って設けられた竪穴建物跡SI1602は、SI1601とほぼ同じ標高約11.8mであり、平面形は円形か楕円形であろう。住居跡としては小規模なSI1601よりもさらに小さく、長軸は現行で1.16m程度である。楕円形であったとしても概ね長軸1.68m、短軸1.20mほどになると想定され、それほど大きくならないと考えられる。

柱穴は内部に2基確認されている（柱穴SP-A・B）。小規模な平面積で柱穴の規模も小さく、深さも7cm程度と浅い。床面はSI1601と同様に21層を掘り込んでおり、SI1601が使われなくなった後にSI1602が設けられ、その廃絶後に1・2層が堆積したと思われる。

遺構の時期は出土遺物が少なく判断が難しいが、重複関係からSI1601と同時期かやや新しいと思われ、一乗寺K式から元住吉山I式期にかけての時期と考えられる。



第16図 竪穴建物跡SI1602



第17図 穴穴建物跡 SI1602 出土遺物

4 穴穴建物跡 SI1602 出土遺物（第17図、図版18・21）

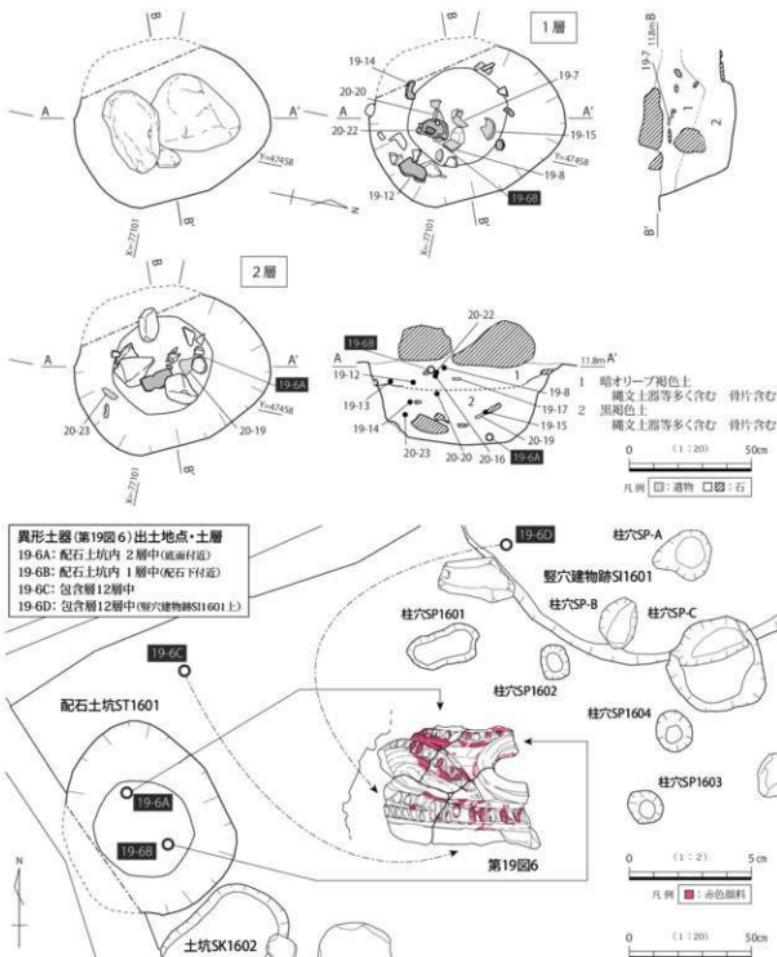
第17図1～12は縄文土器である。1～4が有文土器で、1層中から出土した。1・2は深鉢もしくは鉢で、1は刺突のある沈線と密な斜め刻みが施される。2は摩滅が激しく不明瞭だが、沈線区画帯内に貝巻回転による擬縄文が認められる。3・4は注口土器の胴上部と考えられる。3は沈線のみ、4は沈線区画帯内に矢羽根状に沈線を描く。4はやや古い可能性があるが、これらは概ね一乗寺K式から元住吉山I式の範疇に収まると考えられる。

5～10は無文土器の口縁部、11・12は底部である。出土量が少ないが、尖った口縁端部で器面調整が内外面とともにナデ調整のものが目立つ。これらは深鉢と思われる。11は深鉢の底部で平底、12は浅鉢もしくは皿の底部で平底である。10は2層から出土したが、それ以外は1層から出土した。

第17図13～16は石器で、13・14は黒曜石製、15は流紋岩製の剥片である。16はデイサイト製の扁平な磨石と考えられ、下端の一部にわずかに摩滅が認められる。13は1層、14は2層から出土し、15と16は遺構の底面から出土した。

5 配石土坑 ST1601（第18図、図版4・5・11）

発掘調査で確認された土坑のうち、上部に石が据えられたものを配石土坑ST1601として報告する。配石土坑は調査区中央の穴穴建物跡SI1601に近い位置で1基確認された。一部は調査区内の排水用溝で削平されたが、本来の平面形は長軸0.80m、短軸0.67mの橢円形であると想定され、深さは0.34m



第18図 配石土坑 ST1601・異形土器出土状況

である。

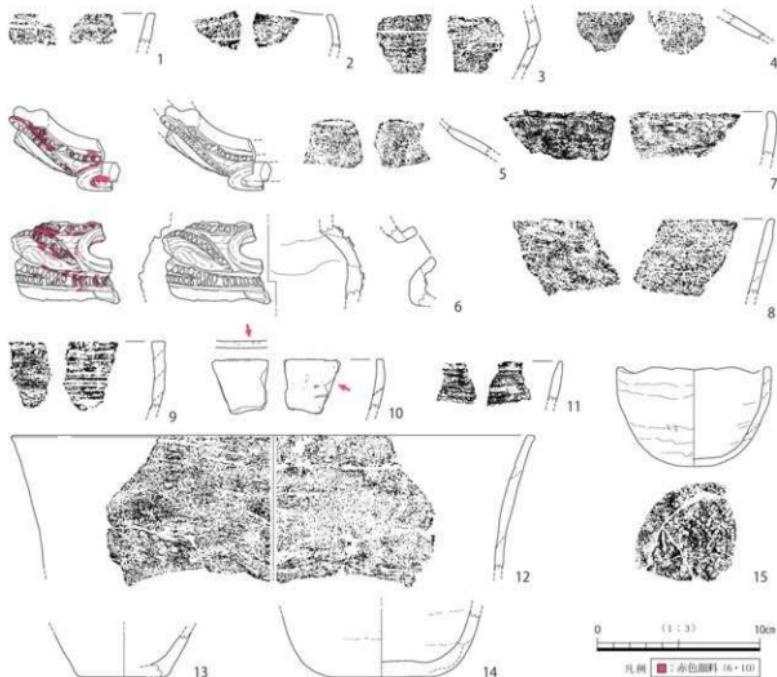
内部は上下2層の埋土があり、拳大程度の礫のほか、土器や石器などが多く含まれていた。そのなかに異形土器の破片が確認され(第19図6)、ST1601に近い地点の包含層12層中から出土した別破片とも接合した(第18図下)。ST1601の埋土への混ざり込みの可能性もなくはないが、遺構内出土の二片のうち一片は遺構の底面付近、もう一片は配石直下と分散して出土し、また遺構近くから他の破片が出土したことを積極的に評価すれば、破碎した異形土器片の一部をST1601内に埋納し、

他の破片は周囲に散布した公算が大きい。その後土坑の上部に石が据えられたと考えられる。

なお、土坑内に明確な人骨は確認されず(第5章第1節)、墓にしてはやや小さいものの、小児の墓や再葬など二次的な埋葬による墓の可能性があり、石は標石として据えられたと考えられる。また、配石土坑に近い調査区の北壁土層にはST1601の標石と似た質感の石が確認され、他の配石土坑が北側にも存在したことが予想される。遺構の時期は、標石配置後に混ざり込みがないと考えられるため、土坑内で最も新しい土器の時期である元住吉山I式期頃であろう。

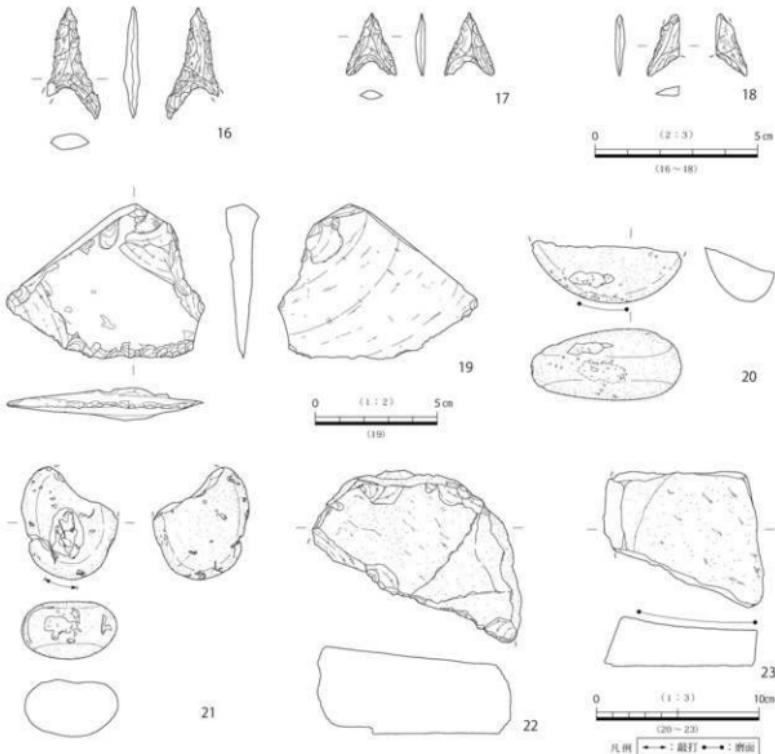
6 配石土坑 ST1601 出土遺物 (第19・20図、図版8・17・18・21)

第19図1~15は縄文土器で、1~6は有文土器である。1・2は深鉢の口縁部で、1は摩滅が激しいが、沈線区画帯にはRL縄文が施されたとみられる。2は刺突のある沈線区画帯を持つ。区画帯内にはLR縄文が施された可能性があるが、摩滅が激しく不明瞭である。1はやや古い可能性があるものの、1・2は概ね一乗寺K式期に収まると思われる。3は深鉢の胸部で、区画沈線の下に斜め刻みがめぐる。4・5は注口土器の脇部と考えられ、斜め刻みが充填される沈線区画帯が確認できる。これらは元住吉山I式と考えられる。1~5は1層から出土した。6は異形土器で、全体の器形



第19図 配石土坑 ST1601 出土遺物 (1)

明であるが、残存する下部が外側へ開き、胴上部もしくは頸部の一部であると考えられ、東日本の影響を受けた可能性が高い⁽³⁾。胎土や質感は他の在地土器とは異なる（第5章第3節）。立体的な円窓を持ち、刻みを付けた隆帯を全体にめぐらせる。円窓横やその上部には粘土を貼り付けでつくり出した隆帯に刻みを施し、隆帯に沈線を沿わせて立体感を演出するが、円窓下部は粘土貼り付けをせずに、やや深い2本の沈線で隆帯を表現して刻みを施す。内面はナデ調整で粘土組の接合痕が残り、外面はミガキ調整で丁寧に仕上げて光沢を帯びる。外面には赤色顔料が全体的に付着しており、当時はほぼ全面に塗られていたと思われる。また赤色顔料は内面の一部にも塗られており、円窓内部と内側に赤色の指紋状の痕跡が観察できることから、円窓から差し込んだ指頭によって内側にも部分的に塗布したことが分かる。分析の結果、赤色顔料は水銀朱であり、その産地は北海道余市郡の明治鉱山である可能性が示されている（第5章第4・5節）。前述のように、異形土器はST1601内の1・2層出土の破片（第19図6A・6B）とST1601周辺の遺構面近くの12層（包含層）から出土した破片（第19図6C）、竪穴建物跡SI1601上の12層出土破片（第19図6D）の合計4破片が接合しており、破碎さ



第20図 配石土坑 ST1601 出土遺物（2）

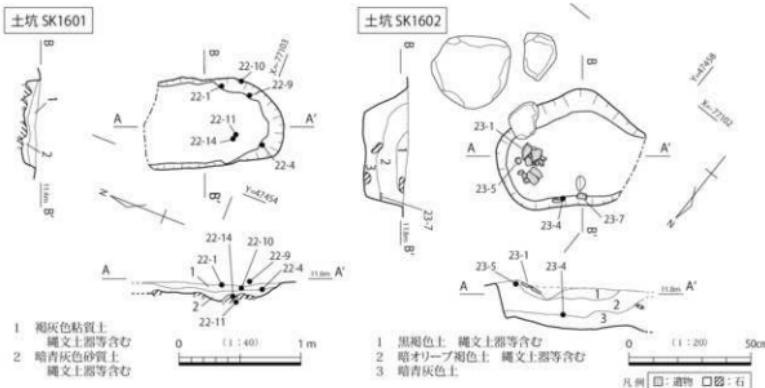
れた後に一部は ST1601 のなかに埋納され、その他は周辺に散布されたものと推測される。

7～12は無文土器の深鉢の口縁部である。器面調整は巻貝条痕や二枚貝条痕後にナデ調整を施すものが目立ち、その多くは口縁端部が平たく面取りされている。13は底部で平底である。14・15は小形土器で、後期前葉から中葉にかけて安定して存在する⁽⁴⁾。全体がナデ調整で仕上げられ、粘土紐の接合痕が残る。14・15ともに粒度の細かい胎土で、表面には煤が付着する。15は内面にも煤が付着し、口縁端部が面取りされて緩やかに波状となる。底面には製作時の敷物圧痕が確認され、縄目の可能性もあるが判然としない。7～15は1層から出土した。

第20図 16～23は石器で、16～18は石鎌である。16は比較的大な石鎌で、基部が深く抉られる。S字状の側縁は細かく丹念に両面調整され、細長い先端部をつくる。17・18は側縁が直線状に仕上げられ、脚端部は尖り気味である。17は両側縁に両面調整が施される。18は右半分が欠損しているが、左側縁は両面調整がなされる。石材は16・17が安山岩(灰)、18は流紋岩である。19はディサイト製の削器で、腹面には打痕が残り、片面調整で刃部が形成された後に一部が欠損する。20は流紋岩製の磨石で、下端が摩滅している。21は安山岩製の敲石/凹石であり、下端に敲打痕、表面中央にはやや浅い凹みが確認できる。どちらも上半部が欠損している。22は安山岩製の板状石核素材である。23は欠損して一部しか残っていないが、安山岩の石皿で、表面が摩滅している。1層出土は16～18・22、それ以外は2層から出土した。

7 土坑 SK1601 (第21図、図版12)

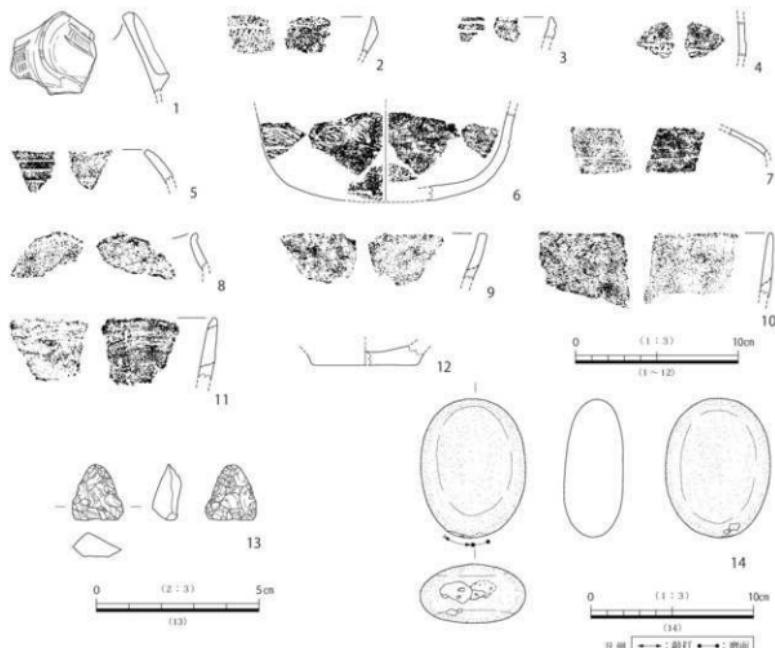
調査区西側で確認された平面形が長方形の土坑である。現行で長軸1.14m、短軸0.74mであるが、遺構の一部は調査区内の排水用溝で削られている。掘り込みは14cm程度にとどまる。遺構内の埋土は2層堆積しており、遺物の出土も一定量確認できる。遺構の時期は、出土遺物から一乗寺K式から元住吉山I式期と判断できる。



第21図 土坑 SK1601・1602

8 土坑SK1601出土遺物(第22図、図版17・19・21)

第22図1~12は縄文土器で、1~7は有文土器である。1は口縁部で波頂部にノ字状隆帯を持ち、深鉢もしくは鉢と考えられるが、注口土器の口縁部の可能性もある。口縁部上面の沈線区画帶内に二枚貝腹縁による刻みを密に施し、左側は幅の広い区画帶内に充填するように多段に刻む。やや不明瞭だが、刻みはノ字状隆帯の上にもみられる。一乗寺K式に比定できる。2・3は深鉢の口縁部で、3は沈線区画帶のみだが、2は区画沈線に沿って斜め刻みを施す。4は深鉢の胴部と考えられ、隆帶上にLR縄文を施した後に縦刻みをめぐらせる。5・6は鉢で、5の口縁部上面は沈線区画帶にRL縄文を施し、下の区画帶内には刻みが密に施される。6は胴部から底部で、底部は丸底である。胴部は区画沈線と末端に刺突のある下弦の連弧文が描かれ、連弧文内には無節のR縄文が充填される。7は注口土器の胴上部で、文様帶には巻貝回転による擬縄文が充填される。5・6は一乗寺K式、7は元住吉山I式かやや古い可能性がある。8~11は無文土器の深鉢口縁部で1~2層から出土した。8の口縁部は波状を呈し、口縁端部を折り返して平たく面取りする。9は表面に煤が付着する。12は底部で平底であり、2層から出土した。



第22図 土坑SK1601出土遺物

第22図13・14は石器で、13は黒曜石製の石鎚だが基部に抉りがみられず、未製品と考えられる。側縁は若干外湾するが基本的に直線に仕上げられる。14は砂岩製の敲石／磨石で、下端に敲打痕と摩滅が確認できる。全て1層からの出土である。

9 土坑SK1602(第21図、図版4・12)

配石土坑ST1601に隣接する土坑である。現行で長軸0.58m、短軸0.47m、深さ0.17mの長方形の土坑で、ST1601と同様に一部が排水用の溝によって削られており、長軸はさらに長かったと推測される。また20cmほどの近接した場所に人頭大の石が確認でき、土坑SK1602の上部あるいは周辺に据えられた標石の可能性など、何らかの関連性を想起させる。

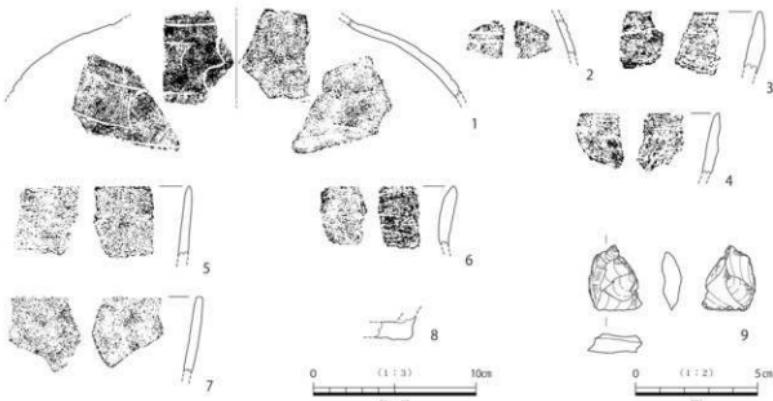
遺構内に確認できる3層の埋土のうち、1層中および土坑上面に遺物が集中する。第23図1は、土坑上面で他の破片とともに一箇所にまとまっており、包含層の12層出土土器に同一個体と思われる破片が確認できた。遺構の時期は一乗寺K式から元住吉山I式期と考えられる。

10 土坑SK1602出土遺物(第23図、図版19・21)

出土遺物は少なく、第23図1～8は縄文土器で、1・2は有文土器である。1は注口土器の胴部で、文様帶には巻貝回転による擬繩文が充填されており、元住吉山I式と考えられる。2は深鉢の胴部で、巻込文が描かれ、一乗寺K式と思われる。1は土坑上面および1層、2は1層から出土した。

3～7は無文土器の深鉢の口縁部で、口縁端部は尖り気味のものや平たく面取りしたものが多い。6は内外面ともに巻貝条痕後にナデ調整が施される。8は底部で平底である。2層から出土した7以外は、全て1層からの出土である。

第23図9は黒曜石製の楔形石器で、両側縁に剪断面を持つ。上端と下端に微細剥離痕が確認でき、両極打法で調整された可能性がある。1層から出土した。

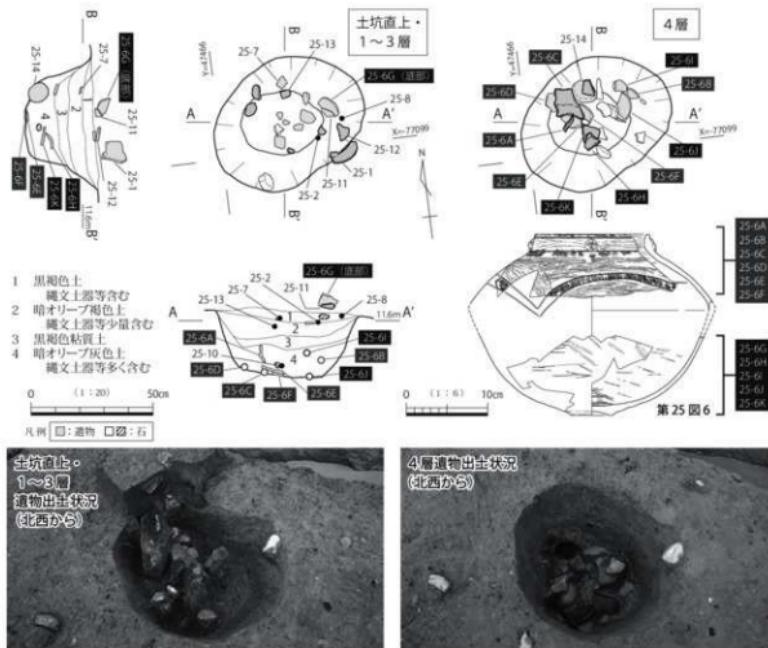


第23図 土坑SK1602出土遺物

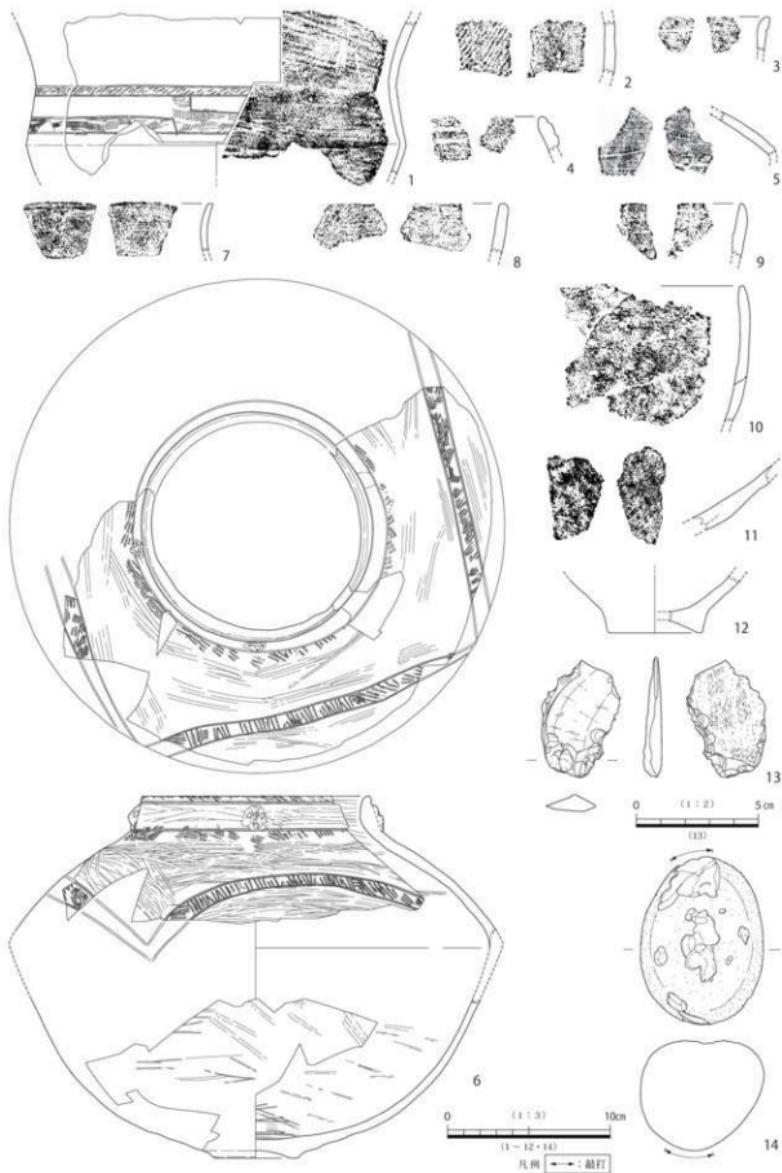
11 土坑 SK1603 (第24図、図版5・13)

土坑SK1603は竪穴建物跡などの遺構が集中する地点からやや離れた調査区東側に営まれている。長軸は0.61m、短軸は0.53m、深さは0.29mで平面形は楕円形であり、1~4層の埋土が確認できる。1・2層には遺物がまばらに混ざっていたが、3層中からはほとんど確認されていない。3層下の4層からは遺物がまとまって出土し、注口土器(第25図6)の大破片が確認できる。この注口土器の口縁部から胴上部の破片は土坑底面から折り重なって出土した。その破片同士は隙間なく丁寧に重ねられており、意図的に埋納した可能性が高い。

さらにも注目されるのは、その注口土器の底部(第25図6G)が土坑直上に斜めに立てられ、また脇に同時期の深鉢胴部(第25図1)の大破片が直立した状態で出土したことである⁽⁵⁾。そのため、破碎した注口土器片を中心に土坑内に埋納した後、注口土器の底部と深鉢胴部の大破片を土坑上部に据えたという一連の埋納行為が復元できる。土坑上に立てられた土器片は土坑の掘形の高さから若干浮いており、これは土坑が埋められた後にマウンド状に盛り上げられていた可能性を示唆する。土坑底面に埋納された注口土器から、遺構の時期は元住吉山I式期であると思われる。



第24図 土坑SK1603



第25図 土坑SK1603出土遺物

12 土坑 SK1603 出土遺物（第25図、図版17・19・22）

第25図1～12は縄文土器で、1～6は有文土器である。1～3は深鉢で、1は頸部の沈線区画帶に二枚貝背部押圧による擬縄文を充填する。胴上部に沈線を描き、頸部の区画帯までの間に巻貝回転による擬縄文を施す。その後末端に刺突を持つL字状の沈線によってクランク文を描く。2は胴部でLR縄文が全面に施され、3は口縁部上面にRL縄文を施した後に沈線で区画される。4は鉢もしくは浅鉢の口縁部であると思われ、3条の沈線が確認できる。5は巻貝回転による擬縄文と二枚貝腹縁による刻みが無文部を挟んで上下の文様帶に施される注口土器の胴上部である。1は土坑直上、2～5は1～2層から出土した。6は注口土器で、意図的に土坑底面に埋納された大破片を中心にして多数の破片が4層中から出土した。頸部には、粘土を貼り付けて隆起させ、刺突を施した貼り付け隆帶が2箇所で確認できる。もう1箇所には貼り付けた隆帶が焼成前に剥がれ落ちた痕跡が認められ、復元すると4単位の隆帶を持つと考えられる。こうした注口土器の表現は西日本であり見受けられず、東日本など他地域からの影響を考慮する必要がある。胴上部には文様帶がめぐり、大振りな連弧文を描くが、真上から俯瞰すると方形となる文様構成に仕上げられている。文様帶には、二枚貝背部押圧による擬縄文が充填され、擬縄文は口縁部上面の沈線区画帶と区画沈線が描かれる頸部にも確認できる。頸部と口縁部の内面、そして外面の口縁部から胴上部にかけて丁寧にミガキ調整が施され、胴下部は内外面ともに巻貝条痕調整とナデ調整が確認できる。底部は高台底で、11とともに土坑直上に斜めに立てられた状態で出土した。2・3が後期中葉の北白川上層式3期から一乗寺K式と考えられ、1・5・6は元住吉山I式に比定できる。4は後期中葉頃に収まると思われる。

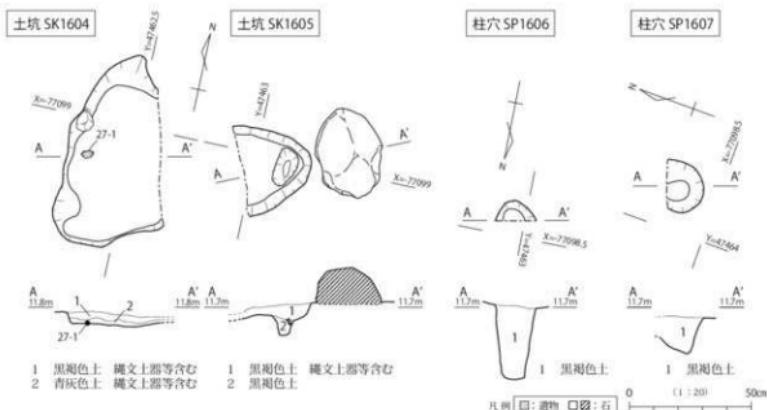
7～10は無文土器の深鉢の口縁部である。7・8は口縁端部を平たく面取りしており、7の外面はミガキ調整で仕上げられる。9は口縁端部を内面に折り返している。10の口縁部上面の外面には煤が付着し、内外面ともに巻貝条痕後にナデ調整が施される。11・12は胴下部から底部であり、12は凹底になる。7～9は1～2層、10は4層、11・12は土坑直上から出土した。

第25図13・14は石器で、13は抉り部に微細な剥離痕がある安山岩製の剥片である。14は上端と裏面に敲打痕、表面中央に凹みがあるディサイト製の敲石／凹石である。13は2層、14は4層から出土した。

13 土坑 SK1604・1605 と柱穴 SP1606・1607（第26図、図版12・14）

土坑SK1604・1605は竪穴建物跡SI1602の東側で確認できた。2つの土坑として認識したが、両土坑間は排水路用の溝によって削られ、全体の形状や重複関係は不明瞭である。現行でSK1604は長軸0.78m、短軸0.43m、SK1605は長軸0.37m、短軸0.29mで、深さはともに数cm程度にとどまる。両者が同一の土坑である場合、長軸は1.06m程度になり、平面形は不整形で大型の土坑となる。

SK1605は内部に柱穴を持ち、人頭大ほどの石が脇に据えられていた。何らかの施設の一部として機能していたのかもしれない。明確ではないが、SK1604の壁際付近にもやや落ち込んだ場所が確認でき、柱穴が存在した可能性がある。



第26図 土坑SK1604・1605および柱穴SP1606・1607



第27図 土坑SK1604・1605出土遺物

柱穴SP1606・1607は調査区北東側で見つかっており、排水用の溝で半分程度が削られている。SP1606・1607ともに一定の深さを持つ。特にSP1606はかなり深く、建物などの柱穴であろう。周辺に他の遺構は確認できなかったが、調査区外の北側に何らかの遺構が存在する可能性がある。

遺物はSK1604で1層および底面、SK1605では1層から出土したが総じて少なく、遺構の時期は一乗寺K式から元住吉山I式期と考えたい。なおSP1607からは土器の小片がわずかに出土した。

14 土坑SK1604・1605出土遺物(第27図、図版19)

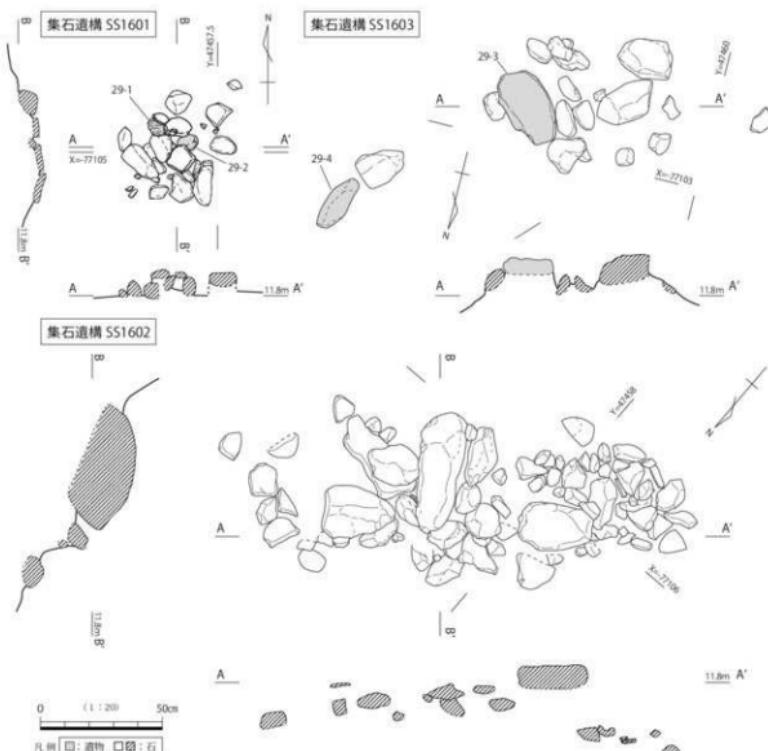
第27図1・2は土坑SK1604出土の無文土器、3は土坑SK1605出土の有文土器である。1・2は深鉢の口縁部で、2は口縁端部を面取りしている。3はRL繩文が施された深鉢、もしくは鉢の胴部で、概ね北白川上層式3期から一乗寺K式期に収まると思われる。

15 集石遺構SS1601～1603(第28図、図版13)

調査区中央部・西側の南壁近くで確認された遺構である。竪穴建物跡やその他の遺構からやや離れた地点にまとまっており、調査区外の南側には同様の集石遺構がさらに広がっていた可能性がある。集石遺構SS1601～1603に使用された石材は安山岩が主体を占める。

SS1601は拳大の礫を十数個集めており、その中には石核や敲石／磨石が確認された(第29図1・2)。集石範囲は縦0.49m、横0.48mである。

SS1602は調査区南壁面で確認されており、南側の調査区外にまで広がると思われる。集石の範囲



第28図 集石遺構 SS1601～1603

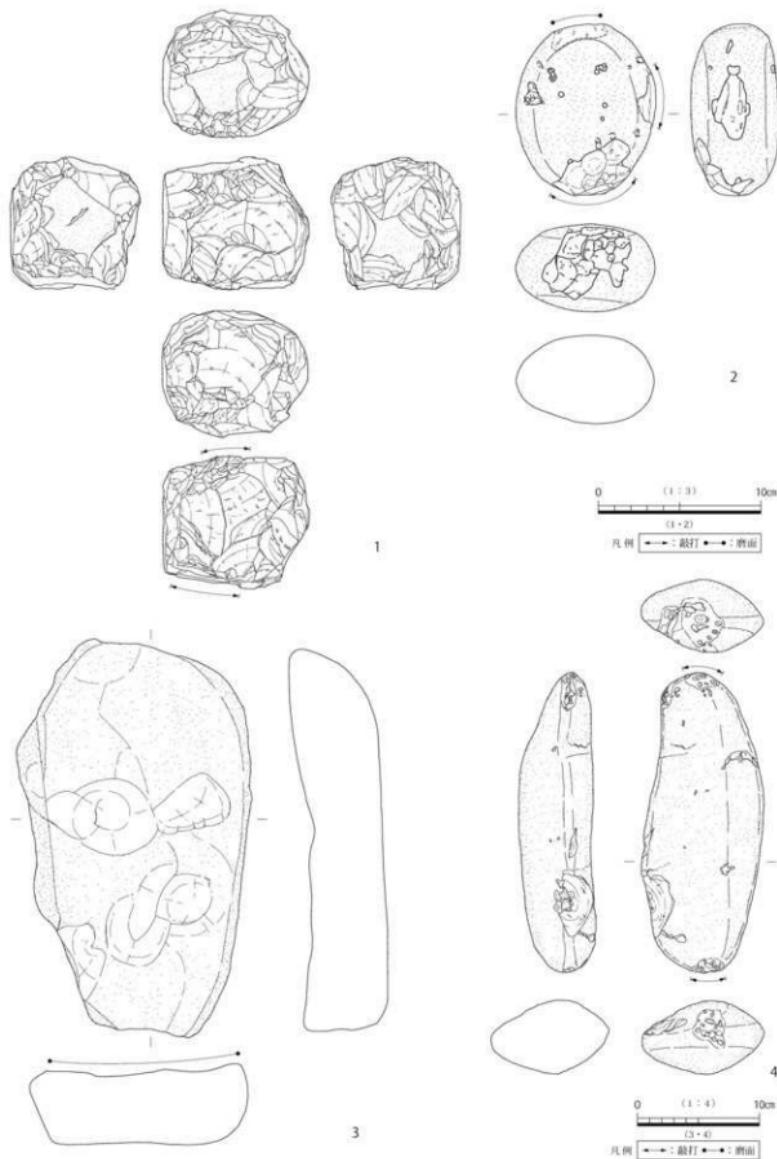
は縦0.72m、横1.98m程度で、集石遺構のなかで最も広範囲に展開する。集石の構成は拳大の礫が主体を占めるほか、人頭大もしくはそれ以上の大型の石が散見される。

SS1603の集石範囲は縦0.77m、横1.87mほどである。集石の構成は拳大の礫に人頭大の石が混じっており、SS1602の様相に近い。人頭大の石には、石皿や敲石が転用されている(第29図3・4)。

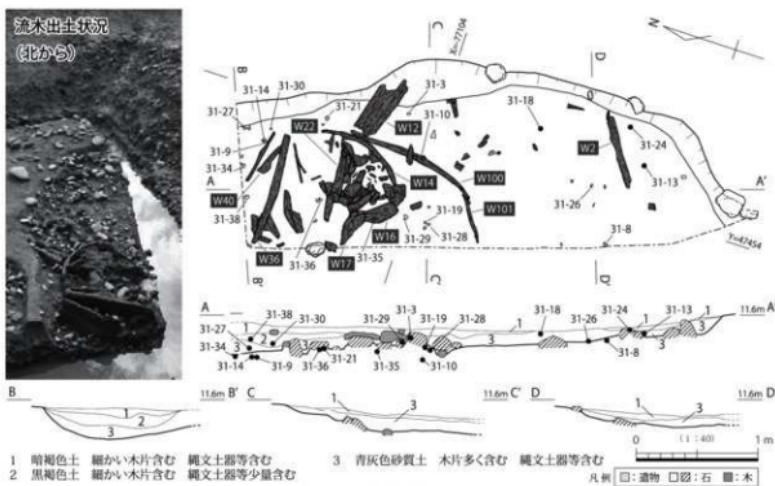
遺構時期に関連する遺物はほとんど確認されなかったが、他の遺構と同一遺構面にある点などから判断すると、概ね一乗寺K式から元住吉山I式期の頃であると考えられよう。

16 集石遺構 SS1601～1603 出土遺物(第29図、図版22)

第29図1～4は石器で、1・2は集石遺構SS1601の一部をなしていた。石器として使用された後に集石遺構に転用されたと考えられる。1はデイサイト製の核石で、6面全面に剥離痕が確認できる。各面の端部に敲打痕が残り、敲石としても使用された可能性がある。2は同じくデイサイト製の敲石/磨石で、上端は摩滅しており、下端と右側面に敲打痕がみられる。



第29図 集石遺構 SS1601～1603 出土遺物



3・4は集石遺構 SS1603の一部に転用された石器で、3は砂岩製の石皿、4はやや敲打痕が不明瞭であるが、敲石と考えられる。石材は安山岩である。

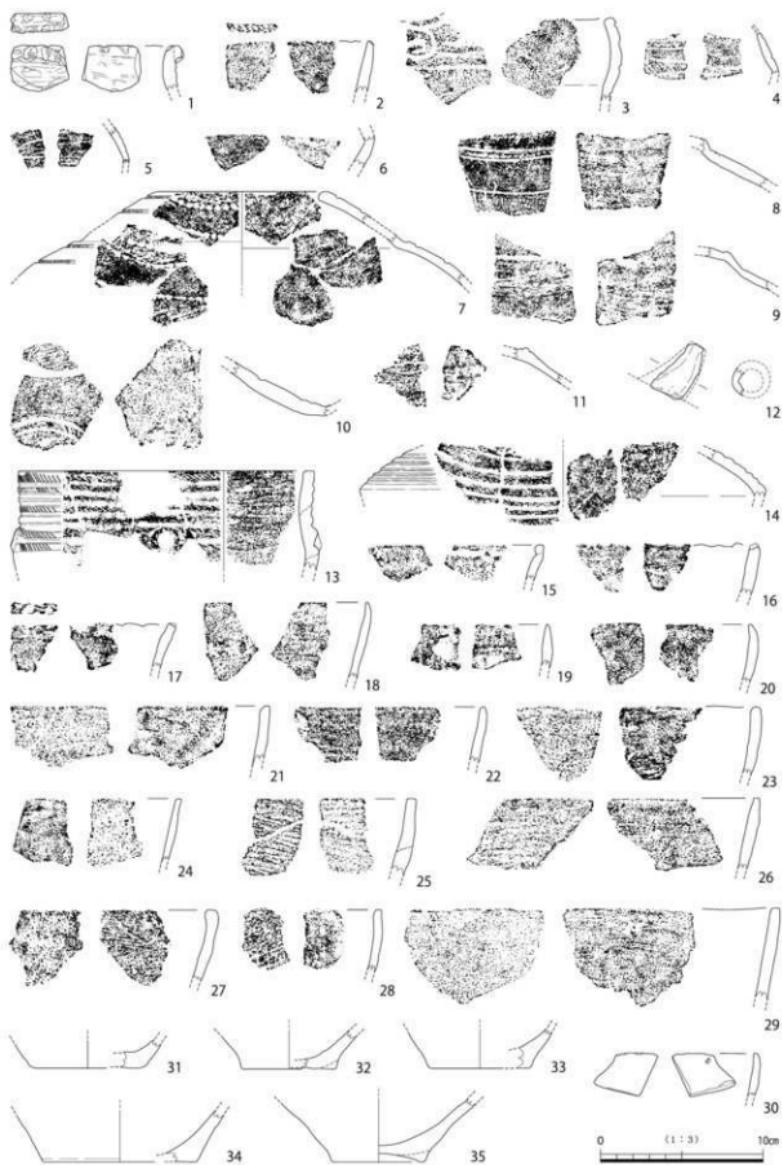
17 自然流路 NR1601 (第30図、図版15)

自然流路 NR1601 は調査区西側の端で確認された。流路の規模は現行で長さ 4.08m、幅 1.54m で、流路の西側が洪水（包含層4・5層）や排水用溝によって削られているため正確な値は不明であるが、現行よりも少し幅があったと思われる。深さは最大で 26cm 程度で、北側に向かうにつれて深くなる。

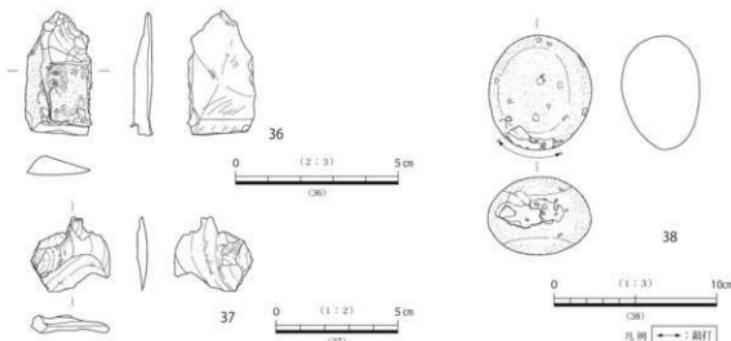
流路内は1～3層が堆積し、3層からの遺物の出土が多い。また底面には礫が溜まっており、その上には流木がまとまって確認された。流木の大半は3層中に含まれて流路の北側に集中しており、樹種同定の結果（第5章第2節）、それらは概ねクリ・トネリコ属であることが判明した。また流木の一部でAMS年代測定を行ったところ、晩期後葉～弥生前期頃の年代が得られた（第5章第2節）。出土遺物は縄文時代前期から晩期までと幅があるが、晩期後葉～弥生前期頃の流路によってそれ以前に堆積した包含層や遺構面、またその下層が削られて様々な時期の遺物が混入したと考えられ、最も新しい出土遺物は晩期中葉の土器（第31図16・17）であり、年代測定結果と矛盾しない。

18 自然流路 NR1601 出土遺物 (第31・32図、図版20・22)

第31図1～35は縄文土器で、1～17是有文土器である。1～3は深鉢で、1の口縁部は前期前葉の長山式に比定され、今回の調査で出土した土器のなかで最も古い。貼り付け突带上に刻みを施し、口縁部端部から内面にも刻みを付ける。外面には粗い条痕調整がみられる。2は口縁端部にRL縄文を持つ深鉢である。3は内湾する波状の深鉢口縁部で、波底部に渦巻文を描く。2・3は北白川



第31図 自然路NR1601出土遺物(1)



第32図 自然流路NR1601出土遺物(2)

上層式3期と考えられる。4・5は鉢の口縁部で、4の口縁部上面の沈線区画帶内には列点状に刺突があがぐ。また頸部附近ではRL繩文が施された後に沈線が描かれ、沈線末端に刺突が付く。5は一部の沈線内に刺突がみられる。これらは一乗寺K式に比定できる。6～12は注口土器である。6は斜め刻みがあがぐの胴下部である。7～9・11は肩部を持つ。7は刺突を持つ沈線区画帶内に部分的にLR繩文がみられる。8は肩部下の沈線区画帶内に刺突の列点を付け、胴上部に巻貝回転による擬繩文を施した後に沈線で区画される。9は口縁部に巻貝回転による擬繩文、胴上部には沈線区画内に二枚貝腹縫による斜め刻みを密に施す。10は胴上部で注口部に近い部位か。上部の文様帶にLR繩文、下部の沈線区画帶には斜め刻みが充填される。11は細い沈線で連弧文を描くと思われ、肩部の上段には刺突が付く。12は注口部で3分の2が欠損する。7は一乗寺K式、6・8～11は元住吉山I式、12は後期中葉頃の範疇で理解したい。13・14は凹線文を持つ土器で、13は鉢で平行凹線が多条に展開し、その間には斜め刻みがあがぐ。胴上部の頂部には巻貝刺突が付く。14は鉢もしくは注口土器の胴上部で、多条の凹線が段状に施される。摩滅が激しいが凹線間には斜め刻みが施される。これらは後期後葉の元住吉山II式併行と考えられる。15は口縁部を内面に折り返して段をつくる。後期後葉の滋賀里I式併行期の深鉢と判断した。16・17は口縁端部に深い斜め刻みをめぐらせる深鉢で、小片ではあるが晚期中葉の藤原式併行である原田式の可能性がある。15は1層出土、それ以外は3層から出土した。なお11は包含層12層から出土した破片と接合する。

18～30は無文土器の深鉢の口縁部である。口縁端部を面取りして平坦になるものが多く、尖ったものも比較的目立つ。丸いものは少ない。器面調整はナデ調整が目立つが、その前に施された条痕調整が残る個体が多く見受けられる。条痕調整では、二枚貝条痕はわずかで巻貝条痕が多い。30は裏面に圧痕が確認され、針葉樹の葉先の可能性がある(第5章第6節)。31～35は底部で、底部形態は35が凹底、他は平底である。18・31は1層出土、それ以外は3層から出土した。

第32図36～38は石器である。36は石礫の未製品で、腹面の先端部に加工がみられるが、その他は自然面が多い。石材は安山岩である。37は石匙の未製品で、石材は碧玉である。38は安山岩製の小形の敲石で、下端に敲打痕がみられる。製作具として使用されたと考えられる。(幡中光輔)

註

- (1) 近畿地方や周辺地域の土器編年研究については大塚達朗氏、千葉豊氏、岡田憲一氏、柳浦俊一氏の諸氏より指導を受け、小泉翔太氏、高野紗奈江氏からは助言をいただいた。外来系土器に関しては上記の方々のほか、長田友也氏、中村耕作氏、鯉渕義紀氏、福永将大氏からもご教示を得た。
- (2) 石器の器種は稻田陽介氏、石材については中村唯史氏から指導や助言をいただいた。
- (3) 異形土器の位置づけについては、破片で全形が不明であるため明確な由来の同定は困難である。しかし、下部が外側に開く点に注目した岡田憲一氏をはじめ、大塚達朗氏や千葉豊氏、中村耕作氏からのご教示によれば、東日本にみられる異形土器や注口土器などの影響を受けた可能性が考えられる。
- (4) 小形土器に関しては長田友也氏からご教示を得た。小形土器はこの2個体以外に包含層の12層出土の第51図49がその可能性が考えられるが、他にはほとんど確認されない。
- (5) 関東地方では後期中葉頃の加曾利B1式期に土器を土坑上に据え置いた事例が確認できることを大塚達朗氏にご教示いただいた。

参考文献

- 上峯篤史・妹尾裕介・木村啓章編 2013『一乗寺向畠町遺跡出土 繩文時代資料—資料編一』京都大学大学院文学研究科考古学研究室
- 岡田憲一・深井明比古 1998『佃遺跡出土繩文土器の編年—特に元住吉山式土器について—』『佃遺跡 第2分冊(自然科学・総括編)』兵庫県文化財調査報告第176冊 兵庫県教育委員会 139～163頁
- 小泉翔太 2014「北部地区、南部地区出土土器の位置づけ」『一乗寺向畠町遺跡出土 繩文時代資料—考察編一』京都大学大学院文学研究科考古学研究室 33～50頁
- 千葉 豊 2001「沖丈遺跡出土繩文後期土器の編年の意義—崎ヶ鼻式と「権現山式」のあいだー」『沖丈遺跡』主 要地方道川本波多線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 廿智町教育委員会 306～318頁
- 千葉 豊編 2010『西日本の繩文土器 後期』真陽社
- 千葉 豊 2014「比叡山西南麓遺跡群における繩文後期土器の様相」『一乗寺向畠町遺跡出土 繩文時代資料—考 察編一』京都大学大学院文学研究科考古学研究室 23～32頁
- 千葉 豊 2015「北白川上層式と八王子式」『八王子式土器—西尾市八王子貝塚出土土器一』東海繩文研究会第 12回研究会 東海繩文研究会 29～38頁
- 中村淳司編 2009『三宅西遺跡』財團法人大阪府文化財センター調査報告書第189集 財團法人大阪府文化財セ ンター
- 深井明比古編 1998『佃遺跡』兵庫県文化財調査報告第176冊 兵庫県教育委員会
- 柳浦俊一 2010「山陰」「西日本の繩文土器 後期」真陽社 153～186頁
- 柳浦俊一 2017a『山陰地方における繩文文化の研究』雄山閣
- 柳浦俊一 2017b『島根県の繩文研究の現状と課題』『中四国繩文時代研究の現状と課題 発表要旨集』第28回 中四国繩文研究会香川大会 中四国繩文研究会 15～22頁
- 渡辺 誠編 1975『桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会

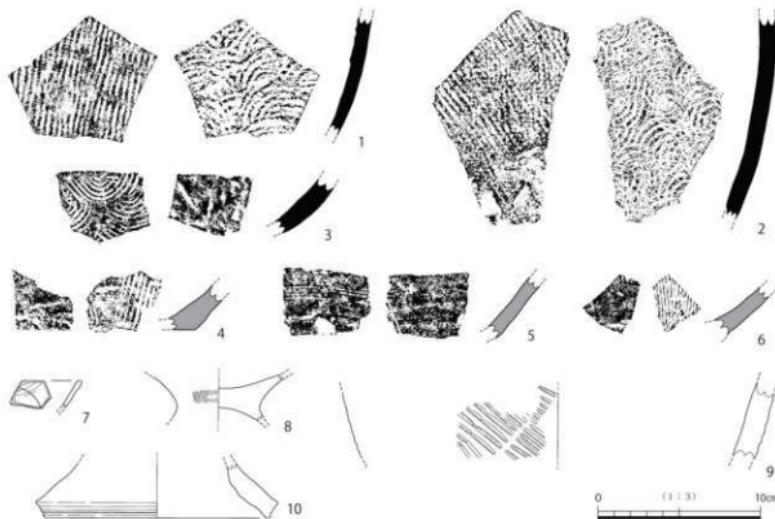
第4節 4-1区の遺構外出土遺物

京田遺跡4区の遺構外では、遺物が多数出土した3区の4層（縄文時代遺物包含層）と対応関係にある12層から同様に多量の土器や石器などが出土した。遺物が最も多く出土したのは12層であるが、4・5層から11層にかけても出土しており、ここでは土器と石器について層別に報告する。なお、出土した動物遺存体については、第5章第1節で報告している。

1 縄文時代以外の出土遺物（第33図、図版24）

縄文時代以外の出土土器は3～5層から出土している。第33図1～8は3層から出土した。1・2は須恵器の甕の胴部片で、1の外面は平行タタキ目、2の外面は擬格子のタタキ目がみられる。内面にはともに同心円の当て具痕が残る。3は瓦質の土器である。小片のため詳細は不明であるが、外面には同心円状のタタキ目が確認できる。1～3の正確な時期は不明だが、概ね古代頃と思われる。4～6は擂鉢である。4は8条以上の単位の鉢目、5は3条以上の単位の鉢目があり、中世の備前焼の擂鉢である⁽¹⁾。6は9条以上の単位の鉢目が密に施され、近世以降の比較的新しいもので、上層からの混ざり込みの可能性がある。7・8は土師器で、7は古代の壺または皿の口縁部片と思われ、内外面に赤彩が残る。8は古墳時代前期の低脚壺の脚部で、外面にハケ調整痕が確認できる。

第33図9・10は4・5層から出土した弥生土器である。9は甕の胴部片で、外面にはタタキ目が確認できる。草田5期の畿内系のものと考えられる。10は高壺の脚部であり、脚端部には2条の凹線文が施される。これらは弥生時代後期の所産であろう。



第33図 縄文時代以外の出土遺物

2 縄文時代の出土土器（第34～53図、図版8・23～38）

（1）有文土器（第34～48図、図版8・23～32）

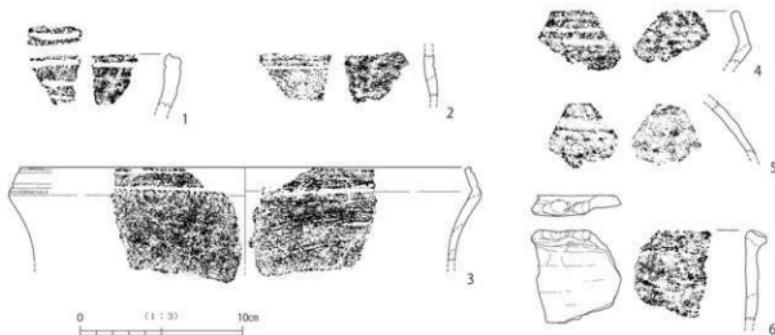
4-1区の遺構外出土の有文土器は総計891点で11.275kgであり、これらの多くが縄文時代の後期中葉に含まれる。包含層の12層からの出土量が最も多いが、他の層からも一定量の出土が確認できた。ここでは層別、器種別および型式別に分類して報告する。

5層出土有文土器（第34図、図版24）

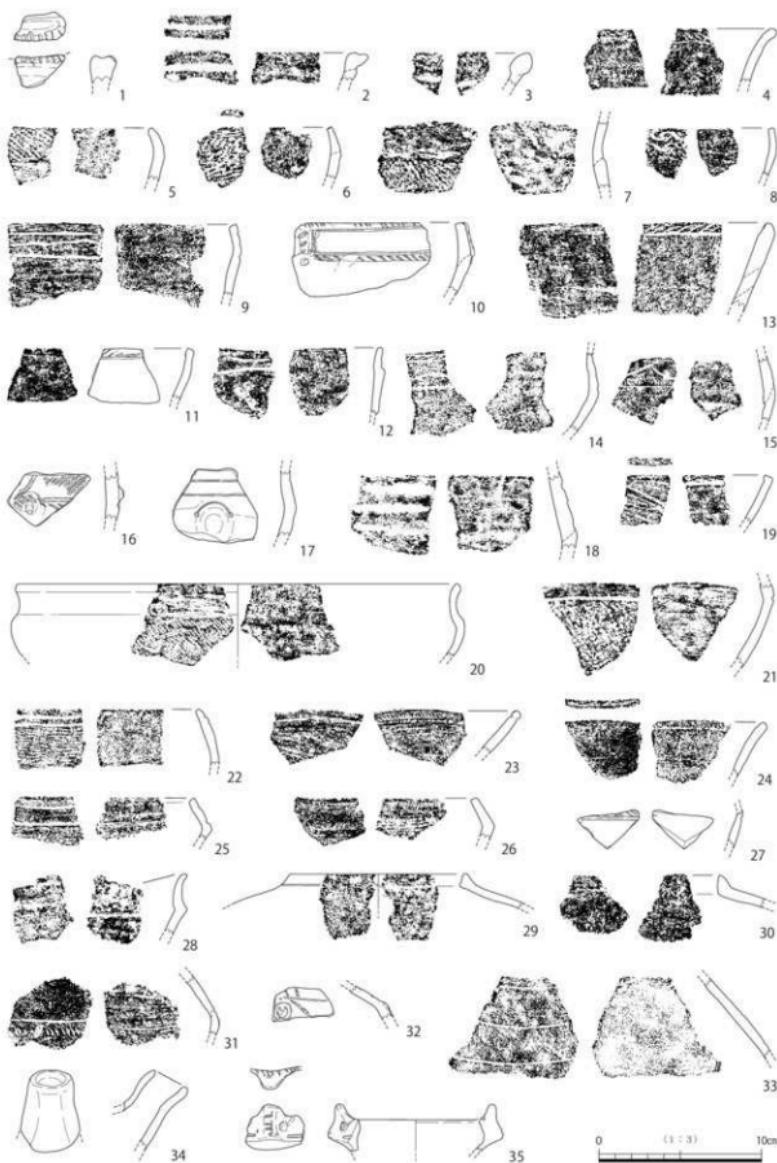
第34図1～6は5層出土の縄文土器である。1～3は深鉢で、1は深鉢の口縁部であり、RL縄文の縄文帯を持ち口縁端部に沈線が引かれている。後期初頭の福田K II式新段併行の幕地式と考えたが、口縁部内面にも区画沈線が描かれており、九州系の後期前葉の小池原上層式である可能性も残る。2は深鉢の胴部で、頸部と胴部を区画沈線で分界した後に胴部にRL縄文、もしくは撚り戻しのある直前段多条のRRL縄文が施される。一乗寺K式と考えられ、豊穴建物跡SI1601出土の土器（第14図12）と同一個体の可能性がある。3は屈曲口縁の深鉢で、口縁部の沈線区画帯の上には斜め刻み、下には巻貝刺突が施され、元住吉山I式と考えられる。なお内面には炭化物が付着しており、年代測定を実施した（第5章第2節）。4は屈曲口縁の鉢もしくは浅鉢で、凹線文が2条施される。元住吉山II式に比定できる。5は摩滅が激しいが凹線文がみられる注口土器の胴部で、元住吉山II式から宮滝式併行期であろう。6は突帶文土器の深鉢で、口縁端部には指頭による刻みが施され、晩期後葉の長原式併行の古海式と考えられる⁽²⁾。

6層出土有文土器（第35図、図版24・25）

第35図1～35は6層出土の縄文土器で、1～18は深鉢と考えられる。1・2は成立期縁帯文土器の深鉢の口縁部で、1は口縁端部に刻みがめぐる耳状突起の一部と思われ、瀬戸内地域に目立つ。2は口縁部上面と端部に沈線を持つ。3は口縁端部にRL縄文を施す。後期前葉の北白川上層式1～2期併行の崎ヶ鼻1～2式であろう。4～7は北白川上層式3期で、4は外反する口縁部の外面にRL縄文、内面には区画沈線が施され、口縁部上面と区画沈線の間にRL縄文が充填される。5は内



第34図 5層出土有文土器



第35図 6層出土有文土器

湾した口縁部に RL 繩文を施す。6は緩く内湾する口縁部で、口縁端部に LR 繩文、外面には LR による擬似羽状繩文がみられ、口縁部上面には卷貝による条線が確認できる。7は段状肥厚により頸部と分界する胴部片で、RL 繩文が施される。8は内湾する口縁部で、LR による Z 字状の結節繩文が施される。北白川上層式3期、もしくは一乗寺K式である。9～17は元住吉山I式と考えられ、9～13は口縁部、14～17は胴部である。9は沈線区画帶内に大振りな上弦の弧文を描く。10は緩やかに屈曲する口縁部で、I字状隆帶上と沈線区画帶に沿って刻みがめぐり、屈曲部には刺突が施される。鉢の可能性もある。11はやや内湾する口縁部の内面に浅い区画沈線と不揃いな斜め刻みを施す。12は直口の口縁部で、段状肥厚と区画沈線によって口縁部と胴部を分界し、口縁部には蛇行沈線をめぐらせる。後期後葉の滋賀里I式期に属する可能性がある。13は外反する口縁部内面に区画沈線が引かれ、斜め刻みが充填される。14は胴上部に区画沈線と下弦の弧文、胴部と頸部の境界の沈線区画帶内には斜め刻みがめぐる。15は上弦の連弧文と区画沈線の間に卷貝回転による擬繩文が充填される。16は斜め刻みが施される半円状の隆帶を持ち、その中心には刺突がみられる。隆帶から横にのびる区画沈線に沿って斜め刻みがめぐる。胴上部には二枚貝背部押圧による擬繩文が確認できる。17は摩滅が激しく不明瞭だが、胴上部に沈線がめぐり、頂部には押圧痕がみられる。押圧痕は末端刺突のある下弦の弧文で囲われる。18は3条の凹線文が展開する胴部で、後期後葉の宮滝式併行期である。

19～28は鉢・浅鉢と考えた。19は口縁部で、口縁端部に RL 繩文を施し、口縁部内面に区画沈線を引く。20は口縁部と胴部に RL 繩文の施文が確認できる。21は胴部で、胴下部に RL 繩文を施文後、区画沈線を描いている。22は内湾する口縁部で、絡条体による燃糸文が施され、口縁部上面には2条の沈線が描かれる。23・24は口縁部内面に区画沈線が引かれている。23は沈線内に刺突を持ち、比較的細かい斜め刻みが施される。24は摩滅が激しく不明瞭ではあるが、口縁端部に二枚貝腹縁による刻みが認められる。25・26は屈曲口縁で外面は丁寧にミガキ調整で仕上げられ、25は沈線区画帶の上下に卷貝回転による擬繩文が施文され、区画帶内にはミガキ調整がなされる。27は区画沈線の上に斜め刻みが施される。19～21は北白川上層式3期、22・23は一乗寺K式、24～27は元住吉山I式にそれぞれ比定できると思われる。28は外反する口縁部と屈曲する胴部を持ち、晩期後葉の突帯文期に属すると考えられる。

29～35は注口土器である。29・30は断面三角形状に肥厚する口縁部で、29は口縁部上面に沈線がめぐる。31～33は胴部で、31は区画沈線の上部付近に卷貝回転による擬繩文を施し、区画沈線下には斜め刻みがめぐる。32は胴頂部に卷貝刺突のある円形突起を持ち、周辺には沈線内刺突で文様が描かれる。33は文様帶に卷貝回転による擬繩文が確認できる。29～33は元住吉山I式と考えられる。34はやや細長い注口部で、後期中葉の所産であろうか。35は加曾利B1式の注口土器の口縁部突起が変容したものと考えられ、口縁部の端部と隆帶には刻みと刺突、屈曲部の上部には沈線が施される。

11層出土有文土器（第36・37図、図版25・26）

第36・37図1～30は11層出土の繩文土器である。1～15は深鉢で、1は入組文を描く胴部と考えられ、後期初頭から前葉頃の時期のものか。2は胴部で、頸部との境には区画沈線があり、

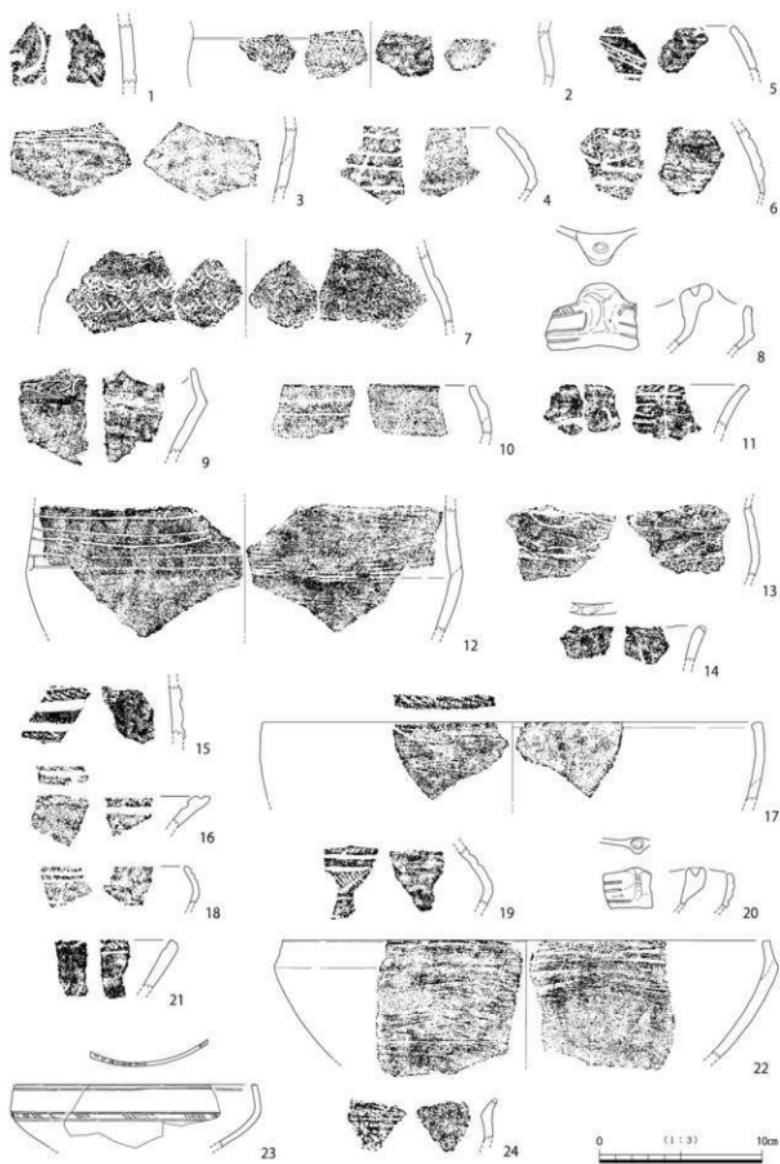
胴部には RL による擬似羽状縄文が施される。3は RL 縄文と巻貝による条線を持つ胴部で、2・3は北白川上層式3期に収まると考えられる。4は内湾内屈する口縁部で、4条の沈線が描かれる。摩滅で不明瞭だが、沈線間に縄文が施された可能性がある。5は内湾する口縁部で沈線区画帯には刻みと刺突が充填される。6は有段の口縁部で LLR による結節縄文を施していると思われる、その上から縦位の入組文が描かれる。7は LR による Z 字状の結節縄文を施す胴部である。4~7は一乗寺 K 式と考えられるが、4はやや古い可能性がある。8は刺突のあるノ字状突起と沈線区画帯を持つ口縁部で、沈線の末端に刺突が確認できる。また摩滅が激しく不明瞭だが、口縁部上面に RL 縄文が施された可能性がある。9は波状の屈曲口縁を持ち、口縁部には細い沈線で入組状の文様が描かれる。10は緩やかな段状肥厚がみられ、肥厚下に沈線が施される口縁部であり、鉢の可能性もある。11は内面に区画沈線と斜め刻みを施す口縁部である。12は胴部で、末端に刺突を持つ沈線区画帯内に斜め刻みが充填され、一部にノ字文が確認できる。13は沈線間に対向連弧文を描く胴部である。外面のナデ調整によって文様が一部磨り消されており、やや粗雑な印象を受ける。8~13は元住吉山 I 式と考えられるが、10は一乗寺 K 式に遡る可能性もある。14は口縁部に斜め刻みを施し、胎土は他の土器とやや異なる。小片で不明瞭だが、原田式の可能性がある。15は RL 縄文を施す縄文帯を持つ胴部で、小池原上層式と考えられる。

16~24は鉢・浅鉢である。16は口縁部内面に区画沈線による隆帯を持ち、崎ヶ鼻 2式と思われる。17は口縁端部に RL 縄文を施す。18は LR 縄文の施文後に区画沈線が描かれた口縁部である。19は屈曲する胴部で、胴上部には RL 縄文を施文後に区画沈線が描かれ、斜位の沈線には末端刺突が確認できる。17~19は北白川上層式3期に比定できる。20は I 字に近いノ字状隆帯で隆帯上には刻みがみられ、隆帯横から刺突を持つ3条の沈線が横位展開する。21は口縁部内面に区画沈線と斜め刻みが施される。22は屈曲口縁を持ち、口縁部には丁寧なミガキ調整がみられる。23は口縁部外面と内面の上部に区画沈線を引き、口縁端部に斜め刻みが施され、胴部には斜め刻みが充填される沈線区画帯を描く。24は内面が段状に肥厚し、外面には沈線で細かい文様を描く。20は一乗寺 K 式、21~23は元住吉山 I 式と考えられる。24は後期中葉頃と思われるが、詳細は不明である。

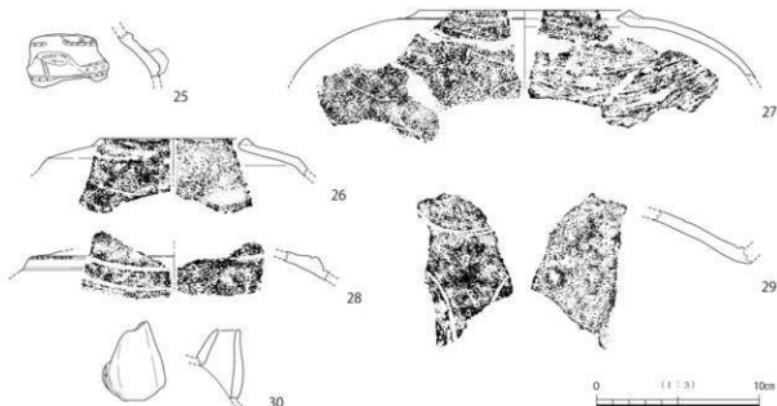
25~30は注口土器である。25は押し引き沈線が器面をめぐり、注口状の突起は先端に刺突が施される。北白川上層式3期の可能性もあるが、ここでは一乗寺 K 式と捉えた。26・27は断面三角形状に肥厚する口縁部を持つ。27は口縁端部に二枚貝腹縁による細かい刻みがみられ、胴上部に描かれた横長三角形と思われる文様帯内には巻貝回転による擬縄文が充填される。一部の沈線には末端刺突が施される。28は沈線に挟まれた肩部を持ち、摩滅が激しいが巻貝回転による擬縄文が施されたと思われる。29は胴上部で沈線が確認でき、注口部の裾部には沈線と刺突がめぐる。30はやや短い注口部で、注口裾部の周りを刻みがめぐる。注口部の口縁は一部が欠損する。26~29は元住吉山 I 式で、30は一乗寺 K 式から元住吉山 I 式に収まると思われる。

12層出土有文土器（第38~46図、図版8・23・26~32）

12層は最も遺物の出土量が多く、後期中葉を中心に各時期の土器がまとめて出土した。以下、器種別・時期別・型式別に分類して報告するが、外來系土器は一括りにして記述している。



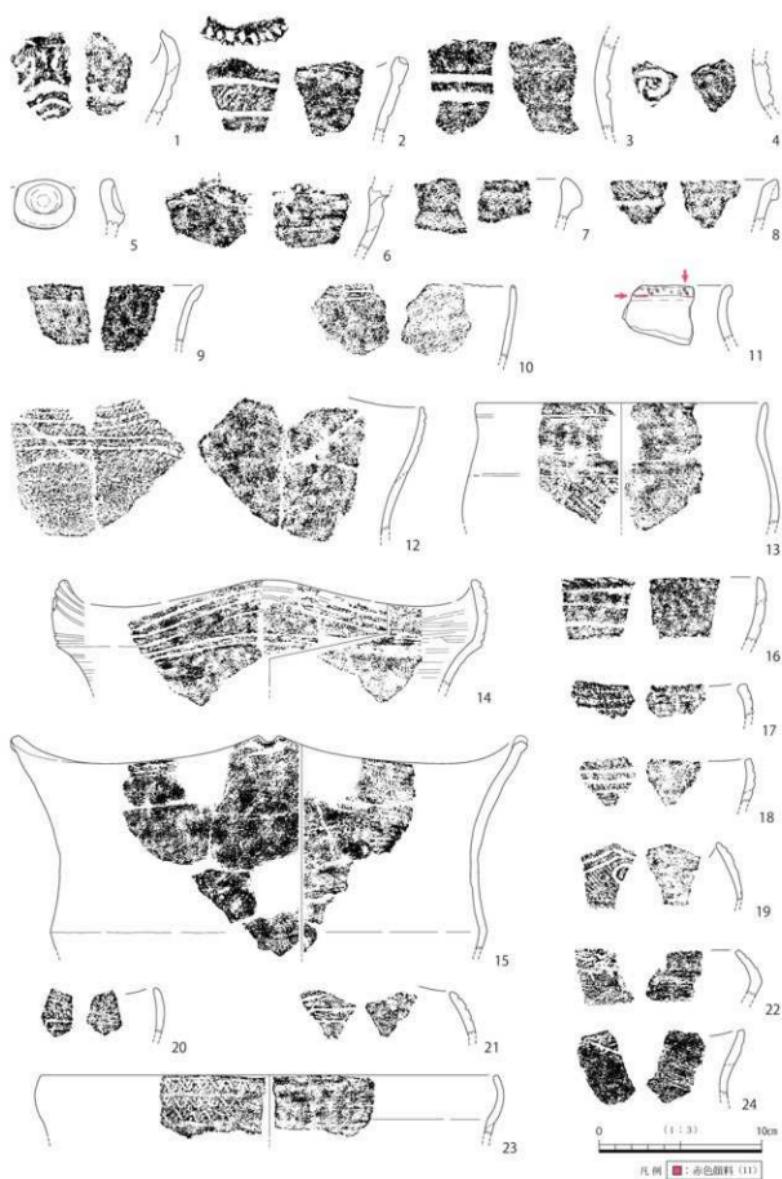
第36図 11層出土有文土器(1)



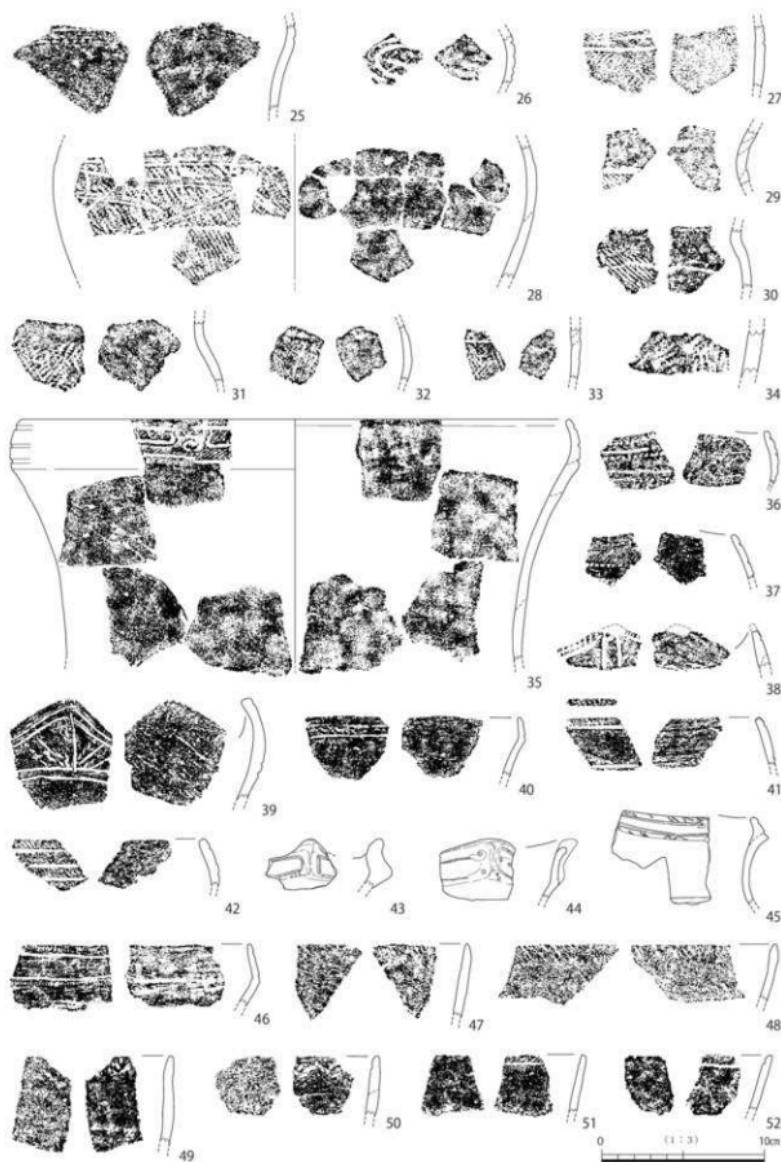
第37図 11層出土有文土器(2)

第38図1～9は後期初頭から前葉の深鉢で、1・2は後期初頭である。1はLR縄文が充填され、大きく内湾する波状口縁の波頂部を持ち、窓枠状沈線区画帶が見られる。後期初頭の中津式併行の九日田式でも古い段階と考えられる。2はLR縄文が充填され、口縁端部に刺突がめぐる。後期初頭の福田K II式古段階併行の五明田式であろう。3・4は後期初頭から前葉頃と考えられ、3は頸部に2条の区画沈線を持ち、4は入組文が描かれる。5～9は後期前葉で、5は口縁部の突起で押圧による円文が付けられ、6は波頂部に円孔を持つ口縁部の一部と考えられる。成立期縁帯文土器から崎ヶ鼻1式か。7～9は肥厚した口縁部にRL縄文を施す。縁帯部の肥厚が顕著な7は崎ヶ鼻1式、やや平板化した8は崎ヶ鼻1～2式と考えられる。9はさらに平板化が進み、崎ヶ鼻2式に比定できる。

第38図10～第42図85は後期中葉の深鉢である。10～34は北白川上層式3期と考えられる。10は口縁端部に刻みを持ち、2条の沈線を描く。11はRL縄文が施された口縁部に赤彩が確認でき、成分はベンガラである(第5章第4節)。12は口縁部にLR縄文を施文した後に押し引き沈線を多条にめぐらせる。表面には炭化物が付着しており、年代測定を実施した(第5章第2節)。13は鉢の可能性があり、平板化した口縁部にRL縄文が施され、区画沈線で口縁部と頸部、胴部が分界される。胴部にはRLによる擬似羽状縄文が確認できる。14は波状の内湾内屈口縁で、横位展開の巻込文を描く。15は外反する波状口縁で、波頂部を深く刻んでM字状に仕上げる。16は鋭く尖る口縁端部を持ち、RL縄文が施される外面には多条沈線を描く。17～21は波状の内湾口縁で、17は刺突を持つ多条の沈線を施す。18は3条の沈線が確認できる。19は内湾内屈の口縁になる可能性があり、RL縄文の施文後に円文もしくは巻込文を描く。20・21はRL縄文と沈線が施される。22・23は内湾内屈口縁、24は外反する波状口縁で、外面にはLRによるZ字状の結節縄文が施される。25～34は頸部から胴部で、25は摩滅でやや不明瞭だが、2条の沈線が描かれる。26は入組文もしくは渦巻文が描かれるが、摩滅が激しく縄文施文は確認できない。27はLR縄文と2条の沈線が確認できる。28はRL縄文が胴部全面に施文され、巻貝による条線で文様が描かれる。29は頸部と胴部の境界に区



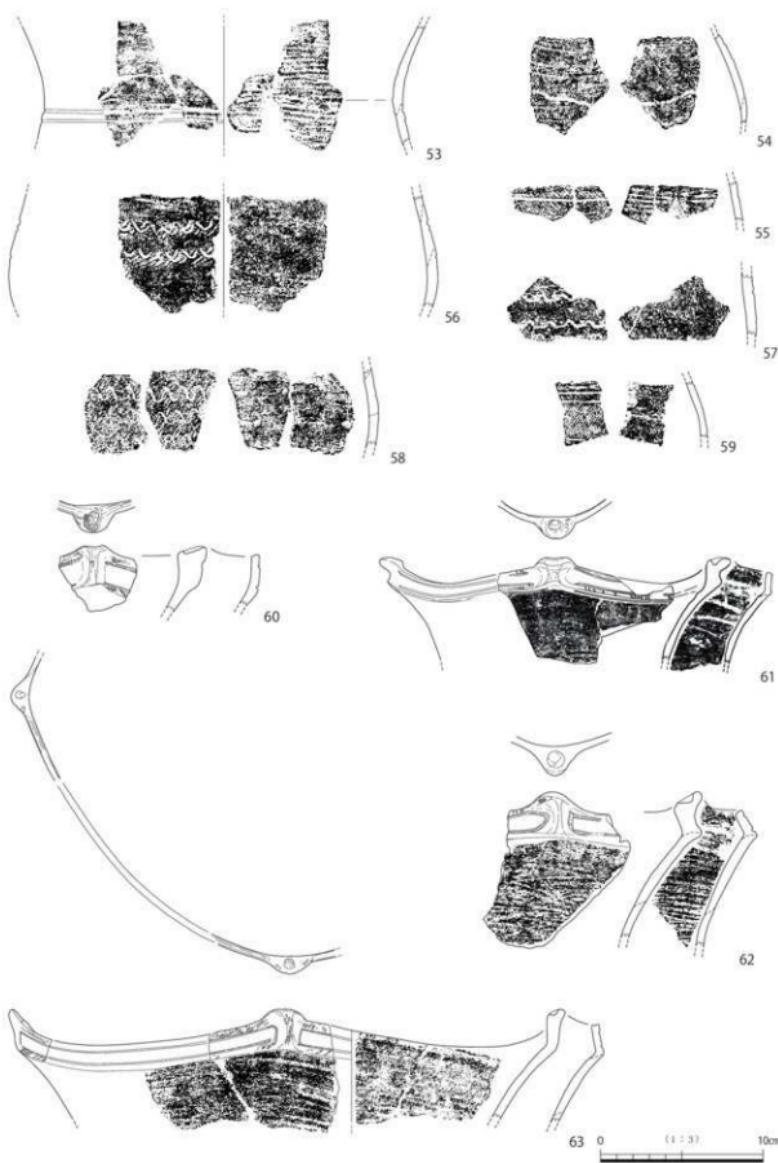
第38図 12層出土有文土器 (1)



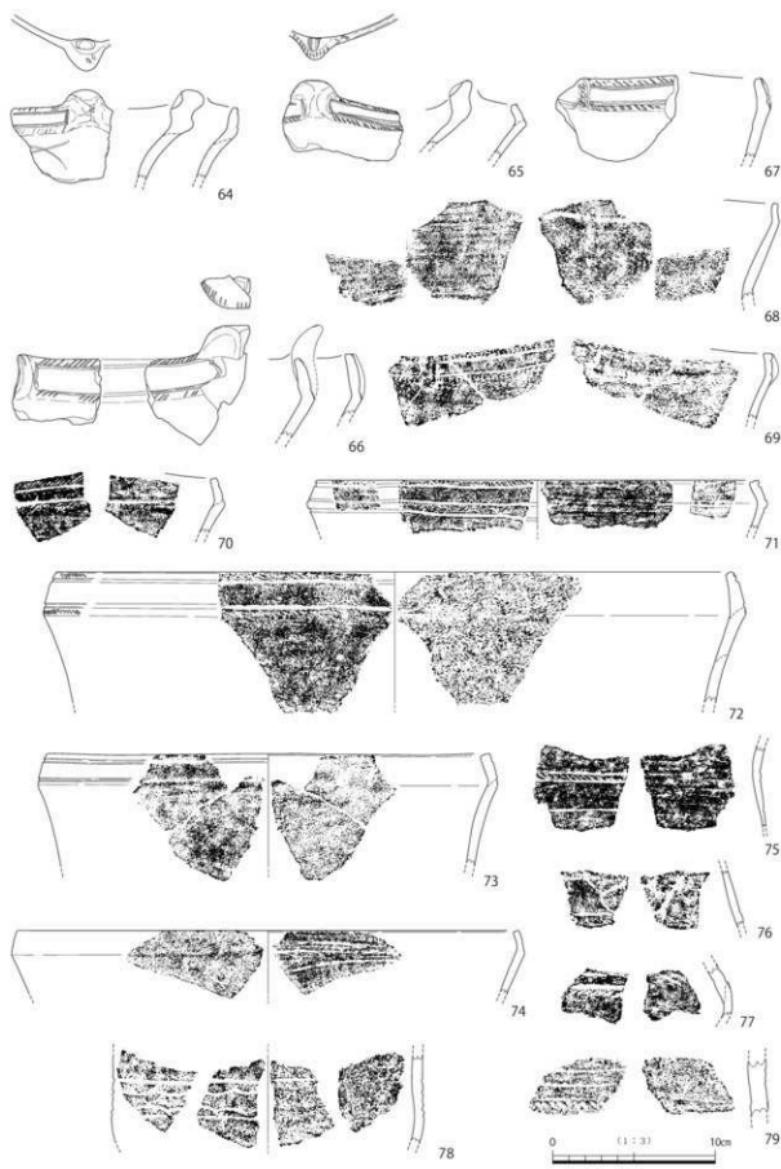
第39図 12層出土有文土器(2)

画沈線が施され、胴部に RL 繩文が施される。30 は RL 繩文が確認できる。31～34 は RL による擬似羽状繩文が施される。

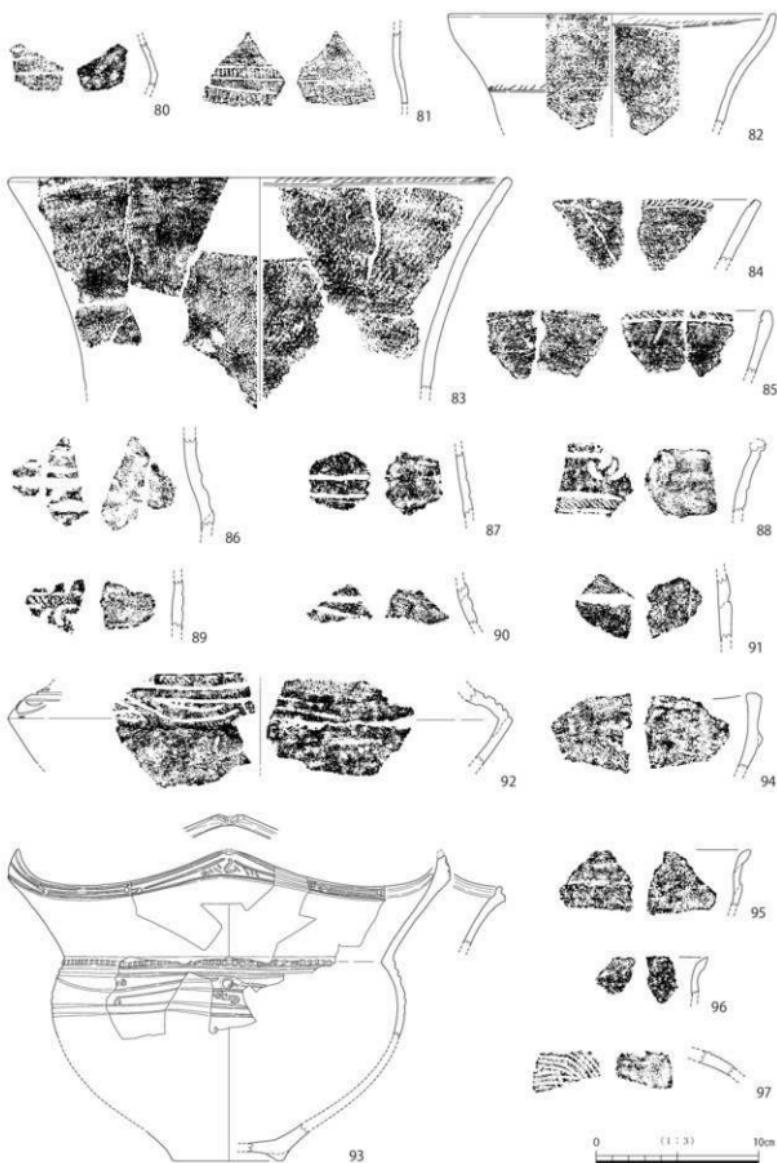
35～59 は一乗寺 K 式に比定できる。35 は口縁部の幅がやや狭い内湾内屈口縁となる。文様は LR 繩文を地文として、巻込文から 6 文字に変化する過渡的な文様を描き、北白川上層式 3 期の最新段階の時期に近いと考えられる。36～39 は内湾する波状口縁で、36 は多条沈線内に刺突がみられる。37 は LR 繩文を施文後に刺突を持つ沈線で区画される。38 は口縁部上面に縱刻みが施され、沈線で区画される。波頂部からは 2 条の垂下沈線が確認できる。39 は沈線で区画帯を描いた後、区画帯に沿うように LR 繩文の押圧を施す。40 は小振りな内湾の口縁部で、RL 繩文を充填する繩文帯がめぐる。41 は口縁端部と口縁部上面に斜め刻みを施し、口縁部上面は沈線で区画される。口縁部下部の沈線と刺突を持つ斜めの沈線による区画内には刻みと刺突が充填される。42 は RL 繩文を施文後に 3 条の沈線を描き、沈線間を磨り消す。43 はノ字状突起を持つ屈曲口縁で、屈曲部の上部には二枚貝腹縁による刻みが施され、その後にノ字状の沈線区画帯が描かれる。44 はやや薄手の口縁部で X 字状隆帯を持ち、区画沈線の末端には刺突がみられる。45 は鋭く内屈する口縁部と外反する頸部を持ち、九州系土器の器形に似る。RL による S 字状の結節繩文が施文され、巻込文による沈線区画帯内の間は磨り消される。46 はやや幅広の口縁部で巻貝回転による擬繩文を沈線区画帯の上下に充填し、区画帯内は磨り消される。47・48 は外面と内面の上面に細かく不定形な斜め刻みを持つ。49・50 は内面に LR による Z 字状の結節繩文が施される口縁部である。51 は口縁部の内面上面に LR 繩文を施した後に沈線を引く。52 は内面上部に区画沈線が引かれるが、区画内には繩文施文などは確認できない。53～59 は頸部から胴部である。53 は胴部と頸部の境界に RL 繩文の繩文帯がみられ、裏面には二枚貝条痕による調整が施される。54 は沈線内刺突による文様が展開し、6 文字が描かれる。55 は RL 繩文を施文後に 1 条の沈線と弧文と思われる文様の一部が確認できる。56・58 は LR による Z 字状の結節繩文、57 は RL による S 字状の結節繩文が施文される。56 の内面には炭化物が付着しており、年代測定を実施した（第5章第2節）。59 は沈線区画帯内に LLR の直前段多条繩文を施す。60～85 は元住吉山 I 式である。60～66 は屈曲する波状の口縁部で波頂部に突起を持つ。60 はノ字状突起の波頂部に巻貝の肩状圧痕を持ち、沈線区画帯の上下には巻貝回転による擬繩文が充填される。61 は I 字状突起となり、巻貝刺突が波頂部に施され、末端刺突のある沈線区画帯の外には斜め刻みを施す。屈曲部の下部にも末端刺突の沈線が配され、近畿地方の手法に類似する。62 はノ字状突起を持ち、波頂部に刺突がみられる。ノ字状の沈線区画帯の上には巻貝回転による擬繩文が確認できる。63 は波頂部に巻貝刺突が施されたノ字状突起を持ち、口縁部のノ字状沈線区画帯の上下には巻貝回転による擬繩文が充填される。64 はやや肥大化したノ字状突起の波頂部に円形刺突がみられる。東海系土器の影響か。沈線区画帯の上下には一定の間隔を保って刻みが配され、表面にはミガキ調整が丁寧に施される。65 の波頂部は棒状工具の圧痕を持ち、刻みが施される。突起は I 字状で、沈線区画帯の下に斜め刻みが付けられる。66 は突起が嘴状に肥大化しており、元住吉山 I 式のなかでも新しい時期と考えられる。波底部にはノ字状に近い I 字状隆帯が付けられ、沈線区画帯の上下には斜め刻みがめぐる。67～70 は屈曲する波状口縁である。67 は I 字状隆帯を持ち、口縁部に斜め



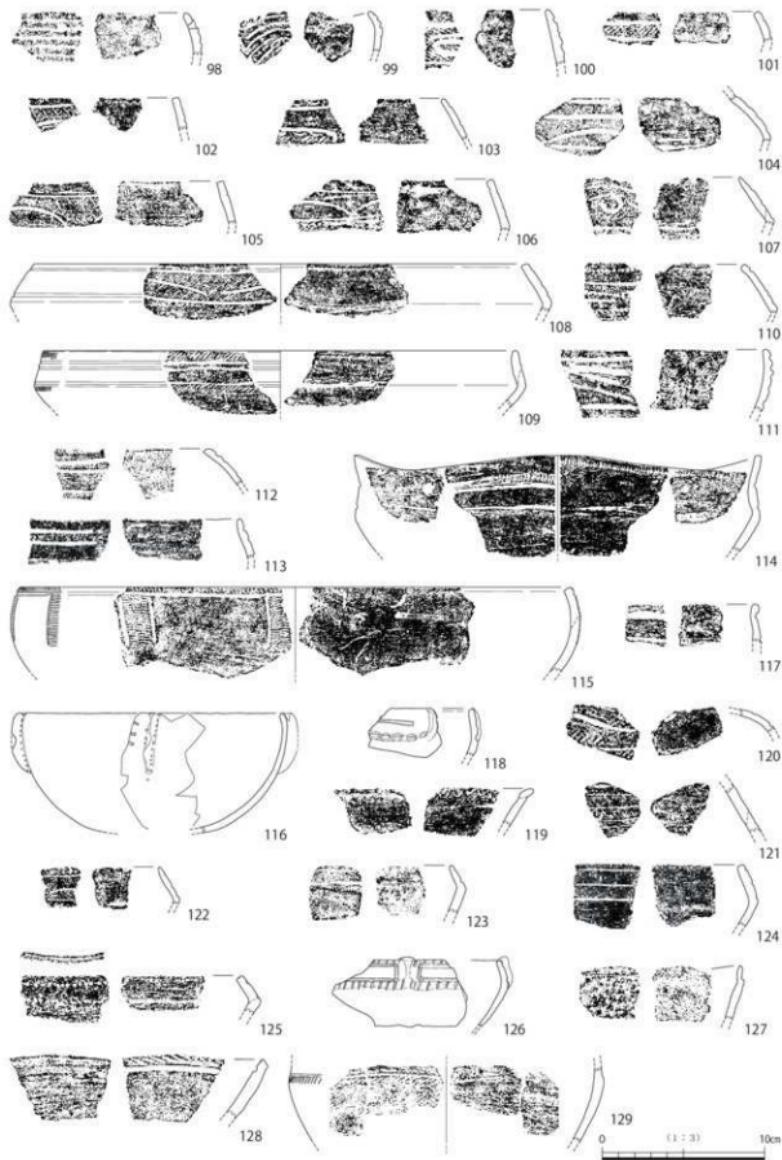
第40図 12層出土有文土器(3)



第41図 12層出土有文土器(4)



第42図 12層出土有文土器(5)



第43図 12層出土有文土器(6)

刻みを施した後に末端刺突のある区画沈線を描く。68は幅が狭い口縁部外面に2条の沈線が施文された波状口縁で、頸部は外反しており、九州系土器の器形に似る。69は波底部にI字状隆帯があり、沈線区画帶の上下には二枚貝腹縫による刻みをめぐらせる。70は沈線区画帶の上下に二枚貝背部押圧による擬縄文を施す。71～74は屈曲する口縁部で、71は沈線区画帶の上下にRL縄文を充填し、区画帶内は磨り消している。屈曲部の下部には1条の沈線が確認できる。72は口縁部の沈線区画帶の上下に斜め刻みを充填する。下部の斜め刻みは一部が2段になる。73は口縁部に区画沈線のみが描かれる。74の外側は摩滅が激しく施文の有無は不明瞭であるが、内面には巻貝条痕調整が残る。75～81は頸部から胴部である。75は頸部の沈線区画帶内に斜め刻みを充填し、胴上部には巻貝回転による擬縄文の施文後に区画沈線が引かれる。76は下部の沈線区画帶内に斜め刻みが充填される。77は胴上部に区画沈線を引き、斜め刻みをめぐらせる。78は胴上部の上下に沈線を引き、その間に対向連弧文を描く。79は器壁が厚い胴部で、3条の細い沈線が確認され、その後に斜めの刺突が施される。80・81は器壁が薄く、胴上部の沈線区画帶内には細く鋭い工具による縦刻みが充填され、一部で刻みが2段になる。82～85は内面に区画沈線を持つ口縁部で、区画内には斜め刻みを施す。82はやや内湾する口縁部を持ち、頸部と口縁部内面に細くて浅い区画沈線を施文後に不揃いな斜め刻みを施しており、やや粗雑な印象を受ける。第35図11と同一個体の可能性がある。

第42図86・87は後期後葉の深鉢である。86は胴上部に内面を磨き込んだ多条の四線がみられる胴部で、宮流式併行期と考えられる。87は器壁が薄く2条の沈線が確認できる胴部である。滋賀里1式併行期の可能性がある。

第42図88～93は九州系土器の深鉢または鉢である。88～91は小池原上層式の深鉢の胴部で、RL縄文による縄文帶を持ち、88・89には入組文が確認できる。92は北久根山式の深鉢の胴部と考えられる。鋭く屈曲する胴部を持ち、胴上部にはRL縄文を施文後に鋭く尖った工具で横に伸びる2重の巻込文を描く。93は九州系の西平式の深鉢または鉢⁽³⁾で、3条の沈線が施文される口縁部の波頂部外面には、変容した入組C字文とRL縄文が認められ、内面には逆ハ字状の刺突が存在する。波頂部は欠損しているが、意図的に打ち欠かれたと思われる。頸部と胴部の境界を鋭く屈曲させ、沈線の区画で表現した隆帯上に刻みをめぐらせる。胴部には5条の沈線が描かれ、口縁部の波頂部および波底部に対応する位置に巻貝による刺突や横位のS字文が存在する。底部は高台底である。93の接合破片は大部分が12層出土であるが、竪穴建物跡SI1601の1層および包含層11層出土の破片と接合した。

第42図94～97は後期前葉頃の鉢である。94は波状口縁で文様の施文はないが、胴頂部の一部を貼り付け隆帯で肥厚させる。95は肥厚する口縁部を持ち、縄文施文の可能性があるが、不明瞭である。96は平板化した口縁部と胴部にRL縄文を施す。97は鉢の胴部と考えたが、壺や注口土器の可能性もある。集線文が胴部全体に描かれると思われる。これらは崎ヶ鼻1～2式頃であろう。

第43図98～129は後期中葉の鉢・浅鉢と考えられる。98～100は北白川上層式3期になるとと思われる。98・99は内湾する口縁部で、98は多条沈線、99は多条の短沈線が施される。100は口縁部にRL縄文を施文後に区画沈線が描かれ、円文を施文する。

101～121は一乗寺K式と考えられ、101～110は屈曲する口縁部であると思われる。101は緩やかに内湾する口縁部で、LR縄文の縄文帯がめぐる。102はLRとRの付加条縄文の施文後に沈線で区画される。103は口縁部の上下にLRによるZ字状の結節縄文が施され、その後に区画沈線によって結節部が消されている。104は節の細かいRL縄文を全面に施文し、太い沈線で沈線区画帯と下弦の連弧文を描く。連弧文内部と区画帯内を丁寧に磨り消している。105・106は下弦の連弧文を描いた後に付加条縄文を施文し、弧文内部を磨り消している。105・106は同一個体の可能性があるが、106には口縁部内面に沈線が確認できるため、ここでは個別に報告した。107は6字文が描かれるが、縄文施文は摩滅が激しく確認できない。108は節の細かいLR縄文を全面に施文後に2条の沈線を引き、その間に大振りの弧文を描く。109は口縁部の沈線区画帯の上下にLR縄文を充填し、区画帯内に1条の沈線を引く。110は細い沈線で文様を描き、一部は沈線内に刺突を持つ。やや不明瞭であるが、口縁部中央には巻貝回転による擬縄文が先行して施され、一部が磨り消されたと見受けられる。111～113は内湾する口縁部で、111は巻貝回転による擬縄文施文後に鋭い工具によって文様を描く。その後一部は磨り消される。112・113は沈線区画帯に二枚貝腹縁による刻みを密に施し、113は沈線に末端刺突が確認できる。114は緩やかな波状口縁で屈曲する胸部と頸部を持ち、九州系土器の器形の影響を受けた可能性がある。頸部と胸部の頂部にそれぞれ区画沈線が描かれ、区画沈線に沿って胸部には巻貝回転の擬縄文、頸部には二枚貝腹縁による刻みが密に施される。二枚貝腹縁による刻みは口縁部内面にも施文される。115・116はボウル状の浅鉢で、115は口縁部の沈線区画帯にはやや斜めの刻みが充填され、口縁部から垂下する2条の沈線間には3列の刻みが密に充填される。116はノ字状突起が付けられ、突起の裾部に沿って刺突が施される。摩滅が激しいが、突起裾部の横には3条の沈線が確認できる。117は幅の狭い口縁部にLR縄文を施し、口縁部下と胸部に区画沈線を引く。118はノ字状隆帯を付け、屈曲部の上部にはやや大振りな刺突をめぐらせる。119は外反する口縁部で、肥厚する内面上部にLRによるZ字状の結節縄文が施文される。120・121は胸部である。120は胸上部で、沈線で文様を描いた後にLR縄文を施文する。121は一部が摩滅しており不明瞭だが、RRL縄文を施した後に細い沈線を多条にめぐらせ、沈線間を磨り消した可能性がある。

122～129は元住吉山I式に比定できる。122～126は屈曲口縁で、122は口縁部の上下2条の沈線間に下弦の弧文を描き、口縁部上面の区画内と弧文内部に二枚貝背部押圧による擬縄文を施す。123は幅の狭い口縁部の沈線区画帯の下に巻貝回転による擬縄文が施される。124は口縁部の上部区画帯と沈線区画帯に巻貝回転による擬縄文が施文される。122・123はやや古い可能性がある。125は口縁端部に細かい斜め刻みを施し、口縁部は刺突のある2条の沈線が引かれる。126はI字状隆帯を持ち、末端刺突のある沈線区画帯の上下に斜め刻みを施す。127は沈線と段状肥厚により胸部と分離され、肥厚部には二枚貝腹縁押圧による刻みが施される。128は口縁部内面に区画沈線が描かれ、区画内に斜め刻みを充填する。器面は内外ともに丁寧なミガキ調整がなされる。129は胸部で、胸上部には沈線が引かれ、沈線下部には斜め刻みがめぐる。

第44図130～134は九州系土器の鉢である。130～132は小池原上層式の口縁部、133は胸部で、太い沈線の縄文帯にRL縄文が施される。134はRL縄文が施された胸部で沈線間の幅が狭く、

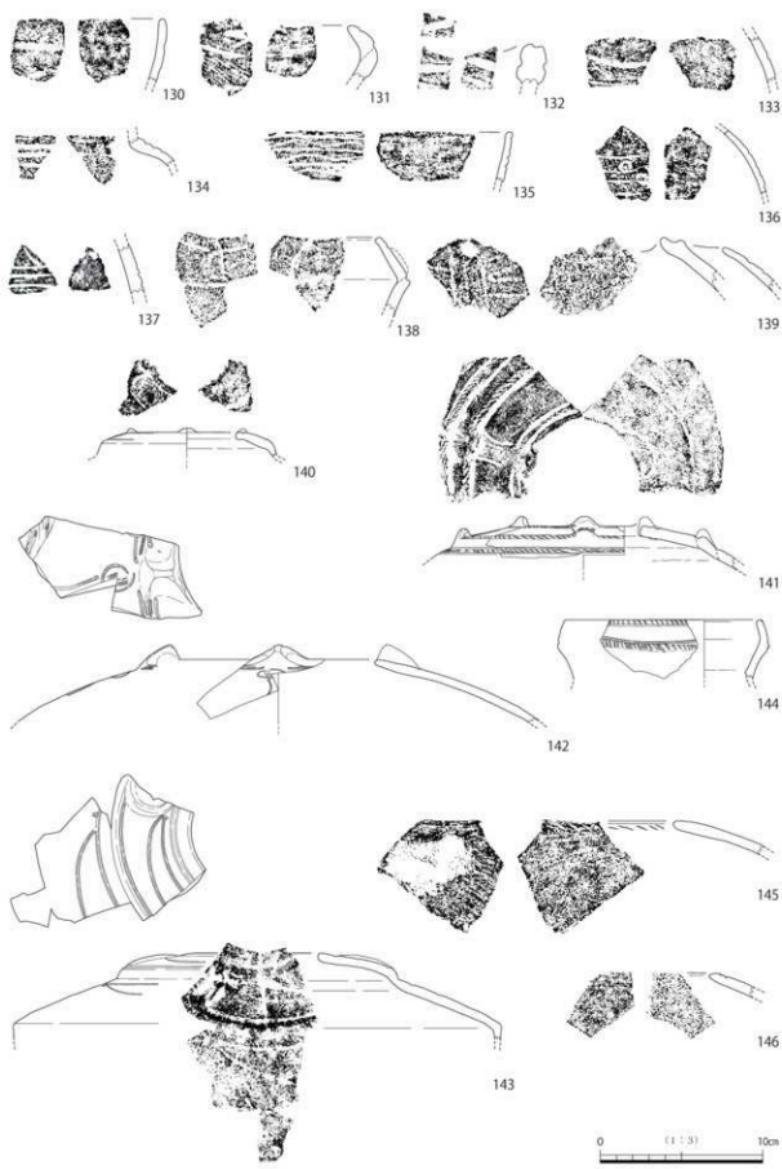
やや粗雑な印象を受ける。小池原上層式から鐘崎式にかけての時期と考えられる。

第44図135・136は後期中葉に属する鉢と思われるが、詳細不明の土器である。135は多段の沈線区画帶に3条の連弧文をめぐらせ、一部に卷貝回転による擬縄文が施される。一乗寺K式から元住吉山I式に併行すると考えられ、北陸地方の土器に似る⁽⁴⁾。136は一部が途切れる多条沈線間に2段の巻込文を描く薄手の胴部で、注口土器の可能性もある。

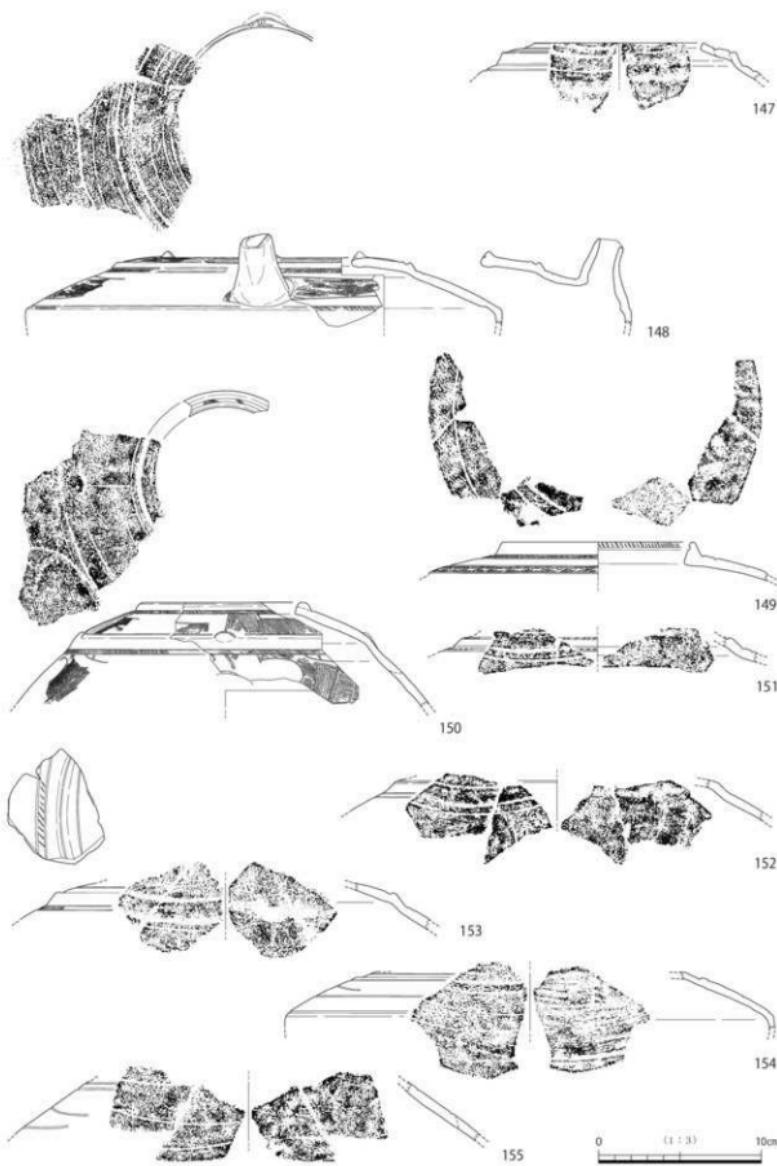
第44図137～第46図163は後期中葉頃の注口土器である。137は北白川上層式3期の注口土器の胴部と考えた。外面ともに丁寧にミガキ調整され、摩滅しており不明瞭だが、区画沈線とRL縄文が施された可能性がある。

138～143は概ね一乗寺K式期の範疇に収まると考えられる。138は屈曲口縁で口縁部上面に縱刻みと沈線を施し、その下にはノ字状隆帯の貼り付け痕がある。隆帯は剥離したと考えられる。139は刺突のある沈線で文様を描き、波頂部には円形刺突を付け、そこから垂下する刺突列が施文される。140はやや小振りな口縁部で瘤状突起を持ち、沈線で区画が描かれるが、摩滅が激しく縄文施文などは確認できない。141は口縁部と肩部に瘤状突起を持ち、両者の突起を連結する垂下沈線区画帶には卷貝回転による擬縄文を充填する。口縁部上面と肩部下には斜め刻みが充填された沈線区画帶、肩部上には1条の区画沈線下に斜め刻みをめぐらせる。外面は丁寧なミガキ調整で仕上げられている。142は径の大きいドーム状の器形で口縁部にI字状隆帯を付ける。隆帯下には6文字がみられ、内部には卷貝回転による擬縄文を充填する。隆帯の裾部付近から左右に展開する区画沈線の間に卷貝回転による擬縄文が施され、一部の沈線には末端刺突が確認できる。143は全体的に摩滅が激しく不明瞭な部分が多いが、口縁部にノ字状の貼り付け隆帯が付けられ、胴上部に末端刺突を持つ沈線で描かれた横長三角形の文様が確認できる。

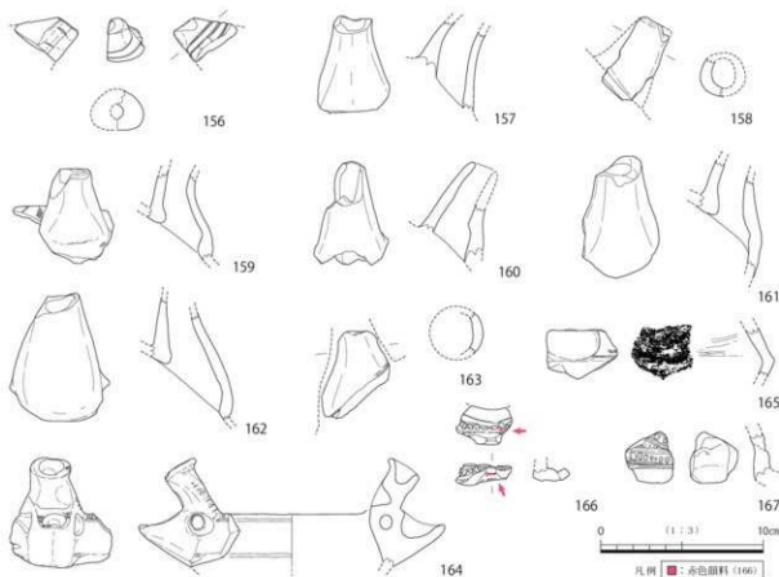
144～155は元住吉山I式と考えられる。144は口縁部から頸部で、頸部以下が外に開いて胴上部と連結するものと思われる。口縁部には沈線区画帶の上下に斜め刻みが施される。145・146はドーム状の器形の可能性があり、145の口縁部内面には斜め刻みが施される。146の口縁端部は尖り、口縁部上面に区画沈線を引いて刺突を充填する。147は口縁部中央および肩部の上下に区画沈線を引き、口縁部上面には卷貝回転による擬縄文を施す。148は注口部を持ち、口縁部上面には瘤状突起が付く。突起内面の口縁端部には刻みで囲われた刺突が施される。また口縁部にはわずかにノ字状隆帯がみられるが、簡略化して痕跡的なものになっている。文様構成は整然としており、口縁部から胴上部にかけての複数の沈線区画帶内は明確に施文工具を使い分けて施文されている。口縁部上面の区画帶、肩部下の区画帶には二枚貝背部押圧による擬縄文、口縁部下面と胴上部の横長三角形の文様帶には卷貝回転による擬縄文、屈曲部上の区画帶には斜め刻みが確認できるが、区画帶の間は一部が磨り消されている。一乗寺K式に比較的近い時期であると思われる。149は断面三角形状に肥厚する口縁部で、口縁端部に区画沈線を引き、斜め刻みが施される。口縁部には上下に沈線区画帶があり、二枚貝背部押圧による擬縄文が施されている。150は口縁部の断面が丸みを帯びた台形状に肥厚し、肩部に簡略的な瘤状突起が付く。口縁肥厚部上と裾部および肩部下の沈線区画帶には細かい斜め刻みを密に施す。口縁部および胴上部は末端刺突のある沈線でクランク文を描き、卷貝回転による擬縄文



第44図 12層出土有文土器(7)



第45図 12層出土有文土器(8)

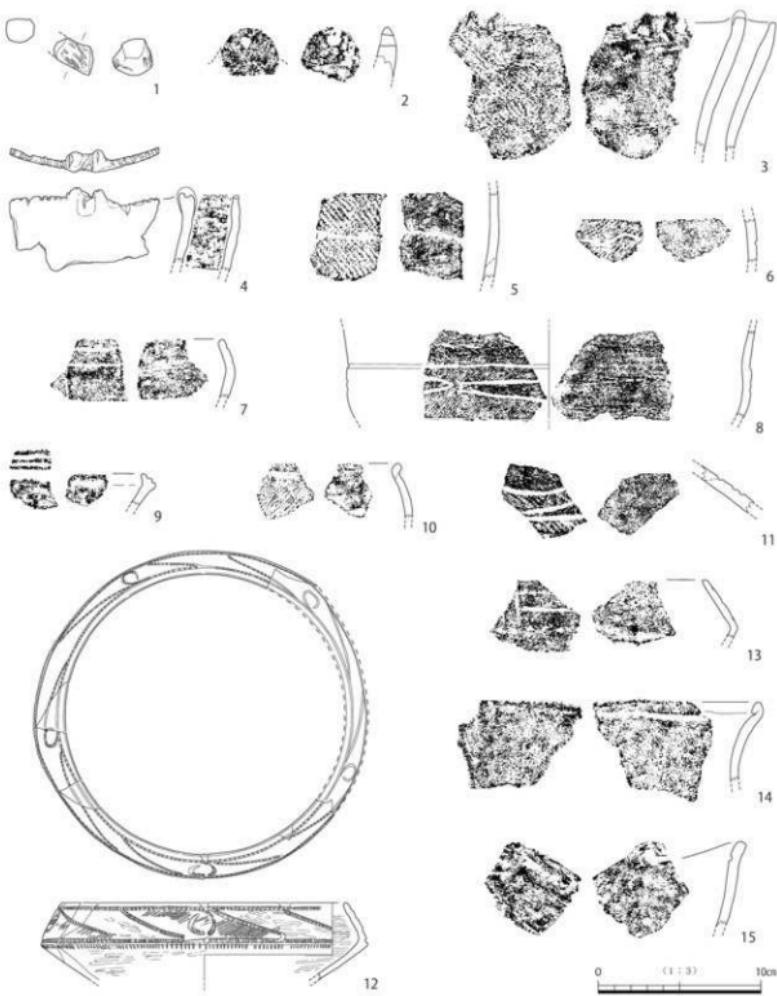


第46図 12層出土有文土器(9)

を充填する。口縁部から肩部の瘤状突起に垂下する区画沈線は擬縄文の施文後に引かれた可能性がある。胴上部のクランク文はやや変形しており、また文様帶の外側は磨り消されている。151～153は肩部から胴部であり、151は肩部上に区画沈線と細かい斜め刻みが確認できる。摩滅により不明瞭だが、肩部下には内部に刺突を持つ沈線区画帯がめぐると思われる。152の肩部は上下に区画沈線を配し、肩部上面には刻みを施す。摩滅が激しいが、胴上部には末端に刺突のある区画沈線とRL縄文が施文される。153は摩滅が激しいものの、口縁部に文様帶、肩部下には沈線区画帯が確認できる。154は口縁部から胴部であり、肩部は段状に肥厚する。口縁部と肩部の上下、胴頂部の上に区画沈線が引かれる。胴上部には文様帶があるが、摩滅が激しく不明瞭である。155は胴部で、上部の沈線区画帯には二枚貝背部押圧による擬縄文、下部の文様帶には巻貝回転による擬縄文を施す。

156～163は注口部である。注口部の先端は全て一部欠損している。156は比較的短い注口部で、2条の沈線が注口部中央にめぐる。下部に面があり、他の注口部とはやや異なった形である。159は注口部裾付近に巻貝回転による擬縄文を持つ文様帶が確認できる。157・158はやや直線的な注口部であるが、159～163は注口部裾が膨らむ。これらは概ね後期中葉頃に収まると思われる。

第46図164～167は外来系の注口土器および異形土器である。164は加曾利B1式の注口土器の口縁部突起で、上段の突起先端と背部、下段の突起先端には凹みがあり、両突起の間には穿孔が確認できる。また上段の突起背部と下段の突起先端には刻みがめぐり、両突起の裾部からそれぞれ沈線を水平に引く。165は屈曲する口縁部で、屈曲部上には細かい刺突がみられ、梢円形の剥離痕が残る。



第47図 21層上面(道構面)および21・22層出土有文土器

加曾利B1式の口縁部突起が剥離したものか。166・167は異形土器である。166は円窓の上部と考えられ、深い沈線の区画による隆帶上に刻みがめぐる。円窓内面と隆帶上には水銀朱が付着し、硫黄同位体分析の結果、北海道余市郡の明治鉱山産である可能性が示されている（第5章第4・5節）。167はやや深い沈線の区画による隆帶上に刻みを施す。横位と斜位の隆帶が交わる文様展開と残存する下部が外に開く器形は、配石土坑ST1601出土の異形土器（第19図6）と同様の構成となる。

21層上面(遺構面)および21・22層出土有文土器(第47図、図版23・32)

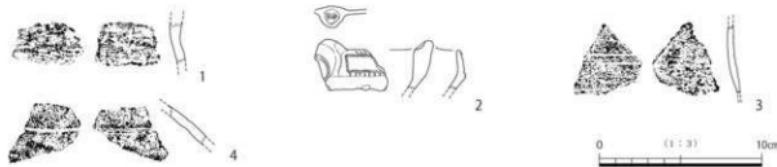
第47図1~13は21層出土で、このうち4・12は21層上面(遺構面)と12層、5は21層と12層から出土した破片が接合したものである。1~8は深鉢と考えられる。1は口縁部突起の一部でRL縄文が施され、成立期縁帶文土器と考えられる。2は波状口縁の波頂部で、円孔が確認できる。崎ヶ鼻式1~2式頃か。3・4はやや外反する口縁部で、M字状突起を持つ。3は全面にRL縄文を施し、4は口縁端部に刻みがめぐる。5・6は全面にRL縄文を施す胴部で、6には蛇行沈線が確認できる。3~6は概ね北白川上層式3期であると考えられる。7は緩やかに屈曲する口縁部で、沈線区画帯を持つ。器面が摩滅しており縄文施文は確認できない。8は頸部と胴部を区画沈線で分界しており、胴部全面にLLRの直前段多条縄文を施し、横長の不整形および楕円形の沈線区画を描く。区画内は磨り消されている。7・8は一乗寺K式であると思われる。

9~13は鉢・浅鉢・注口土器である。9は口縁端部に2条の沈線を施す鉢で、10は頸部が短いボウル形になる鉢と考えられる。口縁部内面と胴部にLR縄文を施す。11は非常に焼き締まった注口土器の胴部で、RL縄文を施文後に沈線で文様を描き、文様帶の外側は丁寧に磨り消す。器面は丁寧なミガキ調整で仕上げられている。12・13は屈曲口縁の鉢・浅鉢で、12は口縁部にLR縄文を全面に施し、沈線区画帯を設ける。区画帯内には一定間隔で斜位の沈線を引いて平行四辺形状の区画をつくり、沈線内刺突のある6字文を5単位で配すると思われる。6字文のない区画内は磨り消されている。沈線内には刺突が施され、屈曲部には刻みがめぐる。13はやや幅の広い口縁部に沈線区画帯を設け、区画帯内には二枚貝腹縁による刻みを密に充填し、区画帯の上部と屈曲部の上部に巻貝刺突を施す。胎土が他の土器と異なっており、搬入された土器の可能性がある。9は概ね崎ヶ鼻1~2式、10・11は北白川上層式3期、12・13は一乗寺K式の時期に比定できる。

第47図14・15は22層出土の深鉢で、14は口縁部を大きく外反させた後に内面に折り返している。15は緩やかに外反する波状口縁を持ち、口縁部の内面にL字文が確認できる。15は概ね崎ヶ鼻2式と考えられるが、14は器形や折り返し口縁などの特徴から、中期の船元式期に遡る可能性がある。

包含層以外の出土有文土器(第48図、図版32)

第48図1~4は排土中から確認した土器である。1は深鉢の胴部にRL縄文を施す。2はノ字状突起を持つ深鉢の口縁部で、波頂部に二枚貝背部押圧による圧痕が確認できる。沈線区画帯の上下には二枚貝腹縁による刻みが施される。3は頸部との境に沈線区画帯を設ける深鉢の胴部で、区画帯内には斜め刻みが充填される。4は注口土器の胴上部でRL縄文を施した後に沈線で文様帶をつくる。1~4は概ね北白川上層式3期、2・3は元住吉山I式と考えられる。



第48図 包含層以外の出土有文土器

(2) 無文土器 (第49～51図、図版33～35)

無文土器は12層を中心に大量に出土した。遺構外出土の無文土器の総計(底部以外)は17,513点、120.658kgで、そのうち口縁部が計1,081点、13.505kgであった。ここでは口縁部を中心に61点を掲載した。その多くは口縁部が直口の砲弾形の器形となり、器面調整はナデ調整が主体的である。以下、口縁端部の形態(平形・丸形・尖形)や口縁部の形態(直口・外反・内湾・内屈)、器面調整などについて特徴的なものを中心に確認し、層ごとに報告する(分類模式図は第3章第5節第69図を参照)。

5層出土無文土器 (第49図1、図版33)

5層からの出土量は少なく、ここで掲載したのは第49図1のみである。1は深鉢で、口縁端部は丸形で、器面は内外面ともにナデ調整で仕上げられている。

6層出土無文土器 (第49図2～6、図版33)

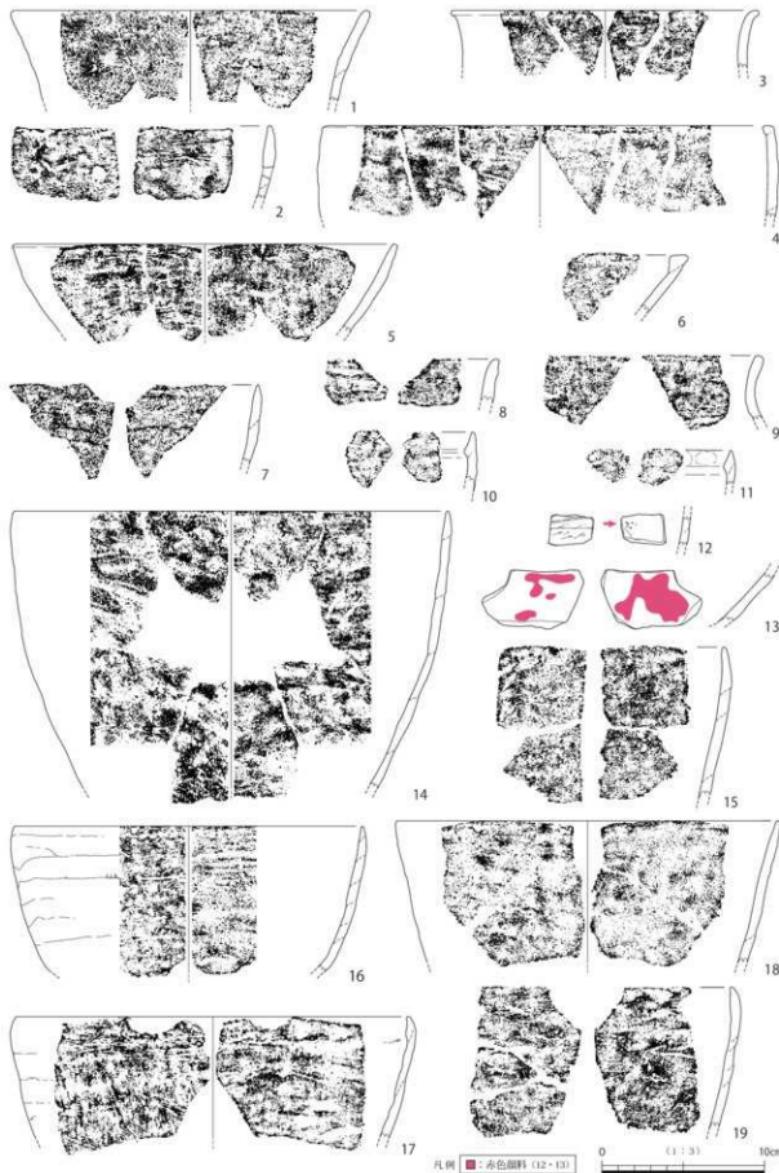
第49図2～6は6層出土で、2～4は深鉢である。2・3は丸形の口縁端部で、3は外反する口縁部である。2には補修孔が確認でき、外面は巻貝条痕調整後にナデ調整、内面はミガキ調整とナデ調整が施される。3の内外面はミガキ調整である。4は口縁端部が面取りされて平形になる。外面は二枚貝条痕調整後にナデ調整、内面はナデ調整が施される。5・6は浅鉢で、口縁端部が平形となり、6は内面を肥厚させて幅広の口縁端部に仕上げている。

11層出土無文土器 (第49図7～13、図版33)

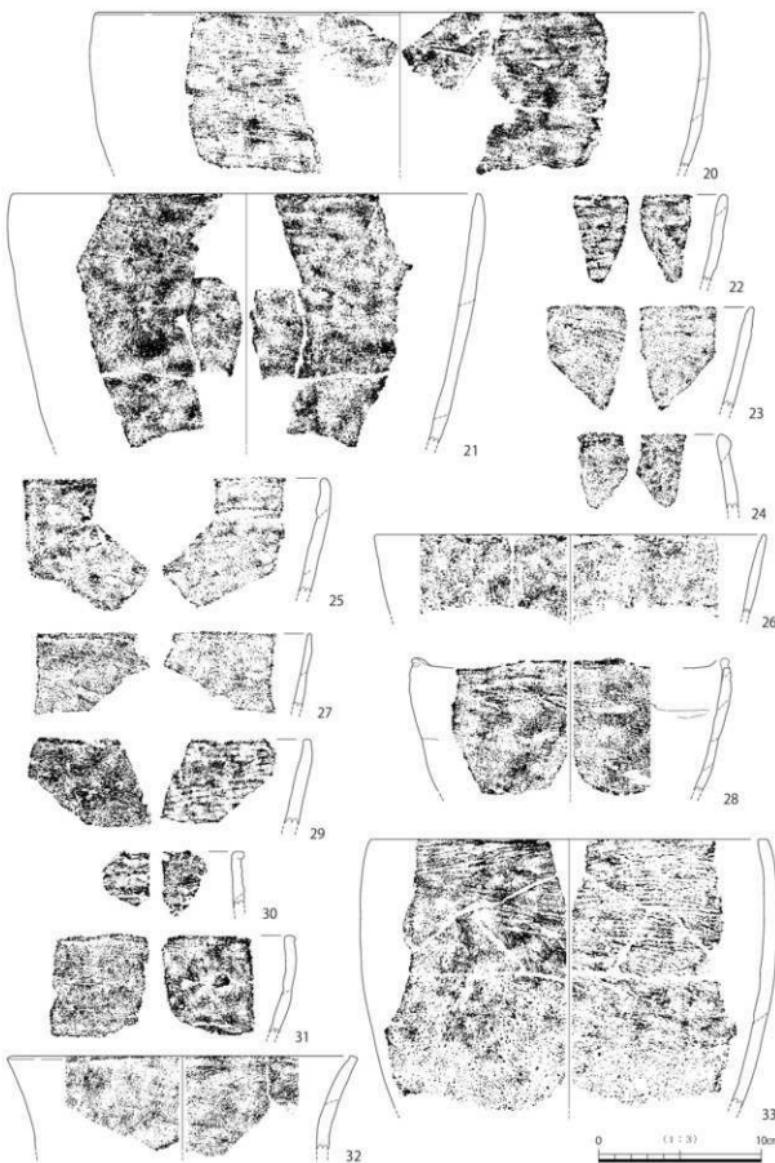
第49図7～13は11層出土で、深鉢である。7・8は外面は巻貝条痕による粗い調整で器面に凹凸が生じている。主に後期の山陰中央部に特徴的な器面調整の手法で、螺肋が発達していないウミニナなどの巻貝を使用した可能性が指摘されている⁽⁵⁾。7は尖形の口縁端部、8・9は平形の口縁端部であるが、8はやや丸形に近い。9は口縁部を外反させ、他の無文土器とはやや胎土が異なる。10・11は断面三角形状に肥厚させた口縁部内面を指頭で押圧しており、後期前葉から中葉に山陰中央部で盛行する内面肥厚指頭圧痕土器である⁽⁶⁾。肥厚部に指頭の押圧痕が若干残るが最後にヨコナデで調整しており、やや不明瞭である。12・13は赤色顔料が付着した胴部で、13は底部に近い部位である。12は内面に水銀朱、13は外面にベンガラが確認された(第5章第4節)。12の外面には巻貝条痕調整後にナデ調整が確認できる。

12層出土無文土器 (第49図14～第51図50、図版33～35)

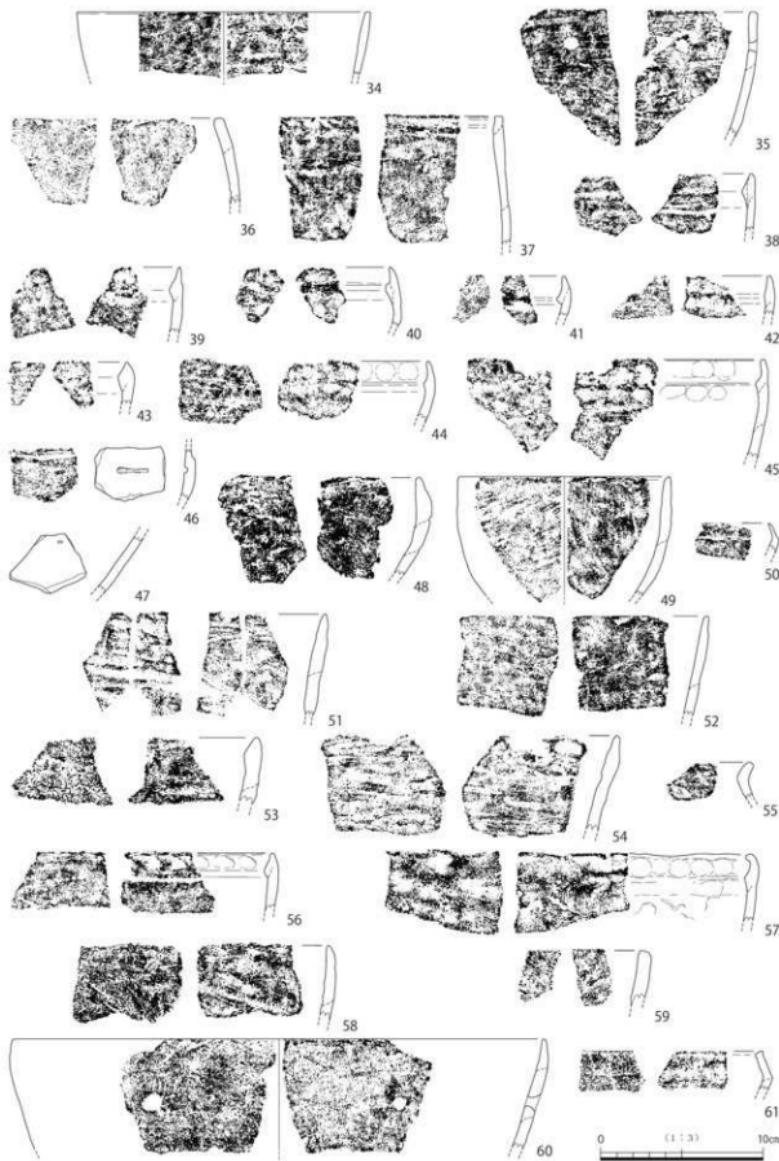
第49図14～第51図50は12層から出土した。14～47は深鉢で、14～19は口縁端部が尖形である。16と17の外面には粘土紐の接合痕が残り、16の内面の接合痕はナデ調整で丁寧に磨り消されている。17の口縁部内面は一部を肥厚させて指頭で押圧しており、内面肥厚指頭圧痕土器に似る。外面は巻貝条痕、内面は二枚貝条痕による調整後にナデ調整が施される。18は外面、19は内外面ともに条痕調整後にナデ調整で仕上げられる。20～29は口縁端部が丸形である。20の内外面は条痕調整後にナデ調整が施されるが、外面の口縁部周辺のみをミガキ調整で仕上げている。21の内外面はナデ調整で、口縁部周辺のみ一部でナデ調整前の条痕調整が確認できる。22は外面に粗い巻貝条痕調整が確認でき、23の外面には二枚貝条痕調整が施される。24は口縁部上面を突帯状に隆起させ、外面は条痕調整後にナデ調整がみられる。25は口縁部内面の微隆起を指頭押圧で形成して



第49図 5・6・11・12層出土無文土器



第50図 12層出土無文土器



第51図 12層・21層上面(遺構面)および21・22層と包含層以外の出土無文土器

おり、内面肥厚指頭圧痕土器の一群になるかもしれない。指頭圧痕はナデ調整によって磨り消されている。27は外面を巻貝条痕調整後にナデ調整で仕上げる。28は緩やかな波状口縁で、口縁端部を外側に折り返す。内面はミガキ調整が施され、内外面ともに粘土紐の接合痕がわずかに確認できる。29の口縁端部は平形に近い。外面は口縁部周辺のみにミガキ調整がみられ、内面は二枚貝条痕調整後にナデ調整が施される。30~37は口縁端部を平坦に面取りした平形である。30は口縁端部を外側に折り返し、外面を粗い巻貝条痕調整で仕上げている。31は条痕調整後にナデ調整がみられる。32は外反する口縁の深鉢になる。33は口縁部周辺の外面が巻貝条痕調整、口縁部から脣上部付近の内面は二枚貝条痕調整が施され、それ以外はナデ調整で仕上げられている。34は外面にミガキ調整が確認でき、35は内外面ともに巻貝条痕調整後にナデ調整がなされる。35には補修孔が確認できる。38~45は内面肥厚指頭圧痕土器であり、断面が三角形状に肥厚する。38は押圧は確認できず、肥厚部を貼り付けてヨコナデ調整がなされている。44・45は内面の肥厚部を指頭で押圧した痕跡が明確に確認できる。40~43は内面の指頭圧痕が確認できるが、ヨコナデ調整で磨り消されており、不明瞭になっている。42の肥厚部は指頭押圧で微隆起状に成形される。46・47は脣部で、46は内面に棒状工具と思われる圧痕が残っている。

第51図48は浅鉢で、先細りの口縁部ではあるが、口縁端部は平形に仕上げられる。第51図49・50は小形土器で、49の口縁端部は丸形で外面は二枚貝条痕調整後にナデ調整で比較的丁寧に仕上げられており、配石土坑ST1601内から出土した小形土器（第19図14・15）とよく似た風合いである。50は口縁部が先細り端部が鋭い尖形となる。

21層上面（遺構面）および21・22層出土無文土器（第51図51~59、図版35）

第51図51~53・56・57は21層出土の深鉢で、51・52の口縁端部は丸形となり、51の外面には粗い巻貝条痕調整、内面は巻貝条痕後にナデ調整がみられる。53の器壁は比較的厚く、口縁部内面を少し肥厚させて断面三角形状となる。54・55は遺構面である21層上面からの出土で、口縁端部は丸形である。54は内外面ともに粗い巻貝条痕調整が施される。55は屈曲ぎみに外反する口縁部を持ち、鉢の可能性がある。56・57は内面肥厚指頭圧痕土器で、指頭による押圧の痕跡が明瞭である。57は薄く引き伸ばした粘土を内面に貼り付け、その上から入念に指頭で押圧している。

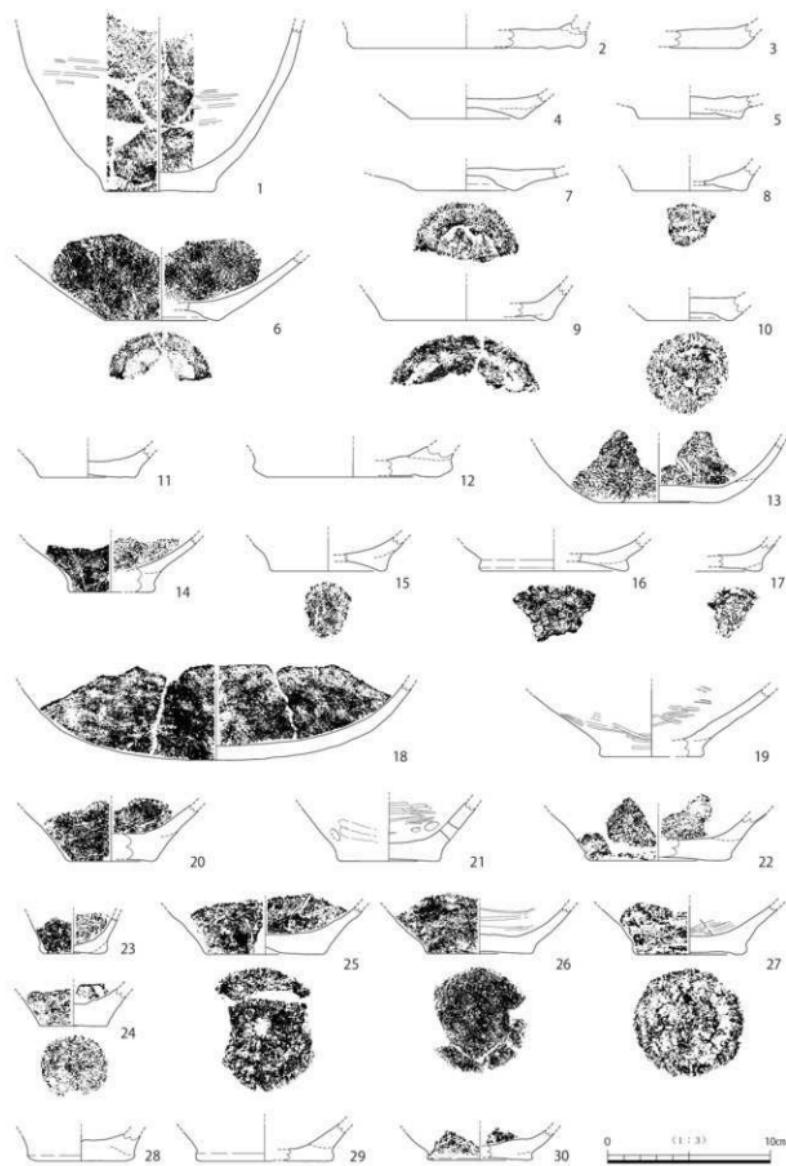
第51図58・59は22層出土の深鉢である。58は口縁端部が尖形、59は丸形であり、どちらも内外面をナデ調整で仕上げている。58は21層までの出土無文土器と同時期のものと考えられるが、59は胎土や風合いが他の土器とは異なり、前期や中期に遡る可能性がある。

包含層以外の出土無文土器（第51図60・61、図版35）

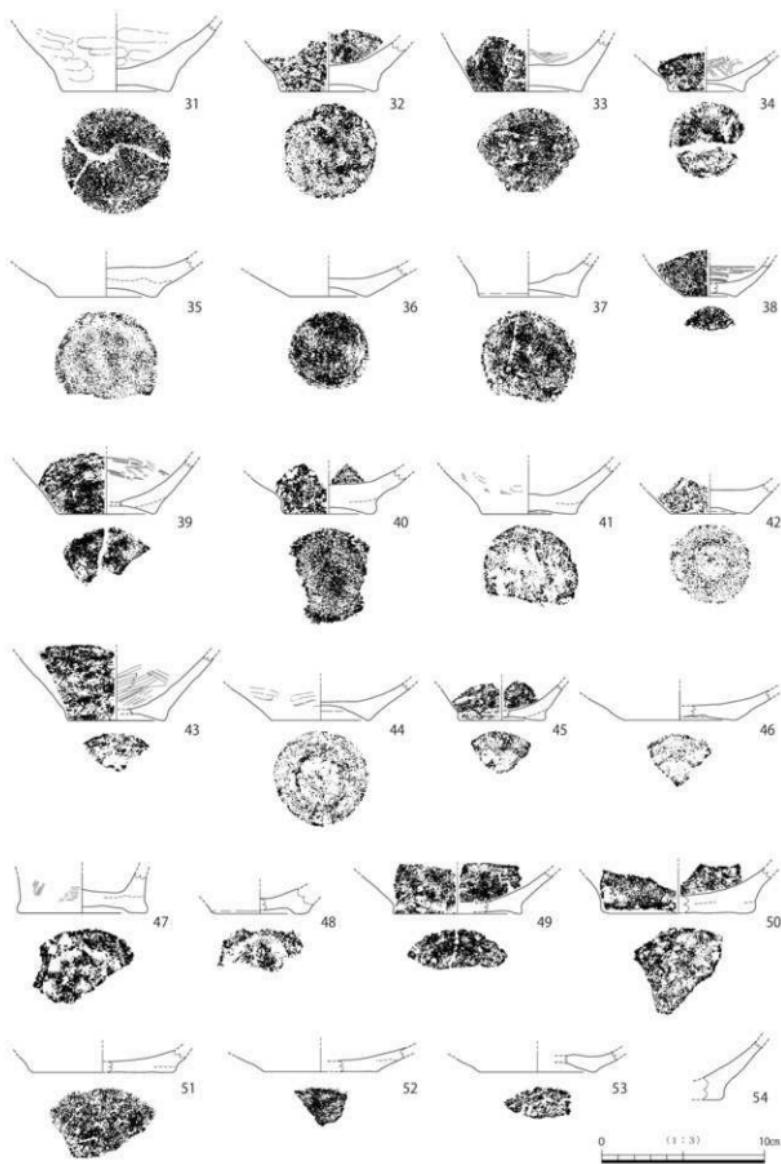
第51図60・61は、排土中から確認した。60は口縁端部が尖形で、補修孔が認められる。61は内屈する口縁部で、口縁端部は面取りした平形となる。

（3）底部（第52・53図、図版23・36~38）

底部は遺構外から305点(8.49kg)確認でき、他と同様に12層からの出土量が最も多く、ここでは、そのうち54点を層ごとに報告する。これらの多くは深鉢または鉢の底部と判断でき、一部で浅鉢や注口土器の底部もある。底部形態は、底部外面が全面接地する平底や、底部外縁のみが接地する凹底



第52図 6・11・12層出土底部



第53図 12・21・22層出土底部

が多いが、その他にも多様な形態が確認できる（分類模式図は第3章第5節第70図を参照）。器面調整はナデ調整が主流である一方で、ミガキ調整や条痕調整も確認でき、特徴的なものを中心に記述する。

6層出土底部（第52図1～10、図版23・36）

第52図1～10は6層から出土した。1～3は平底であり、1の胴部は条痕調整後にナデ調整を施し、内面の一部はミガキ調整が確認できる。底部内面はナデ調整である。4・5は凹底で、平底を成形してから底部外面に粘土紐を貼り付けて成形している。6～8は凹底の底面外部の中央がヘソ状にくぼむ底部⁽¹⁷⁾であり、ここでは2段凹底と呼称して報告する。8はわずかではあるが、底部外縁が突帶状に肥厚する。こうした形状は8のほか12・16・27～30・45・50など多様な底部形態のなかで一定量存在しており、底縁肥厚型と理解したい。底面の器壁はかなり薄い。9・10は底部外面に高台が付く高台底である。

11層出土底部（第52図11～17、図版36）

第52図11～17は11層からの出土である。11～14は平底で、13は全体的に丸みを帯び、ボウル状の器形になる可能性がある。12は底部外縁が突起状に肥厚しており、底縁肥厚型の平底と考えられる。15・16は凹底で、16は底縁肥厚型である。17は高台底である。

12層出土底部（第52図18～第53図49・図版36～38）

第52図18～第53図49は12層から出土した。18は浅鉢と思われる底部で丸底である。内面にミガキ調整がみられる。19～30は平底である。19は内外面にミガキ調整が一部で確認できる。21は底部側面に補修孔がみられ、内面には条痕調整後にナデ調整が施される。23・24は小形の底部で、23は底部外縁に粘土紐を貼り付けて平坦面を成形しており、底縁肥厚型に近い。24は小形にしては器壁が厚く安定した印象を受ける。25は底面外部中央に凹みが確認できる。底部成形時の痕跡の可能性がある。26の内面は条痕調整後にナデ調整がみられる。27～30は平底のうち底縁肥厚型の平底である。27の内面は巻貝条痕調整後にナデ調整が施される。31～40は凹底である。31ははっきりとしたナデ調整の痕跡が内外面に確認でき、底部外面はミガキ調整が施される。33の内面は条痕調整後にナデ調整がみられる。34は底面中央の器壁がかなり薄い。内面は巻貝条痕調整後にナデ調整で仕上げられている。35・36は大きく外側に開いており、浅鉢または注口土器の底部の可能性がある。35は接合痕から、平底の底面外部に粘土板を貼り付けて凹底に成形していることが分かる。36は底面外部にミガキ調整が施される。37は底面中央の器壁が薄く、内面は二枚貝条痕調整後にナデ調整で仕上げられる。38も同様に内面に二枚貝条痕調整とその後のナデ調整が確認できる。39は底部外縁に粘土紐を貼り付けて成形した痕跡が残り、内面には巻貝条痕調整後にナデ調整がみられる。40は底面外部にミガキ調整が施される。41～46は2段凹底で、41は外面に条痕調整後のナデ調整が確認できる。42は器壁が厚く、1段目の凹部の外側は丁寧なナデ調整が施される。43は内外面ともに巻貝条痕調整後にナデ調整で仕上げられている。44は底面中央部の器壁がかなり薄く、底部外縁の接地面は鋭く尖る。45はやや小振りな底部で、わずかに底縁が肥厚する2段凹底である。46は外側に大きく開き、浅鉢もしくは注口土器の底部と思われる。47～49は高台底で、47の内外面は二枚貝条痕調整後にナデ調整が施される。

21・22層出土底部（第53図50～54、図版38）

第53図50～53は21層から出土した。50～52は平底である。50は底縁肥厚型の平底で、粘土板を底面外部に貼り付けて底面の厚みを増している。51も同様の手法で成形したものと思われる。52は外外面にミガキ調整が施され、浅鉢の底部であると考えられる。53は凹底で、外側に大きく開く浅鉢もしくは注口土器の底部であろう。54は22層出土の平底である。

3 繩文時代の出土石器（第54～67図、図版39～48）

4-1区の石器は土器と同様に12層からの出土が目立つ。遺構内出土の石器を含め、総計で1,139点、総重量151,457kgを計り、ここでは遺構外出土石器のうち129点を図化して掲載した。全体的に見ると、石鑿や削器、打製石斧などの打製石器よりも、敲石や磨石、石皿といった礫石器が多い。これは県調査区の3区でも同様で、京田遺跡の石器組成を特徴づけている。石材は安山岩やデイサイト、および流紋岩が比較的多いが、碧玉や瑪瑙などの玉髓も採用されるなど多様な石材利用がみられる。そのなかで安山岩は主に打製石器において、以下の異なる4種類の石材が確認できる。

安山岩（青灰）：自然面が灰白色または黄灰色で剥離面が青灰色の安山岩。

剥離面に細かい白色斑晶が確認でき、香川県金山産サヌカイトの特徴を示す。

安山岩（灰）：自然面が灰色から灰白色で剥離面が灰色の安山岩。

安山岩（灰白）：自然面と剥離面がともに灰白色的安山岩。

安山岩（暗灰）：自然面が灰色から灰白色で剥離面が暗灰色の安山岩。

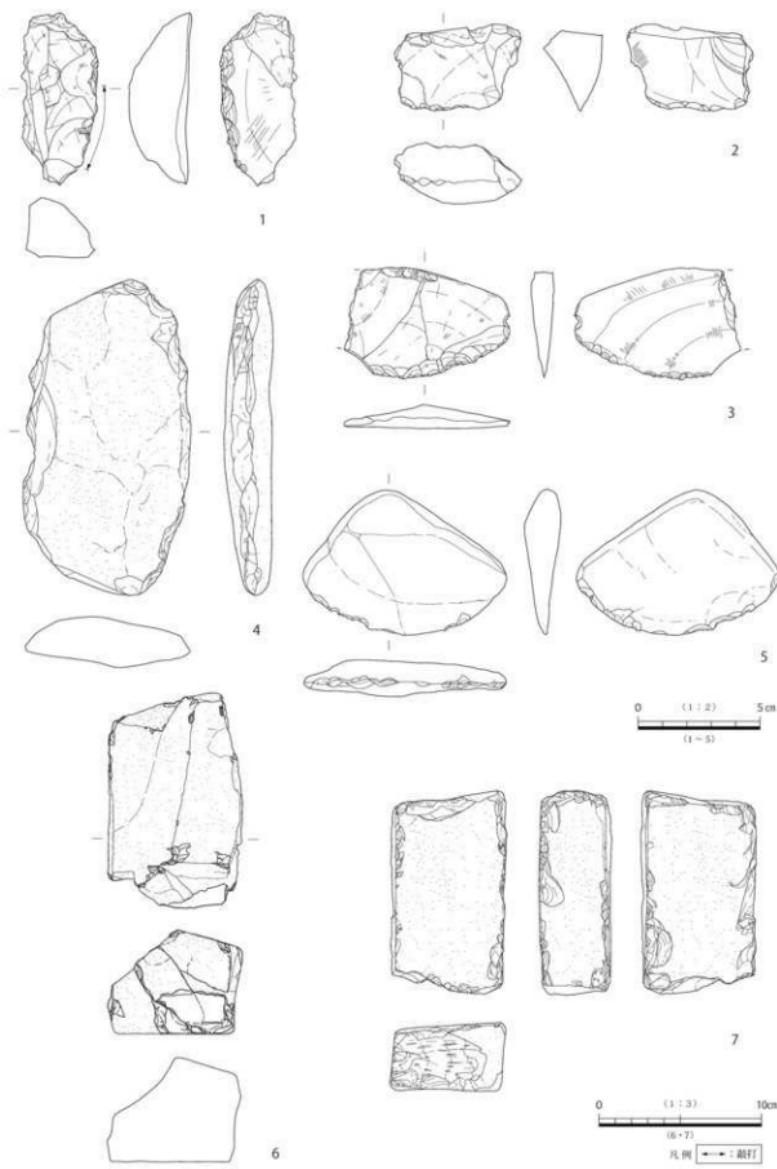
これらの安山岩について、判別可能なものは明記し、その他の安山岩については「安山岩」のみの表記で記述した。以下、出土した層ごとに報告する。

3～5層出土石器（第54～第55図、図版39・40）

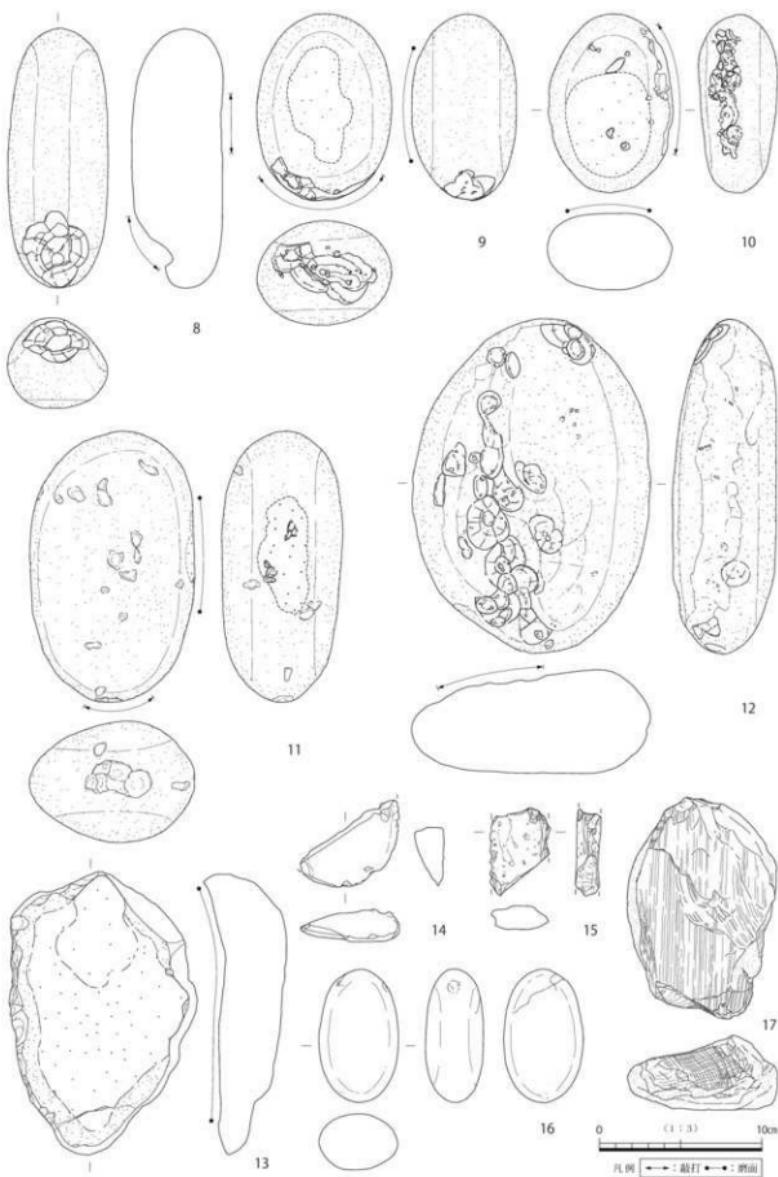
第54図1は3層出土で搔器と考えられ、側縁に刃部を形成する。刃部の一部は敲打痕によって潰れており、階段状剥離痕が確認できる。敲石に転用された、あるいは両極打法が加えられた可能性がある。碧玉製であるが、碧玉に別の碧玉が嵌入する稀有な石材である。

第54図2～第55図17は4・5層出土である。2～5は打製石器である。2は玉髓製の搔器で、両面に剥離が残っており、石核から転用されたものか。3は横長剥片を素材とした削器で、円弧状の刃部は両面調整で成形される。石材は安山岩（青灰）である。4は自然面を多く残して側縁に微細剥離痕が確認できる剥片で、石材は安山岩（暗灰）である。5は流紋岩製の二次加工のある剥片で、一部に両面調整が施されている。6・7は角柱状石核素材で、石材は安山岩（灰）である。7は各面の側縁が一部微細に剥離しており、両極打法が用いられた可能性がある。

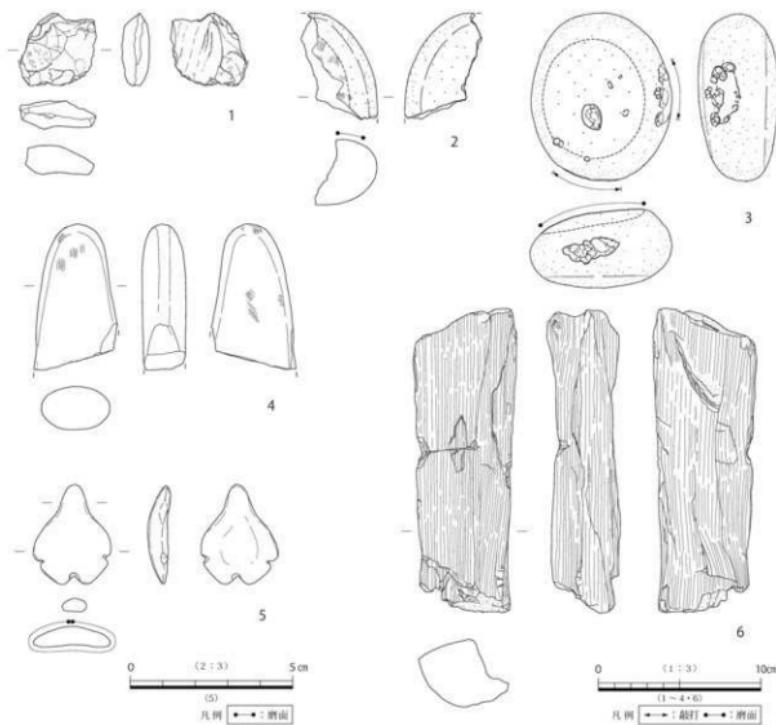
8～17は礫石器、磨製石器、原石、石核素材、珪化木である。8はデイサイト製の敲石で凹んだ敲打痕を持つ。9～11は敲石／磨石である。9は下端に敲打痕、表面に摩滅が確認でき、10は側面に敲打痕、表面に摩滅がみられる。11は下端に敲打痕、側面に摩滅が確認できる。石材は9・10がデイサイト、11は安山岩質の凝灰岩である。12は台石で石材はデイサイトであり、表面に複数の凹みが確認できる。13は安山岩製の石皿で、表面が摩滅して滑らかになり緩やかに凹む。14は磨製



第54図 3~5層出土石器



第55図 5層出土石器



第56図 6層出土石器

石斧の刃部であると思われるが、欠損面が風化しており、別器種の可能性もある。石材は安山岩（灰）である。15は瑪瑙製の板状石核素材で、上下端は欠損するが、その後の剥離痕が確認できる。16は石英の原石としたが、上下端にわずかな摩滅が確認できる。表面は滑らかで未加工であり、特別な用途があったのかもしれない。17は珪化木であり、表面と下端の一部で年輪が確認できる。

6層出土石器（第56図、図版40）

第56図1～6は6層出土の石器である。1は打製石斧の刃部で、両面に比較的大きな剥離痕が残るため、石核から転用された可能性がある。石材は安山岩（暗灰）である。2は安山岩製の磨石と考えられ、表面に被熱痕が残る。大部分が欠損しており、破面にも被熱が確認できることから、欠損した後に被熱したことが分かる。3は敲石／磨石であり、下端と側面を使って敲打し、表面は摩滅している。石材はデイサイトである。4は下端が欠損しているが、下端に向かってハサウエーに開いており、磨製石斧あるいは敲石と考えられる。石材は流紋岩である。5は全体が丁寧に研磨された小形の特殊な石製品である。両側縁と下端に切り込みが入れられ、左右対称になるように加工されているが、明確な用途は不明である。石材は流紋岩である。6は珪化木である。加工した痕跡などは認められない。

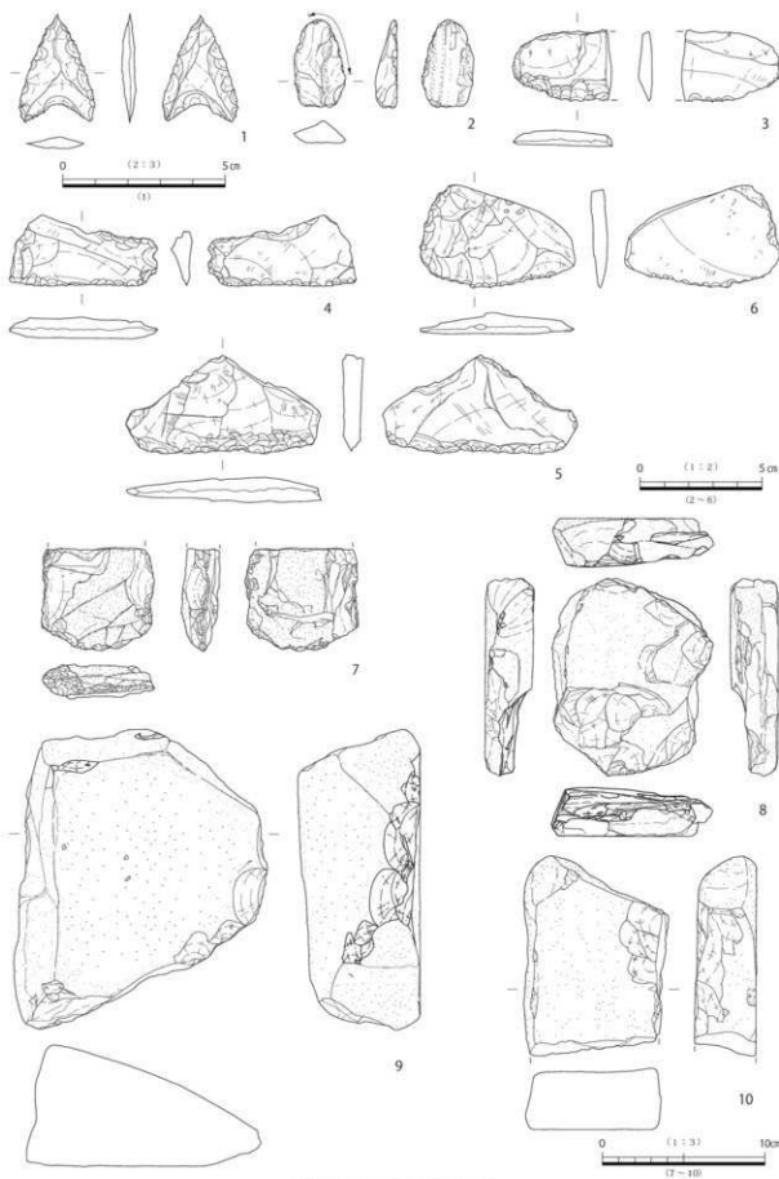
11層出土石器（第57・58図、図版41・42）

第57図1～第58図18は11層出土の石器である。1～10は打製石器、石核素材である。1は安山岩（青灰）製の比較的大きな石鎌で、両面調整で側縁を緩やかに外湾させ、脚端部は尖っている。2は硬質な砂岩製の小型の搔器と考えられる。側縁には細かい片面調整がみられる。3～5は横長剥片を素材とした削器で、3は背面側の縁辺を丹念に剥離させて緩やかな円弧状の刃部をつくる。4・5は細かい両面調整が施されて直線状の刃部を成形する。3の石材はデイサイト、4・5は安山岩（灰）である。6は両面に微細剥離痕のある安山岩（灰白）製の剥片である。7は打製石斧の未製品で、両側縁に敲打痕と階段状の剥離痕が認められ、両極打法を用いて成形したものと思われる。基部が欠損しており、刃部は未調整である。石材は安山岩（灰）である。8～10は板状および角柱状の石核素材と考えられ、石材は安山岩（灰）で、それぞれ剥離痕が認められる。

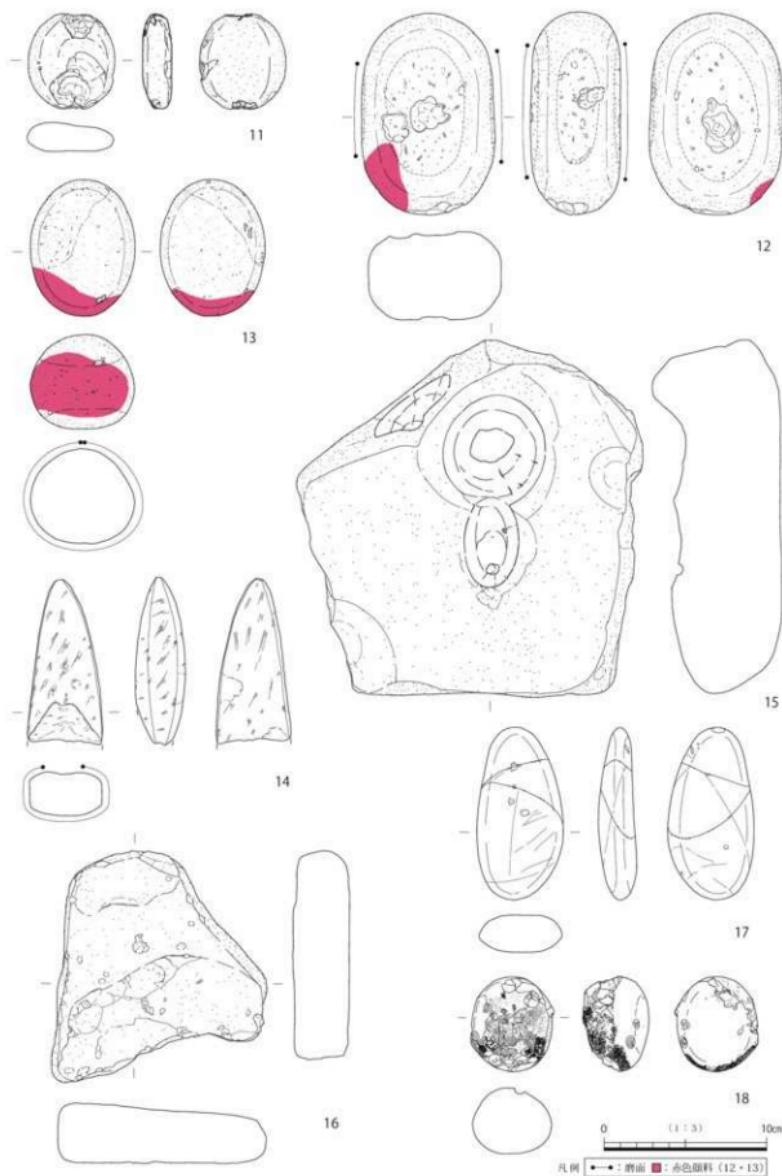
11～18は磨製石器、礫石器、石製品、原石である。11は流紋岩製の打欠石錘で、上下端を比較的浅く打ち欠いている。12は安山岩製の扁平な敲石／凹石で、下端に敲打痕、表面と裏面に凹みが確認できる。また表面と裏面、側面に若干の摩滅が確認できるため、磨石としても使用された可能性がある。蛍光X線分析の結果、付着していた赤色顔料はベンガラであった（第5章第4節）。13は磨石であり、器面が全体的に丁寧に研磨されている。石材は細粒花崗岩で、その他の石器にはない石材が使用されている。下端付近には赤色顔料が付着する。赤色顔料は水銀朱であり、硫黄同位体分析の結果、北海道余市郡の明治鉱山産である可能性が高い（第5章第4・5節）。14は安山岩製の定角式の磨製石斧で、全体的に丁寧に研磨されている。刃部が欠損している。15・16は台石である。15は砂岩製で表面に2箇所の凹みが確認でき、堅果類などを削る作業台として使用されたと考えられる。16は水銀朱が付着した13の磨石とセットで出土したが、蛍光X線分析の結果、赤色顔料は確認できなかった（第5章第4節）。石材はデイサイトである。17は扁平な形状で滑らかな器面を持つ。器面全体をめぐる石の節理上に細かい点刻が部分的に施された可能性があるため、用途不明の特殊な石製品とした。石材は安山岩質凝灰岩である。18は瑪瑙の原石で、表面には多数の気泡跡が確認できる。

12層出土石器（第59～66図、図版43～47）

第59図1～第66図80は12層から出土した石器である。1～39は打製石器、石核である。1～15は石鎌で、1～4は概ね完形の製品である。1～3の側縁は直線的で先端部のみわずかに外湾する。1・2の脚端部は比較的尖った形を持ち、3は丸く調整される。1・3は両面調整がなされているが、2は剥離痕を活かして片面調整で仕上げている。4・5の側縁は外湾しており、脚端部は丸い。4の左側縁は外湾するが、右側縁はやや直線的となる。側縁の調整は4が片面調整、5は両面調整で仕上げられる。6は基部の抉りの幅が広く、ハズ字間に開く長い脚部を持つ。側縁を屈曲させて細長い先端部に仕上げている。7～12は一部が欠損したものである。7は直線的な側縁、8は外湾する側縁、9は緩やかに内湾する側縁であると考えられ、脚端部は尖った形に仕上げている。7・9の側縁は両面調整である。8は一部が片面調整になっているが、第57図1と類似した形態で同様の調整が施されたと考えられ、調整途中で破損したのかもしれない。10～12はS字状に緩やかに湾曲する。10・11の脚端部は尖っており、12は丸く仕上げている。13～15は加工・調整途中の未製



第57図 11層出土石器(1)



第58図 11層出土石器(2)

品である。13は側縁の調整途中、14・15は基部に抉りを入れる前段階を示していると考えられる。石材は1・2・5～7・12が安山岩(灰)、3・8～10・11・14が安山岩(青灰)、4が安山岩(灰白)、15が安山岩(暗灰)であり、13はデイサイトである。

16～21は削器、22は抉入石器、23は石匙である。16はやや厚手の横長剥片を素材として円弧状の刃部を成形する。刃部は両面調整され、一部に階段状剥離が認められる。17～21は横長剥片を用いて直線状の刃部を成形し、21は剥離時の形状を活かして片面調整で仕上げている。16～20は両面調整が施される。18は使用のためか、やや刃部が潰れている。21は背面に自然面を残す。石材は16・18・20が安山岩(青灰)、19が安山岩(灰)、17がデイサイト、21が流紋岩で、削器には安山岩(青灰)が比較的多く採用されている。22は左側縁に抉りがみられる抉入石器で、刃部は両面調整で仕上げられている。石材は安山岩(灰)である。23はつまみ部と直線状の刃部を持つ安山岩(灰)製の石匙で、つまみ部は両側縁の片面調整で成形されている。

24・25は楔形石器であると考えられ、24の上下端に微細な剥離痕が確認でき、下端は一部が階段状に剥離する。両面に自然面が残り、薄い板状石核素材を両極打法で調整したものと思われる。25は下端に微細な剥離痕が確認できる。石材は24・25ともに安山岩(灰)である。

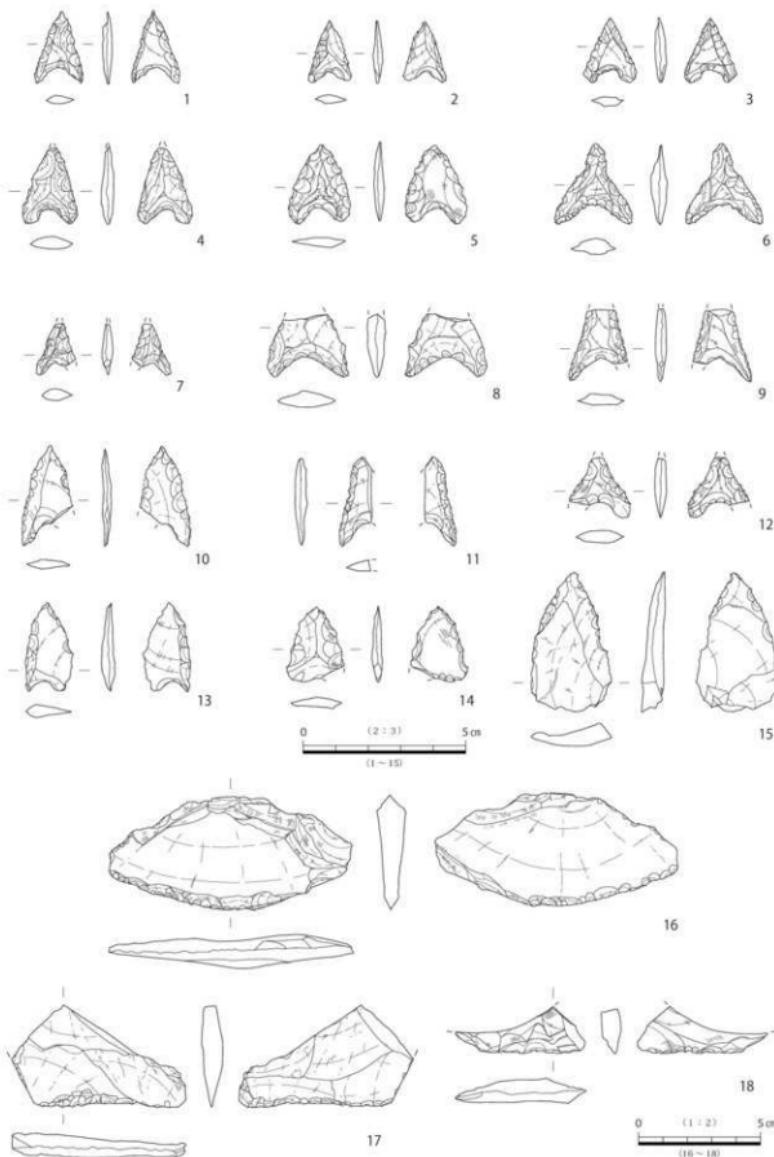
26～29は二次加工のある剥片である。26・29は両面に剥離痕が確認でき、残核に二次加工を加えた可能性もある。26は安山岩(暗灰)製、27・29はデイサイト製で、28は安山岩(青灰)製である。30～33は微細剥離痕のある剥片で、縁辺に微細な剥離痕が認められ、剥離面を利用して刃器として使用した可能性がある。石材は30が安山岩(灰白)、31が安山岩(灰)、32が流紋岩、33が安山岩(灰)である。

34・35は打製石斧の未製品と考えられる。34は左右側縁に敲打痕と階段状剥離痕が認められ、両極打法によって成形されたと思われる。基部や背面には比較的大きな剥離痕が残っており、石核から転用されたものか。刃部は片面調整が貫徹されていない。35は両側縁に剪断面が確認できる。刃部に敲打痕がみられ、両極打法で石の節理に沿って分割された可能性がある。基部が欠損して側縁が未調整である。石材は34・35ともに安山岩(灰)である。

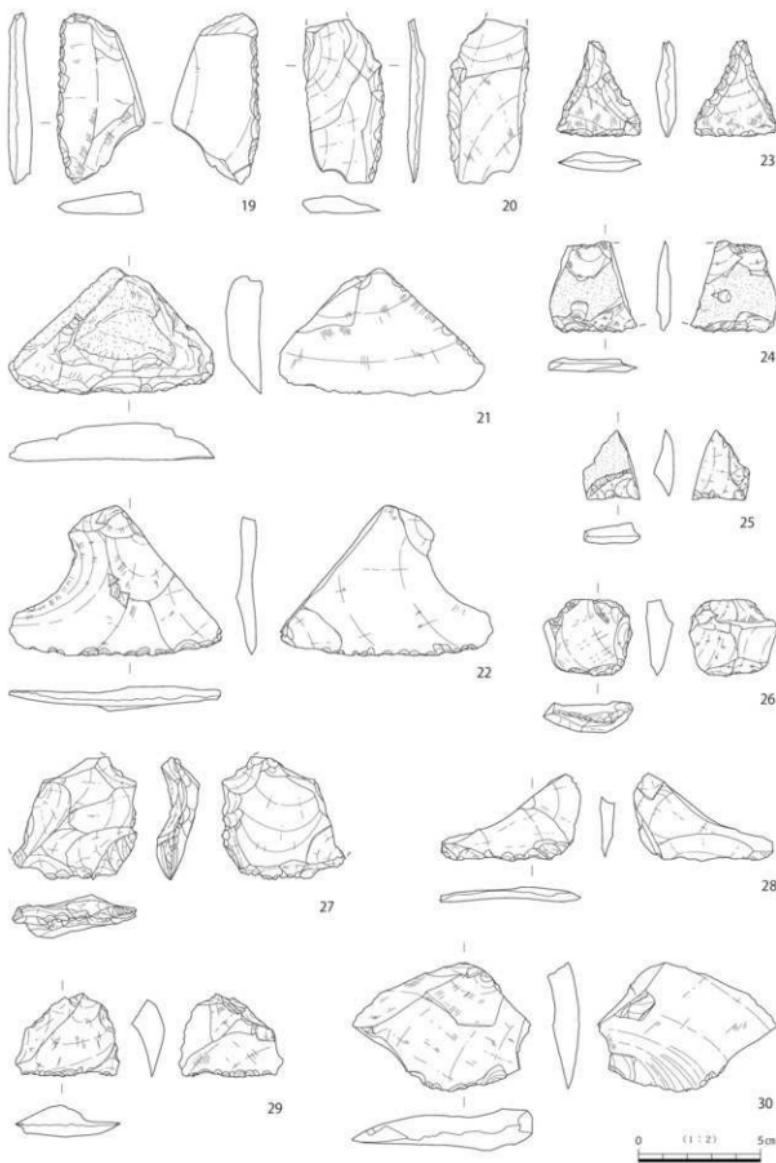
36～39は石核であり、両面で剥離痕が確認できる。37は下端に階段状の剥離がみられ、両極打法によって石器素材を剥離させたと思われる。38は黄灰色の自然面を持ち、板状節理が発達している。石材は36・39が安山岩(灰)、37が流紋岩、38が安山岩(青灰)である。

40～80は磨製石器、礫石器、石製品、原石、石核素材、珪化木である。40は流紋岩製の有溝石錘で、両面に幅の狭い溝が縱方向にめぐる。

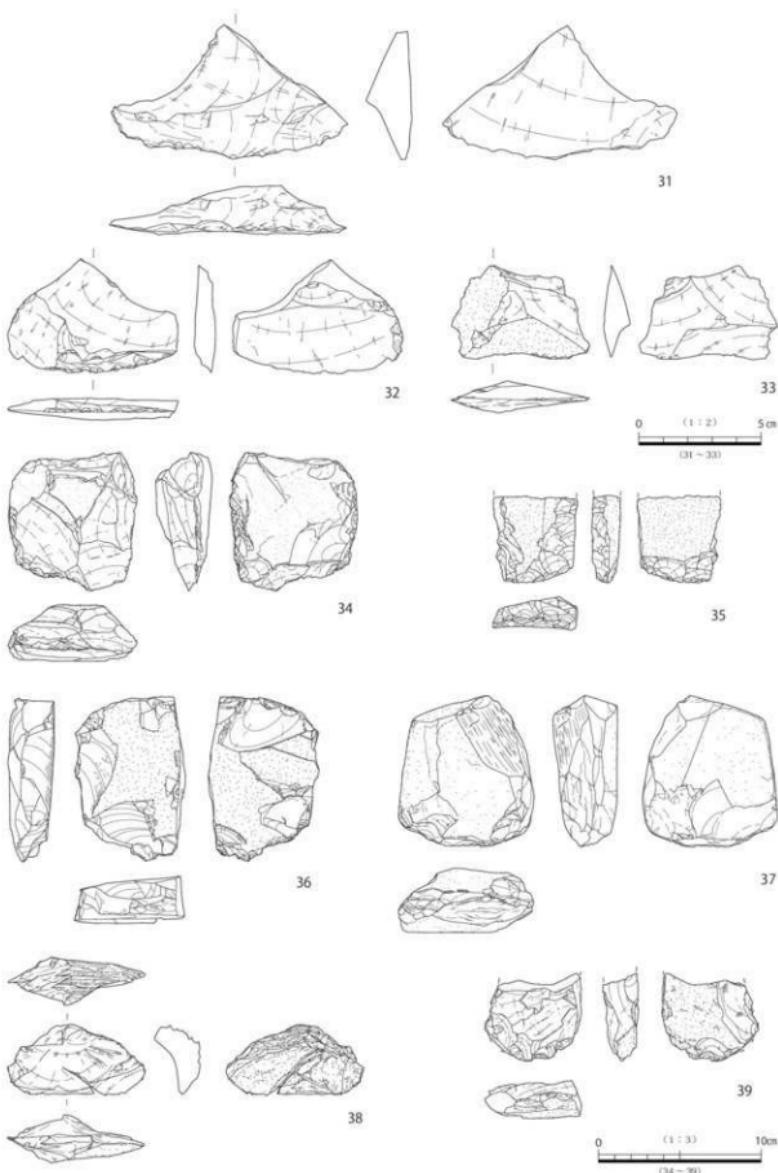
41～61は敲石、磨石、凹石である。41～48は敲石で、41は扁平な礫を使用しており、上下端に敲打痕が確認できる。42・43は棒状の石材で、42は下端に敲打痕が確認でき、43は上端にも敲打痕が残るが、先細りする下端に顕著な敲打痕が認められる。45は比較的軽い石材を使用し、上下端が敲打によって扁平になる。46は下端に敲打痕がある。上半部は欠損しており、破面は被熱している。44・47は上端に面があり、下端に敲打痕が残る。44の上端の面と表面、そして下端付近に被熱痕が確認できる。48は大型で重量感がある。敲打痕は上端と下端、そして表面にも一部確認でき、



第59図 12層出土石器(1)



第60図 12層出土石器(2)

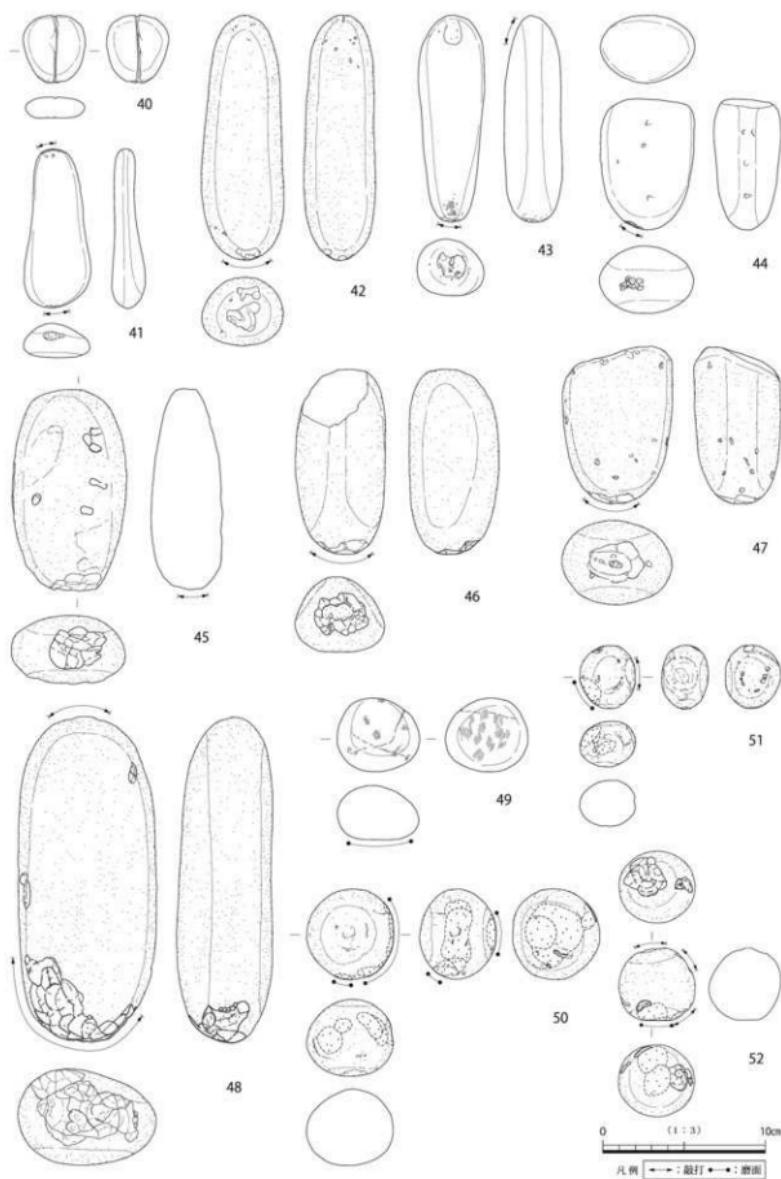


第61図 12層出土石器(3)

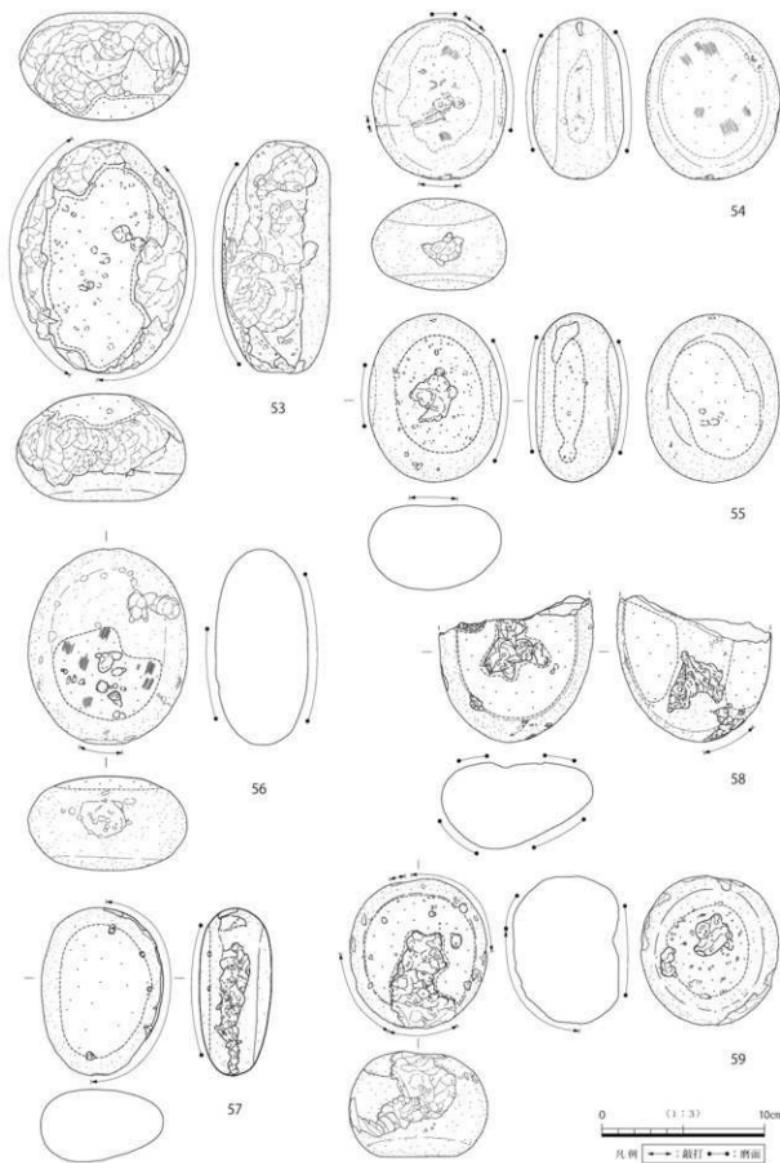
多様な角度で敲打に使用されたと思われる。石材は41・47が安山岩、42・43が流紋岩、44・46・48がデイサイトで、45は軟質の凝灰岩である。49・50はデイサイト製の小形の磨石である。49は全面が丁寧に研磨されており、光沢を帯びる。土器の器面のミガキ調整などに使用された可能性が考えられる。50は下端と右側面、および裏面が摩滅する。51・52はデイサイト製の小形の敲石/磨石で、51は右側面に敲打痕、下端および左側面に摩滅が確認できる。52は上端および右側面に敲打痕、下端に摩滅が認められる。53～57は敲石/磨石である。53は両側面と上下端のほぼ全面に敲打痕が確認でき、表面が全体的に摩滅する。54は下端と左側面および右側面の上端付近に敲打痕、右側面と上端に摩滅が確認でき、部分によって使い分けた可能性がある。表裏面も摩滅している。55は表面中央にのみ敲打痕がみられ、表裏面と両側面に摩滅が認められる。56は下端に敲打痕、表裏面に摩滅が確認できる。57は上端から右側面と下端にかけて敲打痕が残る。表面が摩滅する。石材は53～55が安山岩、56がデイサイトで、57は凝灰岩である。58・59は敲石/磨石/凹石である。58はデイサイト製で上半部が欠損する。敲打痕は下端付近の左側面の一部のみで、表裏面と左側面は摩滅している。表裏面に凹みが確認できるが、裏面は平坦ではないため、裏面の凹みは敲打痕の一部の可能性もある。59は安山岩製で上端と下端、右側面上部と左側面下部および表面に敲打痕がみられる。表面は摩滅しており、裏面は研磨して平滑に仕上げている。また裏面には凹みが確認できる。60・61は敲石/凹石である。60は表面と両側面および上端に敲打痕があり、表面中央に凹みが確認できる。61は上下端に敲打痕が認められ、表裏面中央に凹みが付く。石材は60がデイサイト、61が安山岩である。

62～67は磨製石斧である。62は基部先端がやや欠損するが、それ以外はほぼ残存する。刃部は丁寧に研磨している。長軸方向が短く、破損するたびに刃部を再生して利用していた可能性が考えられる。63は刃部が欠損しており、基部の先端は敲打痕が残る。定角式を意識したように左側面は磨かれて平滑な面がつくられる。64は刃部の表面が剥落したものである。全体的に丁寧に研磨されている。65は刃部で、上半部は欠損する。風化が激しく定かではないが、刃部は未調整である。66は扁平で滑らかな礫を利用して下端に刃部をつくり出そうとしている未成品と思われる。刃部付近は打ち欠かれているが、その後に刃部を研磨して磨製石斧に仕上げることを意図したと思われる。67は小型であり、刃部のみではなく全面的に丁寧に磨かれて光沢を帯びる。刃部先端には微細な剥離痕が確認できる。石材は62・63が塩基性片岩、65・66が流紋岩、64が結晶片岩、67が安山岩である。

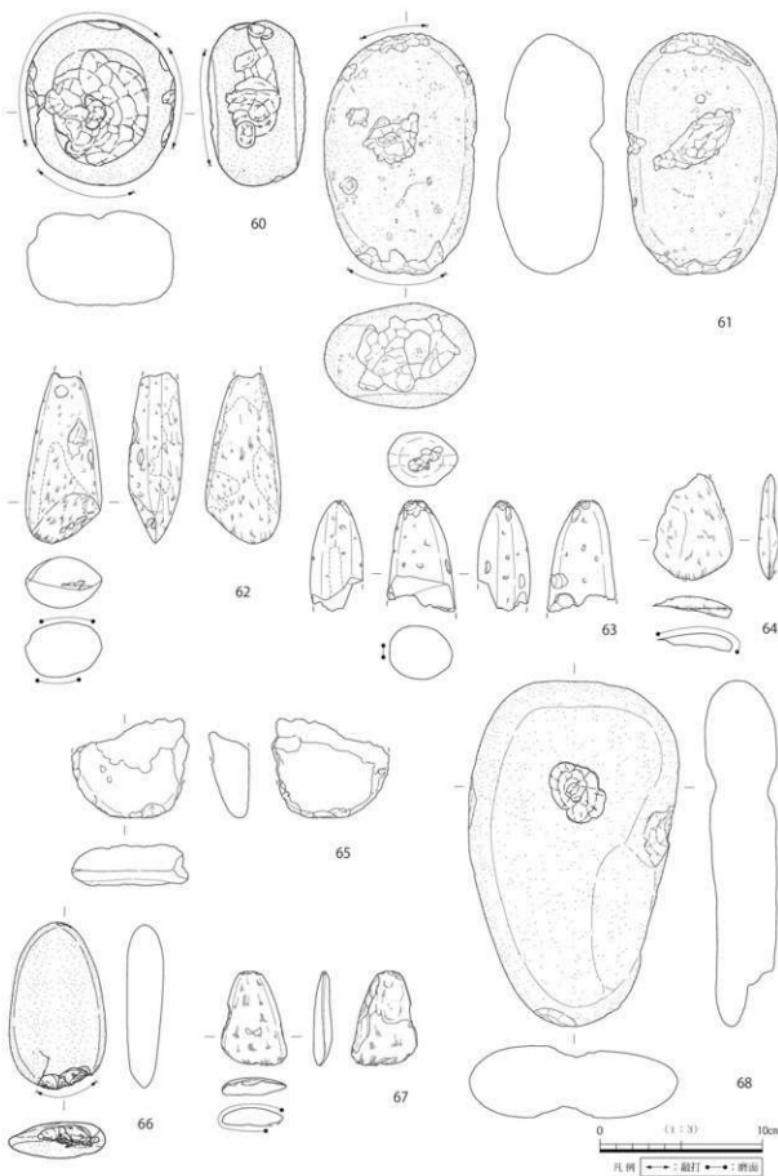
68～74は台石、石皿である。68・69は台石であり、68は流紋岩製で、扁平な礫の表裏面に凹みが確認できる。69は表面に大小複数の凹みを持つ。石材は安山岩だが瑪瑙が斑状に嵌入する。70～74は石皿である。70の裏面は広範囲の敲打により凹凸が激しい。安定して自立させるための加工であったと思われる。左側面には一部被熱痕が残る。71は表面中央を中心にして凹み、風化が激しいが使用により摩滅したと思われる。72は上半部が欠損するが、表面中央が緩やかに凹み、摩滅している。73は下半部が欠損する。表面は凹んでおり、摩滅して非常に滑らかになっている。74は上半部の左半分のみが残存する。表面中央を中心に大きく凹む。磨製石斧の刃部を磨くなど、砥石として使用された可能性もある。石材は70がデイサイト、71・74が砂岩、72・73が安山岩である。



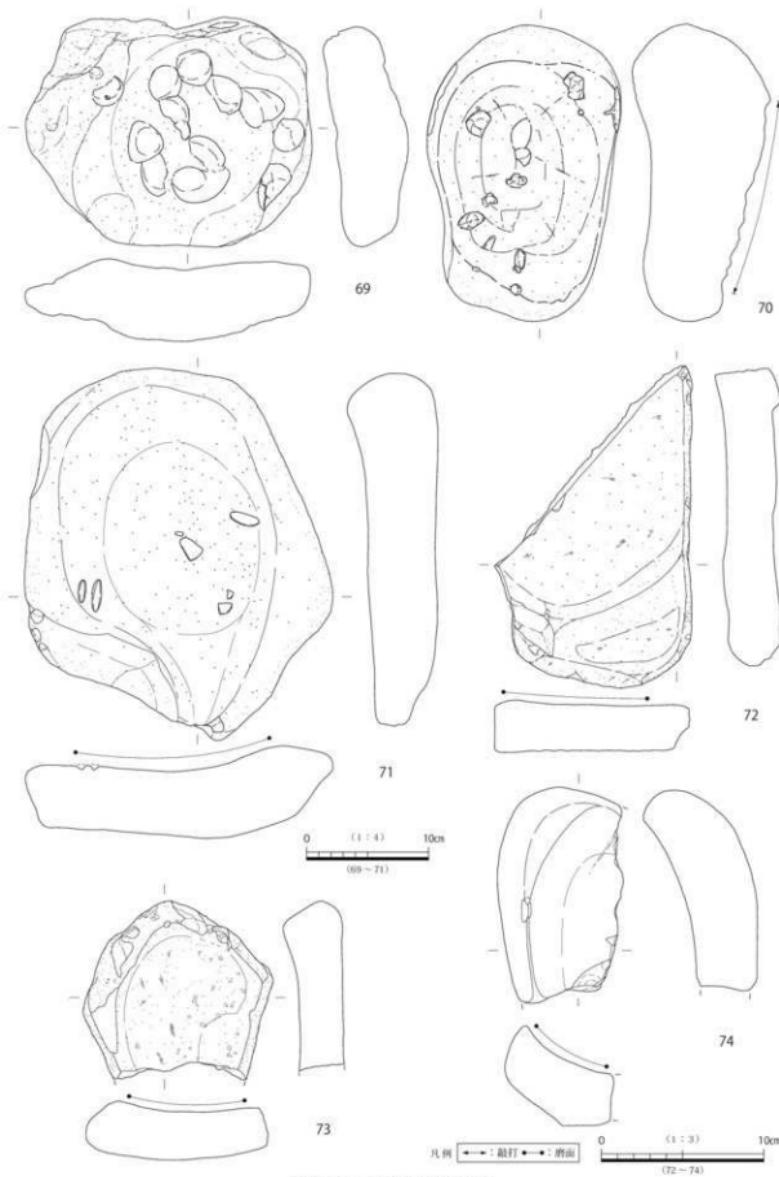
第62図 12層出土石器(4)



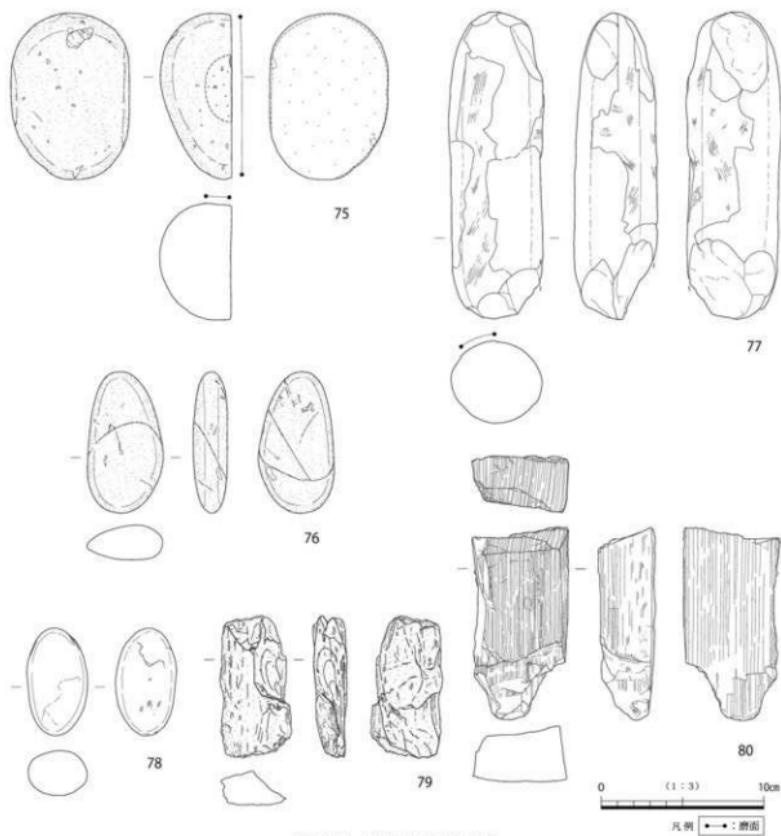
第63図 12層出土石器 (5)



第64図 12層出土石器(6)



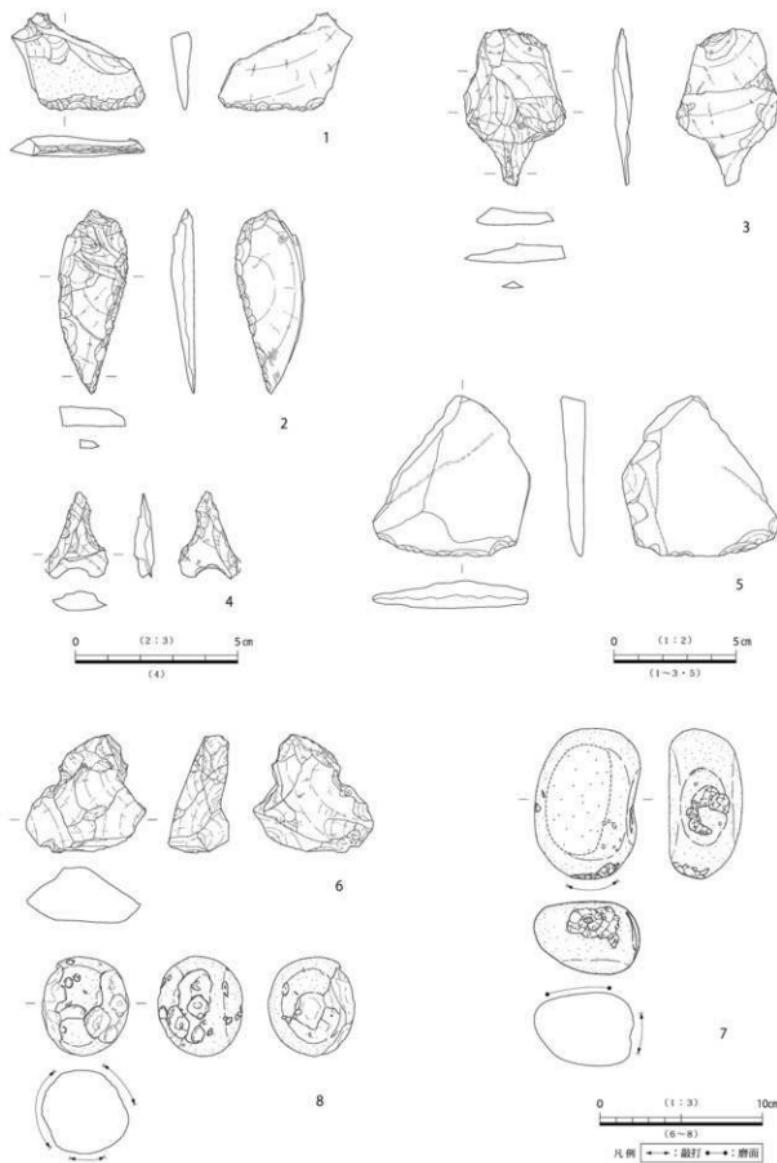
第65図 12層出土石器(7)



第66図 12層出土石器(8)

75～77は特殊な石製品と考えた。75は軟質なデイサイト製の礫を半分に分割し、その破面を丁寧に磨いて平滑に仕上げている。表面中央がわずかに凹んで摩滅する。76は第58図17と同じく器面を石の節理がめぐり、形態もほぼ同じである。わずかに節理上に部分的な点刻が施された可能性があるが、不明瞭である。全体的に被熱している。石材は砂岩である。77は全体的に被熱し、器面が一部剥落している。上下端には剥離痕が認められるが、被熱後に剥離したと思われる。部分的に研磨されている。石材は重量感のある安山岩で、周辺で採取できる石材ではなく、搬入石材の可能性が考えられる⁽⁸⁾。敲打で上端部が剥離しており、敲石として使われた可能性があるが、全面に被熱痕があり稀有な石材を採用するなど、非日常的な場面で使用される石棒状石器などの可能性が考えられる。

78～80は原石、石核素材、珪化木である。78は第55図16と同様、石英の原石であるが、16よりもやや小振りである。79は泥質片岩製の板状石核素材と考えられ、片理の発達がみられる。こ



第67図 13・21・22層出土石器

の地域には普遍的に存在しない石材で、搬入石材の可能性がある。特殊な石製品の石材として入手したものか。80は珪化木で、表面と上端に年輪が確認できる。加工痕跡は残っていない。

13・21・22層出土石器（第67図、図版48）

第67図1は13層出土の削器で、刃部は両面調整で仕上げている。石材は安山岩（灰）である。背面には自然面が一部残される。

第67図2・3は21層出土の石錐で、2は横長剥片を素材として右側縁を下端の先端まで両面調整して先鋭化させている。左側縁は片面調整がみられる。3は比較的薄い剥片を使用しており、先端部の左側縁には微細な剥離痕が確認できる。石材は2が安山岩（青灰）、3が安山岩（暗灰）である。

第67図4～8は22層出土である。4は安山岩（青灰）製の石鏃で、側縁には両面調整が確認できるが左右が非対称であり、加工途中の未製品であろう。側縁は外湾しており、脚端部は丸く仕上げられる。脚端部の表面は剥離しており、調整加工中に剥落したと思われる。5は剥離時の形状を利用した削器と考えられ、刃部は基本的に背面を片面調整によって加工しているが、腹面にも剥離痕がわずかに確認できる。石材は流紋岩である。6は瑪瑙製の石核であり、両面に剥離痕が確認できる。7は敲石／磨石であり、下端と右側面に敲打痕が確認でき、表面は摩滅している。石材は安山岩である。8は安山岩製の小形の敲石で、両側面と背面に多数の敲打痕が残っている。

（鶴中光輔）

註

- (1) 備前焼については、大田市教育委員会の西尾克己氏からご教示を得た。
- (2) 突帯文土器については、濱田竜彦氏からご教示を得た。
- (3) 西平式は、文様や器形に深鉢と鉢の区別がなくなることが指摘されている（水ノ江・前追2010）。
- (4) 岡田憲一氏のご教示による。
- (5) 繩文土器の貝類による器面調整は、柳浦氏が施文実験で検証している（柳浦2014）。
- (6) 内面を肥厚させて指頭で押圧する土器について、千葉氏は内面肥厚指頭圧痕土器と仮称する（千葉2014）。京田遺跡の資料では指頭圧痕が明瞭に残るもの以外に、指頭押圧後のヨコナデ調整で圧痕が不明瞭な個体や、指頭で押圧せずにヨコナデのみで肥厚部を三角形状に調整するものがある点には注意を要する。
- (7) 外面中央がヘソ状にくぼむ底部の存在は、岡山県津島岡大遺跡の調査で阿部芳郎氏が指摘した（阿部1994）。
- (8) 中村唯史氏のご教示による。

参考文献

- 阿部芳郎 1994 「後期第IV群土器の製作技術と機能—器体製作における技術的特性とその意義について—」『津島岡大遺跡4—第5次調査—』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊 岡山大学理蔵文化財調査研究センター 291～311頁
- 千葉 豊 2014 「繩文後期土器研究の現状と課題—山陰地方の前半期を中心に—」『山陰地方の繩文社会』古代文化センター研究論集13 島根県古代文化センター 43～56頁
- 水ノ江和同・前追亮一 2010 「九州・西日本の繩文土器 後期」真陽社 21～67頁
- 柳浦俊一 2014 「貝類による土器の器面調整と施文」『山陰地方の繩文社会』古代文化センター研究論集13 島根県古代文化センター 133～154頁

第5節 小結

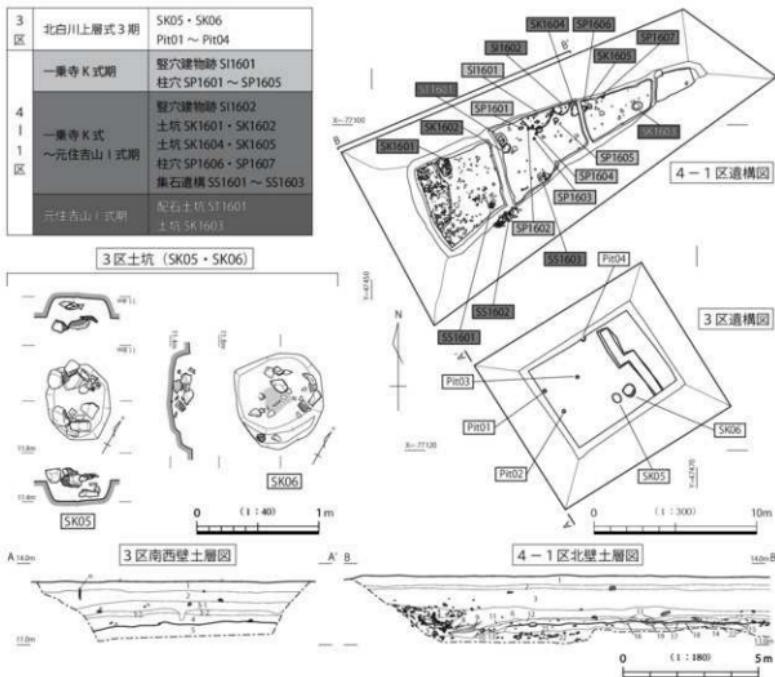
1 遺構からみた京田遺跡の集落構造

京田遺跡4-1区(220m²)に隣接する3区(126m²)は県埋文センターが発掘調査を実施し、後期中葉の遺構が確認された(守岡編2017)。標高約11.6mの遺構面からは配石土坑1基(SK05)と土坑1基(SK06)、柱穴4基(Pit01~04)が見つかっている(第68図)。出土土器から判断すれば、北白川上層式3期に併行すると思われる。SK05とSK06の性格は明確にできないが、SK05は墓の可能性が考えられ、4-1区の配石土坑ST1601と同程度の面積である。SK06は土器の大破片が土坑壁面に沿って立てられ、4-1区の土坑SK1603と同様、意図的に据えられた印象を受ける。また、4-1区の遺構と同様に被熱した動物骨やその他の骨片が両土坑から一定量出土しており、これらの状況を積極的に評価すれば、墓などの葬送・祭祀に関連する遺構として捉えることが可能であろう。

今回報告した4-1区は、3区と3~4m程度しか離れておらず、調査当初から3区から連続した後期中葉の遺構面の存在が予想されていたが、自然流路NR1601は晩期後葉から弥生前期に下るもの、遺構面(約11.8m)からは後期中葉の竪穴建物跡2棟、配石土坑1基、土坑5基、柱穴7基、集石遺構3基が確認でき、3区の調査成果と合わせて後期中葉に営まれた一連の縄文集落の一部であることが確認できた。このうち、配石土坑ST1601と土坑SK1603については、墓など葬送や祭祀に関する遺構の可能性が高いと考えられ、また竪穴建物跡SI1602は面積や柱穴の規模が小さく、居住用ではなく他の機能を持つ建物跡であったことも予想される。そのため、京田遺跡の3区と4-1区は、竪穴建物跡SI1601など居住に関連する遺構が確認できるが、集落全体として見れば、葬送や祭祀に関連する遺構がまとまっているエリアであった可能性が考えられる。また注目されるのは、3区の遺構時期は北白川上層式3期であるが、4-1区で確認された遺構はほとんどがそれに後続する時期の一乗寺K式から元住吉山I式期に属するものであり、京田遺跡の集落は一時的ではなく、後期中葉のなかで連続と営まれたことを示している(第68図)。

集落展開の様子は土層堆積状況からも読み取れる(第68図)。土層と遺構面の対応関係に照らし合わせると、3区の遺構面は標高11.6m程度で3区5層上面に営まれるが、4-1区で確認した遺構面の標高は約11.8mで、3区5層に対応する4-1区22層の上に堆積した4-1区21層上面に形成されている。よって、北白川上層式3期には3区周辺を中心に土坑が設けられ、一乗寺K式期になると4-1区まで活動の範囲が広がった、あるいは地点を変えて営まれたと考えられ、北白川上層式3期以降に堆積した4-1区21層の上面で活動が展開していたと推測される。こうした3・4区の地点差は出土土器にも反映されており、遺物を多量に含んだ同一の包含層(3区4層/4-1区12層)でも3区は北白川上層式3期が主体を占め、4-1区は一乗寺K式から元住吉山I式が多い。つまり、3区の土坑などが形成された時期から4-1区の竪穴建物などが出現するまでに堆積した21層は、北白川上層式3期から一乗寺K式期の間に限定でき、出土土器もその様相を反映する。

今回は一般国道9号の改築工事に関連する部分のみを対象とした調査で、3・4区ともに限られた



第68図 3区のSK05・SK06および3区と4-1区の遺構時期・土層図

調査面積のなかで集落の一部を確認したが、4-1区で確認した遺構の配置状況から見ると、集落はさらに北側へと展開していると推測でき、かなり規模の大きい集落であったと想定できる。

2 出土土器の検討

出土土器は総数20,365点、総重量が150.762kgとかなりの出土量になり、12層を中心に各層から出土した。これらの出土傾向を把握するため、未報告資料を含めた4-1区の出土土器について、土器型式別・層別に分類して第3表で示した。有文土器は全体の1割程度であり、そのなかで中心となる後期中葉の北白川上層式3期、一乗寺K式期、元住吉山I式期の土器量のほか、他の有文土器についても分類して示している。ここでは京田遺跡の出土土器の特徴と層位的関係について、3区で出土した土器の様相を踏まえて詳しく検討する。

(1) 出土土器の特徴

有文土器

まずは出土した有文出土の特徴について、型式別にみた時期的変遷を整理したい。今回の調査で出土した最も古い土器は前期前葉の長山式である(第31図1)。この時期は気候が温暖化して縄文海進

第3表 4-1区出土土器一覧

前 期	中 期	後 期	有 文 土 器												無 文 土 器				合計			
			前 葉				中 葉				後 葉				前 中葉		東 日 本		九 州 系		合計	
			前 葉	五 明 田 式	成 立 朝 横 二 文	高 古 陶	北 白 川 C 式	中 一 乘 寺 K 文	元 住 吉 山 C 式	高 黒 I 式	元 住 吉 山 C 式	高 黒 II 式	高 黒 III 式	桂 古 市 河 頭	原 田 式	加 曹 利 五 式	真 里 士 器	そ の 他	小 池 原 上 野	北 久 保 山 式	西 平 式	
無文陶器 SI1601			1	11			16				11											17 4,370 419
無文陶器 SI1602							2	2														2 8 3,137 154
無文土器 ST1601							26	6														8 67 40,448 595
土 墓 SK1601							2	3														11 2 69 88
土 墓 SK1602							9	35														185 17,369 670
土 墓 SK1603							9	4														5 1,125 144
土 墓 SK1604							110	16														62 20,602 810
土 墓 SK1605							1	3														5 1,138 148
土 墓 SK1606							4	59														58 13,579 713
土 墓 SK1607							2	15			1										2 12 2,152 186	
土 墓 SK1608							15	667			5										11 114 51,823 1,696	
土 墓 SK1609																					2 47 49	
土 墓 SK1610																					13 13 165 178	
自然流路 NRH1601	I						2	5	11	2	1	1	2								1 1	13 27 7,357 429
	10						31	80	154	182	5	5	13								97 311 153 2,320 3,366	
住 宅							1														37 38	
水							25														155 180	
3 層																					18 18	
																					209 209	
4~5層							1		1	3	3	3									1 3 21 5,268 307	
							13		9	65	39										27 35 278 163 2,139 2,816	
6 層							2	1	2	18	15	41		1	1	1	1	1	1		4 17 145 42 2,350 2,842	
							19	5	14	127	289	574		37	12	28		13	10		29 120 1,263 951 10,041 19,808	
11 層							2	18	21	45	1		3		1					2 7 15 161 43 2,610 2,969		
							15	213	228	750	9		27		6					30 142 1,380 972 11,018 21,808		
12 層							2	1	1	7	10	118	1	1	1	5					74 18 21 133 59 324 327 522 14,120 6,962 61,680 86,880	
							24	23	5	67	74	127	1,068	1,130	2	21	9	112			11 7 28 14 698 778	
21 層							1	2	9	8										62 34 452 301 1,029 5,099		
							7	16	120	75										5 1,117 129		
22 層							1		3											59 24,855 1,849		
鉢 土 壌							32	25	19				5							1 12 2,195 213		
水								1	2											7 184 117 1,146 1,053		
合計数	1	1	2	2	5	8	13	166	203	319	7	2	3	24	0	3	1	1	71	152 3,255 11,664 20,365		
平均数	10	32	24	36	42	72	144	1,796	2,130	3,537	232	58	26	219	0	19	28	13	84	73 21 151 59 324 475 981 1,980 6,012 11,041 20,365		

と呼ばれる海水面の上昇がみられるなど、環境面に大きな変化が生じる時期で、松江平野周辺では遺跡数が急増して松江市西川津遺跡を中心とした地域的な集団領域の形成が進む（幡中2014）。出雲平野では、現在のところ山持遺跡や上長浜貝塚などいくつかの遺跡が散見される程度にとどまる。中期に関しては、前半から中期にかけて山陰地方全体で確認された遺跡が少なく、京田遺跡では第47図14が唯一その時期の可能性を持つが、確実ではない。これら古い時期の土器は遺構面下の22層や、遺構面を削った自然流路から出土しており、京田遺跡周辺にこの時期の集落が存在した可能性を含め、出雲平野で新たな遺跡が発見されることは十分に想定できる。

中期末から後期初頭にかけて近畿地方から中国地方で段階的に遺跡数が増加する（幡中2012）。それに伴って出雲平野でも後期初頭から前葉に築山遺跡や三田谷I遺跡などでまとめた遺物の出土がみられるが、京田遺跡では後期初頭の九日田式や五明田式の出土が少量確認できる程度である。そのなかで注目されるのは第38図1で、大きく内湾する大波状口縁に窓粹状の沈線区画を持つ要素は、中期末に近畿地方で盛行する北白川C式深鉢C類の流れを汲むと考えられる。後期前葉の成立期縁

帶文土器や崎ヶ鼻1～2式の時期も出土土器はそれほど多くない。なお、第35図1の刻みをもつ口縁部の耳状突起は、瀬戸内地域で主に盛行する。

後期中葉は京田遺跡の最盛期であり、出土土器の多くがこの時期に該当する。詳細な土器様相の検討は第6章第3節で行うが、ここでは各型式の様相が分かれる特徴について簡潔に言及する。3区では北白川上層式3期の出土土器がかなりの割合を占める。4-1区でも出土しており、前半期には縄文地に沈線や条線を施す深鉢（第39図27・28など）や、渦巻文を描く深鉢などが確認できる（第39図26など）。後半期には渦巻文や巻込文を持ち、内湾内屈する口縁部形態の深鉢（第31図3、第38図14など）や、結節縄文を施す深鉢（第38図22～24）など多彩な縄文施文が一定量見受けられ、縄文地で押し引き沈線を施す深鉢（第38図12）も後半期に近い。これらの特徴は近畿地方の様相と共通するものの、近畿地方で出現する3単位の波状口縁深鉢は確認できず、また比較的大きく外反して波頂部にM字状突起を持つ土器（第38図15、第47図3・4）がみられるなど、地域性を示す要素が散見される。

北白川上層式3期に後続する一乗寺K式と元住吉山I式は、4-1区の出土土器の中心時期である。一乗寺K式では、結節縄文や付加縄文、撚糸文など多様な縄文施文が鉢を中心に認められ（第35図22、第43図102・103・105・106など）、これらの文様は主に比較的幅の広い口縁部に描かれる。その一部は段状に肥厚する口縁部を持ち、近畿地方の特徴を示すものもあるが（第36図6）、結節縄文などを口縁部に施す鉢が多い点は、近畿地方との様相を異にしている⁽¹⁾。また深鉢や鉢に6文字（第39図35、第43図107、第47図12など）やノ字状隆帯（第43図116・118など）を持つ点は近畿地方と同様で、それらは注口土器にも確認できる（第44図142・143）。一方、こうした文様表現がみられる鉢の幅広の口縁部には、縄文に代わって密な綴みや巻貝回転による擬縄文が施文される個体（第22図5、第43図110・111）が確認できる点は注目される。擬縄文の施文は近畿地方の一乗寺K式でも認められているが（玉田・岡田2010など）、当地域でも元住吉山I式以前の段階で既に擬縄文が出現していた可能性が高い。兵庫県佃遺跡や京都府一乗寺向畠遺跡の土器様相の考察では、一乗寺K式の後半期になって口縁部幅が縮小する様相が指摘されており（岡田・深井1998、小泉2014）、4-1区では元住吉山I式までを見通すと相対的に幅が狭くなるが、そうした幅の狭い口縁部が存在する一方で幅広の口縁部も一定量残存し、その一部には擬縄文が採用されるという特徴を見出すことができる。刻みによる擬縄文についても、二枚貝腹縁による施文を中心に沈線区画帶内や区画沈線に沿って密に充填するもの（第43図112～115）などは、この頃に出現すると考えられる。

元住吉山I式は口縁部を内屈させ、波頂部に突起を持つ波状口縁の深鉢が特徴的であるが（第36図8、第40図60～63、第41図65など）、そのなかで新しい段階とされる突起が肥大化したもの（第41図64・66）は少ない。4-1区は元住吉山I式期のなかでも前半期に盛期があったと思われる。また内屈する波状口縁の深鉢には突起が付かないものも確認できる（第36図9）。このように内屈する波状口縁が展開する一方で、平口縁のものも存在する（第34図3、第41図71～74など）。口縁端部は丁寧に面取りされることが多い。これらの口縁部幅は総じて狭くなり、多くが沈線区画帶を描く。沈線区画帶内はほぼ無文で、区画帶の上下に巻貝回転や二枚貝背部押圧、二枚貝腹縁刻みなどの貝殻

施文具を中心とした振縄文の施文が主流であるものの、一部では縄文施文も残存する（第41図71）。また平口縁には、外反して口縁部内面に沈線と刻みを施す深鉢や鉢・浅鉢が一定程度確認できる（第35図11・13、第36図11・21、第42図83～85、第43図128など）。なお深鉢の胴部には連弧文を描くものが見受けられるが（第36図13、第41図78など）、どの口縁部形態と組み合うのかは確認できなかった。この時期には注口土器が多くなり、精巧な造りに多様な施文具を用いて装飾性を高めているものが目を引く（第45図148～150など）。全形が分かる第25図6は、正面から見ると文様帯が大振りな連弧文を描くが、真上から俯瞰で確認するとほぼ方形となり、その中に円形の口縁部が存在する文様構成に仕上げるなど、装飾性に優れている。

元住吉山I式に後続する後期後葉の土器は出土しているものの、後期中葉と比べて出土量が大きく減少する。元住吉山II式や宮滝式併行の土器はある程度認められる（第31図13・14、第35図18、第42図86など）。滋賀里I式併行期の可能性がある土器も確認できるが、全体としては少ない（第31図15、第35図12、第42図87）。

晩期の土器は少量ながら出土している。晩期前葉の土器は確認できなかったものの、晩期中葉では外反する口縁端部に斜め刻みを持つ原田式の可能性がある深鉢の口縁部が数点出土している（第31図16・17、第36図14）。晩期後葉になると、突帯文土器の古海式（第34図6）が1点認められるのみである。よって3区と4-1区周辺では、後期後葉から晩期にかけての人々の営みが低調であったと判断できる。

外来系土器

京田遺跡では外来系土器が比較的まとまって出土しており、他地域と積極的に交流していた様子が想像できる。ここでは、外来系土器の特徴について時期別にまとめたい。

外来系土器は後期前葉から確認できる。この時期には九州系の小池原上層式の影響を受けた土器が一定量出土し、入組文を描く深鉢などがみられる（第42図88・89）。3区では4-1区よりも出土量が多く、その胎土から確実に搬入品と考えられる土器があり（守岡2017編），この時期の島根県東部は九州系土器の伝播の経路地域で（幸泉2008），搬入品を受容しつつも在地の土器製作のなかで模倣した器種が造られるとの指摘（千葉2014）と符合する。一方で、後続する鐘崎式はほとんど確認できなかったが、出雲平野では山持遺跡や三田谷I・III遺跡などで小池原上層式や鐘崎式が見つかっている。なお、この時期には島根県内全域で四国地方の松ノ木式に類似した土器が一定量出土するが（幡中2018），京田遺跡では確認されていない。

後期中葉には関東系土器の加曾利B1式が出雲平野を含む山陰中央部で目立ってくる（幡中2018）。京田遺跡では3区と4-1区でもとに出土し、本来の加曾利B1式から変容したと思われる注口土器の口縁部突起（第35図35、第46図164）が確認された⁽²⁾。九州系土器は北久根山式（第42図92）や西平式（第43図93）が確認でき、西平式は一個体に復元が可能であった。西平式は全体的な色調やつくりのほか、胎土が在地の土器と異なっており（第5章第3節），九州地方からの搬入土器である可能性が高い⁽³⁾。一方、3区では瀬戸内地域の津島岡大第IV群や四元式が少量出土したが、4-1区では確認できなかった。

4-1区では異形土器が数個体分出土しており（第19図6、第46図166・167）、第3章第3節で報告したように東日本の影響を受けた可能性が指摘されている。第19図6の一部は配石土坑ST1601から出土し、遺構内で共伴した遺物から判断すると、時期は元住吉山I式期頃になると思われる。胎土は在地の土器とは明らかに異なり（第5章第3節）、搬入品の可能性が高い。注目されるのは、胎土が第19図6と異なるが、同じ文様構成を持つと思われる異形土器の小片（第46図166・167）が確認されたことで、土器の搬入と模倣製作を考えるうえで重要な資料となる。また、一乗寺K式から元住吉山I式に併行する時期と思われるが、北陸地方の土器に似るものや、正確な由来の不明な土器が確認されている（第44図135・136）。

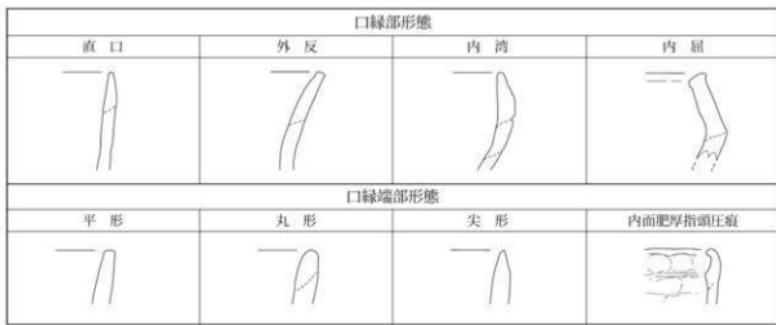
無文土器

無文土器は4-1区から多数出土した。そのなかでも12層からの出土が最も多く、有文土器と同様の出土傾向を示す。よって無文土器の大半が有文土器と同じく後期中葉頃に伴うと考えられる。また3区で多数の無文土器が出土したが、中心となる時期は北白川上層式3期である。4-1区が一乗寺K式から元住吉山I式期にかけての頃が最盛期で、同じ後期中葉のなかでも型式レベルでの時期差がある。そのため、後期中葉の無文土器の特徴とともに、3区・4-1区の時期差から読み取れる無文土器の変遷について、口縁部（および口縁端部）の形態や器面調整を中心に検討を行いたい。

無文土器の器種は、ほとんどが深鉢で鉢や浅鉢は少ない。その一方で、配石土坑や12層から小形土器が数点出土している（第19図14・15、第51図49）。小形土器は他とやや風合いが異なり、粒度の細かい胎土で丁寧に製作されている。

無文土器については、第3章第4節で報告したように、口縁部と口縁端部の形態を分類した（第69図）。3区と4-1区の口縁部と口縁端部（未報告分含む）を観察し⁽⁴⁾、そこに器面調整を加えて整理した（第4表）。口縁部形態では、この地域に特有の内面肥厚指頭圧痕土器が注目され、3区で多く出土するが4-1区からもある程度出土しており、北白川上層式3期以降も少量ながら存続していた可能性がある。また、口縁部が内湾あるいは外反する土器が少量存在するものの、ほとんどが直口、あるいは緩やかに内湾するが直口の範疇に収まる口縁部で、その多くは碰弾形の器形になる。これらの口縁部形態は同時期の近畿地方や瀬戸内地域と異なる特徴を示している⁽⁵⁾。また、3区では確認できない無文土器の内屈口縁が4-1区で確認される。有文土器の様相を見ても、北白川上層式3期までには遡らず、一乗寺K式以降に出現することが示唆される。口縁端部の形態は3区と4-1区ともに丸形が主流で、尖形と平形がそれに続き、その割合は両地区でそれほど違いはない。今回の検討では、後期中葉のなかで無文土器の口縁端部に大きな変化はないことが指摘できるが、今後、京田遺跡周辺で後期中葉の無文土器群が確認された場合には新たな内容が確認できる可能性がある。

3区と4-1区の器面調整は内外面ともにナデ調整が卓越する。条痕調整が行われても最終的にナデ調整で仕上げられるものが多い。ミガキ調整は確認できるものの、有文土器に比べてミガキ調整は少なく、口縁端部が面取りされて平形になっているものに集中する傾向が指摘できる。これらは無文土器のなかでも比較的丁寧に製作された一群であったと思われる。条痕調整は一定量が存在しており、二枚貝と巻貝による調整が目立つ。二枚貝条痕調整は腹縁の放射肋が平行多条線状に確認でき、巻貝



第69図 無文土器の口縁部・口縁端部形態分類

第4表 3区と4-1区の無文土器の口縁部・口縁端部形態・器面調整一覧

3区 (点数)		器面調整													
		外面ガラス			外面柔軟			外面ナダ			内面柔軟				
		内面 柔軟度	内面 ナダ度	内面 ガラス度											
口 縁 部 形 態	直口	8	3	2	8	53					75	56	29	184	903
	口 縁 部 形 態	1			18	149					6		57	428	16,2,206
	外 反				16			1	115				614		9,1,672
	内 湾							1					22		44
	内 屈								11						78
	内 面 肥 厚 指 頭 圧 痕				1	1			2						30
	内 面 柔 軟 度														308
	内 面 ナ ダ 度														373
	内 面 ガ ラ ス 度														109
	内 面 肥 厚 指 頭 圧 痕 度				6	24									388
差成調整 分 数		柔軟	一枚目	各具	各具(枚)										
		14	4	10	26	(点数)									

4-1区 (点数)		器面調整													
		外面ガラス			外面柔軟			外面ナダ			内面柔軟				
		内面 柔軟度	内面 ナダ度	内面 ガラス度											
口 縁 部 形 態	直口	4	10	6	9	1	4	224			43	140	304	188	16,83,3,043
	口 縁 部 形 態	3		4	13	6	527				31		85	178	58,6,072
	外 反			3	13	5	275						66	160	144,3,053
	内 湾			1	2	1	1	1			7	17	88	1	17
	内 屈			1	2			15			22	12			82
	内 面 肥 厚 指 頭 圧 痕							4					9		24
	内 面 柔 軟 度							2							46
	内 面 ナ ダ 度							10							155
	内 面 ガ ラ ス 度							3							80
	内 面 肥 厚 指 頭 圧 痕 度							1							4
差成調整 分 数		柔軟	一枚目	各具	各具(枚)										17
		19	16	22	9	(点数)									4
															160

条痕調整には細かい筋状の条線が多方向に確認できるのが一般的だが、その他器面を削り取ったように凹凸が残る粗い巻貝調整が少なからず確認できる。これは器面調整の検討（柳浦 2014）によってウミニナタイプの巻貝条痕の可能性が示されている。山陰中央部における後期の無文土器に特徴的な器面調整で、ナデ調整やミガキ調整などで器面を平滑にする調整とは対照的に、器面に意図的に凹凸をつけるための調整行為であったと考えられる。3区と4-1区における条痕調整の割合を見ると、3区では二枚貝は少数で、巻貝が多数を占めており、そのなかでも粗い巻貝の条痕調整が目立って多い。一方で、4-1区では二枚貝の割合が増加するものの、全体的な状況は3区と同様に二枚貝よりも巻貝が優勢である。ただし、粗い巻貝条痕調整はその数が少なくなっていることは注目される。後期中葉のなかでも後半期になると、この地域に特有の器面調整が減少することが指摘できる。この点について、京田遺跡の周辺地域における他の遺跡の様相を確認しながら、さらに詳細な時期的変遷を整理することが求められる。

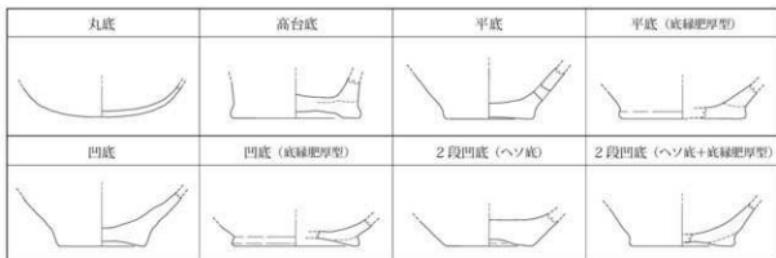
底部形態

底部の形態（第70図）は3区と4-1区とともに平底が半数以上を占めており、後期中葉の主要な底部形態であると思われる（第5表）。詳しく見ると、3区ではほぼ8割を占めていた平底が4-1区では6割程度に減少し、それに代わって凹底が目立ってくる。凹底には、瀬戸内地域の津島岡大第IV群にみられる凹底の底部外面中央がヘソ状に窪む形態（阿部 1994）の2段凹底が確認され、4-1区で比較的多く認められる。また、底径は平底と凹底では後者の方が相対的に小さくなり、底部形態の変化と連動して底径が縮小することが指摘できる。一方、高台底の割合が少ない状況は両地区で変わらず、丸底は3区でボウル形の鉢・浅鉢などで若干確認でき、4-1区でも浅鉢の底部（第52図18）が出土しているが、全体としては少ない。また底部形態のなかで目を引くのが、第3章第4節で報告したように、底部外縁が突帯状に肥厚する底縁肥厚型の底部が存在する点で、3区と4-1区で出土している。これは平底に多くみられるほか、凹底にも類似する形態の底部が確認できる。3区からの出土が多いため、後期中葉以前の時期にはその割合がさらに多い可能性がある。

一乗寺向畠遺跡の土器底部の考察では、この時期の近畿地方と北陸地方、瀬戸内地域の底部の様相について具体的な分析が実施されており、北陸地方は平底、瀬戸内地域は凹底が優勢で、近畿地方西部は瀬戸内地域、東部は北陸地方の様相に類似することが指摘されている（西原・妹尾 2014）。京田遺跡では3区で平底が多い底部形態の様相は北陸地方と類似するが、4-1区では2段凹底を含む凹底の割合がやや増加するなど、瀬戸内地域の様相にやや近づく点は特徴的である。このように底部は他地域の動向と連動しながらも、無文土器と同様、この地域の独自性を示す要素が確認できる。土器製作における底部形態が口縁部形態や器面調整のほか、有文土器の独自性とどのように関係するのかについて比較検討を進め、総合的に議論を深めていく必要があろう。

（2）出土土器の地点差と層位的状況

4-1区では21層上面に形成される遺構面の上に縄文時代の遺物包含層（11・12層）が堆積し、その上には洪水堆積層（4～6層）が確認できる。層別にみると、12層出土土器が最も多く、そのままに堆積する11層や洪水堆積層の6層からも土器がまとまって出土しているが、第3表でみられる



第70図 底部形態分類

第5表 3区と4-1区の底部形態と底径一覧

3区	丸底	高台底	平底	平底 (底縁肥厚型)	凹底	凹底 (底縁肥厚型)	2段凹底 (底縁肥厚型)	2段凹底 (底縁肥厚型)
	点数	4	10	132	28	19	3	2
重量(g)	123	421	3,362	2,031	628	86	53	110
底径	20.0~							
	12.0~		1		1			
	11.5~							
	11.0~							
	10.5~							
底径	10.0~	4						
	9.5~	2						
	9.0~	6	3					
分	8.5~	4	2					
	8.0~	11	8					
布	7.5~	3						
	7.0~	5	1					
ヘight 分	6.5~	1						
	6.0~	8	3					
	5.5~	1						
	5.0~		2					
	4.5~							
	4.0~							
	3.5~				1			

4-1区	丸底	高台底	平底	平底 (底縁肥厚型)	凹底	凹底 (底縁肥厚型)	2段凹底 (底縁肥厚型)	2段凹底 (底縁肥厚型)	
	点数	4	20	14	29	79	1	8	2
重量(g)	289	603	3,913	788	2,648	26	446	30	
底径	20.0~								
	12.0~		1		1				
	11.5~						1		
	11.0~								
	10.5~								
底径	10.0~	2	1	1					
	9.5~		1	2					
	9.0~	1	4						
分	8.5~	2	3	1	1				
	8.0~	1	4		2			1	
	7.5~	1	5	3	1				
	7.0~	7	2	5			2		
布	6.5~	11	3	6				1	
	6.0~	2	10	2	12				
	5.5~	2	11	2	11				
	5.0~	1	7		4			1	
	4.5~	1	7	1	7				
	4.0~	1	5		1				
	3.5~		2		1				

底径単位:cm

ように、層位的な関係から時期差は見出しそうない。第3章第2節で報告したように、6層は周辺一帯が冠水状態になった晚期後葉から弥生前期頃にかけての洪水の堆積層であり、11層はその影響でグライ化した12層の一部と考えられる。そのため、もともと堆積していた12層が冠水状態によって上面の一部が遊離し、再堆積したものが6層である可能性が高いと考えられる。これらの層から出土した土器はほとんどが後期中葉の土器であり、型式別にみると、4-1区は北白川上層式3期も一定量出土するものの、一乗寺K式や元住吉山I式の出土が主体的である。一方、3区では4-1区の12層に対応する4層からの出土土器は北白川上層式3期の土器が大半であり、一乗寺K式や元住吉山I式期の土器はかなり少なく、3区と4-1区において後期中葉のなかの型式レベルで時期的な地點差が生じているといえる。

ここで改めて3区と4-1区の層位的状況を確認したい。4-1区の遺構面を形成する21層は、3区の遺構が22層上面で營まれた後、4-1区の遺構が形成されるまでに堆積した層である。よって21層の堆積時期は、3区の遺構時期である北白川上層式3期から、4-1区で遺構が確認できる一乗寺K式期までに限定できることが分かる。また21層から21層上面の出土土器を見ると、北白川上層式3期に属する土器（第47図3～6・10・11）から、一乗寺K式期の土器（第47図7・8・12・13）が主体的であり、堆積状況と整合的である。つまり、3区の遺構出土の土器、4-1区の21層および21層上面の出土土器、そして4-1区の遺構出土の土器は層位的な連続性が担保されていると考えられ、3区から4-1区にかけての層位的変遷と両地区における縄文包含層の地点差をもとに後期中葉の土器編年が構築できる可能性が高い。

3 出土石器の検討

石器も土器と同様にかなりの量がまとまって出土しており、これらを器種別・石材別に一覧表にして示した（第6表）。未報告を含め出土点数は剥片やチップなども加えて合計で1,139点、重量にして約151.457kgとかなりの量が出土している。これらのほとんどが後期中葉に収まると考えられるため、3区出土の石器とあわせてこの時期の石器製作やそれに伴う生業、石器石材利用を考察するうえで重要な石器群といえる。よってここでは、京田遺跡の石器組成や石器石材利用について、3区で報告された内容（守岡編2017）も含めて検討を行うことにしたい。

（1）石器組成からみた京田遺跡の生業活動

打製石器は総じて少なく、削器や微細剝離痕のある剥片などは若干まとまる傾向を示すが、それ以外の器種については全体に占める割合が低い。同様の傾向は3区でも指摘できる。ただし、石核や原石・素材などがある程度まとまっており、また剥片やチップが多く出土していることから、集落内で打製石器の製作を行っていたことが推測される。打製石斧については4-1区よりも3区にやや多い傾向にある。しかし、両地区ともに未製品が目立ち、全体的に少なかったようである。一方で、石鏃は両地区ともに数は少ないものの、12層中に含まれる動物遺存体にはシカやイノシシ、その他小動物など石鏃による狩猟によって獲得したと予想される動物骨も含まれるため（石丸2017、第5章第1節参照）、3区と4-1区以外の地点にある程度まとまっている可能性も残る。

磨製石器である磨製石斧は、打製石斧と同様にその数が少ない。しかし、第64図62のように、破損するたびに刃部再生を行っていたと思われる磨製石斧も存在し、一定量の磨製石斧を繰り返し使用していた可能性があるため、総数には反映されていないと理解したい。

一方で、礫石器は打製石器や磨製石器よりもかなり量が多く、石器組成の中心を占めている。なかでも敲石や磨石など植物資源の加工工具の出土量は多く、それに対応すると思われる石皿や台石もまとまった数が確認できる。同様に3区でも磨石や石皿が集中的に出土しており、京田遺跡の集落では堅果類など植物資源の利用が盛んで食料貯蔵も積極的に進められていた可能性が高く、この地で安定的な定住生活が展開していたことを示唆する⁽⁶⁾。なお、石錘は出土量が少なく、3区と4-1区を合わせても数点にとどまる。石錘などの漁撈活動を示す石器が本来的に少なかったのか、あるいは別の

第6表 4-1区出土石器一覽

※MF:微細剥離層のある剥片 RE:二次加工のある剥片

地点にまとまっていることが考えられるが、動物遺存体には淡水資源や海産資源も一定程度含まれており、後者の可能性が高いと推測される。

以上のように、3区と4-1区は同様の石器組成を示しており、京田遺跡の集落では後期中葉を通して植物資源を中心的に利用した生業活動が主体的であったことが確認できた。しかし、出土した石器全体から見て狩獵や漁撈活動を示す石鎌や石錘などは相対的に少ないものの、3区と4-1区の調査区外に未確認の石器が埋蔵されている可能性は、出土した動物遺存体の様相から見ても十分に想定できる。

(2) 京田遺跡にみる石器石材利用の様相

京田遺跡では石器組成とともに、石器の石材利用にも注目すべき点が多い。第3章第4節で報告したように、打製石器で使用される安山岩には肉眼観察で4種類（青灰・灰・灰白・暗灰）の石材が確認でき、打製石器の主要な石材となっている。そのなかで最も多いのは安山岩（灰）であり、第57図8～10のような板状および角柱状の石核素材や、剥片・チップがとりわけ多く確認でき、石材の獲得から成形、石器への加工・調整まで一連の石器製作工程が復元できる可能性がある。安山岩（灰）は遺跡の周辺地域で比較的容易に獲得できたと思われる一方、安山岩（青灰）はその特徴から香川県産のサヌカイトの可能性が高い。サヌカイトは後期に山陰地方で石材利用が広がることが注目され（竹広2003・2005・2009・2014など）、中期末から後期中葉にかけて生業や居住戦略に沿って黒曜石や他の在地石材と関連して一定量が流通し、複雑な石器石材圈を形成する（稻田2007・2009・2018）。しかし、今回の調査において安山岩（青灰）の石核（第61図38）は1点しか確認できず、石器もそれほど多くはないため、安山岩（灰白）や安山岩（暗灰）とともに主要な安山岩（灰）の補足的な利用であったと思われる。ただ、石鎚や削器には比較的多く採用されているため、安山岩のなかでも器種によって石材を使い分けている可能性もある。安山岩（灰白）やデイサイト、流紋岩の打製石器も確認できるが、その多くは微細剝離痕のある剥片や二次加工のある剥片が中心である。また、打製石器には玉髓や碧玉（第54図1・2）を用いたものがみられ、安山岩やデイサイト以外にも多様な石材利用があったことを示している。なお、黒曜石を用いた打製石器はわずか数点にとどまり、その剥片やチップも細片が中心で相対的にかなり少ない。この傾向は3区と同様であり、京田遺跡の後期中葉の集落において主要石材ではなかったと思われる。

磨製石器では、安山岩や流紋岩のほかに、搬入石材と思われる片岩系の石材（第64図62～64）が磨製石斧に採用されており、注目される。先述したが、刃部再生で小型化した磨製石斧も確認されるため、他地域から入手した石材の石器を再利用していた様子が読み取れる。

礫石器は、敲石や磨石、台石などを中心に安山岩やデイサイト・流紋岩が大多数を占め、石皿には砂岩が多く用いられる。そのなかで瑪瑙が部分的に嵌入した安山岩の台石（第65図69）が目を引くほか、下端に水銀朱（北海道産）が付着する磨石（第58図13）は細粒花崗岩製であり、他の礫石器にはみられない。日常的な調理加工具に使われた安山岩やデイサイト・流紋岩の礫石器とは異なる特別な石材を選択していたと理解したい。

石製品では小形の石製品（第56図5）が特に注目され、石材は流紋岩で特殊なものではないが、全体的に丁寧に研磨されて左右対称に加工されている。出土したのはこの1点のみで、使用痕などは確認できず、特別な用途を持つと考えられる。また軟質のデイサイトを分割して、断面を入念に研磨した特殊な石製品（第66図75）も見受けられる。その他、3区でも確認された、節理に沿って加工が施されたとみられる石製品（第58図17、第66図76）や、敲石として使用された可能性のある石棒状石器（第66図77）なども確認できた。前者は安山岩質凝灰岩や砂岩といった石材だが、後者は特徴的な安山岩で他地域からの搬入石材の可能性が示されている。竪穴建物跡SI1601の上面から出土した石製品（第15図35）は、明確な使用痕などは確認できないが平坦面を持ち、他にみられない熱

水変質安山岩を用いている。このように、特殊な用途が想定される石製品では、普遍的な石材を使用するものだけでなく、特殊な石材を選択するものが存在する。

石核や原石・素材には、先に挙げた安山岩（灰）の板状および角柱状の石核素材などが目立つが、泥質片岩（第66図79）のほか瑪瑙（第55図15、第58図18、第67図6）や碧玉も確認される。その他、報告では原石とした半透明な石英の円礫（第55図16、第66図78）が確認されている一方、不透明な赤褐色の鉄石英も一定量存在しており、これらは石材自体が特殊な役割を持つものかもしれない。また数は多くないが、珪化木（第55図17、第56図6、第66図80）も数点確認されている。

石器石材の様相は当時の石材流通の一端を示していると思われ、早期後葉以降に山陰地方を席巻する黒曜石の石材利用が中期末以降に大きく変化して地域的な差異が生じており、宍道湖沿岸から大田市域にかけての遺跡には玉髓・瑪瑙が多く用いられている（縮田2018）。京田遺跡もこの状況を反映して玉髓や瑪瑙が一定量確認できるが、周辺地域で比較的獲得が容易であったと思われる安山岩（灰）を軸として、数種類の安山岩を複合的・補足的に利用した石材利用を中心にするなど、やや石材利用の状況が異なり特徴的である。これが後期中葉の時期的なものであるのか、あるいは出雲平野南西部の地域性を示しているのかは、京田遺跡周辺の遺跡群における石器石材利用の様相を丹念に検証する必要があろう。

（輔中光輔）

註

- (1) 大分県釣野千軒遺跡出土の近畿系土器を検討した福永将大氏の論考では、口縁部に結節繩文を持つ土器は九州地方のほか、近畿地方にも類例が少ない点が指摘されており（福永2018）、当地域の特徴の一つになる可能性がある。
- (2) 大塚達朗氏や中村耕作氏のご教示によれば、加曾利B1式の主要分布圏である関東地方と比べると、土器の形態のみならず製作手法や文様施文の原則などが大きく変容している。千葉豊氏が指摘するように、関東の情報が中間地点である近畿地方を経由して伝播したことを見定す必要があり（千葉2018）、そのなかで土器製作に関する様々な情報が変容し、再解釈されながら中四国地方まで波及したと思われる。しかし、京田遺跡からそれほど離れていない神戸川中上流域の飯南町神原I遺跡では、出土した加曾利B1式の製作手法は関東地方のものと比較的近く（大塚達朗氏の見解による）、それぞれの地域や遺跡単位で情報の受容度合いに差が生じていた可能性を示している。
- (3) 九州地方で出土する西平式の製作技法および文様施文手法を踏まえていることや、九州の中でも東北九州の西平式に胎土が似ている可能性を岡田憲一氏や福永将大氏にご教示いただいた。
- (4) 3区の未報告資料の調査については、守岡正司氏にお世話になった。
- (5) 近畿地方や瀬戸内地域の様相は千葉豊氏や岡田憲一氏のご教示による。
- (6) 繩文時代の定住と磨石類・石皿の出土量の関係性については、定住性を議論する各論考（雨宮1993・2009、瀬戸2003、矢野2005など）のなかで具体的に触れられており、磨石類・石皿の増加に表れる植物資源加工量の増加は食料貯蔵の促進を反映し、定住の指標の1つになることが示されている。

参考文献

- 阿部芳郎 1994 「後期第IV群土器の製作技術と機能—器体製作における技術的特性とその意義について—」『津島岡大遺跡4—第5次調査—』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第7冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 291～311頁
- 雨宮瑞生 1993 「温帯森林の初期定住—縄文時代初頭の南九州を取り上げて—」『古文化談叢』第30集 九州古文化研究会 987-1028頁
- 雨宮瑞生 2009 「定住化とその要因」『縄文時代の考古学8 生活空間—集落と遺跡群—』同成社 36-45頁
- 石丸恵利子 2017 「京田遺跡3区から出土した動物遺存体」『の子谷横穴墓群 京田遺跡3区』一般国道9号(出雲御陵道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 島根県教育委員会 83～89頁
- 稲田陽介 2007 「山陰地方における縄文時代後期の石器製作技術構造」『島根考古学会誌』第24集 島根考古学会 23～55頁
- 稲田陽介 2009 「島根地域の打製石器石材利用の様相—山陰地方における縄文時代の石材流通(予察)—」『環瀬戸内地域の打製石器石材利用』中四国縄文研究会20周年記念大会・第2回西日本縄文文化研究会合同大会研究発表資料集 関西縄文文化研究会・中四国縄文研究会・九州縄文研究会 211～225頁
- 稲田陽介 2018 「石材利用から見た山陰縄文石器群の地域展開」『隱岐産黒曜石の獲得と利用の研究』島根県古代文化センター研究論集第19集 島根県古代文化センター 111～141頁
- 岡田憲一・深井明比古 1998 「佃遺跡出土縄文土器の編年—特に元住吉山式土器について—」『佃遺跡 第2分冊(自然科学・総括編)』兵庫県文化財調査報告第176冊 兵庫県教育委員会 139～163頁
- 小泉翔太 2014 「北部地区、南部地区出土土器の位置づけ」『一乗寺向畠遺跡出土 縄文時代資料—考察編—』京都大学大学院文学研究科考古学研究室 33～50頁
- 幸泉文子 2008 「中国地方における九州錦崎式系縄文土器」『地域・文化の考古学—下条信行先生退任記念論文集』下条信行先生退任記念事業会 1～22頁
- 瀬口眞司 2003 「関西縄文社会とその生業」『考古学研究』第50卷第2号、考古学研究会、28-42頁
- 竹広文明 2003 『サヌカイトと先史社会』溪水社
- 竹広文明 2005 「島根県飯南町下山遺跡の打製石器類をめぐって—石器石材の二様相と黒曜石、サヌカイト—」『考古論集—川越哲志先生退官記念論文集—』川越哲志先生退官記念事業会 135～150頁
- 竹広文明 2009 「中四国の打製石器石材利用と瀬戸内海」『環瀬戸内地域の打製石器石材利用』中四国縄文研究会20周年記念大会・第2回西日本縄文文化研究会合同大会研究発表資料集 関西縄文文化研究会・中四国縄文研究会・九州縄文研究会 243～255頁
- 竹広文明 2014 「石器製作・石材利用からみた山陰地域社会の展開—斐伊川上流域を中心に—」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第13集 島根県古代文化センター 5～21頁
- 玉田芳英・岡田憲一 2010 「近畿」「西日本の縄文土器 後期」真陽社 191～220頁
- 千葉 豊 2014 「縄文後期土器研究の現状と課題—山陰地方の前半期を中心にして—」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第13集 島根県古代文化センター 43～56頁
- 千葉 豊 2018 「後期東日本系土器の中国・四国地方への波及について」『中四国地方の外來系土器』第29回中

- 四国縄文研究会発表資料集・集成資料集 中四国縄文研究会 11～21頁
- 西原和代・妹尾裕介 2014「土器底部の変遷と地域間の関係」『一乗寺向畠町遺跡出土 縄文時代資料—考察編—』
- 京都大学大学院文学研究科考古学研究室 71～80頁
- 幡中光輔 2012「西日本縄文時代における遺跡タイプ分析の実践と展開—人間活動の類型化からみた近畿地方後期社会の諸相—」『関西縄文時代研究の新展開』関西縄文論集3 関西縄文文化研究会 33～49頁
- 幡中光輔 2014「縄文時代の集団領域と地域社会の輪郭—山陰地方の遺跡動態から集団領域を読み解く—」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第13集 島根県古代文化センター 57～76頁
- 幡中光輔 2018「島根県の外来系土器の概要と検討課題」『中四国地方の外来系土器』第29回中四国縄文研究会 発表資料集・集成資料集 中四国縄文研究会 119～125頁
- 福永将大 2018「釘野千軒遺跡出土の近畿系土器群」『考古学研究』第65卷第1号 考古学研究会 77～86頁
- 守岡正司編 2017『のの子谷横穴墓群 京田遺跡3区』一般国道9号（出雲湖陵道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘 調査報告書3 島根県教育委員会
- 柳浦俊一 2014「貝類による土器の器面調整と施文」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第13集 島根県古代文化センター 133～154頁
- 矢野健一 2005「定住の指標」『関西縄文時代における石器・集落の諸様相』関西縄文論集2 関西縄文文化研究会 35～44頁
- 挿図出典**
- 第68図3区遺構図・土層図：守岡編2017に加筆

第4章 4-2区の調査成果

第1節 4-2区の調査の概要・土層堆積状況・出土遺物

1 4-2区の調査の概要

4-1区から用水路を挟んだ1段高い畠地に位置する4-2区(35m²)については、4-1区の発掘調査によって遺構の様相や土層の堆積状況がある程度把握できるようになった段階で調査を実施した。4-1区で確認した遺構面の続きを確認することに加えて、丘陵部側での地山を確認することを目的とし、主にバックホーによる掘削によって調査を進めた。

当初、調査区の畠地は元來の丘陵を削って形成された土地で、比較的高い位置で地山が確認できると想定していたが、予想に反してバックホーで掘削できる深度まで調査を進めて地山を確認することはできなかった。よって、丘陵の裾部は4-2区よりもさらに南西側にあることが予想され、掘削を完了した段階での土層断面の観察と記録を行い、4-1区で確認した土層との対応関係を検討することにした。

2 4-2区の土層堆積状況(第71図、図版16)

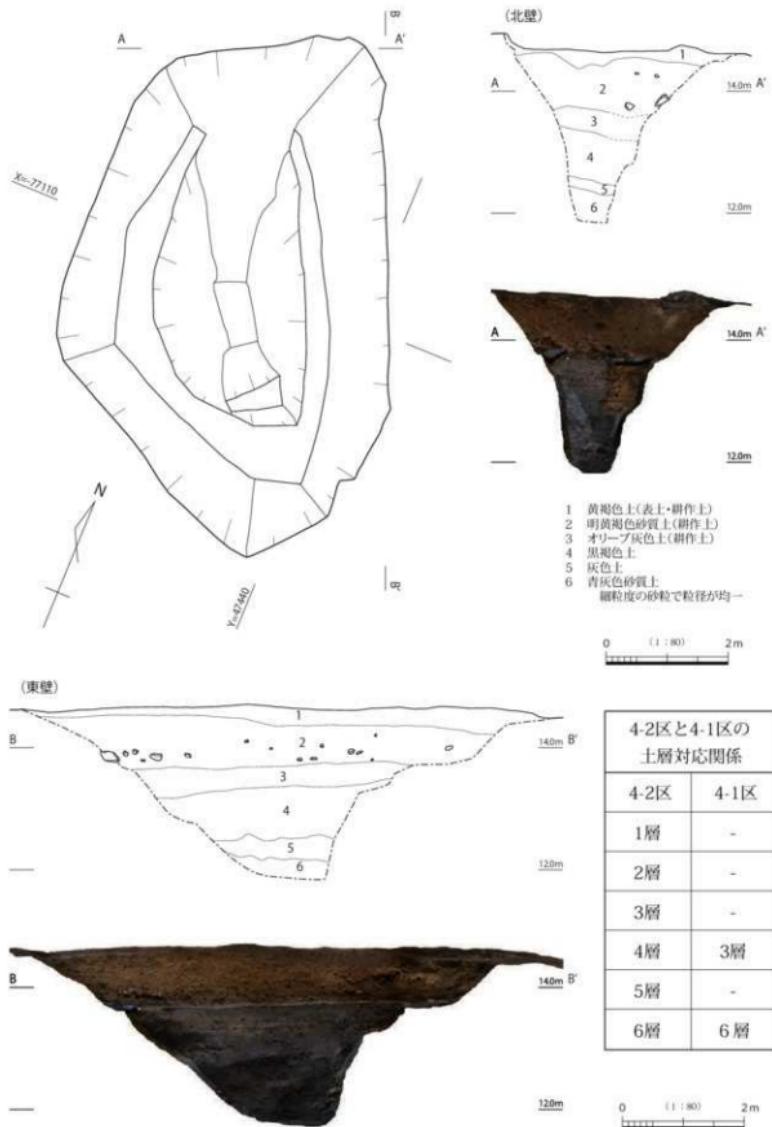
第71図は4-2区の平面図および北壁・東壁の土層堆積状況であり、土層については写真測量によるオルソ画像も同時に示している。

バックホーによる掘削で確認した最下部の6層はシルト質に近い砂質の層で、4-1区でみられた洪水堆積層である6層と同一層であると考えられる。6層上面の高さも6層と概ね近く、洪水による冠水状態がここまで到達していたことを示唆する。

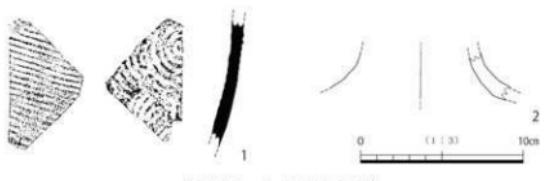
6層上には4・5層が堆積しているが、土層観察から4層は4-1区の3層と同一層であると判断した。4-1区の6層と3層の間には、大型の円礫・亜角礫を含み激しい流れの洪水の堆積層である4・5層を確認したが、4-2区ではそれに対応する層は確認できなかった。このことは、4-1区の4・5層が示す洪水は、激流であったが比較的狭い幅で近隣の丘陵部から流れ込んだことを示している。なお、4-1区と3~4m程度しか離れていない県調査区の3区でも4・5層に対応する層は確認されておらず、大きな礫を多数運ぶほどの激流ではあるものの、大規模でない局所的な洪水であった可能性が高いことが分かる。4層から上に堆積する1~3層は現代の耕作土であり、真砂などを用いた盛土によって人為的に形成されている。

3 出土遺物(第72図、図版24)

4-2区から出土した遺物は少ないが、須恵器と土師器を確認した。第72図1は須恵器の甕の胴部であり、外面には平行タタキ目、内面には同心円の当て具痕が確認できる。2は土師器の高环脚部



第71図 4-2区全体図・土層図・土層オルソ画像



第72図 4-2区出土遺物

であり、外面の一部に赤彩が残っている。これらは4-1区の3層と対応する4層からの出土であり、古代頃の所産であると考えられる。

第2節 小結

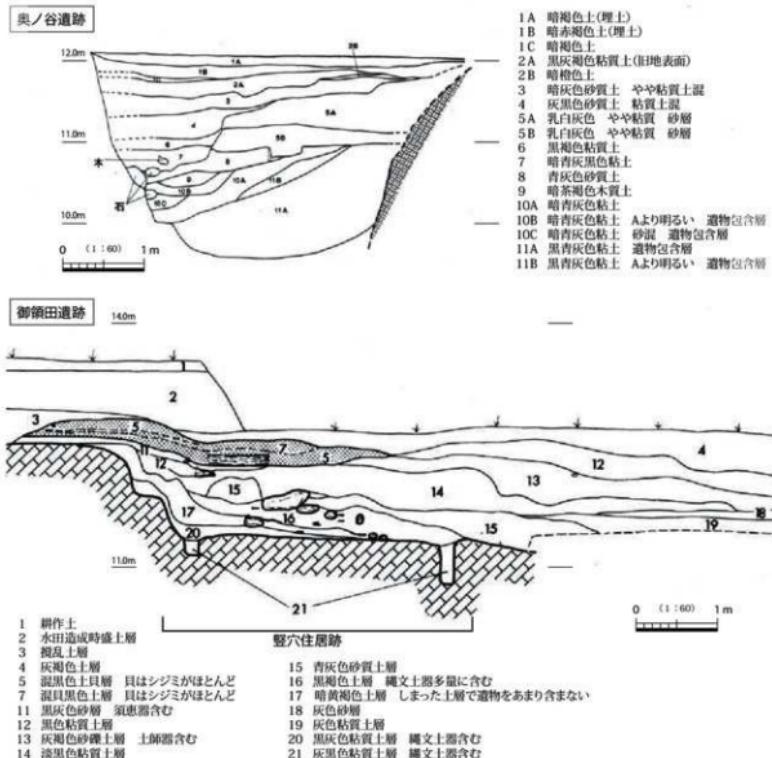
4-2区で地山は確認できず、また4-1区において確認したような縄文時代の包含層や遺構面も今回の掘削深度では確認することができなかった。しかし、4-1区の6層に比定でき、辺り一面が冠水状態になった洪水痕跡を示す6層が認められ、当時の洪水がかなり丘陵側まで進んでいたことが判明した。4-1区でも記したが、年代測定の結果（第5章第2節）から洪水の発生時期は晩期後葉から弥生前期であることが分かっている。冠水状態は当時の神西湖の排水不良によって発生したもので、現在の神西湖沿岸から直線にして約2kmほどある4-2区まで入り込んでいる。こうした冠水状態にあった洪水などの痕跡は、これまで京田遺跡周辺で発掘調査が実施された縄文時代遺跡でも確認できる。

京田遺跡よりも北側の丘陵裾部に立地する奥ノ谷遺跡は、湖田町教育委員会によって調査が実施され、縄文時代後期初頭の包含層が確認されている（野坂編 1995）。当時の報告にも常楽寺川の洪水等の作用による砂層（5A・5B層）の存在が指摘されており、この層は後期初頭の包含層である9~11B層より上に堆積し（第73図上）、後期初頭以降に発生した洪水堆積層であると判断できる。

また京田遺跡から常楽寺川を挟んだ対岸の丘陵裾部には、縄文時代の後期前葉の竪穴住居跡が確認された御領田遺跡が存在する（角田・野坂編 1994）。報告では竪穴住居跡と縄文包含層の上に水平に近い状況で堆積する14~19層（第73図下）について川の流路や氾濫源との関連を指摘しており、この地点にも竪穴住居跡の時期の後期前葉以降に洪水の影響があったことが読み取れる。

奥ノ谷遺跡、御領田遺跡で確認された洪水の痕跡と今回の京田遺跡の調査で見つかった洪水堆積層は概ね同じ高さで堆積し、奥ノ谷遺跡、御領田遺跡では少なくとも後期初頭以降に洪水が発生したことが分かっているため、京田遺跡の洪水堆積層と同じ時期の晩期後葉から弥生前期に発生した洪水の痕跡を示す可能性がある。もちろん、それだけでは同一層かどうかは確証を得ず、さらに詳しい検討と検証が必要であるが、仮に同一層であったとすると、この洪水によってこの3つの遺跡が立地する谷部のほかに周辺の谷部でも同様に冠水状態となっていたことが推測される。今回の調査において洪水の発生年代が判明しているため、この地域周辺の鍵層となり得る可能性が高いことを示唆する。

一方で、それぞれで確認された洪水堆積層が別のものであった場合も十分に想定されるが、その場合は度重なる洪水がこの地域に影響を及ぼしていたことになる。奥ノ谷遺跡の報告（野坂編 1995）でも触れられているが、近年では1964（昭和39）年の豪雨による河川の氾濫などで冠水状態となり、大きな被害を受けたことが知られている。この地域は過去から現代に至るまで洪水被害が頻発する場



第73図 奥ノ谷遺跡・御領田遺跡の土層堆積状況（角田・野坂編 1994、野坂編 1995に加筆）

所であることが分かる。また、この周辺には、地域のなかで船着き場と呼ばれる場所があり、洪水による冠水状態で神西湖が一時的に広がった場所に船で往来する状況を示唆する可能性が指摘されている（野坂編 1995）。このように、昔から洪水が頻発して度重なる影響を受けたことが予想されるが、それでもなお、縄文時代から今日まで人々が連続と生活の営みを続ける地域であり、各時代において文化的、経済的に欠かすことのできない地域の要所であったことが想定できよう。

(幡中光輔)

参考文献・挿図出典

角田徳幸・野坂俊之編 1994『神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 御領田遺跡 三部竹崎

遺跡』湖陵町教育委員会

野坂俊之編 1995『一般廃棄物処理施設管理道路新設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—奥ノ谷遺跡—』湖陵町

教育委員会

第5章 自然科学分析

第1節 京田遺跡4区の動物遺存体と縄文時代後晩期の動物資源利用

1 はじめに

京田遺跡は出雲市湖陵町常楽寺に所在し、神西湖に注ぐ常楽寺川の河口から約2.5km上流の左岸に位置する。一般国道9号（出雲湖陵道路）の改築工事に伴い、平成26年（2014）度から島根県教育委員会と出雲市によって試掘および発掘調査が行われている。1区では弥生時代から古代の集落跡が確認されている（勝部2017）。3区では縄文時代後期中葉の土坑やピットが見つかっている（守岡2017）。本報告の4区においては、縄文時代後期中葉の竪穴建物跡や配石土坑などが確認され、3区とあわせて縄文時代後期中葉に展開した集落跡と考えられる。縄文時代には遺跡の北方に位置する神西湖が海とながっており、当時、京田遺跡は湾の奥部という立地環境であったと考えられている（中村2010）。

平成28年度に出雲市によって発掘調査が実施された京田遺跡4区（4-1区）において、縄文の包含層から動物遺存体が出土している。これまでに京田遺跡では、島根県教育委員会によって実施された発掘調査3区において、縄文時代後期の土坑などからナマズとタイ科の魚類、イノシシ、ニホンジカなどが出土している（石丸2017a）。また近年の一般国道9号の工事関連の発掘調査において、出雲市東神西町所在の麓II遺跡では縄文時代の包含層から、また大田市仁摩町大国に位置する古屋敷遺跡においては縄文時代後期から晩期の遺構や包含層から動物遺存体が検出されている（石丸2017b・2017c）。出雲市や大田市などの島根県中央部では、これまで縄文時代の動物遺存体の報告例がほとんどなく、近年の調査によって、本地域における縄文時代の動物資源利用を知るために有益な資料が蓄積されつつあると言える。本稿では、京田遺跡4区から出土した動物遺存体について報告するとともに、他の縄文時代の出土資料と比較しながら当時の日本海沿岸地域における動物資源利用について考察する。

2 出土した動物遺存体の種類と部位

動物遺存体資料は、焼けて白色化した小破片が大多数を占め、調査区全面に広く分布し、遺構埋土のほか、包含層の4層から22層の各層位から出土している。発掘調査のなかで、出雲市グリッドに基づき設定された調査グリッドの16・25・33グリッドでは、12層中の出土傾向を把握するために土壤のブロックサンプリングが行われ、その後の整理作業において、6・4・2mmメッシュの各フルイを順に用いて土壤の中から微細な資料が採集されている。遺構内の埋土やその他の包含層出土資料は、現場で目視により取り上げられたものである。微細な破片が大多数を占めるため点数は正確にカウントできていないが、総重量約1,200gを量り、種や部位を判断できた破片は約400点であった。

第7表 4-1区出土動物遺存体種名一覧

門	綱	目	科	属/種
脊椎動物門 Vertebrata	軟骨魚綱 Chondrichthyes	ネズミザメ上目の一種 Galeomorpha ord., fam., gen. et sp. indet.		
	硬骨魚綱 Osteichthyes	ナマズ目 Siluriformes	ナマズ科 Siluridae	ナマズ <i>Silurus asotus</i>
		スズキ目 Perciformes	タイ科の一種 Sparidae gen. et sp. indet.	
	両生綱 Amphibia	無尾目の一種 Anura fam., gen. et sp. indet.		
	爬虫綱 Reptilia	ヘビ亜目の一種 Serpentes fam., gen. et sp. indet.		
	鳥綱の一種 Aves ord., fam., gen. et sp. indet.			
	哺乳綱 Mammalia	偶蹄目 Artiodactyla	イノシシ科 Suidae	イノシシ <i>Sus scrofa</i>
			シカ科 Cervidae	ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>

*種名については、中坊編（2013）、内山ほか（2005）、宇田川（2006）、阿部ほか（2008）に従った。

以下に、明らかになった種類や部位について、分類群ごとにその概要を述べる。種名は第7表、各資料の観察事項については第10表に示し、特徴的なものは図版50で写真を掲載している。

(1) 魚類

魚類は、サメ類とナマズ、タイ科の一種を確認することができた。16グリット12層においてサメ類の小さな遊離歯が2点確認された。いずれも長さ5mm、基部幅2mm程度の小さなもので、全体の形態はアオザメ属の歯に似るが、断面は稜が明瞭でなくやや丸みを帯びるためトライザメ属やヨロイザメ属の可能性もある。いずれにしても小さな個体のものと考えられる。また25グリット12層からは、ナマズの胸鱗棘の先端部破片が1点と、タイ科の歯骨や前上顎骨に並ぶ臼歯が1点出土している。臼歯はマダイやクロダイ、ヘダイなどのタイ科のものと考えられる。いずれの資料も火を受けて全体的に白色化したものであった。そのほかに、種不明の椎骨23点と棘3点も確認されている。椎骨にはナマズの可能性があるものを含み、タイ科とは異なる小さな個体のものも含まれている。魚類はいずれもブロック取り上げの土壤から検出されている。

(2) 両生類

両生類は、16・25・33グリットのブロック取り上げ土壤（12層）において橈尺骨や椎骨など5点が確認された。種は不明であるが、トノサマガエルの大個体だと考えられる。いずれも火を受けて白色を呈するものである。

(3) 爬虫類

爬虫類は、25グリットのブロック取り上げ土壤（12層）からヘビ類の椎骨が2点出土している。種は不明である。いずれも火を受けて白色を呈する。

(4) 鳥類

鳥類は、33グリットのブロック取り上げ土壌（12層）より種不明の手根中手骨と足根中足骨が各1点確認された。手根中手骨は近位部から遠位部の破片で、焼けて収縮している可能性はあるが、トランクギミ（形態は異なる）程度の大きさのものだと考えられる。足根中足骨は両端部が欠損した遠位片で、種の同定は困難であり、全体的に火を受けて白色を呈するものである。

(5) 哺乳類

哺乳類が最も多く確認され、遺構とブロック取り上げの両方の広い範囲で確認されている。イノシシとニホンジカの各部位を計132点確認することができた。種や部位名は不明であるが、四肢骨片や椎骨片など哺乳類のものと考えらえるものが、全資料の大多数を占める。なかでも12層からの出土が多く、調査区全体に広がるもの25グリットで最も多く確認された。そのほか、焼けてやや収縮している可能性はあるがムササビの大腿骨や脛骨、距骨などの小型哺乳類の各部位も確認することができた。すべて小さな破片となっているため、各部位の一部しか確認できていないが、イノシシでは下顎骨、脛骨、尺骨、未節骨などの各部位を約70点確認することができた。脛骨のうち1点は近位端の破片で、端部が癒合していない未化骨資料であった。ニホンジカは遊離歯、中手骨、中足骨、脛骨、基節骨など約60点を確認した。解体痕などの痕跡は観察することができなかった。

3 京田遺跡における動物資源利用

以上のように、4区において、魚類3種、両生類1種、爬虫類1種、鳥類2種、哺乳類3種の動物相を確認することができた。ほとんどが火を受けて白色を呈する小破片であり、火を受けていないと考えられる資料はニホンジカの遊離歯破片数点のみである。4区の南側に近接する3区からも骨類は検出されているが、それらもほとんどが火を受けて白色化した小破片であり、本遺跡における骨類の残存環境は良好ではなかったことがうかがえる。火山列島である日本の土壌はほとんどが酸性を帶び、低湿地においてもすべての骨類が残存するとは限らず、火を受けていない資料の多くは埋没の過程で消失した可能性が高いと考えられる。また、遺物包含層や遺構面を形成する層は洪水堆積層と考察されており、そこに含まれていた動物遺存体も水の影響を受け、当初の廃棄場所から洪水によって流されて再堆積したものが多くある可能性が指摘できる。さらに、本調査範囲は遺跡の一部を調査したに過ぎないことからも、検出された資料は当時利用された動物資源のほんの一部だといえる。

以上のような環境下にも関わらず、16・25・33グリットでは12層の傾向を把握するために土壌のブロックサンプリングが行われ、土壌を6・4・2mmメッシュの各フライを順に用いて微細な資料を採集したことにより、魚類や鳥類、哺乳類などの5分類群の動物が利用されていたことを明らかにすことができた。資料は微細な小破片であるため個体数は正確に把握することができないが、イノシシとニホンジカの部位を最も多く確認することができた。そのほかムササビの大形哺乳類の利用も明らかになった。4区の南側に位置する3区では、イノシシとニホンジカに加えてタヌキあるいはテンなどの中型哺乳類の下顎骨が確認されている（石丸2017a）。また魚類では3区においてナマズとタイ科が確認されているが、4区において新たにサメ類を確認することができた。大きさから

推測して、小型のサメ類のものである。そのほか、種を特定することはできていないが、カエル類、ヘビ類、鳥類の利用も確認することができ、複数の動物資源を利用していたことを明らかにすることができた。遺跡の主な形成時期である縄文時代後期には、北側の神西湖は海とつながり、遺跡は湾の奥部に位置していたが、貝類の利用を確認することはできなかった。京田遺跡の北東約2.5kmに位置する縄文時代後期初頭から後期中葉の麓II遺跡においても貝層は確認されておらず、これらの地域では縄文時代後期における積極的な貝類の利用は行われていない、もしくは貝塚が形成されるほど豊富な貝類資源が存在しなかったことがうかがえる。

なお、京田遺跡周辺域は、縄文時代には海につながる大きな入り江（古穴道湾）となっており、弥生時代に大社湾と穴道湖が分断されて神西湖もこの頃に形成されたと推定されている（中村2010）。貝塚の形成が認められるのは弥生時代後期以降で、知井宮多間院遺跡（弥生時代後期から古墳時代）や姫原西遺跡（弥生時代後期から古墳前期）、矢野遺跡（弥生時代後期）、田中谷貝塚（古墳時代後期）などで貝層が認められ、古代になると上長浜貝塚や御領田遺跡などでも貝塚が形成されている（池田1960、角田・野坂編1994、高安1996、高安1999、岸編2000）。

以上のことから、縄文時代後期中葉の京田遺跡においては、イノシシやニホンジカなどの陸生哺乳類の狩猟を行なながら、海域での漁撈活動および河川での淡水魚類の獲得も行っていたことが読み取れ、カエル類やヘビ類、鳥類などの動物資源も利用していた状況を知ることができる。また、貝類の採集に適した環境ではなかったことが指摘できる。

4 遺構別出土動物相の特徴

次に、地点ごとの出土動物相を比較して廃棄の様相について検討する。動物遺存体は、調査区内の遺構や包含層、グリット内を25cmメッシュに区切ってブロックサンプリングした土壌などから出土したものである。出土地点ごとの動物種は第8表に示したとおりである。竪穴建物跡や土坑、配石土坑などの複数の遺構においてイノシシとニホンジカが確認され、フルイを用いて微細な資料を探集しているブロックサンプリング土壌からは、サメ類やナマズ、タイ科などの魚類に加え、カエル類、ヘビ類、鳥類などの多様な種が確認されている。哺乳類については、イノシシとニホンジカだけではなくムササビの可能性がある小型種を確認することができた。

ブロックサンプリングは12層の傾向を把握するために実施されたものであるが、3つのいずれのグリットにおいてもサメ類やナマズなどの魚類やカエル類、ヘビ類などの微細な資料を確認することができており、当時の動物資源利用をより明確に明らかにするためにはブロックサンプリングが不可欠であることを示していると言える。竪穴建物跡や土坑などの遺構埋土には、イノシシとニホンジカ、あるいはいずれかの種が確認されているが、フルイを用いて選別することによって魚類や鳥類などの微細な資料も含まれていた可能性が指摘できる。

また、最も多くの種類が確認されたのは25グリットで、竪穴建物跡の南側近接地にあたり、食糧残滓が集中して廃棄された場所である可能性が高い。次いでサメ類やカエル類などの複数種が確認された16グリットのブロックサンプル地点は、イノシシ資料を含む土坑3の近くに位置している。ま

第8表 4-1区出土の地点別動物遺存体

出土場所	自然流路 NR1601	柱穴SP 1604 1605 1606	堅穴建物跡 SI1601 SI1602 SI1605	土坑 SK1601 SK1602 SK1605	土坑 SK1603	集石遺構 SS1603	配石土坑 ST1601	16Gr : アマメノミカ上 (12層)	25Gr : アマメノミカ上 (12層)	33Gr : アマメノミカ上 (12層)	包含層 (12層)	包含層 (12層以降)
時代	縄文時期 後葉～ 弥生前期	縄文後期 中葉	縄文後期 中葉	縄文後期 中葉	縄文後期 中葉	縄文後期 中葉	縄文後期 中葉	縄文後期 中葉以降	縄文後期 中葉以降	縄文後期 中葉以降	縄文後期 中葉以前～ 弥生後期	
軟骨魚類								サメ類				
硬骨魚類								不明		不明		
両生類								カエル類	カエル類	カエル類		
爬虫類								ヘビ類				
鳥類										不明		
哺乳類	ニホンジカ	不明	イノシシ ニホンジカ	イノシシ ニホンジカ	イノシシ	不明	イノシシ？	ムササビ？	イノシシ ニホンジカ 小型哺乳類 (ムササビ /イタチ大)	イノシシ ニホンジカ	イノシシ ニホンジカ	イノシシ ニホンジカ
点数	19+複	3+複	18+複	15+複	7+複	1	3+複	15+複	119+複	17+複	114+複数	67+複

＊いずれも種不詳哺乳類の破片を多く含む

＊自然流路はAMS年代、その他の遺構は出土土器による年代、土器が出土していない柱穴SP1604・1605・1607は他の遺構とおおむね同時期と判断して年代を記した。

＊12層の傾向を把握するため、16・25・33Grでは土壤のブロック取り上げを行い、6・4・2mmメッシュのフリイを用いて水洗選別して資料を採集した。

た、遺構外の包含層から多くの資料が出土しているが、本調査においては洪水層と考えられる堆積が確認されていることからも、これらの多くは土坑などに廃棄された資料が洪水によって再堆積したものである可能性が示唆される。

以上のことから、堅穴建物跡や土坑などの遺構内土壤においても微細な複数種の動物骨が含まれていた可能性が指摘でき、調査区内での一定量のブロックサンプルの必要性が示された。また、生活の中心部にあたる建物などの周辺に土坑を掘るなどして、それらの中にまとめて食糧残滓を廃棄した様相を読み取ることができる。

5 出雲平野とその周辺における縄文時代後期・晩期の動物資源利用の推移

近年の発掘調査において、出雲市や大田市などで縄文時代の動物遺存体資料が少量ながら複数の遺跡で確認されている（第9表）。京田遺跡の北東約2.5kmに位置する麓II遺跡（縄文後期初頭から後期中葉）ではイノシシやニホンジカ、クジラ目が出土し、西方の大田市に所在する古屋敷遺跡B区（縄文後期中葉から晩期後葉）ではサメ類やヘダイなどの複数魚類、カエル類やヘビ類、イノシシやニホンジカに加えノウサギやカワウソ、アシカ科なども確認され、日本海沿岸地域における縄文時代の動物資源利用の様相がより具体的に明らかになりつつある（石丸2017b・2017c）。最後にまとめとして、

第9表 出雲地域周辺における縄文遺跡出土動物遺存体

遺跡名	京田遺跡4区	京田遺跡3区	麓II遺跡	古屋敷遺跡		
所在	出雲市湖陵町		出雲市東神西町	大田市仁摩町大國		
主な時期	縄文後期中葉		縄文後期初頭 ～後期中葉	縄文後期中葉	縄文晚期前葉 ～晩期中葉	縄文晚期後葉
軟骨魚類	サメ類			サメ類	サメ類	
硬骨魚類	ナマズ タイ科	ナマズ タイ科		サバ科	ニシン科 アユ? スズキ属 イサキ科 ヘダイ クロダイ属? マダイ亜科 タイ科	タイ科
両生類	カエル類				カエル類	
爬虫類	ベビ類				ベビ類	
鳥類	不明鳥類			不明鳥類	不明鳥類	
哺乳類	イノシシ ニホンジカ ムササビ? (小型哺乳類)	食肉目 イノシシ ニホンジカ	イノシシ ニホンジカ クジラ目	イノシシ ニホンジカ	モグラ科? イタチ? カラウソ アシカ科 イノシシ ニホンジカ ネズミ科 ノウサギ	イノシシ
備考			ヒト		ヒト	

それらの様相から出雲平野とその周辺における縄文時代後期から晩期にかけての動物資源利用の変化について考察してみたい。

縄文後期中葉を主体に生活が営まれた京田遺跡と麓II遺跡は、当時は湾奥部に位置し、日本海の外洋からはやや距離があったと考えられ、ナマズの出土からも淡水域への依存が高かったことがうかがえる。晩期以降、三角州の前進によって内海が狭められ、大社湾と穴道湖が分断されてより海が遠い立地環境になったと考えられる。京田遺跡に暮らした人々は、矢野遺跡や知井宮多聞院遺跡などのより沿岸部あるいは下流域の微高地や丘陵縁辺部に移動して集落を形成し、水田農耕を中心に狩猟・漁撈活動を行い、さらには貝塚を形成する暮らしへと引き継がれたと考えられる。弥生時代前期から古墳時代前期において出雲平野の拠点集落のひとつであった矢野遺跡（縄文後期から中世）では、ヤマトシジミを主体とする貝塚が形成され、イノシシやニホンジカ、フグなどの出土が確認されている（池田 1956、石丸 2010）。

一方、古屋敷遺跡は、現在の海岸線から東に約 2.2km の位置にあるが、京田遺跡に比べてより外洋に近い生活環境にあったと考えられる。縄文時代後期中葉の堆積層からはサメ類に加えてサバ科が確認されていることから、海域での漁撈活動が行われていたことが読み取れる。晩期になると、ニシン科やイサキ科、ヘダイなどの多様な海産魚類が確認され、より海洋資源獲得に積極的になったことが指摘できる。さらに晩期後葉になるとタイ科とイノシシが確認されるのみで、狩猟・漁撈活動への

関わりが少なくなったことが示唆される。古屋敷遺跡では弥生時代の水田跡も確認され、同じ場所において狩猟採集活動主体から水稻農耕へと生活の主体が推移していく様相が読み取れる。縄文晩期後葉の動物遺存体の種数や量の減少は、徐々に水稻農耕を中心とする暮らしを受け入れていった状況を示しているといえよう。

以上のように、出雲平野とその周辺における出土動物遺存体の様相から縄文時代後期中葉から晩期後葉、さらには弥生時代にかけての資源利用の推移について考察した。これまでに確認された動物遺存体は、当時利用された資源の一部に過ぎないが、動物資源利用の大まかな概要は理解することができた。今後の発掘調査において、新しい動物遺存体の発見と多くの資料が採取されることに期待し、当該地域における動物資源利用の歴史文化について、これからも追究していきたい。

(石丸恵利子)

参考文献

- 阿部 永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明 2008『日本の哺乳類』改訂2版 東海大学出版会
- 池田満雄 1956「矢野貝塚出土品県立出雲高等学校保管」『出雲市の文化財』出雲市文化財調査報告第一集 出雲市教育委員会 22~25頁
- 池田満雄 1960「貝塚・古墳」『出雲市の文化財』出雲市文化財調査報告第二集 出雲市教育委員会 75~83頁
- 石丸恵利子 2010「矢野遺跡における動物資源の利用」『矢野遺跡 自然科学分析・考察編(第4分冊)』出雲市文化財報告10 出雲市教育委員会 149~157頁
- 石丸恵利子 2017a「京田遺跡3区から出土した動物遺存体」「の子谷横穴墓群 京田遺跡3区」一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 島根県教育委員会 83~89頁
- 石丸恵利子 2017b「麓II遺跡から出土した動物遺存体」「麓II遺跡 坂本谷遺跡 京田遺跡(1区)」一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 島根県教育委員会 127~130頁
- 石丸恵利子 2017c「古屋敷遺跡B区から出土した動物遺存体」「古屋敷遺跡(B区)」一般国道9号(静岡仁摩道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5 島根県教育委員会 90~99頁
- 宇田川龍男 2006『原色新鳥類検索図鑑』北隆館
- 内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎 2005『決定版日本の両生爬虫類』平凡社
- 角田徳幸・野坂俊之編 1994『神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 御領田遺跡 三部竹崎遺跡』湖陵町教育委員会
- 勝部智明 2017「京田遺跡の調査成果」「麓II遺跡 坂本谷遺跡 京田遺跡(1区)」一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 島根県教育委員会 111~126頁
- 岸 道三編 2000『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第10集 出雲市教育委員会
- 高安克己 1996「出雲市上長浜貝塚出土の貝類」「上長浜貝塚」出雲市教育委員会 56~67頁
- 高安克己 1999「出雲市姫原西遺跡出土の貝類について」「姫原西遺跡」一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告1 島根県教育委員会 155~166頁

中坊徹次編 2013『日本産魚類検索 全種の同定』第三版 東海大学出版会

中村唯史 2010「矢野遺跡の立地と古地理」『矢野遺跡 自然科学分析・考察編(第4分冊)』出雲市の文化財報告

10 出雲市教育委員会 1~5頁

守岡正司 2017「京田遺跡3区の調査成果」『の子谷横穴墓群 京田遺跡3区』一般国道9号(出雲湖陵道路)

改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 島根県教育委員会 43~82頁

Driesch, Angela Von Den. 1976. *A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites.**Peabody Museum Bulletins, I. Peabody Museum Press, Cambridge*

第10表 4~1区出土動物遺存体観察表

No.	区画(G)	遺構・位置	層位	主な出土器の時期	取上日	分類群	種名	部位	部分	左右	重量	備考(種別・計測値など)	基準 目
1	25	堅穴建物跡G1601 SP-C	2層	調文後期中葉	20170223	哺乳類	不明	不明	不明	右側	19.7g(白色), 級片	0.20	
2	14	堅穴建物跡G1601 SP-F	1層	調文後期中葉	20170301	哺乳類	不明	不明	不明	右側	19.7g(白色・黒褐色), 級片	2.10	
3	14	堅穴建物跡G1601 SP-P	1層	調文後期中葉	20170303	哺乳類	イノシシ	子椎骨	右	1側け(白色), 級片	1.26		
4	127	堅穴建物跡G1601	1層	調文後期中葉	20170216	哺乳類	不明	不明	不明	1側け(白色), 級片	0.20		
5	127	堅穴建物跡G1601	1層	調文後期中葉	20170218	哺乳類	牛頭	不明	不明	1側け(白色), 級片	1.31		
6	127	堅穴建物跡G1601	1層	調文後期中葉	20170219	哺乳類	ヒツジンカ	中央部	不明	1側け(白色), 級片	0.25		
7	127	堅穴建物跡G1601	1層	調文後期中葉	20170221	哺乳類	不明	不明	不明	1側け(白色), 級片	0.15		
8	14	堅穴建物跡G1601	1層	調文後期中葉	20170222	哺乳類	牛頭	四肢骨	2側け(白色), 級片	0.38			
9	127	堅穴建物跡G1601	2層	調文後期中葉	20170216	哺乳類	不明	不明	不明	1側け(白色), 級片	1.44		
10	14	堅穴建物跡G1601	2層	調文後期中葉	20170222	哺乳類	牛頭	不明	不明	2側け(白色), 級片	0.27		
11	14	堅穴建物跡G1601	2層	調文後期中葉	20170209	哺乳類	ニシシソウカ	中央部	近位	左	1側け(白色), 級片, 両側片	1.17	
12	126+127	堅穴建物跡G1601	2層	調文後期中葉	20170303	哺乳類	不明	四肢骨	不明	1側け(白色), 級片	0.52		
13	14	堅穴建物跡G1602	1層	調文後期中葉	20170213	哺乳類	不明	不明	不明	1側け(白色), 級片	2.22		
14	14	堅穴建物跡G1603	1層	調文後期中葉	20170213	哺乳類	イノシシ	第3肋中前骨	近位	1側け(白色), 級片	1.27		
15	14	堅穴建物跡G1602	1層	調文後期中葉	20170213	哺乳類	イノシシ	第3肋+中前骨	遠位	1側け(白色), 級片	1.2		
16	14	堅穴建物跡G1602	1層	調文後期中葉	20170220	哺乳類	不明	不明	不明	1側け(白色), 級片	0.2		
17	19	堅穴建物跡G1607	1層	調文後期中葉	20170219	哺乳類	不明	不明	不明	1側け(白色), 級片	0.1		
18	14	堅穴建物跡G1602	2層	調文後期中葉	20170213	哺乳類	牛頭	複合板	不明	1側け(白色), 級片	0.47		
19	14	堅穴建物跡G1602	調構近面洞口	調文後期中葉	20170305	哺乳類	不明	不明	不明	1側け(白色), 級片	0.09		
20	24	配石土MST1601	1層	調文後期中葉	20170221	哺乳類	牛頭	不明	不明	1側け(白色), 級片	0.62		
21	24	配石土MST1601	1層	調文後期中葉	20170209	哺乳類	不明	不明	不明	1側け(白色), 級片, 四肢骨等	2.34		
22	24	配石土MST1601	1層	調文後期中葉	201703	哺乳類	不明	不明	不明	1側け(白色・黒色), 級片	1.30		

No.	区画(Ge)	遺構・位置	層位	主な出土品(小形類)	出土日	分類群	種名	基原	部分	左右	数量	備考(標示・計測値など)	範囲	
23	24	配石上部EST1601	2層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	因数値	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.03	
24	24	配石上部EST1601	2層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片, 因数値	0.34	
25	24	配石上部EST1601	2層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.3	
26	24	配石上部EST1601	2層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.23	
27	24	配石上部EST1601	2層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	1.13	
28	24	配石上部EST1601	2層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	イシシカ	因数値	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片, 因数値	0.68	
29	24	上段SK1602	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片, 因数値	1.41	
30	24	上段SK1602	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	ニンジカ	因数値	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	1.13	
31	24	上段SK1602	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.44	
32	24	上段SK1602	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	イシシカ	因数値	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.63	
33	24	上段SK1602	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片, 因数値	4.22	
34	24	上段SK1602	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	イシシカ	因数値	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.19	
35	24	上段SK1602	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片, 切削角	0.78	
36	24	上段SK1602	2層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片, 2cm未溝	1.3	
37	24	上段SK1602	2層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.73	
38	24	上段SK1602	2層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	3.44	
39	24	上段SK1602	2層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	ニンジカ	半生骨	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	3.25	
40	24	上段SK1602	-	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片, 因数値	1.84	
41	24	上段SK1602	-	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	因数値	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片, 小型彫刻	0.22	
42	16	上段SK1602	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.42	
43	16	上段SK1602	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	1.2	
44	16	上段SK1602	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	イシシカ	因数値	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.63	
45	16	上段SK1602	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.38	
46	16	上段SK1602	2層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.54	
47	16	上段SK1602	3層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.59	
48	16	上段SK1602	3層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.45	
49	16	上段SK1602	3層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	1.2	
50	14	土段SK1604	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.63	
51	14	土段SK1604	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.38	
52	15	土段SK1605	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	1.12	
53	15	柱CSF1604	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.25	
54	14	柱CSF1605	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.49	
55	15	柱CSF1607	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	1.28	
56	15	柱CSF1607	1層	縄文後中期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.95	
57	12	自然遺跡NR1601	1層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片, 55.6±1.5	0.64	
58	28	自然遺跡NR1601	1層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	因数値	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.34	
59	28	自然遺跡NR1601	1層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	1.18	
60	32	自然遺跡NR1601	2層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	因数値	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	1.26	
61	22	自然遺跡NR1601	2層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.32	
62	32	自然遺跡NR1601	2層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	1.58	
63	32	自然遺跡NR1601	3層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.81	
64	20	自然遺跡NR1601	2層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	1.48	
65	20	自然遺跡NR1601	2層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.28	
66	20	自然遺跡NR1601	2層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	因数値	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	2.22	
67	20	自然遺跡NR1601	2層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	ニンジカ	因数値	骨髄部	左側	1	縄文(白色), 縄片, 小型彫刻	1.25	
68	20	自然遺跡NR1601	2層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.8	
69	22	自然遺跡NR1601	3層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	3.28	
70	32	自然遺跡NR1601	3層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	1.93	
71	32	自然遺跡NR1601	3層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	1.02	
72	32	自然遺跡NR1601	2層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.23	
73	28	自然遺跡NR1601	3層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	因数値	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	1.26	
74	22	自然遺跡NR1601	2層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.8	
75	22	自然遺跡NR1601	3層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	3.06	
76	22	自然遺跡NR1601	3層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	2.38	
77	22	自然遺跡NR1601	2層	縄文後中期～後生初期	2017/02/23	縄孔, 銀	ニンジカ	因数値	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.99	
78	41	塩石遺跡SS1603	1層	縄文後中期	—	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色), 縄片	0.95	
79	16	上層パラソルシブル	1A	12層	縄文後中期	2017/02/03	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色)	3.78
80	16	上層パラソルシブル	1B	12層	縄文後中期	2017/02/03	縄孔, 銀	不明	不明	骨髄部	右側	1	縄文(白色)	8.82
81	16	上層パラソルシブル	2A	12層	縄文後中期	2017/02/03	縄孔, 銀	不明	因数値	骨髄部	右側	1	縄文(白色)	1.32
82	16	上層パラソルシブル	2A	12層	縄文後中期	2017/02/03	縄孔, 銀	不明	因数値	骨髄部	右側	1	縄文(白色)	0.18

No.	ICR(Gr)	蟲標・位置	部位	主な出土品の品目類	取土日	分類群	種名	個体	部分	左右	数量	備考(解説・計測値など)	重複
83	16	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	兩生蟲	カリヌ 頭	頭部不明	右側	1	頭部(白色)	0.2
84	16	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	不明	不明	頭部	頭部(白色)	3.00	頭部(白色)	
85	16	上塙プロトクサンブル	IA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	不明	不明	頭部	頭部(白色)	0	頭部(白色)	
86	16	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	不明	不明	頭部	頭部(白色)	0	頭部(白色)	
87	16	上塙プロトクサンブル	6A	12層	陶文壺形牛糞	20170203	不明	不明	頭部	頭部(白色)	4.7	頭部(白色)	
88	16	上塙プロトクサンブル	6A	12層	陶文壺形牛糞	20170203	軟骨魚鱗	サルampus	頭部	頭部(白色)	0.00	頭部(白色), ライザビタウイナ	
89	16	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	不明	不明	頭部	頭部(白色)	4.90	頭部(白色)	
90	16	上塙プロトクサンブル	6A	12層	陶文壺形牛糞	20170203	不明	不明	頭部	頭部(白色)	11.30	頭部(白色)	
91	16	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	不明	不明	頭部	頭部(白色)	0.30	頭部(白色)	
92	16	上塙プロトクサンブル	6A	12層	陶文壺形牛糞	20170203	健骨魚鱗	不明	頭部	頭部(白色)	0.10	頭部(白色)	
93	16	上塙プロトクサンブル	6A	12層	陶文壺形牛糞	20170203	健骨魚鱗	不明	頭部	頭部(白色)	0.00	頭部(白色)	
94	16	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	不明	不明	頭部	頭部(白色)	5.50	頭部(白色)	
95	16	上塙プロトクサンブル	6A	12層	陶文壺形牛糞	20170203	軟骨魚鱗	サルampus	頭部	頭部(白色)	0.00	頭部(白色), ライザビタウイナ	
96	16	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	頭孔鱗	小型鱗孔板	大頭部	頭部	1	頭部(白色), 側面(白色)	0.25
97	16	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	不明	不明	頭部	頭部(白色)	2.72	頭部(白色)	
98	16	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	不明	不明	頭部	頭部(白色)	5.30	頭部(白色)	
99	16	上塙プロトクサンブル	IA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	健骨魚鱗	不明	頭部	頭部(白色)	0.10	頭部(白色)	
100	16	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	不明	不明	頭部	頭部(白色)	12.00	頭部(白色)	
101	16	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	頭孔鱗	小型鱗孔板	頭部	頭部	1	頭部(白色)	0.25
102	16	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	不明	不明	頭部	頭部(白色)	3.00	頭部(白色)	
103	16	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	不明	不明	頭部	頭部(白色)	5.40	頭部(白色)	
104	16	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	頭孔鱗	不明	頭部	頭部(白色)	1.20	頭部(白色)	
105	16	上塙プロトクサンブル	6A	12層	陶文壺形牛糞	20170203	健骨魚鱗	不明	頭部	頭部(白色)	7.00	頭部(白色)	
106	16	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170203	不明	不明	頭部	頭部(白色)	24.5	頭部(白色)	
107	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	不明	内腔部	骨盤部	1	頭部(白色)	2.72
108	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	シラシカ	牛子-牛足部	骨盤部	1	頭部(白色), 牛子(白色)	0.60
109	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	シラシカ	腰带	腰带	1	腰带(黑色), 牛子(白色)	0.70
110	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	シラシカ	腰带	腰带	1	腰带(黑色), 牛子(白色)	0.25
111	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	シラシカ	腰带	腰带	1	腰带(黑色)	0.20
112	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	健骨魚鱗	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色)	0.05
113	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	不明	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色)	14.2
114	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	不明	内腔部	腰带?	1	腰带(白色), シラシカ牛子(白色)	0.60
115	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	不明	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色), 犀牛(白色)	0.00
116	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	シラシカ	腰带	腰带	1	腰带(白色), 犀牛(白色)	0.25
117	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	不明	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色), 犀牛(白色)	15.0
118	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	シラシカ	腰带	腰带	1	腰带(白色)	0.50
119	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	不明	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色)	16.3
120	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色), シラシカ牛子(白色)	0.20
121	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	シラシカ	腰带	腰带	1	腰带(白色), シラシカ牛子(白色)	0.20
122	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	シラシカ	腰带	腰带	1	腰带(白色), シラシカ牛子(白色)	0.20
123	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	健骨魚鱗	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色)	12.00
124	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	健骨魚鱗	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色)	0.17
125	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	不明	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色), シラシカ牛子(白色)	1.00
126	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色), シラシカ牛子(白色)	0.20
127	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色), シラシカ牛子(白色)	0.20
128	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	不明	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色)	12.00
129	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色)	0.05
130	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色)	0.10
131	25	上塙プロトクサンブル	5A	12層	陶文壺形牛糞	20170119	不明	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色)	0.00
132	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	シラシカ	腰带	腰带	1	腰带(白色), 牛子(白色)	0.20
133	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色), シラシカ牛子(白色)	0.17
134	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	不明	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色)	13.0
135	25	上塙プロトクサンブル	6A	12層	陶文壺形牛糞	20170119	不明	不明	腰带	腰带	1	腰带(白色)	13.2
136	25	上塙プロトクサンブル	6A	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	不明	内腔部	骨盤部	1	頭部(白色)	1.70
137	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	カルヌ 頭	頭部	頭部	1	頭部(白色)	0.20
138	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	不明	内腔部	骨盤部	1	頭部(白色)	17.0
139	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	不明	内腔部	骨盤部	1	頭部(白色), ライザビタウイナ	0.20
140	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	頭孔鱗	不明	腰带	腰带	1	頭部(白色), 小型鱗孔板	0.10
141	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	健骨魚鱗	不明	腰带	腰带	1	頭部(白色)	0.17
142	25	上塙プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛糞	20170119	不明	不明	内腔部	骨盤部	1	頭部(白色)	0.50

No.	区画(Ge)	遺構・位置	層位	主な出土品(小形物)	出土日	分類別	種名	頭皮	部分	毛皮	骨量	病害(細胞・計測値など)	範囲	
143	25	上層/プロトカンプル	TB	12層	縄文後御牛集	20170119	不明	不明				複数(白色)	15.6	
144	25	上層/プロトカンプル	TB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明				(複数白色), 中型哺乳類	0.25	
145	25	上層/プロトカンプル	TB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明				複数(白色)	0.45	
146	25	上層/プロトカンプル	TB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色), 黑褐色	0.54	
147	25	上層/プロトカンプル	BA	12層	縄文後御牛集	20170119	不明	不明				複数(白色)	12.5	
148	25	上層/プロトカンプル	BA	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明				複数(白色)	0.42	
149	25	上層/プロトカンプル	BA	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明				(複数白色), 骨頭, 牛頭骨	0.28	
150	25	上層/プロトカンプル	BA	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明				複数	複数(白色)	0.38
151	25	上層/プロトカンプル	BA	12層	縄文後御牛集	20170119	不明	不明				複数(白色)	16.3	
152	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	小型哺乳類	複数	左	(複数白色), 人, 動物(白色)	0.3	
153	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	小型哺乳類	複数		複数(白色)	0.05	
154	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色), 黑色	0.25	
155	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	小型	複数		複数(白色)	0.19	
156	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色), 犬	0.23	
157	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色), 犬	0.36	
158	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	不明	不明				複数(白色)	14.8	
159	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.18	
160	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.29	
161	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.23	
162	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	不明					複数(白色)	19.6	
163	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色), 犬	3.03	
164	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.38	
165	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.36	
166	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色), 犬	0.02	
167	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	不明					複数(白色)	12.6	
168	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.15	
169	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.38	
170	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色), 犬	0.23	
171	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明				複数(白色)	16.3	
172	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	カニ殻類	複数	左	複数(白色)	0.02	
173	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	カニ殻類	複数		複数(白色)	0.19	
174	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.03	
175	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.36	
176	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色), 犬	0.58	
177	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数	左	複数(白色), 犬	0.33	
178	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	14	
179	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	11.5	
180	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数	右側	複数(白色), 犬	0.39	
181	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色), 犬, 猫, 犬or5	1.23	
182	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.38	
183	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色), 犬	0.02	
184	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.35	
185	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.38	
186	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.32	
187	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	不明	不明				複数(白色)	19	
188	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色), 黑色	0.26	
189	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.18	
190	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	不明					複数(白色)	12.8	
191	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	1.58	
192	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色), 黑色	0.36	
193	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	不明					複数(白色)	17.2	
194	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色), 黑色	0.35	
195	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数	右側	複数(白色)	0.61	
196	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.03	
197	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数	右側	複数(白色), 黑色	0.36	
198	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.25	
199	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	0.11	
200	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	13.8	
201	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	1.76	
202	25	上層/プロトカンプル	BB	12層	縄文後御牛集	20170119	縄文	不明	複数	複数		複数(白色)	9.2	

No.	ICR(Gr)	遺傳・位置	層位	主な出土品の品目類	取上日	分類群	種名	部位	左右	数量	備考(種類・計測値など)	重(㌘)
203	25	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	23.8
204	25	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	イソシジ			縦幅(白色), 横幅	3.39
205	25	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明	凹歯羣		縦幅(白色)	1.10
206	25	上層プロトクサンブル	DB	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	14.6
207	25	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	13.9
208	25	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明	椎骨羣		縦幅(白色)	0.10
209	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	17.0
210	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	イソシジ	近縁羣		縦幅(白色)	0.2
211	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	4.87
212	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	26.6
213	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	イソシジ	第25牛頭羣	近縁	縦幅(白色), 横幅	0.02
214	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明	椎骨		縦幅(白色)	0.15
215	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明	内歯羣		縦幅(牛頭彌月), 横幅(白)	0.30
216	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	ヒヨシカジ	前歯		縦幅(ムサ), 縦幅(白色)	0.15
217	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	4.29
218	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	30.2
219	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明	手爪		縦幅(白色), 縦片, イソシジ	3.73
220	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明	手爪中骨		縦幅(手爪), 不規則彌月	0.08
221	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明	近縁羣	右	縦幅(白色)	6.99
222	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	イソシジ	近縁羣		縦幅(白色)	7.04
223	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	2.79
224	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	4.89
225	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	16.5
226	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	イソシジ	近縁羣		縦幅(白色), 縦片	1.62
227	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明	足根半足羣	近縁	縦幅(白色)	0.22
228	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	2.39
229	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	8.97
230	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	11.2
231	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	14.2
232	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	ヒヨシカジ	近縁羣		縦幅(白色)	0.56
233	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明	足根半足羣	近縁	縦幅(白色)	1.78
234	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	2.40
235	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	3.25
236	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明	手爪		縦幅(白色), 壁片	1.22
237	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	4.82
238	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	6.09
239	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	カヌカヅ	肉糞羣		縦幅(白色)	0.04
240	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	5.62
241	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	9.17
242	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	13.9
243	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明			縦幅(白色)	9.99
244	33	上層プロトクサンブル	DA	12層	陶文壺形牛頭	20170119	壺乳頭	不明	指骨		縦幅(白色), 小牛-牛頭彌月, 手爪	0.62
245	24	包含體	4層	初期後-古期	20170209	壺乳頭	不明	不明	不明		縦幅(白色), 壁片, 四肢骨羣	3.46
246	24	包含體	4層	初期後-古期	20170209	壺乳頭	ニシジカ	中牛-牛頭羣	四肢骨		縦幅(白色)	0.93
247	39	包含體	5-6層	陶文壺形牛頭	20170111	壺乳頭	不明	不明			縦幅(白色), 壁片	1.02
248	14	包含體	6層	陶文壺形牛頭	20170110	壺乳頭	不明	不明			縦幅(白色), 壁片	2.26
249	15	包含體	6層	陶文壺形牛頭	20170110	壺乳頭	不明	不明			縦幅(白色), 壁片, 四肢骨羣	2
250	16	包含體	6層	陶文壺形牛頭	20170110	壺乳頭	不明	不明			縦幅(白色), 壁片, 四肢骨羣	1.39
251	16	包含體	6層	陶文壺形牛頭	20170110	壺乳頭	不明	不明			縦幅(白色), 壁片	2.36
252	16	包含體	6層	陶文壺形牛頭	20170110	壺乳頭	不明	不明			縦幅(白色), 壁片	1.49
253	17	包含體	6層	陶文壺形牛頭	20170210	壺乳頭	不明	不明			縦幅(白色), 壁片	1.12
254	17	包含體	6層	陶文壺形牛頭	20170210	壺乳頭	不明	椎骨			縦幅(白色), 壁片	3.3
255	17	包含體	6層	陶文壺形牛頭	20170210	壺乳頭	不明	椎骨			縦幅(白色), 壁片	0.95
256	17	包含體	6層	陶文壺形牛頭	20170210	壺乳頭	不明	椎骨			縦幅(白色), 壁片	0.82
257	17	包含體	6層	陶文壺形牛頭	20170210	壺乳頭	不明	椎骨			縦幅(白色), 壁片	3.72
258	17	包含體	6層	陶文壺形牛頭	20170210	壺乳頭	イソシジ	手爪羣			縦幅(白色), 一頭火照	1.67
259	17	包含體	6層	陶文壺形牛頭	20170210	壺乳頭	不明	手爪			縦幅(白色), 壁片	1.12
260	24	包含體	6層	陶文壺形牛頭	20170112	壺乳頭	不明	凹歯羣			縦幅(白色), 壁片	2.81
261	24	包含體	6層	陶文壺形牛頭	20170112	壺乳頭	ニシジカ	中牛羣	近縁羣		縦幅(白色), 壁片, 側方頭	0.2
262	24	包含體	6層	陶文壺形牛頭	20170112	壺乳頭	不明	不明			縦幅(白色), 壁片	0.99

No.	区画(Ge)	遺跡・位置	層位	主な出土土器・小形器	出土日	分類別	種名	基原	部分	左右	数量	備考(標識・計測値など)	範囲
263	25	包含層	6層	縄文後神牛集	20170411	縄乳, 細	不明	不明	不明		1,28	縄け(白色), 破片	
264	25	包含層	6層	縄文後神牛集	20170412	縄乳, 細	不明	不明	不明		1,3	縄け(白色), 破片	
265	25	包含層	6層	縄文後神牛集	20170416	縄乳, 細	不明	不明	不明		0,83	縄け(白色), 破片	
266	25	包含層	6層	縄文後神牛集	20170417	縄乳, 細	不明	不明	不明		0,9	縄け(白色), 破片	
267	26	包含層	6層	縄文後神牛集	20170418	縄乳, 細	不明	不明	不明		0,06	縄け(白色), 破片	
268	27	包含層	6層	縄文後神牛集	20170419	縄乳, 細	不明	不明	不明		2,02	縄け(白色), 破片	
269	27	包含層	6層	縄文後神牛集	20170419	縄乳, 細	イソシ	破片	後方幅部	右	1,23	縄け(白色), 破片, 考古調	
270	28	包含層	6層	縄文後神牛集	20170419	縄乳, 細	不明	不明	不明		0	縄け(白色)	
271	28	包含層	6層	縄文後神牛集	20170419	縄乳, 細	不明	不明	不明		3,56	縄け(白色), 破片	
272	28	包含層	6層	縄文後神牛集	20170419	縄乳, 細	不明	不明	不明		2,58	縄け(白色), 破片	
273	9	包含層	6cm11層	縄文後神牛集	20170419	縄乳, 細	不明	不明	不明		0,35	縄け(白色)	
274	13	包含層	6cm11-12層	縄文後神牛集	20170419	縄乳, 紆	不明	不明	不明		0,42	縄け(白色)	
275	40	包含層	6cm11-12層	縄文後神牛集	20170419	縄乳, 紆	イソシ	破片	縫合		0,95	縄け(白色)	
276	9	包含層	11層	縄文後神牛集	20170419	縄乳, 紆	イソシ	漆器	腹側部		1,32	縄け(白色), 破片	
277	14	包含層	11層	縄文後神牛集	20170419	縄乳, 紆	不明	不明	不明		1,2	縄け(白色), 破片	
278	14	包含層	11層	縄文後神牛集	20170419	縄乳, 紆	不明	不明	不明		8,09	縄け(白色), 破片	
279	14	包含層	11層	縄文後神牛集	20170419	縄乳, 紆	イソシ	漆器	漆器部		3,78	縄け(白色), 破片, 残存部分	
280	15	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		0,42	縄け(白色), 破片	
281	15	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		3,32	縄け(白色), 破片	
282	15	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		0,43	縄け(白色), 破片	
283	16	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		0,06	縄け(白色), 破片, 面残要素	1,06
284	24	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		0,83	縄け(白色), 破片	
285	24	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		0,02	縄け(白色)	
286	24	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		0,28	縄け(白色), 破片	
287	24	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	イソシ	漆器	胎突部		0,26	縄け(白色), 破片	
288	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		10,4	縄け(白色), 破片	
289	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		1,29	縄け(白色), 破片	
290	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	イソシ	漆器	漆器部		0,02	縄け(白色), 残存	
291	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	イソシ	漆器	漆器部		0,83	縄け(白色), 残存	
292	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	イソシ	漆器	漆器部		0,05	縄け(白色)	
293	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	因数骨	腹側部		1,26	縄け(白色), 破片	
294	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		0,14	縄け(白色), 破片	
295	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		0,03	縄け(白色), 破片	
296	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		0,98	縄け(白色), 破片	
297	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		0,06	縄け(白色), 破片	
298	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	因数骨	腹側部		2,25	縄け(白色), 破片	
299	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	因数骨	腹側部		1,45	縄け(白色), 破片	
300	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	イソシ	漆器	口面		0,09	縄け(白色), 破片	
301	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		2,14	縄け(白色), 残存要素	
302	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	イソシ	漆器	漆器部		0,53	縄け(白色), 破片	
303	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	因数骨	漆器部		0,28	縄け(白色), 破片	
304	28	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		0,04	縄け(白色), 破片	
305	28	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		2,07	縄け(白色), 破片	
306	28	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		1,38	縄け(白色), 破片	
307	28	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	因数骨	漆器部		1,33	縄け(白色), 破片	
308	28	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	イソシ	漆器	口面		0,06	縄け(白色)	
309	27	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		0,06	縄け(白色)	
310	27	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	イソシ	漆器	口面		0,47	縄け(白色), 破片	
311	24	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	因数骨	漆器部		0,53	縄け(白色), 破片	
312	24	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		0,0	縄け(白色), 破片	
313	24	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	イソシ	漆器	口面		0,28	縄け(白色)	
314	24	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		0,95	縄け(白色), 残存要素	
315	24	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	イソシ	漆器	漆器部		0,22	縄け(白色), 破片	
316	24	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	イソシ	漆器	漆器部		0,44	縄け(白色), 破片	
317	24	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	因数骨	漆器部		0,28	縄け(白色), 破片	
318	24	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	不明	不明		1,77	縄け(白色), 破片	
319	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	イソシ	漆器	口面		0,25	縄け(白色)	
320	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	因数骨	漆器部		1,5	縄け(白色)	
321	25	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	因数骨	漆器部		0,73	縄け(白色)	
322	49	包含層	11層	縄文後神牛集	20170420	縄乳, 紆	不明	因数骨	漆器部		2,38	縄け(白色), 破片	

No.	ICR(Ge)	藻類・位置	層位	主な出土品の品目類	取上日	分類群	種名	部位	部分	左右	数量	備考(種類・計測値など)	重複
323	40	似赤藻	11層	陶文壺形中葉	20170111	埴乳類	不明	器表?				円錐形(白色), 壁片	1.2
324	40	似赤藻	11層	陶文壺形中葉	20170111	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆層	左		円錐形(白色), 壁片	1.07
325	40	似赤藻	11層	陶文壺形中葉	20170111	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片, 頸部周辺	0.08
326	40	似赤藻	11層	陶文壺形中葉	20170111	埴乳類	ニホンジカ	中茎部	茎幹部			圓錐形(白色), 壁片, 頸部周辺	1.22
327	4	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170111	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	0.77
328	4	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170111	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆部			圓錐形(白色), 壁片	1.01
329	7	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170112	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	1.38
330	7	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170112	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	0.76
331	7	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170112	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	0.95
332	7	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170120	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片, 頸部周辺	3.82
333	7	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170120	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	0.98
334	8	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170120	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	0.99
335	8	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170205	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	0.74
336	8	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170206	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片, 頸部周辺	1.78
337	8	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170210	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	0.96
338	9	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170210	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	0.44
339	13	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆	莖起部			圓錐形(白色), 壁片	0.74
340	13	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	1.76
341	13	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆			圓錐形(白色), 壁片	0.03
342	13	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆層	左		圓錐形(白色), 壁片, 頸部周辺	0.95
343	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	1.02
344	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆層			圓錐形(白色), 壁片	0.45
345	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆層			圓錐形(白色), 壁片, 頸部周辺	0.32
346	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	1.05
347	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片, 頸部周辺	4.67
348	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	中茎部	被覆			圓錐形(白色), 壁片	0.99
349	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	中茎部	被覆			圓錐形(白色), 壁片	0.15
350	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆層	左		圓錐形(白色), 壁片	1.49
351	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆層	右		圓錐形(白色), 壁片	1.45
352	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆層			圓錐形(白色), 壁片	1.86
353	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片, 頸部周辺	3.58
354	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	0.7
355	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	基盤部	被覆			圓錐形(白色), 壁片	0.29
356	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片, 頸部周辺	0.46
357	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆層			圓錐形(白色), 壁片, 壁片でさわ	0.66
358	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆層			圓錐形(白色), 壁片	0.09
359	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	1.19
360	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	中茎部	被覆			圓錐形(白色), 壁片	2.32
361	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	—	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片, 頸部周辺	1.46
362	14	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	—	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆			圓錐形(白色), 壁片	0.37
363	15	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	5.12
364	15	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆			圓錐形(白色), 壁片	0.28
365	15	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	切端部	被覆	左		圓錐形(白色), 壁片	0.95
366	15	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	0.23
367	15	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆部	被覆			圓錐形(白色), 壁片	0
368	15	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	2.45
369	15	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆			圓錐形(白色), 壁片	0.98
370	15	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	0.37
371	15	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	0.62
372	15	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	2.25
373	15	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆			圓錐形(白色), 壁片	4.47
374	15	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	0.46
375	16	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	0.07
376	16	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	0.2
377	16	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	0.45
378	16	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片, 頸部周辺	6.82
379	16	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆			圓錐形(白色), 壁片	0.19
380	16	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	不明	不明	不明			圓錐形(白色), 壁片	6.76
381	16	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆			圓錐形(白色), 壁片	0.05
382	16	似赤藻	12層	陶文壺形中葉	20170410	埴乳類	ニホンジカ	被覆	被覆			圓錐形(白色), 壁片, 壁片でさわ	0.62

No.	区画(Ge)	遺構・位置	層位	主な出土土器(小形器)	出土日	分類別	種名	基原	部分	左右	数量	備考(標識・計測値など)	範囲
383	16	包含層	12層	縄文後中期	20170105	縦孔, 細	イソシ-	街並	後方部	左	1,13	縦け(白色), 縱片	東
384	16	包含層	12層	縄文後中期	20170105	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	0,25	縦け(白色), 縱片	東
385	16	包含層	12層	縄文後中期	20170222	縦孔, 細	トモ	内谷委	後方部	上	0,79	縦け(白色), 縱片	東
386	16	包含層	12層	縄文後中期	20170222	縦孔, 細	イソシ-	近藤	後方部	左	0,85	縦研究, 縱け(白色)	東
387	17	包含層	12層	縄文後中期	20170316	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	1,07	縦け(白色), 縱片	東
388	17	包含層	12層	縄文後中期	20170316	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	1,36	縦け(白色), 縱片	東
389	17	包含層	12層	縄文後中期	20170323	縦孔, 細	トモ	内谷委	後方部	右	4,03	縦け(白色), 縱片, 内谷委	東
390	17	包含層	12層	縄文後中期	20170323	縦孔, 細	イソシ-	後藤	後方部	左	0,65	縦け(白色), 縱片	東
391	17	包含層	12層	縄文後中期	20170323	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	2,28	縦け(白色), 縱片	東
392	17	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	6,23	縦け(白色), 縱片, 四條畷	東
393	17	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	トモ	後藤	後方部	右	0,87	縦け(白色), 縱片	東
394	23	包含層	12層	縄文後中期	20170405	縦孔, 細	イソシ-	街並	後方部	左	2,4	縦け(白色), 縱片, 街並	東
395	23	包含層	12層	縄文後中期	20170405	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	10,8	縦け(白色), 縱片, 街並	東
396	23	包含層	12層	縄文後中期	20170405	縦孔, 細	ニンジカ	後藤	右	1,44	縦け(白色), 縱片, 縱合赤	東	
397	23	包含層	12層	縄文後中期	20170405	縦孔, 細	ニンジカ	後藤	後方部	左	0,05	縦研究	東
398	24	包含層	12層	縄文後中期	20170410	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	1,33	縦け(白色), 縱片	東
399	24	包含層	12層	縄文後中期	20170410	縦孔, 細	イソシ-	街並	不規	不規	0,3	縦け(白色), 縱片	東
400	24	包含層	12層	縄文後中期	20170425	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	4,26	縦け(白色), 縱片, 街並	東
401	24	包含層	12層	縄文後中期	20170425	縦孔, 細	ニンジカ	近藤	後方部	左	0,18	縦け(白色), 縱片	東
402	24	包含層	12層	縄文後中期	20170425	縦孔, 細	イソシ-	近藤	後方部	左	0,2	縦研究	東
403	24	包含層	12層	縄文後中期	20170425	縦孔, 細	トモ	内谷委	後方部	右	6,0	縦け(白色), 縱片	東
404	24	包含層	12層	縄文後中期	20170426	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	1,52	縦け(白色), 縱片, 街並	東
405	24	包含層	12層	縄文後中期	20170426	縦孔, 細	イソシ-	近藤	後方部	左	0,14	縦け(白色), 縱片	東
406	24	包含層	12層	縄文後中期	20170426	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	3,34	縦け(白色), 縱片	東
407	24	包含層	12層	縄文後中期	20170426	縦孔, 細	イソシ-	近藤	後方部	左	1,7	縦け(白色), 縱片	東
408	25	包含層	12層	縄文後中期	20170427	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	0,32	縦け(白色), 縱片	東
409	25	包含層	12層	縄文後中期	20170429	縦孔, 細	トモ	内谷委	後方部	右	4,93	縦け(白色), 縱片, 街並	東
410	25	包含層	12層	縄文後中期	20170429	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	7,77	縦け(白色), 縱片, 街並	東
411	25	包含層	12層	縄文後中期	20170429	縦孔, 細	イソシ-	ナカガ	ナカガ	左	1,08	縦け(白色), 縱片, ナカガ	東
412	25	包含層	12層	縄文後中期	20170429	縦孔, 細	イソシ-	ナカガ	ナカガ	右	0,62	縦け(白色), 縱片	東
413	25	包含層	12層	縄文後中期	20170429	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	9,12	縦け(白色), 縱片, 街並	東
414	25	包含層	12層	縄文後中期	20170429	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	0,23	縦け(白色), 縱片	東
415	25	包含層	12層	縄文後中期	20170429	縦孔, 細	イソシ-	近藤	後方部	左	0,88	縦け(白色), 縱片	東
416	25	包含層	12層	縄文後中期	20170429	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	1,23	縦け(白色), 縱片	東
417	25	包含層	12層	縄文後中期	20170429	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	11,3	縦け(白色), 縱片	東
418	25	包含層	12層	縄文後中期	20170429	縦孔, 細	イソシ-	ナカガ	ナカガ	左	0,26	縦け(白色), 縱片	東
419	25	包含層	12層	縄文後中期	20170429	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	0,03	縦け(白色), 縱片	東
420	25	包含層	12層	縄文後中期	20170429	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	9,33	縦け(白色), 縱片	東
421	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	18,7	縦け(白色), 東京, 四條畷	東
422	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	ニンジカ	近藤	後方部	左	0,09	縦け(白色), トモは明	東
423	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	イソシ-	第3次川底基盤	近松	左	0,68	縦け(白色), 縱片, 分岐	東
424	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	イソシ-	第3次川底基盤	近松	右	0,24	縦け(白色), 縱片, 第3次	東
425	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	トモ	琵琶	琵琶	左	0,78	縦け(白色), 西方琵琶	東
426	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	トモ	琵琶	琵琶	右	1,04	縦け(白色), 西方琵琶	東
427	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	トモ	琵琶	琵琶	左	5,83	縦け(白色), 縱片, 西方琵琶	東
428	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	トモ	琵琶	琵琶	右	0,48	縦け(白色), 縱片, イソシ-	東
429	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	トモ	琵琶	琵琶	左	0,27	縦け(白色), 縱片, イソシ-	東
430	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	トモ	琵琶	琵琶	右	0,52	縦け(白色), 縱片, イソシ-	東
431	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	イソシ-	ナカガ	ナカガ	左	0,38	縦け(白色), 縱片	東
432	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	トモ	琵琶	琵琶	右	7,03	縦け(白色), 縱片, 四條畷	東
433	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	ニンジカ	近藤	右	1,28	縦け(白色), 縱片	東	
434	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	イソシ-	第3次川底基盤	近松	左	0,83	縦け(白色), トモは明	東
435	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	ニンジカ	近藤	右	0,13	縦け(白色), 縱片	東	
436	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	イソシ-	近藤	近藤	左	0,03	縦け(白色), 縱片	東
437	25	包含層	12層	縄文後中期	-	縦孔, 細	トモ	内谷委	アマ	左	0,2	縦け(白色), 縱片	東
438	26	包含層	12層	縄文後中期	20170112	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	0,74	縦け(白色), 縱片	東
439	26	包含層	12層	縄文後中期	20170119	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	2,79	縦け(白色), 縱片	東
440	26	包含層	12層	縄文後中期	20170119	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	0,89	縦け(白色), 縱片, 石井	東
441	26	包含層	12層	縄文後中期	20170119	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	2,18	縦け(白色), 縱片	東
442	26	包含層	12層	縄文後中期	20170119	縦孔, 細	トモ	街並	不規	不規	0,34	縦け(白色), 縱片	東

No.	[C高(Ge)]	地帶・位置	層位	主な出土器物(小形類)	取上日	分類別	種名	部位	部分	形態	数量	参考(断面・付記等など)	基質	
443	30	岱岱層	12層	調文直筒中型	20170125	埴乳頭	不明	内鉢身	參照部	1面(白色), 磁片	0.25			
444	26	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170309	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	0.05			
445	26	岱岱層	11層	調文直筒中型	-	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	0.25			
446	26	岱岱層	11層	調文直筒中型	-	埴乳頭	不明	内鉢身	參照部	1面(白色), 磁片	2.85			
447	27	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170207	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	1.05			
449	27	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170120	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	0.65			
450	20	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170103	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	0.25			
450	20	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170106	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	2.85			
451	23	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170108	埴乳頭	ニシジカ	中空安定	參照部	1面(白色)	0.75			
452	20	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170112	埴乳頭	不明	内鉢身	參照部	2面(白色), 磁片	8.25			
453	23	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170113	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	4.25			
454	23	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170115	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	1.8			
455	20	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170117	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	2.5			
456	20	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170117	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	0.35			
457	23	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170118	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	1.5			
458	28	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170106	埴乳頭	ニシジカ	中空	參照部	1面(白色)	1.85			
459	24	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170106	石頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色)	0.55			
460	28	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170106	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片, インソル	1.45			
461	28	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170108	埴乳頭	不明	内鉢身	參照部	1面(白色), 磁片	1.8			
462	24	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170110	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	0.05			
463	24	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170110	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	3.5			
464	28	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170110	埴乳頭	不明	内鉢身	參照部	1面(白色), 磁片	0.55			
465	24	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170120	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片, 距離骨等	38			
466	24	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170120	埴乳頭	ニシジカ	手少/中空	參照部	1面(白色), 磁片, 一方の距離骨	0.25			
467	24	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170120	埴乳頭	ニシジカ	中空	近便	右	1面(白色), 外側前方脚	2.25		
468	24	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170120	埴乳頭	イシシカ	遠離部	參照部	1面(白色), 磁片	0.15			
469	25	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170121	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	3.15			
470	25	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170122	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片, 距離骨等	3.65			
471	25	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170123	埴乳頭	ニシジカ	少少/中空	參照部	1面(白色), 距離骨等	0.05			
472	25	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170123	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	2.15			
473	25	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170123	埴乳頭	ニシジカ	遠離部	近便	左	1面(白色), 隔離花	1.15		
474	25	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170125	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	0.35			
475	25	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170125	埴乳頭	ニシジカ	中空	參照部	1面(白色), 磁片	1.25			
476	25	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170125	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	2.25			
477	25	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170125	埴乳頭	ニシジカ	切歎部	左	1面(白色), 磁片	0.35			
478	25	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170202	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	0.35			
479	25	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170203	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	0.75			
480	20	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170205	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色)	4.25			
481	20	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170205	埴乳頭	不明	内鉢身	參照部	1面(白色)	1.75			
482	20	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170205	埴乳頭	イシシカ	中空	參照部	1面(白色)	1.25			
483	20	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170205	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色)	0.25			
484	20	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170205	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色)	0.85			
485	20	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170205	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色)	0.85			
486	-	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170205	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色)	0.25			
487	-	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170210	埴乳頭	ニシジカ	參照部	左	1面(白色), 磁片	0.85			
488	-	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170210	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色)	0.25			
489	-	岱岱層	11層	調文直筒中型	20170210	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色)	0.25			
490	13	岱岱層	21層	調文直筒中型	20170210	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色)	1.25			
491	18	岱岱層	21層	調文直筒中型	20170210	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色)	0.65			
492	25	岱岱層	21層	調文直筒中型	20170210	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	2.25			
493	27	岱岱層	21層	調文直筒中型	20170210	埴乳頭	不明	内鉢身	參照部	1面(白色), 磁片	1.85			
494	22	岱岱層	21層	調文直筒中型	20170211	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	1.55			
495	22	岱岱層	21層	調文直筒中型	20170210	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片, 距離骨等	5.05			
496	30	岱岱層	21層	調文直筒中型	20170210	埴乳頭	ニシジカ	大頭身	過往部	1面(白色), 磁片	4.15			
497	22	岱岱層	21層	調文直筒中型	20170210	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	0.65			
498	28	岱岱層	21層	調文直筒中型	20170210	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	0.25			
499	25	岱岱層	21層	調文直筒中型	20170210	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	2面(白色), 磁片	1.25			
500	25	岱岱層	21層	調文直筒中型	20170210	埴乳頭	イシシカ	過往部	表面	1面(白色), 磁片	1.15			
501	20	岱岱層	21層	調文直筒中型	20170210	埴乳頭	イシシカ	參照部	右	1面(白色), 磁片	1.05			
502	-	岱岱層	鉢土中	-	20170210	埴乳頭	不明	内鉢身	不明	1面(白色), 磁片	1.15			

※参考標の計測値の記号は、Driesch(1976)に従った。

第2節 京田遺跡4区のAMS年代測定、花粉分析、樹種・種実同定

1 はじめに

本報告は、文化財調査コンサルタント株式会社が出雲市からの委託を受け、京田遺跡周辺での古環境の推定及び京田遺跡から出土した土器を対象とする製作年代推定のために、京田遺跡4区(4—1区)の発掘調査に伴いAMS年代測定、花粉分析、樹種・種実同定を実施した。ここではその成果について報告する。

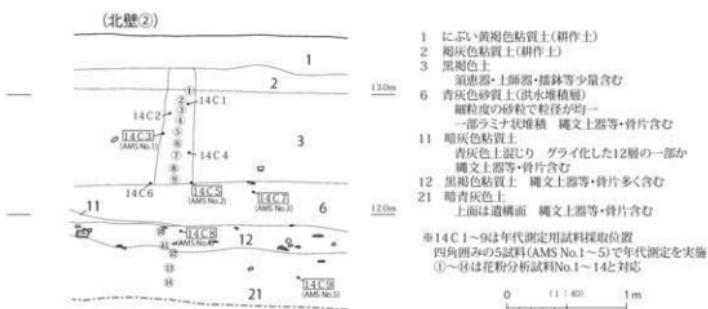
京田遺跡は、出雲市西部の湖陵町常楽寺地内に位置し、沖積平野の縁辺に立地する。4区の発掘調査では、縄文時代後期中葉の遺構が確認され、当時の集落の存在が明らかになった。

2 測定試料について

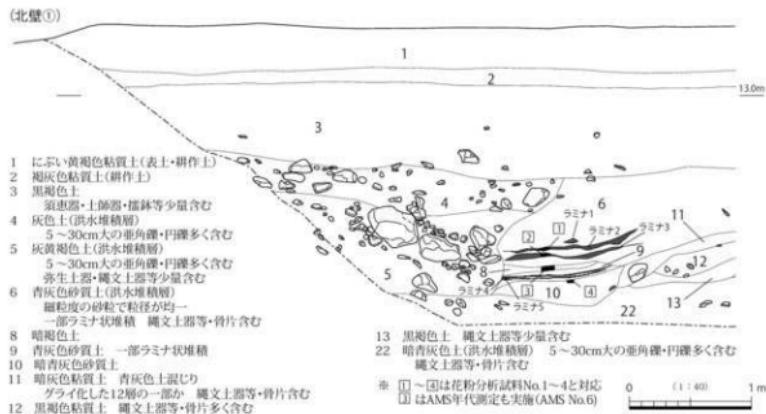
花粉分析試料、AMS年代測定試料、樹種同定試料の内、採取(出土)位置が明らかなものについて、平面図、断面図中に示す。年代測定試料の一部と花粉分析試料は、文化財調査コンサルタント株式会社が出雲市との協議の上、現地で採取した。その他の年代測定試料は出雲市から提供を受けた。また土器付着炭化物は、出雲市から提供を受けた出土土器から、文化財調査コンサルタント株式会社が削り取った。更に樹種同定試料は、出雲市から提供を受けた。各試料が採取されたグリッド内の位置及び試料採取層準を第74～78図に、第79図に炭化物付着出土土器の状況を示す。



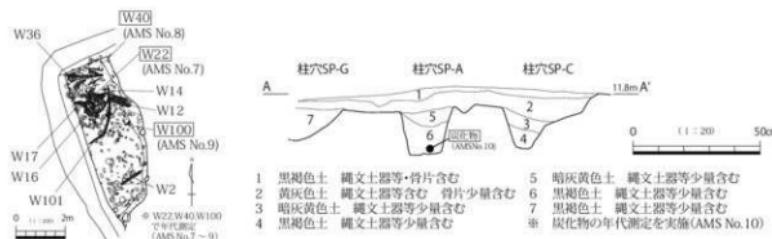
第74図 4—1区平面図(試料採取地点)



第75図 北壁土層No.1地点(試料採取層準)



第76図 北壁土層No.2地点（試料採取層準）



第77図 No.3地点
(自然流路 NR1601 拡大図)



(第34圖3 内面)



(第40圖56 内面)



(第38図12 外面)

第79図 炭化物付着土器

3 分析方法

(1) AMS 年代测定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。¹⁴C濃度の測定にはタンデム型イオン加速器

第11表 年代測定結果

試料番号	地名	緯度 (DDMM)	経度	測定番号	日本標準化による 測定試料	測定試料	測定期間		測定年数 (yrBP ± 1.0)	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰)	測定年数正誤差 (yrBP ± 1.0)	測定年数不確実性 (yrBP ± 1.0)	測定年数範囲 (yrBP ± 1.0)	1標準偏差内範囲	2標準偏差内範囲	年代測定の 参考文献	測定年数 (yrBP)
							開始年	終了年									
1	石室山 14C3	北半球	6.2125	年式試料	樹木年輪	樹木年輪	1998.1.19	22.19 ± 0.35	327.8 ± 19	-12.1 ± 0.0	AD1514-1520(±1.0%)	AD1515-1520(±0.5%)	AD1514-1520(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	半減期一致	34421
2	石室山 14C5	北半球	6.2085	年式試料	樹木年輪	樹木年輪	2001.1.19	-13.38 ± 0.29	367.7 ± 19	-95.5 ± 2.0	AD1503-1509(±1.0%)	AD1504-1510(±0.5%)	AD1503-1509(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	半減期一致	34424
3	石室山 14C7	北半球	6.2123	樹木年輪中層	樹木年輪	樹木年輪	2001.1.19	-26.88 ± 0.29	327.9 ± 18	-387.9 ± 20	BC1391-1398(±1.0%)	BC1392-1400(±0.5%)	BC1391-1398(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	半減期一致	34425
4	石室山 14C8	北半球	6.2108	樹木年輪中層	樹木年輪	樹木年輪	2001.1.21	-27.38 ± 0.32	328.2 ± 21	-328.0 ± 20	BC1391-1398(±1.0%)	BC1392-1400(±0.5%)	BC1391-1398(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	半減期一致	34426
5	石室山 14C9	北半球	6.2096	樹木年輪中層	樹木年輪	樹木年輪	2007.1.20	-26.01 ± 0.30	348.0 ± 26	-366.0 ± 20	BC1271-1284(±1.0%)	BC1272-1284(±0.5%)	BC1271-1284(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	半減期一致	34427
6	石室山 14C10	樹木年輪	6.2085	樹木年輪中層	樹木年輪	樹木年輪	2003.1.21	-28.41 ± 0.18	201.0 ± 21	-213.3 ± 20	BC1273-1281(±1.0%)	BC1274-1281(±0.5%)	BC1273-1281(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	半減期一致	34428
7	石室山 14C11	木炭	6.2088	樹木年輪中層	樹木年輪	樹木年輪	2024.1.19	-29.29 ± 0.29	243.3 ± 19	-243.3 ± 20	BC1405-1409(±1.0%)	BC1406-1410(±0.5%)	BC1405-1409(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	半減期一致	34419
8	石室山 14C12	木炭	6.2043	樹木年輪中層	樹木年輪	樹木年輪	2008.1.21	-25.85 ± 0.18	249.2 ± 21	-249.2 ± 20	BC1407-1411(±1.0%)	BC1408-1412(±0.5%)	BC1407-1411(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	半減期一致	34420
9	石室山 14C13	木炭	6.2087	樹木年輪中層	樹木年輪	樹木年輪	2079.1.19	-27.30 ± 0.22	243.7 ± 19	-243.7 ± 20	BC1408-1412(±1.0%)	BC1409-1413(±0.5%)	BC1408-1412(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	半減期一致	34421
10	石室山 14C14	木炭	6.2074	樹木年輪中層	樹木年輪	樹木年輪	2024.1.23	-28.17 ± 0.48	418.0 ± 24	-418.0 ± 25	BC1287-1291(±1.0%)	BC1288-1292(±0.5%)	BC1287-1291(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	半減期一致	34418
11	石室山 14C15	木炭	-	樹木年輪中層	樹木年輪	樹木年輪	2074.1.23	-25.45 ± 0.25	339.6 ± 23	-339.5 ± 23	BC1398-1404(±1.0%)	BC1397-1404(±0.5%)	BC1398-1404(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	半減期一致	34429
12	石室山 14C16	木炭	-	樹木年輪中層	樹木年輪	樹木年輪	2003.1.23	-28.19 ± 0.28	342.9 ± 23	-342.9 ± 25	BC1396-1401(±1.0%)	BC1397-1401(±0.5%)	BC1396-1401(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	半減期一致	34410
13	石室山 14C17	木炭	6.2081	樹木年輪中層	樹木年輪	樹木年輪	2071.1.22	-28.68 ± 0.03	3518.6 ± 22	-3518.6 ± 20	BC1399-1407(±1.0%)	BC1400-1407(±0.5%)	BC1399-1407(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	BC1407-1412(±0.5%)	半減期一致	34422

*14C半減期校正値

**14C半減期校正値

を用い、半減期：5568年で年代計算を行った。暦年代較正には OxCal ver. 4.3 (Bronk Ramsey 2009) を用い、INTCAL13 (Reymer et al. 2013) を利用した。

(2) 微化石概査方法

花粉分析用プレラート及び花粉分析処理残渣を顕微鏡下で観察し、花粉（胞子）、植物片、微粒炭、珪藻、植物珪酸体、火山ガラスの含有状況を、5段階で示した。

(3) 花粉分析方法

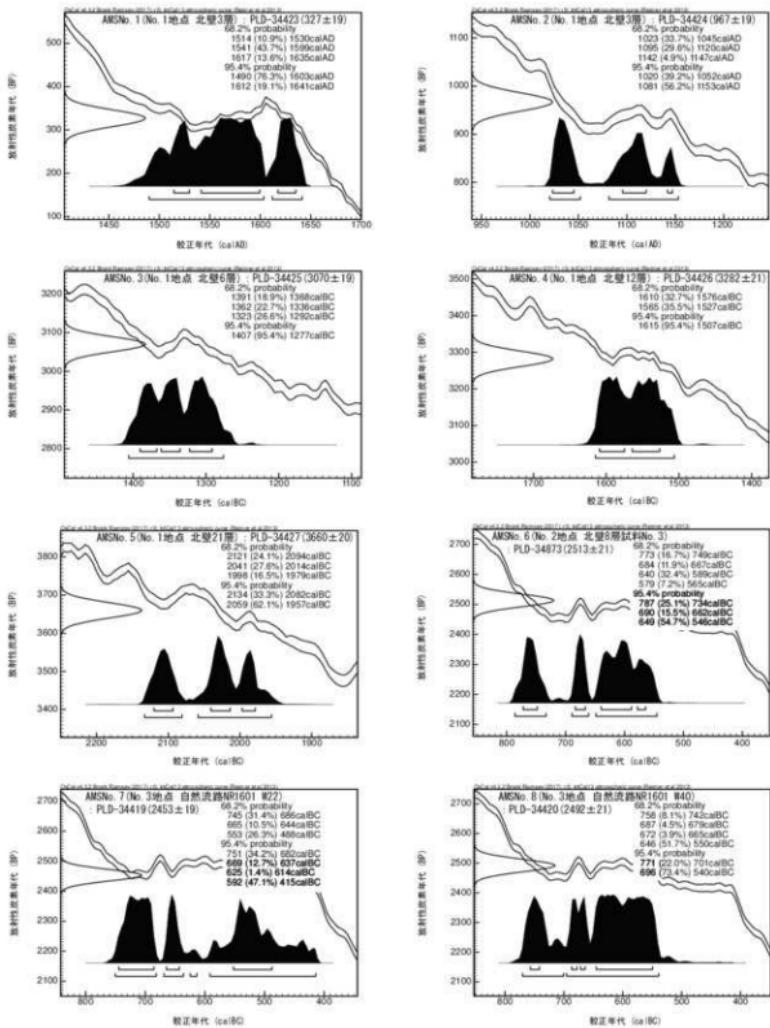
渡辺 (2010a) に従い実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石も行った。また中村 (1974) に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科 (40ミクロン以上) と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科 (40ミクロン未満) に細分した。

(4) 樹種同定方法

顕微鏡観察用永久プレラートは、渡辺 (2010b) に従い作成した。作成した永久プレラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタント株式会社にて保管・管理をしている。顕微鏡観察は、光学顕微鏡下で4倍～600倍の倍率で行った。同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、顕微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか (1985) の用語に基本的に従い、記載を行った。

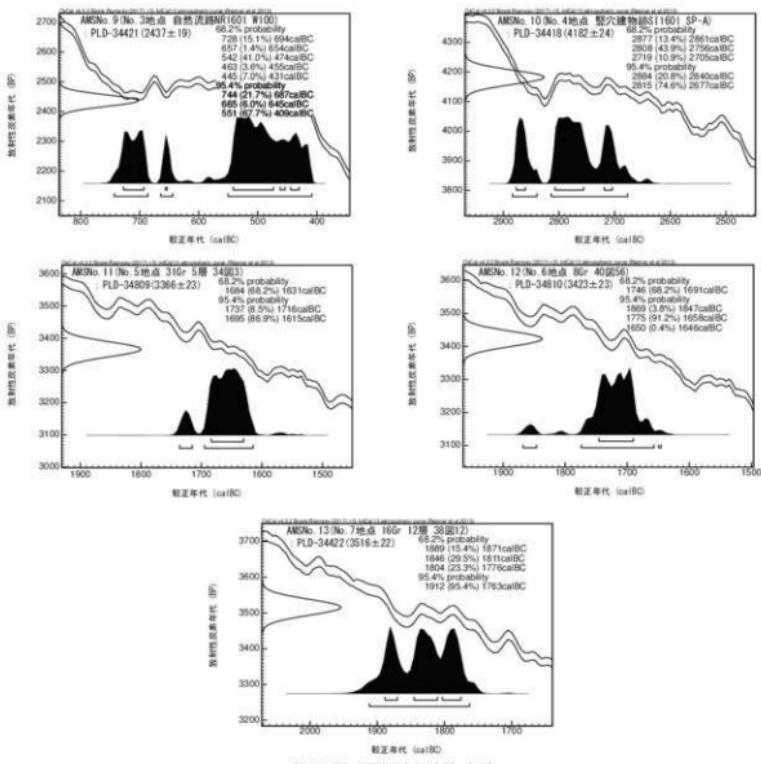
(5) 種実同定方法

選別済みの試料の提供を受けた。このことから、以下の手順で作業を行った。



第80図 历年較正結果（1）

- ① 同定・計数：肉眼及び実体顕微鏡にて、現生標本及び図鑑類との対比により同定する。
- ② 標本作製：同定後の試料を、調査地点ごとに分類群別にガラス瓶に入れ、60% エタノールにて液浸標本とする。



第81図 历年較正結果（2）

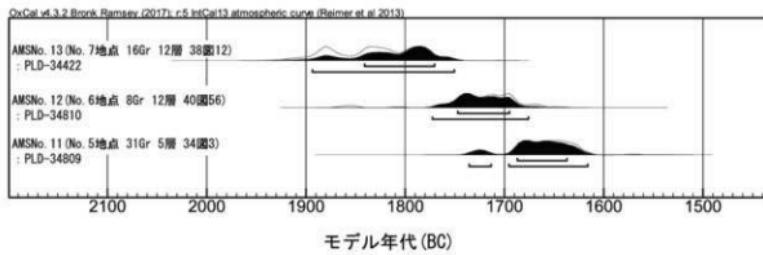
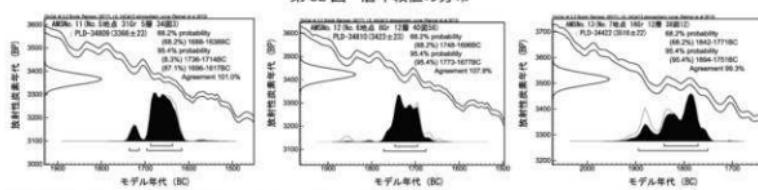
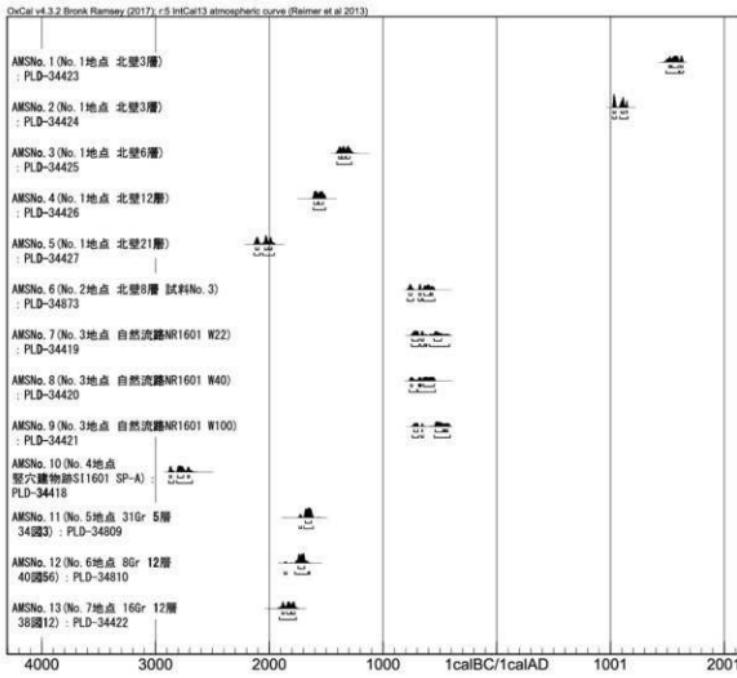
4 分析結果

（1）AMS 年代測定結果

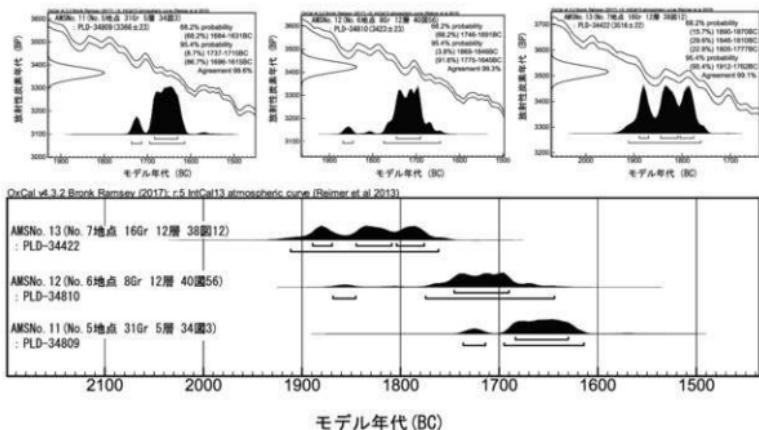
年代測定結果を第11表及び第80～83図に示す。第80、81図には、OxCal ver. 4.3 (Ramsey 2009) による試料ごとの歴年較正図を、第82図には歴年較正年代の分布を示した。第11表には、試料の詳細、前処理方法、 $\delta^{13}\text{C}$ 値と4種類の年代を示している。

第82図に示した歴年較正値の分布から、以下の事柄が読み取れる。

- ① №1 地点の5試料からは、上位ほど新しく、下位ほど古い年代値が得られており、この地点での矛盾はない。
- ② 自然流路NR1601（№3地点）内木片の3試料（AMS No.7～9）及び8層（AMS No.6）からは、2400～2500yrBP頃の年代値が得られた。北壁の観察では、10層から上位の8・9層、同時異相及び上位に位置する6層へと整合的な層相変化が認められていた。得られた年代値から（第82図に示



第 83 図 「Contiguous : 各試料連続」モデルによる暴年較正值



第84図「Overlapping: 各試料オーバーラップ」モデルによる暦年較正値

第12表 微化石概査結果

地点名	試料No.	花粉	微粒炭	植物片	珪藻	植物珪酸体	火山ガス
No.1地点	1	○	△	○	△	○	△
	2	○	△	○	△	○	△
	3	○	△	○	○	○	△
	4	○	△	○	○	○	△
	5	○	△	○	○	○	△
	6	○	△	○	○	○	△
	7	○	△	△	○	○	△
	8	○	△	○	○	○	△
	9	○	△	○	○	○	△
	10	△×	○	△×	△	○	△
	11	△×	○	△×	×	△	△
	12	△	○	△	×	△	△
	13	△	○	△×	△×	△	△
	14	△	○	△×	×	△	△
No.2地点	1	○	△	○	△	△	△×
	2	○	△	○	○	△	○
	3	○	△×	○	△	△	△
	4	△	△×	○	△	△	△

凡例 ○: 十分な終了が現出できる ○: 少ないが検出できる △: 非常に少ない

△×: 極めてまれに検出できる ×: 検出できない

したように、連続して堆積したことが示唆される。一方、6層(No.1地点)の試料(AMS No.3)からは、3070 ± 20yrBPと、これらより古い年代値が得られた。

③ 壇穴建物跡SI1601内の柱穴SP-Aから得られた年代値は、ベースを成す21層より古いものであった。このことは、試料とした炭化物が、SP-A内に二次的に混入したことを示唆する。

SP-Aは、壇穴建物跡SI1601内の柱穴と考えられることから、以下の現象が推測できる。

- 1) 柱穴掘削の際に、掘り起こされた21層に今回の試料が含まれていた。
- 2) 柱抜き取り後に開口した柱穴に、古い時期の炭化物が混入し、埋まった。

④ 3試料の土器片は、第34図3(元住吉山I式併行)、第40図56(一乗寺K式併行)、第38図12(北白川上層式3期併行)であり、順に新しい年代が想定されていた。得られた年代値(補正年代)の中央値もこの順序で並び、(第82図に示すように)暦年較正年代も重なりがあるものの、この順序で並んでいた。第83図に「Contiguous:各試料連続」モデル、第84図に「Overlapping:各試料オーバーラップ」モデルによる暦年較正値を示した(Ramsey,2009)。それぞれの較正値に大差はなく、通常の暦年較正値の使用に支障がないことが明らかである。

(2) 微化石概査結果

No.1地点では、試料No.9より上位で花粉、植物片、珪藻、植物珪酸体が多く検出されるのに対し、微粒炭の検出量が少ない。一方試料No.10より下位ではこの傾向が逆転し、グライ化など堆積後の化学作用による微化石の溶解が推定される。

No.2地点では、試料No.2より上位で花粉が多く検出される。試料No.3より下位では花粉の検出量が減る一方で植物片の検出量が多くなる。花粉の含有量はさほど低い値を示さないことから、植物片による希釈効果が生じたものと考えられる。

(3) 花粉分析結果

分析結果を第85・86図の花粉ダイアグラムと、第13表の花粉組成表に示す。花粉ダイアグラムでは、分類群ごとの百分率(百分率の算出には、木本花粉総数を基準にしている)を、スペクトルで表している(木本(針葉樹)は黒、木本(広葉樹)は暗灰、草本・藤本は明灰、胞子は白のスペクトルで表した)。分類群ごとのグラフの右側には「木本(針葉樹)」「木本(広葉樹)」「草本・藤本」と「胞子」の割合を示すグラフを示したほか、「木本」、「草本・藤本」、「胞子」「花粉・胞子(全ての合計)」ごとに含有量(湿潤試料1g中の粒数)の変化を示している。

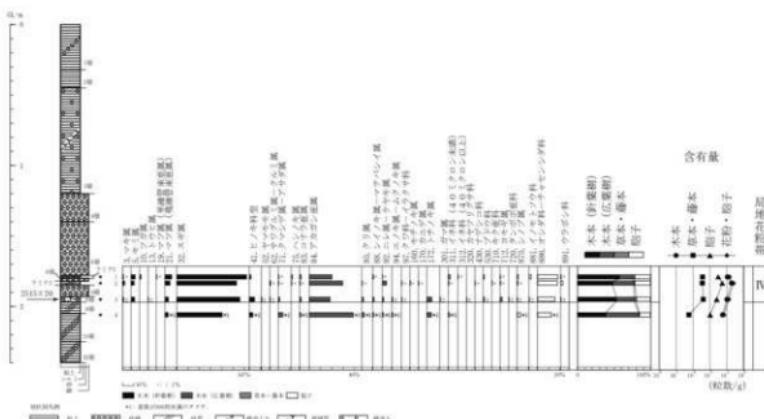
(4) 樹種同定結果

No.3地点の10試料(W2・12・14・16・17・22・36・40・100・101)について、分類ごとに特徴的な試料(下線試料)の記載を行った。また、第14表に同定結果を示し、下線試料について顕微鏡



第85図 No.1地点の花粉ダイアグラム

No.2地点



第86図 No.2地点の花粉ダイアグラム

写真を示した（第87図）。

① クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

試料No. : W2, W12, W16, W17, W22, W40, W100, W101

記載：環孔材で大きい楕円形の道管が単独で3-4列に配列する。孔圈外の道管は小さく、放射状に配列する。道管せん孔は単せん孔である。また、道管にはチロースが顕著に認められる。孔圈道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は単接線状に配列するのが認められる。放射組織は平伏細胞からなる單列同性型である。以上の組織上の特徴からクリと同定した。

② トネリコ属 *Fraxinus* sp.

試料No. : W14

記載：年輪幅は非常に狭い（年輪幅：約0.5mm）。円形ないし楕円形のやや大きい道管がほとんど単列で単列（部分的に2列）に配列する環孔材であり、典型的なぬか目材を形成している。年輪は大部分が孔圈で占められており、孔圈道管は圧縮を受けて扁平状になっている部分がある。孔圈外は非常に狭く、小さい道管が単独で散在状に分布しているが、少ない。道管せん孔は単せん孔で、道管内腔にチロースがよく発達している。軸方向柔組織は周囲状およびターミナル状で、孔圈外では不明瞭であるが接線方向に帶状を示すものがある。放射組織は同性で1～5細胞幅である。以上の組織的特徴から、トネリコ属と同定した。

③ トネリコ属類似 cf. *Fraxinus* sp.

試料No. : W36

記載：接線方向の圧縮が激しい。年輪幅は極めて狭い（年輪幅：0.2-0.3mm）。円形ないし楕円形のやや大きい道管がほとんど単独（まれに2個接合）でほとんど単列に配列する環孔材であり、ぬか目材となっ

第13表 花粉化石組成表

第14表 樹種同定結果

試料No.	整理番号	樹種名	出土土地点(遺構)	種類名	備考
W2	W18030701	クリ	自然流路NR1601	自然木	
W12	W18030702	クリ	自然流路NR1601	自然木	
W14	W18030703	トネリコ属	自然流路NR1601	自然木	
W16	W18030704	クリ	自然流路NR1601	自然木	
W17	W18030705	クリ	自然流路NR1601	自然木	
W22	W18030706	クリ	自然流路NR1601	自然木	
W36	W18031807	トネリコ属類似	自然流路NR1601	自然木	
W40	W18031808	クリ	自然流路NR1601	自然木	
W100	W18031809	クリ	自然流路NR1601	自然木	
W101	W18031810	クリ	自然流路NR1601	自然木	

ている。孔閻道管は圧縮を受けて扁平状になっているものが多い。孔閻外は非常に狭く、小さい道管が単独で散在状に分布しているが、少ない。道管せん孔は単せん孔である。軸方向柔組織は周囲状で、不明瞭であるがターミナル状も認められる。放射組織は同性で1~4細胞幅である。以上の組織的特徴から、トネリコ属の可能性が示唆されるが、類似とするに留めた。

(5) 種実同定結果

試料ごとに記載を行った。また、第15表に同定結果を示し、顕微鏡写真を示した(第88図)。

- ① 試料No. 135 バラ属ノイバラ節(偽果) *Rosa sect. Synstylae* sp.

径7~9mm程度の球形で頂部に残った萼片は5枚で基部には果柄がついたままである。

- ② 試料No. 135 バラ属ノイバラ節(内部のそう果) *Rosa sect. Synstylae*

長さ4.2mm前後で狭卵形~半卵形、表面は光沢があり縦方向に細かいしわがある。果体の中間から基部に白ないし透明の長毛がまばらに分布する。

- ③ 試料No. 217 オニグルミ(内果皮:破片) *Juglans mandshurica* var. *sachalinensis*

表面には不規則な凹凸があり脈状で不規則な細い筋が粗く全面に分布する。内果皮壁は固く緻密で壁内部に空隙があり、内面は4室に分かれる構造となっている。

- ④ 試料No. 460 コナラ属(果実) *Quercus* sp.

長さ15mm程度、広卵形で果皮は薄くやや硬くやや光沢があり縦方向に細かい筋があり基部は盤状でざらつき中央がやや突出している。花柱は欠けているが花柱のとれた跡の周囲表面には伏毛が散生している。

- ⑤ 試料No. 528 コナラ属(果実) *Quercus* sp.

果実は広卵形で先端の花柱の部分が大きく欠けている。基部の着点は中央がやや突出している。

第15表 種実同定結果

試料No.	整理番号	樹種名	出土土地点(遺構)	種類名	備考
135	—	ノイバラ節	自然流路NR1601	偽果、内部のそう果	
217	—	オニグルミ	自然流路NR1601	内果皮:破片	
460	—	コナラ属	自然流路NR1601	果実	
528	—	コナラ属	自然流路NR1601	果実	
1126	—	アカガシ亞属	自然流路NR1601	果実	

⑥ 試料No. 1126 コナラ属アカガシ亜属（果実）*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.

果実は広卵形で基部の着点は中央がやや突出する。頂部の花柱は先端が取れていますが残った下半部に輪状紋が確認できる。輪状紋は果実の肩には広がらない。果実基部の着点は中央がやや突出する。

5 局地花粉帯の設定

花粉分析結果を基に、京田遺跡での局地花粉帯（IV～I帶）を設定した。以下に各局地花粉帯の特徴を、時間軸に沿って下位から示す。

また、No. 1 地点試料No. 14～10、No. 2 地点試料No. 4 では木本花粉検出量が少なかったことから、花粉分帶の対象から除いている。

① IV帶：No. 2 地点試料No. 3～1

スギ属が高率を占め、アカガシ亜属が続く。草本花粉、胞子の割合は低率で、特に草本花粉の割合が低い。

② III帶：No. 1 地点試料No. 9～4

スギ属、マツ属（複雑管束亜属）、アカガシ亜属が高率を占める。これらの内、スギ属は減少傾向、マツ属（複雑管束亜属）は増加傾向を示す。一方、アカガシ亜属は一定の範囲で安定して出現している。このほかコナラ亜属が低率であるが微増傾向を示す。これらの変化は特に上位 3 試料で激しくなることから、下位 3 試料（試料No. 9～7）を b 亜帶、上位 3 試料（試料No. 6～4）を a 亜帶とした。

草本花粉ではイネ科（40 ミク以上）が高率を示し、上位 3 試料（試料No. 6～4）では特に高い出現率を示す。更に試料No. 5、4 では、低率であるが栽培種のソバ属が検出される。

③ II帶：No. 1 地点試料No. 3、2

マツ属（複雑管束亜属）が高率を占め、コナラ亜属、スギ属、アカガシ亜属が続く。引き続き、マツ属、コナラ亜属は増加、スギ属は減少するが、アカガシ亜属は減少に転ずる。

④ I帶：No. 1 地点試料No. 1

マツ属（複雑管束亜属）が更に高率になる。一方、スギ属は増加し、コナラ亜属、が減少する。アカガシ亜属は減少し、ほとんど検出されなくなる。

6 古環境の推定

以下では、花粉帯ごとに堆積当時の遺跡周辺地域での古環境推定を行う。

① IV帶以前：縄文時代後期

花粉化石がほとんど検出されず、十分な検討ができなかった。前述のようにNo. 1 地点の 6 層から下位は、本来含まれていた花粉化石の多くが土壤のグライ化によって溶解しており、検出された花粉化石の多くが根やクラックに伴って上位から混入した可能性が高い。

② IV帶：No. 2 地点試料No. 3～1（縄文時代晚期後葉～弥生時代前期頃）

1) 推定時期

8 層から 2515 ± 20yrBP と、縄文時代晚期後葉～弥生時代前期頃の年代が得られている。このこ

とから、本層準も縄文時代晚期後葉～弥生時代前期頃の植生を示すと考えられる。

また、6層上部は淘汰の悪い礫混じり粗砂、下部はシルトと、『逆級化』を示すことから、洪水時の堆積物であると考えられる。

2) 花粉帯の対比

出雲平野南西部では、これまで神西湖内、あるいは周囲の山間盆地で花粉分析が行われてきた。神西湖では湖底コア JZ01 で詳細な分析が行われており（渡辺 2017），今回（京田遺跡）のIV帯は JZ-III 帯 b 亜帯と最も類似する。ただし、SJ01 の JZ- III 帯 b 亜帯は縄文時代中期後半～弥生時代と範囲が広い。花粉化石群集の特徴として、京田遺跡に比べスギ属の出現率が低く、マツ属（複維管束亜属）、コナラ亜属の出現率が高い。一方、神西湖東部の山間盆地に立地する麓II遺跡（渡辺 2017）では、縄文時代晚期～平安時代の植生を示していると考えられる 5-II 帯が類似し、花粉化石群集の特徴は京田遺跡に比べスギ属の出現率が低率で、マツ属（複維管束亜属）、コナラ亜属などの出現率が高い。

3) 森林植生の推定

京田遺跡の分析では、スギ属が高率を示すことから、低地から谷沿い斜面でのスギ林の存在が推定される。また、スギ属に次ぐアカガシ亜属は丘陵上に分布し、クスノキ科（花粉は検出されない）のタブノキや、シイノキ類（花粉は検出されにくい）などとともに照葉樹林を成していたものと考えられる。前述 2 地点と京田遺跡のIV帯が同時期を示すかは不明であるが、調査地点（京田遺跡）を含む常楽寺川流域では、他地点に比べ、スギ林の分布が広かった可能性がある。神西湖に流入する河川のうち流域が広く、調査地近辺に低地が広がっていることが、スギの生育に向いていたものと考えられる。

また、樹種同定ではクリ、トネリコ属の存在が明らかになったほか、種実同定ではオニグルミも検出された。クリは花粉生産量が多いものの、虫媒花であることから散布域が狭い。また、オニグルミも同様である。更に、トネリコ属は花粉生産量が少なく、虫媒花であることから散布域も狭い。一方、スギ属、アカガシ亜属は花粉生産量が多く、風媒花であることから散布域も広い。第 86 図を見ると、アカガシ亜属が高率を示し、オニグルミ（サワグルミ属・クルミ属）、クリ（クリ属）は低率であるが出現している。一方、トネリコ属は検出されなかった。オニグルミ、トネリコ属は河川の近くに生育する種であり、クリは重要な二次林要素である。従って常楽寺川上流の丘陵にはクリが生育していたほか、河川沿いにはスギに加えオニグルミやトネリコ属も生育していたと考えられる。

4) 草本植生

粗～細砂と有機質粘土の互層から成り、『時折流れがある湿地』で堆積したものと考えられる。草本花粉の割合が低いことから、開放的な水域で、水草はほとんど認められなかつたと考えられる。

③ III 帯：No.1 地点試料 No.9 ~ 4（平安時代後期～中世末頃）

1) 推定期間

年代測定値として 965 ± 20 yrBP, 325 ± 20 yrBP が得られ、平安時代後期～中世末頃の植生を示していると考えられる。

2) 花粉帯の対比

木本花粉ではスギ属、マツ属（複維管束亜属）、アカガシ亜属が高率を占め、スギ属は減少傾向、マ

ツ属（複維管束亜属）は増加傾向を示す。また、アカガシ亜属は一定の範囲で安定して出現する。

JZ01 では JZ- III带 a 亜帶で類似する花粉化石群集が得られている。一方、マツ属（複維管束亜属）の増加傾向に注目し詳細に検討すると、京田遺跡のIII带が JZ- III带と II 帯の移行期に相当することが分かる。ただし、JZ01 の JZ- III带と II 帯境界で得られた 1100 ± 40 yrBP という年代値は、京田遺跡で得られた年代よりやや古い。JZ01 で得られた花粉化石（群集）は、神西湖の集水域全域からもたらされ、平均的なものと考えられることから、局所的な花粉化石を集めた京田遺跡の花粉化石群集との時期差が生じたと考えられる。

麓 II 遺跡では、5- I 帯、3- III带 b, a 亜帶が、京田遺跡での III带に対比可能である。麓 II 遺跡の 5- I 帯、3- III带 b, a 亜帶は、古代～中世の時期を示すと考えられており、京田遺跡での III带の年代観と一致する。

3) 森林植生の推定

古代に入ると京田遺跡や麓 II 遺跡など、神西湖南から東にかけての丘陵部の開発が進んだと考えられる。照葉樹林は伐採され、アカマツやコナラ類を主要素とする『薪炭林（里山）』へと変化していく。また、山間低地の開発も進み、スギ林が伐採・開墾されて水田へと変化していく。

4) 草本植生

3 層では草本花粉の割合が高く、特にイネを含むイネ科（40 ミロ以上）花粉が高率を示す。下位の b 亜帶ではオモダカ属、キカシグサ属、チドメグサ属などの水田雑草あるいは湿生草本由来の花粉が多く検出される。調査地点が水田であった可能性も含め、近辺で水田耕作が行われていたと考えられる。上位の a 亜帶では草本花粉の種類数が増え、畑作雑草あるいは人里植物を含むアカザ科・ヒユ科、ナデシコ科、栽培種のソバ属も検出される。調査地点は水田化し、裏作あるいは休耕田や畦を利用した畑作が行われていたと考えられる。

④ II 帯：No. 1 地点試料 No. 3, 2 (近世)

1) 花粉帯の対比

マツ属（複維管束亜属）が高率を占め、コナラ亜属、スギ属、アカガシ亜属が続く。引き続き、マツ属、コナラ亜属は増加、スギ属は減少するが、アカガシ亜属は減少に転ずる。

JZ01 では JZ- II 帯で類似する花粉化石群集が得られている。また、麓 II 遺跡では 3- III带 a 亜帶、II 帯で類似する花粉化石群集が得られている。

2) 推定時期

JZ01 の JZ- II 帯と I 帯境界では近世以降を示す 190 ± 40 yrBP が得られている。また、麓 II 遺跡の 3- III带 a 亜帶、II 帯は、出土遺物や、より広域な花粉帶の対比から、中世～近世の植生を示していると考えられている。以上のことから、京田遺跡の II 帯は中世から近世の植生を示していると考えられる。

3) 森林植生の推定

神西湖集水域の丘陵部のほぼ全域へ開発が進み、アカマツを主要素としてコナラ類を主要素とする『薪炭林（里山）』へと変化していく。また、山間低地の開発も進み、スギ林が伐採・開墾されて水

田へと変化していったが、一部ではスギ林が残存していた。

4) 草本植生

草本花粉の割合が高く、特にイネを含むイネ科（40ミリ以上）花粉が高率を示し、栽培種のソバ属も検出される。調査地点、及び周辺には水田広がり、裏作あるいは休耕田や畦を利用したソバ栽培が行なわれていたと考えられる。また、Ⅲ帯に比べ草本花粉の種類数が減少するが、Ⅲ帯の時期に比べ田畠の管理が進んだ結果と考えられる。

⑤ I 帯：No.1 地点試料No.1

1) 花粉帶の対比

マツ属（複維管束亜属）が更に高率になる。一方、スギ属は増加し、コナラ亜属、が減少する。アカガシ亜属は減少し、ほとんど検出されなくなる。

JZ01ではJZ-I帯で類似する花粉化石群集が得られている。また、麓II遺跡では3-I帯で類似する花粉化石群集が得られている。

2) 推定時期

JZ01のJZ-I帯、麓II遺跡の3-I帯とともに広域な花粉帶の対比から、近代～現代の植生を示していると考えられている。したがって、京田遺跡におけるI帯は近代～現代の植生を示していると考えられる。

3) 森林植生の推定

『薪炭林（里山）』の様相が変わり、コナラ亜属が減少し、アカマツ主体へと変化していった。一方で、スギ植林が始まった可能性がある。

4) 草本植生

草本花粉の割合が、Ⅱ帯に比べやや低くなり、草本花粉の種類数が更に減る。イネを含むイネ科（40ミリ以上）花粉もⅡ帯に比べ半減するが、依然100%高い出現率を示す。また、イネ科（40ミリ未満）の割合はほぼ変わらない。調査地点、及び周辺には水田が広がっていたと考えられる。田の管理が更に進み、イネ以外の作物も作られなくなっていたと考えられる。

6 まとめ

京田遺跡における年代測定から、以下の事柄が明らかになった。

- ① 各堆積層の堆積年代が明らかになった。出土遺物からの推定時期と概ね整合的である。
- ② 竪穴建物跡SI1601内の柱穴SP-Aから採取された試料からは、竪穴建物跡SI1601の年代が明らかにならなかった。竪穴建物跡SI1601のベースを成す21層より古い年代が得られ、二次的な混入試料の可能性が指摘できたためである。
- ③ 元住吉山I式併行にBC1737-1615、一乗寺K式併行にBC1869-1646、北白川上層式3期併行にBC1912-1763（いずれも2σ）の年代が与えられた。

花粉分析、樹種同定、種実分析及び年代測定結果を基に、京田遺跡の古環境変遷について推定した。特筆すべき事柄を以下に示す。

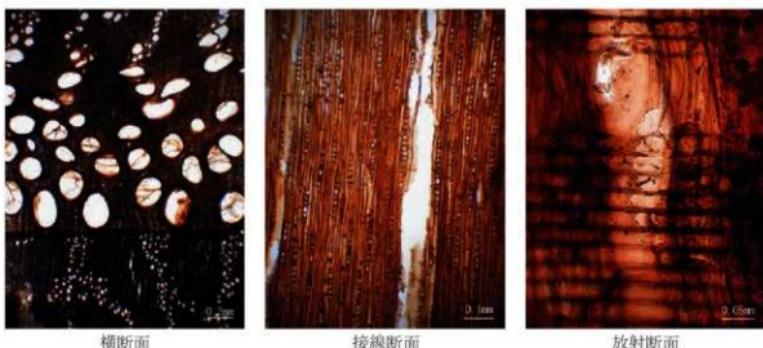
- ① 繩文時代後期の堆積層から、花粉化石がほとんど検出されなかった。このため、古環境推定はできなかった。
- ② 繩文時代晚期後葉～弥生時代前期頃の時期には、低地から谷沿い斜面にスギ林が分布していた。遺跡近辺は、神西湖周辺の中でスギ林の占める割合が特に広かったと考えられる。丘陵部には（花粉が多く検出された）アカガシ亜属のほか、（花粉の検出されにくい）シイノキ類、（花粉の検出されない）クスノキ科のタブノキなどとともに照葉樹林が分布していたと考えられる。また、常楽寺川上流の丘陵にはクリが生育していたほか、河川沿いにはスギに加えオニグルミやトネリコ属も生育していたと考えられる。遺跡近辺の水域は開放的で、水草はほとんど分布していなかった。
- ③ 平安時代後期～中世末頃には、丘陵部の開発が進み、照葉樹林がアカマツやコナラ類を主要素とする『薪炭林（里山）』へと変化していった。更に山間低地の開発も進み、スギ林が水田へと変化していった。遺跡近辺では水田耕作が行われ、裏作あるいは休耕田や畦を利用した畑作が行われていた。
- ④ 近世には、神西湖周辺の丘陵部を『薪炭林（里山）』が覆うようになった。山間低地も水田化していったが、一部ではスギ林が残存していた。遺跡近辺では水田耕作が行われ、裏作あるいは休耕田や畦を利用してソバが栽培された。また、田畠の管理が進み、雑草が減少した。
- ⑤ 近代～現代には、アカマツ主体の『薪炭林（里山）』へと変化し、スギ植林も始まった。遺跡近辺では管理の進んだ水田耕作が行われ、裏作などが行われなくなってきた。

(渡辺正巳)

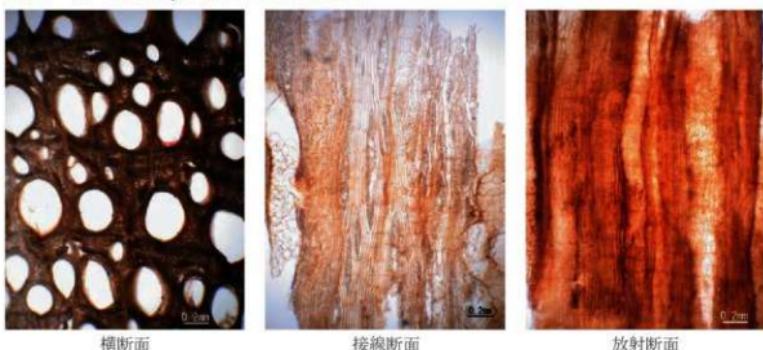
参考文献

- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塙倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 1985『木材の構造』文永堂
- 中村 純 1974「イネ科花粉について、とくにイネを中心として」『第四紀研究』13 日本第四紀学会 187～197頁
- 渡辺正巳 2010a「花粉分析法」「必携 考古資料の自然科学調査法」ニュー・サイエンス社 174～177頁
- 渡辺正巳 2010b「木質遺物（埋没樹木）樹種同定」「必携 考古資料の自然科学調査法」ニュー・サイエンス社 194～198頁
- 渡辺正巳 2017「麓II遺跡3・5区発掘調査に伴う自然科学分析」「麓II遺跡 坂本谷遺跡 京田遺跡（1区）－般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書1 島根県教育委員会 136～159頁
- Bronk Ramsey, C. 2008. Deposition models for chronological records. *Quaternary Science Reviews*, 27(1-2), PP.42-60
- Bronk Ramsey, C. 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51(1), PP.337-360
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. 2013. IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50.000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), PP.1869-1887

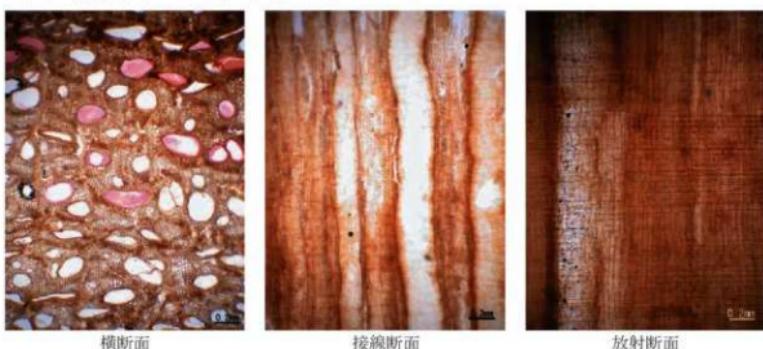
クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. : 試料No.W12(W18030702)



トネリコ属 *Fraxinus* sp. : 試料No.W14(W18030703)



トネリコ属類似 cf. *Fraxinus* sp. : 試料No.W36(W18030707)



第87図 樹種写真



ノイバラ節：偽果



ノイバラ節：偽果



アカガシ亜属：果実



ノイバラ節：そう果



コナラ属：果実



コナラ属：果実



オニグルミ：内果皮



オニグルミ：内果皮

背景方眼紙 | マス 1mm

第 88 図 種実写真

第3節 京田遺跡4区出土土器の胎土分析

1 はじめに

本報告は、文化財調査コンサルタント株式会社が出雲市からの委託を受け、土器胎土を用いた、土器産地推定の基礎資料とするために、京田遺跡4区（4-1区）出土の土器胎土中に含まれる砂粒の分析（鉱物同定）を実施した。ここではその成果を報告する。

2 分析試料と分析方法

出雲市（市民文化部文化財課）によって採取・保管されていた中から、分析試料の提供を受けた。試料の詳細を、第16表に示す。

分析に際して、出土土器の胎土に含まれる砂粒（鉱物）について、実体顕微鏡下で観察・同定した。砂粒（鉱物）の同定に際して、形、色調、劈開の有無、変成度合いなどを主な観察項目とした。また、試料ごとに100個以上の砂粒（鉱物・岩片）を観察、同定した。

3 分析結果

（1）同定種類

第16表に示した7種類（石英・長石・黒雲母・ホルンブレンド・単斜輝石・斜方輝石・かんらん石）の鉱物と3種類の岩片が同定できた。以下に同定した砂粒（鉱物・岩片）の記載を行い、第89図に顕微鏡写真を示す。

- ① 石英：劈開のない無色鉱物である。
- ② 長石：劈開の発達した無色鉱物である。変質して白色を呈する鉱物もある。
- ③ 黒雲母：黒色を呈する六角形の薄い鉱物である。
- ④ ホルンブレンド（長柱状苦鉄鉱物）：黒色を呈する柱状の鉱物である。
- ⑤ 単斜輝石（粒状苦鉄鉱物）：黒色を呈する粒状の鉱物である。
- ⑥ 斜方輝石（淡色長柱状苦鉄鉱物）：淡緑褐色の苦鉄質の鉱物である。
- ⑦ かんらん石：淡黄緑色の鉱物である。
- ⑧ 細粒花崗岩片
- ⑨ 中性火山岩片
- ⑩ 中～塩基性火山岩片

（2）分析結果

第16表に同定結果を示す。

（3）砂粒（鉱物）組成の特徴

砂粒組成の特徴を明らかにするために、クラスター分析（第17表）を行うとともに、相関係数を算出した（第18表）。この結果、大別して3クラスター、細分して10クラスターに分類できた。

第16表 胎土分析結果一覽

分類 No.	測量No.	型式名など	型式説明	石墨	巣石	巣巣母	カルバナイト 鉱物質	鈷鉄 鉱物質	鈷鉄 鉱物質	鈷鉄 鉱物質	カルラン石 鉱物質	鶴川	計
H29-1	4050167	真形土墨	真日本	63	5	-	35	-	-	13	-	4	100
H29-2	19508	真形土墨	真日本	19	29	-	42	-	-	-	3	14	100
H30-1	19503	丸径岩山I 式鉱石	自燃	34	21	41	-	-	-	-	-	2	100
H30-2	19507	丸形土墨	自燃	57	28	6	-	-	-	-	-	9	100
H30-3	19505	小形土墨	自燃?	71	14	10	-	-	-	-	-	5	100
H30-4	19504	小形土墨	自燃?	60	15	6	-	-	-	-	-	19	100
H30-5	38025	丸山I 山墨3 剥離鉱	自燃	61	19	6	-	-	-	-	-	14	100
H30-6	35021	丸山I 山墨3 剥離鉱	自燃	56	22	12	-	-	-	-	-	10	100
H30-7	405054	一葉半式鉱石	自燃	74	14	4	-	-	-	-	-	8	100
H30-8	405018	一葉半式鉱石	自燃	40	33	9	-	-	-	-	-	9	100
H30-9	4050124	丸山吉川I 式鉱石	自燃	34	8	5	-	-	-	-	-	3	100
H30-10	395048	丸山吉川I 式鉱石	自燃	76	10	3	-	-	-	-	-	37	100
H30-11	455048	丸山吉川I 式鉱石	自燃	44	46	9	-	-	-	-	-	2	100
H30-12	12300	丸山吉川I 土墨土墨	自燃	72	7	7	-	-	-	-	-	14	100
H30-13	23200	丸山吉川I 式鉱石	自燃	69	7	21	-	-	-	-	-	3	100
H30-14	232001	丸山吉川I 式鉱石	自燃	31	47	7	-	-	-	-	-	15	100
H30-15	35018	丸山吉川I 式鉱石	自燃	68	7	22	-	-	-	-	-	3	100
H30-16	4600164	健利利式鉱石	自燃	69	7	17	-	-	-	-	-	7	100
H30-17	4600166	圓形土墨	真日本	31	45	8	9	-	-	-	-	6	100
H30-18	4400131	小形丸墨式	丸形	34	36	-	-	13	-	-	-	19	100
H30-19	420092	北山式鉱石	丸形	56	26	6	-	-	-	-	-	12	100
H30-20	420093	西式(濃部)	丸形	5	33	5	14	-	-	-	-	3	100
H30-21	西式(濃部)	丸形	3	69	-	14	-	-	-	-	-	14	100

第17表 試料間の相関係数

H30-1～10, 12, 13, 15, 16のクラスターは、主に「在地」とされた土器群で、石英、長石、黒雲母で構成された。また、それぞれの組成によって細分できた。

H30-11_14_17_18_20_21のクラスターは「九州」「関東」「東日本」とされた土器をまとめて

した土器群で、ホルンブレンド、單斜輝石を含む。

あるいはこれらの鉱物を含まないものの、石英、長石、黒雲母の比率が近いものからなる。

単独の試料でクラスターを成した H29-2 は「東日本」とされた異形土器で、ホルンブレンドが多く、かんらん石も含まれるなど、他の試料と全く異質なものであった。

細分した 10 クラスターの特徴を、以下に示す。

① 試料 No.H30-1

ほぼ等量の石英、長石、黒雲母で構成され、岩片はごく僅か。

② 試料 No.H30-2,5,6,8,19

石英、長石、黒雲母で構成されるが、石英の割合が高く、黒雲母は僅かだが、岩片より高率。

③ 試料 No.H30-4,10,12

石英、長石、黒雲母で構成されるが、石英の割合が高く、黒雲母は僅かで、岩片より低率。

④ 試料 No.H30-3,7,9

石英、長石、黒雲母で構成されるが、石英の割合が特に高い。長石と黒雲母はほぼ等量で僅か。岩片は長石、黒雲母と同程度か低率。

⑤ 試料 No.H30-13,15,16

石英、長石、黒雲母で構成されるが、石英の割合が特に高い。長石と黒雲母はほぼ等量で僅か。岩片は長石、黒雲母と同程度か低率。

⑥ 試料 No.H29-1

石英、長石、ホルンブレンド、斜方輝石で構成される。石英の割合が特に高く、ホルンブレンド、斜方輝石はほぼ等量で、長石、岩片は低率。

⑦ 試料 No.H30-11,14,17

主として石英、長石、黒雲母で構成されるが、試料によってホルンブレンドが含まれる。石英、長石の割合が高く、黒雲母、ホルンブレンドは低率。

⑧ 試料 No.H30-20,21

主として長石、ホルンブレンドで構成され、石英は低率。また、試料によって黒雲母が含まれる。

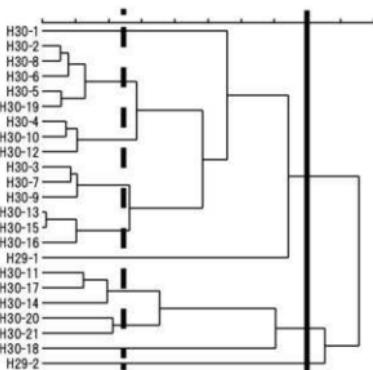
⑨ 試料 No.H30-18

主として石英、長石、單斜輝石で構成される。石英、長石の割合は高く、ほぼ等量。單斜輝石は、

第18表 クラスター分析結果

ステップ	平方距離	距離	融合クラスター
1	0.01336	0.1156	H30-13 H30-15
2	0.30299	0.55045	H30-2 H30-8
3	0.32553	0.57056	H30-5 H30-19
4	0.51788	0.71964	H30-4 H30-10
5	0.63879	0.79925	H30-2 H30-6
6	0.73961	0.86001	H30-3 H30-7
7	1.05136	1.02536	H30-13 H30-16
8	1.08614	1.04218	H30-4 H30-12
9	1.12956	1.06281	H30-3 H30-9
10	1.56566	1.25126	H30-11 H30-17
11	1.648	1.28374	H30-2 H30-5
12	3.82275	1.95519	H30-11 H30-14
13	4.56568	2.13675	H30-20 H30-21
14	6.99767	2.64531	H30-3 H30-13
15	8.08983	2.84426	H30-2 H30-4
16	12.4933	3.53459	H30-11 H30-20
17	23.3046	4.82748	H30-2 H30-3
18	31.1981	5.58552	H30-1 H30-2
19	49.6019	7.04286	H30-11 H30-18
20	54.9435	7.41239	H30-1 H29-1
21	72.8337	8.53427	H30-11 H29-2
22	91.13	9.54621	H30-1 H30-11

正規化されたデータが使用されました
アントワームは平方距離ではなくて、距離に基づいています



岩片より低率を示す。

⑩ 試料 No.H29-2

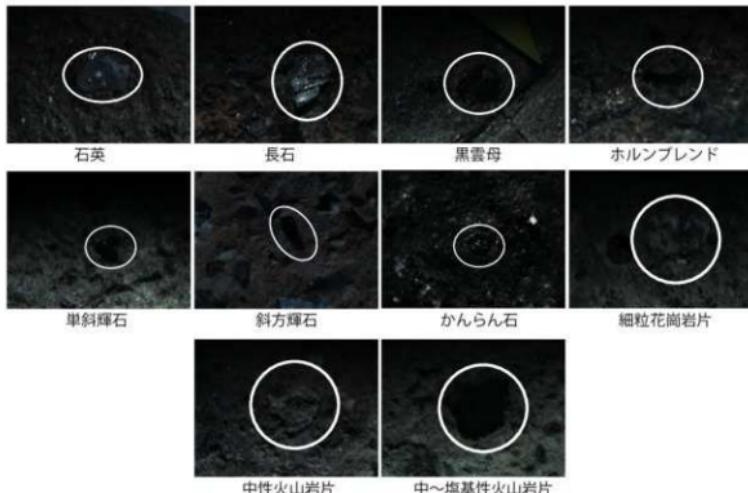
石英、長石、ホルンブレンド、かんらん石からなる。ホルンブレンドが高率で、石英、長石はほぼ等量で、やや高率。

4 まとめ

23試料の胎土分析を実施した。結果、大別して3クラスター、細分して10クラスターに分類できた。

今回の分析では土器に含まれる砂粒の種類と量比により、土器を幾つかのクラスターに分類することができた。また、各クラスターに含まれる土器の推定产地が集約する傾向にあることが分かった。このことから、この方法が产地同定に有効である可能性が示唆された。今後、試料を増やすことにより、有効性がより明確になるものと考えられる。ただし、現在の手法には限界があり、分析精度を上げるために薄片作成による顕微鏡観察、加えてEPMAなどによる元素分析を実施する必要がある。

(渡辺正巳)



第89図 鉱物写真

第4節 京田遺跡3・4区出土赤色顔料付着遺物の蛍光X線分析

1 はじめに

出雲市の京田遺跡(3・4区)からは赤色顔料の付着した縄文時代後期中葉を中心とする土器や磨石、赤色土壤が出土した。古墳時代以前の赤色顔料は、硫化第二水銀(HgS)を主成分とする鉱物の辰砂に由来する水銀朱(朱)、酸化第二鉄(Fe_2O_3)を多く含むとされるベンガラが知られている(市毛1988)。これらの遺物の性格を知る手がかりとして、4区(4-1区)では石器9点、土器18点、赤色土壤10点、木片に赤色物質が付着した試料1点の合計38点を蛍光X線分析法によって元素定性分析を実施した。なお、3区では島根県教育委員会による発掘調査報告書(守岡編2017)刊行後に新たに赤色顔料とみられる物質が付着した3点の土器が確認されたので、同様の方法で元素定性分析を行った。

2 分析の方法

分析方法は蛍光X線分析による元素定性分析である。使用機器は島根県古代文化センター所有、島根県埋蔵文化財調査センター設置の「エスアイアイ・ナノテクノロジー(現:日立ハイテクサイエンス)社製 SEA1200VX 卓上型ケイ光X線分析計(エネルギー分散型)」である。測定条件は、測定時間200秒(うち測定可能な有効時間は120~176秒)、試料室空開気は大気/真空、測定範囲は直径8.0mm、管電圧50kV(試料室空開気真空中には15kV)、管電流73~1000 μA (管電圧による自動設定)、X線管球はRh(ロジウム)、検出器はSi半導体検出器、一次フィルタとしてPbフィルタ(試料室空開気真空中にはClフィルタ)を設定し、装置の仕様上、マイラーカバーあるいはマイラーフィルムを使用している。

測定は土器と石器については、試料を肉眼、あるいは10~40倍の実体顕微鏡観察を行い、赤色顔料あるいは赤色物質の付着が顕著な部分と、比較対照試料として赤色顔料の付着が見られない箇所(土器の場合は土器破断面の胎土部分)で行った。また赤色土壤については、赤色を呈している土壤と、分離できる場合は比較対照試料として赤色を呈していない土壤をサンプリングして測定を行った。このうち水銀(Hg)と硫黄(S)を高く検出したものを水銀朱、鉄(Fe)を高く検出し、水銀と硫黄を検出しなかったものは、赤色を呈していない箇所とのスペクトルピークの比較や付着状況などの顕微鏡観察の結果をふまえてベンガラ(ここでは酸化鉄を多く含む「広義のベンガラ」(市毛1988))であると判断した。

3 結果

測定を行なった試料とその結果を第19表(4区)、第20表⁽¹⁾(3区)と蛍光X線分析スペクトルピーク(以下、ピーク)に示す(第90~96図)。

4区の試料では、水銀朱が付着しているとみられる試料は測定No.2, 6, 7, 16, 17, 18, 20, 21, 38であり、このうちNo.6, 17, 20, 21は同一個体である(第97図)。これらの試料ではFe(鉄)

のピークも検出しているが、胎土部分からも Fe の高いピークが検出されているので、胎土に由来、もしくは埋蔵環境下における鉄分の二次的な付着によるものとみられるが、ベンガラが付着している可能性も考えられる。同一個体である No. 6, 7, 17, 20, 21 は水銀朱が厚い塗膜状を呈しており、水銀朱とベンガラが塗布された可能性もあるが今回の分析では断定できない。一方 Fe を検出した試料のうち、ベンガラが付着していたとみられる試料は測定 No. 24, 28, 32 である。これらの試料は顕微鏡観察（40 倍）の結果、ならびに赤色顔料が付着していない箇所の測定結果との比較から推測した。測定 No. 9, 29, 36 は全体が赤色をした土の塊であり、Fe の高いピークを検出した。測定 No. 3, 4, 5, 8, 10, 11, 13, 19 は赤色土壤のサンプルであり、全ての試料から Fe の高いピークを検出した。これらの試料についてはベンガラの原材料とみられるが、今回の分析方法では断定できない。

上記以外の試料では赤色顔料や赤色物質が付着しているとみられる箇所の顕微鏡観察を行ったが、赤色顔料の付着は確認されず、蛍光 X 線分析においては Fe のピークを検出したが、赤色顔料に由来するものではなく石材や土器胎土に含まれる鉄分の発色あるいは埋蔵環境下における鉄分の二次付着であると推測される。

3 区の試料では、42 図 11 が土器内面において Hg と S のピークを示した。したがって、水銀朱の付着が推測される。Fe のピークも検出しているが胎土部分からも Fe の高いピークが検出されており、この Fe は胎土に由来、もしくは埋蔵環境下における鉄分の二次的な付着、またはベンガラが付着している可能性が考えられる。41 図 10 は外面に赤彩が確認され Fe の高いピークを示しており、胎土部分のピークとの比較と顕微鏡観察の結果から、ベンガラが塗布されていると推測される。39 図 1 は外面の赤く発色している箇所を測定し、Fe の高いピークを示したが観察の結果などから赤色顔料の付着であるとは言い難い。胎土中の鉄分が発色したものであると推測される。 （上山晶子）

註

(1) 第 20 表の挿図番号は 3 区の発掘調査報告書（守岡編 2017）と対応する。

参考文献

市毛 熟 1998 『新版 朱の考古学』 雄山閣

守岡正司編 2017 『の子谷横穴墓群 京田遺跡 3 区』一般国道 9 号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財

発掘調査報告書 3 島根県教育委員会

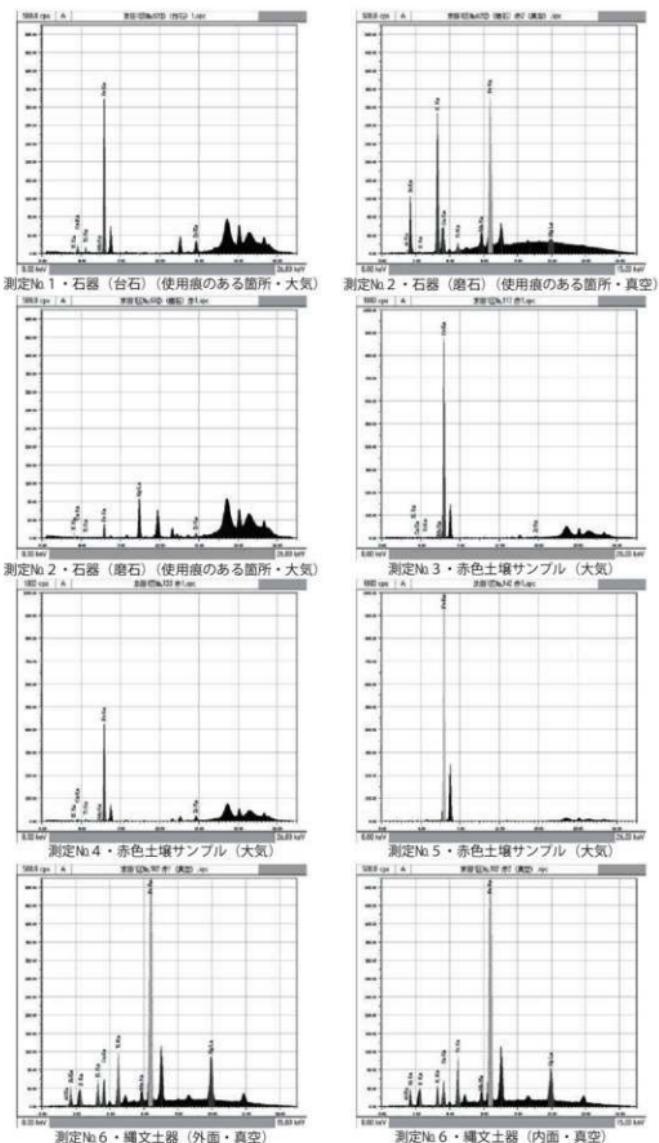
第 19 表 4 – 1 区赤色顔料付着遺物の蛍光 X 線分析結果

測定No.	挿図No.	種別	器種	測定箇所	検出元素			推測される顔料の種類	備考
					Hg	S	Fe		
1	58 図 16	石器	台石	使用痕のある箇所	-	-	++	-	Fe のスペクトルピークを高く示すが、40 倍での観察の結果、赤色顔料の付着は推測できない
2	58 図 13	石器	磨石	使用痕のある箇所 使用痕以外の箇所	+++	+	+	水銀朱	
3	-	土壤サンプル（赤色）		赤色部分 土壤部分	-	-	++++	-	Fe のスペクトルピークを高く示す
							++	-	

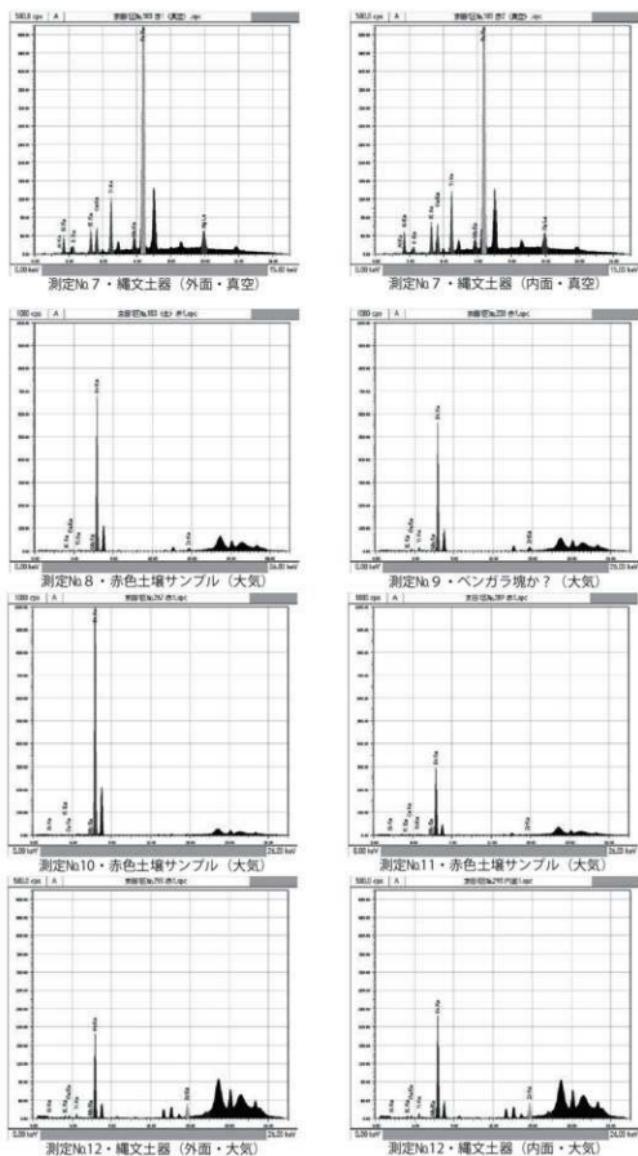
測定No	検出No	種別	器種	測定箇所	検出元素			推測される顔料の種類	備考	
					Hg	S	Fe			
4	—	土壤サンプル(赤色)		赤色部分	—	—	+++	—	Feのスペクトルピークを高く示す	
				土壤部分	—	+	++	—		
5	—	土壤サンプル(赤色)		赤色部分	—	—	+++	—	Feのスペクトルピークを高く示す	
				土壤部分	—	—	++	—		
6	19回6C	縄文土器	異形土器	外面	+++	++	++	水銀朱		
				内面	++	++	++	水銀朱		
				胎土	+	—	+++	—		
7	46回166	縄文土器	異形土器	外面	+++	++	++	水銀朱		
				内面	++	++	++	水銀朱		
				胎土	+	—	+++	—		
8	—	土壤サンプル(赤色)		赤色部分	—	—	+++	—	Feのスペクトルピークを高く示す	
				土壤部分	—	—	++	—		
9	—	土?	ベンガラ塊か	赤色土壤	—	—	+++	—	Feのスペクトルピークを高く示す	
10	—	土壤サンプル(赤色)		赤色部分	—	—	+++	—	Feのスペクトルピークを高く示す	
		土壤部分		—	—	++	—			
11	—	土壤サンプル(赤色)		赤色部分	—	—	+++	—	Feのスペクトルピークを高く示す	
		土壤部分		—	—	++	—			
12	35回27	縄文土器	鉢	外面	—	—	++	—	Feのスペクトルピークを高く示すが、40倍での観察の結果、赤色顔料の可能性は低い	
				内面	—	—	++	—		
				胎土	—	—	++	—		
13	—	土壤サンプル(赤色)		赤色部分	—	—	+++	—	Feのスペクトルピークを高く示す	
		土壤部分		—	—	++	—			
14	—	石	—	赤色部分	—	—	+++	—	Feのスペクトルピークを高く示す	
				赤色以外の部分	—	—	++	—		
15	66回76	石器	石製品	使用痕のある箇所	—	—	++	—	Feのスペクトルピークを高く示すが、40倍での観察の結果、赤色顔料の付着は認定できない	
16	49回12	縄文土器	深鉢	外面	×	×	×	—	土器外面の赤色顔料は確認できない	
				内面	++	+	+++	水銀朱		
				胎土	—	—	+++	—		
17	19回6D	縄文土器	異形土器	外面	+++	++	++	水銀朱	土器内面の赤色顔料は確認できない	
				内面	×	×	×	—		
				胎土	—	—	++	—		
18	14回25	縄文土器	深鉢or鉢	外面	×	×	×	—	土器外側の赤色顔料は確認できない	
				内面	++	+	+++	水銀朱		
				胎土	+	—	++	—		
19	—	土壤サンプル(赤色) (木材に赤色物質付着)		赤色部分	—	—	+++	—	Feのスペクトルピークを高く示す	
		土壤部分		—	—	++	—			
20	19回6B	縄文土器	異形土器	外面	+++	++	++	水銀朱		
				内面	+++	++	++	水銀朱		
				胎土	+	—	+++	—		
21	19回6A	縄文土器	異形土器	外面	+++	+	++	水銀朱	土器内面の赤色顔料は確認できない	
				内面	×	×	×	—		
				胎土	+	—	+++	—		
22	22回6	縄文土器	鉢	外面	—	—	+++	—	Feのスペクトルピークを高く示すが、40倍での観察の結果、赤色顔料の付着は認定できない	
				内面	—	—	+++	—		
				胎土	—	—	++	—		

測定No	検出箇所	種別	器種	測定箇所	検出元素			推測される顔料の種類	備考	
					Hg	S	Fe			
23	35図4	縄文土器	深鉢	外面	×	×	×	-	Feのスペクトルピークを高く示すが、40倍での測定の結果、赤色顔料の付着は確認できない	
				内面	-	-	+++	-		
				胎土	-	-	+++	-		
24	49図13	縄文土器	深鉢	外面	-	-	+++	ベンガラ?	内面はFeのスペクトルピークを高く示すが、40倍での測定の結果、赤色顔料の付着は確認できない	
				内面	-	-	+++	-		
				胎土	-	-	+++	-		
25	-	石器	磨石	赤色部分	-	-	+++	-	Feのスペクトルピークを高く示すが、赤色顔料の付着は確認できず、石材に由来するものとみられる	
				赤色以外の部分	-	-	+++	-		
26	-	石器	敲石/磨石	赤色部分	-	-	+++	-	Feのスペクトルピークを高く示すが、赤色顔料の付着は確認できず、石材に由来するものとみられる	
				赤色以外の部分	-	-	+++	-		
27	39図30	縄文土器	深鉢	外面	-	-	+++	-	Feのスペクトルピークを高く示すが、40倍での測定の結果、赤色顔料の付着は確認できない	
				内面	×	×	×	-		
				胎土	-	-	+++	-		
28	58図12	石器	敲石/磨石	赤色部分	-	+	+++	ベンガラ?		
				赤色以外の部分	-	+	+++	-		
29	-	土壤サンプル(赤色)		赤色部分	-	+	+++	-	Feのスペクトルピークを高く示す	
30	35図23	縄文土器	深鉢	外面	-	-	++	-	Feのスペクトルピークを高く示すが、40倍での測定の結果、赤色顔料の付着は確認できない	
				内面	×	×	×	-		
				胎土	-	-	++	-		
31	-	縄文土器	深鉢	外面	×	×	×	-	外面に赤色顔料の付着は確認できない。内面にみられる赤色斑は人為的に擦れたものではない。胎土に含まれる部分が発色したものとみられる	
				内面	-	-	+++	-		
				胎土	-	-	++	-		
32	38図11	縄文土器	深鉢	外面	-	-	++	ベンガラ?	内面に赤色顔料の付着は確認できない	
				内面	×	×	×	-		
				胎土	-	-	++	-		
33	39図49	縄文土器	深鉢	外面	×	×	×	-	外面に赤色顔料の付着は確認できない。内面はFeのスペクトルピークを高く示すが、40倍での測定の結果、赤色顔料の付着は確認できない	
				内面	-	-	++	-		
				胎土	-	-	++	-		
34	-	縄文土器	鉢	外面	-	-	++	-	内面なども赤色顔料の付着は確認されない。胎土中の鉄分が発色したものとみられる	
				内面	-	-	++	-		
				胎土	-	-	++	-		
35	32図38	石器	敲石	赤色部分	-	-	++	-	Feのスペクトルピークを高く示すが、赤色顔料の付着は確認できず、石材に由来するものとみられる	
				赤色以外の部分	-	-	++	-		
36	-	土壤サンプル(赤色)		赤色部分	-	-	+++	-	Feのスペクトルピークを高く示す	
				赤色以外の部分	-	-	+++	-		
				胎土	-	-	+++	-		
37	63図55	石器	敲石/磨石	赤色部分	-	-	++	-	Feのスペクトルピークを高く示すが、赤色顔料の付着は確認できず、石材に由来するものとみられる	
				赤色以外の部分	-	-	++	-		
				胎土	-	-	++	-		
38	19図10	縄文土器	深鉢	外面	×	×	×	-	土器外面の赤色顔料は確認できない	
				内面	+++	++	++	-		
				胎土	-	-	++	-		

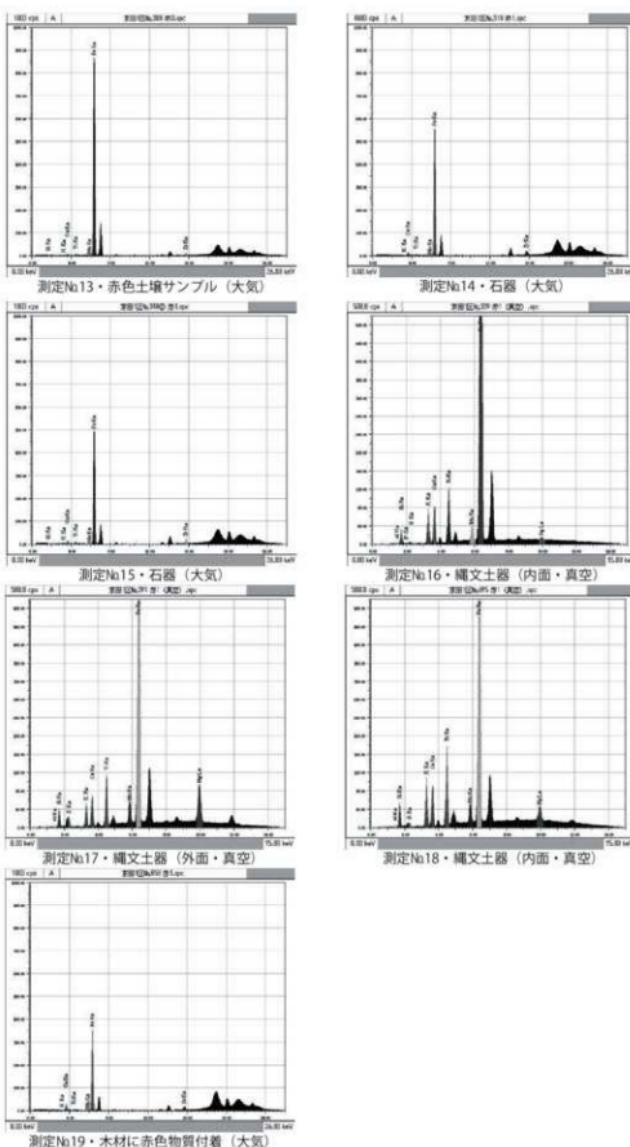
検出元素凡例: ++スペクトルピークを高く検出 / + 検出 / - 検出せず / × 検定せず (赤色なし・試料形状により検定不可)



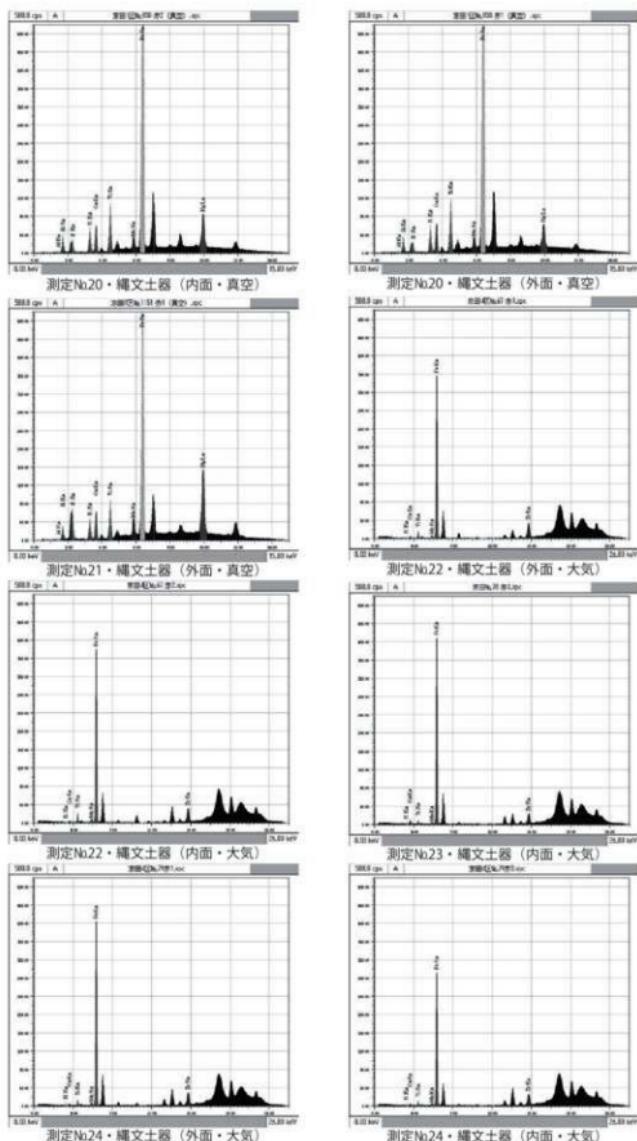
第90図 4-1区蛍光X線分析スペクトル（1）



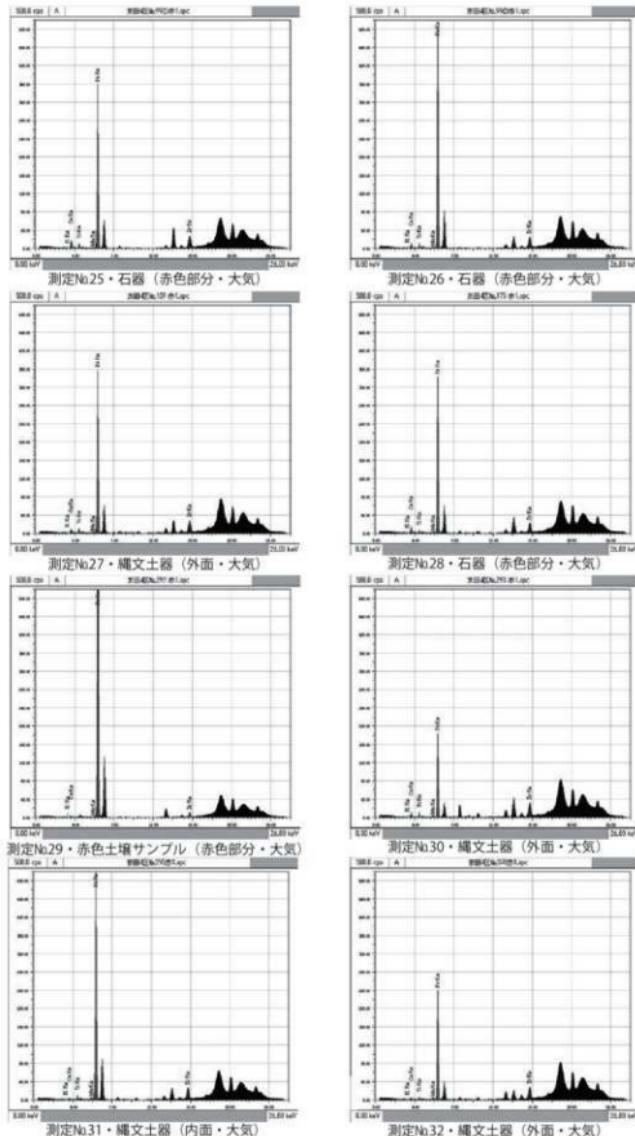
第91図 4-1区蛍光X線分析スペクトル(2)



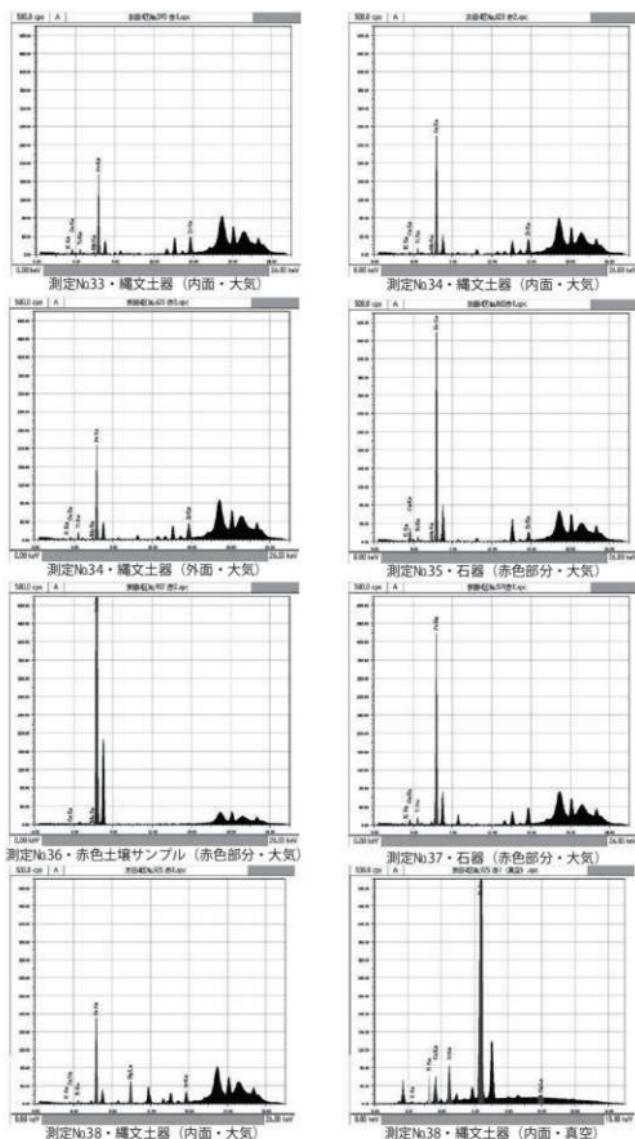
第92図 4-1区蛍光X線分析スペクトル(3)



第93図 4-1区蛍光X線分析スペクトル(4)



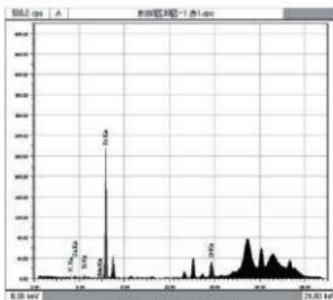
第94図 4-1区蛍光X線分析スペクトル(5)



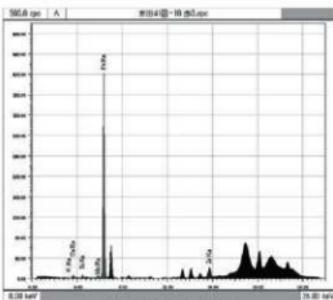
第95図 4-1区蛍光X線分析スペクトル(6)

第20表 3区赤色顔料付着遺物の蛍光X線分析結果

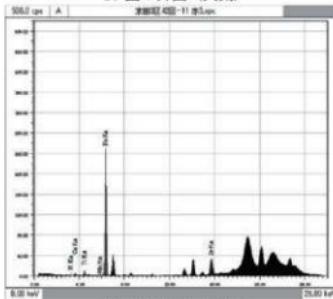
持因No.	種別	器種	測定箇所	検出元素			推測される顔料の種類	備考
				Hg	S	Fe		
39図1	縄文土器	杯	外面	-	-	++	-	内面の赤色顔料は確認できない。外面のFeは胎土中の鉄分が発色したものとみられる。
			内面	×	×	×	-	
			胎土	-	-	++	-	
41図10	縄文土器	深鉢	外面	-	-	++	ベンガラ	内面は試料形状により、測定できず。赤色顔料は確認できない。
			内面	×	×	×	-	
			胎土	-	-	*	-	
42図11	縄文土器	深鉢	外面	-	-	++	-	水銀朱
			内面	+	+	++	-	
			胎土	-	-	*	-	



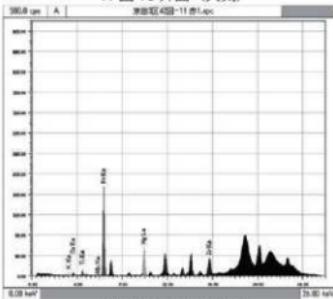
39図1 外面（大気）



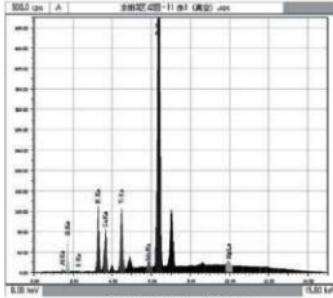
41図10 外面（大気）



42図11 外面（大気）



42図11 内面（大気）



42図11 内面（真空）

第96図 3区蛍光X線分析スペクトル



測定No.6 (19 図 6C)



測定No.7 (46 図 166)



測定No.20 (19 図 6B)



測定No.17 (19 図 6D)

測定No.21 (19 図 6A)

第 97 図 測定 No.6・7・17・20・21 の分析箇所

第5節 京田遺跡4区出土遺物付着水銀朱の硫黄同位体分析

1 概要

島根県出雲市湖陵町に位置する縄文時代後期の集落跡である京田遺跡から出土した遺物付着朱について硫黄同位体分析法により産地推定を行った。朱は土器と石器に付着しており、2点の異形土器付着朱（分析No.1・3）の硫黄同位体比はそれぞれ+12.0‰と+11.6‰、石器（磨石）付着朱（分析No.2）の硫黄同位体比は+11.3‰であった。また、無文深鉢口縁部内面付着朱（分析No.4）は+10.9‰であった。このことから今回測定した資料4点の朱は同じ産地であると推定する。日本には100箇所を超える辰砂（朱）鉱山が存在するが、その中で縄文時代に朱を採取していた可能性があるのは北海道、岐阜県、三重県、奈良県、徳島県の鉱山が考えられる。

そこで、それぞれの鉱山鉱石の硫黄同位体比と京田遺跡出土朱の硫黄同位体比を比較したところ、北海道余市郡の明治鉱山産の可能性が示唆された。以上により、京田遺跡から出土した朱は北海道産の可能性が高いと推定する。

2 はじめに

赤色顔料である朱（硫化水銀）は、縄文時代から現在に至るまで様々な場所で用いられている。その中で弥生時代後期から古墳時代に朱は、墳墓内の遺体や床に散布されたり、墳墓壁面に塗布されたり、あるいは衣服に塗り込められたりと、埋葬儀式の一部として用いられていた。この時代、10kgを超える多量の朱が1つの墳墓で用いられた例があることから、我々は為政者の権力の誇示に朱が用いられた可能性を指摘し、古代大和政権の権力拡大との関係を朱の産地推定から明らかにすることで試みている。一方、縄文時代には土器の彩色に朱が用いられていた時期がある。高温下にさらされると朱の構成成分である水銀が昇華するので赤色が消失してしまうため、朱は焼成後の土器の彩色に用いられる。朱で彩色された縄文土器の断片は全国各地で発掘されており、縄文時代には日本全国にわたる広い交流網が存在していたと思われる。そこで、土器に用いられた朱の硫黄同位体分析から朱の産地を調べることで、縄文時代の交流網の一端を明らかにすることを試みている。

硫黄は、質量数32, 33, 34, 36の4つの安定同位体が自然界に存在し、それらの存在割合は95.02%, 0.75%, 4.21%, 0.02%である。硫黄同位体分析はこの中の³²Sと³⁴Sの存在割合を調べる方法である。安定同位元素は放射性同位元素とは異なり、蒸発や拡散、pHの変化、酸化還元作用、生物への取り込みなどの因子が働くと、ごくわずかに³²Sと³⁴Sの存在割合が異なる同位体分別と呼ばれる現象が生じる。地球化学の分野では硫黄同位体比は鉱物に依存せず、地域に依存していることが知られており(Ishihara et al. 2000)、火山活動で生じる亜硫酸ガスは³²Sの硫黄を含みやすく、海水の中には³⁴Sの硫黄が多く含まれる。キャニオン・ディアプロ隕石の硫化鉄を標準物質とし、³²Sと³⁴Sの存在割合から、標準物質の同位体比(³⁴S/³²S)と試料の同位体比(³⁴S/³²S)を比較して、δ³⁴S(‰)で表す。標準物質より³⁴Sの硫黄に富む場合はプラスのδ値を示し、³²Sの硫黄に富む場合はマイナスのδ値

を示す。このように硫黄同位体分析法は鉱物などに含まれる硫黄化合物から硫黄成分を取り出し、 ^{32}S と ^{34}S の存在比を比較する方法であり、我々は中国と日本の主な辰砂鉱山で硫黄同位体比が著しく異なることを報告しており（南ほか 2004・2009）、これを元にして弥生時代から古墳時代の墳墓に用いられた朱の産地推定を実施し、中国産を用いた可能性が高い墳墓と国内産を用いた可能性が高い墳墓が存在していることを報告している（Minami et al.2005）。

さらに、全国各地に存在する縄文時代遺跡から採取された朱についても分析を行い、興味ある結果を得ている。加えてこの分析の過程で、微量の朱を分析する方法を開発した。従来は、約 10 mg 以上の朱でなければ硫黄同位体分析ができなかったが、この量では土器や壁面に用いられた朱を採取するときに傷をつける可能性が高く、分析資料に制限があった。そこで、超微量硫黄同位体分析方法の開発に取り組んでこれに成功し、現在では約 1 μg の朱で分析可能となっている（Takahashi et al.2018）。この量は、目に見える 1 粒の朱粒子で十分な量であり、被対象物を傷つけずに採取して分析可能である。

以上の超微量硫黄同位体分析法を開発し、縄文時代後期の京田遺跡より採取された朱について分析を行ったところ、その産地について興味ある結果が得られたので報告する。

3 分析対象物と方法

出雲市の協力で、縄文時代後期の京田遺跡から出土した 2 点の異形土器付着朱（分析 No. 1・3）と無文土器の深鉢口縁部内面付着朱（分析 No. 4），磨石付着朱（分析 No. 2）を採取し、硫黄同位体分析を行った（第 21 表・第 98 図）。分析 No. 1 の異形土器と分析 No. 4 の無文土器深鉢口縁部は、配石土坑内より出土している。分析 No. 2 の磨石と分析 No. 3 の異形土器は包含層出土である。なお、分析 No. 1 の異形土器は配石土坑 ST1601 内と包含層出土の破片が接合した個体の一部で、第 3 章第 3 節の報告にあるように、東日本にみられる異形土器や注口土器などの影響を受けた可能性を考える。

第 21 表 分析対象の出土遺物付着朱一覧

分析 No.	種別	器種	出土場所		備考
			遺構	層	
1	土器	異形土器	配石土坑 ST1601	2 層（底面付近）	第 19 図 6
2	石器	磨石	-	12 層（包含層）	第 58 図 13
3	土器	異形土器	-	12 層（包含層）	第 46 図 166
4	土器	無文深鉢	配石土坑 ST1601	1 層	第 19 図 10



第 98 図 出土遺物の朱採取部分（分析 No. 1～4）

られる。

朱の採取方法は以下のとおりである。すなわち、粘着剤に硫黄成分が含まれていないポリエチル粘着テープ（No.31B、日東電工（株）、大阪）を用い、対象物の朱が付着している箇所にテープを軽く押し当て、朱を採取した。図1に朱を採取した石器と土器片を示す。朱を採取したテープより朱部分を切り取り、アルミニウム製カップに入れ、元素分析装置（vario ISOTOPeCube、ジャスコインターナショナル（株）、東京）に導入して亜硫酸ガスを発生させ、微量ガス濃縮装置で亜硫酸ガスを濃縮したのち、安定同位体分析用質量分析装置（IsoPrime100、ジャスコインターナショナル（株））で質量数32と34の硫黄を測定し、その存在割合を標準物質と比較した。

4 結果および考察

京田遺跡から出土した分析No.1の異形土器付着朱の硫黄同位体比は+12.0‰、分析No.2の磨石付着朱の硫黄同位体比は+11.3‰であり、分析No.3の異形土器付着朱は+11.6‰、分析No.4の無文深鉢口縁部内面付着朱は+10.9‰であった（表2）。このことから今回測定した4点の資料の朱は同じ産地である可能性が高いと推定する。

これまで、いくつかの縄文時代の遺跡出土朱について国内の辰砂鉱山鉱石の硫黄同位体比（南ほか2008）と比較し、いくつかの遺跡出土朱の産地について発表している。北海道美々遺跡出土朱は+3.79‰のδ値を示して日高・道南地方より採取された辰砂を用いた可能性が高いと推察した（南ほか2005）。青森県は川中居遺跡から出土した籠胎漆器片（大）のδ³⁴S値は+2.61‰、籠胎漆器片（小）のδ³⁴S値は+7.46‰、腕輪片のδ³⁴S値は+4.61‰となり、北海道日高地方を含む道央地区からもたらされた可能性が高いと考えている（河野ほか2014）。また、岐阜県奥塙山遺跡出土朱は+6.73‰となり、近在の岐阜県徳山鉱山鉱石が+4.38‰を示したことから徳山鉱山産と推測した。同様に、三重県の縄文時代の遺跡（下川原遺跡、新徳寺遺跡、森添遺跡、池ノ谷遺跡）出土朱はいずれも三重県丹生鉱山産鉱石由来と考えている（南2011）。

今回、京田遺跡出土朱について大きくプラスのδ値が示されたことと、異形土器の考古学的検討によって東日本との交流の可能性が示唆される。先に述べたように東北地方では朱で彩色された縄文土器片が出土しており、その朱は北海道からもたらされた可能性が高い。このことから、京田遺跡出土朱についても北海道の辰砂鉱山鉱石の可能性を考えた。その結果、北海道の辰砂鉱山鉱石の硫黄同位体分析結果から考察し、北海道余市郡の明治鉱山（+8.42‰）産鉱石由来の可能性が高いと推察する。また、異形土器のほかに磨石や無文深鉢でも同様の朱が検出されたため、朱自体が京田遺跡にもたらされた可能性も考えられる。今後、これらの点も解明されることを期待する。

第22表 硫黄同位体分析結果一覧

分析No.	種別	器種	硫黄同位体比
1	土器	異形土器	+12.0‰
2	石器	磨石	+11.3‰
3	土器	異形土器	+11.6‰
4	土器	無文深鉢	+10.9‰

（南 武志、高橋和也）

謝辞

本研究はJSPS科研費26242016の助成を受けたものです。また、本研究にあたり硫黄を含まないポリエステル粘着テープをご教示くださいました(㈱)ニトムズ 寺田愛氏に深謝いたします。

参考文献

- 河野摩耶・南 武志・根岸 洋・市川健夫 2014「是川遺跡・風張遺跡出土の土器付着赤色顔料の成分分析と同位体分析」『八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館研究紀要』第3号 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 10～17頁
- 南 武志 2011「三重県の縄文遺跡より出土した朱の産地同定の試み」「森派遺跡」度会町文化財調査報告6 度会町教育委員会 51～56頁
- 南 武志・今井 亮・豊 遙秋・富田克敏・比佐陽一郎・岡山真知子・楊 主明・今津節生 2004「中国貴州省と湖南省辰砂鉱石のイオウ同位体比測定」『考古学と自然科学』第46号 日本文部科学省 67～74頁
- 南 武志・豊 遙秋・田口 崑・小林幸雄・今津節生 2005「北海道産朱鉱石のイオウ同位体比分布と遺跡朱について」『日本文化財科学会第22回大会要旨集』日本文化財科学会 26～27頁
- 南 武志・豊 遙秋・今津節生 2008「日本における辰砂鉱山鉱石のイオウ同位体比分析」『近畿大学理工学総合研究所 研究報告』第20号 近畿大学理工学総合研究所 41～48頁
- 南 武志・楊 主明・豊 遙秋・島崎英彦 2009「中国における辰砂が産出された古代鉱山の探索」『考古学と自然科学』第58号 日本文部科学省 25～29頁
- Ishihara, S., Sasaki, A., Minagawa, T., Bunno, M., Shishido, A. and Tanaka, R. 2000. Paired Sulfur Isotope Belts : Late Cenozoic Ore Deposits of Southwest Japan. *Bulletin of the Geological Survey of Japan*, vol.51(7), pp.283-297.
- Minami, T., Imai, A., Bunno, M., Kawakami, K., Imazu, S. 2005. Using sulfur isotopes to determine the sources of vermillion in ancient burial mounds in Japan, *Geoarchaeology*, vol.20(1), pp.79-84.
- Takahashi, K., Nakai, Y., Motizuki, Y., et al. 2018. High - sensitivity sulfur isotopic measurements for Antarctic ice core analyses, *Rapid Communications in Mass Spectrometry*, vol.32 (23) , pp.1996-1998.

第6節 京田遺跡4区出土縄文土器の種実圧痕調査

1 はじめに

縄文時代後期中葉における植物利用に関する情報を得るために、京田遺跡4区（4-1区）から出土した土器の種実圧痕をレプリカ法で調査した。レプリカ法では土器の圧痕に印象材（シリコン樹脂）を充填して作成した原体のレプリカを走査型電子顕微鏡（SEM）で観察し、原体を同定する（丑野・田川1991）。また圧痕の原体には土器の型式に基づく考古学的年代が与えられる。

2 調査の対象と方法

調査の対象は発掘調査で出土した縄文時代後期中葉の土器群である。悉皆的に圧痕の有無を確認して選び出した15点の土器片から、16個の圧痕原体のレプリカを作成した（第23表）。土器片の表裏面と断面を観察し、肉眼及び実体顕微鏡で圧痕内部の形状を確認したが、種実を原体とする圧痕を伴う土器は極めて少なかった。レプリカ作製時には、土器に付された遺物番号順に資料番号を設定し、同一個体中に複数の圧痕がある場合は、資料番号の後ろに丸で囲った数字を付した。また、圧痕原体のレプリカは、以下の手順・方法により作成した。

- ① 圧痕内の汚れを小筆やエアースプレーを用いて除去し、印象材として使用するシリコン樹脂の油分が、土器の含浸するのを防ぐために、土器片を水に浸す。
- ② 印象材（株式会社ニッシン製J Mシリコン・レギュラータイプ）を充填後、印象材に熱湯を当て、シリコン樹脂の固化時間を短縮する。
- ③ 固化した印象材を抜き取り、実体顕微鏡で原体の復元状態を確認する。
- ④ 原体の形状や特徴が正確に復元できていない場合には、再度、レプリカを作成する。
- ⑤ 実体顕微鏡で観察した結果、種実の可能性があるレプリカをSEMで観察し、画像を撮影する。

第23表 レプリカ法調査対象試料と同定結果

資料番号	土器		圧痕		実体顕微鏡 観察所見	SEM 同定結果	報告書 神岡番号	遺物番号
	器種	残存部位	付着部位	付着面				
1	有文深鉢?	胴部	胴部	内面	確定ではない	-	35回16	60
2	粗製深鉢	胴部	胴部	内面	確定ではない	-	51回46	246
3	粗製深鉢	胴部	胴部	内面	確定ではない	-	-	260
4	粗製深鉢	胴部	胴部	内面	確定の可能性あり	櫛?	51回47	276
5	有文深鉢	胴部	胴部	内面	確定の可能性あり	不明(サクラ属に似る)	37回29	301
6	粗製深鉢	胴部	胴部	内面	確定ではない	-	-	317
7	粗製深鉢	胴部	胴部	外面	確定ではない	-	-	341
8	深鉢?	底部	底部	内面	確定ではない	-	-	342
9	粗製深鉢	胴部	胴部	外面	確定の可能性あり	不明	39回34	354
10	粗製深鉢	胴部	胴部	外面	確定ではない	-	-	366
11	粗製深鉢	胴部	胴部	内面	確定ではない	-	-	373
12	深鉢?	底部	底部	内面	確定ではない	-	-	395
13	粗製深鉢	胴部	胴部	内面	確定ではない	-	-	405
14	粗製深鉢	胴部	胴部	内面	確定の可能性あり	針葉樹(モミ?)の葉先?	31回30	494
15	粗製深鉢	胴部	胴部	内面	確定ではない	-	-	911

3 調査結果

SEMで観察、画像を撮影したのは、以下の4点である（第99図）。その他は実体顕微鏡による観察で種実ではないと判断した。

資料番号4（第99図写真-1） 粗製深鉢胴部片内面の圧痕原体から復元したレプリカである。不整な橢円形をしており、長さ約5mm、幅約4mmである。長軸方向に稜線が見える。表面に不規則な凹があり、形状に角張った部分もある。種実ではない。礫などの可能性がある。

資料番号5（第99図写真-2） 有文深鉢胴部片内面の圧痕から復元した原体のレプリカである。紡錘形をしている。半分を欠く。残存長は4.6mm、幅は3.4mmである。本来の長さは7mm以上ある。端部が尖り、側縁部に明瞭な稜線が観察できる。表面は滑らかである。種実の圧痕である。バラ科サ



1 資料番号4の圧痕



2 資料番号5の圧痕



3 資料番号9の圧痕



4 資料番号14の圧痕

第99図 4-1区出土縄文土器と圧痕

クラ属の種子に形状が似る。半分を欠くので、確定はできない。

資料番号9（第99図写真-3） 粗製深鉢胴部外面の圧痕から復元した原体のレプリカである。楕円形をしている。長さ4.5mm、幅3.2mm、表面は滑らかである。一見、マメ型をしているが、同定根拠となる臍が観察できない。種実とも判断しかねる。

資料番号14（第99図写真-4） 粗製深鉢胴部片内面にある圧痕から復元した原体のレプリカである。幅は2.2mm、欠損しており、全長は分からないが、端部から3.7mmが残存している。長軸中央に明瞭な溝があり、丸みのある端部がわずかに分かれているように見える。表面は平滑である。種実ではなく、針葉樹のマツ科モミ属の葉の先端部と考えられる。

4 おわりに

日本列島各地で行われている縄文土器の圧痕調査では、ダイズ属、ササゲ属アズキ亜属、シソ属、イネ、アワ、キビ、ニワトコ、サンショウ属など、食用できる種実圧痕が報告されている。京田遺跡4区出土の土器圧痕には上記の種実圧痕は確認できなかったが、資料番号5にサクラ属の種子に形状が似る種実圧痕があった。中国地方の縄文時代遺跡にもサクラ属の出土事例がある。縄文時代後期中葉の事例では、津島岡大遺跡（大学院自然科学研究科棟新営予定地）で検出された貯蔵穴6出土種実の中にサクラ属の種子がある。ただし、他の種実に比べて、サクラ属は出土頻度が低いので、「食用されたとは考えにくい木本類」に分類されている（沖・山本1994）。サクラ属の果実は熟すと甘みが増すものもあり、食用に利用された可能性もあるが、現状では過大な評価はできない。また資料番号14に確認した圧痕は、遺跡周辺にモミ属が生育していたことを示唆している。

縄文土器の種実圧痕では、近年、マメ類やシソ属（シソやエゴマ）の圧痕が注目されている。縄文時代中期段階で高い検出率を示す遺跡や、種子の大型化が指摘されており、それらが栽培されていた可能性が高まっている（中山2018）。中国地方の山陽側では岡山県津島岡大遺跡（大学院自然科学研究科棟新営予定地）で検出された縄文時代後期中葉の土坑1・2・4から「アズキ類」の種子が出土しており、「偶然に混入したものとは考え難く」、「栽培植物とみなされる」と報告されている（沖・山本1994）。その後、レプリカ法により津島岡大遺跡から出土した後期中葉の土器片にアズキ属の圧痕が確認され（山本2012）、その見通しは確実性を高めている。山陰では鳥取県鳥取市桂見遺跡で縄文時代中期後葉から後期前葉の土器を伴う泥炭層から炭化した「リヨクトウ類似のマメ」が多数出土している（粉川1978）。リヨクトウが日本に伝わったのは古代以降のことと考えられており、縄文時代のマメならば、リヨクトウと同じササゲ属のアズキ亜属に分類されよう。報告では「後世のものの混入の可能性」も検討が必要とされているので、放射性炭素年代測定による年代の検証、さらには土器圧痕による同種圧痕の検出が望まれる。まだ中国地方には十分な事例がないが、今後、縄文時代のシソやエゴマのあり方に留意したい。

弥生時代に主要作物となるイネ科穀物類の種実圧痕には、縄文時代後期以前にさかのぼる土器圧痕は未見である。その存在が確実なのは縄文時代晩期後半であり、山陰、山陽では凸帶文土器の各型式にイネ、アワ、キビの種実圧痕が散見できる（中沢2014、瀬田2014、山口2014）。一方、1990年代

には、岡山県の真庭市姫笛原遺跡で中期、岡山市津島岡大遺跡、総社市窪木遺跡で後期の土器胎土中にイネのプラント・オパールが検出され（高橋 1997、藤原 1994・1995）、イネの栽培が後期以前にさかのぼる可能性が指摘されている。プラント・オパールが、土器の素材となる粘土に含まれていたとすれば、その採取地付近でイネが栽培されていたことの傍証となるが、プラント・オパールは極微小なので、焼成された土器に生じた隙間に入り込める。つまり、上層からの汚染のない環境から出土した土器でなければ、イネの存在を確実視できない。したがって、縄文時代晚期前半以前の土器群を対象とした種実圧痕の調査は、プラント・オパールの分析から提示された縄文時代後期以前のイネ栽培仮説を検証するために必要な作業である。

今後、山陰における縄文時代の植物利用を明らかにするためには、発掘調査中にも遺跡で植物遺体の検出や花粉やプラント・オパールなどの分析を積極的に行うことに加え、京田遺跡4区のように土器の整理作業中にレプリカ法による種実圧痕調査を積み重ねたい。

なお幡中光輔氏に貴重な調査の機会を与えていただいた。また、原体の同定について、佐々木由香氏の御助言を得た。記して感謝申し上げます。

（瀬田竜彦）

参考文献

- 丑野 毅・田川裕美 1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24 日本文化財科学会 13 ~ 36 頁
- 沖 陽子・山本悦世 1994「貯蔵穴出土の種子」『津島岡大遺跡4—第5次調査—』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 249 ~ 260 頁
- 粉川昭平 1978「植物遺体」『桂見遺跡発掘調査報告書』鳥取市教育委員会 62 ~ 72 頁
- 高橋 譲 1997「縄文時代中期稻作の探求」『堅田直先生古希記念論文集』堅田直先生古希記念論文集刊行会 1 ~ 21 頁
- 中沢道彦 2014「先史時代の初期農耕を考える—レプリカ法の実践から—」日本海学研究叢書
- 中山誠二 2018「植物栽培からみた日本列島の農耕起源—弥生型農耕の系譜—」『境界の考古学』日本考古学協会 2018 年度静岡大会研究発表資料 日本考古学協会 2018 年度静岡大会実行委員会 175 ~ 184 頁
- 瀬田竜彦 2014「山陰地方の凸帯文土器と縄文時代終末期の様相」『中四国地方における縄文時代後葉の歴史像』第 25 回中四国縄文研究会徳島大会 中四国縄文研究会 17 ~ 36 頁
- 藤原宏志 1994「津島岡大遺跡出土土器に関するプラント・オパール胎土分析」『津島岡大遺跡4—第5次調査—』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 236 ~ 242 頁
- 藤原宏志 1995「南溝手遺跡出土土器胎土のプラント・オパール分析結果について」『南溝手遺跡1』岡山県教育委員会 457 ~ 459 頁
- 山口雄治 2014「中部瀬戸内北岸地域における縄文時代晚期後葉」『中四国地方における縄文時代晚期後葉の歴史像』第 25 回中四国縄文研究会徳島大会 中四国縄文研究会 37 ~ 52 頁
- 山本悦世 2012「縄文時代後期～凸帯文期におけるマメ・イネの圧痕—圧痕レプリカ法による岡山県南部平野における調査事例から—」『紀要 2010』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 17 ~ 26 頁

第6章 総括

第1節 京田遺跡4区の遺物包含層の空間的・定量的分析

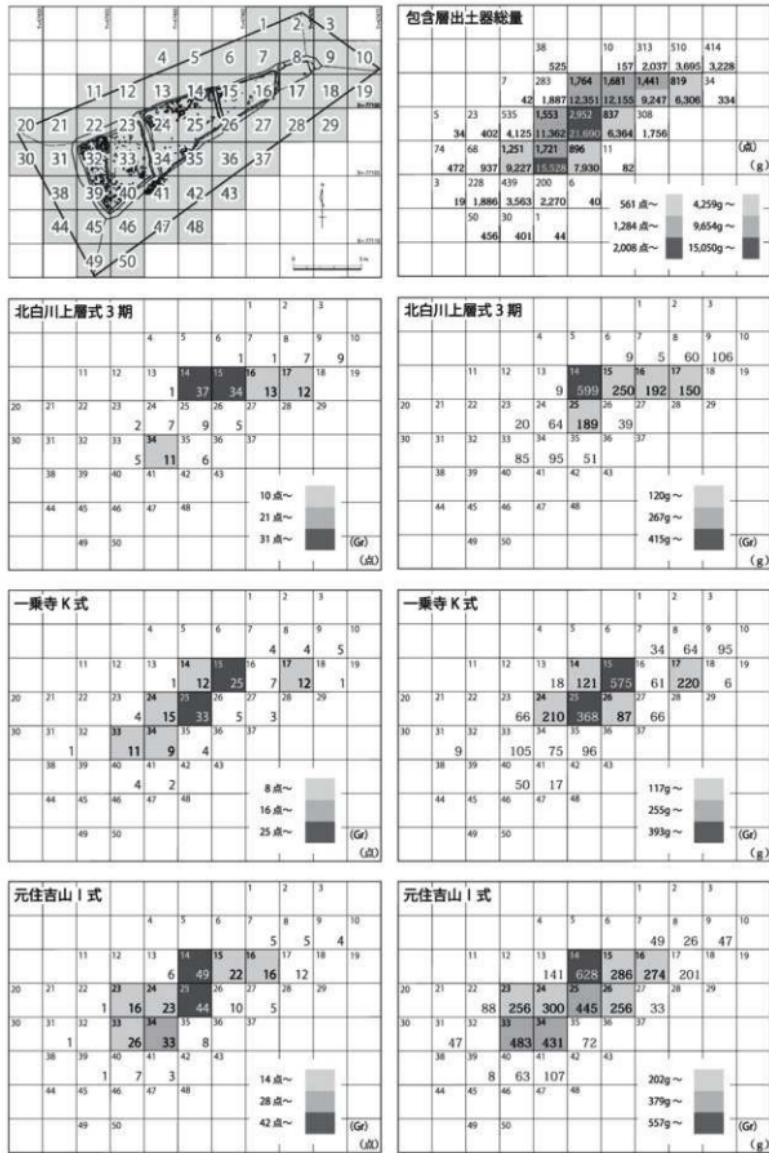
1 グリッド取り上げによる出土土器の空間的分析

京田遺跡4区（4-1区）から出土した縄文時代遺物の総量は、先に報告したように土器20,365点（150.762kg）、石器1,139点（151.457kg）であり、比較的狭い調査面積から多量の遺物が出土した。なかでも包含層の6・11・12層は、多量に出土した縄文土器の時期がほぼ後期中葉に限定され、調査区内で土器が集中する地点はこの時期の人々の活動が特に盛んであった場所を示すと考えられる。12層の出土遺物は原位置を保っていないが、遺構面直上に堆積し、その時期が後期後葉であることが分かっており（第5章第2節）、4-1区の遺構の時期と比較的近いため、原位置からそれほど移動していないと考えられる。また、配石土坑ST1601出土の異形土器片が、遺構付近の12層出土の破片と接合したことでもこれを支持する。6・11層は12層と関連した堆積層であり、含まれる遺物は12層と同様に原位置から大きく移動していないと推測される。なお12層に対応する県調査区3区の4層では、後期中葉でも北白川上層式3期の出土が多数を占め、4-1区で一乗寺K式と元住吉山I式期の土器が目立つ状況とは様相が異なっており、活動時期に地点差が生じている。

こうした前提をもとに、4-1区の出土土器の空間分布を時期別に検討し、3区や4-1区の遺構の性格を踏まえて京田遺跡の集落内の具体的な活動の一端を復元したい。なお、包含層出土の遺物は4-1区で設定した2.5m四方の調査グリッド（1~50グリッド）ごとに取り上げを行っている。この調査グリッドに基づき、包含層から出土した全ての土器のほか、北白川上層式3期、一乗寺K式期、元住吉山I式期の型式別にみた空間分布の偏りを確認するため、各時期におけるグリッド別の出土土器の点数と重量の平均値、および標準偏差をもとに分布が集中するグリッドを表示した（第100図）。

まず出土土器全体の空間分布を見ると、4-1区の調査区北側の遺構が確認された場所とその周辺で土器がまとまって出土する状況となっている。人々の営みのなかで残された遺構とともに、その活動に伴う土器が周辺に存在したことを反映すると考えられ、包含層出土土器が原位置から大きく動いていないことを示唆する。

次に型式別にみた空間分布を確認したい。北白川上層式3期には遺構と多くの遺物が3区で確認されており、この時期の活動範囲は3区付近を中心に関していたことが予想されるが、4-1区における北白川上層式3期の空間分布を見ると、3区からやや離れた4-1区北側の14グリッド付近にまとまる傾向を示している。14グリッドで確認した遺構の時期は一乗寺K式から元住吉山I式期であり、北白川上層式3期の遺構は確認されていない。これらの状況から、14グリッドに近接する調査区外北側にこの時期の遺構が別に存在し、そこで使用された土器が周辺にまとめていた可能性が考えられる。



第100図 4-1区グリッド別の出土土器の空間分布

一乗寺K式期の空間分布は、全体的に見ると北白川上層式3期と同様に調査区北側にまとまるが、グリッド別に詳しく見るとやや様相が異なる。この時期に營まれた竪穴建物跡SI1601のある14グリッドでは土器はそれほど多くはない一方で、隣接する15・25グリッドに最も集中する。グリッドに含まれる土層の体積自体の違いもあるようが、その点を勘案しても、14グリッドと15・25グリッドの出土量には差がある。これは竪穴建物跡SI1601のある14グリッドを中心に入々が活動し、居住域とその周辺に土器が残されてまとまっていたことを具体的に示すものと理解できるだろう。

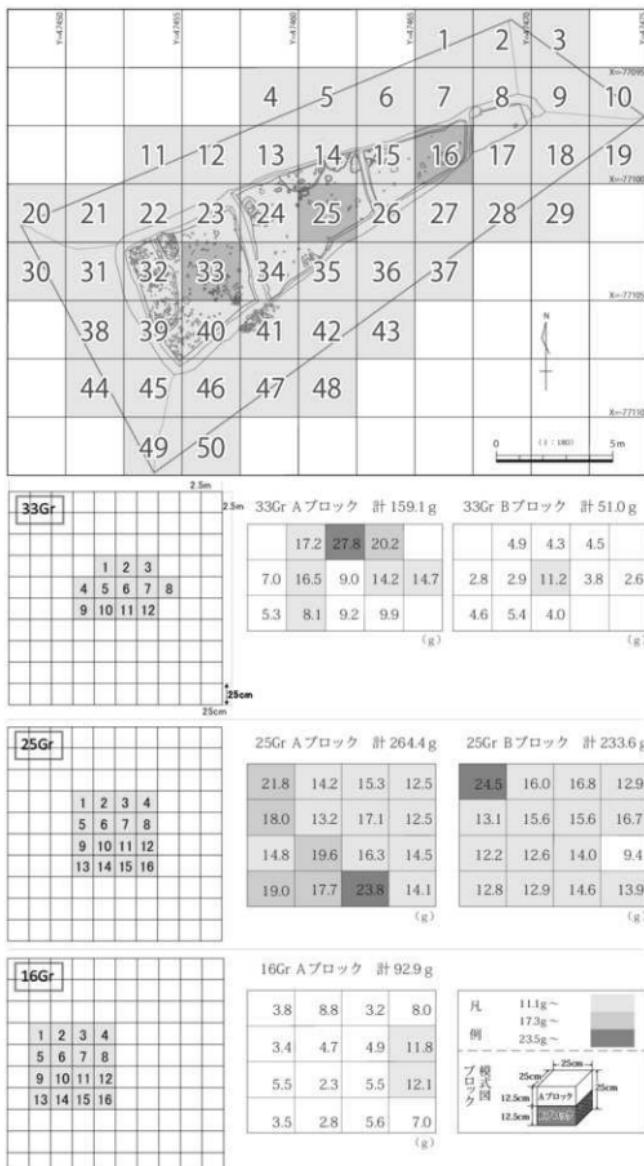
元住吉山I式期では14グリッドに分布が集中するほか、23・25グリッドや34グリッドでも土器がまとまっている点は注目される。これらに隣接する24グリッドには、異形土器片が出土した配石土坑が存在しており、その周辺に土器がまとまる状況を示している。なお、元住吉山I式期における縄文土器の器種組成では、非日常的な用途が想定される注口土器の割合が比較的高く、そのなかで最も多く出土したのが24グリッドに隣接する23グリッドである。そうした状況から見れば、この時期には配石土坑のある24グリッドを中心に葬送や祭祀の場として利用され、それに伴う土器が周辺にまとまっている様子を反映していると理解したい。

2 土壌ブロックサンプルによる動物遺存体の定量的分析

遺構内の埋土や遺構面上に堆積する12層には、土器や石器のほかに動物遺存体の小片がまばらに含まれていたことが注目される（詳細は第5章第1節を参照）。そこで、4-1区で設定した調査グリッドのうち、互いに等間隔に離れた3つの調査グリッド（16・25・33グリッド）を25cmメッシュの小区画で分割し、その中心付近の1～16区画（33グリッドは1～12区画まで）の12層の土壌を1辺25cmの立方体ブロックサンプルとして取り上げ、動物遺存体の含有量を計量した。16グリッドは層厚が12.5cm程度で1辺25cmブロックの上半部のみであったが、25・33グリッドは層厚が25cm程度と十分な量があったため、上半部の12.5cm幅の部分をAブロック、遺構面に近い下半部の12.5cm幅の部分をBブロックとして2分割で取り上げ、上下の堆積状況についても確認した。なお、取り上げた土壌サンプルは6・4・2mmメッシュの各フライを順に用いた水洗フライ選別法によって選別している。こうして出土量を小区画ごとに表示するとともに、その偏りをさらに明確にするために、区画別の出土量の平均値と標準偏差を算出し、出土量が集中する区画を図示した（第101図）。

まずは、25と33グリッドのA・Bブロックの比較から堆積状況について確認する。25グリッドでは33グリッドほどAブロックに偏っていないが、両グリッドとともにAブロックに集中している。つまり、12層のなかで遺構面に近いBブロックよりも上半部のAブロックに偏る傾向は、厳密には出土した動物遺存体の原位置が土壤ブロックサンプル採取場所ではないことを示している。しかし、土器の空間分布で検討したように、12層出土の遺物は原位置を保ってはいないものの大きさは動いてはおらず、動物遺存体についても確認された地点から比較的近い場所にあったと考えたい。

次に各グリッド上半部のAブロックの出土量から3つのグリッドの面的な出土傾向を見ていきたい。3つのグリッドのうち、竪穴建物跡SI1601に近い25グリッドに出土量が集中している様子が分かり、同グリッドで最も多くの動物遺存体の種類が確認された第5章第1節での検討とも整合的で



第101図 4-1区土壤ブロックサンプル別の動物遺存体の出土量

ある。動物遺存体の種類の多さや集中度合いは、その周辺で食糧残滓が集中して廃棄された場所を示しており（第5章第1節）、25グリッドで集中する様子は、竪穴建物跡SI1601を含む居住域で消費された食糧の残滓が、その周辺に廃棄されていたことを反映している。

グリッド内の区画別に見ると、25グリッド内では南西側の区画にまとまる傾向を示しており、竪穴建物跡SI1601などの居住域に近接するが、厳密には遺構が存在しない空白地に廃棄されたと理解できる。33グリッドは北側の1～3区画を中心比較的集中しており、33グリッド北側と隣接する23グリッドには遺構が確認されず、25グリッドと同様に空白地にまとまって廃棄された可能性があり、その付近には居住域が展開していた可能性を示唆する。

一方、25・33グリッドに比べて16グリッドでは動物遺存体の出土量自体がかなり少ない。16グリッドでは、土坑上面に深鉢などが据えられて底面に注口土器が埋納された土坑SK1603が存在しており、その周辺は葬送や祭祀の場として主に利用されたことが推測される。また、異形土器が出土して墓の可能性が考えられた配石土坑ST1601が存在する24グリッドでも動物遺存体の出土量はそれほど多くない（第5章第1節）。そのため、これらは居住域とは異なり、葬送や祭祀の場として主に利用された非日常的な空間であったことが動物遺存体の出土量の少なさからも支持される。

3 遺物包含層の空間的・定量的分析からみた京田遺跡の集落展開

土器の空間的分析では、型式別に分布の傾向を確認したが、各時期で様相が異なることが確認できた。北白川上層式3期には、3区に加えて4-1区の調査区外北側でも活動が展開していた可能性が指摘でき、一乗寺K式期になると4-1区で確認された竪穴建物跡SI1601周辺で活動が盛んであった様子を示している。これは動物遺存体の定量的な分析結果からも同様の状況が示されており、竪穴建物跡SI1601が営まれた場所に最も近い25グリッドで多く出土しており、居住域に近接する空白地にまとめて廃棄された可能性がある。

一方、元住吉山I式期になると様相が異なり、配石土坑ST1601周辺でさらに多くの土器が集中している状況が見て取れる。この時期には葬送や祭祀などの非日常的な場が活動の中心の一つであったと考えられ、その地点では動物遺存体の出土量が少ない。同じく葬送・祭祀に関連する遺構の土坑SK1603近くでも動物遺存体の出土量は少なく、出土土器も配石土坑周辺に比べてやや少ない。土坑SK1603は調査区の東端に位置するため周辺グリッドの調査面積が狭く、その出土状況は配石土坑周辺と正確な比較はできないが、この違いを積極的に評価すれば、同じ葬送・祭祀に関する遺構でも個別に異なる性格であったことを反映している可能性もある。

このように、4-1区では後期中葉のなかで、特に居住域を中心に活動が展開した一乗寺K式期から、葬送や祭祀に関連する空間で活動が集中する元住吉山I式期へと変遷する様子を土器の空間分布から捉えることができ、それは動物遺存体の定量的な分析からみた出土状況とも符合することが確認できた。

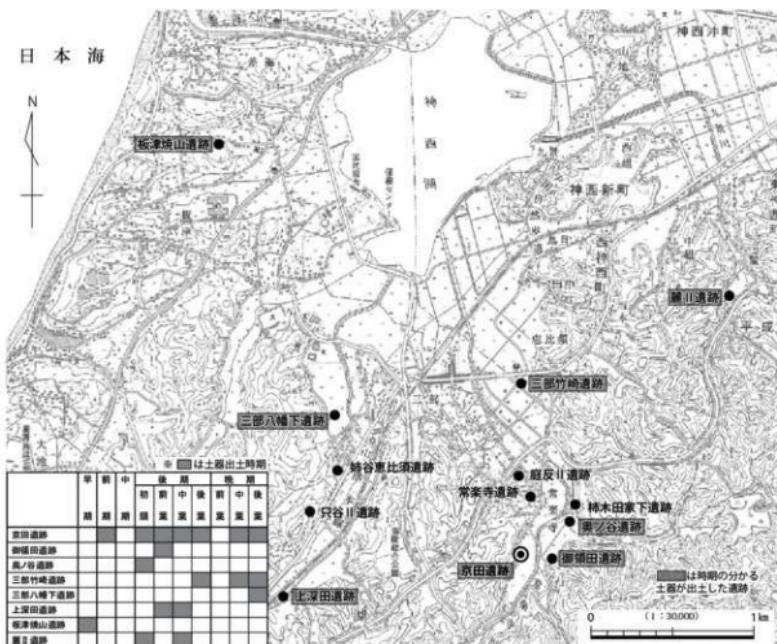
（幡中光輔）

第2節 京田遺跡からみた縄文時代後期中葉の集落構造

京田遺跡では3区で後期中葉の北白川上層式3期の配石土坑1基、土坑1基、柱穴4基が確認され（守岡編2017）、そして4-1区では、一乗寺K式から元住吉山I式期にかけての竪穴建物跡2棟、配石土坑1基、土坑5基、柱穴7基、集石遺構3基が見つかっており、調査区とその周辺に後期中葉の縄文集落が展開していたことが判明した。4-1区では竪穴建物跡などの居住遺構のほか、異形土器が出土した配石土坑や、注口土器が埋納された土坑が存在するなど、葬送や祭祀に関連する遺構が存在しており、当時の集落構造の一端が分かる。ここでは、京田遺跡から後期中葉の集落構造の様相やその性格について、周辺地域の集落構造の様相を含めて検討を進めていく。

1 湖陵町周辺における京田遺跡の位置付け

まずは、湖陵町とその周辺地域の縄文時代遺跡の展開（第102図）について第2章第2節の内容を参照しつつ、京田遺跡の位置付けを検討したい。現在、湖陵町内で最も古い土器が出土したのは板津焼山遺跡で、早期後葉の菱根式が確認されている（石原編2013）。板津焼山遺跡と同じ出雲砂丘にある西園町上長浜貝塚では、早期後葉から前期前葉の土器が比較的まとまっており（川上・湯村編



第102図 湖陵町周辺の縄文時代遺跡と遺跡消長

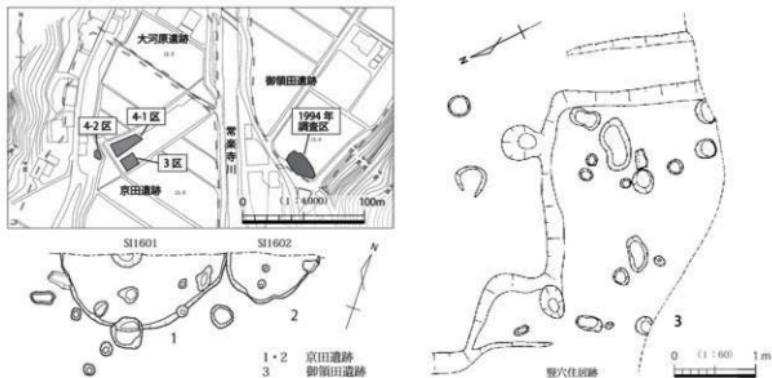
1996), 京田遺跡で前期前葉の長山式が出土したことを考慮すると、周辺にこの時期の集落が存在した可能性がある。

中期には遺跡が確認されておらず、後期以降にこの地域で遺跡が増加する。京田遺跡で後期初頭の土器が散見されるほか、谷部の麓Ⅱ遺跡や丘陵裾部の奥ノ谷遺跡で比較的まとまった量の後期初頭の遺物が出土した(野坂編 1995, 勝部編 2017)。後期前葉から中葉においては、京田遺跡のほか、御領田遺跡(角田・野坂編 1994)が後期初頭の遺跡とは異なる地点の谷奥側に向かった丘陵縁辺部に展開する。これは後期初頭から後期中葉にかけて場所や地点を変えつつも、一定の範囲内で集落が存続していたと思われる、ある時期には複数の集落が並存していたことも考えられる。

京田遺跡の発掘調査で確認した後期中葉の竪穴建物跡は、近接する御領田遺跡の後期前葉の竪穴住居跡に統いて出雲平野で2例目の居住遺構の報告例となる(第103図)。御領田遺跡は京田遺跡から常楽寺川を挟んで約150m東にある丘陵裾部に立地する。調査面積は比較的狭く、竪穴住居跡と包含層が確認されたのみで集落の全容は不明である。しかし、包含層からの出土遺物が比較的多く、また京田遺跡では御領田遺跡の竪穴住居跡と同時期の遺物が出土していることから、集落は周辺に広がっていたものと予想される。なお、御領田遺跡では後期中葉以降の遺物がほぼ確認できないため、後期前葉から中葉へと移行するなかで集落の中心が御領田遺跡から京田遺跡へと移り変わった公算が大きい。つまり、後期前葉に常楽寺川東側の丘陵裾部で集落が展開し、後期中葉には常楽寺川を挟んで西側の丘陵縁辺部に集落の中心が移行したと理解できる。

後期後葉には京田遺跡で元住吉山Ⅱ式併行や宮滝式併行、滋賀里Ⅰ式併行の可能性を持つ土器がわずかに出土しているが、後期中葉の元住吉山Ⅰ式期までと比べると出土量が急激に減少する印象を受ける。この時期にはまた近隣の別地点へと集落の中心が移った可能性がある。

その後、晩期前葉から中葉にかけての遺物が出土した遺跡はほとんどないが、晩期後葉になると三部竹崎遺跡(角田・野坂編 1994)など平野部に積極的に進出する様子が見受けられる。京田遺跡では、晩期中葉と後葉の土器が数点確認されており、比較的近い地点にこの時期の集落が存在したことが推



第103図 御領田遺跡と京田遺跡の位置関係と居住関連遺構

測できる。この頃は弥生時代への移行期にあたり、出雲平野では縄文土器と弥生土器が共存する遺跡が目立つが、弥生時代前期の水稻農耕の痕跡は出雲平野を含め、島根県内ではほとんど確認されておらず、この時期には水稻農耕に代表される弥生文化の展開は本格化していなかったと考えられる（幡中 2013）。

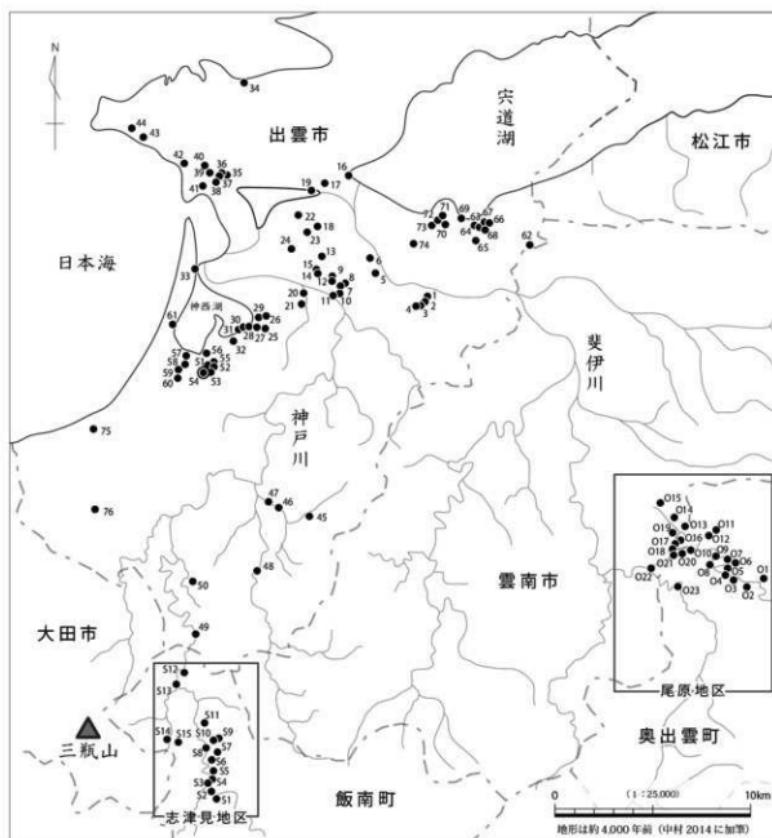
2 出雲平野の縄文時代遺跡と三瓶山の噴火

京田遺跡の様相について湖陵町周辺のなかで確認したが、次に出雲平野における縄文時代遺跡の展開からみた京田遺跡の縄文集落の位置づけを確認する。島根県の縄文時代遺跡は 613 遺跡が確認でき⁽¹⁾、そのうち現在の出雲市域では 76 遺跡を数える。なお、ここでは出雲市域の遺跡のほか、神戸川中上流域の志津見地区遺跡群（飯南町）と斐伊川中上流域の尾原地区遺跡群（雲南市・奥出雲町）の遺跡分布を同時に示した（第 104 図）。以下の本文中の番号は、第 104 図の遺跡番号と対応する。

出雲平野において早期から中期までは遺跡が少ないが、この時期に注目されるのが山持遺跡（16）であり、現段階で最も古い早期中葉の押型土器が出土した（原田編 2009）。山持遺跡では早期中葉から断続的ではあるが晩期後葉まで連綿と土器が出土しており、出雲平野のなかでも各時期で人々の営みが展開した中心的な遺跡であったことが予想される⁽²⁾。後・晩期には出雲平野で遺跡数が増加し、そのなかで京田遺跡（54）のほかに長期にわたって継続する遺跡が複数認められる。例えば神戸川下流域の三田谷 I 遺跡（11）では、中期後葉から晩期後葉までの豊富な遺物に加えて晩期の貯蔵穴などがまとまって確認されており（熱田編 2000）、集落内での生業活動を具体的に示す重要な手掛かりを提供する。

ここで、縄文時代の出雲平野に大きな影響を与えた三瓶山の噴火について確認する。三瓶山はこれまでに 7 回の活動期があり、それぞれの年代や噴出物の様相が明らかにされてきた（松井・井上 1970・1971、松井 1998・2002、福岡・松井 2002、小林・角田 2006 など）。そのうち縄文時代には 3 回の活動期が知られており、三田谷 I 遺跡では第 6 活動期（約 5,500 年前／前期後葉）と第 7 活動期（約 4,000 年前／後期前葉）の噴火に伴う洪水堆積層が両時期とともに 5 m を超える規模で確認され（中村・渡邊 2000），当時の洪水規模の大きさを示している。これら洪水による大量の土砂は出雲平野の地形発達に大きく寄与した⁽³⁾と考えられる一方で、出雲平野の植生や周辺環境にも影響を与えており、三田谷 I 遺跡や築山遺跡（9）で洪水の土砂に埋まった状態の埋没林が確認され（熱田編 2000、遠藤・藤永編 2004）、三田谷 I 遺跡では洪水後には湖沼が形成されるなど、環境が大きく変化している。

三瓶山噴火に伴う洪水は植生や環境だけでなく、神戸川下流域における出雲平野の縄文集落に甚大な被害を及ぼしたことは容易に想像がつく。しかし、三田谷 I 遺跡で第 7 活動期の三瓶山噴火後に形成された湖沼の底付近から丸木舟が見つかっており、加えて湖沼埋土からは噴火直後の後期前葉の後半期から後期中葉にかけての土器がまとまって出土しているため（熱田編 2000）、噴火後ほどなくして形成された湖沼上を丸木舟で移動するなどの活動を行っていた姿が想像できる。つまり、後期前葉の噴火に伴う洪水の大きな被害を受けてもなお、当時の人々がこの地域で生活を再び開始したことを示しており、迅速に社会生活を復旧できるほどに、この時期における出雲平野の縄文時代後期の地域



出雲市域の縄文時代遺跡

1 梶ノ瀬遺跡	12 寿奈呂遺跡	25 保和石遺跡	38 廉山遺跡	51 舟ノ谷遺跡	64 武部西遺跡
2 香原ノ瀬遺跡	13 行寺遺跡	26 深柄遺跡	39 五反配遺跡	52 桃木田家下遺跡	65 西ノ遺跡
3 香原ノ瀬遺跡	14 神門本村近遺跡	27 深柄Ⅱ遺跡	40 出大寺社境内遺跡	53 御園田遺跡	66 西谷遺跡
4 香原ノ瀬遺跡	15 神門寺境内遺跡	28 開谷西古墳群	41 麗藏山遺跡	54 京田遺跡	67 西谷II遺跡
5 長絆遺跡	16 山寺遺跡	29 關谷遺跡	42 稲佐遺跡	55 庭原II遺跡	68 尾原山遺跡
6 西谷川穴基群	17 里方古瀬遺跡	30 頸崎谷遺跡	43 丹戸戸	56 三郎竹崎遺跡	69 結跡
7 第3支群	18 姫原古瀬遺跡	31 九原川遺跡	44 党ノ目谷遺跡	57 三郎八幡下遺跡	70 三井II遺跡
7 上塙川穴基群	19 高浜I遺跡	32 萩ノ瀬遺跡	45 駒留遺跡	58 姉谷東北布施遺跡	71 坪原I遺跡
8 大井谷遺跡	20 古志木遺跡	33 上長浜遺跡	46 莪尾遺跡	59 只谷II遺跡	72 杉次遺跡
9 山川遺跡	21 放レ山遺跡	34 猪目河原遺跡	47 稲田遺跡	60 上深田遺跡	73 上ノ谷遺跡
10 三田谷遺跡	22 矢野遺跡	35 葦根遺跡	48 茶原谷遺跡	61 桜津拂山遺跡	74 後谷V遺跡
11 三田谷I遺跡	23 鹿小路遺跡	36 出宮井社西方	49 稲原遺跡	62 新田堀I遺跡	75 曽沢遺跡
11 三田谷I遺跡	24 壱丁遺跡	37 修理免本郷遺跡	50 朝日遺跡	63 武部遺跡	76 扇形遺跡

志津見地区的縄文時代遺跡

S1 五名田遺跡	S6 谷口遺跡	S11 貝谷遺跡
S2 森遺跡	S7 神原II・III遺跡	S12 長者堀遺跡
S3 川原遺跡	S8 門戸遺跡	S13 下山遺跡
S4 中原遺跡	S9 板屋I遺跡	S14 宮ノ原遺跡
S5 小丸遺跡	S10 板屋II遺跡	S15 万葉II遺跡

尾原地区的縄文時代遺跡

O1 駒留遺跡	O7 林原遺跡	O13 宮ノ原遺跡	O19 川平I遺跡
O2 墓原遺跡	O8 前田遺跡	O14 坂ノ内遺跡	O20 西ノ平遺跡
O3 宮寺遺跡	O9 原田遺跡	O15 寺守I遺跡	O21 家の上遺跡
O4 鏡遺跡	O10 猪ヶ井片遺跡	O16 北田本郷II遺跡	O22 平田遺跡
O5 家ノ原I遺跡	O11 尾白I遺跡	O17 家ノ後II遺跡	O23 下鶴遺跡
O6 家ノ原II遺跡	O12 尾白II遺跡	O18 家ノ後I遺跡	

第104図 出雲市域および志津見・尾原地区的縄文時代遺跡分布

社会が安定して形成されていたことが読み取れる。

京田遺跡は出雲平野の南西部に位置し、隣接する御領田遺跡（53）を含めて三瓶山噴火に関連する直接的な影響は見受けられない。しかし、第7活動期の噴火時期を挟んで集落の中心が後期前葉の御領田遺跡から後期中葉の京田遺跡へと移行しており、噴火に起因する何らかの社会的な要因（生業の変化、集団関係の変化など）が影響した可能性もある。そうした間接的な影響があったとしても、地点を変えつつ、同地域内に規模の大きな集落を営む安定した地域社会の存在を見て取ることができる。

後期以降の地域社会の安定性については、ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査によって多数の遺跡が確認された神戸川中上流域の志津見地区遺跡群や、斐伊川中上流域の尾原地区遺跡群の様相を見るにより一層明確になる。志津見地区遺跡群は三瓶山東麓に位置し、多くの遺跡で後期前葉の第7活動期と前期後葉の第6活動期の噴火に伴う降下火山灰層（第1・2ハイカ層）が確認されている。両時期の降下火山灰層を挟んだ土器様相の比較や、噴火の同時期における尾原地区遺跡群との動態比較などにより、第7活動期には第6活動期と比べて志津見地区遺跡群における集落がかなり早く再開されたことが分かっている（舩中 2014b）。その背景にはこの時期の安定的な地域社会の存在と地域への定着性の高さを読み取ることができ、京田遺跡の集落においても、そうした後期の安定した地域社会を基盤として展開していたことが理解できるだろう。

3 志津見地区・尾原地区と京田遺跡の集落構造

志津見地区や尾原地区の遺跡群では、後期以降に各遺跡で多くの遺構が確認されており、各時期に展開した集落構造の様相がよく分かる（第105図）。ここでは、京田遺跡の集落時期である後期中葉頃の各遺跡における遺構の性格を踏まえ、京田遺跡で確認された遺構について具体的に検討したい。

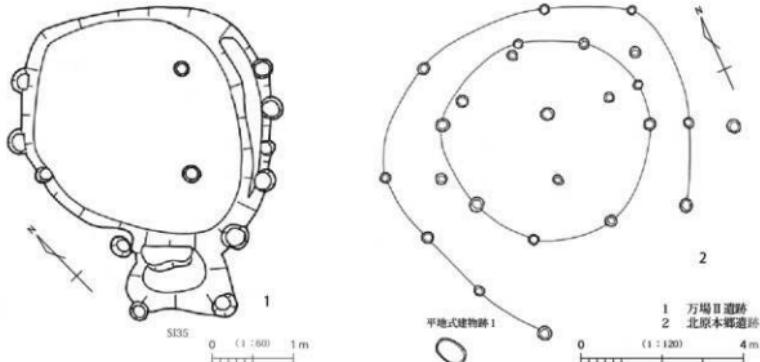
まず、第105図で確認できるように、後期初頭・前葉までは居住関連の遺構が多く見受けられるが、後期中葉以降になると葬送・祭祀に関連する遺構が目立つ。そのなかで後期中葉から後葉にかけての居住関連の遺構では、飯南町万場Ⅱ遺跡（S15）や雲南省北原本郷遺跡（O16）で竪穴住居跡や建物跡（第106図）が確認されている（東山・中川編 2005、山崎編 2007）。万場Ⅱ遺跡の竪穴住居跡 SI35 は隅丸方形で規模は $2.72 \times 3.04\text{m}$ であり、現行で $2.32 \times 2.06\text{m}$ と推定される京田遺跡の竪穴建物跡 SI1601 よりやや大きく掘り込みも深いが、相対的には小規模の範疇に入る。なお中国地方の住居跡面積の変遷は、中期から後期になると縮小傾向を示して後期中葉から後葉に縮小のピークを迎え、晚期には再び拡大する様相が確認されており（山口 2008・2010、稲田 2010），全体的に見て京田遺跡の集落時期である後期中葉は小規模な竪穴住居や建物跡が一般的であったと思われる。しかし一方で、北原本郷遺跡の平地式建物跡 1 は $5.1 \times 4.9\text{m}$ の規模を持ち、平地式のため単純に比較はできないが、居住に関する規模が大きい施設などが存在した可能性もある。いずれにしろ、中四国地方では後期中葉の竪穴住居跡や竪穴建物跡の事例は少なく、今後資料が増加した段階で再検討をする。なお、京田遺跡の竪穴建物跡 SI1602 は SI1601 よりもさらに小規模で、推定でも $1.68 \times 1.20\text{m}$ 程度しかなく、柱穴も SI1601 のものよりもかなり小さい。こうした小規模な建物跡は単に居住用とは考えにくく、葬送・祭祀関連の可能性を含めた別の機能を持つ建物であったと推測される。

		中 期		後 期				晚 期											
		後葉 船元IV式	前葉 里木II・田式	初頭 矢部奥田式併行	前葉 五明田・暮地式	中葉 布勢式併行	後葉 崎ヶ鼻1式	前葉 北白川上層式	中葉 一乗式K式併行	後葉 元住吉山I式併行	前葉 滋賀里I式併行	中葉 宮源式併行	後葉 原田式古段階	前葉 滋賀里II式併行	中葉 原田式中段階	後葉 桂見I・II段階	前葉 滋賀里IIIa式併行	中葉 原田式中段階	後葉 古市河原田式
S1	五明田遺跡	▲			◎	◎													
S2	森遺跡										○	○			○	○			
S3	谷川遺跡																		
S4	中原遺跡																		
S5	小丸遺跡						○												
S6	神原I遺跡																		
S7	神原II・III遺跡					○	○								○	○			
S8	門遺跡														△	△	△	△	
S9	板屋I遺跡	▲																	
S10	板屋II遺跡					◎	◎	▲			△	△	△	△	△	△	△	△	△
S11	貝谷遺跡					◎	◎												
S12	長老塚遺跡																		
S13	下山遺跡	◎		○	◎	◎	◎	◎	△										
S14	堂ノ原遺跡																		
S15	万番II遺跡								◎	◎	◎								
O1	御崎遺跡																		
O2	暮地遺跡				◎	◎													
O3	寺宇根遺跡	△			○	△	△		△	△	△	△				△			
O4	種屋遺跡																		
O5	家ノ協II遺跡																		
O6	家ノ協I遺跡																		
O7	林原遺跡				○	◎	◎	◎							△	△			
O8	前田遺跡			△															
O9	原田遺跡				◎						◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
O10	横ヶ崎遺跡																		
O11	尾白I遺跡																		
O12	尾白II遺跡																		
O13	宮ノ協遺跡																		
O14	垣ノ内遺跡																		
O15	寺田I遺跡																		
O16	北原本郷遺跡				△	◎	◎	◎	○	○	○				△	△	△	△	△
O17	家の後II遺跡		○	○	△		◎	◎							△	△	△	△	△
O18	家の後I遺跡																		
O19	川平I遺跡					○													
O20	西ノ平遺跡																		
O21	家の上遺跡																		
O22	平田遺跡				◎			△	△	△		△							
O23	下鶴倉遺跡										◎					△			
54	京田遺跡							△	◎	△									

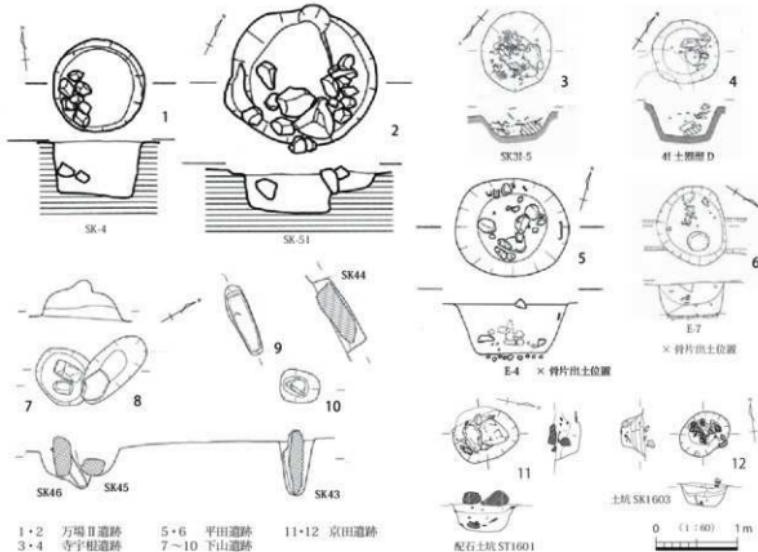
●：居住兼農耕構（窓穴住居構・竪穴建物構・礎化面・仰軸・土器留まりなど）〔可能性含む〕
 ▲：葬送・祭祀関連構（土坑墓・配石墓・集石遺構・土器埋設遺構など）〔可能性含む〕
 ◎：居住関連構（葬送・祭祀関連構）
 ■：土器型式出土時期（網掛壺は遺跡内で土器が特に多い時期）

第105図 志津見・尾原地区と京田遺跡の中期後葉から後・晚期の遺跡消長と遺構一覧

京田遺跡では葬送や祭祀に関連する配石土坑や土坑、集石遺構などが比較的多く見つかっている。こうした葬送・祭祀関連の遺構は志津見・尾原地区の各遺跡で確認され、後期中葉の時期には志津見地区の万場Ⅱ遺跡や飯南町下山遺跡(S13、深田編2002)、尾原地区では雲南市平田遺跡(O22、坂本・蓮岡編1997)のほか、奥出雲町寺宇根遺跡(O3、野津ほか編2008)などで墓の可能性がある土坑や配石土坑などがまとまっている(第107図)。遺構の規模は、長軸が1.0mから1.5m程度の大きさになるものが目立つ。そのなかで下山遺跡の配石土坑は目を引く存在で、かなり大型の石材が内部に据え



第106図 志津見・尾原地区の後期中葉から後葉の居住関連遺構



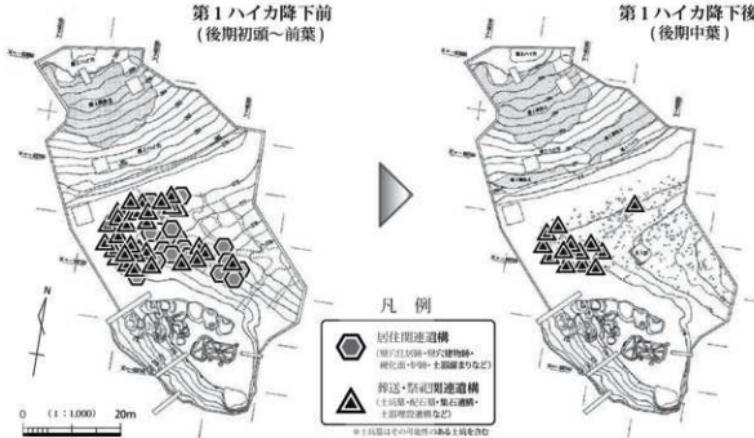
第107図 志津見・尾原地区の後期中葉の葬送・祭祀関連遺構

られ、その一部は柱状に土坑内に立てられた立石状態で出土している。石材は一部の面が丁寧に磨かれており、墓標としての役割以外に特別な意味を持ったものであろう。内部の出土遺物については、平田遺跡で人骨片が出土しているほか、下山遺跡や寺宇根遺跡では理化学分析によって内部から高濃度のリンが検出された配石土坑や土坑もある。京田遺跡でも遺構内の埋土に動物遺存体が含まれ、そのなかには種不明の哺乳類の破片も多数存在する⁽⁴⁾。遺構内の埋土は包含層などからの混ざり込みの可能性があるが、配石土坑など下層から骨片が出土する遺構もあり、全てが混ざり込みとは断定できない。また、これらの遺構内には土器や石器などが一定量含まれている場合が多い。京田遺跡の配石土坑 ST1601 や土坑 SK1603 の出土状況から判断すると、内部に土器や石器などを意図的に埋納している蓋然性が高く、他の遺跡の遺構でも意図的な埋納行為があった可能性が考えられる。

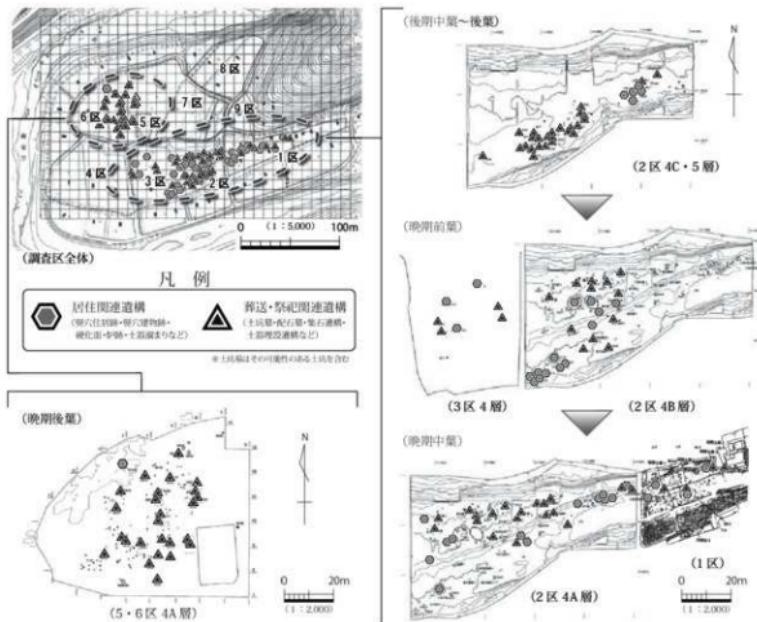
4 後期中葉以降における集落構造の展開と変容

京田遺跡では4-1区で居住遺構と葬送・祭祀に関する遺構が確認できたが、調査区がそれほど広くないため集落全体を把握することは困難である。しかし、4-1区では竪穴建物跡 SI1601 が営まれた後、居住用とは考えにくい竪穴建物跡 SI1602 が設けられ、配石土坑 ST1601 や土坑 SK1603 など葬送や祭祀関連の遺構が目立ってくる傾向が指摘できる。また、比較的大きな石材を土坑の脇に据える土坑 SK1602・SK1605 などもそうした一連の遺構として積極的に評価するならば、葬送・祭祀関連の遺構がまとまっていることになり、墓域や祭祀の場といった特別な空間の一端として捉えることは可能であろう。つまり、竪穴建物などを設けて居住域を形成しながらも、墓などが次第に累積して増加し、墓域が展開していくといった、集落構造の変遷を示していることが推察される。

こうした墓域や祭祀の場の展開を考えるうえで、下山遺跡と奥出雲町原田遺跡(O9、西尾編 2004、勝部・花田編 2006、熱田ほか編 2007、伊藤編 2008)における墓域形成の様相に注目したい。下山遺跡



第108図 下山遺跡にみる墓域形成の時期的変遷



第109図 原田遺跡における長期間継続する墓域の展開

では三瓶山噴火の第7活動期に降下した第1ハイカが堆積し、その上で遺構が残されている(第108図)。第1ハイカ降下前には後期初頭から前葉頃の遺構が確認でき、墓とみられる集石土坑群のほか、居住痕跡を示す炉跡などの遺構が見つかっており、同じ場所で居住に関する施設と葬送や祭祀に関する施設が一体的に營まれていた様子が分かる。その後、三瓶山が噴火して近接する志津見地区の集落は火碎流などによって大きな被害を受けるとともに、地区全域が第1ハイカ層に覆い尽くされる。そのため集落全体の生活環境が大きく損なわれたことは想像に難くないが、第1ハイカ層上面には後期中葉の遺構が存在して遺物も一定量出土しており、噴火の影響が沈静化した後にはほどなくして活動が再開されたことを示している。下山遺跡では、活動再開後に展開した第1ハイカ層上面に集石土坑のほか大型の石材が立石した状態の土坑などが集中するが、居住痕跡はほとんど確認できず、居住域と分離した墓域のみが形成されている状況を示している。三瓶山噴火の影響もあり、後期前葉から中葉に移行するなかで集落の居住域が別の場所へ移ったと考えられるが、それでも墓域は引き続き同じ場所に形成されて累積していくことを物語る(幡中2011a・2011b)。

後期中葉以降、墓と考えられる土坑や配石土坑が同じ場所に累積しながらまとめて墓域を形成する様子は、志津見・尾原地区のいくつかの遺跡で確認される。原田遺跡ではその様子が具体的に示されており(第109図)、後期中葉以降から晩期後葉まで地点を変えながらも、継続的に墓域が展開する(幡中2015)。また、原田遺跡の出土遺物では石棒や石刀などの石棒類がまとめて出土している

ことが注目される。小・中型の石棒や石刀は晩期前葉から中葉、大型石棒の破片は晩期後葉と考えられており（中村 2014）、石棒類の利用が盛んで晩期を通して石棒を用いた祭祀の場として活用されたことが分かる。石棒類の出土量は 20 点以上あり、尾原地区のなかでも群を抜いて多い。石棒類が集中する様子は石棒による集団祭祀が原田遺跡を拠点に行われたことを反映する可能性が指摘されている（稲田 2008）。このように墓域が形成されて連綿と展開するなかで、時には祭祀の活動場所にも利用されるなど、集落内における葬送・祭祀の空間として定着していったと理解できる。

5 まとめ—京田遺跡における集落構造の評価—

これまで湖陵町周辺や出雲平野における京田遺跡の位置付けや、志津見地区や尾原地区で確認された遺構内容と集落構造、および三瓶山噴火の影響にも触れつつ、京田遺跡の後期中葉の集落を多角的に検討してきたが、その内容をまとめつつ、京田遺跡の集落構造の性格について改めて考えたい。

湖陵町周辺を含めた出雲平野全体では後期以降に遺跡数が増え、京田遺跡では後期中葉の豊富な出土遺物に加えて居住遺構や葬送・祭祀に関連する遺構が比較的まとまって確認され、規模の大きい集落であったことが予想される。そして、その背景には三瓶山噴火による被害を受けても迅速に活動が再開できるほどの安定的な地域社会が縄文時代後期の出雲平野や周辺地域に形成されていた様子を捉えることができた。後期初頭から前葉までは下山遺跡で確認したように、居住に関する施設と葬送や祭祀に関する施設が一体的に営まれていたが、後期中葉以降には居住域が別の場所に移っても墓などが引き続き形成されて累積し、墓域を形成するようになる。こうした墓域が晩期後葉まで長期間存続する原田遺跡では、時期ごとに葬送・祭祀関連の遺構が累積する様子が把握でき、また晩期には石棒祭祀が行われる祭祀の場としても利用されるなど、地域社会の紐帯を強化する重要な役割を担った拠点的な集落であった可能性が高い。

ここで改めて京田遺跡の集落構造を確認すると、後期中葉のなかで竪穴建物が設けられて居住域として利用された後に配石土坑などの葬送・祭祀遺構が増加する傾向を示しており、後半期には墓域や祭祀場などの性格が強くなる。集落の中心が一定期間のうちに移行する様子は、御領田遺跡と京田遺跡の関係性から想定できるが、京田遺跡の 4-1 区で確認できた居住遺構がその後に同一地点で累積しない状況もそうした集落の変遷に伴って居住域が別の場所に移り変わったことを反映する可能性が高い。それでもなお墓域は残されて 4-1 区周辺に営まれている点が注目され、京田遺跡で確認した一連の集落の様相は、集落内の構造が居住に関する施設と葬送・祭祀に関する施設が一体的に営まれる状況から、次第に墓などが累積して墓域を形成するまでの過渡的な状況を表していると評価できる。また、これまで出雲平野では調査事例に乏しく、志津見地区や尾原地区における一連の集落構造の変遷が岡山平野でも認められるのかは不明瞭であったが、今回の京田遺跡における発掘調査によって集落構造の一端が示され、岡山平野でも概ね同様の方向性で展開することが示されたと考えられる。

今後は、京田遺跡の集落構造の特徴をもとに、京田遺跡の集落と周辺地域の集落間の関係性、さらに地域間の関係にも目を向けつつ、各集落を形成した集団間の関係についても具体的に検討し、山陰地方の縄文時代の集落研究を深化させる必要があろう。

（幡中光輔）

註

- (1) 山陰地方の縄文時代遺跡は 2014 年時点において鳥取県で 692 遺跡、島根県で 613 遺跡、合計で 1,305 遺跡を確認しており（幡中 2014c），その後も発掘調査によって両県で多くの遺跡が新たに確認されている。
- (2) 山持遺跡のような長期間にわたって存続する遺跡は山陰地方の各地において確認できる。例えば現在の宍道湖・中海周辺では、縄文時代の早期中葉から弥生時代に至るまで質・量ともに豊富な出土遺物が確認された松江市西川津遺跡が知られており、その周辺では前期前葉以降に複数の遺跡がまとまって集団領域の形成が確認できる（幡中 2014a）。同様に長期間存続する山持遺跡の周辺にも多数の遺跡が存在すると推測される。
- (3) 洪水の土砂が三角州を急激に発達させて現在の出雲平野の原形を生み出したと考えられる（中村 2006）。
- (4) 京田遺跡出土の骨片はほとんどが火を受けて白色化した小破片であった（第 5 章第 1 節）。近畿地方では京都府伊賀寺遺跡において別の場所で火葬した複数体の人骨を埋納した後期後葉の火葬墓が確認され、火葬して骨のみを埋葬した具体的事例が示されている（岩松ほか 2009）。京田遺跡の遺構内に含まれる種不明の小片が人骨であるかどうかは議論の余地を残すが、遺構内の骨片が白色化している出土状況には今後の他の遺跡における調査において注意を要する。なお、伊賀寺遺跡の事例については千葉豈氏にご教示いただいた。

参考文献

- 熱田貴保編 2000『三田谷 I 遺跡 Vol.2』斐伊川放水路予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 島根県教育委員会
- 熱田貴保・小銀康之・守岡正司・渡邉富美子編 2007『原田遺跡（3）—5～7 区の調査—』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10 島根県教育委員会
- 石原 聰編 2013『板津焼山遺跡』出雲市の文化財報告 24 出雲市教育委員会
- 伊藤徳広編 2008『原田遺跡（4）』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 12 島根県教育委員会
- 稲田陽介 2008「山陰地方における石棒の基礎的研究」『島根考古学会誌』第 25 集 島根考古学会 37～58 頁
- 稲田陽介 2010「山陰地方の縄文後・晚期集落」『西日本の縄文集落 古墳時代の首長居館をめぐる諸問題 吉備のムラと役所』シンポジウム記録 7 考古学研究会 61～86 頁
- 岩松 保・中川和哉・森島康雄 2009『大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡』『京都府遺跡調査報告集』第 133 冊 財团法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 25～70 頁
- 遠藤正樹・藤永照隆編 2004『寿昌寺遺跡・築山遺跡』出雲市築山土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市教育委員会
- 角田徳幸・野坂俊之編 1994『神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 御領田遺跡 三部竹崎遺跡』湖陵町教育委員会
- 勝部智明編 2017『麓 II 遺跡 坂本谷遺跡 京田遺跡（1 区）』一般国道 9 号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1 島根県教育委員会
- 勝部智明・花田修司編 2006『原田遺跡（2）—2 区の調査—』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 8 島根県教育委員会
- 川上 稔・湯村 功編 1996『上長浜貝塚』出雲市教育委員会
- 小林謙一・角田徳幸 2006「三瓶火山の噴出物と縄文時代の AMS 炭素 14 年代測定」『島根考古学会誌』第 23 集

島根考古学会 43 ~ 55 頁

坂本論司・蓮岡法暉編 1997『平田遺跡』本次町文化財調査報告書4 本次町教育委員会

中村唯史 2006『神戸川デルタの地形発達』『島根県立三瓶自然館研究報告』第4号 島根県立三瓶自然館 25 ~ 29 頁

中村唯史 2014『縄文時代の島根県の古地形と三瓶火山の活動の影響』『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第13集 島根県古代文化センター 87 ~ 92 頁

中村唯史・渡邊正巳 2000『三田谷I遺跡の地下層序と地形発達史』『三田谷I遺跡 Vol.2』斐伊川放水路予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ 島根県教育委員会 116 ~ 127 頁

中村 豊 2014『中四国地域における縄文時代精神文化について—大型石棒・刀剣形石製品を中心に—』『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第13集 島根県古代文化センター 23 ~ 42 頁

西尾克己編 2004『家ノ脇II遺跡 原田遺跡1区 前田遺跡4区』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 島根県教育委員会

野坂俊之編 1995『一般廃棄物処理施設管理道路新設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—奥ノ谷遺跡—』湖陵町教育委員会

野津 旭・杉原清一・藤原友子・福田市子編 2008『寺宇根遺跡』尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI 奥出雲町教育委員会

幡中光輔 2011a『山陰地方山間部の縄文遺跡群と地域社会の変容—島根県志津見・尾原地区からの分析—』『島根考古学会誌』第28集 島根考古学会 1 ~ 24 頁

幡中光輔 2011b『山陰地域における葬祭空間の成立と展開』『中四国地方縄文時代の精神文化』第22回中四国縄文研究会岡山大会 中四国縄文研究会 59 ~ 74 頁

幡中光輔 2013『縄文・弥生移行期の遺跡群動態—島根県の平野部・山間部を中心に—』『農耕社会成立期の山陰地方』第41回山陰考古学研究集会 山陰考古学研究集会 21 ~ 32 頁

幡中光輔 2014a『縄文時代の集団領域と地域社会の輪郭—山陰地方の遺跡動態から集団領域を読み解く—』『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第13集 島根県古代文化センター 57 ~ 76 頁

幡中光輔 2014b『自然災害と地域社会の定着性—三瓶山の噴火からみた縄文社会—』『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第13集 島根県古代文化センター 77 ~ 85 頁

幡中光輔 2014c『山陰地方の縄文時代遺跡データベースと型式別遺跡数の推移』『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第13集 島根県古代文化センター 172 ~ 173 頁

幡中光輔 2015『中国・四国地方における縄文墓制—瀬戸内地域と中国山地から墓域形成を考える—』『季刊考古学』第130号 雄山閣 42 ~ 44 頁

原田敏照編 2009『山持遺跡 Vol. 5 (6区)』国道431号道路建設事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 島根県教育委員会

東山信治・中川 寧編 2005『北原本郷遺跡1~1~3・6区の調査—』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 島根県教育委員会

深田 浩編 2002『下山遺跡(2) —縄文時代遺構の調査—』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告

- 書 12 島根県教育委員会
福岡 孝・松井整司 2002「AT降灰以降の三瓶火山噴出物の層序」『地球科学』56巻2号 地学団体研究会
105～122頁
- 松井整司 1998「三瓶火山の噴出物とその年代」『板屋Ⅲ遺跡(付録)』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5 島根県教育委員会 127～136頁
- 松井整司 2002「三瓶火山の噴出物とその年代」『下山遺跡(2)－縄文時代遺構の調査－』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12 島根県教育委員会 227～234頁
- 松井整司・井上多津男 1970「三瓶火山噴出物の¹⁴C年代」『地球科学』24巻3号 地学団体研究会 112～114頁
- 松井整司・井上多津男 1971「三瓶火山の噴出物と層序」『地球科学』25巻4号 地学団体研究会 147～163頁
- 守岡正司編 2017『のの子谷横穴墓群 京田遺跡3区』一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 島根県教育委員会
- 山口雄治 2008「中国地方縄文時代中・後期の居住形態」『考古学研究』第54巻第4号 考古学研究会 20～40頁
- 山口雄治 2010「山陽地方における縄文時代後・晚期の集落」『西日本の縄文集落 古墳時代の首長居館をめぐる諸問題 吉備のムラと役所』シンポジウム記録7 考古学研究会 7～23頁
- 山崎順子編 2007『万場II遺跡』中山間地域圃場整備工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 飯南町教育委員会
- 挿図出典**
- 第103図：角田・野坂編 1994に加筆 第105図：幡中 2011aに加筆 第106図：東山・中川編 2005, 山崎編 2007に加筆 第107図：坂本・蓮岡編 1997, 深田編 2002, 山崎編 2007, 野津ほか編 2008に加筆 第108図：深田編 2002, 幡中 2011aに加筆 第109図：西尾編 2004, 勝部・花田編 2006, 熱田ほか編 2007, 伊藤編 2008, 幡中 2015に加筆

第3節 山陰中央部における縄文時代後期中葉の土器編年の再検討

京田遺跡4-1区の出土土器は総計で20,365点、150.762kgであり、かなり多くの量が出土した。第3章第5節で示したように、そのほとんどが後期中葉に収まり、有文土器とともに出土した多量の無文土器も概ね同じ時期に製作されたものと考えてよいだろう。京田遺跡の3区と4-1区から出土した土器はこの時期のものとしては山陰中央部のなかで群を抜いて多く、島根県内や山陰地方全域でも近年まれにみる出土量を誇る。ここでは、豊富な出土量に恵まれた京田遺跡の土器群を中心として、山陰中央部の後期中葉の土器編年を検討し、出土土器からみた京田遺跡の位置づけを確認したい。

1 後期中葉土器研究の現状と課題

出土土器の京田遺跡を検討する前提として、現在の山陰中央部における後期中葉の土器編年研究が示す現状と課題について、近畿地方や周辺地域の研究歴史を踏まえながら確認しておきたい。

後期中葉の土器研究は、京都府の比叡山山西南麓にある京都大学教養学部構内遺跡や一乗寺向畠町遺跡、神戸市元住吉山遺跡など古くから知られる近畿地方の資料が土器研究の中心的な役割を担っていた。これらの基礎資料をもとに北白川上層式3期や一乗寺K式、元住吉I式が設定され（佐々木・小林1937、佐原1961、岡田1965、泉1980など）、関連資料を含めて現在の土器編年基盤となる型式内容が整理された（泉1981a・1981b・1989）。近畿地方では、その後も京都府桑飼下遺跡（渡辺編1975）や兵庫県佃遺跡（深井編1998）、大阪府三宅西遺跡（中村編2009）など出土状況に恵まれた資料が各地で蓄積し、一乗寺K式の直前段階、そして一乗寺K式と元住吉山I式をそれぞれ新旧に分けた編年案が提示されている（岡田・深井1998、玉田・岡田2010）。そして近年では、一乗寺向畠町遺跡の正式報告（上峯ほか編2013）がなされたことにより、後期中葉の土器編年研究が充実し、北白川上層式3期を3区分する見解のほか（千葉2014b・2015）、一乗寺K式と元住吉山I式の細分についても基礎資料をもとにした検討が進んでいる（小泉2014）。第3章でもこれらの研究成果を参照して近畿地方の土器型式（北白川上層式3期・一乗寺K式・元住吉山I式）をもとに報告を行った。

一方で、山陰地方の中央部では後期中葉の比較的まとまった資料が確認された松江市権現山洞窟遺跡が同市サルガ鼻洞窟遺跡とともに調査され、近畿地方の元住吉山式に対比できる土器群として権現山洞窟遺跡出土の土器が紹介されている（佐々木・小林1937）。しかし、比較的良好な資料が徐々に増加していく後期初頭や後期前葉と比べ、後期中葉の土器資料の増加は進まず、資料が紹介される機会はあるが（間壁・潮見1965、穴道1974など）、部分的にとどまっている。1990年代以降になり、瀬戸内地域で後期中葉の良好な資料が増加し、彦崎K2式⁽¹⁾以前で北白川上層式3期の前半期に併行する津島岡大第IV群や後半期に比定される四元式が提唱されている（平井1993、阿部1994）。一方、山陰中央部でも山間部のダム建設事業に伴う大規模な発掘調査のなかで、飯南町森遺跡（柳浦編1994）などまとまった資料がようやく出揃い始め、柳浦俊一氏によって瀬戸内地域と対比しながら土器様相の検討が進められた（柳浦1994）。資料はその後も増加し、2000年代には美郷町冲太遺跡の発掘調査（牧田編2001）によって多量の後期中葉の土器が確認された。この報告のなかで千葉豊氏

は、出土した土器群から近畿地方の北白川上層式3期、瀬戸内地域の四元式に併行する土器群を型式学検討により抽出して沖丈式を設定しており（千葉2001）、それ以降の土器編年研究の指標となっている。そのなかで沖丈式に後続する型式を権現山式として改めて整理して古段階と新段階に分類し、古段階は近畿地方の一乗寺K式と瀬戸内地域の彦崎K2式古段階、新段階は近畿地方の元住吉山I式と瀬戸内地域の彦崎K2式新段階に対応する編年案も同時に示された⁽²⁾。ただし、千葉氏も指摘するように、元住吉山式に対比された権現山洞窟遺跡出土の土器群は1937年の報告当時に権現山式として型式設定されたわけではないこと、また沖丈遺跡の土器群では、沖丈式と権現山式の出土状況による区分や無文土器の検討が不十分であるため、沖丈式と権現山式は今後のさらなる検討が必要であるとの認識を示している点には注意を要する。

その後も山陰中央部の山間部を中心に資料が増加し、また基準資料となる権現山洞窟遺跡の再整理（柳浦編2009）が行われるなど一定の資料の蓄積が進み、それをもとにした土器編年研究が進展してきた（柳浦2010・2017aなど）。しかしながら、現在の土器編年では一乗寺K式に相当する時期が結節縄文の有無でしか弁別できていないなど、具体的な実態が明らかにされていない状況を柳浦氏が課題として指摘している（柳浦2017b）。このなかで柳浦氏は、沖丈式を北白川上層式3期併行、権現山式を元住吉山I式併行としている点が注目され、一乗寺K式併行期には権現山式を含めておらず、近年の新たな資料（京田遺跡や大田市古屋敷遺跡）で北白川上層式3期から一乗寺K式に併行する時期の変遷を明らかにする必要性について言及する。それは、調査当初の報告で権現山洞窟遺跡出土土器が元住吉山式に対比されたことを踏まえ、現在の近畿地方の元住吉山I式に対応する型式を権現山式とし、それ以前の土器様相は新出資料をもとに再検討する必要を説いていると理解できる。

今回、京田遺跡の3区と4-1区から出土した土器群はその土器量のほか、第3章第5節でも確認したように、遺構単位での出土土器のまとまりに加え、3区と4-1区の出土土器様相の地点差と層位的な出土状況によって後期中葉の土器編年研究に貢献できる可能性が高い。よって、京田遺跡を中心としつつ、周辺遺跡の資料も参照しながら、後期中葉の土器編年について検討を進めたい。

2 遺構と層位からみた土器群の位置付け（第110図）

（1）3区の遺構（SK05・SK06）内出土土器

3区では土坑SK05とSK06が確認され（守岡編2017）、両者は概ね同時期で北白川上層式3期に比定できる。遺構内出土土器のなかで注目されるのは、SK06の出土土器のなかに四元式と考えられる浅鉢（3区第39図5）が共伴している点で、北白川上層式3期が古・中・新段階に細分された編年案（千葉2014b・2015）のなかで中段階以降に位置することが想定される。また北白川上層式3期に併行する加曾利B1式の影響を受けた注口土器（3区第39図22）が伴っていることも、これを支持する。そして、その他の土器には沈線内に連続した刺突を持ち、結節縄文や異条斜縄文を地文とする土器が多く、3区第39図11の深鉢は口縁部が内湾内屈する。これらは近畿地方における北白川上層式3期の新段階の特徴を持ち⁽³⁾、一乗寺K式直前段階の様相を示していると考えられる。つまり3区の遺構内出土土器は、北白川上層式3期のなかでも中段階から新段階に位置付けられよう。

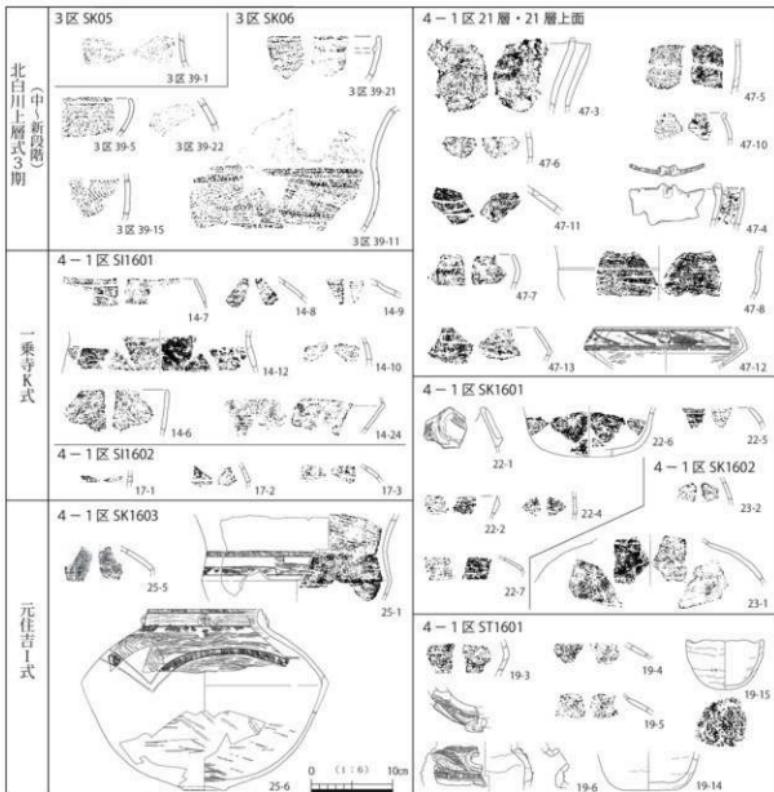
(2) 4-1区の遺構内および21層・遺構面(21層上面)出土土器

竪穴建物跡 SI1601・SI1602

4-1区では竪穴建物跡 SI1601 の出土土器が遺構内出土のなかで最も古い可能性が高く、明確な元住吉山I式は確認できない。結節縄文や直前段多条縄文が使用されて沈線施工後に磨り消される深鉢や鉢(第14図7・12)、沈線内刺突を持つ沈線がめぐる注口土器(第14図8)など、北白川上層式3期の新段階から引き継がれる一乗寺K式の特徴を示している。これらの点を勘案すると、一乗寺K式期のなかでも前半期頃に位置づけられる可能性がある。竪穴建物跡 SI1602 は小片のみで全体が不明であるが、遺構の重複関係から竪穴建物跡 SI1601 と同時期か、やや新しいと考えられる。

土坑 SK1601・SK1602

一乗寺K式と元住吉山I式を含む遺構は土坑 SK1601・SK1602 である。土坑 SK1601 出土土器の第22図1は一乗寺K式に特有のノ字状隆帶を持ち、二枚貝腹縁刻みによる擬縄文が沈線区画内に施



第110図 3区と4-1区の遺構出土土器および4-1区21層・21層上面出土土器

される。第22図5は一乗寺K式期に多い内湾口縁の上面の沈線区画帯内にRL縄文が施される一方で、下部区画帯に擬縄文の刻みが密に充填されており、縄文施文と擬縄文が同一器面上に併存する。山陰地方では元住吉山I式期には擬縄文が多数を占めて縄文施文はほとんど残らないことが指摘されており（柳浦2010）、連弧文に無節縄文が充填された鉢（第22図6）とあわせ、元住吉山I式までは下らずに一乗寺K式の後半期頃に位置付けたい。その一方で、巻貝回転や斜め刻みなどによる擬縄文を持つ深鉢や注口土器も出土しており（第22図2・4・7）、元住吉山I式に盛行する特徴を持つ土器も確認できる。土坑SK1602では、小片だが巻込文が描かれる深鉢（第23図2）は一乗寺K式と考えられ、巻貝回転による擬縄文が充填された注口土器（第23図1）は元住吉山I式期に比定できると思われる。土坑SK1601・SK1602の出土土器は2段の縄文や擬縄文の施文が確認できるが、結節縄文や直前段多条、異条縄文など多彩な縄文施文を含まない点は共通する。

配石土坑ST1601・土坑SK1603

元住吉山I式が多数を占め、土器の特徴や出土状況からこの時期に比定できるのは、配石土坑ST1601と土坑SK1603の出土土器である。SK1603の第25図6は完形に復元できる注口土器で、大振りな連弧文を描く文様帶には二枚貝背部押圧による擬縄文が充填されるほか、口縁部と頸部にも施されており、擬縄文の施文が各部位で展開する。またクランク文を描く深鉢の胴部（第25図1）や注口土器の胴上部（第25図5）では、二枚貝背部押圧や巻貝回転、二枚貝腹縁刻みによる擬縄文など、貝類による複数の施文具が同一器面上に併用された施文手法が特徴的である。一方で、配石土坑ST1601では小片ながら斜め刻みによる擬縄文が多用されるもの（第19図3～5）が見受けられ、二枚貝背部押圧や巻貝回転などによる擬縄文の施文はみられない。資料が少なく判断が難しいが、こうした状況を積極的に評価するならば、近畿地方の元住吉山I式の土器編年研究（泉1981a・1981b、玉田・岡田2010）や近年の一乗寺向畠町遺跡の分析（木村・上阪2014）でも確認されるように、元住吉山I式のなかで新しいものほど斜め刻みによる擬縄文が目立つ状況を反映しており、配石土坑ST1601がやや時期的に新しい可能性が示唆される。

21層および遺構面（21層上面）

これまで見てきたように、3区と4-1区では遺構単位で型式レベルでの時期差が生じていることを確認した。第3節第5節で詳しく検討したが、21層は3区で人々の生活が営まれた後、4-1区で活動が展開するまでの間に堆積した層であり、堆積時期が限定できる点に特徴がある。つまり、21層の堆積時期は、3区の遺構の時期である北白川上層式3期の中段階および新段階から、4-1区のなかで古い遺構の時期を示す一乗寺K式期の前半頃までに収まることを示している。21層には後期前葉の土器も数点含まれるもの、大半が北白川上層式3期（第47図3・5・6・10・11）と一乗寺K式（第47図7・8・13）である。北白川上層式3期の土器は地文にRL縄文、もしくはLR縄文を施し、その上から沈線で文様や区画などを描く。また第47図3は外反する口縁部とM字状突起を持ち、形態的にも北白川上層式3期頃の土器の特徴を示している。一乗寺K式に比定できる第47図7・8・13について、7は摩滅が激しく沈線以外の文様は確認できないが、8は直前段多条縄文を地文として文様帶を描いた後に内部を磨り消している。13は幅の広い屈曲口縁を持ち、沈線区

画帶と屈曲部の上部には二枚貝腹縁による密な刻みと巻貝による刺突を施す。なお第3章第4節でも触れたが、13は他の土器とは胎土がやや異なり、搬入土器の可能性がある。

ここで注目されるのは第47図4・12の土器で、これらは12層（包含層）から出土する破片とも接合するが、遺構面（21層上面）から出土した破片を含む。第47図4は遺構面から出土した破片の割合は低く、また刻みがめぐる口縁端部やM字状突起を持つなど、北白川上層式3期頃の特徴を持つ点を考慮すると、遺構面の時期を反映するとは積極的に評価しにくい。一方、第47図12は屈曲口縁の鉢で、遺構面出土の破片数は多く、また摩滅が少なく文様が明瞭に残存する破片が主体を占めており、遺構面の時期に近い可能性が考えられる。12は幅広の口縁部にLR縄文を地文として施文し、刺突が密に施された沈線で区画帯を設け、区画帯内には6文字を描く。また区画帯外は丁寧に磨り消されるなど、一乗寺K式期の特徴を示している。

3 京田遺跡からみた後期中葉の土器編年

（1）京田遺跡にみる後期中葉の文様施文の展開

これまでの遺構と層位からみた土器様相の検討によって、京田遺跡における遺構内出土の土器群の位置付けが概ね把握できた。3区の遺構内出土の土器群は北白川上層式3期の中段階から新段階で、包含層出土土器も未報告資料を含め⁽⁴⁾、その時期と考えられるものがほとんどを占める。4-1区では一乗寺K式から元住吉山I式期にかけての遺構が存在し、一乗寺K式から元住吉山I式までの変遷を連続的に把握することができる。また遺構内外の包含層出土土器でも、一乗寺K式から元住吉山I式期までの土器群がまとまっており、主な遺構の時期と連動している。そのなかで土器編年の位置付けに大きな割合を占める文様施文について、3区と4-1区の地点差から文様施文の時期的な展開を定量的に詳しく確認する必要があろう。

ここで3区と4-1区全体の出土土器を対象に、縄文および擬縄文による施文と施文手法の集計表を示した（第24表）。斜め刻みについては、一乗寺向畠町遺跡の分析（木村・上阪2014）を参照し、右斜め下がりに刻まれるものをR刻み、左斜め下がりに刻まれるものはL刻みとした。第24表上段の3区と4-1区全体の傾向を見ると、3区ではほぼ縄文施文で、2段の縄文のほか結節縄文やその他多条縄文など多彩な縄文による施文が一定量を占めている。4-1区ではそうした縄文施文も確認できるが、3区に比べて明らかに減少しており、代わって巻貝や二枚貝などによる擬縄文の施文が卓越する。また、3区では縄文を器面に先行して施す縄文地の土器が多数を占めていることは注目され、縄文地に沈線を施文するほか、沈線区画帯などを描いて内部を磨り消す磨消縄文手法（狭義の磨消縄文手法）も確認できる。ただし、沈線で区画帯を描出後に縄文を充填する充填縄文手法（広義の磨消縄文手法）もある程度存在する。4-1区では、磨消縄文手法などの縄文地を主体とした土器は一定量認められるが、その割合は減少傾向にある。対照的に、充填縄文による施文手法が大きく増加する特徴を示す。よって3区と4-1区の地点差から、縄文施文から次第に擬縄文へと比重が移り、そのなかで、縄文地主体から充填縄文手法へと変化する傾向にあることがわかる。また、磨消縄文手法は両地区に存在するが、4-1区ではやや割合が減少している点が指摘できる。こうした変化が北白川上

第24表 3区と4-1区における有文土器の施文手法の時期的変遷

3区 (点数・重量g)		縄文地			4-1区 (点数・重量g)		縄文地		
		磨消繩文	縄文・沈線	縄文のみ			磨消繩文	縄文・沈線	縄文のみ
縄	RL	27 (742)	14 (813)	57 (919)	195 (2853)	16 (170)	24 (218)	20 (307)	60 (499)
	LR	22 (346)	5 (106)	19 (226)	53 (698)	16 (447)	7 (113)	12 (286)	9 (75)
	結節RL(S字状)	16 (623)		1 (16)		結節RL(S字状)			2 (38)
	結節LR(Z字状)	4 (93)		15 (522)		1 (3)	2 (19)	2 (20)	14 (229)
文	多条・異条等	1 (14)		7 (199)		多条・異条等	1 (35)	7 (115)	1 (14)
	付加条・撲条等			3 (95)		付加条・撲条等	6 (76)	2 (26)	3 (26)
	卷貝印軸	1 (11)				卷貝印軸	87 (1649)	1 (10)	1 (9)
	卷貝刺突					卷貝刺突	3 (64)		
縄	二枚貝背部押圧					二枚貝背部押圧	24 (622)		
	二枚貝腹縁刻み					二枚貝腹縁刻み	15 (161)		
	巻刻み					巻刻み	12 (152)		
	R刻み	2 (29)	1 (32)			R刻み	50 (867)		
文	L刻み					L刻み	19 (653)		
	合計	51 (1135)	42 (1692)	76 (1145)	274 (4383)	合計	250 (4899)	43 (501)	39 (662)
									86 (850)
北白川上層式3期 (点数・重量g)		縄文地			北白川上層式3期 (点数・重量g)		縄文地		
		磨消繩文	縄文・沈線	縄文のみ			磨消繩文	縄文・沈線	縄文のみ
縄	RL	36	18	71	250	RL	767	842	1131
	LR	25	5	27	59	LR	377	152	296
	結節RL(S字状)		15			結節RL(S字状)		616	
	結節LR(Z字状)	1	4	11		結節LR(Z字状)	3	93	190
文	多条・異条等			7		多条・異条等			199
	付加条・撲条等			3		付加条・撲条等			95
	卷貝印軸					卷貝印軸			
	卷貝刺突					卷貝刺突			
縄	二枚貝背部押圧					二枚貝背部押圧			
	二枚貝腹縁刻み					二枚貝腹縁刻み			
	巻刻み					巻刻み			
	R刻み					R刻み			
文	L刻み					L刻み			
	合計	62	42	98	330	合計	1147	1703	1427
									4575
一乗寺K式 (点数・重量g)		縄文地			一乗寺K式 (点数・重量g)		縄文地		
		磨消繩文	縄文・沈線	縄文のみ			磨消繩文	縄文・沈線	縄文のみ
縄	RL	4	16	6	4	RL	55	137	95
	LR	12	6	4	3	LR	387	64	216
	結節RL(S字状)		1			結節RL(S字状)		7	54
	結節LR(Z字状)		2	2	18	結節LR(Z字状)		19	20
文	多条・異条等	1	8	1		多条・異条等	35	129	14
	付加条・撲条等	6	2	3	1	付加条・撲条等	76	26	9
	卷貝印軸	10	1	1		卷貝印軸	123	11	9
	卷貝刺突	1				卷貝刺突	13		
縄	二枚貝背部押圧	1				二枚貝背部押圧	9		
	二枚貝腹縁刻み	10				二枚貝腹縁刻み	110		
	巻刻み	5				巻刻み	86		
	R刻み	4	1			R刻み	97	32	
文	L刻み					L刻み			
	合計	54	37	17	29	合計	991	425	380
									651
元住吉山I式 (点数・重量g)		縄文地			元住吉山I式 (点数・重量g)		縄文地		
		磨消繩文	縄文・沈線	縄文のみ			磨消繩文	縄文・沈線	縄文のみ
縄	RL	3	4		1	RL	90	52	
	LR	1	1			LR	47	3	
	結節RL(S字状)					結節RL(S字状)			
	結節LR(Z字状)					結節LR(Z字状)			
文	多条・異条等					多条・異条等			
	付加条・撲条等					付加条・撲条等			
	卷貝印軸	77	1			卷貝印軸	1526	10	
	卷貝刺突	2				卷貝刺突	51		
縄	二枚貝背部押圧	23				二枚貝背部押圧	613		
	二枚貝腹縁刻み	5				二枚貝腹縁刻み	51		
	巻刻み	7				巻刻み	66		
	R刻み	48				R刻み	799		
文	L刻み	19				L刻み	653		
	合計	185	6	0	1	合計	3896	65	0
									7

層式3期（の後半期）から一乗寺K式、そして元住吉山I式にかけてどのように展開するのかを、第24表下段の3区・4-1区を合計した型式別の様相でさらに詳しく見ていきたい。

北白川上層式3期（中～新段階）

この時期の大部分は3区からの出土土器である。縄文地の施文が一般的であり、2段の縄文のほか、結節縄文や異条縄文がみられる。2段の縄文ではRL縄文がLR縄文よりも優勢である様子がよく分かり、RLを基調とする縄文施文が展開していたと思われる。一方、結節縄文では、RLによるS字状の結節縄文とLRによる結節縄文が概ね同程度であるが、詳しく見ると磨消縄文手法にRLによるS字状の結節縄文が比較的多く採用され、結節縄文のみの場合にはLRによるZ字状のものが多用される傾向にある。結節縄文は北白川上層式3期の新段階から出現することが知られており、この時期に2段の縄文と同様に地文として採用され、一部では磨消縄文手法にも用いられていたことが分かる。なお、磨消縄文手法が北白川上層式3期の前半期に採用された資料は今回の検討では確認できず、近畿地方でも北白川上層式3期の新段階で磨消縄文手法へ変化するとの見方が示されているため（千葉2015）、当地域でもこの時期から出現した可能性が高いと考えられる。

一乗寺K式期

この時期の3区出土の土器は少なく、多くが4-1区の出土土器となる。縄文施文の文様要素において、結節縄文ではRLによるS字状のものが全体的に少くなり、LRによるZ字状の結節縄文が目立つ。これらのほとんどは結節縄文のみの縄文地で、磨消縄文手法に結節縄文が用いられる土器はほとんど確認できず、代わりに多条縄文や異条縄文などの多様な縄文施文が磨消縄文手法に目立つ状況が注目される。また全体的に見ると、LR縄文が用いられる縄文施文がやや多く、RL優勢の前時期から変化していることが指摘できる。そして縄文地や磨消縄文手法が一定量確認できる一方で、充填縄文手法の割合が増加する傾向にある。なお、充填縄文手法には2段の縄文が採用されるものの、結節縄文は確認できなかった。結節縄文を施文後に沈線を引き直した場合などの可能性はなくはないが、京田遺跡出土の資料からは観察できない。また、充填縄文手法の特徴としては、巻貝や二枚貝を用いた擬縄文が展開する様子が見て取れ、充填縄文手法による施文手法が主体的になるのに伴い、擬縄文が多用されることが分かる。なお、擬縄文では巻貝回転によるものや、二枚貝腹縁刻みが多くを占めるほか、縦刻みやR刻みなどによる擬縄文が一定量存在する。これらは充填縄文手法で主に用いられるが、一部では巻貝回転による擬縄文が磨消縄文手法にもわずかに確認できる。こうした施文手法の転換が一乗寺K式期のなかで生じていたと思われ、結節縄文や多条縄文など多彩な縄文施文と磨消縄文手法を主に用いる時期から、巻貝や二枚貝などを用いた擬縄文の施文による充填縄文手法が多くなる時期へと次第に移行したと理解したい。

元住吉山I式期

この時期の土器は3区でほとんど確認されておらず、4-1区での出土土器が多数を占める。2段の縄文施文は残存するが、結節縄文や多条縄文などの多彩な縄文施文はみられず、擬縄文による施文が多い。擬縄文では、巻貝回転によるものの割合が多くなり、前時期ではほとんどみられなかった二枚貝背部押圧による擬縄文が増加する点が注目される。また、この時期になるとR刻みによる擬縄

文が多く、前時期にみられなかったL刻みの擬縄文も一定量確認できる。一乗寺K式期にL刻みが全く確認できないかどうかは議論の余地があろうが、少なくとも一乗寺K式期にはR刻みが優勢で、元住吉山I式期になるとL刻みも次第に増加していくといった時期的な変遷が指摘できる。こうした刻みの時期的変遷は、一乗寺向畠遺跡での擬縄文の分析結果（木村・上阪2014）とも合致し、近畿地方と同様の傾向を示している。また、この時期には縄文を用いた磨消縄文手法はさらに少くなり、擬縄文による充填縄文手法が主体を占める。このなかで巻貝回転による擬縄文の磨消縄文手法は前時期と同様にほとんど確認できず、擬縄文を充填後に一部を磨り消す土器も見受けられるが、基本的には充填縄文手法が主流になる。

（2）京田遺跡周辺における遺跡出土土器群の検討

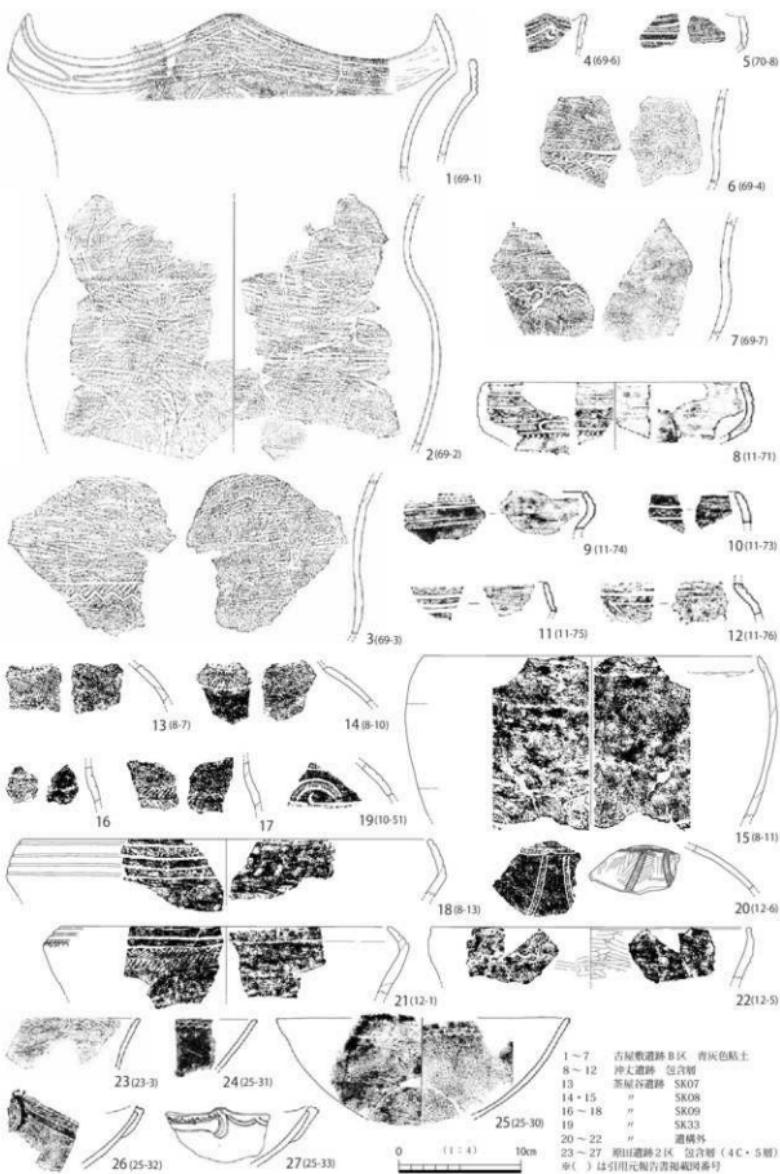
これまでに見てきたように、京田遺跡3区と4-1区の資料からは施文手法が時期的に変遷していく様子が分かった。ここで後期中葉の土器編年を検討するうえで注目すべきは、一乗寺K式期における縄文施文から擬縄文施文への主な施文手法の転換と、元住吉山I式期で盛行する刻みによる擬縄文の展開である。これらについて、京田遺跡を含めた山陰中央部の各遺跡（第111図）から出土した後期中葉の土器群（第112・113図）を含めて詳しく見ていくたい。

一乗寺K式期の施文手法の転換（第112図）

日本海沿岸部付近に位置する大田市古屋敷遺跡のB区では、後期から晩期の土器が多数出土しており（宮本編2017），そのなかで青灰色粘土出土土器群は一乗寺K式期的良好なまとまりを示す。第112図1・2は胎土や器面調整などで同一個体であると観察でき、内湾内屈する波状口縁で器形は一乗寺K式期の特徴を示す。注目されるのは、口縁部と胴部に巻貝回転による擬縄文を地文として施し、その後に沈線で文様や沈線区画を描く点である。さらに口縁部と胴部にはRL縄文が部分的に



第111図 京田遺跡周辺の主な後期中葉の遺跡



第112図 古屋敷遺跡B区・沖丈遺跡・茶屋谷遺跡・原田遺跡2区出土土器

存在し、同一器面の地文のなかに縄文施文と擬縄文施文が同伴する様子が確認できるため、縄文地のなかに縄文と擬縄文が同時に採用されていたことを示唆する。その他の土器には磨消縄文手法が認められるなど（第112図4・5など）、縄文地（および擬縄文地）と磨消縄文手法による施文がなされていたことが読み取れる。つまり、充填縄文手法が盛行する以前に擬縄文による施文が出現していた可能性が高いことを示している。

一乗寺K式期には、2段の縄文施文とともに北白川上層式3期の新段階から続く結節縄文や多条縄文などの多彩な縄文施文が目立つ様相のなかで擬縄文が出現し、その割合が徐々に増加する時期であると考えられる。そのなかで比較的節の細かい多条縄文などは、巻貝回転による擬縄文と視覚的に類似し、これらに代替するよう採用されたことが推測できるが、その一方で、結節縄文はどのように変化、あるいは転換していくのかを考察する必要がある。そこで、京田遺跡から南に向かった神戸川中流域に位置する出雲市佐田町茶屋谷遺跡（田中編1998）の土器群に注目したい。茶屋谷遺跡では結節縄文や擬縄文を施す一乗寺K式期の土器が比較的まとまって出土した⁽⁵⁾。多条縄文を施すものもあるが（第112図13・16など）、LRやLLRによる結節縄文を地文としており、一部には磨消縄文手法を採用する深鉢や注口土器がみられる（第112図14・17・18・22など）。なお、結節縄文のほかに密な縦刻みによる擬縄文が施された注口土器が存在し、光沢を帯びた丁寧なミガキ調整で精緻に仕上げている（第112図19・20）。その一方で、結節縄文は施されないが、視覚的に結節縄文を表現したと考えられる屈曲口縁の深鉢が確認できる（第112図21）。口縁部に3条の区画沈線をめぐらせ、屈曲部下にLR縄文を施して屈曲部には沈線で山形文を描き、LRによる結節縄文のZ字状が代替されたような、いわば擬似的な結節縄文となっている。結節縄文が施文される時期に一部で擬似的な結節縄文が出現したと考えられるが、口縁部形態を見ると、結節縄文が施される他の土器群よりも口縁部幅が狭く、これまでの京田遺跡での検討のほか、近畿地方の佃遺跡や一乗寺向畠町遺跡での分析（岡田・深井1998、小泉2014）などを踏まえると、相対的に新しい特徴を示していると思われる。これらを時期差として捉えれば、当地域では、結節縄文が残らない元住吉山I式期までにこうした代替表現や簡略的な表現による擬似結節縄文へと徐々に変容した可能性が指摘できる。また、改めて古屋敷遺跡B区の青灰色粘土出土土器群に目を向けると、第112図3・6・7の深鉢はLR縄文を地文に施して山形文を描き、茶屋谷遺跡の深鉢（第112図21）と類似した文様構成になる。この様相を積極的に評価すれば、古屋敷遺跡でも擬似的な結節縄文による文様表現が採用されていると判断でき、それは同じ青灰色粘土土器群の第112図1・2で確認した文様要素の一部に擬縄文が採用される初期段階と連動していたという仮説が成立つ。

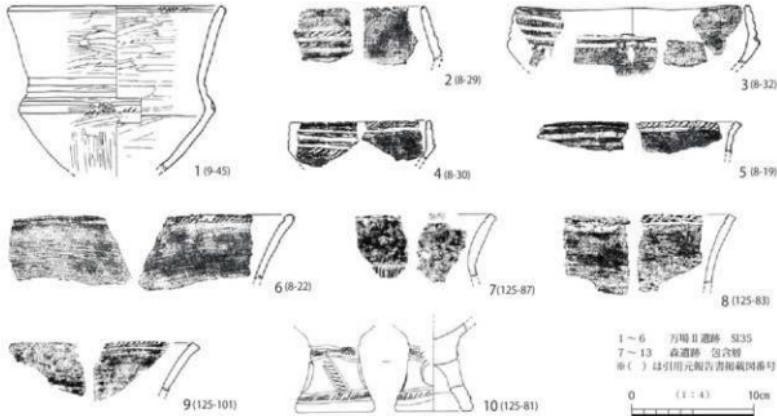
ここで留意しなければならないのが、結節縄文などの多彩な縄文施文の西方展開の様相である。これらは近畿地方以西では散見される程度で、九州地方ではほとんど確認されず（泉1981a・1981b、福永2018）、九州地方と近畿地方の中間地帯に位置する鳥取県内では、多彩な縄文施文を採用する西端域を見出すことができる可能性が高い。古屋敷遺跡ではB区以外にも後期中葉の土器が多く出土しているものの、結節縄文は未報告資料を含めて管見の限りほとんど確認できなかったため、結節縄文に代表される多彩な縄文施文は古屋敷遺跡付近ではあまり採用されていなかったと考えられる。古屋敷

遺跡からやや東方に位置し、江の川中上流域に所在する沖丈遺跡では、遺構単位や層位的なまとまりは確認できないが、包含層から後期中葉の土器が多数出土している（牧田編 2001）。沖丈遺跡の土器群には結節縄文を持つ深鉢や鉢（第 112 図 8～11）が確認されており、今後の新たな調査によって変更が生じる可能性は否定できないものの、現時点では沖丈遺跡周辺までが結節縄文などの多彩な縄文施文を主に採用した西端域であると理解してよいだろう。沖丈遺跡では、結節縄文を持つ深鉢や鉢のほか、古屋敷遺跡で確認したような擬似的な結節縄文を施す深鉢が確認でき（第 112 図 12），結節縄文が変容した擬似結節縄文を施す時期が存在した可能性を示唆する。こうした擬似的な結節縄文と思われるものは、京田遺跡以東に位置する遺跡でも確認できる。例えば、斐伊川中上流域の奥出雲町原田遺跡では、後期中葉から後葉にかけての包含層（2 区 4C・5 層）が確認され（勝部・花田編 2006），そのなかでは結節縄文が施文される深鉢や浅鉢のほか（第 112 図 23～25），結節縄文を模したと思われる重複連弧文や蛇行文を施す浅鉢が出土している（第 112 図 26・27）。

このように、結節縄文や多条縄文などの多彩な縄文施文は、時期が下るにつれて巻貝回転などの擬似縄文や擬似的な結節縄文へと文様表現の置換された土器が一定程度波及していくことが推測され、それは一乗寺 K 式期のなかでも後半期頃であったと考えられる。

元住吉山 I 式期の擬縄文の展開（第 113 図）

京田遺跡 3 区・4-1 区におけるこれまでの分析では、刻みによる擬縄文は一乗寺 K 式期の後半期になって出現し、それが充填縄文手法を伴って元住吉山 I 式期まで継続するなかで、R 刻みから次第に L 刻みの割合が増加する様子が確認できた。山陰中央部では、斜め刻みによる擬縄文は後期後葉の宮滝式期にはほとんど消失することが指摘されており（柳浦 2010）、元住吉山 I 式期から沈線が凹線に置換する後期後葉の元住吉山 II 式期にかけて多用されたと考えられる。飯南町万場 II 遺跡では、後期中葉から後期後葉の土器が遺構単位でまとめて出土しており（山崎編 2007），土器の様相から盛期は元住吉山 II 式期から宮滝式期であると判断できる。SI35 の出土土器は、元住吉山 I 式期から



第 113 図 万場 II 遺跡・森遺跡出土土器

宮滝式期までの土器が出土した。そのなかで、凹線が施された元住吉山Ⅱ式期の深鉢や鉢（第113図1～4）ではL刻みが優勢で、その他の遺構や遺構以外の出土土器も元住吉山Ⅱ式期にL刻みが多用される印象を受ける。

また、万場Ⅱ遺跡の土器群では、SI35出土の土器を含め、外反する平口縁の口縁部内面に区画沈線を引いて斜め刻みの擬縄文を施す深鉢や鉢・浅鉢（第113図5・6など）が多いのが特徴である。これらについて、柳浦氏は凹線へと転換する元住吉山Ⅱ式期直前の土器群として巻貝回転などの擬縄文が施される土器よりも新しい段階として理解し、森遺跡における包含層出土の後期中葉から後葉の土器群（柳浦編1994）が巻貝回転などによる擬縄文をあまり含まない状態で、沈線と刻みを持つ深鉢や鉢など（第113図7～10）がまとまって出土する点に注目している（柳浦2010）。この点に関して、改めて京田遺跡の土器を見ると、このタイプの土器は3区からの出土はわずかで、4-1区でもある程度出土しているものの、その数は相対的に少ない。施文手法の変遷検討でも確認したように、4-1区出土の元住吉山Ⅰ式では巻貝回転や二枚貝背部押圧による擬縄文の施文が中心であり、元住吉山Ⅰ式の前半期が比較的まとまる資料群として捉えられる。4-1区の元住吉山Ⅰ式には波状口縁の波頂部に隆帯や突起が付き、屈曲した口縁部の沈線区画帶の上下に巻貝回転や斜め刻みによる擬縄文が施された深鉢や鉢が目立つが、万場Ⅱ遺跡や森遺跡ではほとんど確認できない。こうした状況を総合的に考えれば、山陰中央部では隆帯や突起などが付く波状口縁の深鉢や鉢は元住吉山Ⅰ式の前半期を中心に展開し、後半期になると外反して口縁部内面に区画沈線と刻みによる擬縄文を施す平口縁の土器が比較的多くなると考えられる。なお、第3章第5節でも触れたが、波状口縁の波頂部の突起が肥大化した深鉢が存在し、後半期の所産と考えられるものの、京田遺跡では資料数が少ない。

ここで、これまでの内容を踏まえると、斜め刻みによる擬縄文は以下のような展開を見せる。一乗寺K式期から存在し、元住吉山Ⅰ式期、そして後期後葉の元住吉山Ⅱ式期へと移行するのに伴ってR刻みからL刻みが多くなる傾向を示す。また元住吉山Ⅰ式の前半期に主体となる突起付の波状口縁深鉢には巻貝回転などに加えて斜め刻みによる擬縄文が施され、その後、後半期から元住吉山Ⅱ式期にかけて増加する、外反した平口縁の深鉢の口縁部内面には斜め刻みによる擬縄文が安定して展開するという様相が確認できた。

4 まとめ—後期中葉の土器編年試案—

（1）3区・4-1区出土有文土器の編年試案

これまでの遺構出土資料や良好な層位の資料をもとにした検討によって、京田遺跡のなかで北白川上層式3期から元住吉山Ⅰ式期までの土器変遷が追えることが分かる。ここでは、これまでの検討で明らかになった有文土器の施文手法の時期的変遷を中心に、北白川上層式3期から元住吉山Ⅰ式期までを京田1～7期に区分した（第114図）。さらに第3章第5節で検討した無文土器や底部形態などの成果や、土器編年の先行研究の成果（平井1993、阿部1994、岡田・深井1998、玉田・岡田2010、千葉2001・2010・2014b・2015、柳浦2010・2017a・2017b、小泉2014など）を踏まえて、3区と4-1区出土の後期中葉の土器編年を整理したい。

京田1・2期

この時期は3区SK06にみられた口縁部が内湾内屈して結節縄文や沈線内刺突の施文される土器が出現する以前の時期に比定でき、主にRL縄文による縄文地の土器が多い。しかし、1・2期は今回の調査では出土量が少なく、両時期は明確に分離できなかった。近畿地方の北白川上層式3期の古段階・中段階（千葉2014b・2015、小泉2014）および、瀬戸内地域の津島岡大第IV群・四元式（平井1993・阿部1994）にそれぞれ併行する。

深鉢では波状口縁で外反する口縁部を持ち、波状口縁の波頂部はM字状を呈するものが確認できる（第38図15）。胴部はやや張り出すものが目立つほか（第39図28）、北久根山式の影響がみられる屈曲した胴部も散見される（3区第42図23、第42図92など）。口縁部と胴部には縄文地が展開することが多く、その上から沈線や条線などで文様を描く（3区第40図32）。文様は入組文や渦巻文などが確認できる（第40図23・24）。沈線のなかには押し引き沈線が施されるのがみられ（第38図12）、沈線内刺突へと続く要素が出現する点が注目される。

鉢・浅鉢には口縁部と胴部に縄文施文が施され、一部では擬似羽状縄文を表現する（第38図13）。ボウル状の鉢も確認でき、口縁端部に縄文施文がなされる（第36図17）。また、屈曲して胴上部に縄文が施されるものも確認できるが、これは注口土器の可能性もある（3区第42図21）。

注口土器は全形が分かるものは少ないが、加曾利B1式の注口土器が伴うほか（3区第44図27・28、第46図164）、内屈する口縁部の注口土器（3区第44図14）もこの時期と考えた。

京田3期

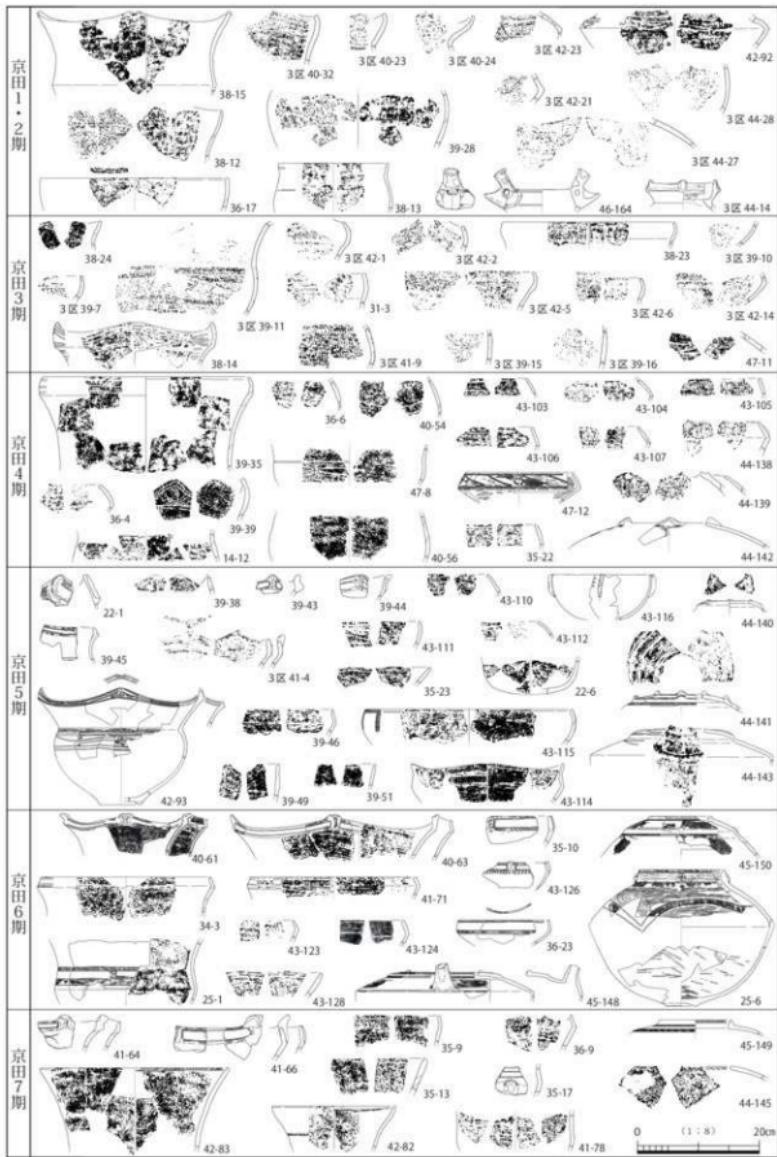
3区のSK06出土の土器群を中心に、結節縄文や沈線内刺突が施される土器が出現する。結節縄文は地文として採用され、一部に磨消縄文手法が認められる。結節縄文にはRLによるS字状のものが目立つ傾向にある。近畿地方の北白川上層式3期の新段階（千葉2014b・2015）や佃下層期（岡田・深井1998）に併行する時期で、一乘寺K式の直前段階にあたる。

深鉢は、京田1・2期にみられた外反する口縁部外面に結節縄文が施される（第38図24）。また内湾内屈する口縁部が目立ち、結節縄文が地文として口縁部や胴部に施され、文様施文後に一部が磨り消される（3区第39図7・11、3区第42図1・2）。そのなかには連続した沈線内刺突も認められる（3区第41図9）。口縁部は波状口縁のほか、平口縁も一定量出土する（3区第42図5・6、第38図23）。結節縄文のほかに異条斜縄文なども一部で展開する（3区第39図15・16）。文様はやや簡素化した渦巻文や、巻込文を描くものがある（第31図3、第38図14、3区第41図9）。

鉢・浅鉢や注口土器の様相は不明瞭であるが、少数ながら確認されており、地文に結節縄文が用いられる（3区第39図10、3区第42図14）。器形は前時期から大きな変化はないように見受けられる。磨消縄文手法によって器面が丁寧に磨かれる注口土器の胴上部についても、この時期の可能性があると考えられる（第47図11）。

京田4期

4-1区の竪穴建物跡SI1601や21層中および遺構面（21層上面）出土のものを中心とした土器群で、結節縄文や多条縄文などの多彩な縄文施文や沈線内刺突が盛行するほか、文様では6字文が主



第114図 京田1～7期の土器編年試案

に展開し、磨消繩文手法が多い。京田4・5期の縄文施文にはLR繩文、結節繩文ではLRによるZ字状のものが目立つ。一乗寺K式の古段階（岡田・深井1998、小泉2014）に対応すると考えられ、瀬戸内地域では彦崎K2式古段階（千葉2010）が京田4・5期に該当する。

深鉢では平口縁で穏やかに内湾内屈する口縁部を持つものが確認できる（第39図35）。その他に波状口縁や平口縁において、内屈や内湾して広い口縁部幅を持つ深鉢が一定量存在する（第36図4、第39図39）。残存状況は良好ではないが、口縁部に段を持つ深鉢があり（第36図6）、近畿地方の影響を考えられる。地文には2段の縄文のほか、結節繩文や多条縄文など、多彩な縄文施文が引き続き展開し、一部に磨消繩文手法が用いられる（第36図6、第47図8）。なお、結節繩文にはLRによるZ字状のものが多い。胴部にも結節繩文や多条縄文などが地文で施され、磨消繩文手法が用いられる深鉢（第14図12）や、部分的な施文の深鉢（第40図56）も確認できる。文様では6文字がみられるほか（第40図54）、巻込文から6文字へと変化する過渡的な文様も見受けられる（第39図35）。

鉢・浅鉢では、内屈や内湾して幅の広い口縁部を持つものが多くを占め、2段の縄文のほか、結節繩文や付加条繩文などが主体的であり、一部を磨り消すものが目立つ（第43図103～105）。またボウル状の器形になる可能性のある鉢には、撚糸文が施される（第35図22）。文様は深鉢と同じく6文字が存在するほか（第43図107、第47図12）、連弧文なども確認できる（第43図106）。

注口土器には屈曲する口縁部にノ字状隆帯と縱刻みが施される土器が存在する（第44図138）。またドーム状の器形が存在し、沈線内刺突が展開する（第44図139）。そのなかには6文字やI字状隆帯とともに、巻貝回転による擬繩文が施されたものが確認できる（第44図142）。注口土器では縱刻みや巻貝回転などがこの時期に一部で出現していた可能性があり、これらは擬繩文が一定量出土する京田5期に比較的近い時期と考えられる。

京田5期

4-1区の遺構内出土土器では、土坑SK1601・SK1602などに確認できる。一部では結節繩文が残存する可能性があり、京田遺跡では出土しなかったが茶屋谷遺跡や古屋敷遺跡などで確認したように、擬似的な結節繩文が一定量展開する。また、巻貝や二枚貝などによる擬繩文の施文、そして充填繩文手法による施文が多く確認できる時期である。また擬繩文には縱刻みや斜め刻みも確認でき、斜め刻みではR刻みが優勢であったと考えられる。この時期は擬繩文による施文が多数を占める元住吉山1式期への移行段階と捉えることができ、一乗寺K式の新段階（岡田・深井1998、小泉2014）に比定できる。

深鉢には波状口縁で波頂部にノ字状隆帯を持ち、二枚貝腹縁刻みや縱刻みによる擬繩文が施されるものが確認できる（第22図1、第39図38）。波状口縁では、京田6・7期と比べてそれほど発達しない隆帯や突起が波頂部に付く内屈深鉢もこの時期と考えられる（第39図43・44、3区第41図4）。その他に外側に開く頸部に内屈する口縁部が付く波状口縁も確認でき、九州系土器の要素が見受けられる（第39図45）。なお、九州系の西平式の深鉢または鉢（第42図93）はこの時期に併行すると考えられる。平口縁には屈曲する比較的幅の広い口縁部が展開するが、沈線区画帶上下に巻貝回転による擬繩文が充填され、区画帶内は磨り消される（第39図46）。そのほか、直口で平口縁の深鉢も散見

される。口縁部内面に結節縄文や2段の縄文と沈線などの施文がみられ（第39図49・51），京田4期から5期にかけての時期と考えられる。

鉢・浅鉢には内屈または内湾する，やや幅の広い口縁部を持つ平口縁が確認でき，卷貝回転による擬縄文が地文として一部に施され，擬縄文を用いる初期様相を示すと考えられる（第43図110・111）。その他，二枚貝腹縁刻みによる擬縄文が充填されるものもある（第43図112など）。外に開く器形の浅鉢には，口縁部内面にR刻みのほか，沈線内刺突が確認できる（第35図23）。また，ボウル状の器形が引き続き確認でき，無節縄文や刻みによる擬縄文が充填されるほか（第22図6，第43図115），ノ字状隆帯が付くものもある（第43図116）。一方で波状口縁も存在し，二枚貝腹縁刻みによる擬縄文が口縁部内面や頸部に密に施される（第43図114）。

注口土器では明確な肩部を持つものが目立つ。ノ字状隆帯のほか，瘤状突起が付き，器面には卷貝回転や斜め刻みによる擬縄文が施されている（第44図140・141・143）。

京田6期

この時期には4-1区の土坑SK1603から出土した土器群のほか，包含層中から多数出土している。縄文施文は少くなり，卷貝や二枚貝，刻みによる擬縄文の施文が中心となる。擬縄文のなかでも卷貝回転によるものが比較的多い。刻みは京田5期よりもL刻みの割合が増加すると思われる。また波頂部に隆帯や突起を持つ波状口縁の深鉢が目立ち，近畿地方の元住吉山I式の様相と類似する点が多い。元住吉山I式の古段階（岡田・深井1998，小泉2014）と同時期と考えられる。

深鉢には波頂部に隆帯や突起が付く波状口縁が多く，屈曲した口縁部の沈線区画帯の上下には卷貝回転や刻みによる擬縄文が多用される（第40図61・63など）。波状口縁のほかに平口縁も存在しており，屈曲する口縁部の沈線区画帯の上下には，波状口縁と同様に擬縄文が施文される（第34図3など）。なお，平口縁で屈曲する口縁部の深鉢は京田7期にも確認でき，両時期の区分は難しいが，4-1区の出土土器では斜め刻みにR刻みが目立ち，また縄文施文が確認できる屈曲口縁（第41図71）も存在する。そのため，4-1区出土のものは京田6期を中心に展開したと考えたい。深鉢の胴部には，卷貝回転や二枚貝背部押圧による施文のほか，沈線でL字状にクランク文を描くものが確認できる（第25図1）。

鉢・浅鉢では，屈曲する口縁部に隆帯を施して沈線区画帯の上下に刻みによる擬縄文が確認でき（第35図10，第43図126），また卷貝回転による擬縄文もみられる（第43図123・124）。外反して口縁部内面に区画沈線とR刻みの擬縄文がめぐる土器には器面が丁寧に磨かれるものが確認できる（第43図128）。その他，屈曲する平口縁の深鉢と相似的な形態と文様構成の浅鉢が見受けられる（第36図23）。

注口土器は比較的豊富に出土した。器面には複数工具の擬縄文による整然とした文様構成を持つものが目立ち，前時期においてみられた瘤状突起や隆帯が簡略化している（第45図148，第45図150）。また頸部に刺突を施した隆帯が付く注口土器の胴上部には，二枚貝背部押圧による擬縄文を充填した連弧文の文様帶が描かれるが，俯瞰すると文様帶が方形となるなど，装飾性に優れた意匠が表現されている（第25図6）。

京田7期

遺構内出土の土器からは明確に確認できなかったが、包含層からはこの時期と考えられる土器が出土している。巻貝回転よりもL刻みによる擬縄文が目立ち、平口縁で口縁部内面に区画沈線と刻みの擬縄文を施す深鉢の割合が京田6期よりも多くなると思われる。凹線文が展開する元住吉山Ⅱ式直前段階の元住吉山Ⅰ式新段階（岡田・深井 1998、小泉 2014）に併行する時期である。

深鉢では波状口縁の波頂部に付く突起が肥大化するが（第41図64・66）、このタイプの深鉢は京田6期に比べて減少する傾向にある。突起が付かず沈線で文様を描く波状口縁や平口縁（第35図9、第36図9）などもこの時期と考えた。平口縁で外反する口縁部内面に区画沈線と斜め刻みによる擬縄文を施した深鉢が一定量出土するが、4-1区では相対的に少ない。大きく外反してL刻みがめぐる深鉢のほか（第42図83）、器壁が厚くてそれほど外反しない深鉢（第35図13）や口縁部の先端が内湾して緩やかなS字形の器形になるもの（第42図82）などバリエーションが増加する。また京田6期から7期と思われる、口縁部と同様に胴部にも沈線のみで文様を描く土器が存在するが（第41図78など）、やや粗雑な仕上がりであるため、ここでは京田7期に含めた。その他、元住吉山Ⅱ式の器形や文様構成で凹線に置換していない胴部があり（第35図17）、この時期の所産と考えられる。

鉢・浅鉢で厳密にこの時期に比定できるものは少ない。注口土器においては、口縁部の断面が三角形状になり、京田6期より口縁部の肥厚が比較的大きいものがこの時期に該当する（第45図149）。この形態を持つ注口土器は、前時期よりもやや文様が簡略化する傾向にある。またドーム状になる器形の注口土器の口縁部内面には斜め刻みが施され（第44図145）、この時期に比定できると考えた。

（2）3区・4-1区出土の無文土器・底部形態の時期的変遷

第3章第5節での検討では、無文土器と底部形態について3区と4-1区での違いが大まかに把握できた。これまでの検討で、3区は京田1~3期、4-1区は京田4~7期が出土土器の主な時期として区分できる。こうした前提を踏まえ、ここでは無文土器や底部形態の特徴を改めて整理する。

無文土器

無文土器の器形は多くが直口で砲弾形になるタイプが多い。こうした形態は後期前葉に顕著にみられることが知られており（柳浦 2010），今回の検討では後期中葉でも同様の様相が展開していたと思われる。そのなかで、山陰中央部に特有の内面肥厚指頭圧痕土器も同様に確認され、京田3期頃まで展開することが指摘されていたが（柳浦 2010、千葉 2014a），4-1区からも一定量出土しており、京田3期以降も存続した可能性が高い。4-1区では指頭の押圧痕が残るもの以外に、ヨコナデ調整で圧痕が不明瞭なものや断面が三角形状に肥厚部するなど、押圧後に調整が加えられる様子が見受けられる。ここで改めて茶屋谷遺跡の土器群を見ると、SK08ではLLRによる結節縄文が施されて京田4期に比定できる注口土器（第8図10）に伴い、口縁部内面が肥厚してヨコナデ調整がなされる砲弾形の無文土器が出土しており（第8図11），これは内面肥厚指頭圧痕土器の変容したものと考えられる。これらを総合して考えると、京田4期頃までは展開したと理解できる。

また無文土器の器面調整において、粗い巻貝条痕調整は山陰中央部にみられる特有の調整技法であるが、3区から4-1区にかけて明らかに減少するため、京田4期以降にはかなり少なくなる調整技

法であるといえ、内面肥厚指頭圧痕土器と同様に、京田4期頃までの時期に収まる可能性を考えることができる。

底部形態

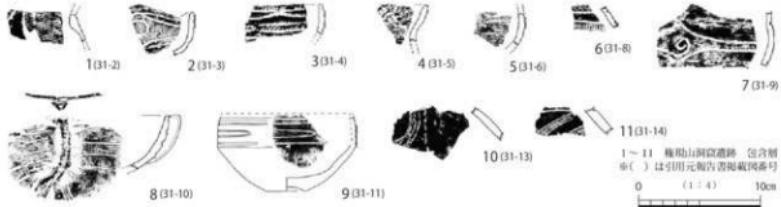
3区と4-1区ともに平底が優勢であったが、4-1区では凹底の割合がやや多くなり、それに伴って2段凹底(ヘソ底)も目立ってくる。また底径は、凹底が増加するのに合わせて縮小する傾向にあり、北陸地方から瀬戸内地域にかけての広域的な動向(西原・妹尾2014)と連動する。一方で、底部外縁が突帯状に肥厚する底縁肥厚型の底部も見つかっており、これらは近畿地方や瀬戸内地域ではあまり確認できず、当地域の特色を示していると思われる。4-1区よりも3区で多い傾向にあり、京田3期以前に盛期があったと考えられ、京田4期以降には減少すると見込まれる。

ここまで、無文土器と底部形態を確認してきたが、内面肥厚指頭圧痕土器や器面調整、底部形態などで独自の地域性を示す特徴が京田4期頃までは継続するものの、それ以降は減少する、あるいは確認できなくなるといった変遷を示す可能性が高いことが明らかになった。つまり、一乗寺K式古段階の時期まで顕在化していた地域性が徐々にみられなくなり、その後に各地で元住吉山I式の特徴を持つ土器が広域的に展開するという仮説が成り立つ。こうした仮説に依拠すれば、京田5期は、一乗寺K式期の前半まで顕在化していた地域性が薄れて広域的共通性の高い元住吉山I式が成立する移行段階として評価することが支持されよう。

(3) 既存型式との関係性の検討—京田式の設定

第1項で整理したが、山陰地方では北白川上層式3期、一乗寺K式、元住吉山I式に対応する型式として沖丈式、権現山式古段階および新段階が知られるものの、型式内容が明確になっていない部分があり、良好な資料をもとに再検討する必要性が指摘してきた(柳浦2017b)。沖丈式の型式内容は京田2期に該当すると思われるが、千葉氏も触れているように(千葉2001)、既存の型式内容では結節縄文や沈線内刺突は含まれていないため、京田3期は今回初めて明確になったといえる。瀬戸内地域で沖丈式と対応する四元式の段階には、結節縄文や付加条縄文などがわずかに作ることが指摘されており(千葉2001・2010)、こうした点を考慮すれば、従来の沖丈式と対応する京田2期を沖丈式古相、結節縄文などが伴う京田3期を沖丈式の新相として認識できる。

権現山式は権現山洞窟遺跡出土の土器群を元住吉山式に対比して紹介されたもので、当初は型式の設定がなされていない後期中葉の土器全般を含んだ資料群であった(第115図1~11)。沖丈式の型式設定時に、千葉氏によって権現山式から沖丈式を抽出した残りの沖丈遺跡出土土器群を権現山式の



第25表 京田1～7期と各地の土器型式の併行関係

京田編年	東部瀬戸内	近畿地方
	平井1993／阿部1994 千葉2010	岡田・深井1998／玉田・岡田2010 小泉2014／千葉2014b・2015
京田1期	津島岡大第IV群	北白川上層式3期古段階
京田2期	四元式	北白川上層式3期中段階
京田3期		北白川上層式3期新段階／佃下層期
京田4期	彦崎K2式古段階	一乗寺K式古段階
京田5期		一乗寺K式新段階
京田6期	彦崎K2式新段階	元住吉山I式古段階
京田7期		元住吉山I式新段階

古段階と新段階に区分されているが（千葉2001），その後は資料に恵まれず，古段階に関しては結節縄文が多くを占めるものとしてしか認定できていないのが現状であった（柳浦2010）。そのため，現在の型式要件では京田3期との区別は困難であり，京田遺跡や古屋敷遺跡などの新たな資料によって再検討する提案（柳浦2017b）がなされたという経緯がある。今回の京田遺跡3

区・4-1区や古屋敷遺跡，および周辺遺跡から出土した土器群の具体的な検討により，土器編年が進んだ近畿地方の土器編年に対応しつつ，一乗寺K式期の前半期を京田4期，後半期を京田5期として区分して理解し，この地域で独自に展開する時期的変遷が確認できた。よって，従来の権現山式古段階から一乗寺K式直前段階の京田3期を差し引いたものを「京田式」として設定し，京田4期を古相，そして5期を新相として捉え，京田3期に後続する一乗寺K式併行期の山陰中央部の型式として理解したい。また，後続する京田6・7期については，概ね近畿地方の元住吉山I式と類似した特徴を示していることが明確になり，元住吉山I式が九州地方を除く西日本全域で広く展開するという状況（泉1981b）が山陰地方でも追認できた。よって，権現山洞窟遺跡出土土器が元住吉山式に対比された経緯を重視して近畿地方の元住吉山I式に対応する型式を権現山式とした理解（柳浦2017b）を支持する内容となり，京田6・7期はそれぞれ古相・新相として新たに位置づけることができよう。

今回の検討では京田1～7期を近畿地方や瀬戸内地域の土器型式と対応させて確認したが（第25表），既存の型式を再検討するには慎重を要する。しかし，基準となる権現山洞窟遺跡出土土器群（権現山式）に対比された元住吉山式の内容に依拠しつつ，一乗寺向畠町遺跡北部地区の土器群をもとに一乗寺K式が設定された経緯（佐原1961）や，権現山洞窟遺跡出土土器群から北白川上層式3期併行の土器群が抽出されて沖丈式が設定されたこと（千葉2001）を考えると，従来の権現山式から一乗寺K式併行の土器群を京田遺跡の資料や検討内容にもとづいて明確化し，今後の新たな資料が増加した場合に対応するための足掛かりとして整理しておくことは必要であると考える。それが今回の京田遺跡出土の土器群が果たす現段階での役割であり，また今後の新出資料によって型式内容をさらに補足および補正るべきであろう。

(幡中光輔)

本稿をなすにあたり，島根県教育庁埋蔵文化財調査センターと美郷町教育委員会での資料調査において，守岡正司氏および岩谷知広氏にお世話になった。また，近畿地方や山陰地方における土器編年研究について，千葉豊氏，岡田憲一氏，柳浦俊一氏の諸氏から多くのご教示を賜った。末筆ながら，記して感謝致します。

註

- (1) 彦崎 K 2 式は、岡山県彦崎貝塚のほか竹原貝塚や東大戸遺跡の出土資料をもとに型式内容が説明されていたことがあり、詳細な研究の経緯は千葉氏の研究（千葉 2010）に詳しい。現段階では、彦崎貝塚や広島県大宮遺跡の資料をもとに古段階と新段階に細分されている（千葉同上）。
- (2) このなかで、山内清男氏が 1950 年代には権現山洞窟遺跡出土土器群と元住吉山式や彦崎 K 2 式との併行関係を想定していたことが分かる資料（加納 1999）について言及している。
- (3) 北白川上層式 3 期の新段階は、近畿地方では佃遺跡のほか奈良県の上島野遺跡（福永・前坂編 2004）や和歌山県の目来 I 遺跡（前田・千葉 1999）などでもまとめて出土しており、岡田憲一氏はこれらの土器群を佃下層期として認識し、北白川上層式 3 期とは分けて捉える立場をとる（岡田・深井 1998、玉田・岡田 2010）。
- (4) 京田遺跡 3 区の未報告資料の調査については、守岡正司氏の全面的な協力を得た。
- (5) 第 112 図に掲載した茶屋谷遺跡の土器実測図は、今回新たに再実測して掲載したものである。なお、第 112 図 16・17 は初出資料である。

参考文献

- 阿部芳郎 1994 「後期第IV群土器の型式学的検討」『津島岡大遺跡 4—第 5 次調査—』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第 7 冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 261 ~ 277 頁
- 泉 拓良 1980 「北白川上層式土器の細分—京都大学教養学部構内 AO24 区出土の縄文土器を中心に—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和 54 年度』京都大学埋蔵文化財研究センター 53 ~ 60 頁
- 泉 拓良 1981a 「近畿・中国・四国地方」『縄文土器大成 第 3 卷後期』講談社 153 ~ 155 頁
- 泉 拓良 1981b 「近畿地方の土器」『縄文文化の研究 4 縄文土器 II』雄山閣 166 ~ 175 頁
- 泉 拓良 1989 「縄帶文土器様式」『縄文土器大観 4 後期 晩期 続縄文』小学館 273 ~ 276 頁
- 上峯篤史・妹尾裕介・木村啓章編 2013 『一乗寺向畠町遺跡出土 縄文時代資料—資料編一』京都大学大学院文学研究科考古学研究室
- 岡田憲一・深井明比古 1998 「佃遺跡出土縄文土器の編年—特に元住吉山式土器について—」『佃遺跡 第 2 分冊』兵庫県文化財調査報告第 176 冊 兵庫県教育委員会 139 ~ 163 頁
- 岡田茂弘 1965 「近畿」『日本の考古学 II 縄文時代』河出書房新書 193 ~ 210 頁
- 勝部智明・花田修司編 2006 「原田遺跡（2）—2 区の調査—」尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 8 島根県教育委員会
- 加納 実 1999 「第 3 階原始文化研究会の岡本勇先生のメモ—山内清男博士の岡山県後・晩期土器編年をめぐって—」『土曜考古』第 23 号 土曜考古学研究会 11 ~ 19 頁
- 木村啓章・上阪 航 2014 「擬縄文・刻みからみた施文方法」『一乗寺向畠町遺跡出土 縄文時代資料—考察編一』京都大学大学院文学研究科考古学研究室 91 ~ 100 頁
- 小泉翔太 2014 「北部地区、南部地区出土土器の位置づけ」『一乗寺向畠町遺跡出土 縄文時代資料—考察編一』京都大学大学院文学研究科考古学研究室 33 ~ 50 頁
- 佐々木謙・小林行雄 1937 「出雲国森山村崎ヶ墓洞窟及び権現山洞窟遺跡—中海沿岸縄文式文化の研究 1—」『考古學』第八卷第十號 東京考古學會 458 ~ 479 頁

- 佐原 真 1961 「京都市一乗寺縄文文化遺跡の調査」『古代文化』第7巻第2号 財団法人古代學協会 58頁
- 穴道正年 1974 『島根県の縄文式土器集成 I』
- 田中昭久編 1998 『上組田地茶屋谷遺跡発掘調査報告書』佐田町教育委員会
- 玉田芳英・岡田憲一 2010 「近畿」『西日本の縄文土器 後期』真陽社 191～220頁
- 千葉 豊 2001 「沖丈遺跡出土縄文後期土器の編年の意義—崎ヶ鼻式と「権現山式」のあいだ—」『沖丈遺跡』主
要地方道川本波多線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 岐智町教育委員会 306～318頁
- 千葉 豊 2010 「山陽」『西日本の縄文土器 後期』真陽社 115～150頁
- 千葉 豊 2014a 「縄文後期土器研究の現状と課題—山陰地方の前半期を中心に—」『山陰地方の縄文社会』古代
文化センター研究論集第13集 島根県古代文化センター 43～56頁
- 千葉 豊 2014b 「比叡山西南麓遺跡群における縄文後期土器の様相」『一乗寺向畠町遺跡出土 縄文時代資料一
考察編一』京都大学大学院文学研究科考古学研究室 23～32頁
- 千葉 豊 2015 「北白川上層式と八王子式」『八王子式土器—西尾市八王子貝塚出土土器—』東海縄文研究会第
12回研究会 東海縄文研究会 29～38頁
- 中村淳穂編 2009 『三宅西遺跡』財団法人大阪府文化財センター調査報告書第189集 財団法人大阪府文化財セ
ンター
- 西原和代・妹尾裕介 2014 「土器底部の変遷と地域間の関係」『一乗寺向畠町遺跡出土 縄文時代資料一考察編一』
京都大学大学院文学研究科考古学研究室 71～80頁
- 平井 勝 1993 「縄文後期・四元式の提唱」『古代吉備』第15集 古代吉備研究会 1～24頁
- 深井明比古編 1998 『佃遺跡』兵庫県文化財調査報告第176号 兵庫県教育委員会
- 福永特大 2018 「釘野千軒遺跡出土の近畿系土器群」『考古学研究』第65巻第1号 考古学研究会 77～86
頁
- 福永信雄・前坂直志編 2004 『市立五條文化博物館 資料目録I』市立五條文化博物館
- 前田敬彦・千葉 豊 1999 「海南市且来I遺跡出土の縄文土器」『古代文化』財団法人古代學協会 40～47頁
- 間壁忠彦・潮見 浩 1965 「山陰・中国山地」『日本の考古学II 縄文時代』河出書房新社 211～229頁
- 牧田公平 2001 編 『沖丈遺跡』主要地方道川本波多線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 岐智町教
育委員会
- 宮本正保編 2017 『古屋敷遺跡(B区)』一般国道9号(静岡仁摩道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
5 島根県教育委員会
- 守岡正司編 2017 『の子谷横穴墓群 京田遺跡3区』一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財
発掘調査報告書3 島根県教育委員会
- 柳浦俊一 1994 「島根県の縄文時代後期中葉～晩期土器の概要—飯石郡頼原町森遺跡出土土器を中心にして—」『島
根考古学会誌』第11集 島根考古学会 25～38頁
- 柳浦俊一編 1994 『森遺跡 板屋I遺跡 森脇山城跡 阿丹谷辻堂跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査
報告書2 島根県教育委員会
- 柳浦俊一編 2009 『サルガ鼻洞窟遺跡・権現山洞窟遺跡』島根県古代文化センター調査研究報告書41 島根県古

代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター

柳浦俊一 2010 「山陰」「西日本の縄文土器 後期」真陽社 153～186頁

柳浦俊一 2017a 「山陰地方における縄文化の研究」雄山閣

柳浦俊一 2017b 「島根県の縄文研究の現状と課題」『中四国縄文時代研究の現状と課題 発表要旨集』第28回

中四国縄文研究会香川大会 中四国縄文研究会 15～22頁

山崎順子編 2007 『万場Ⅱ遺跡』中山間地域圃場整備工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 飯南町教育委員会

渡辺 誠編 1975 『桑倒下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会

挿図出典

第110・114図：守岡編 2017に加筆、本報告第3章第3・4節 第112図：牧田編 2001、勝部・花田編 2006、宮本編 2017に加筆、田中編 1998 を再実測（初出資料含む） 第113図：柳浦編 1994、山崎編 2007 に加筆 第115図：柳浦 2009 に加筆

第4節 京田遺跡4区出土の異形土器および京田遺跡の評価について

1 はじめに

以下の記述は、外来系土器に関する枠組みを提示した山内清男の著名な先行研究を点検し、今日的視点を概括して、外来系土器としての留意事項を記す。次に当該異形土器は、従来の判断でいえば関東で発達する異形台付土器の仲間であり、新見解としては、異形台付土器が土器の形態・装飾に関係する規格や基本単位を示すいわばモジュールの様なものである可能性を論じる。そして、京田遺跡4区(4-1区)から出土したことの意味づけを土器作りのネットワークの拠点という観点から評価する。

2 亀ヶ岡式土器の移入・模倣現象とオープンシステム

今日、外来系土器の評価といえば、遠方由來の土器がみいだされた場合に移入品か模倣品かがさっそく問題となり、あわせてネットワークの範囲などが取り上げられる次第であろう。ここでは、移入品や模倣品を論じることは何であったのか、多くの研究者にとって著名であるが具体的な内容は忘失されているかもしれない山内清男の亀ヶ岡式土器の移入・模倣現象を取り上げたい。

移入品や模倣品が初めて体系的に論じられたのは、山内清男がみいだした亀ヶ岡式土器の移入・模倣現象（「亀ヶ岡式土器の系統的発達が奥羽に於て行われたことに間違いないとすれば、関東及び中部地方の同式又は類似の土器は、この地方から器物として移入されたか、或はその上模倣されたものと考えられる」（山内 1967a:126））においてである。山内によれば、「他土器型式文化圏にみいだされた亀ヶ岡式精製土器とそれに類似した土器とは、亀ヶ岡式土器文化圏内の製品が他土器型式文化圏に移入されたものとそれを移入先で模倣したものと二種類で、平たくいえば「手本」と「写し」である。山内の判断では（「大洞A式を手本として作ったと思われる北海道の模造品であろう。しかし文様の重複は原品の精神から外れていない。体部文様の溝に赤色が僅かに残っている」（山内 1964b:186））、「関東の安行の普通の土器は女でしょう。関東の女ですがね、それらも東北の亀ヶ岡式をこりやいいって真似たかもしれない（山内ほか 1971:73）」、「手本」とは「こりやいいって真似たかもしれない」ものであり、「真似た」とは「原品の精神から外れていない」点が肝要で、「手本」をその「精神から外れていない」ように「真似た」からその「写し」であり、真似るべき程の「精神」を湛えた精製土器であればこそその「手本」である。

つまり、模倣品とは移入品（手本）の趣を他型式の荷担者がよく伝えるものである。

さらに、山内による亀ヶ岡式土器の説明（「この型式（亀ヶ岡式：引用者註）では精製土器と粗製土器が分化している。粗製土器は深鉢形が主で縄文の加えられたものが多い。土着的な土器と考えられる。縄文の性質等が地方によって異っており、これを念頭において細かい地方差を考えてもよい。精製土器は土質が選ばれ、形の変化が多く、装飾が多い。これは各地でも作られたであろうが、東北の各地間でも製作地から移動されたと考えられる」（山内 1964a:149））による土着的である粗製土器と製作地から移動された精製土器に注目するならば、粗製土器が製作される所で精製土器も製作されるシステムが想定され、亀ヶ岡式土器文化圏内では、東北地方の大半の地の亀ヶ岡式は、土着的な粗製土器+土着的な精製土器+移動された

精製土器、であろうが、東北地方のどこかで移動される元の精製土器が作られたはずであるから、そこでは、土着的な粗製土器+移動される元の精製土器、となるはずである。

以上を踏まえると、山内がみいだした亀ヶ岡式土器の移入・模倣現象からは、亀ヶ岡式文化圏の外部および内部に等しく、①亀ヶ岡式精製土器を手本として評価する価値体系が存在したこと、②亀ヶ岡式精製土器ないしは模倣品を必要とする社会体制が存在したこと、③亀ヶ岡式精製土器ないしは模倣品を使用する環境が存在したことが導出されるはずである。つまり、手本(個体であることを強調する)と遜色のない写し(個体であることを強調する)の実例をみいだすことを通じて、価値体系・社会体制・使用環境においてよく似た地方社会(定住社会)の並立の論定が最大の眼目であったと考える。

有名な山内の言明(「従って縄紋式の終末は地方によって大差ないと見なければならないでしょう」(山内ほか 1936:36))の背景には、亀ヶ岡式土器の移入・模倣現象からよく似た地方社会(定住社会)の並立を導き出したことを確認しておきたい。多くの研究者は気づいていないが、平たくいえば、ある地域からの土器が別のある地域にもたらされ、しかもそれを模倣したものも出現することは、よく似た地方社会が並立して全体的にオープンシステムが營まれるため、となるはずである。

第116図は、山内の説く縄紋土器にかかる見取図である。

山内にとって縄紋土器とは、概論すると、北方の新石器文化から渡来土器とともに土器製作技術が日本列島へ伝えられ(一回性の事態)、土器伝来後は列島外からの影響を受けずに各地(定住社会)で一回性の事態によって由来を同じくする土器が連続と作られ続けたという見込みであった(山内 1939・1969)。土器伝来後は列島外からは孤立的ではあるが列島内では各地で土器が連続と変遷したことを示すために用いたのが、縄紋土器の形態・装飾の個々の性質はすべて時代と分布が限られている(山内 1932:41)という性格を踏まえて制定した土器型式(「地方差・年代差を示す年代学的単位」(山内 1932:41))である。しかも、その性格の根拠は縄紋土器が粘土製品であることで、平たくいえば、粘土で作るのであればどこでも形態や装飾を思うさまに変化させられるから、時代による差ばかりではなく、地方差が著しいと捉えるためである(山内 1969:87)。その上に、縄紋土器が作られた時代は、当初、海退の時期と考えて気候環境条件が大きく違わないとなし(山内ほか 1936:41)、やがて、ほぼ一定の気候環境条件が続く(冷涼な気候が続く)と考えるようになった(山内 1969:92)。ほぼ安定した気候条件に適応した定住社会を前提に、縄紋土器型式群はほぼ安定して異所的布置を示し、かつ、漸進的に変化するという図式を提示するのが、第116図である。第116図の大別中には、「×」印が遺跡名の横に付される場合があるが、縄紋土器の時代を通して、遠方の地へ別地方由來の土器が移入されたことが例示され、その例示が、縄紋土器の時代を通して、日本列島中によく似た地方社会が並立して広くオープンシステムが營まれたことを意味したという構図になるのである。移入品(手本)と模倣品(写し)が存在することがオープンシステムを指示し、並立するよく似た地方社会(定住社会)が「縄紋国」(山内ほか 1936:87)(第116図)である。多くの研究者は忘失しているかもしれないが、今日、縄紋文化という広がり・まとまりは、その「縄紋国」的な広がり・まとまりに由来するために、あえて、「縄紋国」を紹介する次第である。

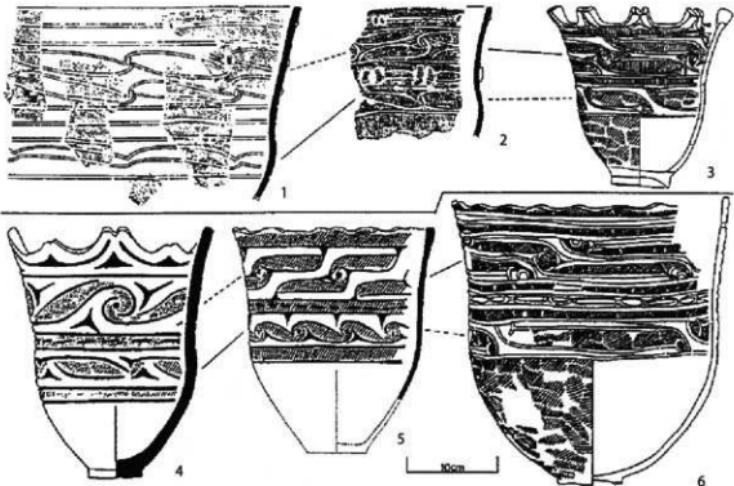
「縄紋国」(島日本)

	豪島	龍美	雄前	國東	信義	東海	畿内	吉備	九州
草薙	佐古	(+)	瀬水 1 # 2	三芦・田芦下 子母口・芦上 茅山	曾根? x (+)	D・山 船 烟		黑島 x	戰勝ヶ谷
箭頭	高川野 x	西面土御 (+) (4面以上)	東隅 大木 1 # 2a,b # 3-5 # 6	重 花園下 式 林 岸 群 森 a,b 十三坊合	(+) (+) (+) 船 烟	脚ノ木 x	府原北自用 1 大盛山	磯ノ森 里木 1	轟?
中頭	(+)	西面土 1 # a # b (+)	大木 7a # Tb # 8a,b # 9,10	五重角 阿賀利台 五重角 # (廻)	(+) (+) (+) (+)			黑木 2	音速 出水?
後頭	青柳町 x	(+) (+) (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	雄島之内 加賀利 B 安行 1,2	(+) (+) (+) (+)	西尾 x	北白川 2 x	津屋上層 百平	
鷲頭	(+)	龜 全 金 金 金 金	大木 B # B-C # C1,2 # A,A'	安行 2-3 # 3	(+) (+) (+) 船 烟	吉胡 x 保美 x	宮復 x 日下竹ノ内 x 宮復 x	津屋下層 御領	

型式群の漸進的變化

型式群の異所的布置

第116図 山内清男の縄紋土器の意味するもの



1.外缘 2.庄烟 3.田柄 4.小豆沢 5.二月田 6.前田

第117図 特定の仕組みの中での手本一写し

3 特定の仕組みの中での手本—写し

分かりやすくいうと、今日の縄紋土器研究の参照枠を担った山内の仕事の中で、移入品／模倣品ないしは手本／写しはオーブンシステムを可視化する実例で、移入品／模倣品ないしは手本／写しの存在は当然となる。気づかれていないであろうから強調したいのは、山内の縄紋土器には、ネットワークを云々する問題系はないことである。また、移入品／模倣品ないしは手本／写しを論じるということは、実は、同時代における個体間の関係を論じるということであるが、筆者は、山内の亀ヶ岡式土器の移入品／模倣品ないしは手本／写しに関して、反証を説明したい。

基準を入組紋の施紋原則が横つながり（紋様帶中の入組紋が環状に横につながる）か、あるいは、上下起点終点（紋様帶区画端が入組紋の起点終点になる）かに求めると、くびれ部によって頸部と胴部が作り出され頸部紋様帶と胴部紋様帶を持つ深鉢「A I 型式」（安孫子 1969）は、横つながりの入組紋だけが施紋される土器・上下起点終点の入組紋だけが施紋される土器・上下起点終点のものと横つながりのものの双方が併用される土器、の三種類に分類できる（大塚 1996）（第 117 図）。横つながりの入組紋だけが施紋される土器（第 117 図 1・4）は関東地方の型式といえる。それだけではなく、上下起点終点のものと横つながりのものの双方が併用されるキメラ（第 117 図 2・5）に着目すると、後期末・晩期初頭の編年関係が整理できる。

第 117 図 1 は、関東地方後期末の入組紋系安行 2 式で、同図 3 は、東北地方後期末の瘤付土器第 IV 段階である。3 は、頸部に上下起点終点が明瞭な階段状入組紋を配し、胴部には頸部の入組紋に比して単純な上下起点終点の一段状入組紋を配する。それに対し、1 は、頸部に横つながりが明瞭な波状入組紋を二段配し、胴部には横つながりの波状入組紋を一段配する。この両型式が並行する根拠が、第 117 図 2 のキメラである。頸部の入組紋は 3 と同種の上下起点終点の階段状入組紋で、胴部の入組紋は 1 と同種の一段の波状の横つながりの入組紋である。これを介して入組紋系安行 2 式（第 117 図 1）と瘤付土器第 IV 段階（同図 3）が並行すると考える。1 の頸部の入組紋が横つながりで上下二段構成であるのは、3 の上下起点終点の階段状入組紋を安行 2 式の施紋原則である横つながりで写した結果であり、3 の胴部入組紋が一段状の上下起点終点の入組紋になっているのは、1 の一段の横つながりの波状入組紋を瘤付土器の施紋原則である上下起点終点で写したためと考える。まとめると、頸部入組紋に関しては、安行 2 式土器（第 117 図 1）←瘤付土器第 IV 段階（同図 3）、胴部入組紋に関しては、逆に、安行 2 式土器（第 117 図 1）→瘤付土器第 IV 段階（同図 3）、という装飾上の手本→写し関係がみいだせる。

晩期初頭入組紋系安行 3a 式と大洞 B 1 式の間にも、後期末の場合と同じ手本→写し（頸部入組紋に関しては、安行 3a 式土器（第 117 図 4）←大洞 B 1 式土器（同図 6）、胴部入組紋に関しては、逆に、安行 3a 式土器→大洞 B 1 式土器）がみいだせる。安行 3a 式（第 117 図 4）と大洞 B 1 式（同図 6）の並行関係は、5 の頸部紋様が 6 の頸部紋様と同種の上下起点終点の階段状入組紋で、5 の胴部紋様が 4 の胴部紋様と同種の一段の横つながりの波状入組紋であることから、5 が 4 と 6 とのキメラと判断するためである。4 の頸部横つながりの小豆沢紋様（横 S 字状入組紋、他に横 Z 字状の例もある：第 117 図 1

の頸部の二段波状入組紋が一段になった)は、6の頸部の階段状入組紋の屈折部の様相を横つながりの独自な紋様で写したと考える。そして、4の胴部の横つながりの波状入組紋を上下起点終点施紋原則で写したのが、6の胴部紋様であると考える。まとめると、後期末と同様に、装飾に関し双方向の手本→写し関係がみいだせる、である。

第117図1~3は、それぞれの施紋原則が遵守されながら瘤付土器第IV段階と入組紋系安行2式との間に紋様上の双方向の手本→写し関係が成立することと連動した瘤付土器「A1型式」の形態的な借用が関東地方にも及んだことを意味し、同4~6は、晩期初頭においても、紋様上の双方向の手本→写し関係と連動した「A1型式」の形態的な借用が継続しているからこそ、入組紋系安行3a式小豆沢例(第117図4)が関東地方の土器として登場したと考えるべきで、移入された亀ヶ岡式の手本(個体)を前にして「こりやいいって真似た」はずの写し(個体)ではない。個体間の手本→写し関係を通して手本の趣が手本とそっくりな写しによって他所・他地方に広まるのが山内的な模倣で、そっくりなことに意味がある一方、第117図の手本→写し関係はいわば原案→翻案関係であって、異なる施紋原則間にみられる手本と写しは、そっくりではないことに意味があると考える。

他地方の既存要素がいくつか統合され、それらになかった特徴などが創出されることを一般に創発性と定義すると、他地方の外来要素を内在化させる創発性システム(自前の要素に生まれ変わらせるシステム)下で、他地方の外来要素を内在化させた特別仕立ての精製深鉢が創出されたことを第117図は意味する。第117図1~4の入組紋系深鉢は、東北地方の「A1型式」の形態的な借用と、装飾上の手本→写し関係すなわち東北地方の入組紋の翻案から、1が後期安行2式の、4が晩期安行3a式の特別仕立ての深鉢と捉える。他方、同図3・6は、頸部紋様が階段状入組紋という東北地方の土着的紋様で、胴部紋様が関東地方の横つながり入組紋の翻案である一段状入組紋という様相から、3が瘤付土器第IV段階の、6が大洞B1式の特別仕立ての深鉢と捉える。同図2・5は、キメラであるが、頸部紋様が階段状入組紋という東北地方の土着的紋様で、胴部紋様が関東地方の横つながり入組紋の直接的な引用、つまり胴部紋様に関東地方の横つながり入組紋を「真似た」入組紋を持つ様相から、2が瘤付土器第IV段階の、5が大洞B1式の特別仕立ての深鉢と捉える。つまり、東北地方の場合、特別仕立ての深鉢は、翻案系(第117図3・6)と直接的な引用系(第117図2・5)の二種類あることを強調しておきたい。

後期末・晩期初頭に(第117図参照)、特定の仕組みの中で、関東の型式および東北の型式において特別仕立ての深鉢が創出されたということは、学史的に著名な亀ヶ岡式土器の移入・模倣現象に対しての反証であり、ひいては、山内的な列島規模のオープンシステム観への反証であり、さらには、「繩紋国」(第116図)への反証であることを強調したい。なお、拙著(大塚2000)が関連した内容を既に論じているため、参考願いたい。

4 京田遺跡4区配石土坑出土の異形土器

外来系土器を扱う場合に、移入品/模倣品を念頭において問題を立てることは個体間での直接的な関係を論じることであり、山内の亀ヶ岡式土器の移入・模倣現象は実は妥当性を欠くかもしれないの



第118図 京田遺跡4区配石土坑出土の異形土器

である。特定の仕組みで特別仕立ての土器が遠方相互に創出されることもあり得、特殊な意図を担えば他所から持ち込まれるものもあるであろうし、遠方の地へどのような経路を辿ったのかに問ても様々な可能性を視野におさめるべきであろう。山内の視野にはなかったネットワークの範囲・規模を論じることは、縄紋文化という枠組みの見直しも関係して大事な課題であろう。

ここで、京田遺跡4区配石土坑ST1601出土の異形土器（第118図）について論じたい。当該異形土器は、完成品ではなく、まるくふくらんだ形状のもの（以下、ふくらみ部）が若干遺存するものである。ふくらみ部の残存高は約5.2cmで、ふくらみ部の推定最大径は約14cmである。ふくらみ部には耳たぶ状の突起があり、その突起縁には刻紋がめぐる。さらに、右側にはふくらみ部から0.8～1cm程度円窓風に突出する部分がある。円窓風突出部の直上には粘土紐が水平にめぐらされ、両側を沈線によって縁取られ隆帯が強調され、隆帯上には刻紋が連続する。ふくらみ部の下部には、2本の並行沈線で表現される擬似隆帯（中に刻紋が付される）が水平にめぐる一方、耳たぶ状の突起の下方では、当該擬似隆帯が分岐し斜め上方にややのびるが、それ以上は欠損のため分からず。遺存するふくらみ部下半を仔細に観察すると、岡田憲一（奈良県立橿原考古学研究所）がいち早く指摘したように、さらに下にもまるくふくらむ部分があるようみえる。上下にふくらみ部が重なると思われることから、筆者は、ひざご形の体部を推定する。

当該異形土器は、円窓風突出部および円窓風突出部の横に突起のあることを念頭において既存の資料で検索するならば、関東地方で発達すると考えられているいわゆる異形台付土器（中村編2013：25-28〈第1～4図〉、36-39〈第3～6図〉）の仲間と考えるが、日常生活には必ずしも必要のない、規範的な器形から逸脱した土器（中村編2013：1）と捉えるべきではないと考える。

例えば、第119図左は安行2式の台付鉢（千葉県余山貝塚）で、同図右は安行2式のいわゆる異形台付土器（東京都下沼部貝塚）であるが、両方は、台部自体の形状、台部にある小円形の透かし、台部のおおぶりな横長の突起間にみられる有刻紋隆帯で描かれるメガネ状の弧線紋において、よく似ている。台部の上にのる鉢（第119図左）ないしは鉢相当部位（第119図右）にみられる両方の有刻紋隆帯で描かれる幾何学紋も近いであろう。第119図右の異形土器のような形態・装飾がモジュールとして（幾何学紋は微妙に異なるが、少なくともモジュールとしての一つとして）機能して、同図左のような常用の台付鉢が製作されたと筆者は見立てる。



台付鉢(h.14.9cm)

モジュール様異形土器(h.約10cm)

第119図 安行2式土器の例



第120図 体部ソロバン玉状の例

第120図1は埼玉県寿能泥炭層遺跡出土の体部ソロバン玉状鉢形土器で「つ」の字紋をもつ例で、同図2は福島県町B遺跡出土の体部ソロバン玉状で「つ」の字紋をもつ異形土器である。この2にみられるような形態と紋様がモジュールとして機能して、1のような、加曾利B2式の、「つ」の字紋をもち体部ソロバン玉状の常用の鉢形土器が製作されたと筆者は見立てる。

少ない例示であるが、関東地方で発生・発達すると目される（最新研究は西村2016参照）いわゆる異形台付土器は、そもそも、土器製作上の形態・装飾にかかわる基準ないしは規格としての役割、すなわちモジュールの役割を果たした実用の小型土器と推定して、モジュール様異形土器と便宜上呼ぶこととする。あわせて、当該土器を儀礼用ないしは祭祀用などとみる向きには同意できないことも付言したい。

京田遺跡4区配石土坑出土の異形土器に話をもどす。この土器が赤色塗彩土器で、しかも、赤色顔料が北海道余市郡の明治鉱山産水銀朱の可能性が報告されている（第5章第4・5節）。顔料の点は、当該異形土器が土器製作上の形態・装飾にかかわるモジュールの役割であれば、うまく説明がつくであろう。すなわち、彩紋ないしは塗彩に用いる顔料に関する基準ないしは規格を提示したものと考えるのである。そして、ひざご形であるとの想定が妥当であるならば、形態にかかわるモジュールの役

割も見込めるであろう。

要するに、当該異形土器（第118図）は、従来の分類でいう異形台付土器の一つであるが、儀礼用ないしは祭祀用などではなく、土器製作上の形態・装飾にかかるモジュールの役割を果たした実用の小型土器の一つと考える。なお、当該異形土器の編年的位置付けであるが、その前に、述べておきたいことがある。

異形台付土器の起源問題は手つかずのようであるが、筆者は体部ソロバン玉状鉢形土器の形態・装飾にかかるモジュールの役割を果たしたと想定する町B例（第120図2）のようなソロバン玉状の形態例は、関東に広くみられること（中村編2013：25-28〈第1～4図〉、36-39〈第3～6図〉）に注目すると、ソロバン玉状の体部下半に斜沈線紋を持つ例が多い。ところで、加曾利B2式の捉え方であるが、筆者は体部ソロバン玉状鉢形土器の形態・装飾の分類から三段階（古段階⇒中段階⇒新段階）に細別する一方で、体部ソロバン玉状鉢土器の下半に斜沈線紋の場合、水平条線紋の場合、斜条線紋の場合があることに着目して、西関東と東関東での斜沈線紋の場合、水平条線紋の場合、斜条線紋の場合の出現頻度を検討することで、西関東の手本（斜沈線紋の場合：代表的な遺跡が埼玉県寿能泥炭層遺跡）と東関東の写し（水平条線紋の場合、斜条線紋の場合：代表的な遺跡が千葉県西根遺跡）という関係があることに気づいた（大塚2018・2019）。加曾利B2式は、体部ソロバン玉状鉢形土器で定義するべきことになり、しかも、西関東の手本（斜沈線紋の場合）こそが本来的なものであることになる。西関東の斜沈線紋の場合は、古段階の体部ソロバン玉状の上半の磨消繩紋は、「つ」の字紋、「ト」の字紋、連続弧線紋、連続入組紋などである（大塚2018・2019）。それらの体部ソロバン玉状の上半の磨消繩紋と下半の斜沈線紋は体部ソロバン玉状の異形台付土器にはほぼみられる要素であることから、体部ソロバン玉状異形台付土器が体部ソロバン玉状鉢形土器の形態・装飾上のモジュールの役割を果たしたと考える次第である。相当な推測ではあるが、加曾利B2式の体部ソロバン玉状鉢形土器の創出にかかるモジュールとして異形台付土器が登場したと思われる。体部ソロバン玉状鉢形土器が加曾利B1式からの変化では説明つかない問題は、そのような経緯を見込めば解決できるであろう。

そこで、京田例の編年的位置付けであるが、突起とその周辺紋様とひさご形（ただし推定であるが）の形態に着目すれば、加曾利B3式に比定できると考える。

5　まとめ

京田遺跡4区配石土坑出土の異形土器（第118図）は、儀礼用あるいは祭祀用とみるべき特殊土器とは思われない。従来の見方でいえば、関東地方で発達する異形台付土器の仲間と考える。つまり、京田例は、遺存する部分の特徴から関東由来のものと考え、さらには、異形台付土器は土器製作上の形態・装飾にかかるモジュールの役割を担う実用の小型土器で、京田例もその一つであると筆者は考える。便宜的であるが、異形台付土器の役割を念頭において、異形台付土器をモジュール様異形土器と呼称した次第である。

そして、京田例が赤色塗彩で、赤色顔料が北海道余市郡の明治鉱山産水銀朱の可能性が報告されて

いるが（前掲）、その水銀朱の件で京田遺跡と北海道とのかかわりを想定することには、筆者は積極的ではない。何故ならば、京田例がモジュール様異形土器の性格からみて、彩紋ないしは塗彩に用いる顔料に関する基準ないしは規格として、北海道余市郡の明治鉱山産水銀朱が選択されたと想定するからである。近年の研究（西村2016）では、後期中葉（加曾利B2式～加曾利B3式並行期）に関東の異形台付土器の写しの異形台付土器が東北地方に出現するという見方が提示されている。しかも、加曾利B1式～加曾利B3式並行期に広げて、関東と東北の双方向の影響関係をみてとれるという指摘（西村2018a・2018b）にしたがうならば、土器作りに關係する赤色顔料の情報も当然含まれるさまざまな情報が関東と東北の間で共有されたとみなすのは妥当であろう。憶測に憶測を重ねたものであるといわれてしまえばそれまでであるが、異形台付土器は土器製作上の形態・装飾にかかるモジュール様異形土器（小型土器）であるという推定に立脚するならば、また、京田例の胎土は在地・近隣地のものとは異なることが報告されていることも合わせれば（第5章第3節），当然ながら他の地で製作されたものが、後期中葉おそらく加曾利B3式併行期頃に持ち込まれたもので、京田例にみられる水銀朱の選択は、京田遺跡に持ち込まれる以前と推定するのである。

先に、「特殊な意図を担えば他所から持ち込まれるものもあるであろう」と述べたが、京田遺跡ないしは周辺の地が、京田例（第118図）を持ち込んだ加担者にとって有意な場所であったためと推定する。いい方を変えれば、京田遺跡ないしは周辺の地が土器作りに關係するネットワークの拠点として機能した証左の一つが京田例という外来系土器であろう。他にも京田遺跡からは外来系土器が種々検出されたが、京田遺跡は遠方の地の器物ないしは情報を別の遠方の地に伝え得るという意味での媒介中心性を担った遺跡として評価したい。

（大塚達朗）

参考文献

- 安孫子昭二 1969 「東北地方における縄文後期後半の土器様式～所謂「コブ付土器」の編年～」『石器時代』第9号 石器時代文化研究会 87～104頁
- 江坂輝弥 1964 「国版解説 200 台付異形土器 安行2式」『縄文式土器』日本原始美術1 講談社 185頁
- 大塚達朗 1996 「2. 縄文時代（1）土器—山内型式論の再検討より—」『考古学雑誌』第82巻第2号 日本考古学会 11～25頁
- 大塚達朗 2000 『縄文土器研究の新展開』 同成社
- 大塚達朗 2018 「縄文時代後期加曾利B式土器の研究（II）—加曾利B2式の理解のために—」『南山大学人類学博物館紀要』第36号 南山大学人類学博物館 31～42頁
- 大塚達朗 2019 「縄文時代後期加曾利B式土器の研究（III）—加曾利B2式の理解のために—」『南山大学人類学博物館紀要』第37号 南山大学人類学博物館 15～25頁
- 押山雄三・高松俊雄 2005 「阿武隈川築堤関連町B遺跡」 郡市教育委員会
- 埼玉県立博物館編 1984 「寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編（遺構・遺物）—」埼玉県教育委員会
- 中村耕作編 2013 「縄文時代異形土器集成図譜I」 2012年度國學院大學特別推進研究「先史世界における特殊

- 「器種・異形土器の社会的意義と象徴操作」成果報告書 國學院大學考古学部考古学研究室
- 西村広経 2016 「東北地方の異形台付土器」『八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館研究紀要』第5号 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 15 ~ 27 頁
- 西村広経 2018a 「十腰内2式土器の再検討」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第31号 東京大学文学部考古学研究室 1 ~ 30 頁
- 西村広経 2018b 「東北地方における横帯文の系譜」『八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館研究紀要』第7号 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 15 ~ 36 頁
- 山内清男 1932 「日本遠古之文化—縄紋土器文化の真相」『ドルメン』第1卷第4号 図書院 40 ~ 43 頁
- 山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第1卷第1号 先史考古学会 29 ~ 32 頁
- 山内清男 1939 「日本遠古之文化」補註付・新版 先史考古学会
- 山内清男 1964a 「縄文式土器・総論」『縄文式土器』日本原始美術1 講談社 148 ~ 158 頁
- 山内清男 1964b 「図版解説 220 小型壺 大洞A式並行」『縄文式土器』日本原始美術1 講談社 186 頁
- 山内清男 1967a 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『山内清男・先史考古学論文集』第3冊 先史考古学会 113-128 頁
- 山内清男 1967b 『日本先史土器図譜 第一部・関東地方・I ~ X II集(1939 ~ 1941)』再版・合冊 先史考古学会
- 山内清男 1969 「縄文文化の社会 縄文時代研究の現段階」『古代〈日本〉先史—5世紀』日本と世界の歴史1 学習研究社 86 ~ 97 頁
- 山内清男ほか 1936 「日本石器時代文化の源流と下限を語る」『ミネルヴァ』第1卷第1号 翰林書房 34 ~ 46 頁
- 山内清男ほか 1971 「山内清男先生と語る」『北奥古代文化』第3号 北奥古代文化研究会 59 ~ 80 頁

挿図出典

- 第116図：山内（1937）文献【一部加筆】 第117図：大塚（1996）文献 第118図：本報告第3章第3節第19図6、図版8 第119図左：山内（1967b）文献 第119図右：江坂（1964）文献 第120図1：埼玉県立博物館編（1984）文献 第120図2：押山・高松（2005）文献

第7章 結語

京田遺跡は島根県出雲市湖陵町常楽寺に所在し、出雲平野の南西部に位置する。これまでこの地域では縄文時代の遺跡がある程度確認されていたものの、集落の様相が明らかになった調査事例は出雲平野全体を見渡しても少ない。そのため、今回の調査で得られた多くの成果は、縄文時代の集落の様相や出雲平野の縄文社会を把握するうえで重要な基礎資料となると考えられる。ここでは、第6章までの報告や分析・検討を整理した内容について、項目ごとに主な成果をまとめ、結語としたい。

1 後期中葉の集落構造

京田遺跡では、4-1区で後期中葉の竪穴建物跡2棟、配石土坑1基、土坑5基、柱穴7基、集石遺構3基を確認している。隣接する3区では同じく後期中葉の配石土坑1基、土坑1基、柱穴4基が見つかっており、後期中葉の縄文集落が展開していたことが明らかになった。

4-1区では、居住遺構の可能性が考えられる竪穴建物跡SI1601は比較的古く、異形土器が出土した配石土坑ST1601や、注口土器が埋納されて上部に土器が据えられた土坑SK1603など葬送や祭祀に関連する遺構はやや新しく位置づけられる。他にも比較的大きな石材を脇に配置する土坑SK1602やSK1605などが存在し、配石土坑と同様に墓標などとして据えたと考えると、この時期には4-1区で墓などが累積して営まれ、墓域や祭祀の場として展開していた可能性が高い。つまり、居住域として利用された後に葬送・祭祀に関連する遺構が次第に増加して、墓域や祭祀の場といった性格が強くなることを示している。この背景には、集落のなかで居住域が一定期間存続した後に別の場所に居住域が移っても墓などが引き続き営まれて累積し、場合によっては長期間存続する墓域などを形成するといった、後期中葉以降における集落構造の変遷があり、京田遺跡ではこうした集落構造の変遷過程の過渡的な状況を示していると考えられた（第6章第2節）。

2 後期中葉の土器様相

土器は総計で20,365点、150.762Kgとかなりの量が4-1区から出土しており、それらの大半が後期中葉の時期に収まると考えられる。隣接する3区も同程度の量が確認され、後期中葉のまとまった土器群としては近年の山陰地方の調査事例を俯瞰してもまれにみる出土量を誇る。また包含層出土土器だけでなく、遺構単位でまとめて出土したほか、3区で遺構面が形成された後、4-1区で遺構面が形成されるまでの間に堆積した土層（21層）の存在など、良好な層位状況を示す資料が得られていることも大きな特徴である。

後期中葉は結節縄文や多条縄文などの多彩な縄文のほか、巻貝や二枚貝、斜め刻みなどによる擬縄文が展開し、縄文施文から擬縄文施文へと次第に変化することが知られている。第6章第3節では、これらのほかに、縄文や擬縄文の施文手法の変化についても注目して時期別に検討した。後期中葉の後半には、縄文地や磨消縄文手法から移行して充填縄文手法による施文が普及するが、それに先行す

るよう、一乗寺K式期の後半期に結節縄文や多条縄文などが巻貝回転による擬縄文や擬似的な結節縄文へと次第に変容して波及するといった、施文手法の変容の様相が具体的に明らかになった。

その内容をもとに京田遺跡の後期中葉の土器編年について京田1～7期に区分して整理・検討した。また、内面肥厚指頭圧痕土器や粗い巻貝条痕調整、底縁肥厚型など、山陰中央部に特徴的な無文土器や器面調整、底部形態が京田4期以降に減少することが注目される。こうした地域性が徐々に希薄になる様相と連動しつつ、主要な施文手法が変容する転換期である京田4・5期を京田式として新たに認識し、これまでの土器編年研究で不明瞭であった山陰中央部における後期中葉の土器様相について、一定の方向性を示すことができた。

3 外来系土器の特徴とその評価

京田遺跡では様々な地域から持ち込まれた、あるいは影響を受けた外来系土器が出土しており、近隣の地域だけではなく、遠隔地との様々な交流の結節点となっていたことが予想される。ここでは土器編年（第6章第3節）の検討内容を踏まえて各地域の土器型式の併行関係を整理し（第26表）⁽¹⁾、今回出土した後期前葉から中葉の外来系土器の特徴とその評価について確認したい。

九州系土器では3区と4-1区の両地区で後期前葉の小池原上層式が一定量出土した。鐘崎式は出雲平野の他の遺跡では確認されているものの、両地区ともにほとんど確認できなかった。後期中葉になると北久根山式やその影響を受けたと思われる土器が両地区で認められ、4-1区では一個体に復元できる西平式の深鉢が確認されている。土器の胎土分析を実施すると、在地の土器と異なっている点や（第5章第3節）、製作技法や施文手法が本来の西平式のものを踏まえていることから、搬入品の可能性が考えられる。

九州系土器とともに関東系土器も一定量確認されている。後期中葉の加曾利B1式の注口土器が3区と4-1区で出土しているが、描かれる文様や施文手法、口縁部突起の形態などは本来の加曾利B1式から大きく変容していることが確認された（第3章第5節）。近畿地方でも加曾利B1式は出土しているが、こうした地点を経由して間接的に伝播したため、土器製作に関する様々な情報が変容していったことを具体的に示している可能性がある。

第26表 各地の土器型式の併行関係

	山陰中央部	東北九州	東部瀬戸内	近畿地方	関東地方
後期前葉	成立期縁帶文土器 (北原本郷式～林原式?)	小池原下層式	成立期縁帶文土器	四ツ池式	堀之内1式(中)
	崎ヶ鼻1式		津翌A式	芥川式	堀之内1式(中～新)
	崎ヶ鼻2式		彦崎K1式	北白川上層式1期	堀之内1式(新)
		小池原上層式			堀之内2式(古)
		鐘崎式(古)？		北白川上層式2期	堀之内2式(新)
	*	鐘崎式(新)？	津島岡大第IV群	北白川上層式3期(古)	加曾利B1式(古)
後期中葉	沖丈式	北久根山式	四元式	北白川上層式3期(新)	加曾利B1式(新)
	京田式	西平式？	彦崎K2式(古)	一乗寺K式	加曾利B2式
	権現山式	太郎追式	彦崎K2式(新)	元住吉山I式	加曾利B3式
				*は未命名の型式が存在する可能性を示す	

瀬戸内地域の影響が見受けられる土器では、後期中葉の津島岡大第IV群や四元式などが3区で少量確認でき、この地域とも交流があったことが分かるものの、4-1区では確認されていない。その他、4-1区では正確な由来が不明な外来系土器が少量出土しており、北陸地方の土器に類似するという指摘もある（第3章第4節）。

京田遺跡の外来系土器のなかでも特に注目されるのは、東日本の影響を受けた異形土器が出土したことである。配石土坑ST1601で共伴した遺物をもとに考えると、加曾利B3式（元住吉山I式併行）の時期になると思われる。出土状況から、破碎して一部は意図的に配石土坑内に埋納し、その他の破片は周囲に散布するという一連の儀礼的な行為が復元できたが、搬入当初には関東地方で展開する異形台付土器の土器製作上の形態・装飾に関わるモジュールの役割を担うとの見方が大塚達朗氏によって示されている（第6章第4節）。異形土器は4-1区でほかに2点確認されてほぼ同じ文様構成を持つが、胎土分析でそれぞれが別個体である可能性が高く（第5章第3節）、モジュールとしての土器とそれに関連する模倣土器製作の様相を示す重要な資料であると考えられる。

異形土器の器面には水銀朱が付着しており、硫黄同位体分析の結果、北海道余市郡の明治鉱山産である可能性が考えられた（第5章第4・5節）。東北地方の八戸市風張1遺跡および中居遺跡では、出土した後期後半から晩期の土器付着水銀朱が北海道産であることが示されており（河野ほか2014）、東北地方における土器の装飾技法との関係性が予想される。また、近年の研究（西村2016）では、関東地方の異形台付土器を模倣製作したものが東北地方で出土し、関東地方と東北地方で密接なネットワークの存在が示唆されている点を考慮すると、関東地方や東北地方との複雑な情報共有のなかで生み出されたモジュールとしての土器が京田遺跡4-1区出土の異形土器であり、そのなかで北海道産の水銀朱が選択されたと考えられる。なお、4-1区の配石土坑ST1601出土の無文土器口縁部内面や口縁端部に付着した水銀朱、および包含層12層出土の磨石の付着水銀朱はいずれも北海道明治鉱山産の値を示しており（第5章第5節）、搬入した水銀朱を集落内で加工した可能性が高い。この点から見ても、様々なモノや情報が行き交う縄文社会のネットワークのなかで京田遺跡の集落が重要な役割を担っていたことが推察される。

4 石器組成と石器石材の利用

石器は総計で1,139点、151.457kgであり、土器と同様に多数出土した。石器組成については、3区と4-1区でともに石鏃などの打製石器が全体的に少なく、敲石や磨石、石皿などの礫石器がかなり多くを占めるという特徴を示す。この状況からすると、礫石器を使用して植物資源を加工することが多く、食糧貯蔵もなされるなど植物資源を中心に安定的な定住生活が展開していたことが予想される。その一方で、動物遺存体の出土状況からはシカやイノシシのほか、魚類などの淡水資源や海産資源の利用も確認できることは注目してよい。そのため、石器組成からは植物資源を積極的に利用していたことが読み取れるが、3区と4-1区の調査区外には狩獵や漁撈活動を示す石器が一定量存在する可能性を考慮する必要がある。このように石器組成を検討する場合は、出土した石器だけではなく、調査区が集落全体を網羅するのか、あるいは一部なのか、という調査区自体の位置付けや、動物

遺存体などの分析による複合的な視点から評価することが必要である。

打製石器は全体的には少ないものの、石器の石材利用からみると安山岩の石材利用に一定の傾向が見いだせる。安山岩は肉眼観察で4種類（青灰・灰・灰白・暗灰）の異なる石材が確認でき、打製石器の主要な石材である。そのなかで安山岩（灰）が最も多く、板状石核素材や、剥片・チップが多数確認されており、石材の獲得から成形や石器への加工・調整まで、一連の石器製作工程が復元できると思われる。安山岩（灰）は周辺地域の石材と考えられるが、その一方で、安山岩（青灰）は香川県産のサヌカイトの特徴を示しており、瀬戸内地域から入手した石材であったことが分かる。石核が出土しているものの、石器全体の出土量は少ない。また黒曜石の出土も数点にとどまっており、これらは主要な石材の補足的な利用にとどまっていたと思われる。その他、片岩系の石材が数点確認されており、他地域から搬入した石材を利用していたことが分かる。なお出土量は多くはないが、特殊な石製品も存在しており、特殊な石材が用いられることがあるものの、普遍的な石材を使用する場合が見受けられる。その他、原石や石核素材には、最も多い安山岩（灰）のほかに片岩系や玉髓系の石材、石英なども一定量存在する。このように多様な石材利用が認められ、後期中葉における石材流通を比較検討できる材料がある程度整ったと考えられる。

5 動物遺存体からみた食糧資源

包含層の12層などでは、層中に小片となった動物遺存体が多数含まれていた。出土した動物遺存体の分析によって、イノシシやニホンジカなどの陸生哺乳類の狩猟を行いつつ、海域ではサメ類などを捕獲する漁撈活動や河川での淡水魚類の獲得も行うなど、多様な動物資源の利用があったことが分かった（第5章第1節）。ここで注目されるのは、4-1区で総計約400点、重量約1,200gもの動物遺存体が確認されたにもかかわらず、貝類の積極的な利用を確認できなかった点である。京田遺跡では貝類が主な食料資源ではなかったことを示しているが、これが自然環境などの影響によって貝類資源が少なかったことに起因する、あるいは貝類が豊富に存在していても、敢えてそれらを積極的に利用せずに他の食料資源を利用した、という環境的要因と社会的要因の2通りの可能性が考えられる。

京田遺跡に接する当時の神西湖は、縄文時代の後期以降には淡水環境になっており、弥生時代の中期頃には汽水環境となることが知られている（第2章第1節）。弥生時代から平安時代および鎌倉時代にかけては京田遺跡周辺のほか、出雲平野全域で貝塚を形成する遺跡が増加するなど（第2章第2節）、汽水環境という条件による環境的要因が大きいとの見方もできる。ただし、縄文時代の状況をみると、一概に環境的要因のみであったとは断言できない。縄文時代の瀬戸内地域では沿岸部を中心に多数の貝塚が確認されており、西日本有数の貝塚集中地帯を形成する。これらの貝塚は早期から營まれて後期に最も増加する傾向にある（竹広ほか2010・山口2010）。一方で、山陰地方における、縄文時代の貝塚は、松江市佐太講武貝塚（赤澤編1993、赤澤・竹広編1994、赤澤編1997）と鳥取県島遺跡（亀井ほか編1983、清水編1998）が知られているのみで、佐太講武貝塚は前期、島遺跡は前期および中期の貝塚であり、後期以降には確認されていない。中国山地を挟むものの、地理的に大きく離れていない瀬戸内地域と山陰地方が同時期のなかで極端に貝類の生育環境が異なるとは考えにくく、社

会的な要因も作用していた可能性は否定できない。この点に関しては今後も議論を深めていくべき課題である。

6 洪水堆積層について

3区と4区の土層堆積状況から、この地で洪水が何度か発生していたことが明らかになった。3区と4-1区および4-2区で共通して確認できたのは、晩期後葉から弥生前期にかけて発生した洪水の痕跡（3区3-1層、4-1区・4-2区6層）、辺り一面が冠水状態になったことを示している。なお、京田遺跡の北側の丘陵裾部に位置する奥ノ谷遺跡や、常楽寺川を挟んだ対岸の丘陵裾部にある御領田遺跡でも後期初頭から前葉以降に発生した洪水の痕跡やその影響が見受けられる土層堆積状況が確認できる（第4章第2節）。これらが京田遺跡で確認した冠水状態を引き起こした洪水痕跡と同一かどうかは更なる検証が必要であるが、仮に同一であったとすると、3つの遺跡が立地する谷部全体が冠水した状況が推測される。また今回の調査で洪水の発生年代が判明しているため、この地域周辺の鍵層となり得ると思われる。

4-1区では、晩期後葉から弥生後期に発生した大型の礫を作う激しい流れの洪水痕跡を確認した（4-1区4・5層）。この洪水の痕跡は3区や4-2区では確認できなかったため、比較的小規模で局所的な洪水であったことが考えられる。なお3区の遺構面を形成する土層（3区5層、4-1区22層）も洪水によって形成されたものであり、多数の大型の礫が含まれている。

洪水の発生は近年にもみられ、1964（昭和39）年の豪雨による河川の氾濫などで冠水状態になり、地域一帯が大きな被害を受けたことが知られる。このように、昔から洪水が頻発して度重なる影響を受けたことが推測されるものの、縄文時代から今日まで連続と人々の生活が営まれる地域であり、各時代において文化的・経済的に欠かすことのできない地域の要所であったことが想定できる。

以上、これまでに調査の主な成果について整理してきたが、最後にこれらをまとめた京田遺跡の総合的な評価について考えてみたい。

京田遺跡は複数の遺構や多数の遺物が出土し、その大半が縄文時代の後期中葉に収まることから、この時期にかなり規模の大きい集落が形成されていたことが分かる。出土遺物で注目されるのは、配石土坑ST1601などから出土した異形土器で、これまで西日本ではほとんど出土例が知られていない。異形土器の正確な由来は不明であるが、東日本の影響が考えられ、胎土分析（第5章第3節）からは搬入品の可能性が高い。異形土器は土器製作上の形態や装飾にかかるモジュールの役割を担う土器であり、京田遺跡の集落が土器づくりに関係するネットワークの拠点として機能した媒介中心性を持つとの大塚氏の指摘（第6章第4節）があり、地域のなかで中心的な集落であったと評価できるだろう。また、異形土器に付着していた水銀朱は北海道産である蓋然性が高く（第5章第5節）、無文土器の内面や口縁端部のほか、磨石にも付着していたことを勘案すると、朱自体が搬入されて集落内で加工されたと判断でき、京田遺跡の集落では、遠隔地を含めた地域間の交流や交易に関する社会的なネットワークのなかで重要な役割を担っていたことが推測できる。なお、石器にも周辺地域ではあまり見受

けられない特殊な石製品のほか、他地域からの搬入石材も一定量確認でき、土器と同様に社会的なネットワークのなかで様々な石製品やそれに関する情報、そして特殊な石材が持ち込まれたことは想像に難くない。

また京田遺跡では、後期中葉の集落構造のなかで居住域から墓域や祭祀の場へと変容する過渡的状況が読み取れた。今回の調査区は集落の一部であるため、集落全体を把握できたわけではないが、周辺に葬送・祭祀に関連する遺構を中心に、多くの遺構が存在する公算が高いと考えられる。その場合、地区全体が調査されて集落全体の様相が明らかになった奥出雲町原田遺跡のように、後期中葉以降に墓域などを中心に長期間にわたって存続した可能性もある（第6章第2節）。こうした遺跡は各時期において当時の地域社会の中心的役割を担う集落であったと思われ、京田遺跡の集落が交流や交易のネットワークの拠点としての役割を担った可能性が高い。今回の調査成果をもとに、出雲平野や周辺地域のなかでの京田遺跡の位置づけをさらに明確にしていく必要があると考えられる。

（幡中光輔）

註

（1）各地域の型式間の併行関係については、千葉豊氏の編年案（千葉 2018）を参照した。

参考文献

- 赤澤秀則編 1993『佐太講武貝塚発掘調査報告書』鹿島町教育委員会
- 赤澤秀則・竹広文明編 1994『佐太講武貝塚発掘調査報告書2』鹿島町教育委員会
- 赤澤秀則編 1997『佐太講武貝塚』主要地方道松江鹿島美保関線交通安全施設整備工事に伴う調査 鹿島町教育委員会
- 亀井熙人・田中弘道・久保種二朗・樋口和夫編 1983『島遺跡発掘調査報告書第1集』北条町埋蔵文化財報告書
2 北条町教育委員会
- 河野摩耶・南 武志・根岸 洋・市川健夫 2014「風張1遺跡・中居遺跡出土の土器付着赤色顔料の成分分析と同位体分析」『八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館研究紀要』第3号 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 10～17頁
- 清水直樹編 1998『島遺跡発掘調査報告書第2集』北条町埋蔵文化財報告書 25 北条町教育委員会
- 竹広文明・山手貴生・矢部俊一 2010「遺構から見た広島地域の縄文集落」『遺構から見た中四国地方の縄文集落像』第21回中四国縄文研究会島根大会発表資料集 中四国縄文研究会 5～15頁
- 千葉 豊 2018「後期東日本系土器の中四・四国地方への波及について」『中四国地方の外来系土器』第29回中四国縄文研究会発表資料集・集成資料集 中四国縄文研究会 11～21頁
- 西村広経 2016「東北地方の異形台付土器」『八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館研究紀要』第5号 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 15～27頁
- 山口雄治 2010「遺構から見た岡山県の縄文集落」『遺構から見た中四国地方の縄文集落像』第21回中四国縄文研究会島根大会発表資料集 中四国縄文研究会 55～62頁

第27表 4-1区出土土器觀察表

測定番号	測定項目	出土物調査				基準（cm）	色調	表面調査 外側：上段 内側：下段	表面調査 外側：上段 内側：下段		形状	時期	土様 型式	備考	
		Gr	通幅	幅	幅高				口縁	底縁	底高	土			
53 32 27 24	12mm 圓文土器	深鉢		5.8	2mm口下の沿縁を多量に含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	円底		
53 33 37 33	12mm 圓文土器	深鉢		5.45	2mm口下の沿縁を多量に含む	灰褐色～褐色	ナグ	D67				灰褐色	円底		
53 34 38 35	12mm 圓文土器	深鉢		4.6	2mm口下の沿縁を多量に含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	円底		
53 35 37 24	12mm 圓文土器	深鉢		6.1	2mm口下の沿縁を多量に含む	灰褐色～灰白色	ナグ	D67				灰褐色	円底		
53 36 38 9	12mm 圓文土器	浅鉢	口11.1	4.7	2mm口下の沿縁を多量に含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	円底		
53 37 38 8	12mm 圓文土器	深鉢		6.05	2mm口下の沿縁を多量に含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	円底		
53 38 39 17	12mm 圓文土器	深鉢	口10.5	5.21	2mm口下の沿縁を少額含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	円底		
53 39 38 26	12mm 圓文土器	深鉢		5.86	2mm口下の沿縁を多量に含む	灰褐色～灰白色	ナグ	D67				灰褐色	円底		
53 40 38 25	12mm 圓文土器	深鉢		5.45	2mm口下の沿縁を多量に含む	灰褐色～灰白色	ナグ	D67				灰褐色	円底		
53 41 38 25	12mm 圓文土器	深鉢		5.7	2mm口下の沿縁を多量に含む	灰褐色～灰白色	ナグ	D67				灰褐色	円底		
53 42 38 24	12mm 圓文土器	深鉢		4.8	2mm口下の沿縁を多量に含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	円底		
53 43 38 41	12mm 圓文土器	深鉢		5.86	2mm口下の沿縁を多量に含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	圓底	圓底	
53 44 38 33	12mm 圓文土器	深鉢		6.0	2mm口下の沿縁を多量に含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	圓底	圓底	
53 45 38 15	12mm 圓文土器	深鉢		5.05	2mm口下の沿縁を少額含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	圓底	圓底	
53 46 38 14	12mm 圓文土器	口10.5	口11.1	6.06	2mm口下の沿縁を多量に含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	圓底	圓底	
53 47 38 8	12mm 圓文土器	深鉢	口10.5	7.46	2mm口下の沿縁を多量に含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	圓底	圓底	
53 48 38 24	12mm 圓文土器	深鉢		5.45	2mm口下の沿縁を少額含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	圓底	圓底	
53 49 38 14	12mm 圓文土器	深鉢		6.06	2mm口下の沿縁を少額含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	圓底	圓底	
53 50 38 9	21mm 圓文土器	深鉢		6.05	2mm口下の沿縁を少額含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	圓底	圓底	
53 51 38 33	21mm 圓文土器	深鉢		6.55	2mm口下の沿縁を多量に含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	圓底	圓底	
53 52 38 8	21mm 圓文土器	浅鉢		6.06	2mm口下の沿縁を少額含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	圓底	圓底	
53 53 38 8	21mm 圓文土器	口10.5	口11.1	6.76	2mm口下の沿縁を少額含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	圓底	圓底	
53 54 38 40	22mm 圓文土器	深鉢		6.06	2mm口下の沿縁を多量に含む	灰褐色	ナグ	D67				灰褐色	圓底	圓底	

第28表 4-2区出土土器観察表

測定番号	測定項目	出土物調査				基準（cm）	色調	表面調査 外側：上段 内側：下段	表面調査 外側：上段 内側：下段		形状	時期	土様 型式	備考	
		Gr	通幅	幅	幅高				口縁	底縁	底高	土			
72 1 28 -	4mm 圓文土器	盤			圓		灰褐色	ナグ	円形	円形	1.5	灰褐色	古代？	圓底	圓底
72 2 24 -	4mm 圓文土器	底盤	呂杯脚部		圓		灰褐色	ナグ	円形	円形	1.5	灰褐色	古代？	圓底	圓底

第29表 4-1区出土石器観察表

神岡番号	国版番号	出土地点	形種	法規 (cm)			石材	重量 (g)	備考	
				長	幅	厚				
15	28	21	道溝 SI1601	1層	石繩	(1.6)	(1.4)	0.5	安山岩 (K)	0.75 端部欠損
15	29	21	駿穴建物跡 SI1601	1層	石繩	(2.2)	(1.0)	0.3	安山岩 (青灰)	0.49 平分欠損
15	30	21	柱穴 SI1601	1層	磨製石斧	(6.9)	(3.8)	(1.8)	安山岩	49.34 基部欠損
15	31	21	駿穴建物跡 SI1601	1層	MF	1.9	1.6	1.0	馬鹿	2.26
15	32	21	駿穴建物跡 SI1601	1層	MF	8.4	5.2	1.8	安山岩 (K)	46.60
15	33	21	駿穴建物跡 SI1601	1層	剥片	4.0	3.1	1.1	安山岩 (褐灰)	7.18
15	34	21	駿穴建物跡 SI1601	2層	板状石核素材	15.8	12.8	7.6	安山岩 (K)	1118.75
15	35	21	駿穴建物跡 SI1601	1層上面	石製品	13.0	10.6	8.3	热水変質安山岩	1360.77
17	13	21	駿穴建物跡 SI1602	1層	剥片	2.3	1.8	0.6	黒曜石	1.42
17	14	21	駿穴建物跡 SI1602	2層	剥片	1.8	0.7	0.5	黒曜石	0.47
17	15	21	駿穴建物跡 SI1602	底面	剥片	1.6	1.6	0.3	流紋岩	0.57
17	16	21	駿穴建物跡 SI1602	底面	磨石	8.7	6.0	2.9	デイサイト	208.60
20	16	21	配石工場 ST1601	1層	石繩	3.4	(1.6)	0.5	安山岩 (K)	1.22 端部欠損
20	17	21	配石工場 ST1601	1層	石繩	1.9	1.6	0.3	安山岩 (K)	0.50
20	18	21	配石工場 ST1601	1層	石繩	(1.9)	(1.0)	0.3	流紋岩	0.34 平分欠損
20	19	21	配石工場 ST1601	2層	削器	6.5	8.0	1.3	デイサイト	43.01
20	20	21	配石工場 ST1601	2層	磨石	(3.8)	(9.2)	(4.3)	流紋岩	113.70
20	21	21	配石工場 ST1601	2層	敲石 / 凹石	6.9	5.9	3.5	安山岩	124.00
20	22	21	配石工場 ST1601	1層	板状石核素材	14.2	8.1	5.4	安山岩 (K)	777.97
20	23	21	配石工場 ST1601	2層	石繩	11.9	9.0	3.2	安山岩	368.13
22	13	21	土坑 SK1601	1層	石繩 (未製品)	1.7	1.6	0.7	黒曜石	1.69
22	14	21	土坑 SK1601	1層	敲石 / 磨石	8.5	6.4	3.6	砂岩	297.09
23	9	21	土坑 SK1602	1層	楔形石器	2.7	2.2	0.8	黒曜石	4.06 両面打刃
25	13	22	土坑 SK1603	2層	MF	4.3	3.2	0.7	安山岩 (K)	8.45
25	14	22	土坑 SK1603	4層	敲石 / 凹石	7.0	10.7	7.9	デイサイト	715.03
29	1	22	集石石橋 SS1601	集石の一部	敲石 (石核転用)	8.2	8.9	7.9	デイサイト	858.17
29	2	22	集石石橋 SS1601	集石の一部	敲石・磨石	10.5	8.6	5.4	デイサイト	629.51
29	3	22	集石石橋 SS1603	集石の一部	石繩	32.6	19.4	8.9	砂岩	6230.00
29	4	22	集石石橋 SS1603	集石の一部	敲石	24.6	10.1	6.1	安山岩	1856.93
32	36	22	自然地頭 NR1601	3層	石繩 (未製品)	3.8	2.0	0.6	安山岩 (K)	4.05
32	37	22	自然地頭 NR1601	3層	石器 (未製品)	3.3	3.2	0.7	碧玉	4.07
32	38	22	自然地頭 NR1601	4層	敲石	7.0	6.4	4.8	安山岩	288.22 赤色顔料跡定# 35
54	1	39	12	3層	掃器	7.0	3.1	2.5	碧玉	52.83 両面打刃
54	2	39	39	4・5層	掃器 (石核転用)	5.3	3.5	2.5	玉飾	40.49
54	3	39	39	4・5層	削器	6.8	4.5	0.9	安山岩 (青灰)	28.00
54	4	39	31	4・5層	MF	12.9	6.9	2.1	安山岩 (褐灰)	222.97
54	5	39	38	4・5層	RF	6.0	8.4	1.5	流紋岩	56.91
54	6	39	39	4・5層	角柱状石核素材	13.3	8.2	6.4	安山岩 (K)	948.20
54	7	39	39	4・5層	角柱状石核素材	12.5	7.0	4.3	安山岩 (K)	712.08 両面打刃

博物館番号	図版番号	出土位置			器種	法量 (cm)			石材	重量 (g)	備考
		Gr	遺跡	層		長	幅	厚			
55	8	39	38	4・5層	敲石	16.3	6.3	5.7	デイサイト	861.76	
55	9	39	39	4・5層	敲石 / 磨石	11.6	8.4	6.5	デイサイト	867.02	
55	10	39	39	4・5層	敲石 / 磨石	11.2	7.8	4.9	デイサイト	561.51	
55	11	39	39	4・5層	敲石 / 磨石	16.4	10.1	7.5	安山岩質凝灰岩	1871.05	
55	12	40	39	4・5層	台石	20.7	14.8	6.4	デイサイト	2670.00	
55	13	40	39	4・5層	石皿	17.4	11.6	5.1	安山岩	1063.86	
55	14	39	31	4・5層	磨製石斧	3.5	7.2	2.0	安山岩 (灰)	51.48	刃部
55	15	40	45	4・5層	板状石核素材	5.5	3.7	1.5	瑪瑙	36.72	
55	16	40	45	4・5層	原石 or 特殊石器	7.2	4.9	3.5	石英	205.02	
55	17	40	31	4・5層	珪化木	13.7	9.2	4.6	—	152.01	
56	1	40	24	6層	打製石斧 (石核軸用)	4.5	4.8	1.7	安山岩 (端灰)	39.28	
56	2	40	22	6層	磨石	6.6	4.7	4.0	安山岩	120.06	被熱 (表面も被熱)
56	3	40	24	6層	敲石 / 磨石	10.3	8.9	4.9	デイサイト	613.26	
56	4	40	36	6層	磨製石斧 or 敲石	9.0	(5.2)	2.7	流紋岩	182.26	刃部欠損
56	5	40	34	6層	石製品	3.0	2.4	0.6	流紋岩	3.40	左右対称に加工
56	6	40	6	6層	珪化木	18.7	6.4	4.2	—	499.40	
57	1	41	26	11層	石皿	3.3	2.4	0.3	安山岩 (青灰)	2.21	
57	2	41	25	11層	擂盤	3.6	2.1	0.9	砂岩	5.88	
57	3	41	34	11層	削器	(4.0)	(2.8)	(0.6)	デイサイト	8.64	
57	4	41	—	11層	削器	6.0	2.9	0.8	安山岩 (灰)	13.78	
57	5	41	34	11層	削器	(7.8)	4.3	1.0	安山岩 (灰)	28.41	
57	6	41	24	11層	MF	6.3	3.8	0.9	安山岩 (灰白)	20.24	
57	7	41	16	11層	打製石斧 (未製品)	6.8	6.9	2.4	安山岩 (灰)	128.43	両極打法
57	8	41	35	11層	板状石核素材	12.0	9.8	2.9	安山岩 (灰)	410.37	
57	9	41	9	11層	板状石核素材	18.4	15.6	7.5	安山岩 (灰)	2640.00	
57	10	41	—	11層	角柱状石核素材	12.0	8.7	3.7	安山岩 (灰)	648.54	
58	11	41	9	11層	打製石鋸	5.9	5.4	1.8	流紋岩	85.4	
58	12	41	24	11層	敲石 / 四石	12.4	8.2	5.5	安山岩	975.70	赤色顔料測定No.28
58	13	41	34	11層	磨石	8.4	6.4	5.8	細粒花崗岩	430.15	赤色顔料測定No.2 硫黄同位体分析No.2
58	14	42	25	11層	定角式磨製石斧	10.2	4.8	3.1	安山岩	205.40	
58	15	42	24	11層	台石	21.9	22.3	6.3	砂岩	4710.00	
58	16	42	34	11層	台石	14.0	13.0	3.6	デイサイト	901.52	赤色顔料測定No.1
58	17	42	9	11層	石製品	10.7	5.4	2.3	安山岩質凝灰岩	187.30	
58	18	42	35	11層	原石	5.8	5.1	4.0	瑪瑙	157.34	
59	1	43	33	12層	石皿	2.2	1.5	0.3	安山岩 (灰)	0.58	
59	2	43	8	12層	石皿	1.9	1.4	0.3	安山岩 (灰)	0.41	
59	3	43	25	12層	石皿	2.0	(1.6)	0.3	安山岩 (青灰)	0.69	
59	4	43	35	12層	石皿	(2.3)	1.7	0.4	安山岩 (灰白)	1.07	
59	5	43	25	12層	石皿	2.4	1.9	0.3	安山岩 (灰)	1.06	
59	6	43	25	12層	石皿	2.5	2.4	0.5	安山岩 (灰)	1.20	

博岡番号	開拓番号	出土位置			基盤	法體 (cm)			石材	重量 (g)	備考
		Gr	遺構	層		長	幅	厚			
59	7	43	16	12層	石織	(1.6)	(1.2)	0.3	安山岩 (青灰)	0.40	端部欠損
59	8	43	8	12層	石織	(1.0)	2.5	0.5	安山岩 (青灰)	2.10	尖頭部欠損
59	9	43	25	12層	石織	(2.2)	(1.8)	0.3	安山岩 (青灰)	1.00	端部欠損
59	10	43	7	12層	石織	3.0	(1.6)	0.3	安山岩 (青灰)	0.98	端部欠損
59	11	43	33	12層	石織	(2.7)	(1.1)	0.4	安山岩 (青灰)	0.73	半分欠損
59	12	43	25	12層	石織	(1.8)	(1.8)	0.4	安山岩 (白)	0.79	端部欠損
59	13	43	25	12層	石織 (未製品)	3.2	1.5	0.4	デイサイト	1.37	
59	14	43	16	12層	石織 (未製品)	2.3	1.8	0.3	安山岩 (青灰)	1.04	
59	15	43	33	12層	石織 (未製品)	4.3	2.4	0.7	安山岩 (白)	5.70	
59	16	43	17	12層	削器	10.0	4.8	1.1	安山岩 (青灰)	50.98	
59	17	43	27	12層	削器	4.2	7.1	1.0	デイサイト	21.76	
59	18	43	16	12層	削器	(5.0)	(2.9)	(0.9)	安山岩 (青灰)	7.02	
60	19	43	25	12層	削器	7.0	3.6	0.9	安山岩 (白)	23.18	
60	20	43	23	12層	削器	6.7	3.3	0.7	安山岩 (青灰)	14.77	
60	21	43	25	12層	削器	8.4	5.2	1.5	流紋岩	55.88	
60	22	43	15	12層	抉入石器	(5.1)	8.8	0.8	安山岩 (白)	31.91	
60	23	43	23	12層	石核	(3.9)	3.4	0.8	安山岩 (白)	8.17	
60	24	43	13	12層	楔形石器	3.7	3.6	0.5	安山岩 (白)	8.49	
60	25	43	6	12層	楔形石器	2.8	2.3	0.8	安山岩 (白)	4.26	
60	26	43	15	12層	RF	3.6	3.5	1.3	安山岩 (青灰)	14.88	
60	27	43	34	12層	RF	5.0	5.1	1.8	デイサイト	32.24	
60	28	43	15	12層	RF	3.5	5.7	0.6	安山岩 (青灰)	8.53	
60	29	43	16	12層	RF	4.3	3.8	1.3	デイサイト	12.31	
60	30	43	25	12層	MF	7.4	5.4	1.4	安山岩 (灰白)	46.37	
61	31	43	14	12層	MF	5.5	9.7	1.9	安山岩 (白)	56.32	
61	32	43	23	12層	MF	4.7	7.0	0.9	流紋岩	27.68	
61	33	43	13	12層	MF	3.8	5.7	1.3	安山岩 (白)	18.24	
61	34	43	34	12層	打製石斧 (未製品)	8.5	7.9	3.4	安山岩 (白)	224.97	両側打刃
61	35	43	34	12層	打製石斧 (未製品)	5.4	5.3	1.8	安山岩 (白)	77.49	
61	36	44	9	12層	石核	10.2	6.9	2.9	安山岩 (白)	268.34	
61	37	44	14	12層	石核	9.6	8.7	4.1	流紋岩	438.14	
61	38	44	8	12層	石核	4.3	8.6	3.0	安山岩 (青灰)	68.59	
61	39	44	9	12層	石核	5.4	6.0	2.1	安山岩 (白)	74.26	
62	40	44	25	12層	有溝石鍬	4.2	3.9	1.3	流紋岩	26.13	
62	41	44	14	12層	敲石	9.8	4.1	2.1	安山岩	92.92	
62	42	44	33	12層	敲石	14.5	4.9	4.1	流紋岩	373.59	
62	43	44	15	12層	敲石	12.7	4.1	3.6	流紋岩	285.93	
62	44	44	25	12層	敲石	8.0	5.8	4.2	デイサイト	297.56	被熱
62	45	44	40	12層	敲石	12.6	7.1	4.5	流紋岩	408.03	被熱
62	46	44	17	12層	敲石	11.3	5.5	4.6	デイサイト	388.75	被熱
62	47	44	13	12層	敲石	9.7	6.7	5.2	安山岩	485.21	
62	48	45	41	12層	敲石	20.0	8.5	5.9	デイサイト	1505.79	

博物館番号 測量図 番号	図版 番号	出土位置			器種	法量 (cm)			石材	重量 (g)	備考
		Gr	遺跡	層		長	幅	厚			
62 49 44	25			12層	磨石	4.5	5.0	3.3	デイサイト	107.05	
62 50 44	23			12層	磨石	5.6	5.4	4.8	デイサイト	194.58	
62 51 44	24			12層	敲石/磨石	3.8	3.4	2.8	デイサイト	36.66	
62 52 44	14			12層	敲石/磨石	5.3	5.0	5.0	デイサイト	149.8	
63 53 45	14			12層	敲石/磨石	14.3	10.4	6.6	安山岩	1380.09	
63 54 45	13			12層	敲石/磨石	9.9	8.2	5.6	安山岩	676.23	
63 55 45	23			12層	敲石/磨石	10.4	8.2	5.2	安山岩	645.42	赤色顔料測定No.37
63 56 45	34			12層	敲石/磨石	12.0	9.8	5.7	デイサイト	998.16	
63 57 45	24			12層	敲石/磨石	10.3	7.5	4.4	闊板岩	493.18	
63 58 45	33			12層	敲石/凹石/磨石	8.9	9.4	5.3	デイサイト	482.33	
63 59 45	34			12層	敲石/凹石/磨石	9.4	8.6	6.7	安山岩	790.66	
64 60 45	8			12層	敲石/凹石	10.2	9.2	6.0	デイサイト	702.51	
64 61 45	33			12層	敲石/凹石	14.9	9.3	6.5	安山岩	1272.58	
64 62 46	35			12層	磨製石斧	10.5	4.7	3.1	塗基性片岩	215.01	刃部再生
64 63 46	26			12層	磨製石斧	6.8	4.2	3.3	塗基性片岩	102.26	刃部欠損 定角式?
64 64 46	26			12層	磨製石斧	(6.5)	(4.9)	(1.3)	結晶片岩	32.47	刃部 大部分欠損
64 65 46	33			12層	磨製石斧	6.2	7.3	2.5	浅鉄岩	116.40	刃部
64 66 46	15			12層	磨製石斧 (未製品)	10.6	6.1	2.4	浅鉄岩	207.99	
64 67 46	34			12層	磨製石斧	5.7	4.0	1.1	安山岩	33.43	
64 68 46	16			12層	台石	21.2	13.0	4.4	浅鉄岩	1640.84	
65 69 47	25			12層	台石	19.9	23.5	7.0	安山岩 (鷹嶽嵌入)	4000.00	
65 70 47	26			12層	石皿	24.2	15.9	11.3	デイサイト	5160.00	
65 71 47	17			12層	石皿	30.8	25.5	7.8	砂岩	6330.00	
65 72 47	34			12層	石皿	19.6	12.0	3.1	安山岩	1031.75	
65 73 47	15			12層	石皿	11.0	11.7	3.8	安山岩	630.45	
65 74 47	16			12層	石皿	7.9	13.2	6.3	砂岩	666.40	
66 75 46	34			12層	石製品	10.2	4.4	7.2	デイサイト	360.96	破面を平滑に研磨
66 76 46	35			12層	石製品	8.9	4.8	2.1	砂岩	132.74	赤色顔料測定No.15 被熱
66 77 46	26			12層	石製品	18.9	5.9	5.1	安山岩 (鵠入石材)	842.51	石棒状石器 or 敲石 被熱
66 78 46	8			12層	原石	6.6	3.7	2.8	石英	98.20	
66 79 46	15			12層	板状石核素材	8.7	4.5	2.1	泥質岩 (鵠入石材)	95.90	
66 80 46	26			12層	珪化木	11.7	5.9	3.4	—	336.73	
67 1 48	22			13層	削器	4.0	5.5	0.8	安山岩 (灰)	14.39	
67 2 48	33			21層	石錐	7.5	2.8	1.0	安山岩 (青灰)	16.38	
67 3 48	33			21層	石錐	6.4	4.2	0.8	安山岩 (褐灰)	17.83	
67 4 48	33			22層	石錐 (未製品)	2.6	(1.8)	0.6	安山岩 (青灰)	1.56	
67 5 48	23			22層	削器	7.1	7.0	1.2	浅鉄岩	55.00	
67 6 48	45			22層	石核	9.3	7.5	3.8	瑪瑙	165.91	
67 7 48	23			22層	敲石/磨石	9.5	6.6	4.6	安山岩	410.20	
67 8 48	39			22層	敲石	6.2	5.4	5.2	安山岩	240.54	

※ MF: 微細剝離痕のある剥片 RF: 二次加工のある剥片

図 版



南からの遺跡遠景（北に神西湖と北山山系を望む）

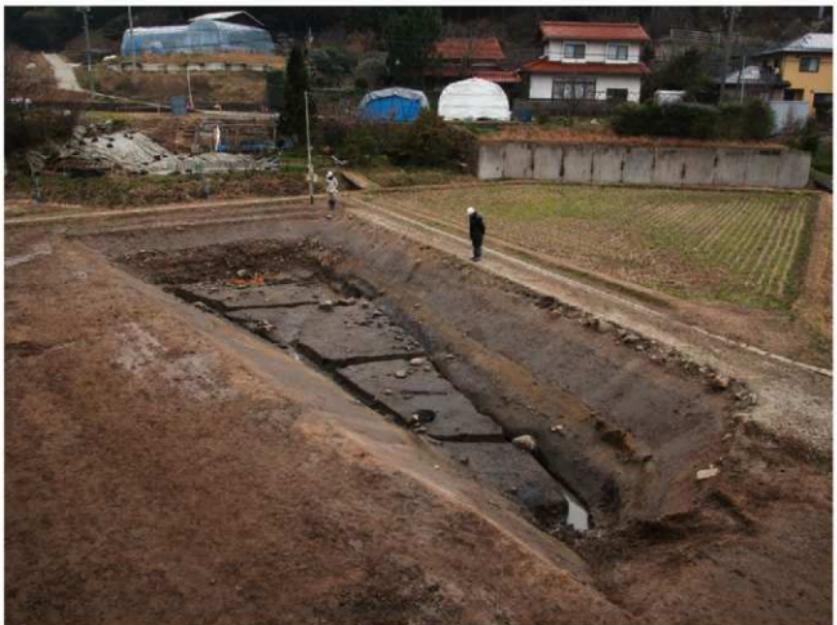


北からの遺跡遠景（南に中国山地を望む）

図版 2 調査区全景



調査区全景（上が4-1区・下が4-2区、左上が北）



完掘状況（東から）



北壁の土層堆積状況と洪水堆積層（南から）

図版 4 主な遺構 (1)



竪穴建物 SI1601 (右)・SI1602 (左) (北から)



配石土坑 ST1601 (左)・土坑 SK1602 (右) (南西から)



土坑 SK1603 遺物出土状況（北西から）



配石土坑 ST1601 遺物出土状況（南西から、異形土器片はトンボの位置）

図版6 主な出土遺物



主な出土土器



主な出土石器



主な外来系土器



赤色顔料付着遺物

図版 8 異形土器



異形土器（1）（左：上面 右：側面。配石土坑ST1601・4－1区12層）



異形土器（1）（左：外面 右：内面。配石土坑ST1601・4－1区12層）



異形土器（2）（左：外面 右：内面。4－1区12層）



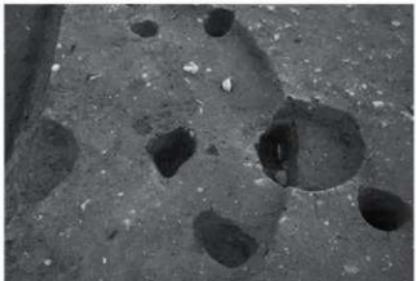
異形土器（3）（左：外面 右：内面。4－1区12層）



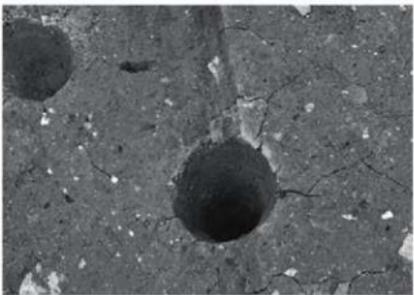
竪穴建物跡 SI1601 遺物出土状況（南西から）



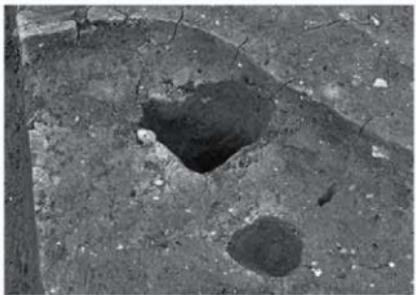
竪穴建物跡 SI1601 完掘状況（南西から）



竪穴建物跡 SI1601 内柱穴 SP-A ~ C・G 完掘状況（西から）



竪穴建物跡 SI1601 内柱穴 SP-F 完掘状況（西から）



竪穴建物跡 SI1601 内柱穴 SP-D・E 完掘状況（西から）

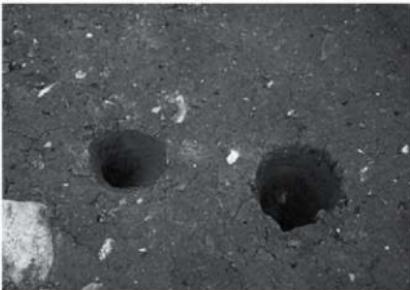
図版 10 穹穴建物跡（2）



竪穴建物跡 SI1602 遺物状況（南西から）



竪穴建物跡 SI1602 完掘状況（南西から）



竪穴建物跡 SI1602 内柱穴 SP-A・B 完掘状況（西から）



竪穴建物跡 SI1601・SI1602 掘出状況（南から）



配石土坑 ST1601 配石（東から）



配石土坑 ST1601 異形土器片（中央）出土状況（東から）

配石土坑 ST1601 掘出状況（南西から）



配石土坑 ST1601 遺物出土状況（南東から）

図版 12 土坑



土坑 SK1601 土層堆積状況（東から）



土坑 SK1601 遺物出土状況（東から）



土坑 SK1604 土層堆積状況（西から）



土坑 SK1604・SK1605 完掘状況（南西から）



土坑 SK1602 検出状況（南西から）



土坑 SK1602 土層堆積状況（南から）



土坑 SK1602 遺物出土状況（南西から）



土坑 SK1602 完掘状況（南西から）



土坑 SK1603 土坑上面の遺物出土状況（北西から）



土坑 SK1603 土層堆積状況（西から）



土坑 SK1603 底面の遺物出土状況（北西から）



土坑 SK1603 完掘状況（東から）



集石遺構 SS1601・SS1602 検出状況（北東から）



集石遺構 SS1603 検出状況（北西から）



集石遺構 SS1601～SS1603 検出状況（北から）

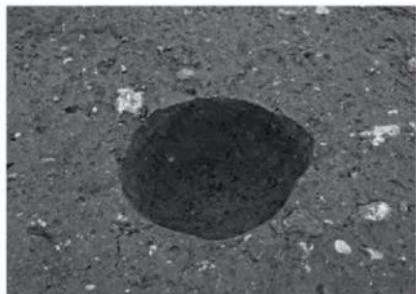
図版 14 柱穴



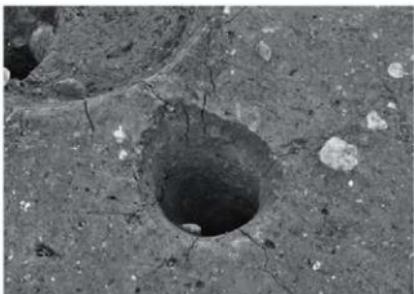
柱穴 SP1601 遺物出土状況（南から）



柱穴 SP1602 土層堆積状況（南西から）



柱穴 SP1603 完掘状況（西から）



柱穴 SP1604 完掘状況（西から）



柱穴 SP1605 完掘状況（南から）



柱穴 SP1606・SP1607 完掘状況（北から）



柱穴 SP1606 完掘状況（北から）



柱穴 SP1607 完掘状況（北から）



自然流路 NR1601 遺物・流木出土状況（西から）



自然流路 NR1601 土層堆積状況（北から）



自然流路 NR1601 排出状況（西から）



自然流路 NR1601 完掘状況（西から）



完掘状況（西から）



東壁の土層堆積状況と洪水堆積層（西から）



鉢（土坑 SK1601）



深鉢（土坑 SK1603 上面）



小形土器（配石土坑 ST1601）



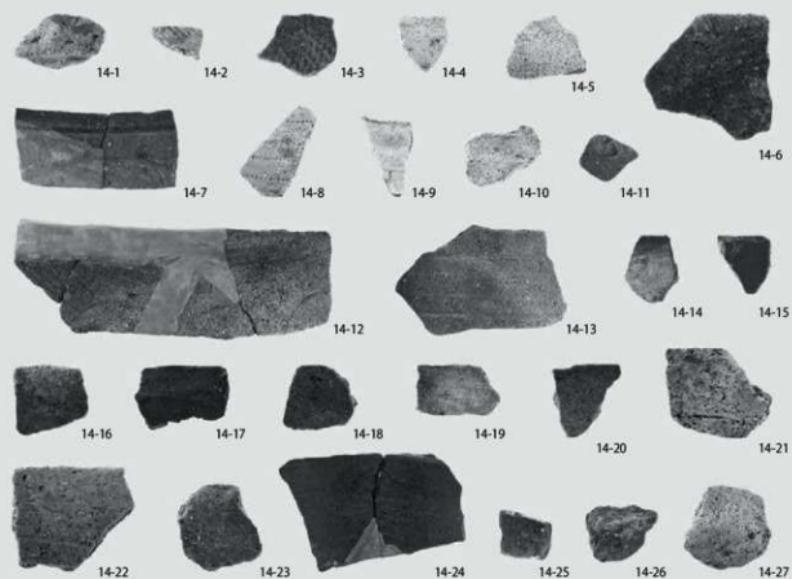
注口土器（左：上面 右：側面，土坑 SK1603）



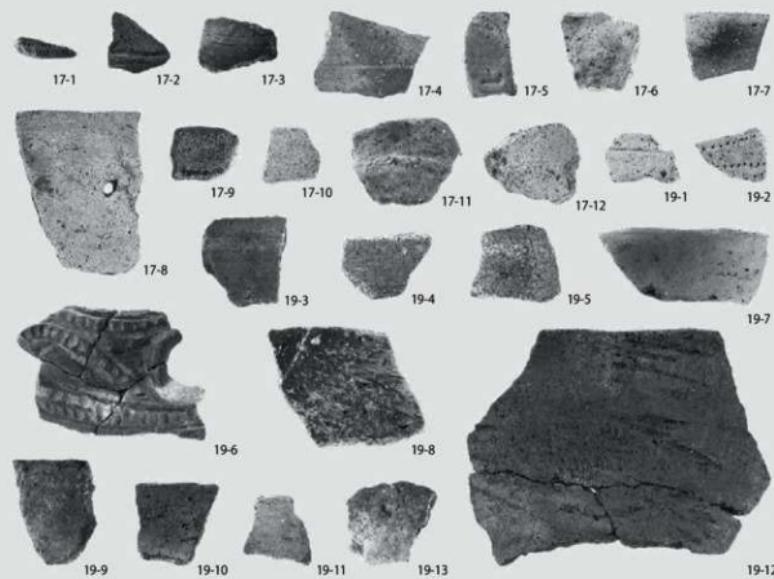
25-6

注口土器（左：正面 右：内面，土坑 SK1603）

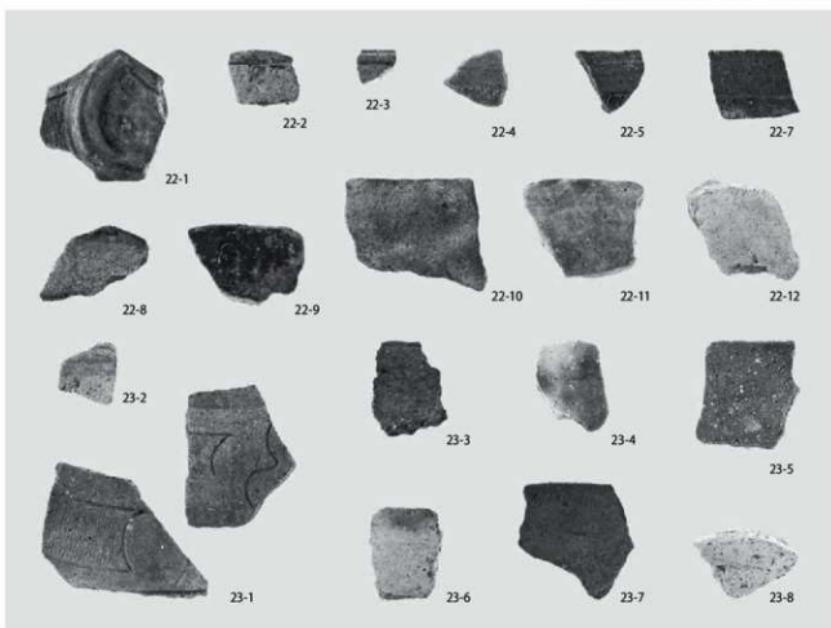
図版 18 遺構内出土土器 (2)



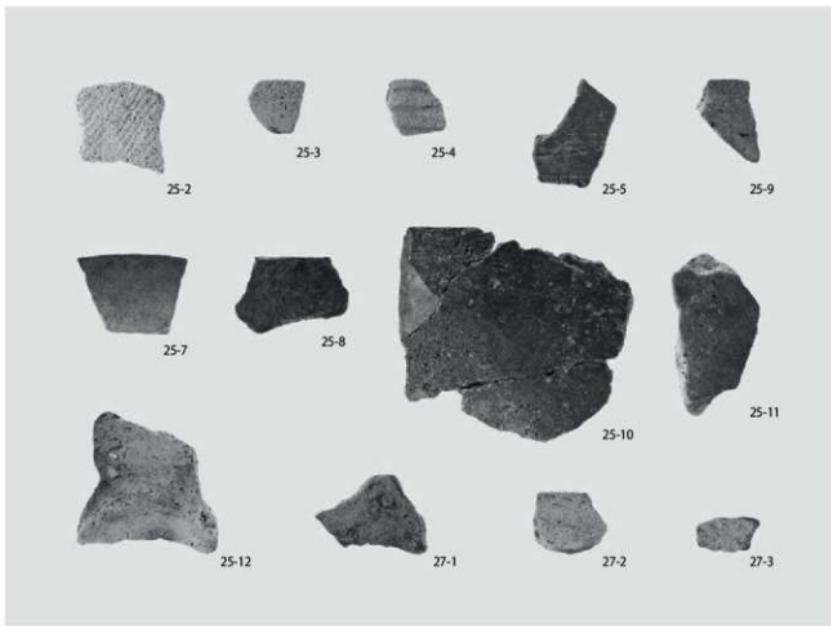
竪穴建物跡 SI1601・柱穴 SP1601 土器



竪穴建物跡 SI1602・配石土坑 ST1601 土器

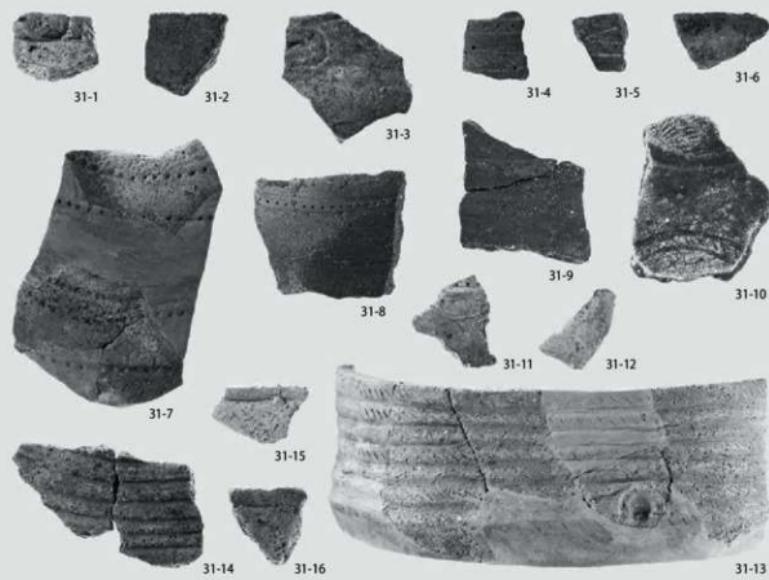


土坑 SK1601・SK1602 土器

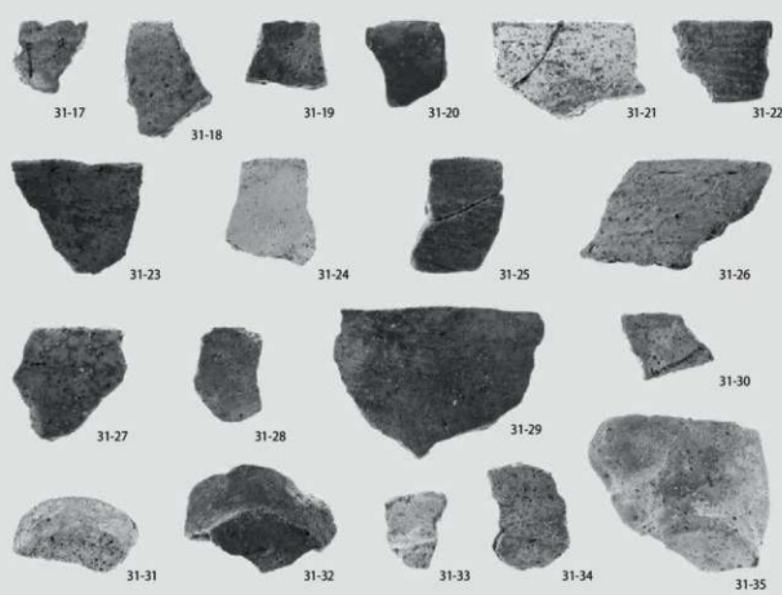


土坑 SK1603・SK1604・SK1605 土器

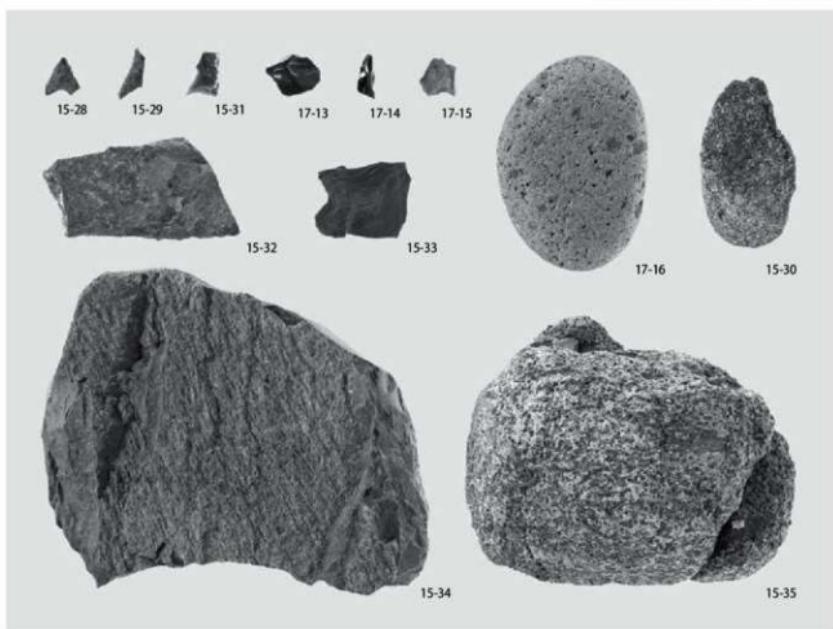
図版 20 遺構内出土土器 (4)



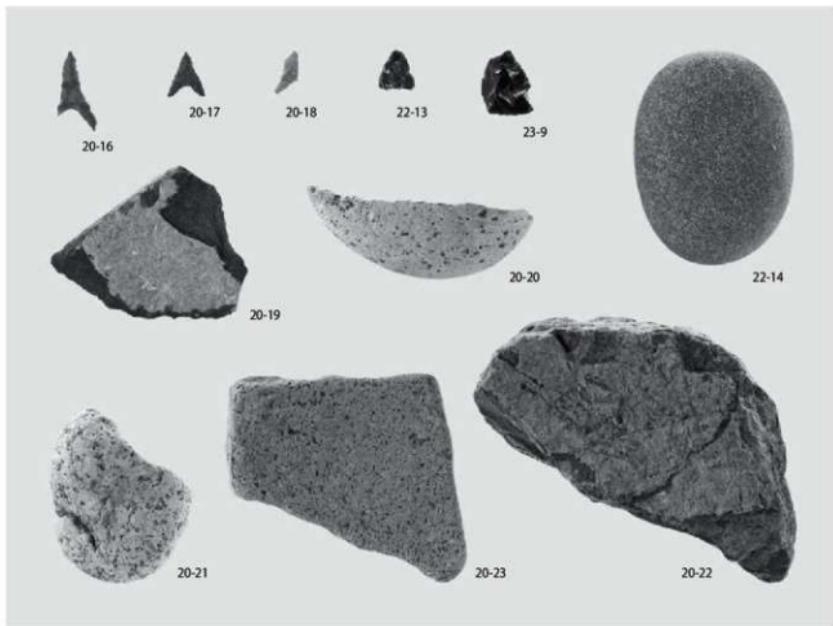
自然流路 NR1601 土器 (1)



自然流路 NR1601 土器 (2)



竪穴建物跡 SI1601・SI1602 および柱穴 SP1605 石器

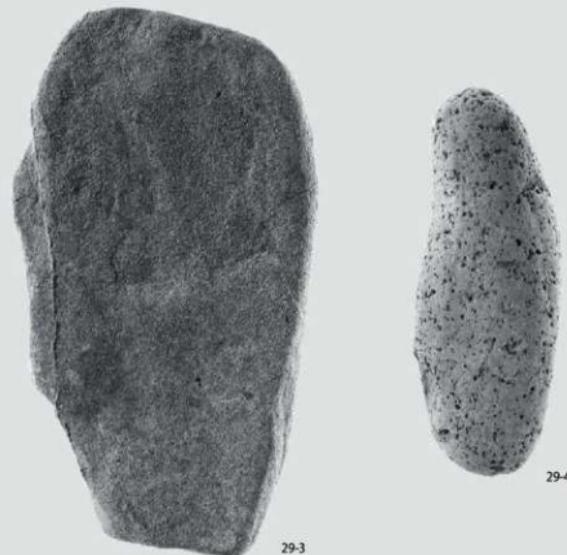


配石土坑 ST1601 および土坑 SK1601・SK1602 石器

図版 22 遺構内出土石器 (2)



土坑 SK1603・集石遺構 SS1601・自然流路 NR1601 石器



集石遺構 SS1603 石器



40-63

深鉢 (4-1区 12層)



45-148

注口土器 (4-1区 12層)



47-12

鉢 (4-1区 12層および 21層上面)



52-1

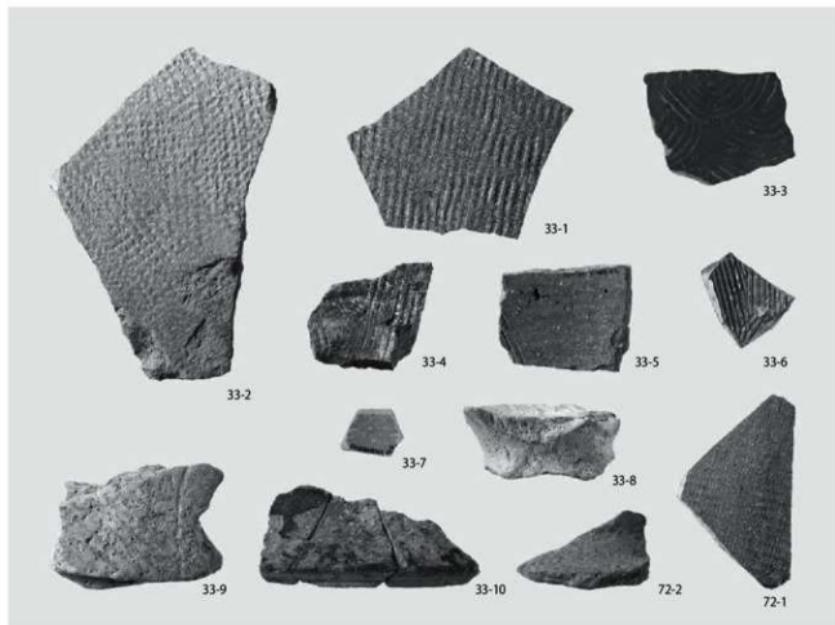
底部 (4-1区 6層)



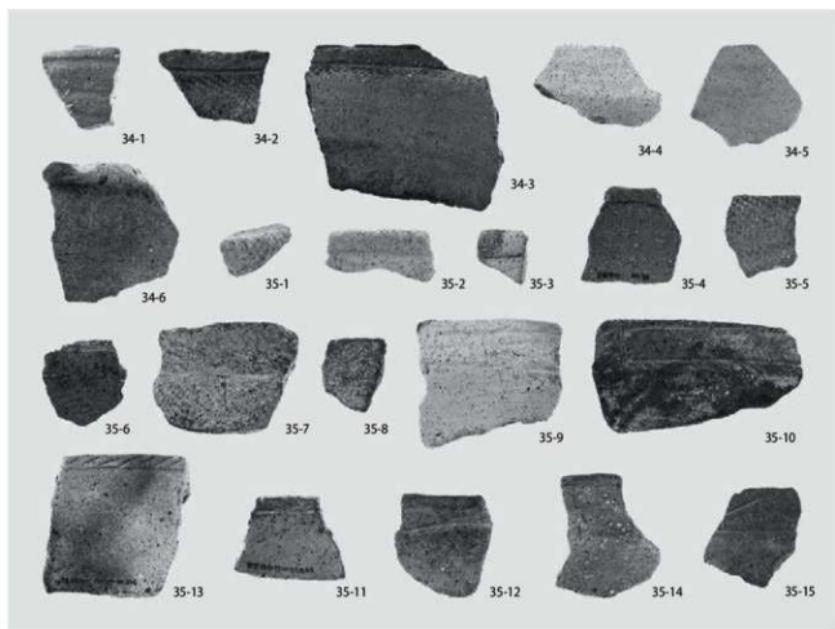
42-93

九州系の深鉢または鉢 (4-1区 12層など)

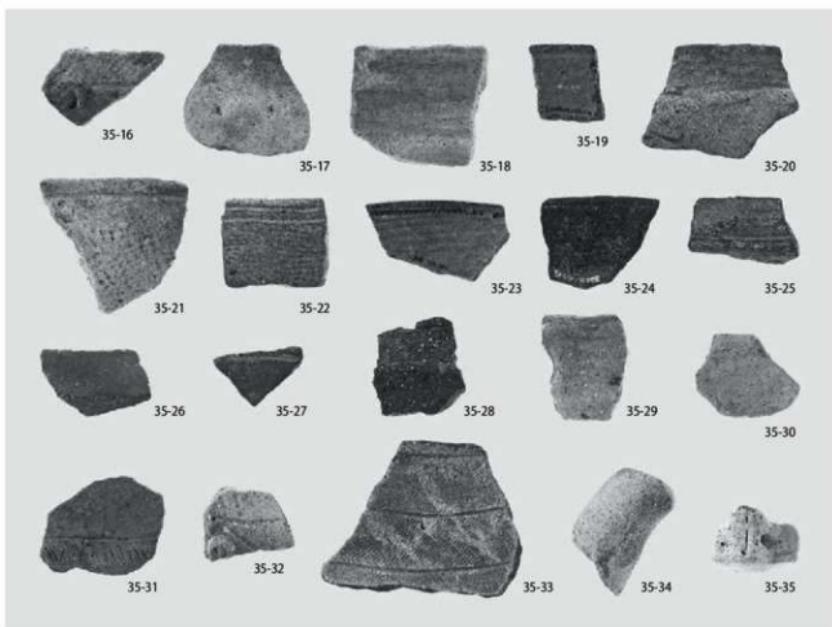
図版 24 遺構外出土土器 (2)



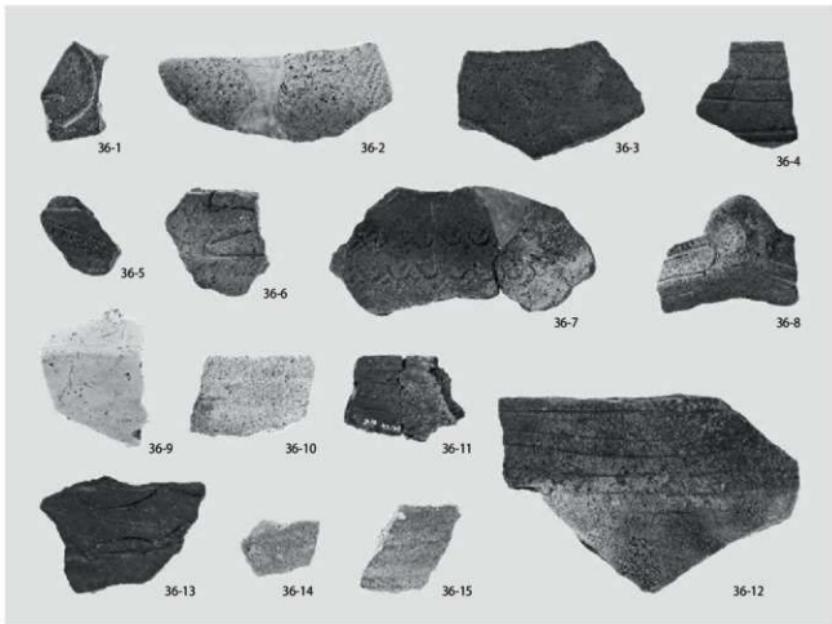
4-1区3~5層および4-2区4層 有文土器など（縄文土器以外）



4-1区5・6層 有文土器



4-1区6層 有文土器

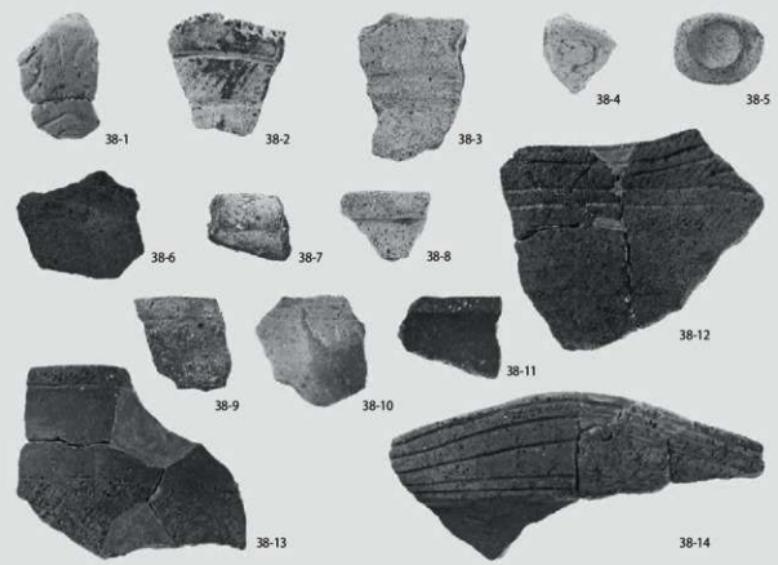


4-1区11層 有文土器 (1)

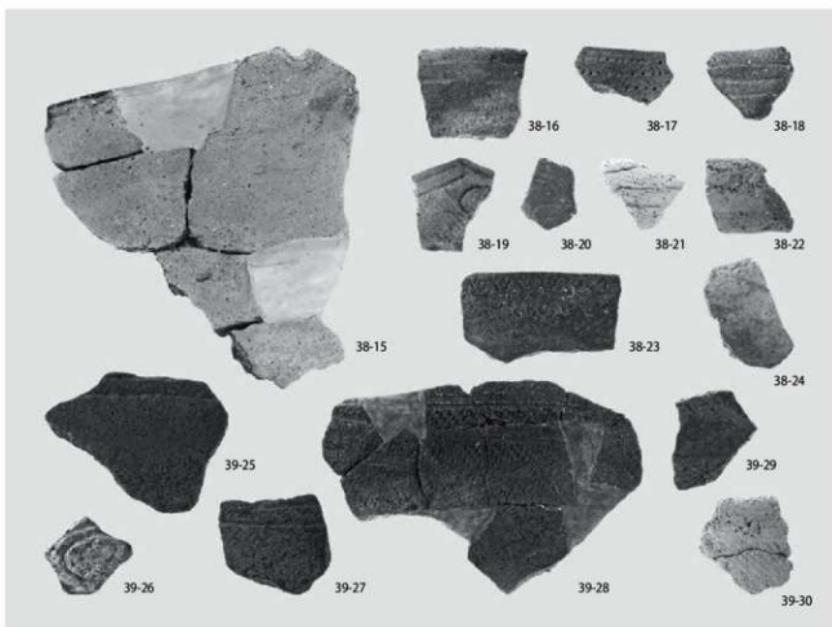
図版 26 遺構外出土土器 (4)



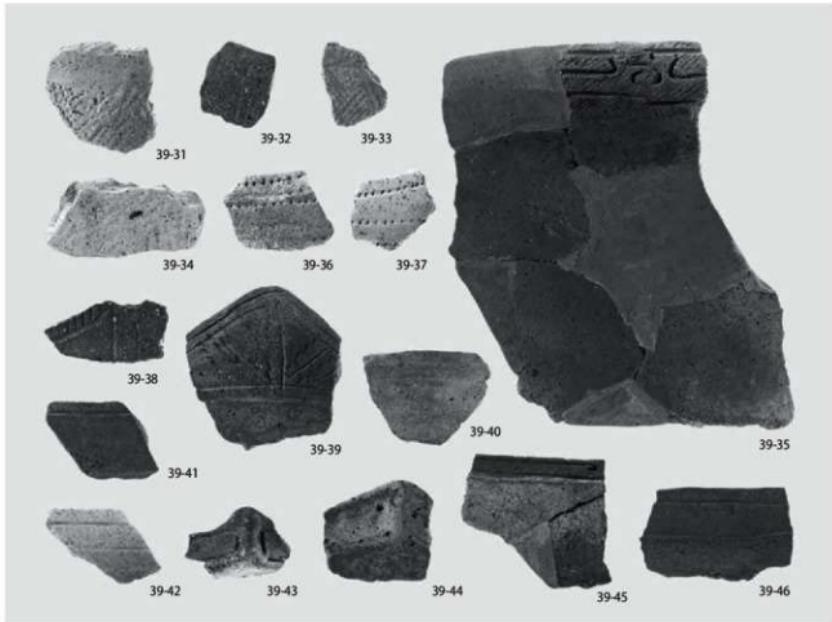
4-1区 11層 有文土器 (2)



4-1区 12層 有文土器 (1)

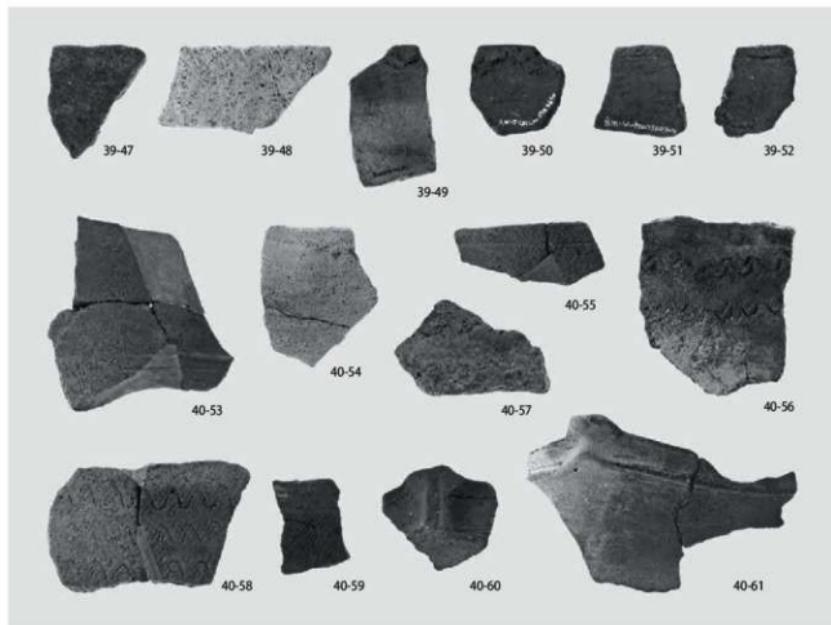


4-1区12層 有文土器 (2)

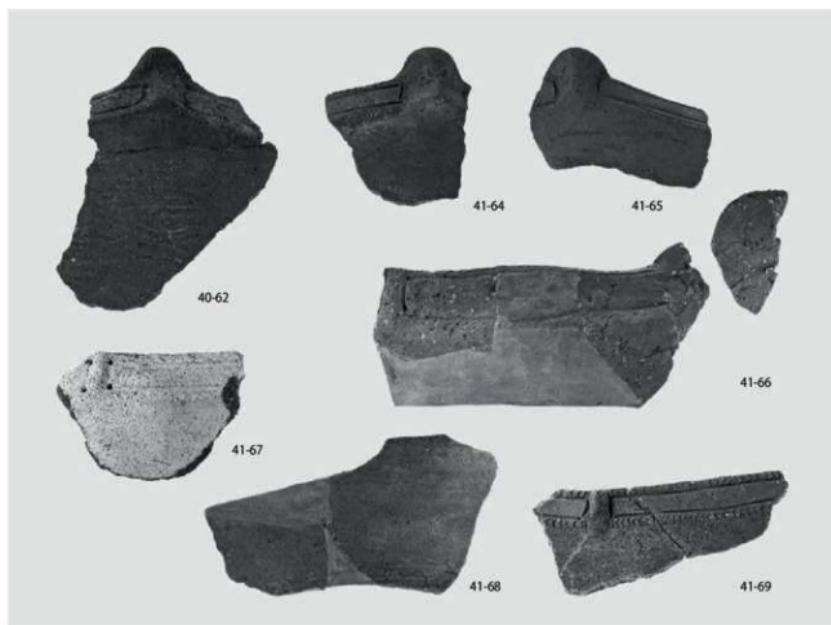


4-1区12層 有文土器 (3)

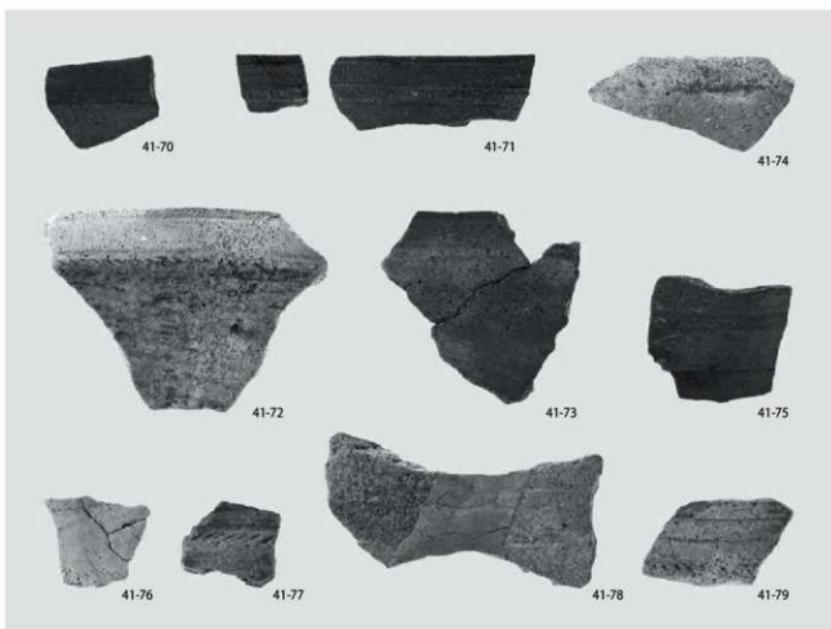
図版 28 遺構外出土土器 (6)



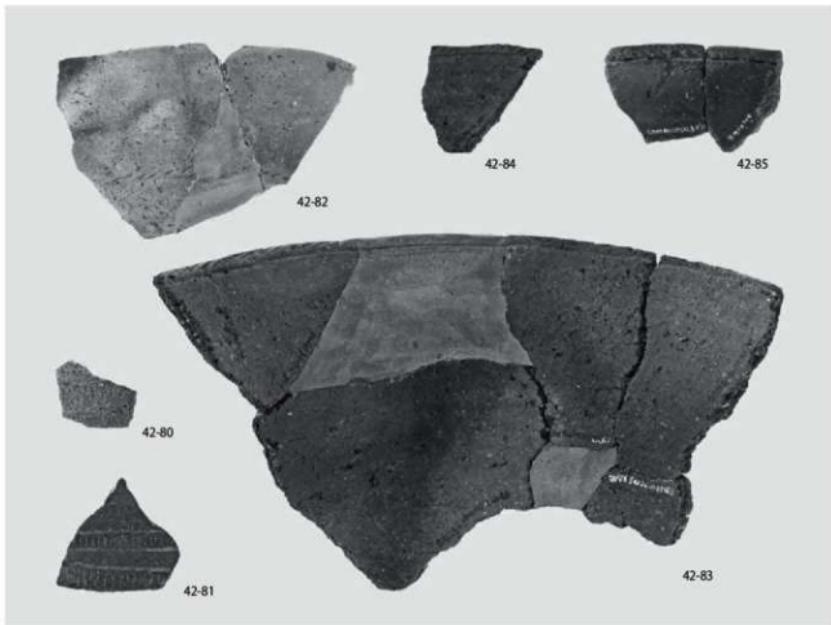
4-1区12層 有文土器 (4)



4-1区12層 有文土器 (5)

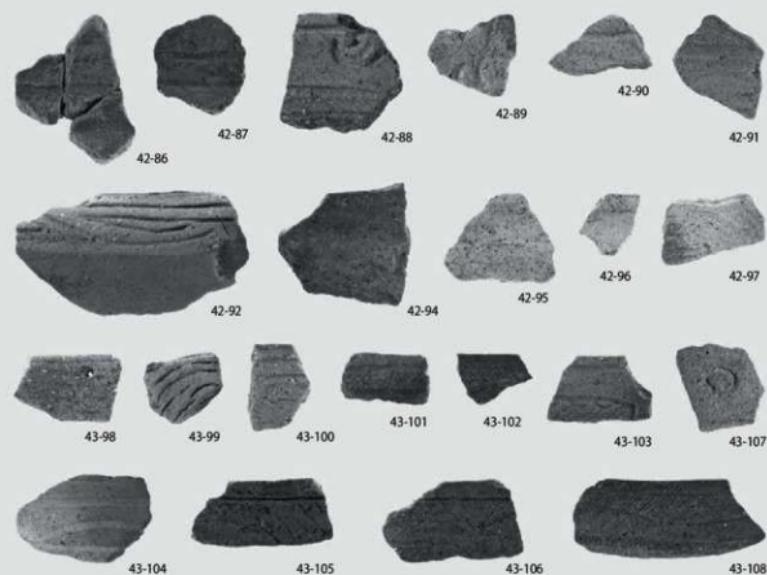


4-1区12層 有文土器 (6)

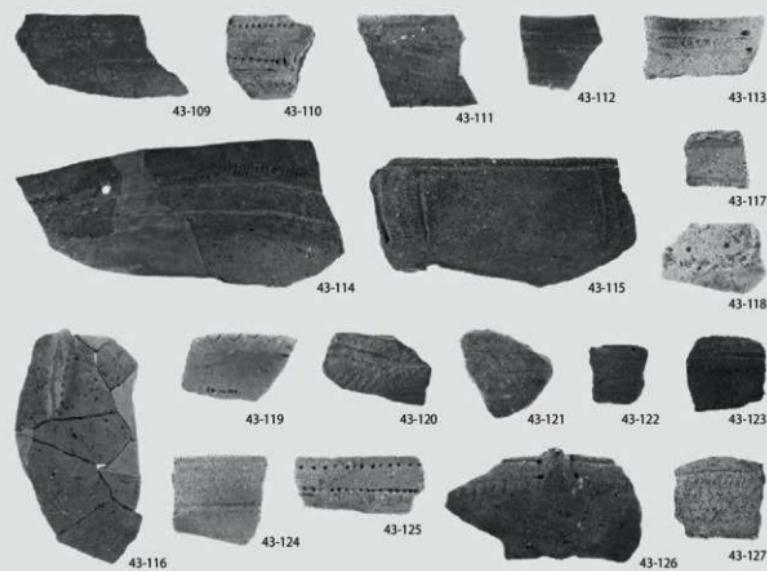


4-1区12層 有文土器 (7)

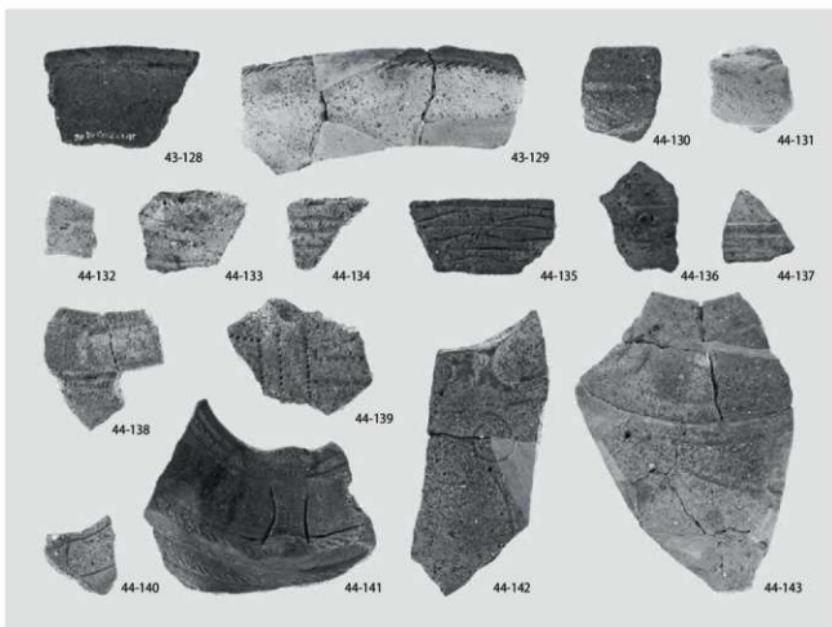
図版 30 遺構外出土土器 (8)



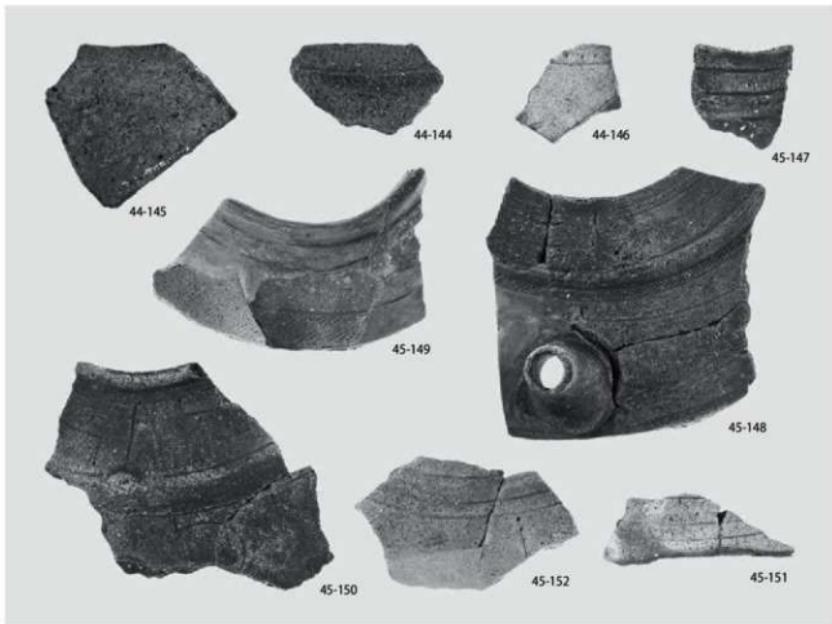
4-1区12層 有文土器 (8)



4-1区12層 有文土器 (9)

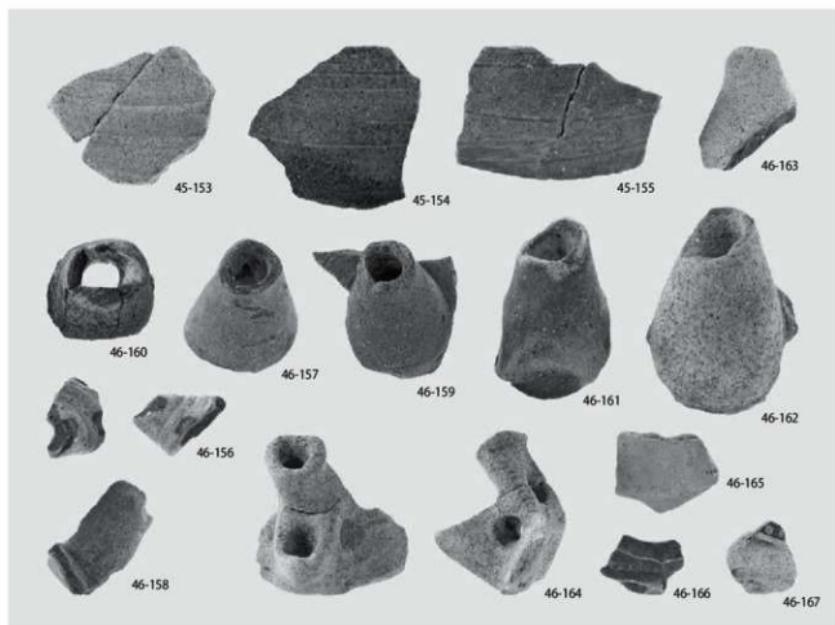


4-1区 12層 有文土器 (10)

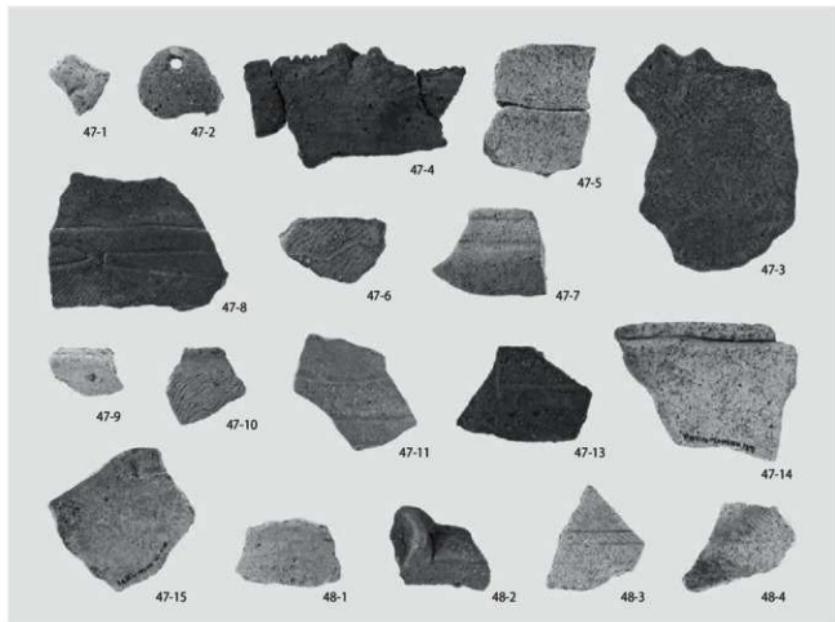


4-1区 12層 有文土器 (11)

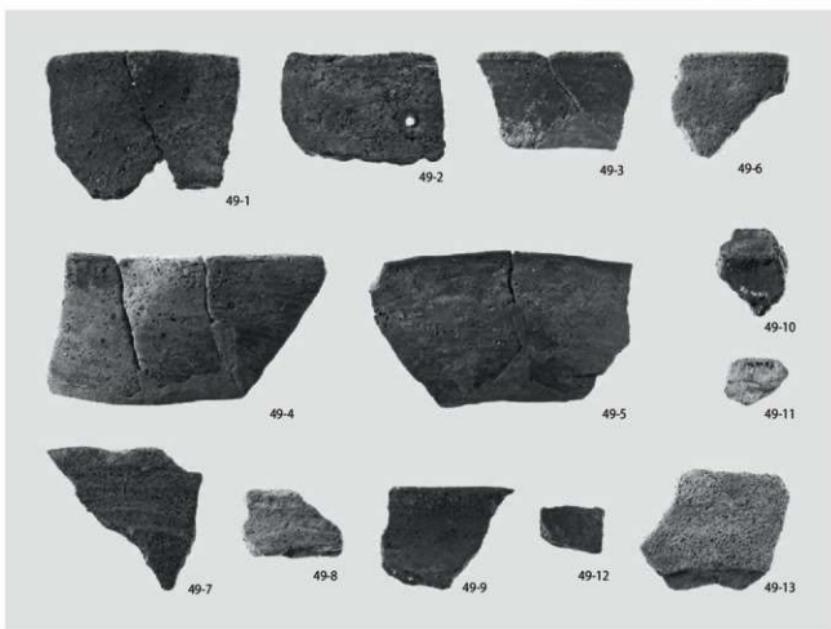
図版 32 遺構外出土土器 (10)



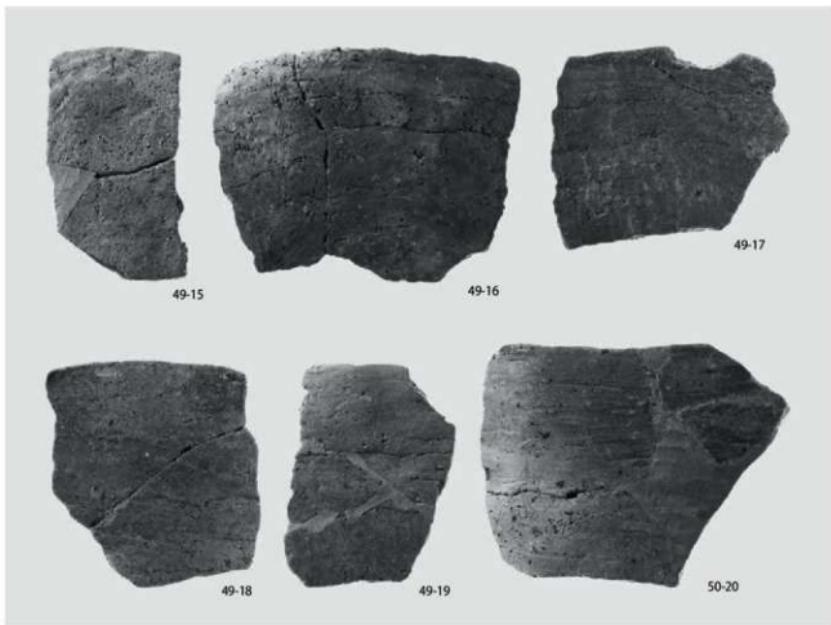
4-1区 12層 有文土器 (12)



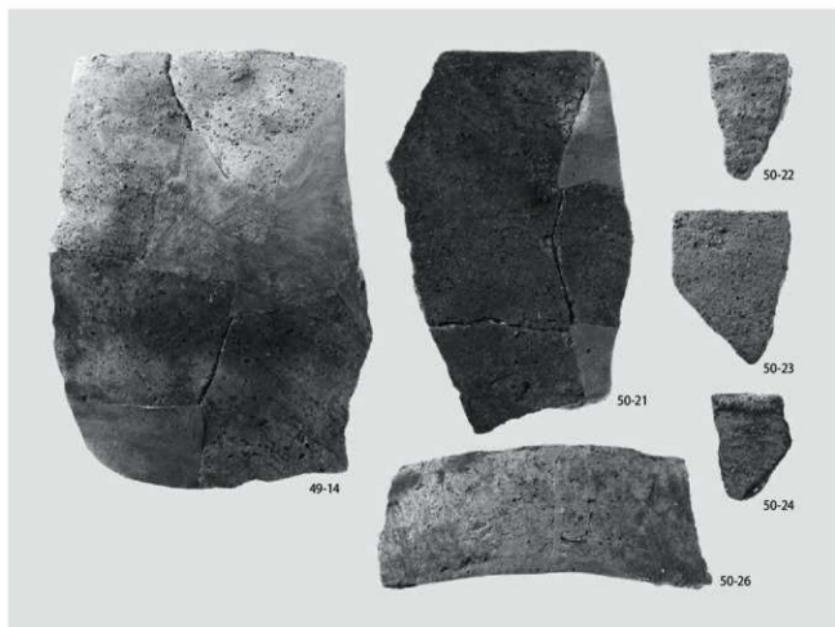
4-1区 21層上面（遺構面）と 21・22層および包含層以外 有文土器



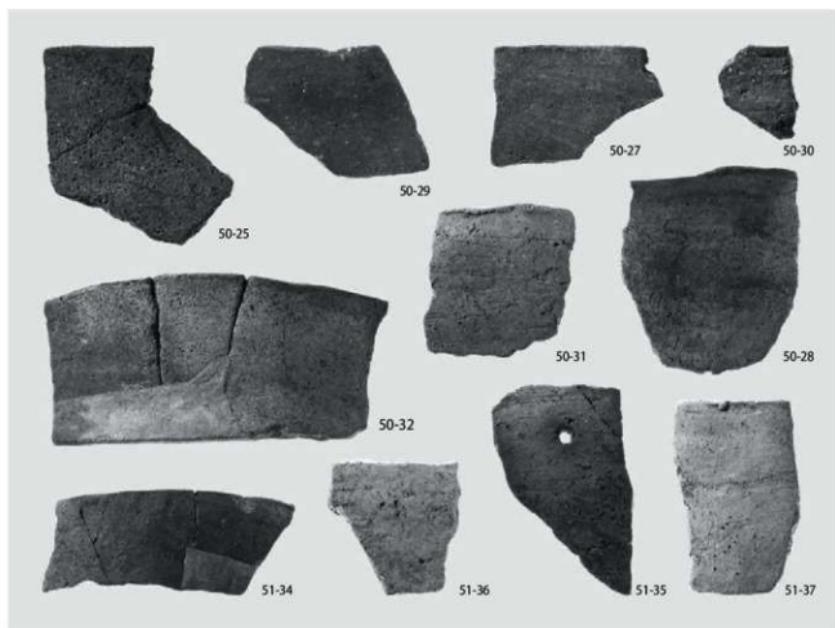
4-1区5・6・11層 無文土器



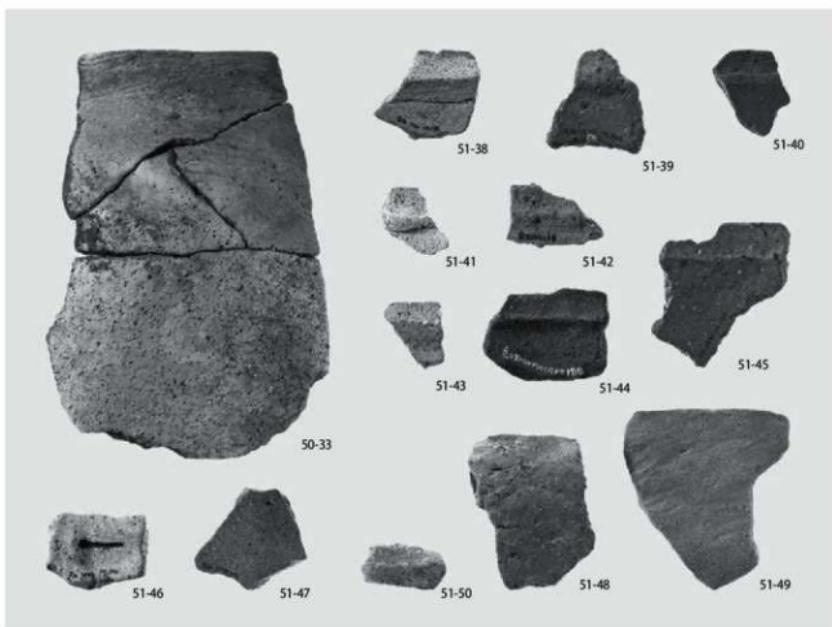
4-1区12層 無文土器 (1)



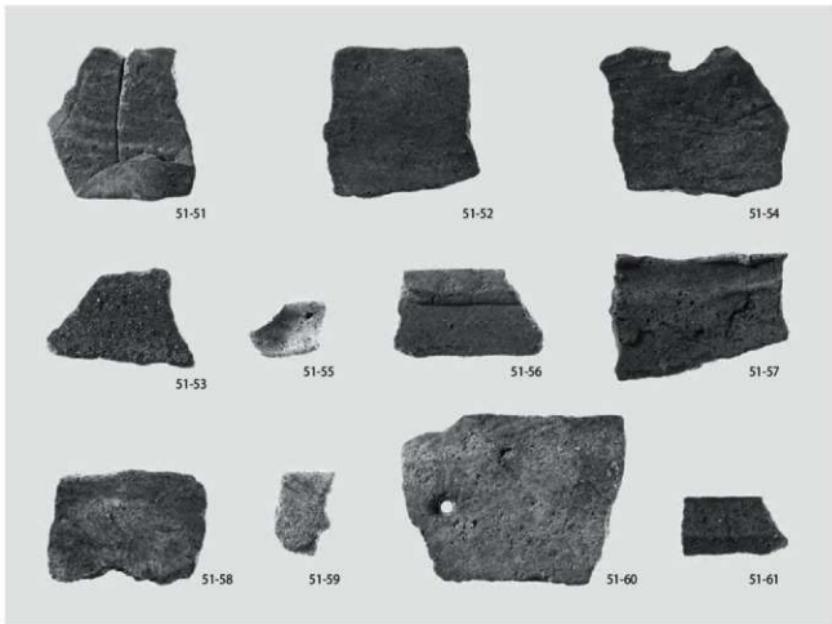
4-1区12層 無文土器 (2)



4-1区12層 無文土器 (3)

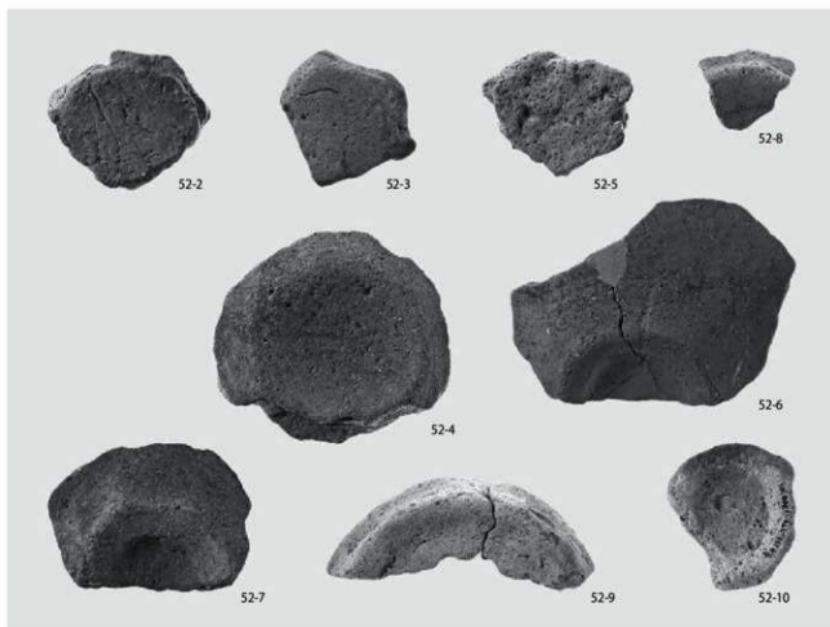


4-1区 12層 無文土器 (4)

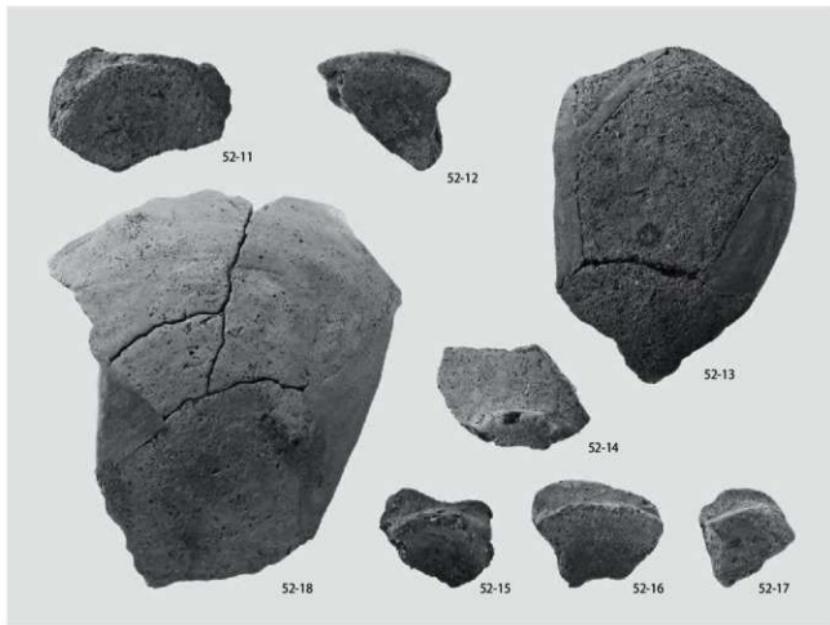


4-1区 12層・21層上面(遺構面)と21・22層および包含層以外 無文土器 (5)

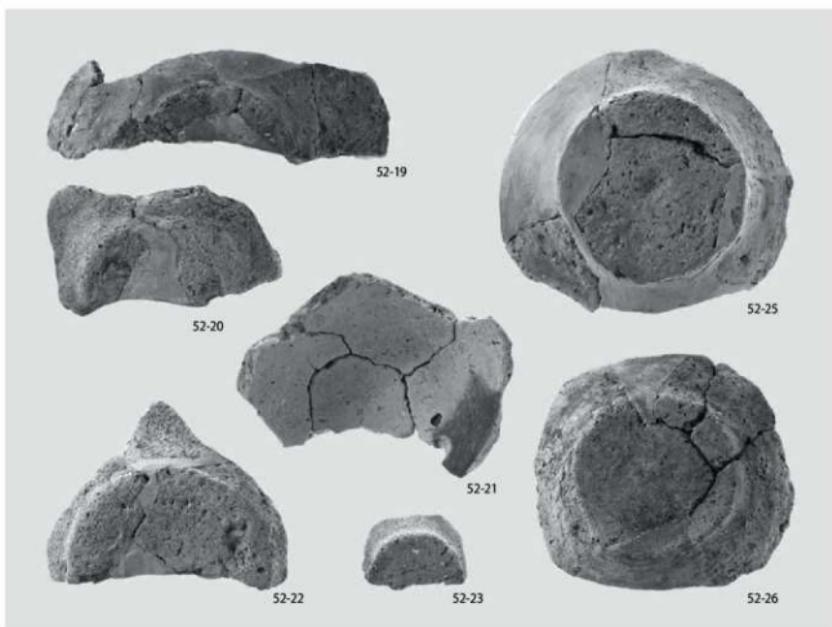
図版 36 遺構外出土土器 (14)



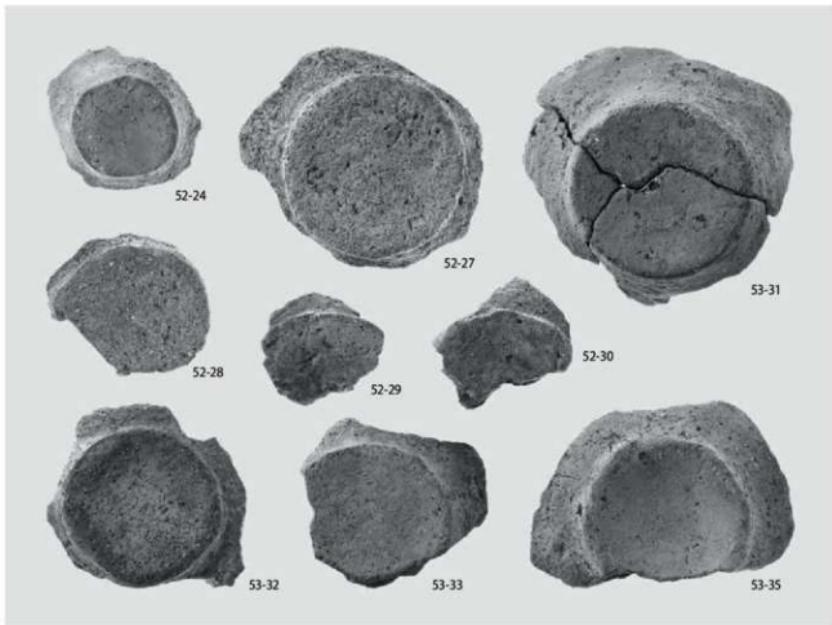
4-1区6層 底部



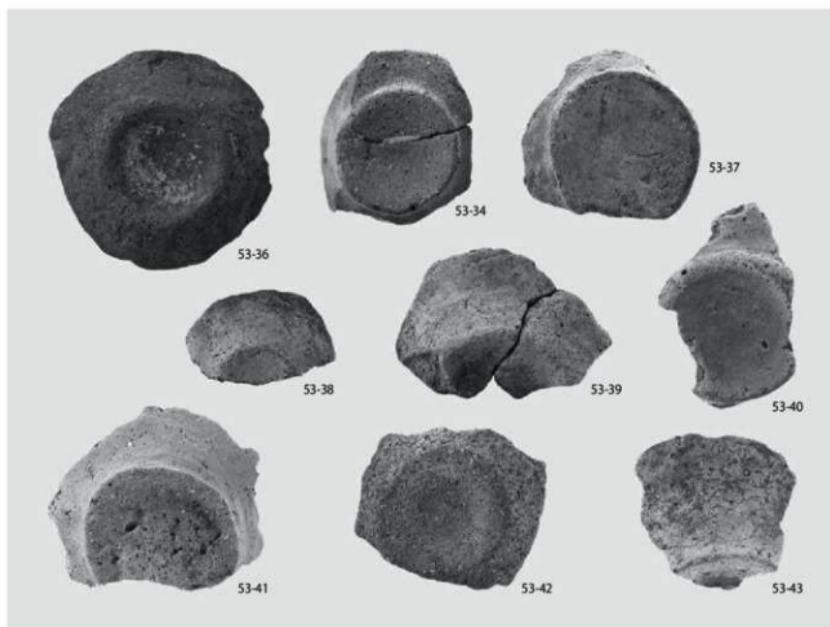
4-1区11・12層 底部



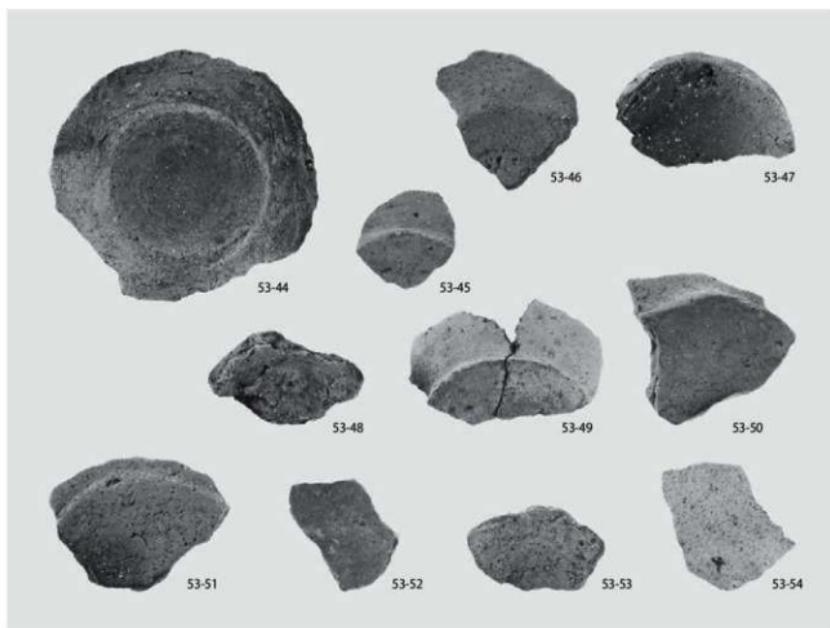
4-1区 12層 底部 (1)



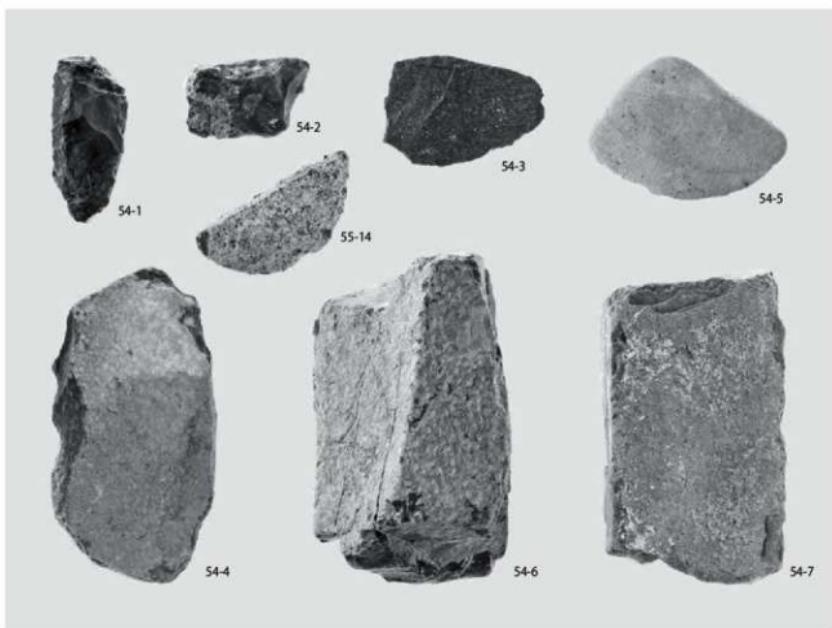
4-1区 12層 底部 (2)



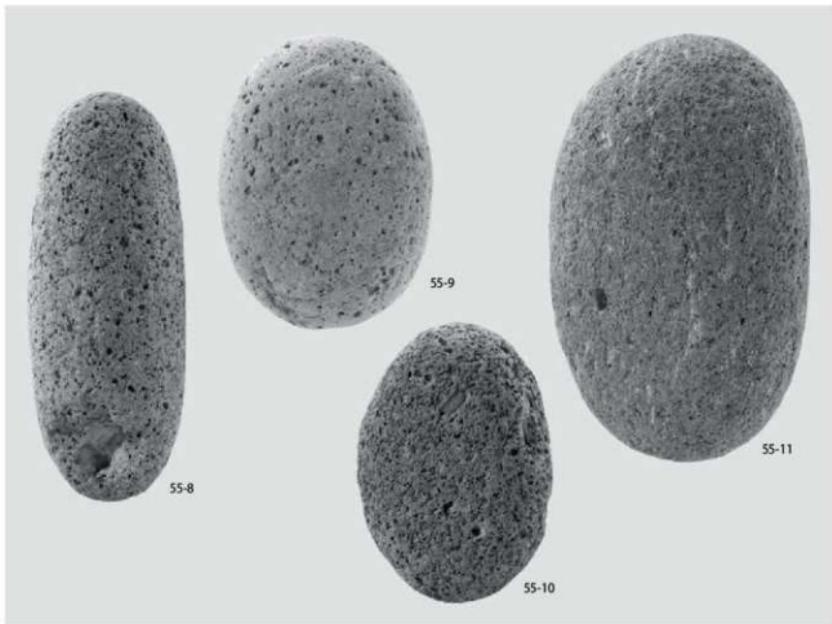
4-1区12層 底部 (3)



4-1区12・21・22層 底部



4-1区3~5層 石器

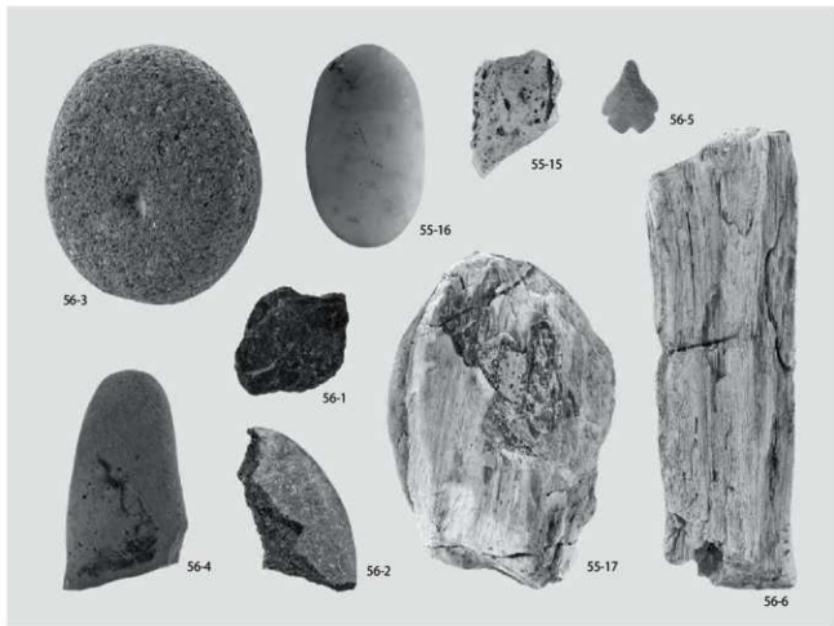


4-1区5層 石器 (1)

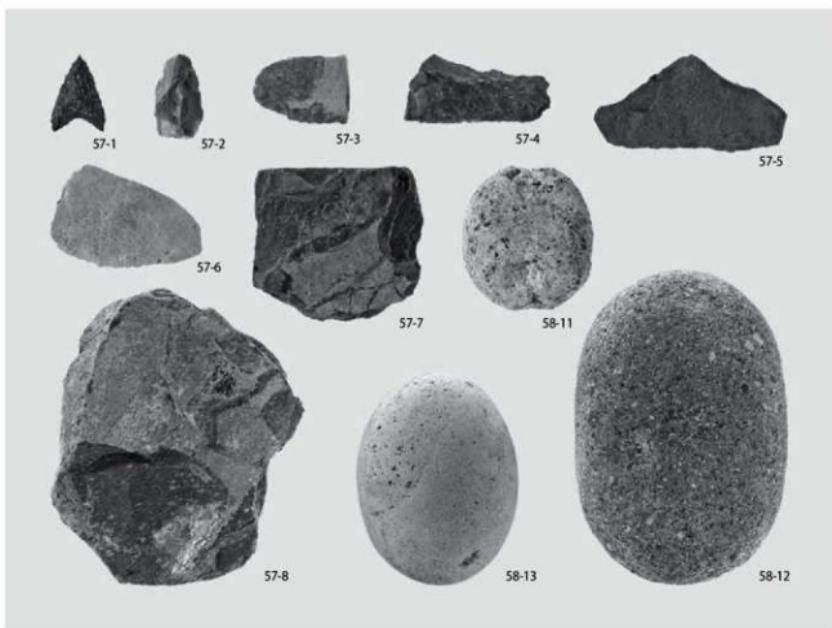
図版 40 遺構外出土石器 (2)



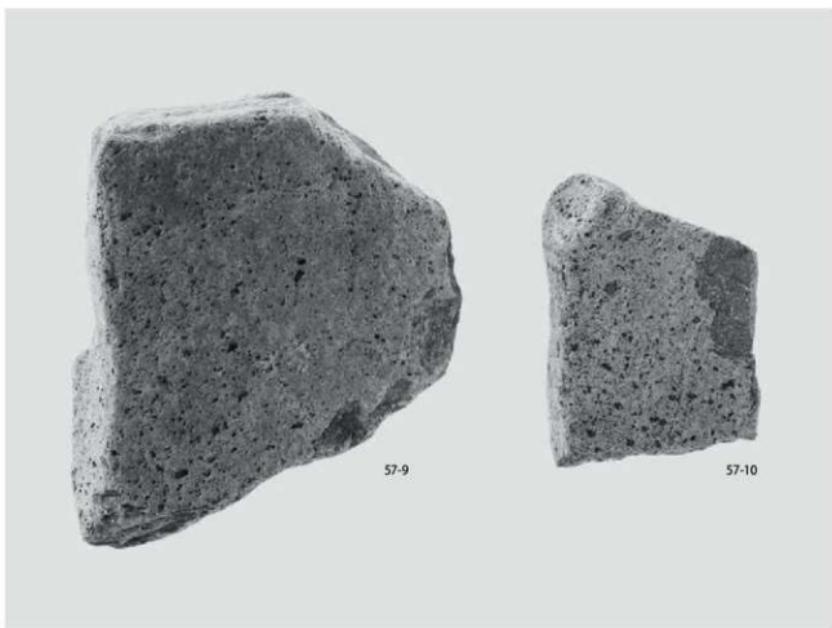
4-1区5層 石器 (2)



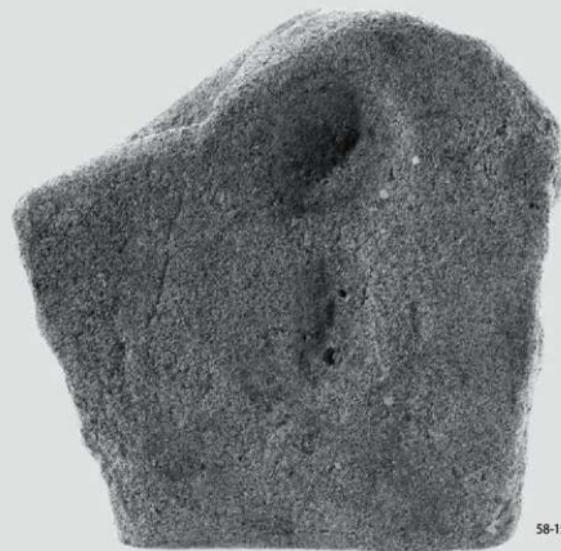
4-1区5・6層 石器



4-1区11層 石器 (1)



4-1区11層 石器 (2)



58-15

4-1区 11層 石器 (3)



58-16



58-14

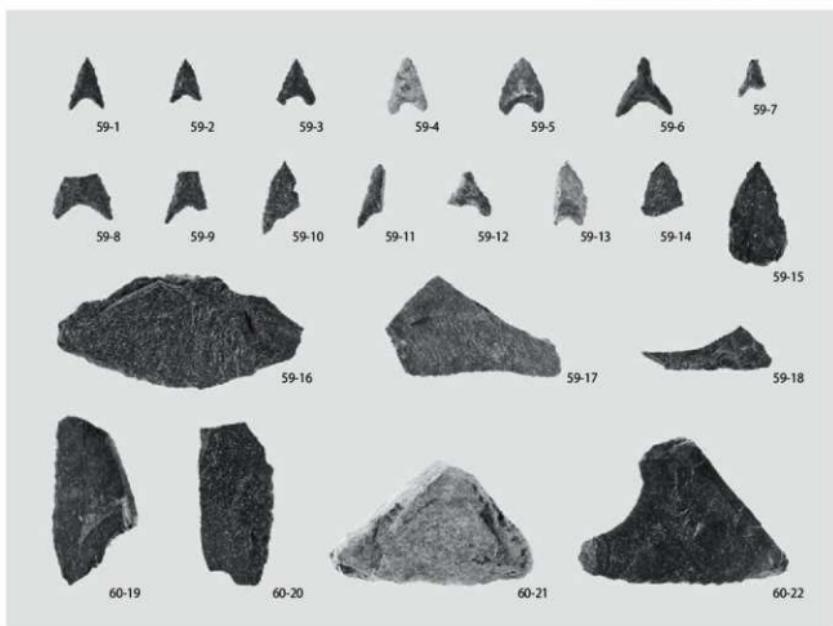


58-17

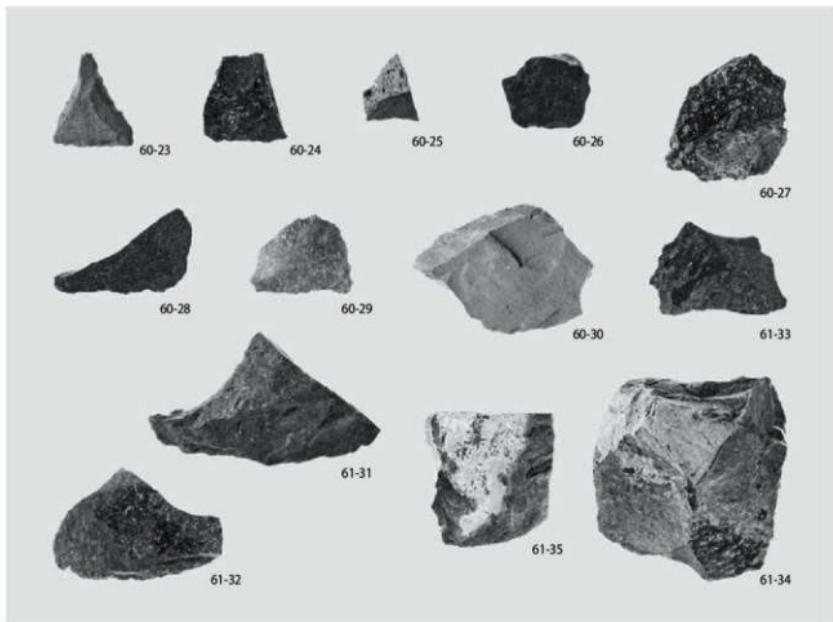


58-18

4-1区 11層 石器 (4)

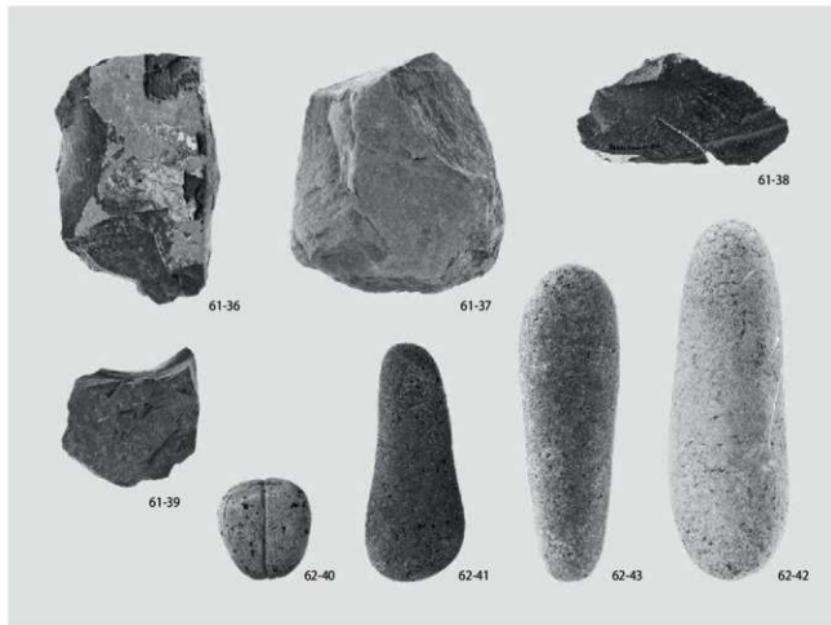


4-1区 12層 石器 (1)



4-1区 12層 石器 (2)

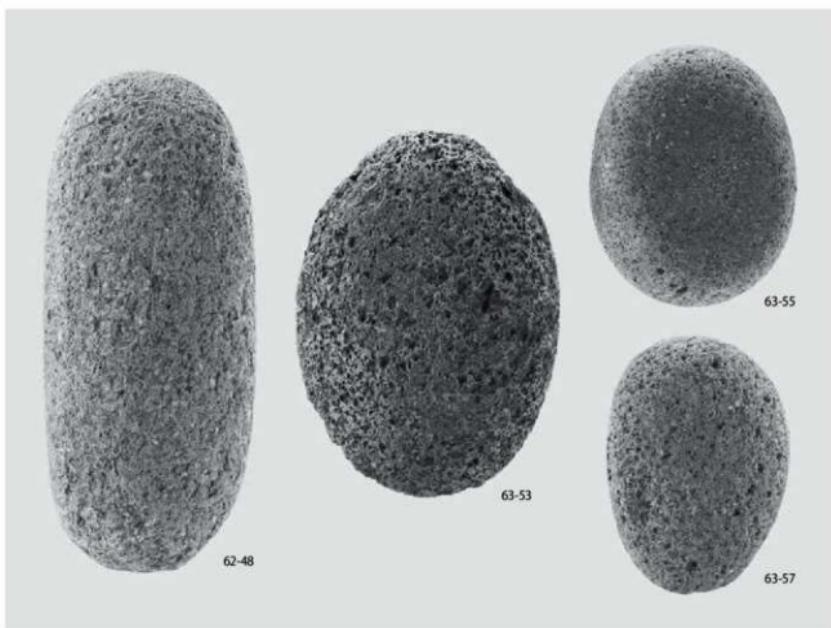
図版 44 遺構外出土石器 (6)



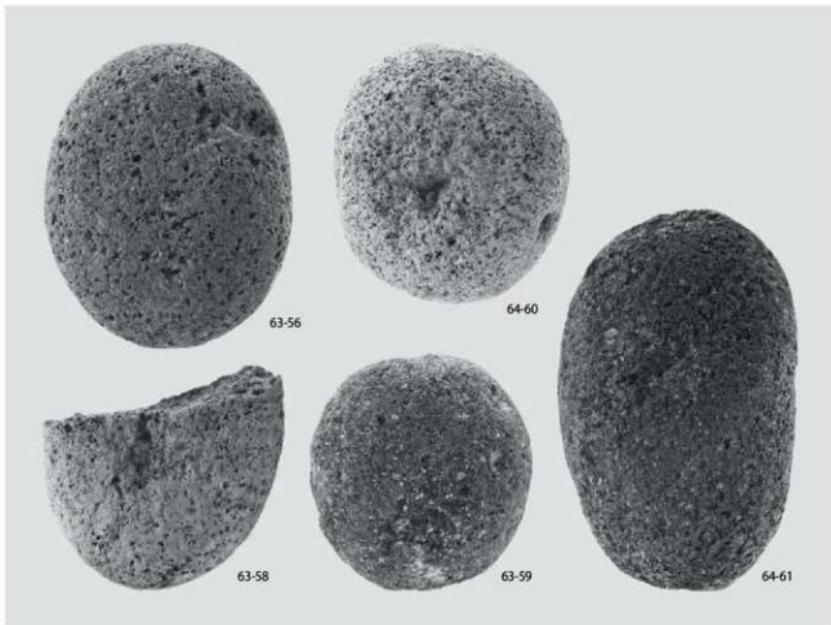
4-1区 12層 石器 (3)



4-1区 12層 石器 (4)

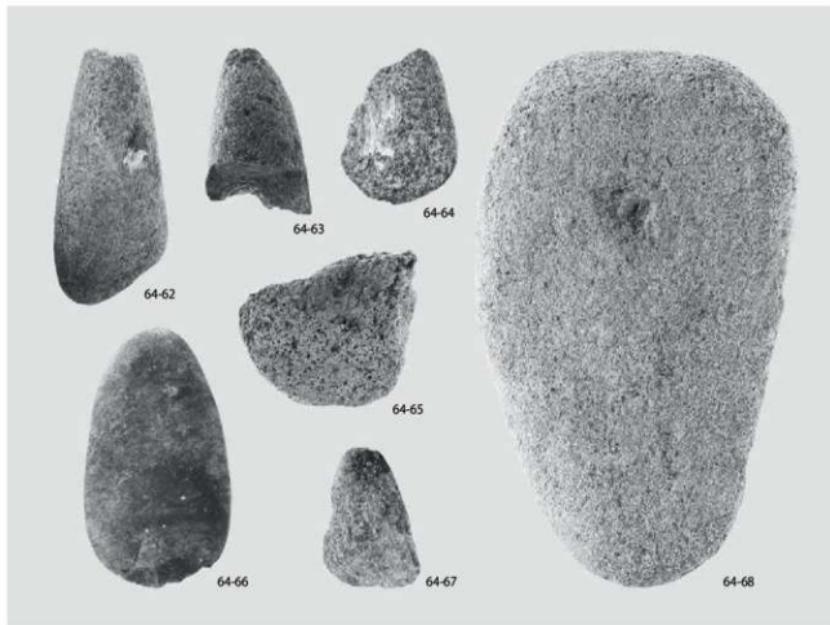


4-1区 12層 石器 (5)

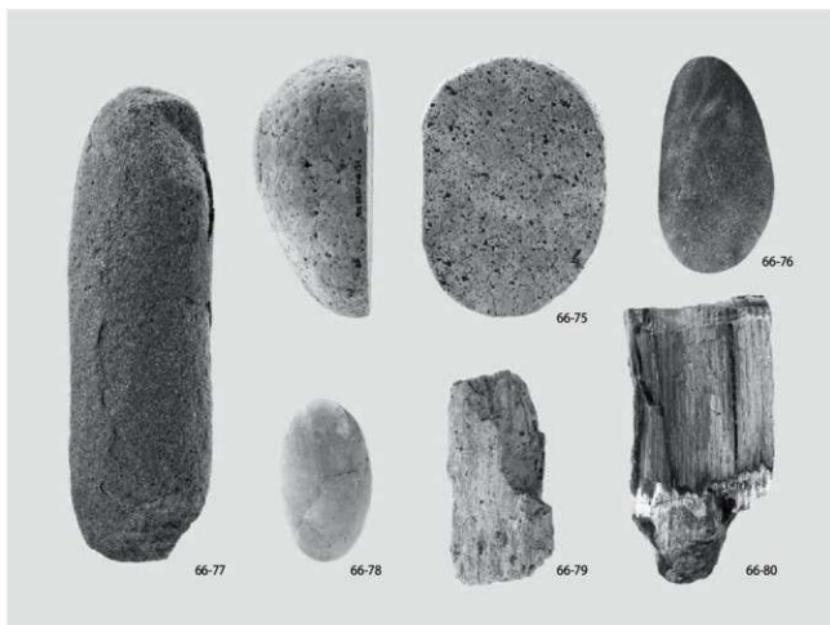


4-1区 12層 石器 (6)

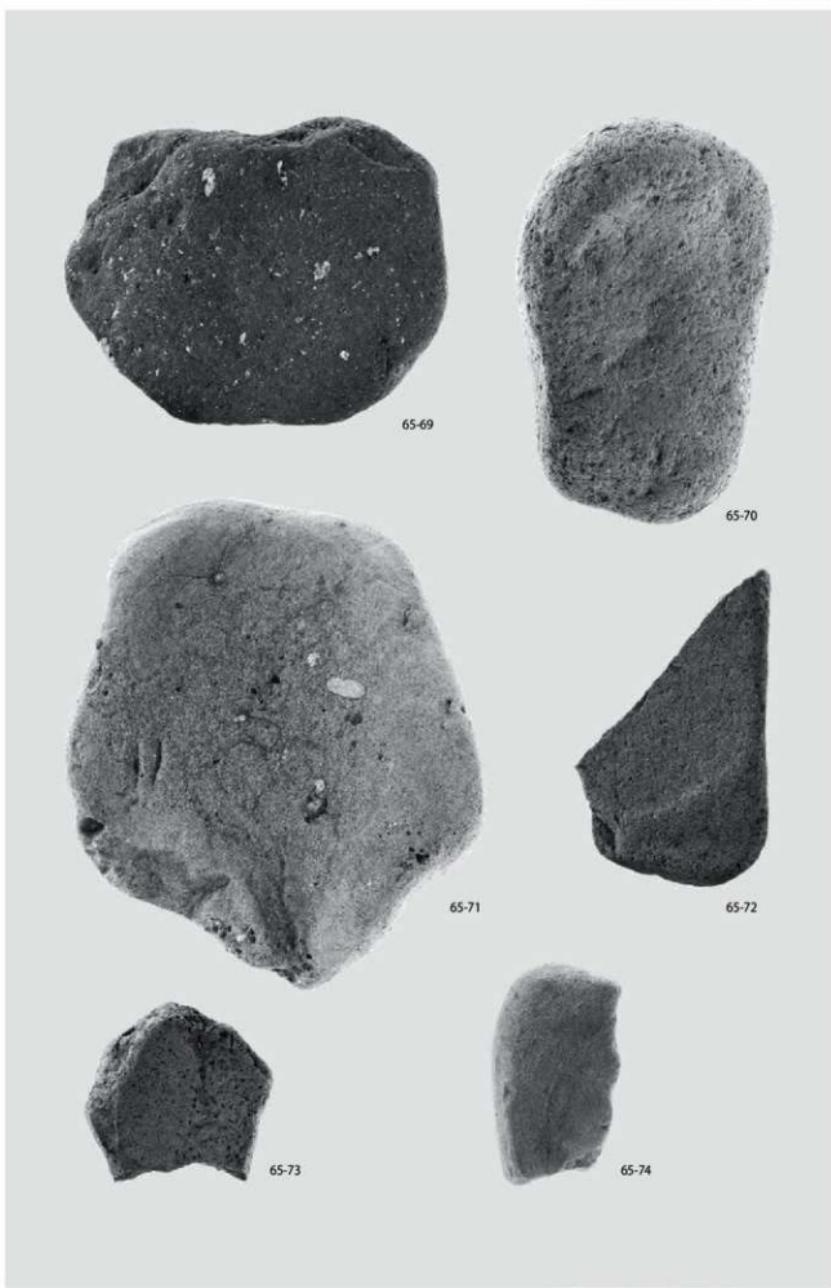
図版 46 遺構外出土石器 (8)



4-1区 12層 石器 (7)

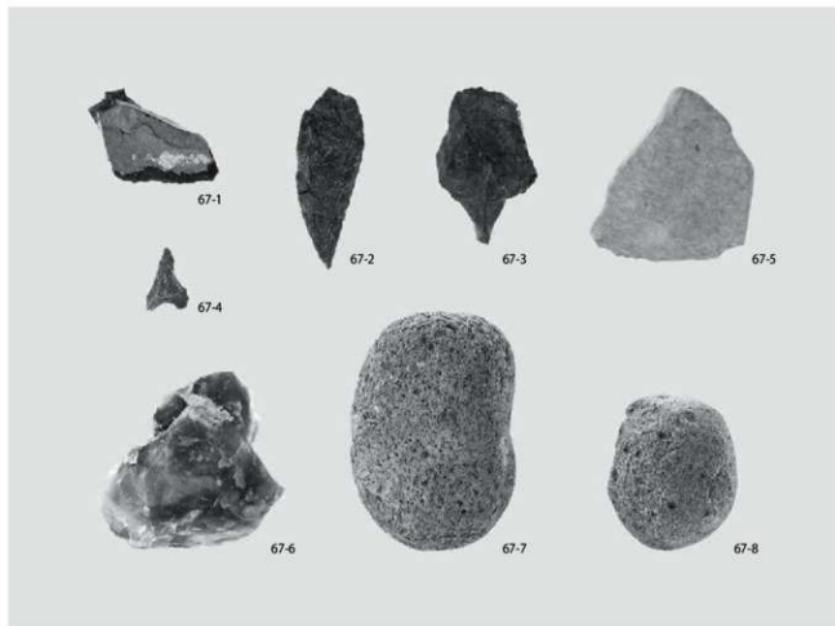


4-1区 12層 石器 (8)



4-1区12層 石器 (9)

図版 48 遺構外出土石器 (10)・縄文土器文様 (1)



4-1区 13・21・22層 石器



RL 縄文

LR 縄文



結節縄文 (S字状)

結節縄文 (Z字状)



多条縄文



附加縄文



巻貝回転による擬縄文



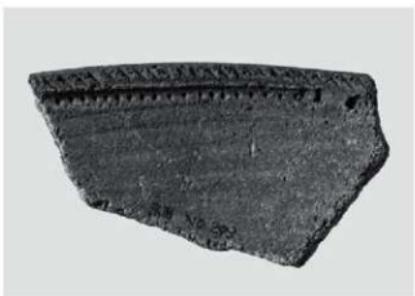
二枚貝背部押圧による擬縄文



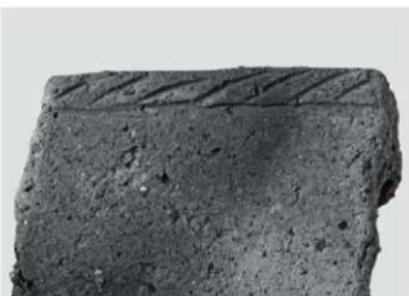
二枚貝腹縁刻みによる擬縄文



縦刻みによる擬縄文

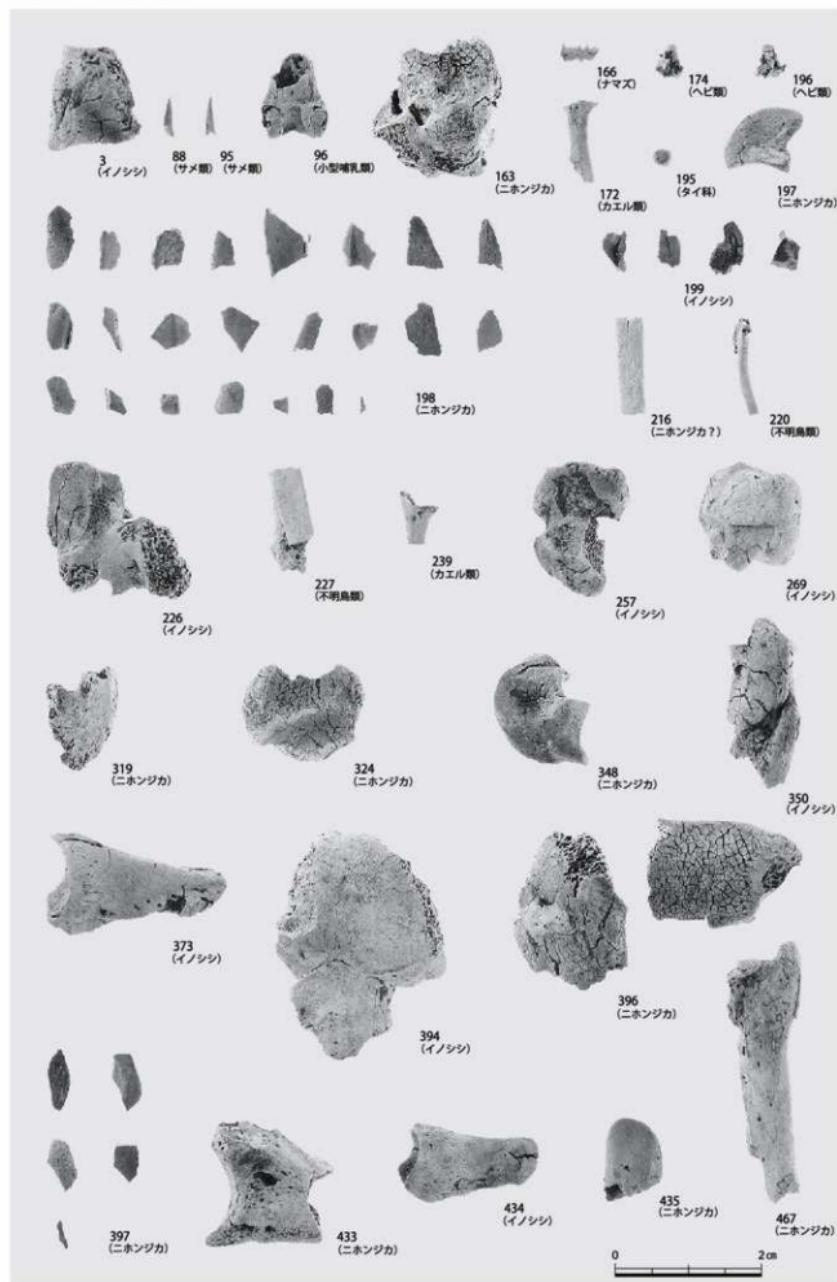


R刻みによる擬縄文と沈線内連続刺突



L刻みによる擬縄文

図版 50 動物遺存体



動物遺存体 (番号は本文 122 ~ 130 頁の第 10 表と対応)

報告書抄録

ふりがな	きょううんいせきよんく						
書名	京田遺跡4区						
副書名	一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	出雲市の文化財報告						
シリーズ番号	39						
編著者名	幡中光輔（編） 石丸恵利子 上山晶子 大塚達朗 高橋和也 濱田竜彦 南 武志 渡辺正巳						
編集機関	出雲市市民文化部文化財課						
所在地	〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760番地 TEL (0853) 21-6618						
発行年月日	2019(平成31)年3月						
ふりがな	所在地	コード 市町村	北緯 遭跡番号	東経	発掘期間	発掘面積	
きょううんいせき 京田遺跡	しまねけんしゆせき 島根県出雲市 こうとうちやうじきらくじ 湖陵町常楽寺 464-2ほか	32203 (京田遺跡地区)	b 51 35° 18' 14"	132° 41' 18"	2016.12.12 ～ 2017.03.24	255m ²	
						発掘要因 道路建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
京田遺跡	集落	縄文時代後期	竪穴建物跡 配石土坑 土坑・柱穴 集石遺構 自然流路	縄文土器 縄文石器 動物遺存体	北海道産水銀朱の付着した異形土器が出土。		
要約	<p>京田遺跡は、島根県出雲市湖陵町常楽寺に所在し、出雲平野西部の神西湖に注ぐ常楽寺川西岸の丘陵縁辺部に位置する。4-1区の発掘調査では、縄文時代後期中葉における複数の遺構や多量の土器・石器などの遺物を確認し、この時期に大きな集落が営まれていたことが明らかになった。</p> <p>遺構では、竪穴建物跡などの居住遺構のほかに、墓標と考えられる石を置いた土坑（配石土坑）や、注口土器を底面に埋納して深鉢の一部を上部に据えた土坑などを確認した。これらは葬送や祭祀に関連する遺構である可能性が高いと考えられ、居住遺構とあわせて縄文時代後期中葉の集落構造の様子がうかがえる。</p> <p>出土遺物には、この地域の後期中葉を特徴づける有文土器や、東日本の影響を受けた可能性が考えられる異形土器がある。異形土器は配石土坑の内部から出土した破片と周辺出土の破片が接合し、当時の埋納儀礼を知るうえで重要な資料となる。</p> <p>また、遺物のなかには水銀朱が付着するものがあり、そのうち配石土坑出土の異形土器などに付着した水銀朱を対象に硫黄同位体分析を実施した。分析の結果、北海道余市郡明治鉱山産である可能性が示され、当時の遠隔地との交流の様子が分かる貴重な情報を提供することになった。</p>						

出雲市の文化財報告 39

京田遺跡 4 区

一般国道 9 号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2019（平成 31）年 3 月

編 集 出雲市市民文化部文化財課
〒 693-0011 島根県出雲市大津町 2760 番地
TEL (0853) 21-6618

発 行 出雲市教育委員会
〒 693-8530 島根県出雲市今市町 70 番地
TEL (0853) 21-6874

印刷・製本 株式会社 報光社